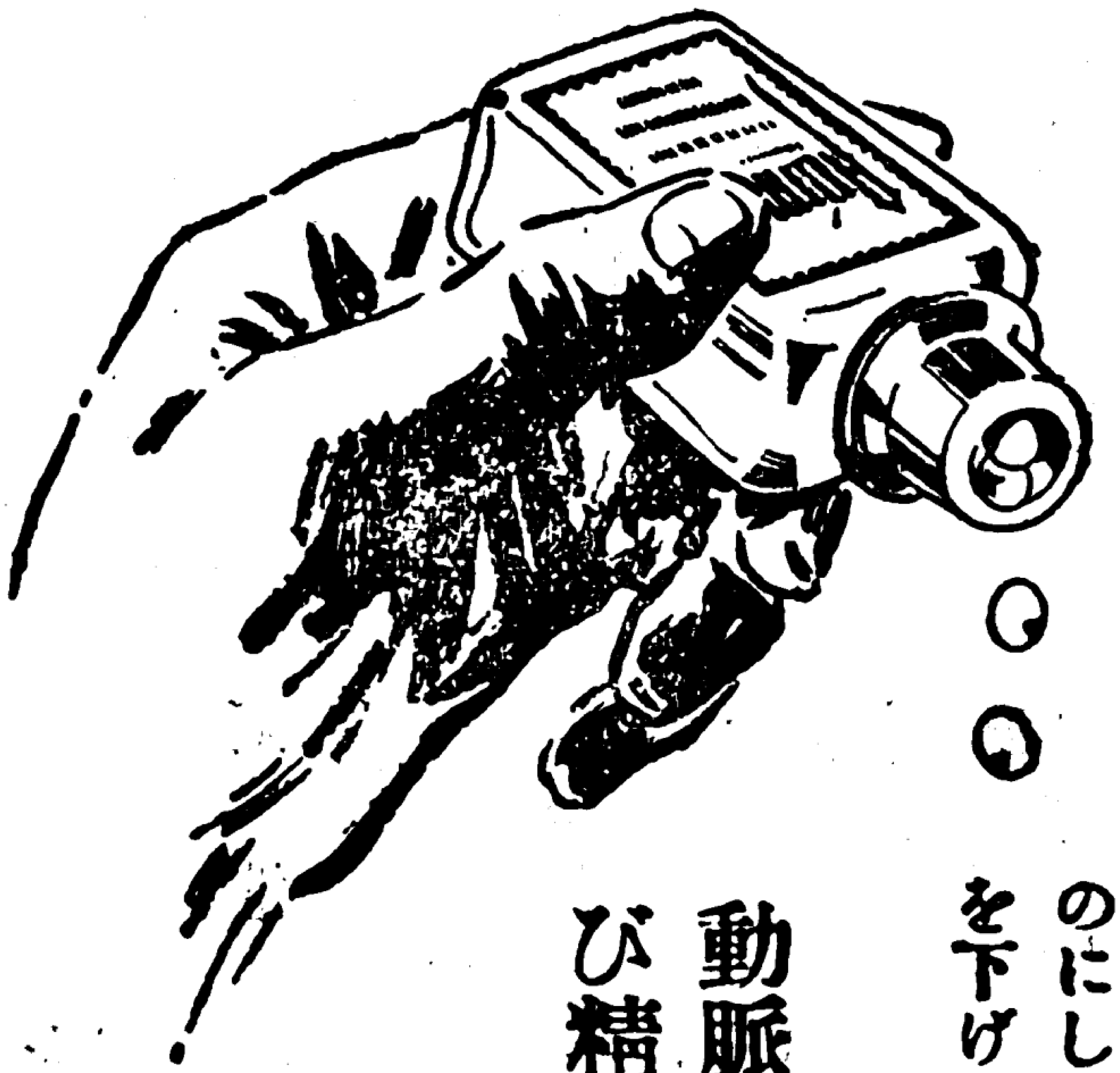
KAIZO

改造

二月號

1929

高血壓にアニマザ



血壓を低位に保ち
早老及血管硬化を防止す

本劑は幼若動物の血管內膜及び中膜に存するホルモンを抽出せるものにして、その應用により血管緊張を除きて若返り現象を與へ、血壓を下げ、頭重、倦怠、眩暈、肩張り、不眠、耳鳴等の自覺症狀を恢復す。

動脈硬化症、高血壓症、初老期に於ける體力及び精力減退、腦溢血の豫防等に頗る貴重なり。

三〇錠……二圓四十錢　一〇〇錠……六圓八十錢　各地藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店　東京日本橋區本町　株式會社　田邊元三郎商店

谷譲次新著

もだん・でかめろん

大都會に夜が下り、星屑とビルデングの灯が一つに溶けて來ると、蝙蝠みたいに屋根裏に寝てゐた獵奇者の群は、どこかに何かしら面白いこと變つた事件があるやうな氣がして街に流れ出る。斯くて彼等は近代都會の神經を探ぐり心臟に觸れる。「近代十日物語」は彼等の見た亞米利加といふ大都會の不思議な挿話のかず〳〵と、いろ〳〵な場面を次々に展開する。讀者は唯彼等と共に夜毎々々に街を彷徨し大都會の驚異を飽かずに觀る。恰も夢遊病者の如くに。

●デニ・デボア夫人の出靈●勇敢な蟲國●太鳥とB・V・D●キキ●隱語と詩人●魔法の被毯●黒い舞踏會●猿の手●妖婆と南瓜と黒猫の夜●國のない人々の國

價貳圓五拾錢
送料 廿四錢
四六判 上製
三百七十四頁

テキサス無宿 他三十一篇

ありけん・じやっぷは單なる在米日本人ではない。それは亞米利加の社會のみが生み出した日本人の一變種である。特殊の生活様式を持つ特殊の人々である。テキサス無宿他三十一篇の中に彼等は谷氏の軽妙・深刻の筆によつて、哄笑し、號泣し諧謔を弄し惡戲を行ひ失敗に憂れ歸農に悶る。異境における同胞の不思議な生活は限りなき興趣を與へる。同時に如何なる觀察者も未だ語らない亞米利加現代文明の實相が鋭く解剖され暴露されてゐる。

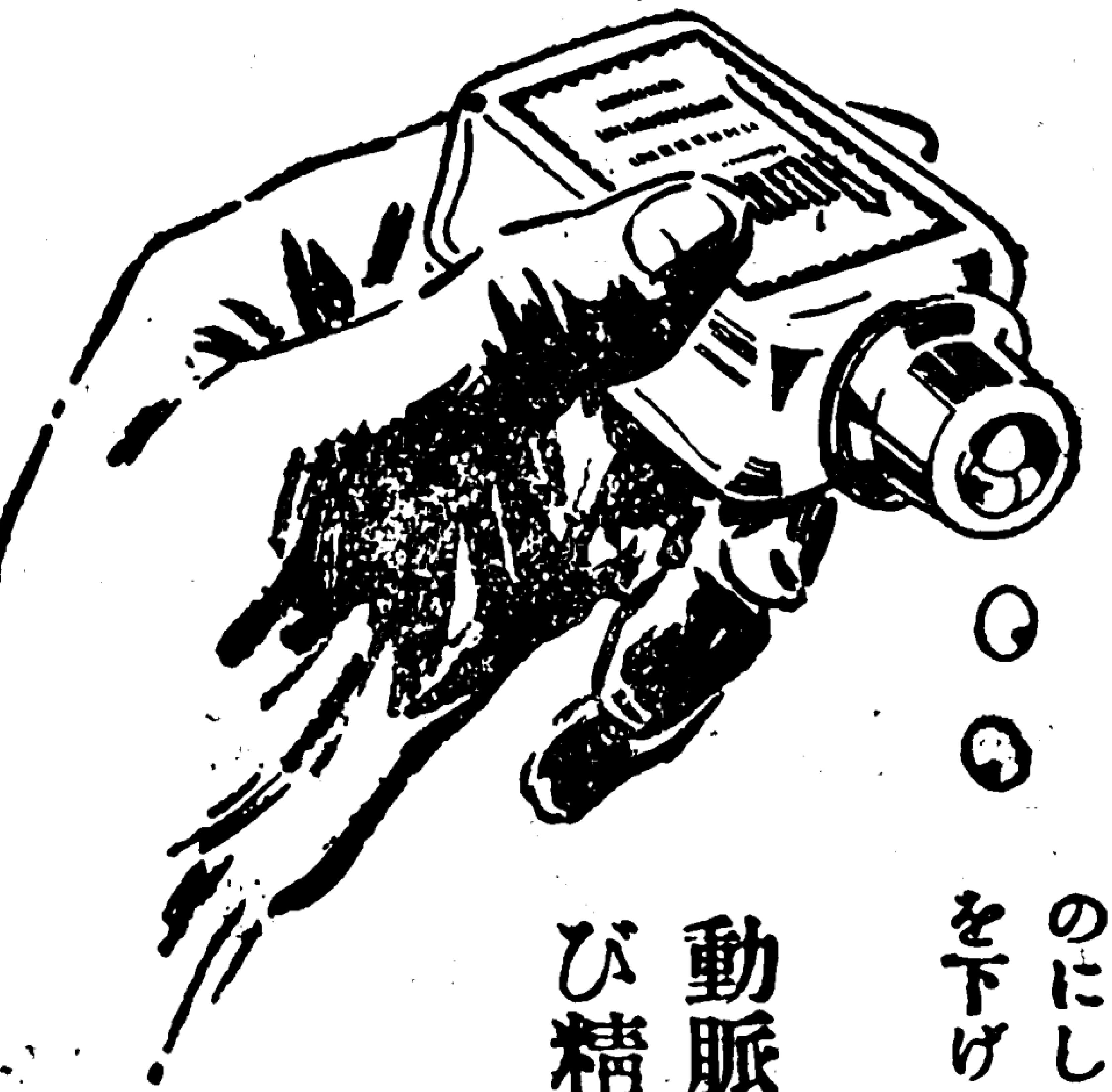
内容●[illegible]●AMMA●テキサス無

價貳圓五拾錢
送料 廿四錢
四六判 上製
五百〇四頁

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

恭賀新春





血壓を低位に保ち
早老及血管硬化を防止す

本劑は幼若動物の血管内膜及び中膜に存するホルモンを抽出せるものにして、その應用により血管緊張を除きて若返り現象を與へ、血壓を下げ、頭重、倦怠、眩暈、肩張り、不眠、耳鳴等の自覺症狀を恢復す。

動脈硬化症、高血壓症、初老期に於ける體力及び精力減退、腦溢血の豫防等に頗る貴重なり。

三〇錠…二圓四十錢　一〇〇錠…六圓八十錢　各藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店　東京日本橋區本町　株式會社　田邊元三郎商店



改造二月號目次



創作

更迭の一路あるのみ

對支問題解決を一ばんの看板として出現した田中內閣は、支那問題解決に對して何等の成案なく、なすことすべてがへマの骨頂を演じ、我國あつて以來の外交上の大味噌をつけ、今や全く挂冠の一途を以つて我國民に對するの止むなきに立至つた。その滿洲に起つた某重大事件は暫く措くとして、田中首相はいつも日本政府の任命せる公使、領事を信用せずして每度私設の代人をして別に交渉に當らしめ、爲に遣外の役人は對手國より信用されず、おまけにこのごろは第三黨のものまでが飛び出して功名を競ふの狀勢を現出した。加之、滿鐵、關東廳、外務の要樞は利權屋出身を以つて之に當らしめた。內に於てかく信用を缺ぐの徒輩が對手國より輕視さるるは當然の歸結である。田中君を圍繞せる大小の策士の總ては皆世界の大勢に通曉せざる反動的のものばかりであるから對支外交に於て我の孤立せるは當然すぎる當然である。我等は今や田中君一味の失敗に對し傍觀することができなくなつた。支那各地に於ける日貨排斥、滿洲特種利權の總沒收といふ大掛りの芝居を前にして晏如たり得るか。よし今後に於て田中內閣に時日をかすとしても日支懸案が解決さるる見込は毫頭立たないのみならず、形勢はます〱惡化し、田中內閣の存在が一日長ければ一日だけ我國が不利のドン底に深く陷るばかりだ。小川鐵相の「斷乎たる態度に出づる」がどう云ふ意味の決心であるか。弱少張學良にさへも一蹴さるる徒輩にどう云ふ期待がかけられる。我々は楊宇霆事件に對し張學良がいかに自分の執つた行動を辯じをるとも、その眞實は國民政府に屈伏する爲に彼等兩頭を血祭とし、眞正面に我國に對抗せんとするの意圖があることを斷言するものである。王正廷の滿鐵回收論と云ひその符節の全然一致するに見て我朝野を擧げて此問題を討査し、その應酬に機宜の措置をとるべきである。しかしその先要條件として我政府當局の更迭は緊急中の緊要である。



時事雜感

末弘嚴太郎

其一　警察權の濫用

昨年の共産黨事件此方吾々は屢々「拷問」の噂をきく、「不當檢束」の報道を耳にする。一般公衆の目に觸るゝこと少き「無産者新聞」其他無産階級の諸新聞は幾多の暴戻極まる警察官の不當處置を報道してゐる。或者は何等の理由を示さずして警察署に引致せられ何等の訊問を受くることなくして其儘留置場に監禁せらるゝこと數週日に及んだ。或者は、、、、、、、、、、、、あらゆる侮辱虐待を加へられた。或者は病氣になつた、而かも適當な醫療を加へられることもなしに不健康極まる留置場に放置された爲め、或は甚しく健康を害し、、、、、、、、、、、。其他類似の事實は實に數多く報道されてゐる。

始め私は此等の報道を多少の割引を以て受取りたいと考へた。何故なればそれは割引なしに聞くべく餘りに無茶であり亂暴極まる報道だからである。常識的に考へて殆どあり得べからざる事柄だからであ

る。しかし、信用すべき幾多の人々——其中には直接の被害者もあり辯護士もあり特別傍聽を許された人もあり又警察檢察に關係ある人さへもある——は後から〳〵不幸にも報道の眞實を裏書きしてくれる。今ではもう疑ふべき餘地さへもないのである。

行政執行法による檢束は屢々故なく人々を拘束する方法として利用される。しかしそれは被檢束者本人の救護若くは公安保護の必要の爲めにのみ許さるるに過ぎないのであつて、官憲の都合だけから濫用し得べきものではない。又其期間は翌日の日沒後を越え得ないのであつて法律上全く一時の臨機處分たるに過ぎないのである。無論刑事被告人として拘留狀を發ずるか又は即決處分によつて拘留を課するに於ては拘禁をそのまゝ繼續し得るけれども、それにはそれ〴〵法定の原因を必要とし、又一々法定の手續を履むことを必要とする。理由を示さずして人を拘禁し接見は勿論全然外部との交通を斷つて正式裁判請求の機會をすら與へずして拘禁數週日に及ぶが如き、法律上如何なる根據によつて之を行ひ得るのであるか。況んや警察に拷問の權利なきは勿論、不當に侮辱虐待を加ふべき權利なきこと何等言を竢たないのである。

然るに此等の暴虐、警察權の不當行使は、やゝともすれば相手が勞働運動者であるとか無產階級運動の關係者であると言ふ理由によつて無辜者に行はれる。しかしながら「日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ」、「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルルコトナシ」、人の何人たるを問はず苟も日本臣民である以上憲法の保障する人身の自由はすべて平等に享有して居る、すべては平等に保護されねばならない。それでこそ始めて立憲國の實を擧げ法治國の名に背かざることを得るのである。

私は今にして再び大正十二年大震災に際して行はれた大杉榮氏虐殺事件を思ひ起さざるを得ない。假りに大杉氏の言動が如何に國家の將來の爲め深憂すべきものがあつたとしても彼に對する制裁は飽くまでも法律に根據し法定の手續によつて行はれねばならない。然るに此法治主義の根本要求を無視した所に甘粕大尉の非難せらるべき理由がある。假りに彼の主觀的動機が如何に美しかつたとしてもそれは毫も其行爲を美化する理由とはならない。此故に、當時世相混亂の折柄にも拘らず、又大杉氏其人に對する世人平素の感情寧ろ氏にとつて不利なるもの多かりしにも拘らず、一般輿論の大杉氏に同情し甘粕大尉の不謹愼を非難するものゝ寧ろ多かりしは素より當然であるけれども、吾々法律家より見れば此輿論の現はれこそ吾國々民の法治思想の健全なることを如實に立證するものとして非常に喜ばしく思はれたのである。然るに今日警察の爲しつゝある所は行爲の形式に輕重の差こそあ

れ甚だ、、、、である。共産主義者は國賊である、だからひどい目に合はせてもいゝ。私にはどうしてもかうした氣持が警察官の頭を支配してゐるやうに思はれてならない。そうして之を法治主義の爲めに帝國憲法の爲めに心より深く憂ふるものである。

今日吾國は一の混沌時代にある。一方には法律による平和の樹立を理想とする人々あり、他方には實力闘爭の文化的價値を高調する人々がある、而して後者の中には極右者もあり極左者もある。前者は伊太利に倣つて暴力を讃仰し後者はロシアにあこがれて是れ亦暴力を禮讃する。私は理想として法律文化主義者の理想とする所に同意すると同時に、決して又實力闘爭の文化的價値を無視するものではない。現實はすべて實力の闘爭であり、矛盾であり、衝突である、唯其闘爭と衝突とを極力法律の規範内に置き矛盾を導いて調和に致さむとする努力それ自身に法律の文化的使命があると考へて居る。此故に、私は必ずしも暴力なるの故を以て暴力の價値を否定するものではないけれども、法律は飽くまでも暴力否定の立場に立つてゐることを忘れ得ない。而して今日は帝國憲法の下にともかく一先づ落付いて居る吾國法律文化の價値を今尚高く評價してゐるものである。

近時爲政者の中に動ともすれば不謹愼にも「力の政治」を說くものがある。伊太利讃仰の口吻を漏らし、自ら黒シャツ宰相を以て自任するが如き不心得者がある。しかし吾國の現狀は未だ決して帝國憲法によつて與へられた法律文化の價値を否定せねばならないやうな窮地に陷つてゐるものではない。殊に最近無産者は漸次に合法的傾向を示して居る。合法的闘爭手段を以て漸次に彼等の要求を貫かうとする傾向を示して居る。然るに、爲政者の中には反つて反對に、、、、を示すものが少くない。自ら反對者の、、の影を描いて之と戰ふの氣勢を示し、以て自己の、、、、を飾るべき口實を求めやうとしてゐる者が少くない。

立憲法治國の政治家は飽くまでも法律的平和の樹立に努力せねばならない。自ら行動するに付いて飽くまでも法律の條章と精神とを遵奉せねばならない。自ら此根本的なる心得を忘れて漫りに「力の政治」を說くが如き爲政者として最も愼むべき事と言はねばなるない。私は最近に於ける警察權の不當行使が或は上に立つ爲政者の不心得なる心持によつて直接間接に影響されてゐるのではないかと言ふ深い疑を持つが故に、此際特に爲政者の反省を促す次第である。

其二「溫情主義」の沒落

溫情がしきりに說かれてゐる。誠に結構である。しかし今日今後に通用すべき溫情は當事者相互の平等なる人格承認の上にのみ立脚せねばならない。相手を奴隷とし封建的隷屬者となしつゝ之に溫情を垂れむとする所謂「溫情主義」は時の經過と共に必然亡びゆくべき運命をもつてゐる。

吾國の現在は今尙封建的より資本主義的への轉換期にある。商工業は既に多く資本主義化した。しかし其所には今尙ボーナスの如き退職給與金の如き幾多の封建的遺物が殘されてゐる。被傭者は將來此等の恩惠に浴し得べき見込みを當てにして平素薄給の下に搾取せられつゝある。彼等が權利として有するものは平素月々の薄給に過ぎない。そうしてボーナスや退職給與金の上には何等に權利をもたないのである。會社の內規たる退職給與規則等によると如何にもそれが權利であるらしく規定されてゐる。しかし會社は何時でも勝手に內規を變へることが出來る。又何時でも勝手に兼々積立てた退職基金の類を他に流用することが出來る。而して被傭者は結局泣寐入りするの外どうすることも出來ない現狀に在る。殊に或る某會社の如きは社員採用に際し態々「今後諸內規が改正されても何等異存ない」といふ趣旨の誓約書を入れしめて豫め彼等の泣寐入を强要し得べき用意をさへして居る。

從來の小作關係も亦封建的遺物である。飽くまでも小作人を不等者として取扱ふことなく、出來得る限り小作人に權利を與へず、義務としては先づ極めて高率の小作料を約束せしめた上凶作不作の際には特に恩惠として免引をしてやる、しかし小作人は當然に凶作免引を主張し得べき權利なきものとされてゐるのである。小作權は名のみ權利にして殆ど權利の實なき權利である。小作人は地主の恩惠によつてのみ僅かに將來耕作を續け得べき見込が與へられてゐるに過ぎない。

所が社會經濟の變遷は到底此種封建的遺物の永續を許さない。資本家地主が如何に主觀的に溫情的であり又立派な人格者であらうとも經濟の自然は最早封建的溫情主義の永續を許さないのである。見よ例へば現在まで最も封建的な大企業者として一般に認められてゐた三菱も最近終に退職給與金制度の廢止を餘儀なくせしめられたではないか。退職給與金の廢止は勞資關係の資本主義的合理化を意味する。現在の

勞働を現在の値に於て現在賣買せむとする思想である。勞資關係を永續的人格的關係と見ることより轉じて一時的商品的賣買的關係と見やうとする考である。これこそは封建的温情主義の沒落であり資本主義的勞資關係への轉化である。

又小作關係を見よ。地主小作人の關係は日に日に人間的關係より商品的物資的關係に轉化しつゝある。地主の經濟は最早昔日の封建的恩惠を施すべき餘地を許し與へない、小作人も亦之を好まない、寧ろ恩惠を變じて權利となし獨立の人格者として自己の責任自己の危險を以て經濟せむとしてゐる。殊に最近全國に瀰漫しつゝ傾向として最も注目に値するものは地主會社の盛に設立されることである。地主は最早自ら小作人と應接するに堪えない。彼等は會社を設立して之に土地の所有權を讓渡し若くは會社に永小作權を與へ、小作關係はすべて之を會社と小作人との間に移して、自らは會社の影に隱れつゝ專ら唯配當を受けやうとしてゐる。かくして小作關係は地主小作人の人的關係たることより轉じて資本化せられたる土地と商品化せられたる小作勞働との物的關係にならうとしてゐる。

今尚封建的温情主義の甘酒に醉ふてゐる人々は此等の變遷を苦々しく思ふであらう。又實際上轉換期に於ける物質的乃至心理的變化は幾多の矛盾を生み衝突を惹起す。其現象は現在最もよく小作爭議の上に現はれて居る。矛盾衝突それ自身は確に好ましくない、爭議鬪爭それ自身は惜むべきである。けれども、それは轉換期に於ける現象として新時代を生み出すべき已むを得ざる產みの苦しみである。吾々は今日唯隱忍して時の推移を待たねばならない、そうして此轉換期をして健全なる發展を遂げしむべく善處せねばならない。

轉換期の助產婦たる現在の爲政家は最早封建的温情主義の甘夢より目醒めねばならない。將に變せむとするものを變ぜしめ、將に生まれむとするものを生まれしむる爲め、賢明に將來を見透かさねばならない。然るに現在局に在る爲政家は徒に變化を恐れて盲目的に反動を事としてゐる、必然に生まるべき兒を壓殺せむとしてゐる。危しと言はずして何であらうぞ。

現在の轉換期に處すべき現實的方策として爲政者の最も心を用ふべきは各種社會立法の完備であり社會政策の實現である。小作立法にせよ、又各種の勞働立法にせよ、徒に之を小作人勞働者にこぶるものとして見るべきではない、轉換期に於ける矛盾衝突を出來得る限り緩和除去することこそ此等立法の目的でなければならない。爲政者此理を悟つて努力を此方面に致すにあらずむば彼等の助產婦たる責任は到底之を果たすことが出來ないのである。

終に私は重ねて言ふ。温情は誠に結構である。むの問題を拔きにし

て社會の問題を考へることは出來ない。しかし現在の轉換期をして無事に發展を遂げしむるが爲めには、現在に於て實は最早存續し得ない運命に在る封建的溫情主義に向つて先づ死刑の宣告を與へねばならない。而して眞に人と人との平等關係を基調とした新しき時代を生まれしむべく努力せねばならない。現在勞働者小作人の言ふ所爲す所は餘りに物質的に見える。しかしそれは古き封建的溫情的勞資關係と戰はむが爲めの戰術に過ぎない。又若しくは資本主義それ自身が甚だ非人格的傾向を有することの反影に外ならない。今日爲政者其他朝野の反動的思想の持主が自らの封建的溫情の美しさをのみ高調して、新時代への戰の爲めに血みどろの鬪爭を續けてゐる彼等の相手方の物質的であり非人格的なることを嘲るが如きは事態の眞相を理解せざる最も甚しきものなりと言はねばならない。彼等はよろしく虛心以て現在彼等無產階級運動者の仲間に如何に美しい人情が流れ如何に立派な道德の行はれてゐるかを觀察すべきである。そうして自ら聖賢の敎を口にしつゝ國士を以て自任する人々が實は日夕殆ど物資の爲めに驅使されて極めて貧弱な精神生活を營んでゐるかを反省すべきである。

溫情は要するに滑油である。之なしに機械の圓滑な運轉を期待し得ないのは勿論であるけれども、滑油それ自身は決して機械を動かす働きを有するものではない。古い機械にはそれに適した古い滑油を要するやうに新しい機械には又それに適合した新しい滑油を必要とする。吾々は滑油なき機械を想像し得ないやうに溫情なき社會を想像[illegible]い。所が古い機械に慣れた人々は其古い機械の圓滑な運轉を保障した古い滑油の美しさを忘れ得ない。そうして昔の大八車に差した鯨油を新しい自働車に差さうとしてゐる。そうして新しい自働車を作らむとしてゐる人々を目して恰も全く滑油なき機械を作らむとしてゐるもゝ如くに想像してゐる。其所に彼等の無智があり偏見があるのだ。古き滑油の効能に慣れた人々よ新しき機械は又新しき滑油によつて心地良く運轉するものなることを忘れてはいけない

（完）

日本指導者論

無名氏

運動があれば必らずそこに指導者がある。指導者のない運動など云ふものは、頭のない胴體と同じで、生きた運動でも何でもない。だが指導者が指導者らしい役目を果してゐるか、言ひ換へると、頭が頭らしい機能を營んでゐるかどうか、とことこに到ると、問題は全く別である。一廉の指導者顏をして、大きな鞄をかゝへ込んで横行濶歩してゐながら、實は大衆への單なる追隨者である場合もずゐぶん見受けるし大衆ならまだしもだが、怪しげな反對勢力への走狗であつたりする場合も稀なこととは言へない。

それはそれとして、何と言つても運動には、指導者が大切である。極端に言ふと、指導者の指導の仕方一つで、或る場合には、運動全體が津浪のやうに、極右へ轉化してしまつたり、極左へ雪崩を打つてしまつたりする。近い例で云ふと、福本和夫君といふ一人の指導者が行李に一杯名著の切拔きをつめこんで歸朝して、呪文のやうなことを唱へ出すと、日本の左翼の運動は、たわいもなく謂ゆる左翼小兒病、極左の泥沼へめがけて、掛け聲勇しく落ち込んで行くと言つた有様である。勿論、こんな結果になるのは、何も指導者の指揮棒の振り方一つに在るのでなく、そこには社會上の客觀的理由と、運動上の主觀的理由とが、大いに作用してゐる。そんなことは言ふまでもないことだ。泥沼にがそれであればこそ、聰明、愼重な指導者が必要なのである。泥沼に落ち込まうとする大衆の眞先になつて、沼泥を目掛けて旗を振いで行くのも指導者なら、その大衆を泥沼へ落ち込ませまいとして、反對の方へ旗を高く掲げるのも指導者だ。

運動における指導者の大切な所以を、最も明白に說いたのは、何と言つてもレーニンだ。レーニンはいつも、大衆と指導者とを明別して取扱つてゐる。大衆の場合であれば、些かの誤謬や偏向は、これを寛大に取扱つたが、指導者の場合になるとさうでない。一見極く些細に見える理論的誤謬、僅かな實踐的偏見でも、少しの假借するところなくやつつけた。そこにセンチメンタルな妥協もなければ、そこに友愛的な寛大もない。それと言ふのは相手が運動上に指導者の役割を演じてゐるからであつて、その一見些細に見える理論的誤謬が、大衆の間

に滲透して如何に大きな誤謬を生産するか、その僅かな實踐的偏向が、大衆の側における如何に大きな實踐的迷行となるか、それをレーニンはよく知つてゐたからだ。

當り前のことを少し書き過ぎたが、實は僕はこゝで、日本の運動の指導者の短評を試みやうとしてゐるのだ。尤も指導者と他から目され自分で許してゐる人々は、數百をもつて數へられるだらう。その一人々々について短評を書くことは、到底不可能だ。したがつてこゝでは僕の意に反して、限られた、それも主としてポピュラーな指導者の範圍にとどまる。またその狹い範圍の指導者を短評するに當つて、その思想傾向まで批判してゐることは出來ない。と言ふのは問題がそこになると、短評の範圍を遙かに超えてしまつて、指導者を中心としての運動の批判になつてしまふからだ。そこでこゝでは勿論、その人の思想傾向に若干觸れることは止むを得ないが、主としてその人々の指導振り、指導者としての特色等、等について、簡單に私觀を述べて見ることにする。

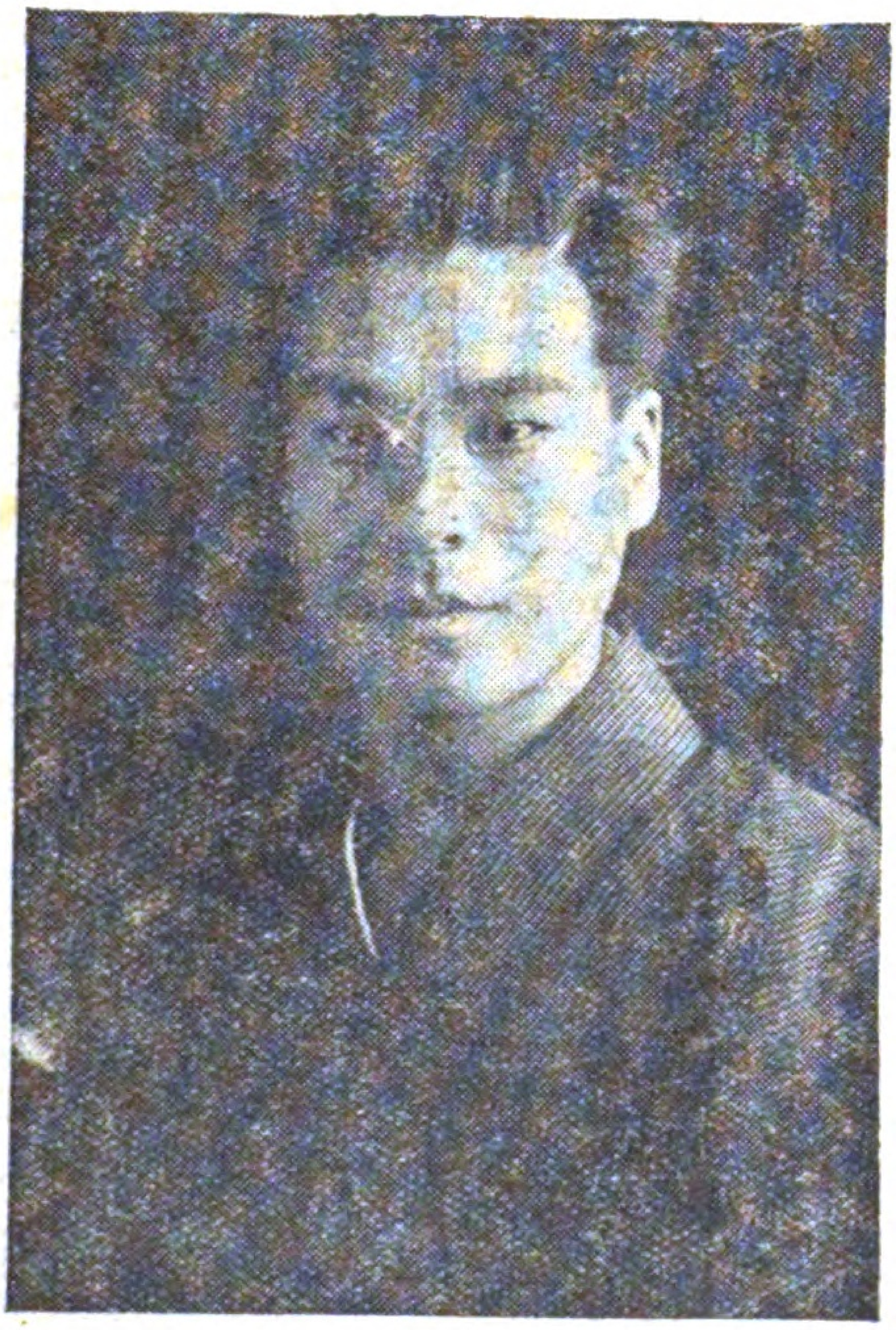
社會民衆黨の指導者には、誰でも知つてゐるやうに安部磯雄、鈴木文治、松岡駒吉、赤松克麿等の諸君がある。安部さんは、曾て私の、先生だつた人だ。ワセダの講壇で、フランス革命史の輪講をやつてもらつたのは、もう十數年前だ。その頃の安部さんも今日の安部さんも、ほとんど變らない。そこが安部さんの値打であらう。つまり安部さんは、ワセダの講壇で田舎縞の綿入を被込んだ學生に對すると同じに、社會民衆黨の大衆に對してゐるのであらう。それはいいとして、政治運動の指導者としての安部さんは、決してその人を得てゐないと思はれる。安部さんの人柄、安部さんの潔癖と、混濁錯綜した政治運動とはどうしても相容れない。従つて安部さんは、イヤなことは他の働き手？に委せる結果となる。而してその他の働き手なるものは、易々として或は欣々として安部さんを利用することとなる。



鈴木文治氏

これでは政治的指導者とは言はれないと思ふ。鈴木文治の指導振りは、事改めて言ふまでもなからう。ゴンバースから尾鰭をとり、トーマから鱗を落したのが鈴木氏である。議會主義指導者、妥協勞働政治家としては典型的な人であらう。彼の指導力の中心は、頭腦にあるのでもなければ、人柄にあるのでもなく、その辯舌と體軀にあるのだ。この點でも或る種類の政治家としては、典型的であらう。——妙な話だが、若し日本の議會で、曩にイギリスの議會に見たやうに、『劃期的』な社會主義討論

が行はれることがあるとして、差詰めマクドナルドの役は鈴木がつとめることになるだらうが、その時彼にマクドナルドほどの理論と信念があるかどうか、これは一寸怪しい。松岡駒吉は、總同盟の事實上の指導者と言つてよからう。彼は極右翼指導としてのほゞ完全な資格を具へてゐる。謂ゆるニラミも利くし、掛引もあれば、時として大膽に支配階級と取引もすると言はれてゐる。愛國社會主義者、極右日和見主義者は、これでなければダメだ。だが、政治的指導者としての彼はどうも半端と言ふ感じがする。彼が右に鈴木を立て、左に赤松を抱え込んでゐるのは、勢力關係ばかりでもない。赤松克麿は社會民衆黨の唯一のと言つていいだらう理論的指導者である。彼は相當に勇敢であり、鬪爭的であつて、この頃ではまだいかにも日和見主義指導者らしい空氣を體外に發散してゐる。だが、彼の指導的理論なるものは、ヨーロッパの日和見主義指導者のそれに觀られるやうな、ともかく根據のあるものではないやうに思はれる。松岡が、運動は現實に立脚しなくちや駄目だよ、と一言怒鳴れば、たちまちそれが赤松式現實主義理論と化し、また松岡が、右翼は右翼、左翼は左翼さ、と空嘯くと、こゝに急ち、赤松式左右兩翼結成論が成ると言つた調子である。それでは指導者なのか、追隨者なのか、薩張り分らなくなる。赤松は、新人會を出ると先づ當時の極左翼に投じ、そこから一直線に、極右翼へマラソンをやつた人で、一寸めづらしい型の人だ。そのマラソンは、極右で行止りでなく、餘勢に乘じて更にブルジョアジーの陣營にまで及ぶかも知れない。社會民衆黨には、この外に西尾末廣といふ關西の指導者がある。彼の指導者としてのタイプは、松岡に一寸似てゐるが松岡ほど大膽でない代りに、松岡より緻密である。政治的舞臺に立つたら、彼は或は存外仕事が出來るかも知れない。が、困つたことには彼の脚下から、續々として左翼先進分子が生ひ立つて來て、その體が宙に浮きさうである。極右指導者としての彼は、トリックと物質力でこれを防止するより外はないが、その藝當を甘く演じ得る指導者かどうか、それは疑問だ。最近、例の右翼結成を劃策して、無産大衆黨の若殿原に一蹴されたところなどを見ると、どうも大きな戰術の持主ではないやうだ。たゞ、比較的頭腦が細かく働くと



河野密氏

ころから、大會などで、政府委員格で答辯する家にかけては彼の右に出る者はない。この點で彼と太刀打出來たのは、極左の倭小濱杉浦啓一であつたが、彼はいま、ゝに在る。

日本大衆黨は、日本に最初に出來た眞實の大衆的協同戰線黨だけあつて、大中小の指導者に數が可成り多い。委員長就任を傳へられた高野岩三郎博士は、政治的指導者としてはまだ全然未知數だ。聞くところに依ると、非常に平民的——妙な言葉だが——な人で、ドイツ留學中に勞農大衆政黨の政治的術策について大いに研究するところがあつたといふ。それだけでも政治的指導としては相當に有利な要素である。また博士は大原研究所に在つて、多年日本の社會運動の實際を研究してゐたことは事實だ。これも政治的指導者として有利な點で、運動の實際を少しも知らないでイキナリ學生連に擁ぎ上げられて、一種の××的ロマンチシズムから大變な間違ひをやつた福本和夫などの轍を踏むやうな惧れのないことだけは確かだと言つてよからう。だが、我々はいまだ曾つて、博士から日本の無產階級運動、無產政治運動についての指導理論を聞いたことがない。理論のない指導者はデマゴーグである。大衆黨の委員長に就任したら、我々は博士から卒直明確な理論が聞けると期待してゐる。麻生久は政治的指導者として相當な資格を具へてゐる。何よりもあの辯舌と、大膽さである。それに人柄も、いかにも謂ゆる太つ腹らしい。これは大衆政治運動の指導には有利な要素だ。だが、麻生久には政治的指導者に不可缺の理論的把持がない。これは何としても大きな缺陷だ。性得の感傷的正義主義だけでは大衆を政治的に指導は出來ない。殊に合同運動に事實上反對しておいていざ合同が出來るとなると、ノホホンで合同大會の議長をつとめて大ラッパを吹き立てたのは彼であるが、それが麻生のいい所だと人は言ふ。だが、それがまた益々尖銳化して行く無產政治運動の指導者としての彼の、致命的缺陷だとも言へるのだ。日本農民黨を率いて突如として合同の舞臺にかけ上つて來て、日本大衆黨の書記長となつたのは、平野力三だ。彼は全然、掛引と術策で持つてゐる指導者だ。即ち彼の指導者的生命は、そういふ技術的範圍を出でない。勿論、それがたとへ無產政治運動であつても、無人島で、善人同志が集つてやるのでないから、掛引や術策の必要なことは言ふまでもない。だが、掛引や術策だけで、大衆の自然生長性に媚び、それを媒介として大衆を引廻さうとするのは即ちデマゴーグのすることだ。平野にはこの要素が強い。ブルジョアジーの行き方ですれば、彼は立派な政治的指導者であらうが、プロレタリアートの政治運動では、彼は寧ろ、警戒さる可き指導者であらう。平野の書記長の下に、次長の河野密がある。大衆黨の中指導者格であらうが、彼もまたどちらかと言へば、術策本位の指導者である。いかにも理論家らしい外飾は持つてゐるが、決して理論的指導者ではない。彼の一本槍たる合法的前衛論などは、事實、前衛の間の物笑ひになつてゐると言つてよいだらう。しかし彼は可なり

聰明でもあるから、次第に自己を淸算して、相當立派な政治的指導者となるかも知れない。日本大衆黨の舊日勞黨系には、河野式の指導者が可成り多い。から極端に言ふと、ほとんど全部がその型だと言つてよい。これは錯雜な舊日勞黨の内部事情が生み出した一つの指導者型だと見得るだらう。



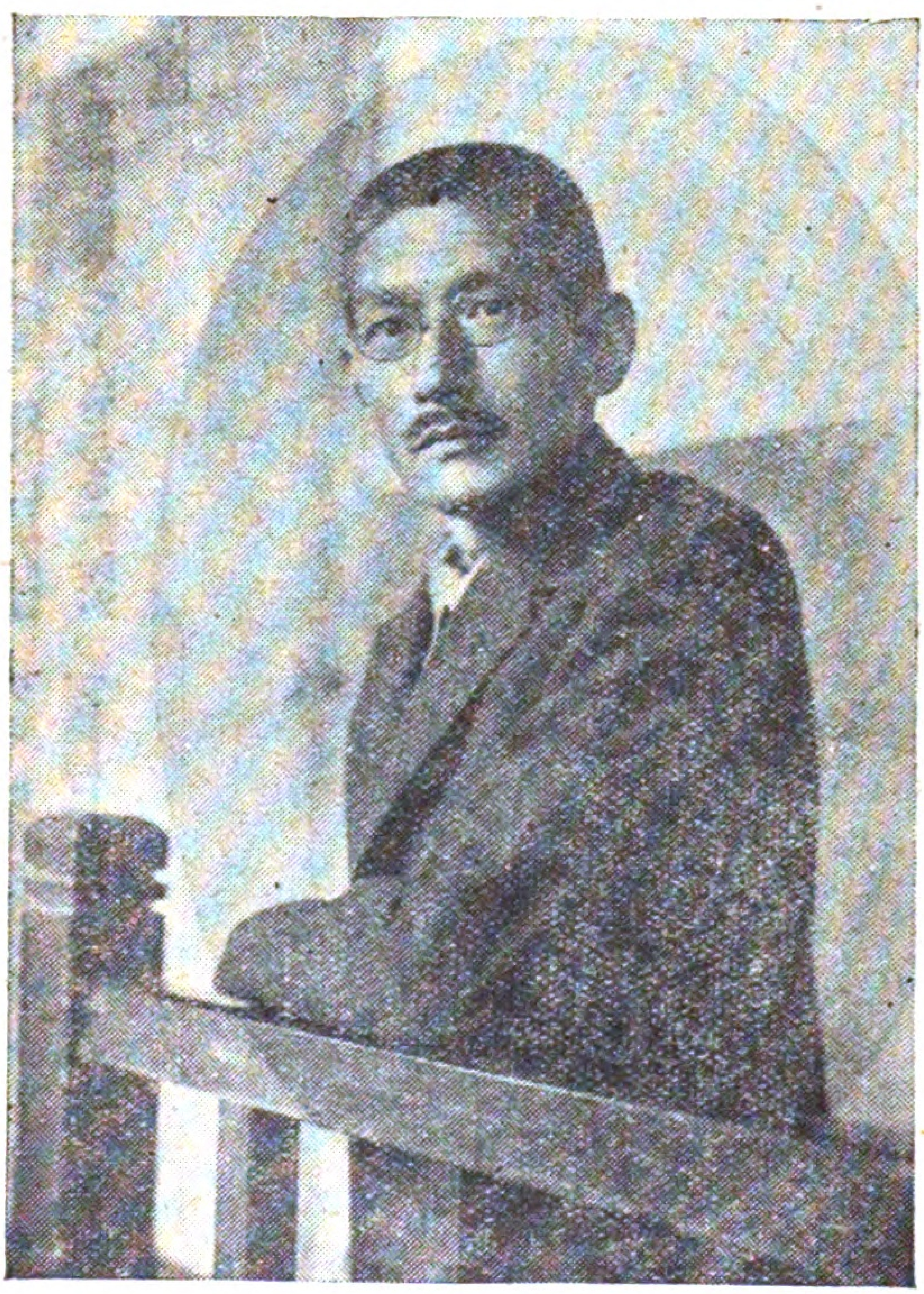
杉山元治郎氏

舊無產大衆黨の書記長でいまは日本大衆黨の常任の一人となつてゐる鈴木茂三郎は、政治的指導者としては、人間的な、餘りに人間的な人だ。彼は反對派に言はせると、非常な策士だそうだが、案外策がない。餘りに策がなさすぎる。また策を弄して相手を引廻すにしては、餘りに人がよすぎる。彼の政治的指導者としての生命は、意外にも、その正直さと信念の中にある。だから彼は、信用の出來る指導者ではあるが、かなりはかない指導者でもある。それに比すると舊九州民憲黨の淺原健三は、いかにも手頼りになりそうな政治的指導者である。雄辯であり、敢爲であり、掛引がない譯でなく、巧妙な妥協もする。だが、鈴木に比べると、どうも信用のおけない指導者だ。彼は、グン〳〵と大衆を引つけて行くだらうが、安心して大衆をあづけておけない指導者だ。それはそれとして、彼は政治的指導者として、今日の舞臺で相當に働ける人だと言つてよい。彼にもまた、一貫した理論的把持の影が薄い。これが彼の最大の缺陷だ。

大衆黨の指導者といふ譯ではないが、現在大衆黨の顧問となつてゐる杉山元治郎は、農民運動では、他の信頼厚い指導者だ。第一、彼の眞面目と、階級運動にたいする誠實とが、指導者として彼を立派に價値づけてゐる。特に農民運動においてはそうだ。第一回の農民勞働黨はその聲望の故に彼を頭首に推したが、政治的指導者としての彼は、寧ろその所を得てゐないと考へられる。安部さんが政治的指導者でないと同じ意味で、彼も決してそうではない。とは言へ、やゝもすると掛引と術策の巣にならうとする今日の無產政治運動に、彼のやうな人が一方に端然と控えてゐることは、確かに惡いことではない。日本大衆黨には、これらの外に加藤、三輪、淺沼、田所などといふ、河野級の指導者がゐる。それ〳〵特色を持つてゐるが、いづれも政治的指導者として大股に歩くにしては、餘りに小さくまとまり過ぎてゐるやうだ。しかもそのまとまり方が、いかにもいぢけてゐる。妙に右翼に遠慮したり、譯もなく極左に恐怖を抱いたりして、八方美人的にやらうとす

る一種の習慣が、日に日に淺くなつて行くやうだ。これでは政治的指導者として大股に歩くことは出來ない。將來大指導者たる可きこれらの中指導者に、もう少しのんびりした、腹の坐つた人間があつてもよさそうなものだ。

大衆政黨としての日本大衆黨を支持してゐる思想團體に、謂ゆる『勞農一派』がある。即ち雜誌『勞農』及び『勞農新聞』を機關として一方に右翼及び中間派と戰ひ、他方に極左と勇敢に戰つてゐる團體である。この團體の指導者山川均は、いまさら言ふまでもなく、我國で最も大きな足跡を殘してゐる理論的指導者だ。例の福本イズムの旺盛の頃、折衷主義なる譯のわからぬ名稱を與へられ、一時運動の外へ押出されたかの觀があつたが、その時彼は少しも騷がず、漸次にその理論を展開して、事實上、運動の指導權を持ちつゞけた。無產政黨の合同の提議にしても、單一無產政黨の唱導にしても、みな彼に端して今日勞農大衆黨の要求となつてゐる。理論的指導者としての彼は荒畑寒村の言葉をかりれば、ソヴィエット・ロシアへ持つて行つても、大して引けをとるまいと思はれるほど、高く尊敬に値する。だが、實際政治上の指導者としてはどうか、第一身體が惡い、餘りに感情的であり餘りに正直に過ぎる。假に身體が惡くなくとも、彼は大衆政治運動の指導者として、嵐の眞只中に立つ人ではない。彼の指導者としての强味は飽まで徹底した左翼理論の把持とそれを武器としての實際運動の批判に在る。彼も亦、それで滿足してゐる。夢のやうな話だが、いま目前に日本に×××××××××形勢があつたとしても、恐らく彼は鎌倉の地を離れないであらうし、日本のプラウダの主筆も引受けはしないだらう。この團體の猪俣津南雄は、日本のソシアリストには一寸毛色の變つた人間だ。その理論的把持は、飽まで固い。その實踐的勇氣はたしかに日本人離れがしてゐる。することが綿密で、剛直ではあるが



山川均氏

柔軟性にも富んでゐる。今日まで彼は、まだ大衆運動を率いて立つたことはないが、政治的指導者としては、確かに大を成す要素が多分に具つてゐる。だが、たゞ一つ彼は、餘りに綿密に過ぎ、餘りに用心深くあり過ぎて、そのために自分を一つの固い殼でつゝんでゐる氣味がある。この殼を破らないと、その心臟を大衆の心臟でしつかりと觸れさせて行くことが出來ない。これはたしかに大衆的政治運動の指導者としては、或る意味で致命的だ。彼は今日のやうな理論的指導者で滿足する人間ではないし、滿足してゐていいものでもない。必らず大衆的政治運動の指導者として乘出すだらうが、それまでには聰明な彼のことであるから、その性格的夾雜物を見事に淸算することであらう。



猪俣津南雄氏

舊新黨準備會の『われらの大山』即ち大山郁夫は何と云つても眞摯で鬪爭的だ、その點では、大いに敬服するものがあるし、政治的指導者としての動かす可からざる強味を持つてゐる。だが、舊勞農黨及舊新黨準備會の實踐を通じて試驗された彼の指導者的價値は鬪爭的といふ點だけがプラスで、あとは遺憾乍ら全部マエナスだ。曩に福本和夫は、運動の實際を知らないで、運動を批判し、指導しやうとして、理論的に破産してしまつた。それに次いで大山は運動の實際を知らないで運動の中に入つて來て、それを指導して、理論的にも實踐的にも、破産してしまつた。だが、福本の誤謬——破産も、大山のそれも、一群の極左的學生、アバンチュール的極左指導者に誤られたためであつて、そのことは大山の場合にして見れば、如何に彼がよき人間であるかを證してゐる。

大山氏は學者であり、理論家であると一般から見られてゐる。成程學者ではあるだらうが、尠くとも理論家ではない。例へば合同問題にたいする彼の理論を調べて見ても常に猫の眼のやうに變つて、一貫性がない。おまけに極く近來は、その理論にデマゴギーの要素が多分に混入してゐる。また一般は、この二三年來の彼の鬪爭を見て、彼を實踐的指導者と賞讃してゐる。だ

が彼の闘爭は一貫した、動かない理論に裏附けられた闘爭ではなかつた。理論に裏づけられない闘爭は眞直に萎縮と沒落へ赴く闘爭である。この事實を彼はまざ〳〵と觀せられてゐる。彼はやはり政治的指導者でなく、月並だが、學窓の人だつたのであらう。尤も、彼を取卷いたものが、一群の極左學生だつたから惡いので、若し正統左翼によつて擁されたら、彼の闘爭は生々と生長、擴大して行き、政治的指導者として彼は、大を加へて行つたかも知れない。それはありさうなことだが、結局ありさうなことでしかないのだ。大山の下で書記長をしてゐた細迫兼光は、いかなる意味でも、政治的指導者ではない。大した理論的把持がある譯でなく、實踐的計劃がある譯でもない。だが、一見勇敢に闘爭したのは極左の波に動かされたのだ。ただ細迫の强味は、相當ねばり强いところにあるのであらうが、それだけでは階級政治運動は指導して行けない。最近舊新黨準備會から脫して、所謂結黨派の旗を掲げた水谷長三郎がある。彼は今日別に指導者と言ふ譯でないが、將來大いに政治的指導者たらんとしてゐるかに見える。だが、それは彼の妄想であるが如くである。彼は無產政黨運動へ一枚名前をつらねることは出來やうが、いかなる意味においても政治指導者ではない。最近彼のなした聲明書を見ると、合法政黨必要論を大いに振舞はしてゐるが、新黨準備會が解散になるまで、これ位の理論がつかめず、日和見的な態度で、今日まで遣繰つて來たのなどに、彼の理論的把持の貧寠の程度が窺はれる。實踐的に言つても、彼は動かぬ計劃と對策の所有者ではない。いま無產階級の陣營には、田中內閣打倒の大衆運動を捲起せ！、との要求が起つてゐる。最左翼の代議士としての彼が、この大衆運動の議會的尖端を


大山郁夫氏


藏原惟人氏



村山知義氏

受持つて、どれだけ議會内で闘爭し得るか――と考へると、心細い次第である。とは言へ田中義一の買收の手――それが現に伸びてゐると言はれてゐる――に乘るやうな彼でも確かにない。

余り固くなつたから、こんどは無産者藝術運動の方を一瞥しておかう。こゝでは勞藝（「文藝戰線」）とナップ（「戰旗」）が對立してゐる。勞藝には舊くからの指導者の外に、小堀、靑木等の若い指導者が在り、ナップには、藏原、林、村山などの若い指導者がゐる。小堀や靑木は、勞藝の意見に從つて、政治運動にも活躍してゐる、藏原、林、村山などは政治運動に無關心狀態に流れて、藝術至上的に振舞つてゐる。この團體が分離したのは、政治意見の相違からといふ、やかましいものだつたが、後者の政治意見の實體は、政治的無關心に在つたものと見える。藏原惟人は人柄は極くいいが、プロレタリヤ文藝運動を指導するにしては、プロレタリヤ運動を知らなすぎる。そこから多くの誤謬が生れる。村山知義は、プロ演劇運動の唯一の技術的指導者で、技術的能力は充分に持つてゐるが、余りにヂレッタントで、困難無類のプロ演劇運動を指導して行けさうにもない。器用や思ひつきだけでは、どんな運動の一端でも指導出來るものではない。演劇運動で思ひ出したが、小山内亡き後の『築地』の唯一の指導者土方與志は、築地式の一種の啓蒙的演劇運動の指導者には、持つて來いの人だが、また若し轉換が行はれれば、プロ演劇運動もずいぶん指導出來そうな人である。あのねばり強さ、あの努力がなくては、プロ演劇運動などは指導出來るものでない。



土方與志氏

無産者運動の方の指導者を一わたり見たから、終に反動運動の指導


上杉愼吉氏

者一二に觸れておかう。こゝでは何と言つても高畠素之が花形だつたが卒爾として亡くなつてしまつた。彼は謂ゆる奇才縱横で、覇氣もあり、日本のファシスト運動の指導者をもつて任じてゐたが、彼は決してそういふ大衆運動の政治的指導者ではない。第一彼には、ありそうに見えてゐて度胸がなかつた。また本物のムッソリニほどのデマゴーグでもなかつた。生きてゐてもせいぜいが高畠とその一黨の旗頭位のところで毘がついたのであらう。上杉愼吉もたしかに反動の方の指導者で、覇氣もあり、それを動かす野心もある。だが、これまでの實蹟では、大衆的な反動運動を捲起して、それを指導出來そうでない。そこへ行くと『祖國』の北昤吉は、風雲兒的面影があつて、これから案外大きな仕事が出來るかも知れない。だが、彼には冒險的の要素が強い割合に思ひ切つてそれをやれぬ小心さと、怜悧さがある。こうした要素を征服しないと、祖國運動の指導者にはなれまい。それに彼も又指導的理論を持合せない。早い話が、曾て彼から祖國運動の理論をきかされたことはないではないか。


北昤吉氏

反動ではないが、室伏高信、新居格も、漠然とはしてゐるが一方の指導者らしい空氣を發散させてゐる。室伏はその巧辯をもつて、日本の津々浦々單獨で遊説したいと言つてゐると


新居格氏

かきく。その結果どう言ふ運動を起すのか、一寸疑問だが、大衆運動が起る頃には、自身が逃避してゐさうに思はれる。何れにしても人柄が素直すぎる。その點では新居も同じで、これまで彼も一枚加つて起つた運動で、そこに終りまで新居がゐた運動は一つもない。彼は典型的の銀ブラ黨であると共に、また典型的の運動ブラ黨だ。だが、人間としては兩者とゝもに、肌觸りがいゝ。それだけ指導者なんて言ふ、やかましい柄ではない。(終)

(後記)こゝに取扱つた人物にはムラがあるがそれは編輯者の注文によるもので、筆者はたゞ與へられた問題に正直な答案をつくつたまでである。

政黨指導者論

床次竹二郎君



床次竹二郎氏

兎角の批評はある、床次竹二郎君は日本の政界になくてならぬ人物である。彼れが一枚加はらぬと芝居が面白くない。主役にあらず敵役にあらず、三枚目でもないが、彼れが登場すると、場面に軟か味、可笑味が出て來て、狂言が狂言らしくなる。彼れの人徳が然らしめるのであらう。

彼れが支那から還つて來て、田中總理大臣に二度會見し、又此上に會見するかもしれぬ。世間は何か重大な相談でも行はれてゐるやうに思ふらしいが、狂言の筋は二度のお勤めに過ぎない。前の若槻内閣のときにやつた手と同じ手を用ひてゐるのである。若槻總理大臣の家へ床次君は出掛けて行つて、御丁寧にも、朴烈問題は重大ですぞ、内閣も考量なさらぬといけますまいと云つて忠告したのである。これ丈けでは普通の挨拶のやうに聞へるであらうが、政治家仲間の言葉に飜譯すれば、かう云ふのである、即ち、内閣を僕にお讓りなさい。さうでないと朴烈問題で内閣を潰しますぞと云ふのである。世間では床次君の此脅迫が失敗したかの如く解釋してゐるが、實は成功してゐるのである。三黨首妥協がその結果である。あのとき、若槻君は其年の夏か秋には辭職すると云ふ約束をした。床次君へ直接にさうとは云はなかつたが、貴族院の研究會を通してさう云つた。床次君は我事なれりと、涼しい顔をして朴烈問題を引込ます、憲本聯盟などを作つてゐた。秋迄には細工はりう〳〵、床次内閣が出來るものと安心してゐた。然るに何ぞ計らん。此計畫を知つてか、知らずにか、政友會が自暴になつて樞密院と一緒になつた。銀行の取り付けを起すのも關はず若槻内閣を倒して了つた。そして内閣は田中義一君に取られた。床次君は油揚げを鳶にさらわれた態で、一時は泣くには泣かれぬ思ひをした。其

悲憤慷慨の勢ひで憲政會と一緒になつて民政黨を組織した。さうして一年以上もじつとしてゐたが、冷靜になつて考へて見ると民政黨に居るのも馬鹿らしい。と云ふのは、一生懸命に働いて、政友會内閣を潰して見た處が、今の狀態では濱口内閣が出來るのであつて、床次内閣は出來ぬ。こゝは一つ分別せねばならぬと氣が付いた結果が、彼れの民政黨脫黨であつた。

彼れは支那から歸つて來て、田中首相に向つて、支那問題は重大だぞ。政府は何う考量すると詰め寄つてゐる。彼れは一生懸命に眞面目な顏をしてゐるが、彼れ自身でも、若槻君に向つて、朴烈問題は重大だぞ、内閣は何んか考量せよと詰め寄つた時の事を思ひ出すと、腹の中では噴き出し度くなるであらう。併し此所で噴き出しては折角の芝居が打ち毀はしになるが故に、彼れは大眞面目を裝つてゐる。から種を明かして了つて、扨每日の新聞に出る田中と床次との會見、新黨がどうのかうのと云ふ記事を見ると、可笑味たつぷりである。淺草の喜劇を見る位の價値はある。

其證據には床次君周圍の人々は異口同音に云つてゐるではないか。支那問題の行き詰りを打開する方法は唯一つあるのみ。それは田中内閣の更迭だと。これは床次君自身で一寸云ひ惡い處を二階のチョボに云はしめてゐるのである。

來るべき議會で、床次黨が政府を助けたら、それは床次田中交涉が床次若槻交涉の如く旨く來つたと見てよい。床次黨が反對の氣勢を上げるならば、今度の交涉が旨く行かなかつたと悟るべしだ。

假りに交涉が旨く行つて、田中床次、兩君の間に政權讓り渡しの約束が出來たとする。田中内閣が議會後に辭職するとする。其曉に、床次に大命が下るかと云へば、今の元老西園寺公が健在である限り、大命は先づ濱口君に降る事に間違ひがない。床次君は再び油揚げを鳶にやられた思ひをせねばなるまい。今から彼れに油揚居士と云ふ號を付けて置いてもよい位だ。

鶴見祐輔君



鶴見祐輔氏

鶴見祐輔君は明政會のリーダーである。明政會と云ふのは昨年の特別議會に出來た代議士七人の會であつた。其中三人が他所へ往つたが爲めに今は四人の會になつてゐる。明政會は議會の時、政府不信

かきく。[illegible]

[illegible]

にに、[illegible]

地方の青年ににに[illegible]

學して發せる譯けがない。かうして[illegible]と

云ふ才人を見るとき、世間は何んとかかとかケチを付けたがる。更に

彼の資識の身振りが可笑しいとか、或は彼の小說は文學にあらずと

か。何んとなく、世間の[illegible]

[illegible]と

[illegible]に

[illegible]それたと

[illegible]

[illegible]ない[illegible]

[illegible]古るいと

[illegible]つてゐるも

[illegible]多く買つて

[illegible]を偉い者と

[illegible]政府を動かさう

[illegible]ならぬ。矢

[illegible]唯の民衆に

[illegible]鶴見君の眼

の付け處に、[illegible]其當を得てゐるものだ。

鈴木喜三郎君



鈴木喜三郎氏

内閣の前内務大臣鈴木喜三郎博士は昨年の特別議會で内務大臣を罷めさせられた。それ以來彼れは政友會の留守師團長格で納まつてゐる。そして田中總裁の後に、政友會總裁として久原君と競爭の地位にあると云はれてゐる。だが、それは少しく間違つてゐる。競爭ではない。寧ろ鈴木、久原兩君組んで一人前になる。それは鈴木君の子分鳩山一郎、久原に接近し出した森恪、この兩君が組んで一人前になると同樣である。鳩山君はあれで中々一種の德望がある。親父の故和夫氏のボーツとした處を受けたのか、何んとなく人を引き付ける處がある。森君は政治家として度胸と腕力とがある。此二人は固く組んで離れない、初めは二人共鈴木君の子分であつた。處が今は森君は久原に近よつてゐる。だから鈴木久原兩君も亦棒組になる。

所ろで問題は鈴木君の運命である。私は直接に鈴木君とは話した事[illegible]司法省に居た頃、高木益太郎君と衆議院の豫算委員會で、人権蹂躙の問題で議論してゐるのを傍聽した事がある。議論は兎も角、鈴木君は惡黨面をしてゐた。云ふ事が檢事丸出しで、陰險な男だと云ふ印象を與へた。實際は惡黨でも陰險でもないのかもしれないが、人相の惡いのは人一倍損だ。

彼れは子分を可愛がる。秘書官をしてゐた篠原和一郎君が信州で立候補をしたときに、鈴木君は田圃道をテクリながら、篠原君の爲めに戸別訪問までしたものだ。司法の大官をしてゐたものが、百姓家で澁茶を啜りながら、爺さん婆さんの相手に話し込んでゐる。篠原君が當選したのは全く其お蔭げだと泣いて話してゐるものもある。

だが、中に拔目のない所はある。清浦内閣の時司法大臣であつた。其時の内務大臣水野錬太郎君と組んで、護憲三派を向ふに廻はして總選擧で勝たうとした。だが、選擧は鈴木、水野兩君のやうな官僚のカチ〳〵頭で思ふやうに行かず、脆くも一敗地に塗れた。暫らく隱忍した後、田中君が政友會總裁になると、死んだ大木遠吉伯、山梨半造、それに、鈴木、水野兩君の棒組みで、政友會と本黨の合同を企てた。それが床次君が憲政會の方へ近よるので旨く行かないと見極めが付くと、山梨、水野、鈴木の三君で政友會の方へこびり付いた。田中内閣が出來上ると山梨朝鮮總督、水野文部、鈴木内務とそれ〳〵身の振り方が付いた。仲々拔目がないと云はれても仕方がない。

何故鈴木君が内務大臣と云ふ重要な椅子を取り得たかと云へば、

任案に對して、最後迄態度を曖昧にした爲めに極めて評判が惡るい。其の惡い評判の飛沫を受けて、鶴見君も評判を惡くした。併しこれは寧ろ氣の毒だ。政治國難の決議案で鈴木内務大臣を彈劾するときには、鶴見君も餘程働いた。だから鈴木君を罷めさした功は認めてやらねばならぬ。然るに後に不信任案に對する態度が曖昧であつた爲めに、前の功が忘れられたのである。

鶴見君は不相當に惡評を受けてゐる。何故さう云ふ風に惡評を受けるかと云へば、世間の嫉妬が幾分か原因をなしてゐはせぬかと思はれる。彼れは後藤新平伯の女婿である。今迄の順境がそれに原因してゐるかの如く見られる。事實は鶴見君は中々後藤伯の云ふ事を聞かない。聞かない所ろか、時には煮湯を飲ませるやうな反抗もする。後藤伯の女婿でなくしても、今位、或は今以上に順境に居る位の才幹を有つてゐる。それを後藤の婿だからと一口に云ふのは可愛想だ。

今一つ彼れが嫉妬を招く原因は彼れが餘りに多能多藝であるからでもあらう。彼れが雄辯は定評がある。英語演説をやらしても雄辯なのには、聽く者をしてビツクリせしめる。彼れは小説を書く。其小説が地方の青年には非常に受けてゐる。受けなければ、講談社の雜誌が競爭して載せる譯けがない。かうして行く所として可ならざるはなしと云ふ才人を見るとき、世間は何んとかかとかケチを付けたがる。或は彼の演説の身振りが可笑しいとか、或は彼の小説は文學にあらずとか。何んとなく、世間の反感が彼れの身に覆ひかぶさつてゐるかの如く思はれる。これは世に優れたる才能を持つてゐるが爲めの稅金だと思つて、鶴見君も諦めるより外はあるまい。

鶴見君は順風に帆を揚げたやうに世の中を渡つて來たと、世評はかう云ふけれども、中々順風處ろではなかつた。彼れは代議士選擧に二度落選して、三度目に當選した。鶴見君は二度位落選しなければ、本當の選擧の味は判るものでないと云つてをる。其間には云ふに云はれない苦勞と、涙のこぼれるやうな感激の場面もあつた。併し彼れはどうしても代議士になりたいと云ふ希望を抱いてゐたが爲めに、此苦勞と闘つて遂に衆議院に出て來た。其間には只の才子では出來ない忍耐と勉強とがあつた。

今時分、代議士になり度いと思ふなど、鶴見君の頭も余程古るいと笑ふものもある。併しこれが亦日本の客觀的情勢を見誤つてゐるものゝ云ふ事である。日本の青年は大衆文藝的の雜誌を最も多く買つて讀む程度にしか發達してゐない。國民の思想がまだ代議士を偉い者と思ふ程度である。此程度の國民を相手にして、實際の政治を動かさうと思へば、自分自身の頭の程度を先づ低めてかゝられねばならぬ。矢張り議員とか代議士とかゞ尊敬される。街頭の民衆はまだ唯の民衆に過ぎない。街頭の民衆が天下を指導する日が來るまでは、鶴見君の眼の付け處は、政黨指導者として其當を得てゐるものだ。

鈴木喜三郎君



鈴木喜三郎氏

田中內閣の前內務大臣鈴木喜三郎博士は昨年の特別議會で內務大臣を罷めさせられた。それ以來彼れは政友會の留守師團長格で納まつてゐる。そして田中總裁の後に、政友會總裁として久原君と競爭の地位にあると云はれてゐる。だが、それは少しく間違つてゐる。競爭ではない。寧ろ鈴木、久原兩君組んで一人前になる。それは鈴木君の子分鳩山一郎、久原に接近し出した森恪、この兩君が組んで一人前になると同樣である。鳩山君はあれで中々一種の德望がある。親父の故和夫氏のボーツとした處を受けたのか、何んとなく人を引き付ける處がある。森君は政治家として度胸と腕力とがある。此二人は固く組んで離れない、初めは二人共鈴木君の子分であつた。處が今は森君は久原に近よつてゐる。だから鈴木久原兩君も亦棒組になる。

所ろで問題は鈴木君の運命である。私は直接に鈴木君とは話した事はないが、彼れが司法省に居た頃、高木益太郎君と衆議院の豫算委員會で、人權蹂躪の問題で議論してゐるのを傍聽した事がある。議論は兎も角、鈴木君は惡黨面をしてゐた。云ふ事が檢事丸出しで、陰險な男だと云ふ印象を與へた。實際は惡黨でも陰險でもないのかもしれないが、人相の惡いのは人一倍損だ。

彼れは子分を可愛がる。秘書官をしてゐた篠原和一郎君が信州で立候補をしたときに、鈴木君は田圃道をテクリながら、篠原君の爲めに戸別訪問までしたものだ。司法の大官をしてゐたものが、百姓家で澁茶を啜りながら、爺さん婆さんの相手に話し込んでゐる。篠原君が當選したのは全く其お蔭げだと泣いて話してゐるものもある。

だが、中に拔目のない所はある。清浦內閣の時司法大臣であつた。其時の內務大臣水野錬太郎君と組んで、護憲三派を向ふに廻はして總選擧で勝たうとした。だが、選擧は鈴木、水野兩君のやうな官僚のカチ〳〵頭で思ふやうに行かず、脆くも一敗地に塗れた。暫らく隱忍した後、田中君が政友會總裁になると、死んだ大木遠吉伯、山梨半造、それに、鈴木、水野兩君の棒組みで、政友會と本黨の合同を企てた。それが床次君が憲政會の方へ近よるので旨く行かないと見極めが付くと、山梨、水野、鈴木の三君で政友會の方へこびり付いた。田中內閣が出來上ると山梨朝鮮總督、水野文部、鈴木內務とそれ〴〵身の振り方が付いた。仲々拔目がないと云はれても仕方がない。

何故鈴木君が內務大臣と云ふ重要な椅子を取り得たかと云へば、其

所に巧妙な策戰があつた。鈴木君は司法か內務の外は持つて行く處がない。所ろで、鈴木君は原嘉道君を司法に推薦した。だから、鈴木君は必然的に內務に納まると云ふ譯けだ。田中君が何故それほど鈴木君を重用しなければならぬかと云へば、田中君は鈴木君が司法當局に對して牢乎たる勢力を有つてゐると信じてゐる。田中君が司法當局の好意を必要とする場合には、どうしても鈴木君の力を借らなければならぬ。鈴木君に果してそれ丈けの力があるか否かは疑問だが、田中君は其力があると信じた。だから鈴木君を重用した。

　所ろで將來鈴木君が政治家として大に復活するであらうか否かの問題であるが、私の友人は痰呵を切つて曰く、鈴木の首は衆議院の壇上で切られた首である。それが再びつながつた例はまた曾つてないと。

　つながつた例があるかないか、私はまたよく調べて見ないが、兎も角も衆議院で彈劾されて詰腹を切らされた男が、政治的に復活するのは余程困難な事業だ。殊にそれが政黨の首領となるなどは、かなり變態的だ。尤も鈴木君は隨分無理な横車を押通す流儀だから、世間が意久地がない場合、必ずしも彼れが復活しないとも云へない。

安達謙藏君

　安達謙藏君は民政黨になくてはならぬ人間だ。彼れの生活信條は、勢は僕が取るから、功は君が取れと云ふのだ。憲政會の時苦節十年で、加藤高明伯が在野十年の苦るしい世帶を女房役で勤めた揚句に、外の者が大きな顏をして大臣になつてゐるのに、安達は一年も後れて、暫く遞信大臣になつた。若槻內閣が潰れて、元の野人になつても、彼れは別に悲觀したやうな顏もせずに、毎日黨に出て勉强してゐる。政黨はかうした陰に居て働く者が居なくては立ち行くものでない。蓋し安達君は何も外に道樂と云ふものがないから、これこそ本當の政治道樂と云ふのであらう。道を樂しむと云ふ事を充分に心得てゐると見へる。



安達謙藏氏

　道樂と云へば、安達君には書の軸物を取りかへ、引かへ、座敷や、客間に掛けて眺める道樂がある。尤も貧乏だから、金を出して買ひ集めたのではないが、人から貰つたものを澤山有つてゐる。約四十年も政治に奔走してゐるのだから、昔しの友人などの書いたもので今は貴い物になつたのもある。それを眺めて樂しむ。政治の外の道樂と云へば、其位のものだ。

だが此頃は安達君も心配が絶えない。それは昨年八月床次君が民政黨を出て以來、民政黨の議員が一人々々脫黨して行くのを見ては、安達君も氣が氣でないだらう。總選擧の時には二百十七人あつたのが、一年にならぬ內に、百七十人となつた。約五十人の減少である。床次黨、憲政一新黨、それから今は中止になつたらしい大隈黨へと拔駈けをする連中が出て來るので、夜の目も寢られない警戒をせねばならぬ。かうなると、目がくらんで、誰れを見ても、これは脫黨しないだらうかと疑つて見る。安達君は黨員をつかまへて『君は脫黨すると云ふ噂があるが、そんな事はあるまいな』と聞いて見る。それから執こく『君脫黨しないだらう』と繰返して聞く。聞かれる身になると、人を馬鹿にしてゐると腹を立てる。其間に喜劇や悲劇が起る。他所から見てゐると可笑しいやうだが、黨の事を我身の事と心配してゐると思へば、全く身を切られるやうに氣の毒だ。

世間では民政黨の事を蠑螺が蓋をしたやうに小さく縮こまつてゐると批評する。これは聊か適評の感がある。小泉策太郎君が野黨聯盟の話を、安達君の處へ持ち込んで來たとき、安達君は我黨は多年綱紀肅正を唱へて來たのだから、自主獨往で行く決心をしたと云ふやうな事を匂はした。自主はよいが、何にも獨りで行くと斷らなくてもよささうなものだ。志を同じふするものならば天下と共に働らく。勢を天下に分ち、功も天下に分つ。安達君は、勞を自分が取り、功を人に遣る。それは非常にいゝ性分であるが、功を人に遣る其人が、自分の黨に屬するものに限つてゐるのだから困る。だから民政黨は小さく固まると云ふ批評を受ける。どうも、此黨の傳統的精神は在野黨である事に適してゐるやうに出來てゐて、政權を取ると云ふ方には不向きだ。

尤もさう云ふ事が決して民政黨を惡るく云ふ譯けではない。天下の政黨は二大潮流に分類される。それは合理派と非合理派である、合理派と云ふのは言論文章で、議會主義で堂々と、着々と、國民の贊成を求めつゝ行かうと云ふのである。日本で云へば民政黨や、社會民衆黨はそれに屬する。非合理派と云ふのは少しは無理な事をしても、兎も角も政權を取らねばならぬ。萬事は政權を取つてからの事だ。目的の爲めには手段を擇ばぬ。政權を取る爲めに、、、、を起すのを辭せなかつた政友會、潜行的運動一本槍にならんとする勞農黨などは非合理派の代表的なものだ。結局何方の流儀が勝つかと云へば、それは國々で異る。其國の人民が發達して居れば合理派が勝つ。人民が發達してゐなければ、非合理派が勝つ。日本で民政黨から脫黨者が出て、政府黨に段々合流して行く者のあるのは、さうしてそれに國民が制裁を加へないのは、非合理派がまだ衰へざる所以である、だから政治の進歩といふ大局から見れば、代議士の頭數を競爭するのは末枝であつて、根本の問題は人民を力強く養成する事だ。それこそ人民に自主獨往の精神を植ゑ付ける事だ。政治の最後の判斷を街頭の人に有たしめる事だ。

民政黨の氣分は政府を取るに適當しなくて、在野黨たるに適當してゐると云ふ所に、此黨派にかゝる將來の希望がある。政權を取るなんかを問題にせずして、人民を養成する事を任務とすればよい。さう云へば多數の黨員は益々失望して政友會に走るかもしれぬ。併し苦節十年に平氣であつた安達君は苦節百年にも平氣であらう。其平氣な所が、此人の取柄である。

ヂヨイスのユリシイズ

土居光知

一

シェイムス・ヂョイスは、一八八二年アイランドのダブリンで生れた。ヂェズイト教派の學校クロンゴウズ ウッド學寮(Clongowes Wood College)及びベルヴェディア學寮で教育を受け、ダブリン大學を卒業し、一時は聲樂家たらんとし、また映畫に關する事業を試みたが失敗したらしく、パリに遊學し、醫術を學びつゝギリシヤ及び中世哲學を研究し、一九〇五年頃から一九二〇年までチユリッヒ、トリエスト、ローマ再びチウリッヒで語學の教師をし、一時間四リラ即ち四五十錢の報酬を得、一年六百圓の收入で家族二人をも養ひつゝ「青年藝術家の肖像」及び「ユリシイズ」を書いたのであつた。

彼は「室内音樂」(Chamber Music) なる小詩集を出し、詩人或は音樂家とならうとしたが、情緒的ではない彼の性格はそれに適しなかつたのであらう。彼は理智的ではあるが和もするとその理智は白熱し、調和を失ひがちである。彼は醫術、映畫制作、語學教授等に成功しさうにも思はれない。

彼は遂に獨特な表現様式をもつ小說に於いて成功したが、それには詩人、音樂家、映畫技術家、醫學者、語學者たる彼がすべて生かされて、彼の藝術の構成にあづかつてゐる。

彼の最初の小說集「ダブリン人」(Dubliner) は十五篇の短篇からなつてゐて、一九〇五年には書き上げられてゐたが、英國王に對する不敬の言葉があるのと、內容もダブリン人に對して不愉快なものなので、出版者が躊躇し、一九一四年に著者の妥協により初めて公けにされた。

著者が獨特な表現形式を用ひるやうになつたのは「青年藝術家の肖像」からであるから、それ以前の作品に就いて多く述べる必要はないが、既に作者の筆は極めて簡潔直截で、思はせぶりの曖昧な言葉を避け、各語に最も強い意味をもたせ、印象あさやかに、確實に大膽に表

現してゐることを注意して置きたい。

「若き藝術家の肖像」(A Portrait of the Artist as a Young Man)は一九一四年二月二日發行の隔週雜誌 The Egoist 第一卷第三號に掲載し始め、第一卷二十四號から第二卷九號まで續き、一九一五年九月一日に完結し、一九一六年にニウヨオクで初版を出し、翌年エゴイスト社で英國版を出した。

この作はスティブン・デイダラスの名をかりた作者の自畫像でもあり、彼の大作ユリシイズの序言でもあるので、ユリシイズを理解せんとする讀者はこの作から讀み初めなければならない。

むかし、むかし、そしてすてきであつた頃、牛もうもうがだらだら坂をおりてきた。この牛もうもうが途で出遇つた可愛い子供が坊やのタツコウ。

お父様がこのお話をして下さつた。お父様は眼鏡ごしに坊やをごらんになる。お父様は鬚むしやのお顏であつた。

彼がこの坊やのタツコウであつた。牛もうもうはベテイ・バアンの家の傍の道を歩いてくる。ベテイはレモン入りの駄菓子を賣つてゐた。

おゝ、野ばらは咲くよ
みろり野のせまきすみにも。

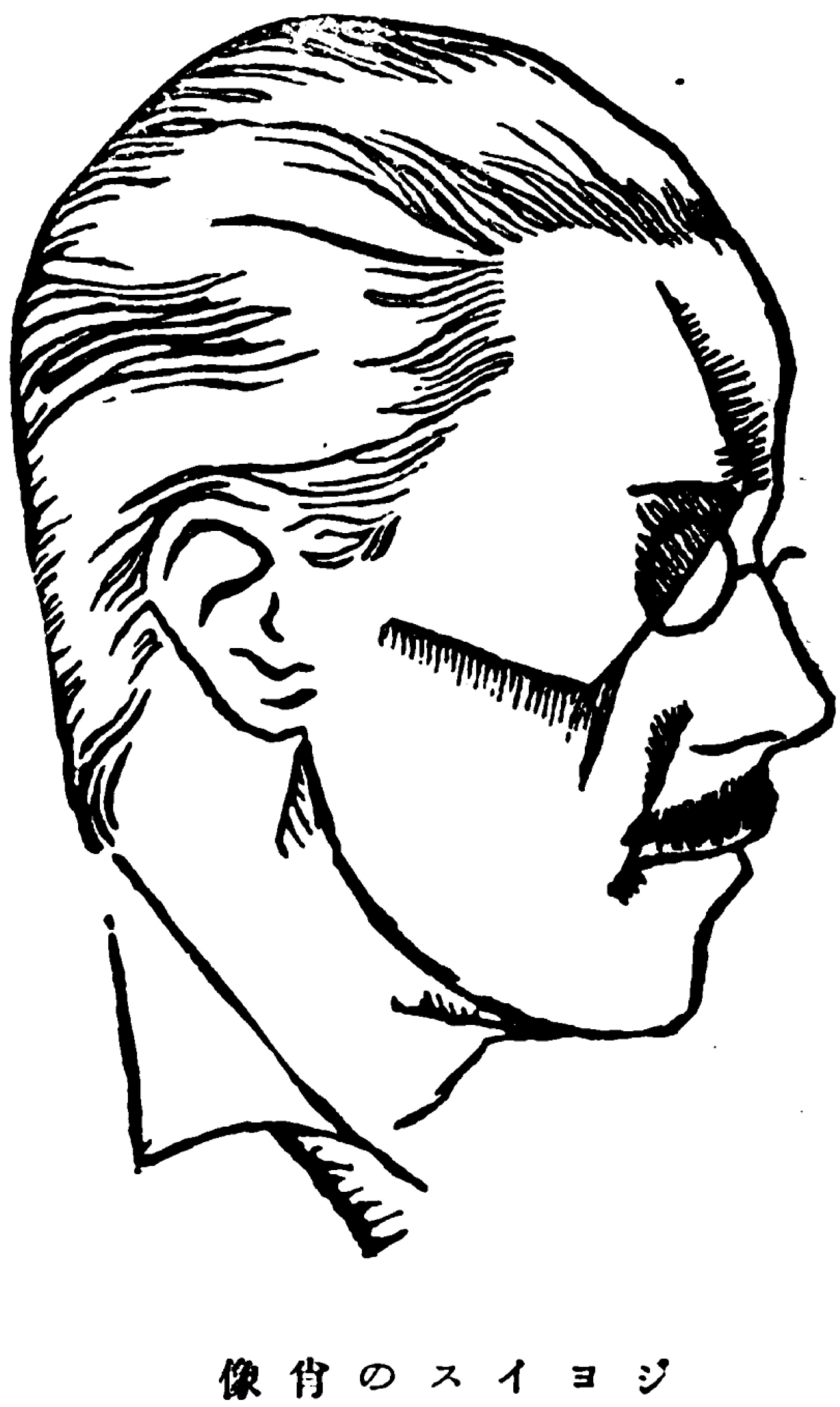
彼はこの歌を唱つた。それが彼のおはこであつた。

おゝのばあさくよ、
みろり・・・

おねしよをすると初めは温かいがやがてつめたくなる。母さんが油紙を敷いた。それは變な香ひがした。

母様は父様よりいゝ香がする。母様は父様に舟乘の唄を彈いてあげると、父様がダンスをされる。

トラララ　ララ
トラララ　トラララデイ
トラララ　ララ
トラララ　ララ　〔一――二頁〕



ジヨイスの肖像

かゝる書き出しに初まる幼年期の回想は著者が幼年者の意識に歸り、斷片的な記臆を何等の選擇もなしにひき出してきたやうに感ぜられる。しかし實際はこれらの描寫も彼の藝術を通過したものであら

う。

著者の文體の特質は意識の中に流れるものをできる限り直接に表現することを理想とし決してそれを理智的に分析したり、說明したりしない態度のやうに思はれるが　しかしそれは決して無技巧の表現ではなく、極度に鋭敏な理智によつて無意識な心までが分析され、そして再構成されたものであることは次に引用する一節からでも察せられる。

彼は十才前後の頃 コロンゴウウッド學寮 (Clongowes Wood Colledge) といふジエスイット敎の學寮へ入れられた。

廣い運動場には子供が群がつてゐる。皆が大騷ぎをし、組長が力强い聲で指圖をしてゐる。夕方の空氣は蒼ざめて冷たく、蹴球の人達がバタンと蹴る度に、油ぎつた球が重たげな鳥のやうに灰色の空に飛んでゆく。彼は戰列の緣の所にゐて、組長の目の届かぬ、亂暴な人達に蹴られる心配のない所にをり、時々走る眞似をしてゐた。彼は仲間の中では身體が小さく、か弱く、視力の弱い眼は涙ぐんでゐた。…

冷い外に居るよりも讀書室にゐたい。空は蒼白く寒さうであるが、城内には火がともつてゐる。ハミルトン・ロオアンが窓から帽子を城壁の上へ投げたといふ所。そして窓の下にはその頃花壇があつたといふ所はどのほとりであらうか。先頃城内へ呼ばれて行つたとき、執事が扉にあたつた銃丸の痕を見せてくれ、お茶うけの乾燒菓子を呉れたつけ。お城の中に火がともつてゐるのを見るのは温かさうで氣持がいゝ。ちようど物語の本を讀んでゐるやう。レスタア・アベイ僧院もこんなお城かしらん。コオンウエル先生の讀本に好きな文章があつたつけ。

ウルジイはレスタア・アベイで死んで。
坊さん達がそこへ葬つた。
キヤンカアは木の病氣、
キヤンサアは人間の病氣。

暖爐の前の絨氈の上へねころんでゐたら氣持がよからうに、肱枕をして讀本の文章を想ひだしながら。彼は背中へぬるぬるした水がかゝつたやうに身ぶるいをした。ウエルズがいけないんだ、銀の小箱とお菓子とをとり換へてやらなかつたので、吸込どぶへつき落すんだもの。あの水の冷たくて、ぬるぬるしてゐたこと。お友達がいつかどぶへ跳び込んだ鼠の話をしてゐた。母さんはダンテといつしよに煖爐の前へすわつて、ブリヂドがお茶を入れてくるのを待つてゐらつしやる。お母さんは足を煖爐緣にのせて、玉飾りのあるスリッパは熱くなり、こげ臭ひ、いゝ香がする。…

運動場では聲をはりあげて
集まれ!
一層向ふの方、第三列からも
あつまれ!　あつまれい!

蹴球の仲間だちは顔がほてつて、泥まみれになつて集まつてきた。彼も部屋へはいれるので、ほつと安心して列の中へはいつた。ロディ・キツカムが油ぎつた紐でしばつてボールを持つてゐた。ひとりの生徒がもう一度蹴らせろと言つたけど、彼は知らんふりをして歩いていつた。シモン・ムーナンが、組長が見ているから用心しろと言つたのであつた。その生徒はシモン・ムーナンに向き直つて言つた。

君のことはよくわかつてゐるよ。君は組長のサツクだね。

サツクとは變な言葉だ。その音がいやだ。いつかウイツクロオホテルの便所へ行つたとき、お父様が鎖をひつぱると、穢いものが穴の方へ流されていつて、窪みの底へ沈んでしまつた頃その音——がした、サツク、サツク、隨分大きく。

便所の白い姿を想ひ出して彼はまたぞくぞくとし、その後でからだがほてるのを感じた。便所の手洗には二つのネヂロがあつて、それをねぢると水と湯とが出てきた。彼は惡寒がするかと思ふと少しほかほかした。そしてネヂロの上へ書いてあつた文字を思ひ浮べた。ふしぎにもそれがはつきり思ひ浮べられた。

廊下の風もまた冷たかつた。それはゾクゾクして濕つぽい。すぐガスに火をつけよう。そしたら、ポコポコと輕やかな小聲の歌をガス燈がうたひだすだらう。いつもの通りに、そして運動場の叫び聲が靜まるとその唄がよく聞える。〔五——七頁〕

かゝる表現方によつて作者は主人公の感覺をまざまざと再現しながら、少年時代及び青年時代を比類なき直接さを以て描いてゐる。

これらの記事を一讀すると、少年時代の記憶を思ひ浮べるまゝに何等の撰擇もなく投げつけたやうに感じられるが、よく注意して讀むとそこには蜘蛛の糸のやうにくり出される聯想の糸がいつまでもつゞいてゐるのみならず、精神分析を經て、解剖され、その效果まではかりにかけられた語句が、醫術や映畫術や音樂などのに心得のある著者によつて、再び組み立てられ、意識の流れを彷彿さす表現となつたものであることに氣附くのであらう。

こゝに引用した一節に於いても、學寮へ送られてまだ一月もたゝず、おづおづしながら家を戀し、數日前腕白小僧のウエルズにドブベつき落されたがため熱病にかゝり、その潜伏期にある少年の感覺と意識の流動の實景が實によく再構成されてゐる。空氣の色の蒼ざめた寒さ——それと對照する黃灰色のお城のやうなジェスイットの寺院中世の物語への聯想——レスタア僧院の語のあつた單語讀本——それを讀んだ頃の家庭のなつかしさ——熱病の潜伏期にあるので爐邊をし戀がり、身體がだるいので横になりたがるのも生理的である。——幻想は遊戯が終つた集合命令でめざまされるが、サツクといふ音感から再び便所の水の音、熱病の潜伏期に感ずる水の聯想の冷たさ、寺院の回廊の空氣のゾクゾクする觸感——ガスの燃える音の快感が過敏に感ぜられるのである。

「若き藝術家の肖像」及びユリシイズに於ける作者の表現の態度はこの短かい引用文によつても窺はれる。それは精神分析を經て、意識の流動の實景を描くこと、抽象的な、輪廓的なまた說明的な言葉を避けて、觸感的な言葉をのみ用ゐること特に嗅覺に敏感であつて、いかに不潔な、不愉快な聯想と雖もそれを避けないこと等である。そして作品が上品を愛する人に激しく嫌惡されるのもこの最後にあげた二つの特性のためである。

この小說の第一章（1―64頁）はかゝる幼年期の回想であるが、第二章はこの早熟な少年の春のめざめを敍してゐる。彼の父の生活は家具を賣り拂ふほども貧しくなり、父は酒とよごれた快樂とに苦悶を忘れてゐた。未だ少年である主人公スティブン（Stephen）はこのごまかしの、醜い生活に反抗して彼の周圍に堰を築かうとするが、彼はそれにはあまり微力である。彼の父は醫學校出身で、端艇の選手で、唄が上手、素人俳優にもなり、陣笠の政治家となり、小地主、小投資者、酒飲み、話上手、酒造業に關係し、破產して、今は自分の過去の推讃者となつてをり、父の道伴れになつてきた母は疲れきつて病床にとぢこもり、彼自身も早くから無邪氣な少年の心を失つてゐた。彼は一人の少女に對し空想的な初戀をしたが、やがて他方では賣笑婦を知るやうになつた。

それらの敍述に於いても神經の末梢に起ることが同時に腦髓の中樞に起ることとして取扱はれてゐて、その繊細な筋肉の冒險と享樂との上に悽慘な絶望的な影、地獄の炎の如き光を投じてゐる。

次に第三章に於いて作者はスティブンが幼年時代から受けてきた宗敎々育の反動を描いてゐる。彼はフランシス・ザヴィエの命日に次のやうな說敎を聞いた。

牧師は聲を沈ませ、しばし默し、しばし合掌し、再び掌を開き、說敎をつゞけた。

扨皆樣これより神樣の憤りが永劫に罪人を罰せんがため創り給ひし地獄の有樣を想ひ浮べてみませう。地獄とは狹苦しく眞暗で、惡臭紛々たる牢屋であります。炎と煙とがみちた、惡鬼と亡歿との住居であります。地獄の狹苦しさは律法（おきて）を窮屈がつた罪人を罰せんがため神樣が特別に考案なされたものであります。この世の牢屋では少くとも身動きはできます。地獄ではさうはなりません。地獄では罪人が無數にあり、それらの罪人が狹い牢屋の中に積み重ねられてゐます。牢屋の壁は四千哩の厚さがあるさうであります。それで地獄に投げ入れられたものは逃れることも、身動きもならず、祝福された聖アンセルム樣が仰せられた如く、眼球をかじる蟲を拂はふために手を動すこともできません。

また地獄は眞暗闇であります。地獄の火焔には光がないのであります。昔神樣の命によりバビロンの熔鑛爐の火が光だけを保ち熱を失つたとは反對に、神樣の命により、地獄の火は烈しい熱のみを保ちつゝ永劫の闇の中に燃えてゐるのであります。それは絶えることとな

き闇の暴風、燃ゆる硫黄の黒き炎と黒き煙でありまして、その中に空氣のはいるすきまもなく人間が積みこまれてゐます。昔パラオの國が蒙つた天災の中で、一つのみ、闇のみが、怖ろしいと云はれました。それは三日のくらやみでありましたが、永劫に續く地獄の闇は怖ろしいとも怖ろしいではありませんか。

この狹苦しい暗闇の牢屋は恐ろしい惡臭によつて愈々怖ろしく感ぜられます。最後の審判の怖ろしい大火が世界を燒き淨めるとき、地獄は吸ひ込み下水となつて世界中の不淨物、世界中の腐れ肉と金滓(かなくそ)とが流れこむと言はれてゐます。地獄に充滿して燃えてゐる硫黄だけでも惡臭堪へ難きに加へて、罪された肉體そのものが臭氣を發すること、その肉體の一つだけでも全世界を臭くさす程であります。すべて一室を久しく閉ぢておくと空氣はよごれて呼吸に堪へ難くなるものであります。されば皆樣地獄の空氣がいかによごれてゐるのでありませうか。墓の中で腐れたゞれてどろどろのジェリのやうになつた死髓を想つてごらんなさい。かゝる死肉が硫黄の火によつて燒かれ、胸のわるい嫌はしい臭氣の濃厚な、息のつまる毒氣を蒸發するのであります。そしてこの胸のわるくなる惡臭、あやめもわかぬ闇の中に積み重ねられた百萬の惡臭はげしき死骸、巨大にして腐れゆく人間の巨大な菌より生ずる臭氣が百萬倍され、更に百億萬倍されるのを想像してごらんなさい。これらすべてを想像すれば地獄の怖ろしい臭さを幾分かさせることができませう。

しかるにこの惡臭は、たへられないとはいへ、地獄に追ひやられたものがうける最大の肉體的苦痛ではありません。火に燒くことはこれまで暴虐の支配者が人間に課し來つた最大の苦痛であります。しばしの間皆樣の指を蠟燭の炎にあてると、火の痛さを感じませう。さて地上の火は人間のため、生命の火花は人間の中に保ち、人間の工業を助けるためにとて御神の創り給ひしものであります。しかるに地獄の火は、これとは違つた性質のもので、懺悔せざりし罪の子を罰せんとて御神の創り給ひしものであります。地上の火は燃えついたものゝ性質により燒きつくすに迅い遲いがあり、人間の知慧は化學の作用によつて火を燃えなくし或は消しとめることもできるやうになりました。しかるに地獄で燃える硫黄は言葉を絶した狂暴さを以て永劫にたえることなく燃ゆるやう特別に創られた物質であります。また地上の火は燃えるとともに自滅するので、燃え方が激しければ、それだけ燃ゆる時間は短かいのでありますが、地獄の火の性質はその燃やすものの實質を保存し、想像もできぬほどの狂暴を逞くすると共に、それが永劫につゞくのであります。

地上の火はまた如何に激しく燃えひろがつてゐても極限がありますが、地獄の火の海には限りがなく、岸もなく、底もないのであります。地獄の燃ゆる大洋の中に大きい山を投げこんだとしても、瞬く間に蠟の如くに融けるであらうとは、ある兵隊に尋ねられて惡魔が答へた言葉であると書物にもあります。この怖ろしい火

は地獄に墮ちたものの身體を外から苦しめるのみならず、靈それ自身も地獄となり、到らぬ隅なき地獄の火は腦髓や臟腑の中にも荒れ狂ふのであります。これら憐れなるもの丶運命こそ怖ろしいのではありませんか。血汐は血管の中で煮えたち、沸きたつのであります。腦髓は頭蓋骨の中で茹だり、心臟は胸の中で赤々と灼熱せられ張り裂けんとし、腸胃は燃ゆるどろどろ粥のかたまりの如く、柔かい眼玉は鑄型に入れた彈丸のやうに焔を吹くのであります。(一三六――一三九頁)

牧師は尙地獄の精神的苦痛に就き同樣な具象的な言葉を用ひて說きつづけた。スティブンはかゝる說教を聞かされては心を脅かされ、廊下に吊してある外套やレインコートが首を切られ、絞罪に處せられた亡者のやうに見え、安眠を奪はれ、地獄の恐怖に慄えてゐたが、最も現代的な心の所有者であつた彼は久しからずして、これらジェスイットの宗教は、成長する心を飽くまでも中世の迷信に縛りつけようとして、鬼面をかぶつて善男善女を嚇すものであることをさとつた。

ジェスイット教は舊教中でも最も保守的な一派であるが、その中で教育された、現代的な心はやがてその激烈な反逆者とならざるを得なかつた。しかし彼は政治及び宗教の革命家ではなくして、ディダラス(Daedalus)の姓が暗示するやうに技術家であり、この語の原である Daidaleos は「精妙に工夫する」の意味であり、この語によつて呼ばれるギリシアのダイダロス(Daidalos)はギリシア技術家の始祖であり、クリイト島に於いて有名な迷宮(ラビュリントス)を造り、自分及び子のイカロスのために空を飛び翼を作つた神話的人物であつた。

ディダラスなる姓を用ひた作者は後にユリシイズなる大迷宮を造つたが、ジェスイト教に對しても、中世の宗教觀、地獄物語等の特徴である具象性、なまなましく描く表現をそのまゝとつて彼の技巧とし、それを逆用して極めて巧妙なパロデイを作つた。こゝに引用した說教の一部も勿論かゝるパロデイである。現代に遲れてゐる愛蘭人の心をこの固陋な宗教から離脫せしめるためにもかゝる有效な文章は少ないのであらう。

加之に愛蘭は久しい間政治的に英國の支配下にあつたのみならず文藝に於いても英文學の傳統のもとにあつた。愛蘭の藝術を象徵するものは、下僕のもつひゞの入つた鏡であると彼はいふ。イエツ等が努力した稍感傷的な復興運動も英文學に異彩を添えたのにすぎなかつた。ヂヨイスはローマ教の影響のみならず、英文學の支配權に對しても反抗した。そしてその反抗は宗教に對してなしたと同樣な逆用の態度であつて、彼は英文學に對しても歐洲文學の古典に對してもパロデイの外衣をつけて彼自身の獨特な個性を確立せんとしたのである。これは文藝復興期の巨人達の遺業に壓せられて、新らしい創造が容易ではない伊太利の青年の間に未來派の藝術が唱へられたのと、同じ必然に基いたものであり、また多く共通の要素を含んでゐる。

かくして作者がジェスイット教の學院で育てられたこと、愛蘭で生

れたことは作者をパロデイの外衣をつけた文學者たらしめたが、しかし彼は生れつきのパロデイストでは決してなく、眞劍に表現すべき彼自身の美の幻をも胸中に育てつゝあつたのである。この書の第四章は彼の心に深い印象を刻みつけた女性のことを、彼一流の感覺的な筆致で描いてゐる。その一節を紹介すれば、

(これはスティブンがダブリン市を貫いて流れるリツフィ河口の經驗の一節である)

彼はひとりであつた。彼に氣をつける人もなく、彼は幸福で、生命のかざりなき心髓に迫つていつた。彼はひとりで、若やかで、わがまゝで、無鐵砲で、自由に吹きまくる風と鹽氣のある水と、貝殼や昆布の散り布ける濱邊、薄雲りの日光、華やかに輕裝した小供達、空に朗かけくひゞきわたる少年少女の聲の中にひとりでゐた。

一人の少女が彼の前方の中流に立つてゐた。ひとりで、靜かに、沖を眺めながら。彼女は、珍らしくも美しい海鳥の姿に魔術で化せられた者のやうに思はれた。彼女のすらりとした、あらはな足は鶴のそれのやうにきやしやで、エメラルド色の海草がまつはりついてゐる點を除けば、純白であつた。彼女の腿は肉つきよく、象牙のやうな色をして、サルマタの白い緣飾りが鳥の柔かく白い柔毛のやうであつた。彼女のねず青色のスカアトは腰のまはりへ大膽にまくられて、鳩の尾羽のやうになつてゐた。彼女の胸は鳥の胸のやうに柔かく、しなやかに山鳩の胸のやうにしなやかに柔かゝつた。しかし彼女の美は少女らしく、顏もまた少女らしく、かすかにこの世の美しさのあやしさの影があつた。

彼女はひとりで靜かに沖の方を眺めてゐた。そして彼が來たこと、彼の視線の嘆美を感じた時、彼女の眼は羞らひも、色ぼさもなく、靜かに彼の視線を許して彼の方に向けられた。久しく見られるまゝにして、彼女は靜かに眼を轉じ、流れの方に向ひ、足で靜かに水をあちこちと掻きまわしつゝあつた。その靜かに動かされる水のかすかな音が沈默を破つた。低くかすかにつぶやく音、遠き羊の鈴の音の如くかすかに、そして微かな絹が彼女の頰にふるへてゐた。(一九九頁)

この女を見たのはたゞ此の一刹那だけであつたらしいが、分裂し混濁してゐた彼の情緒に核を與へたやうに思はれる。

第五章は大學生の時代で、美の考察と彼自身の藝術に對する態度を決定することを中心問題としてゐる。

彼はアクイナスの Pulcra sunt quae visa placent (よろこばしく觀ぜられるものは美である)との標語から始める。美とは聽覺、視覺を始めあらゆる感覺を通じて快く感ぜられるもの、そしてそれを得んとし、或は避けんとする意欲を動かすことのない靜的な感覺、感じられるものゝ最も滿足な關係によつて和らげられた想像力によつて觀られるものである。(二四三頁)美として感ぜられる三つの條件は全一なること、調和を保てること輝やかしいこと、である。(Ad pulcritudin-

em tria requiruntur integritas, consonantia, claritas.)（二四八頁）全一とは時間及び空間の無限を背景としながらも完全獨自なるもの、一にして全きものとして感ぜられ、部分部分が調和を保てること（二四九頁）、調和とは全體が律動的に構成されてをり、直觀による綜合が知覺の分析を伴ひ、その純一を感ずると同時にその多様にしてさまざまの要素よりなれることが觀ぜられること（二四九頁）である。輝かしさとは永劫の世界からの光輝が添つてゐるかの如く、眼前の事物はその影であり、象徵であるかのやうに思はしむるもの、事物の中にある深い心を藝術的に透明に見出し、或は表現したものである。輝かしさとは事物のもつこの幽妙な意味である。それは透徹し、透明にする想像力によつて始めて觀ぜられる。ヂョイスはこの claritas の意味を精神內の現象を透明に表現することの意味に用ひてゐるやうである。これら美の三つの質、その朗かな輝き、その全一なことに心をひきつけられ、その調和によつて魅せられるとき、心は美感即ち朗かに靜かな恍惚を味ふ。（二五〇頁）これを表現する藝術は形式上から三種に分れる。藝術家が彼の心象を彼自身との直接關係に於いて表現するもの即ち抒情形、彼の心象を彼と他者との間接な關係に於いて表現するもの即ち敍事形、彼の心象を他者に於ける直接の關係に於いて表現するもの即ち劇である（二五一頁）。スティブンは次第に悲慘になりつゝある家庭、戀人に對する苦甘い空想、疑惑と反感との募りつゝあつた宗敎、愛國に對する愛國熱に燃ゆる若い友人達の仲間から脫け出してかゝる美學を考へつゝあつた。この學生の美學の興味はこれが如何に彼の創作と關係してゐるかとの點にある。ヂョイスの表現は優雅な調和を愛する讀者の心に衝激を與へる辭句の多い中に、輝かしい表現、對象を殆んど透明にし中から窺はしめるやうな句を鏤めてゐる。また彼は藝術を三種に分ち、小說の樣式を認めてゐないやうに思はれる。ユリシイズの如き小說をも彼は敍事形の文學と主張するのであらうか。彼は多分それを否定して言ふのであらう。小說は抒情、敍事及び劇の綜合であり、主としてそのいづれかを選び、時には三つの樣式を並用する複合樣式であると。ユリシイズの如きは正しく抒情、敍事及び劇の複合である。

藝術とは個々の美しい性質を了解し、謙讓な心で忠實に、それを徐々に表現すること、粗雜な資料から、靈性を閉ぢ込めてゐる扉とも云ふべき音や色や形からその精髓を搾り出して、各の藝術家が觀ずる獨特な美の姿を描き出すことである（二四二頁）。そして彼は特に律動的な方面、即ち心が美を孕む過程、流動する意識の中に於ける印象の明滅をできるかぎり生々しく直接に現はすことに重きを置き、同時に藝術家の獨特な個性の自由を最も大切なものと考へた。彼は彼を育てた宗敎や、家庭的環境、母國に對する愛國熱の綱に捉へられることを怖れ、友人よりも離れ、全く孤獨になつて彼の藝術に、即ち彼自身に直進した。彼にとつて藝術とは過去の天才が遺した古びた衣裳をまとつて偶像崇拜をすることではなく、最も直接に生命に觸れることであつ

た。彼は言ふ。『來れ、おゝ人生よ、我は經驗の眞實に百萬遍も出遇ひに行かう、そしてわが靈の鍛冶場に於いてわが種族の未だ形づけられなかつた良心を鍛へよう』(二九九頁)」と。

彼がかゝることを考へてゐた時彼の母はスティブンにジェスイトの信者となつて、復活祭の聖餐を受けるやうにと逼つたが、彼は母の希望を容れることができない。彼は遂に決心し、何物にも束縛されぬ自由さを以て、精神が已れ自身を表現し得る生活及び藝術の樣式を見出さんがため故鄕を去つて大陸に行くことにした。「若き藝術家の肖像」はこゝで終る。

二

「若き藝術家の肖像」が公けにされた時リテラリイ ウアルド誌は『このヂョイスの新らい本に就いては何といつてよいかはつきりした態度をとることが極めて困難である』と極めて卒直なことをいひ、愛蘭ブック ラヴア誌は『純潔な心の讀者はこの本を妻や子女達の手のとゞく所に置かないだらう』と一般讀者の感想を代表し、ニウヨオク・ポスト エキスプレスは『作者が寫實を志してあまりに渾沌に陷れること』を指摘し、『フロベール、ドオデー、ハアディ等を擧べ』と忠言し、宗教家は一般にこの作の宗教に對するパロディに深い憎惡を感じ、神を冒瀆する書であるとなし、愛蘭人もまた一般にこの書には迷惑を感じたらしく、『作者は愛蘭に對し同情も理解も有せず、スティブンに愛蘭學生の代表者ではなく、同じく故鄕に學んだ作家にウエルズ、コナン ドイルのあることを指摘し、『彼等こそ代表者なり』と云ひ(スフィア誌)『ジョイスがダブリンを舞臺としたことは偶然にすぎず』(フリイマン誌)とした。〔これらの批評は The Egoist 第四卷五號に集められてゐる〕

この「若き藝術家の肖像」が公けにされた時には未だ知名の批評家は、意見を發表しなかつたのであるが、ユリシイズが一九一九年斷片的にエゴイスト誌に載せられ、次いで一九二二年に出版された時には彼等も默してはゐられなかつた。ヂョイスの親友で共にパリに住居してゐるエルザ パウンドはメルキユル ド フランスで『ユリシイズは見方によつてはフロベエルを繼承し、フロベエルの絕筆に於けるが如き技巧を發展せしめたものである。そして構造から云へば大規模なソナアタの形式をとり、事件の進展はホオマアのユリシイズとかなりよく並行してゐる』ことを指摘し、『本書は決して散漫渾沌たるでたらめのものではなき』ことに注意し、ア、ノルド ベネットはアウトルックク誌上で、『ヂョイスがすばらしく獨創的で、人生のある現象を深刻に表現する仕方に於いて驚嘆すべき技巧を示せる』ことを述べ、「幻想」の章と「ブルウム夫人の私語」の章を最も優れたる部分とし、前者はニベトロニウスを後にしてラベレェと比すべく、後者は實際に生ける人の胸中のなまなましい感想の魔術的な記載であつて、如實の記錄として完全に心服せしむるに足り、かつてこれにまされるものを讀んだこと

がない』と言ひ、ミツルトン　マリはネエシヨン誌上で『曾て書かれたることなき獨特な書、非常に興味深く、情緒や事物のかくれたる特性に對し、また精神的な美に對し特に敏感な藝術家の手になれる作であり、ことに『幻想』の章の如きは「ファウス」の中のヴァルプルギスナハトを書いたゲエテの天才に比し得べきことを百年後の文學史家の輕蔑或は稱讃を賭して斷言する』と言ひ、シスリ　ハツルストンはオブサアヴァ誌上で『ジヨイスの作は章句が簡潔にしてひきしまり、生氣あふれ、非常に多くの內容が一句に集中され、無限の諧謔を交へ、ために猥褻もある點まで美を伴ふ』と言ひ、エドマンド　ウイルスンはニウ　レパブリック誌上で、『どつしりした組織をもつ作品であつて、作者は、目的なく些細な印象から次の些細な印象へと漂ひ流れ、記憶や感覺や抑制などによつて、混雜し迷はされる意識情態――かつて明るみに出されたことのない、潛在意識を描き出し、材料の嚴密な選擇によつて見事に成功してゐる。この書は人間が世間に對して見せてゐる姿の背後、或は內部にあつて漂ひ流れ明滅する意識の最も忠實なレントゲン寫眞である。作者は個々の獨特な出來事に思ひがけぬ意義を與へるすばらしい詩的才能を有する天才であつて、作者が人間の心を實際以上に分裂したもの、或は醜惡なものとして表現したとは思はない』と言ひ、ホルブルック　ジヤクスンはツデイ誌上で、『この書は一つの挑戰であり、勝利である。退廢でもなく、好色の心をそそる行は一行もない。たゞ赤裸々にして躊躇なく、道德的でも非道德的でもなく、ホオマアの如く叙述したもの、英國の小說界でハアディのジユド以來の歷史的事件である』と言ひ、ジヨセフ　コリンズはニウヨオク　タイムズの新刊批評附錄で、『自己の精神分析に最も鋭い喜びをもつ自己中心主義の天才の作であつて、記錄された會話は寫眞のやうな正確さと、ジヨンスンの座談を忠實に記錄して遺したボズウェルのやうな忠實さとを有する。文體は古典的散文と俗語のパロディであり、聖書の句を冒瀆的に引用し、韻律ある散文を故意に鏤ばめてゐる。そして神秘主義者のみが了解し得るやうな掩蔽された象徵を多く用ひるなど要するにすぐれた言葉の技巧家或は魔術師が英語を以て演じ得らるるあらゆる奇術、幻惑を試みてゐる。この書はガルガンチユアがラベレイズを、カラマゾフ兄弟がドストエヴスキイを不死ならしめた如くに著者を傳へるのであらう、一人の性格をどこからどこまでも表現した點に於いてこの作の如きは曾てなく、私が十年間神經學研究所に居て學んだ以上に本書から心理學及び精神病學を學んだ』といひ、ヨオクシヤ　ポストの記者は、『意識の流れと心の半ば無意識的な情態の絕對に率直な叙述として、この書は技巧上非常に興味ある試みである。今日まで藝術と人生とを距てゝゐた最後の愼しみ、最後の障壁はとり除かれた』と批評した

以上は英米人によつてなされた批評のうち本書の性質を比較的よく紹介してをり、本書を理解する上の補助となる章句の一部を拔粹したに過ぎないが、この書にはフランス、伊太利、獨逸等に於いて更に多く

喧傳された。しかしそれらの批評の多くはこの作の新奇なること、大膽なることを賞嘆し、或はフロイド、アインシュタイン、ベルグソンと聯關せしめ、或はパスカルに比し、或はラベレエ、シェイクスピア的なりとし、官覺的印象主義、文學上の未來派、ボルシェビズム、精神分析學と稱するのみでこの作を精密に讀んだと思はれる批評は見當らなかつた。たゞ一九二五年のエングリッシュ スッディエンに載せられた批評は忠實な解説である。また最近亞米利加で本書の解説がすでに單行書として發行されたが、要するに粗雜な輪廓とホオマアの人物との外面的な聯結であつて、三弗の本としては全く空粗である。

以上の如き賞讃や好奇心の傍にはより以上に激しい非難があつた。例へばアルフレド ノイズがサンデイ クロニクルで、『本書は曾て印刷された本の中で最も穢はしいものであり、それをロンドンの批評家ともあるべきものが天才の作品として眞面目に取扱ひつゝあることは沙汰の限りである』と憤慨したのはヴィクトリア女王朝の趣味を代表せる言と見るべく、スフィア誌の記者が、本書を以て『過去及び現在に於いて出版せられた最狂氣じみた、滅茶苦茶な、最も忌はしく、非藝術的にして支離滅裂な引用もできぬ程猥褻で、要するに瘋癲病院からでなくては生れさうにもない作』と言つたのは宗教界の憎惡を背後にせる言葉と見るべく、ティイチャズ ウァルドの記者が本書を以て『正氣と糞石學(scatology)の嘆くべき作品』であると罵しつたのは教育者間の意見を代表すると考へることができやう。これらの批評は通讀した上の批評とは思はれないが、この小説が最初に連載されたエゴイスト誌が發刊された頃から英國文壇の新勢力となつたロンドン マアキュリが全く本書に關して沈默無視せることも一種の消極批評として考へることができやう。本書は最初パリのシェイクスピア社で一九二二年二月に印刷され、次いで二三年十月にロンドンのエゴイスト社で英國版を出したが米國に發送された五百部は陸上げの時燒却され、英國に於いても禁止された。そのためにその後のフランス版の賣行きがよく七版以上に上つてゐる。

かくの如く物議を起したユリシイズの内容は何であらうか。ホオマアのユリシイズ〔ギリシア人はオヂュセウス Odusseus と呼んだが、ロオマ人の舌によつてdはlに變じoはnに代へられ、英語ではnが半長音となり、ユリシイズと呼ばれるやうになつた〕はトロイ戰役の歸途風神(Eolus)の住居を訪ね、故郷に歸るまでの順風を風袋につめてもらつたが水夫が不用意に口を開いたがため途中で發散し、尙十年の間世界を漂浪しなければならなかつた。彼は蓮の實を食し、永遠の黃昏の中に往し、黃色い顏をした無爲安逸の民のすむ食蓮國(lotus-eators)に立ちより、暴力を恃む粗野な一つ目巨人(Polyphemus)の國に漂着し、人間を豚に化する妖女サアシイ(Circe)の家を訪ね、更に黃泉の國に降つてトロイで死んだ戰友達と物語り、その聲に耳を傾ける舟乘は必ず、櫓を漕ぐことを忘れ、その磯邊に誘ひ寄せられると傳へられるサイレン(Seiren)の岸邊をも通り抜け、我國の浦島が訪

れた龍宮にも似たカリプソオ（Calypso）の島にも永住することができず、更に海上に漂ひフェニキアの濱邊に難破して、淨らかな少女ノオシカ（Nausicaa）に助けられ、始めて妖氣を拂ひ淨められ、二十年の間云ひ寄る多數の男達を却けて、夫の歸へるを待てる貞節な妻ペネロピ（Penelope）のもとに歸ることができた。

スティブンの半生もまたある意味に於いてユリシイズの冒險を繰り返して來た。學校――靈性の成長に必要な糧を與へず、成功の彼岸へたどりつくべき帆を孕ましめるに必要な知識の順風を與へるためにある學校は風神イオラスの殿堂である。スティブンがさづかつた風袋もやがて發散して彼を漂浪の旅に送つた。事業に失敗して、人生に希望も理想もなく、新らしく事業をする元氣もなく、過去を追懷しつゝ酒と安價な快樂にひたつてゐる父及びその交友は食蓮國の民である。ウエルズと名附けられた腕白少年を始め彼をいぢめた亂暴な少年達、後に彼が接近してまた遠ざかつたシンフェインの仲間達は行動に對する、眼のみあつて反省或は思想の眼をもたぬ一つ目巨人である。空想的な初戀の女は彼のカリプソオであり、彼が早くから知つた醜業婦は彼のサアシイであつた。牧師から地獄の怖れを吹き込まれて、死後の冥想に耽つたことは彼の黄泉旅行であつた。リッフィの川尻で突然彼の前に現はれた少女は彼のノオシカであつて、彼女によつて妖氣を淨められた彼はもはやサアシイに仕へる豚ではなくなり、故鄕に歸る機縁となつた。スティブン・ディダラスの故鄕は藝術の國であり、彼自身の心である。この際理解を受けるやうにと切願した病弱の不幸な母の言葉はサイレンの聲の如く拒み難きものであつたのであらう。

かくの如く、一切の傳統に反抗し、彼獨特の藝術を創始せんとして自叙傳を書いた時、それがホオマアのユリシイズと並行した內容になつたことは彼自身をも驚したのであらう。個人の生活を描くときユリシイズの內容から外に出で難く、對人關係、社會生活を描くときイリアドに描かれた範圍以外に出ることの困難なことは藝術の樣式に於いてギリシアから獨立し、哲學に於いてプラトンを離れることの困難さと同樣であらう。

このことに氣付いた彼はユリシイズを正面から名乘り、そして「若き藝術家」スティブンの正反對の人物を主人公として裏面から描いて見ることに興味を感じたのであらう。

スティブンは過去の宗教、道德、社會狀態、家庭の環境及び文藝の傳統に反抗し、何事に於いても過去をそのまゝに繼承する仕事に興味を持たぬ從つて現在の社會には適應しない人物であつた。彼は或は未來の社會に適應する先驅者であるかも知れない。しかしその社會が如何なるものであるかに就いては彼自身も全く明確な知識をもたぬ。それ故彼はたゞ捨身になつて、自己の中の衝動に自己を放棄し、その經驗から何物かを創造しようとする。しかるにユリシイズの主人公レオポルド公・ブルウムは歐洲に於ける古代民族猶太人に屬し、三千年の間の世間智及び常識が血液の中に流れてゐる如く、彼は現在の社會に適

聽せんとつとめ、最中の最後を持つて最も多く[illegible]せんとし、またかゝる人生哲學をもつてゐる。この書の中にもスティブンは出場するが、それはたゞブルウムと對照されんがため、ブルウムが現在社會に於ける過去の世間智を代表するものとすれば、スティブンは現在社會に於ける未來を展開する盲目な衝動を代表するものとし、この意味に於いて彼はブルウムのユリシイズに對しての子テレマカスとして立つのである。

本書は英國版初版では四六判二倍大で七百三十二頁の大册であるが、それが一九〇四年六月十六日朝八時から翌朝午前二時頃に至る一日の間スティブンやブルウムの意識の中に流れた現象の記錄である。

第一部（一――五〇頁）は本書の序曲であつて、スティブンは母の死のために歸國し、初等學校の教師をしながら、醫學生である友人と共同生活をしつゝダブリン市の郊外で、海を望む所に下宿してゐる。彼はジエスイット主義を逆に注射されたやうな青年で、母の臨終に際しても、母のため跪づいて冥福を祈ることを拒んだほども片意地であるが、六月の輝かしい朝の光りを度々雲が遮つて、海を陰の深い藍色にするやうに、母の追懷が彼の心に往復して、彼を憂鬱にする。スティブンは古い罅の入つた下女の鏡を愛蘭の藝術に較べてゐるが、彼が考へてゐる新らしい藝術の鏡は海――太陽の光、雲や空の色、風の動きのため千變萬化し、動きながら動けるものゝ影をうつす海である。この影は輪廓の固さを失ふが、生動する生命の面影を保存する。彼は朝食を求め、[illegible]生徒を[illegible]。生徒達は一人の低能兒を殘こし運動場へ開放さるゝことを喜ぶが、スティブンは深切にその低能兒を敎へる。一時間の課業を終つてから校長に用事を頼まれ、ダブリン市の新聞社へ出掛ける。三十七頁から五十頁までは、海岸傳ひにダブリンへ行く途中で心の中に浮ぶ過去の思ひ出、巴里のこと、女に關する感想を織り混せた思ひと、現在經驗する種々の印象を更に織り交らせて書きつらねてある。ある章句は映畫の如く。すべては彼の心の中に浮びては沈みつゝ漂ひ流れる印象、心象の面影であつて、時間空間の限界がなくなり、一人稱から三人稱へ、三人稱から一人稱へとたへず推移する作者獨特の文體である。時間は朝八時から十時半頃までゞあらう。

第二部（五三――六八九頁）はソナアタで云へば、その主部に相應し、前後の二部に分たれ、前半は晝のレオポルド・ブルウム、社會に位し、他人に對するブルウム、後半は深夜のブルウム、彼の心中の幻影曲である。

彼は住所もスティブンとは正反對にダブリン市の北端エックルス七番地に住し、新聞廣告の注文取であつて、彼の頭は廣告といふことでみたされてゐる。彼は四十代の男で、健康で聰明で、官能的であり、十六七年以前に結婚した妻はマリオン　ツイ、ディと呼ばれたソプラノの歌ひ女であつたが、ユリシイズの貞節な妻ペネロピとは反對に多情であつて、現在も數人の情人を有し、浮氣をつゞけてゐる。

五三頁より六七頁まではブルウムの家庭の朝飯の有様で、數日前ブルウムと女中との怪しい中を察した妻は、女中に暇を出したので、ブルウムは八時すぎに起床し、臺所で火を起し、豚の雜物を煮て、黒猫と共に臺所で食事をし、十時頃までは寐室を出ない妻に、彼女の情人からの手紙、朝食をはこんでやる。

六八頁より八三頁。彼の友人ディグナムの葬式が午前十一時に始まるので、フロックコウトを着て家を出で、市の中央の便郵局で留置の手紙を受取つた。彼はヘンリ フラワといふ變名で、彼のカリプソオなるマアサなる女と戀の遊戯をやつてゐる。次の一節はブルウムが郵便局から出てくる姿である。

彼はブラブラと郵便局から出て右へまわつた。

(話しあひをしようといふ、そうすれば仲直りができるとでも思つてゐるのか。)〔かつこは譯者がブルウムが心中で思ふことを區別せんため附したので原書にはない。〕

彼は手をポケツトにさし入れ、封筒を指で裂き破つた。

(女は非常に氣にかける、とは思はない)

彼は指で手紙を取り出し、ポケツトの中で封筒をくちやくちやにまるめた。

(何かはいつて入るぞ、寫眞かしらん、それとも髪の毛か、さうでない。)

(あ、ムッコイが來る。早くはづしてやらう、面倒くさい。いやな奴にでくはした。)

――やあ、ブルウムさん、どこへお出かけ。

――やあ、ムッコイさん、どこといつて別に。

――おからだは如何です。

――丈夫です、あなたは、

――どうにか無事です、とムッコイが言つた。彼は眼を黒服と黒いネクタイにつけて、氣がかりらしく尋ねた。

――何か…あの…別にお變りはありませんでせうね…服が…

――いや、いや、ブルウムが言つた。ディグナムさんがねえ、今日が葬式です。

――そうでした、氣の毒なことをしましたね。そうでした。何時で。

(寫眞だらうか、徽章のやうなものかしらん)

――じ、じ、…十一時です、とブルウムは答へた。

――私も列席しませんければ、とムッコイが言つた。十一時でしたね。私は昨晩聞きました。誰からでしたか、ホロアンさんでした、ホッピイを御存じでせう。

――存じてゐます。(七〇頁)

八四頁から一一四頁までは教會の式が終つてスティブンの父やパウアやカニンガム等人生の下り坂にある食選人等と共に馬車にのり、故

に從つて市の北方の郊外にある墓場に行く情景であつて、會話に主として時代にとりのこされた人々の感想を語ると共に、街の光景が映畫のやうに現はされてゐる。

——ブルウムさん、音樂會の景氣はいかゞです。

——お蔭樣で、とブルウムが言つた、だいぶ評判だやうです、いゝ思ひつきでした。

——君もいつしよに巡回演奏について旅行なさるのですか。

——いゝえ、ブルウムが言つた。實際僕は田舍のクレアに用事があつて行かなければならぬのです。巡回は主な都會だけですからね。一方で損をすれば他の方でつぐないがつきますさあ。

——全くね、とカニンガムが言つた。メアリアンダアスンもやつてゐますね。

——いゝ役者がゐますか。

——ルイ　ウアナアが勸進元です　とブルウムが言つた。

——それでは人氣役者を集めましたね。ドイルやマックコオマックも出るのでせう、それから……實際一流どころです。

——そしてマダム　ブルウム、とパウアがほゝゑみながら言つた。つい順序が後になりましたが、なかなかもつて……。

ブルウムは慇懃な身振をして手をひろげ、またくみあはせた。（スミス　オーブリエンが通る。誰か花束を贈つたな、女、彼も女難にかゝつたか、そのうれしい仕返しが大變だ）馬車はファレルの像の側を通りすぎてゆく、彼等はじつと眼で迎へながら。

オート。緣石（へりいし）の所から冴（さえ）ない服裝の老人が品物を差し出し、口をあけて、もしもし。

——靴紐四本がたつた五錢であります。

（どうしてあゝ零落したものかしらん。昔はヒウム街に事務所を置いて妻の同姓の檢事ツイディ氏と肩を並べたものだつたが。乞食になつてもその頃のシルクハットをかぶつて。昔のなごり。そして喪服をつけてゐる。オーカラガンのなりのはて。）

（そしてマダムは、十一時二十分になつた、もう起きたらう。掃除女がきて、あいつは髮をときながら鼻唄を歌つてゐるだらう。ヴオリオ　エト　ノン　ヴォルレイ、違つた、ヴォルレイ　エ　ノン。裂けてゐる毛はないかと髮のはしを見ながら。ミ　トレマ　ウン　ポコ　イル。トレの所であいつの聲はすてきだ。涙ぐましい聲、鶫（つぐみ）、鶫の聲にたとへてやらう。）彼の眼はパウアの男振りのよい顏を見た。（鬢（びん）に白いものがふへた。マダムをはほゝゑみながら、そう言はれるとこちらもほゝゑまされる。ほゝゑみは意味深長だが、たゞおあいけうだつたらう。いゝ奴だ。あいつも情人（いろ）を持つてゐるといふ風評はほんとかしらん。細君にとつては不愉快だらうが。誰かゞプラトニックだと言つてたけれど、やがてはそれに物足りなくなるものだ）（九十頁）。

墓場に近づくに隨つてブルウムは自殺した父のこと、早逝した獨り

の男の子のことなどを想ひ出して一寸した死の冥想に耽る。これが彼の黄泉行きであるがその旅行を途中にしてひき返す彼は、この一日中でも幾回となく死の國のそばへまで心を走らすのである。

一一二頁より一四三頁までは現代社會に吹き起る風の源である、風神イオラスの殿堂、即ち新聞社にブルウムが訪ねた敍述である。時間は十二時前後であらう。イブニング　テレグラフ社の觀察や出來事は、一節一節二號活字で見出しを置き、聯絡のないやうな事件や思ひつきや、社員の感想等を綜合して見事に新聞社らしい雰圍氣を出してゐる。

植字工

ブルウムは活字室を通つて行つた。腰の屈んだ、眼鏡をかけ、前掛をした老人の側を通つて。植字工だ。隨分變つた新聞種がこれまで彼の手で植字されてきたことだらう。死亡廣告、新刊書の廣告、講演、離婚裁判、身投げなどが、彼も、もうおしまいだ。酒をのまぬ律義者だから貯蓄銀行にちつとはあるだらう。おかみさんは料理がうまくて、洗濯もやるし、娘はみにくかつたが。‥‥馬鹿なことは考へまい。

植字

彼は活字を並べてゐる所へ立ち寄つてみた。（字をさかさに讀んでゐる。中々早いものだ。慣れなければできない仕事だ、ムナグヂクツリトパ(mangiD kcirtaP)、昔おやぢが猶太法典をもち出して右から左へ讀んでくれたものだつけ‥‥。）

石鹸

彼は階段を降りて行つた。（壁には一面にマッチで樂書きをしてある、まるで競爭のやうに、印刷所はいやに脂ぎつたにほひがする、もとゐた家の隣りではしよちう膠をとかすにほひがしてゐたつけ。彼はハンケチを取り出して鼻に當てた。レモンの香、あゝ石鹸の香だ、彼はハンケチを仕舞ひ、石鹸をとり出し、ズボンの腰のポケットに入れボタンをかけた。［譯者註、ブルウムは今朝石鹸を買つたが、それが終日彼の伴をして喜劇の役割を演ずる。］（一一八頁）

この節はかゝり節六十三から成立してゐる。

一四四頁よる一七五頁まで、時間は午後一時から二時迄の間で、ブルウムはダブリン街を歩き、グリイン夫人に遇ひ、友人の細君ミイナピウアフオイが產科病院へ送られたことを聞く。サンドウイチと葡萄酒で七ペンスの晝食をとる。彼は街で盲目なピアノ調整者を見、手をとつて街を横ぎらしてやり、これより博物館に行き、裸身像を眺める。

一七六頁より二〇九頁、二時前後。ブルウムと同時に新聞社を訪れたスティブンは彼の友人と共に博物館に行き、スティブンが中心にな

つてシエイクスピアとその作のハムレットに就いて一席辯ずる。この章にはエグリントン、オーサリバン、ラッセル、シング、ジエムス　スティブンズ、ショウ、ハリス、ワイルド等愛蘭を代表する文學者がしばしば引用されてゐる。

二一〇頁より二四四頁、ダブリン市の情調を活寫しようとして作者は十九の斷層を描いてゐる。二時すぎから四時に至るまでの出來事である。ジエスイツトの僧コンメイ師が外出し、電車にのり、北方の郊外へ行く。葬儀屋のケレアに遇ふ。ブルウム夫人の一瞥。スティブンの父の家では妹だちが貧しい食事をしてゐる。ボイランは情人のマダム・ブルウムに贈らんがために花束を註文する。スティブンは伊太利人アルティフォニと散歩してゐる。リネアン氏は四時にオモンドホテルでボイランと會見する約束をする。ボイランはまた四時にブルウム夫人と遇ふことを約してある。牧師のヒウ氏、ラヴ氏は聖女マリア寺院を參觀する。ムツコイ、リネアン等本屋でブルウムを見かける。ブルウムは妻のために「罪の甘さ」といふ通俗小説を貸本屋で借り出す。ステブンの妹が父に出遇つて五十錢をもらふ。父サイモン　ディダラスの一瞥。妹とスティブンとの遭遇、コンメイ師とスティブンの父との遭遇。カニンガム氏がディグナムの遺児のために義捐金をつのる。スティブンの友人等が彼のシエイクスピア論をうはさする。アルティフォニが街を歩いてゐて、ブルウムが手をとつてやつた盲人にぶつつかる。デイグナムの遺児が一斤半の豚肉を買ひ、父の死と責任が重くなつたことに就いて反省してゐない。アイルランド總督ダドリ公閣下並令夫人が立派な四頭馬車に乗つてフィニックス公園からリッフイ河に沿ふた街路を通過する。

二四五頁より二七九頁、午後四時のお茶の時間に於けるオモンドホテル客間の情景で、前節で思ひきつて擴げた描寫の網をたぐり寄せて、このホテルに集中し、さまざまな性格の合奏曲を聞かする筆致極めて巧妙である。描寫の筆は極めて複雜で二種から四種となり六種となる樂器の合奏のやうである。一部を抄譯すれば——

ブルウムはエセクッス橋の所へ來た。さうだ、彼は橋を通りすぎた。（マアサに返事を書かなけあ——書翰紙を買はふ。デイリィの店で、店員の女に愛嬌があつたけ）ブルウム、よい年をして、らい麥に青き花さく。

××××

クリイム色の模造犢皮紙二枚、一枚は用意に、封筒二枚、（御家庭が幸福でないんですつて」と書いて、花を封じこんであつたのはよいが、ピンで指をついて、何か意味があるかしらん、花言葉、雛菊と？無邪氣の象徴、教會から歸つてゆく少女、あたいほんとに嬉しいわといふ…‥）ブルウムは戸口のポスタアを見た。人魚が涼しさうな波にのつて煙草をふかしてゐる。（これこそ涼しい煙草だ）髮が波に流れて、（戀にやつれ、誰を戀ひて、ラオウルを戀ひて）ふと向ふを眺めるとエセックス橋を二輪馬車に乗つて通る、華美な帽子が見える。

(奴だ、ボイランだ、今日は三度目だ。)

柔かい護謨輪の馬車はチリンチリンと橋をこえ、オモンド河岸へと通る。

(跡をつけてやらう、思ひきつて、急がなけあ、四時だと言つてゐたから、もうすぐだ、でかけるか)

――二ペンスでございます、と女の店員が言つた。

おゝ……ついうつかりして……ごめん。

それでは四ペンスお釣りを。

お釣りを出して、彼女は愛嬌たつぷりほゝゑんだ。ブルウムもほゝゑみ、急ぎ、出る。左様なら。(おれも河原の小石としか想はれてないかな。あの愛嬌をみんなの男にふりまくかな。)

眠たい靜けさの中に金髪が小説をよんでゐる。サロンから調子を合せてゐる音が聞えてくる、續々として。整調師(ブルウムが手引きをしてやつた)がピアノをしらべてゐるのだ。次第に調子が合つてくる。音が次第に澄んで、柔かに、諧音となる、續々として絶えなんとする如く。

ボオイは帳場に代金を拂つて、シャンパンの一壜を受取り、ポンと栓をぬいて、盤に乗せて、一寸金髪にさゝやく。

輝ける星消えて――

心の中でうたつてゐる。

朝とはなりぬ――

小鳥の囀りのやうなデュオディン(duodene)が敏感な指の下に最高音部で答へる。調子朗かに、きらきらと、ハアプの絃の如く、輝ける朝、青春、戀の別れ、人生の戀の朝を歌ふやうにと誘ひかける。

露の玉――

リネアンが帳場ごしに誘惑的な低い口笛を吹いた。

――カスティラの薔薇よ、こつちを見てごらん。

チリン、チリンと二輪馬車は玄關前で止まつた。

カスティラの薔薇とよばれた金髪は小説を閉ぢ、立ちあがつた。ちれて、さびしげに、夢見るやうに。

――あの女は自分から迷つたかね、それとも押されていつたのかね、と彼は尋ねた。

女は輕蔑するやうに答へた、

――お問ひにならなけや詐(うそ)も言はないわ。

全く淑女らしく。

ブレイジス ボイランのいきな桿色の靴が酒場の床にギウギウと音をたてる。金髪は近くから、青銅髪は遠くからえしやくする。レネアンも聞き、わかり、迎へた。

――もてすぎる伊達者の御入來。

二輪馬車と窓との間を用心して歩きながらもてぬブルウムがやつてくる。(見つかるといけない。)黒い用心深い雄猫は辯護士のカバ

ンをさげたゴウルドリングの方へ歩んで行つた。カバンをあげて挨拶される。

　かくてわれは君より――

――保釜に行つてたてねえ、ボイランが言つた。彼は美しい金髪のケネディの方に向いてあみだに被つた麥稈帽の縁に手を觸れた。彼女は彼をみてほゝ笑んだ。彼のためにふさふさした髪をとゝのへ、薔薇の花を飾つた胸をみじまひしながら。
　ボイランは註文する。

――君は何がほしい、ビールがよいかね。あのね、ビールを一杯、どうぞ、それから僕はスロウジンにしよう。電報はまだきてゐない？

　まだであつた、四時にはくるだらう。（皆が四時といつてゐる。）
（しまつた、つきあたつては致方がない。ボイランがオ丶モンドで何をしてるだらう。馬車を待たせてある、一つ待つてやらう。）

――やあ、どこへお出掛け、食事ですか、僕も食事をする所です、さあ、はいりませう。

――えゝ　オモンドですか。

――ダブリンでは一番です。

――さうですかね。

――食堂へ。

――[illegible]それでは一しよに願ひませう。

――さあどうぞ、

ゴウルドリングは先になつて、ブルウムはカバンについて行く。大變かゝることになつた（二五三――四頁）

かくの如くしてオモンドホテルの情調は誘き出される。ボイランはマダム　ブルウムと密會の所へでかける。ブルウムは憂鬱になるが、情人のマアサの所へ返事を書く。彼は一族の最後であつて、息子には早死をされ、相續者のないことをも想ふ。そこを盲人の整調師が杖で探りながら出てゆく。ホテルの音樂が彼の心を不思議な情態に置く。

　二八〇頁から三三〇頁。午後五時から六時の間。オモンドホテルのブルジョア的な歡樂場に對照された、キアナンの居酒屋に於けるプロレタリアの喧騷であつて、ブルウムはその泥酔した自己開放の場面に通りかゝり、罵られ呼び入れられるが、酒を拒み、たゞ喫煙のみを共にした。この酒場はホオマアの一つ目巨人の洞穴に相應する。ヂョイスはこれらの群衆を、思想の片眼をもつてゐない一つ目巨人としてゐる。

　三三一頁から三六五頁まで、やうやうにしてキアナンの酒屋をのがれ出たブルウムは都の東南の海岸に行き、しばらく靜かな黄昏の濱邊に憩はうとした。こゝは數年前にスティブンが彼のノオシカに遇つた所であるが、ブルウムもまたガアティ　マクドウエルなる美しい少女

をこゝにみた。彼女は戀愛小說などを耽讀し、その女主人公を夢想して生きてゐる跛の少女である。ブルウムの意識は官覺的な感想の波をあげ、誰もが言葉にするを恥ぢる思ひとなり、刹那の性的興奮を現はす。

三六六頁より四〇七頁まで、午後九時半ブルウムはピウアポイ夫人の出產見舞にホオン氏產科病院を訪ねる。そこには醫學生や三四の友人が來てをり、談話室で酒をのみながら、出產その他の問題に就き遠慮なき話をする。文體はマロリやバンヤンや新聞口調などのパロディである。

四〇八頁より五六五頁まで。四〇七頁で主要部の前半は終り、後半の幻想曲となる。場面は紅燈の街マボツト町で始まり、ベラ　コオエンの女郎屋に移り、再び街路にたる。時間は午後十時から十二時まで。ノオシカによつても救はれなかつた、しかし彼の屬する世界へ呼び歸されるやうになつたブルウムは、人間を豚にするこのサアシイの色街に、明朝の料理に用ひんがため四ペンスで買つた豚の脚を携さへながら、さまざまの幻を思ひ浮べるのである。第一に父の亡靈があらはれ、次に妻の幻、自分の過去に於ける恥しい行爲や、ひそかな思ひ、野心や夢などが早變りの映畫の如くに現はれ、女郎屋では更に彼の幻想と、やはりこゝにきてアブサン酒に醉つたスティブンの幻想とが混亂し、實に怪奇渾沌たる光景を呈する。そして最後に彼は死んだ子供の幻を見る。ブルウムは泥醉したスティブンを自分の子供であるかの如くに感じながら介抱する。ブルウムは彼の一人息子を早死させたやうに、彼の靈の一人息子であつた精神的の未來、理想をも早死させ、墓に葬るべきものの他には人生の何一つ所有せぬ男である。この過去に屬する彼が未來に屬するスティブンを認識して、自分の子の如く感じたのであらうか。それとも、サアシイの豚小屋に入れられる時は、未來に屬する人間と過去を享樂する者との差別もなくなり、兩者が父子の如く握手するのであらうか。この長い一節はゲエテのファウスト第一部のワルプルギスナハトを除けば他に類例を見出し難いものであらう。表現の仕方もワルプルギスナハトに似てゐる。

五六九頁より六一八頁。夜半から午前一時頃まで。酒に醉ひ喧嘩をして、なぐり倒されたスティブンを介抱しながら、ブルウムは馬車を探したが見付からぬので、馭者の溜りに伴ふ。途中で貴族の落し胤だとのうはさがある乞食コオレイに出遇ふ。馭者溜りには物凄いほどから威張りをしつゝ、航海の冒險や異鄕情調を誇張した言葉で生々しく物語る、解雇された水夫がゐた。

六一九頁より六八九頁まで、午前一時から三時頃まで。ブルウムはコヽアを馳走するためスティブンを家に伴ふ。酒の醉もさめ、怪しい幻を見た經驗も斷片的な反省となつて思ひ出される。それ故文體もまた自ら尋ねては自ら答ふる斷片的な問答の連續となつてをり、よくこの意識情態を髣髴せしめる。

ブルウムはスティブンに泊つて行くやうにと懇ろにすゝめるが、醉

のさめたスティブンそれを聞く拒みアイルランドの貢犬の白む頃にブルウムの家を出るのである。こゝにも象徴的な意味がある。ブルウムはひとりで自問自答をつゞけてゐるが遂に寢室に入り、妻をめざます。

六九〇頁から七三二頁まで。これは急調の終曲(フイナアリ)であつて、眠をさまされた夫人の、現と夢との間に於ける、とりとめもなく移りゆく感想を捉へて驚嘆すべき巧妙さを以て表現したものである。この章は四十三頁の間一つのコンマもピリオドもなく、また節を改めることもなく、いつ一つの文章が終つて次の文章に移つたのか、それすらも惑はしいのであるが、それが夢現(ゆめうつゝ)の間にある意識そのまゝであるやうに感じられる。次にその發端を少し譯出してみよう。

さうよ朝寢坊をして卵を二つも寢床でほしがるやうなことはシティア・ムズホテル事件このかたゞわ身體(からだ)のぐわいが惡いと虛言(うそ)をついては胸のわるくなるお世辭を言つて一生懸命に媚くちや婆さんのリオ・ダンさんを大事にして大變なものを拾つたと思つてゐたのに法會をしてあげるお錢も遺してはくれなかつたあんなしわんぼうがまたとあらうか安酒に四ペンス費ふことでも嫌がつて私にもこぼし話をよくしたつけおしやべりだつたわ政治だの地震だの世界の末だのともつと面白くなくては世間があんな女ばかりになつてはおしまいだわ水泳着も夜會服もきなくては勿論あんな女にそれを著せて見ようとするもの好きな男もなかつたわあの人が信心深かつたのは男は二度とふりむかうとしなかつたからだわ私達に居になれとすゝめなかつたのが不思議なくらゐしかし教育は確かにあつて死んだりオ・ダンがリオ・ダンがとそれでもちきりでブルウムもあの婆さんが死んでほつとしたらうそしてあの婆さんの犬ときては私の毛皮の外套の香を嗅ぎ下袴(ペテイコウト)の中へもぐらうとしてばかりゐてだけれどそこがブルウムの好い所だわあんな婆さんにも深切で給仕にも乞食にもブルウムは病氣をもらはないことを得意にしてゐるがいつもさうは行かないわほんとに病氣になつたら入院さすのが第一病院だとさつぱりしてゐるからところが一月も口を酸ばくしなければお金のかゝる病院へは行きさうもないそれに看護婦の心配もあるひともんちやく起きさうだわさうならなけあ尼さんのやうな看護婦私とはまるで逆つた性質の女だわ男といふ者は弱蟲でヒイヒイいつて病氣の時には女にあまへたがる鼻血を出してもそれは大變な騷ぎやら私があの晴衣(はれぎ)をつけた日に摺鉢山の遊山(かさん)の合唱會に足を挫いた男の死にさうな顏色といつたらスタックさんが花を持つて見舞に行つたつけそれはけちな撰(よ)り屑(くづ)の萎れかゝつた花を持つて男の寢室へはいつてみたい老孃の興味そして自分のために男が死にかゝつてゐると想つてみたくてそれがこの世のお別れなど思つて實際は髯がのびて少しは男らしくなつてゐたゞらうがお父樣もその通りだつたまた繃帶をしたり藥をのませたりするのは嫌いだわお父樣が底豆(そこまめ)を剃刀(かみそり)でむいてゐて足指に怪我をなすつた時丹毒のことは心配したけどまるで一大事

が起つたやう嫁になつちやつたそれは世話はしてあげたわそれは女は種々の面倒をみてやる樣子はするわそれはさうと近頃どうかしてゐるわあんなに脂濃いものが好きになつたんだもの兎に角色事だわそれがない時には食慾も減つてしまふわどんな女かしら夜の女かしらだとすると背にはきつと行つてゐたわそれでホテルの話は虛言のかたまりよヘインズにつかまつた誰にあつたかなあゝさうだお前メントンを知つてゐるだらうそれから誰だつたかなこうつとなどとごまかしてあのメントンの間拔けの頰顫想ひ出すわ結婚をしてすぐプウルの若い女とふざけてマリオラアナとか云つたつけ勿體ぶつてこそこそ逃げて行つた時背中を向けてやつたわ女とふざけるのが惡いとは言はないけど私にあんなに厚顏しく言ひ寄つておいて口ばかりの男煮しめたやうな目をしてあんな馬鹿面つてあらうかそれで三百代言だつて寢床の中で長い辯論をされてはやりきれないわ夜の女でないとすればそつとかくれて拾つたどつかの尻輕だらう私が知つてゐるやうにポルデイ〔夫人がブルウムを呼ぶ名〕の性質を知つてさへ居てくれたらきつとさうだ一昨日本間へ行つたときマツチを取りにだつたかいやディグナムさんの死亡廣告を見せるはてなと思つたわ書いてたものを吸取紙でかくして仕事のことを考へてゐる樣子をしたけどそれがきつとその女に宛てた手紙だつたあの年になるとことに四十の坂をこすと男は誰でも他愛もなくなるものだからし易いと思つてゐるだらうがポルディもたらされて抱き上げられさうだが年を取つて迷ひだしたほど厄介なものはないそして私をキスするのはごまかすためだわポルディが誰としやうとちつとも驚くわけではないけどとにかくごまかされないけどとにかくごまかされないやうにはしなけあ眼の前でみせつけられない間はよいけれどまたあのぐうたら女のメアリの樣になつてはたまらないいつもポルディにお膳を揃えてばかりいてお白粉臭い女の移り香を嗅がされるのもやりきれない一二度よく見てみると附物に長い髮の毛がくつ着いてゐたりして一度臺所でみつけた時にはポルディは水を飲みにきた樣子をしてごまかしたつけ男は一人の女ではどうしても物足りないがそれは私のせいではないわ女中に手をつけておいてクリスマスの時には食卓で一しよに食事をさしてやらないかなど言ひ出して嫌なことうちでは決してさすものかうちの芋や一ダス二志六ペンスもする牡蠣まで盜みだして今日は伯母の所へ行きますからお暇を頂きますだとまるで共謀の盜人だその證據を掴るには少し暇がかゝるわお前證據があるのか言ひがゝりを言ふものではないといつたけれど思ふ存分に言つてやつたわそしたらお前出ていつたらどうだと私は探偵のやうなことはしたくない女中の室で靴下留を見付けたので澤山だわ解雇を言ひわたした時の癇癪でふくれあがつたあの女の顏といつたら女中なしでやる方がましだ部屋の片付けは私の方がよつぽどはやいけど臺所のことゝきたら閉口だわそれはポルディに任して女中か私か家を出るはめになつたものあの女のやうな薄汚なくてづう

ぢらしく虛言つきのなまけ者で私の目の前でごまかしをしそこら中鼻唄をうたつてゐる者に手をつけてゐる男と思ふと觸はる氣もしない……(六九〇――六九二頁)

ユリシイズを讀む興味の一つはその表現形式にある。未來派、實感派、主動主義、表現派、ダヾ主義、內的寫象主義、精神分析派等の名でよばれてゐる文學の新傾向は皆この一著述の中にある。のみならず彼は創作家が自己の精神を集中し意識の流動の姿を精妙に表現することを得るならば小說の形式、文體の新樣式もまた無限であるべき事を暗示する。一般に言へば未來派實感派等新らしい主義を標榜する文學はある心的態度をとつて試みる文學—即ちポウズの文學である。ヂヨイスはこれ等の主義を標榜してはゐない。彼はポオザア(Poseur)ではない。彼にポウズが認められるとすれば、それは彼が文學の傳統や主義から自由になり、彼自身を最も精妙に表現することに、彼自身がみた人生の眞と美との幻を新らしい彼自身の形式を以て表現することに全生涯を捧げてゐる所から無意識に生れたポウズであつて、それは彼自身の個性そのものである。ヂヨイスのユリシイズはホオマアのユリシイズのパロディではあるが、パロディとなつたのは目的のない遊戲からではなく、力強い古傳統を破らんとする努力の結果であつて、ヂヨイスは極めて眞劍であり、「若き藝術家の肖像」で描いたユリシイズである彼自身に對立するユリシイズ、即ち彼が見た社會人を前後左右內外から精密に表現したのである。このブルウムの如く精密にしかもあらゆる觀察點から描かれた人間の行動に當てなかつた。

最後に附記したきはこの小說の難解なことである。私もこれを理解したとの自信は持ち得ない。これはげにディダラスが建築した古代の迷宮ラビユリントスに比すべき現代文學の迷宮である。しかしラビユリントスは古代人にとつては迷宮であつたが、現代の人々の目からみれば迴路や扉が最も巧妙に、古代人には思ひがけない所についてゐる、整然たる大殿堂であつたかも知れない。ヂヨイスの創造した文學的迷宮もたゞ現代人にはあまりに精妙にすぎて難解をかこたれるだけであつて、次の時代の人々は整然たる殿堂と考へるかも知れないのである。(昭和四年一月七日)

ブハーリン

猪俣津南雄

◇

筆者はかつて評傳やうのものを書いたことがない。今後も殆ど書かないであらう。

◇

ブハーリンの名は、「改造」の讀者には寧ろ親しみがあり過ぎる。少しでも社會科學に關心を持つ者にとつては、彼れの名は「史的唯物論」と引離しがたいであらう。第三インタナショナルに僅かの注意をでも拂ふ者は、今やジノヴイエフに代つてその最高指導者の地位に立つ彼れを知らない筈はない。更にまた、レーニン亡き後の勞農ロシアを語る者は、トロツキーやスターリンと共に、ブハーリンの名を口にせずにはをられまい。

◇

今から七年前の一九二二年にすでにレーニンは言つてゐた、――「ブハーリンは黨内の最も尊重すべき理論家であり、また事實において最大の理論家である」が、ブハーリンが最も尊重すべき、最大の理論家であつたのは、單なる理論家としてではなく、名實共に革命的理論家としてである。

ニコライ・ブハーリンは、一八八八年十一月に生れた。日本流に數へれば今年取つて四十一歳になるが、實は第四十回目の誕生日を僅かに二ヶ月前に迎へてゐるに過ぎない。從つて、レーニンから「最大の理論家」の稱呼を與へられた、當時の彼れは、三十を越して間もない若さであつた。しかも、その時まで彼れは、一貫して革命戰線の人であつた。

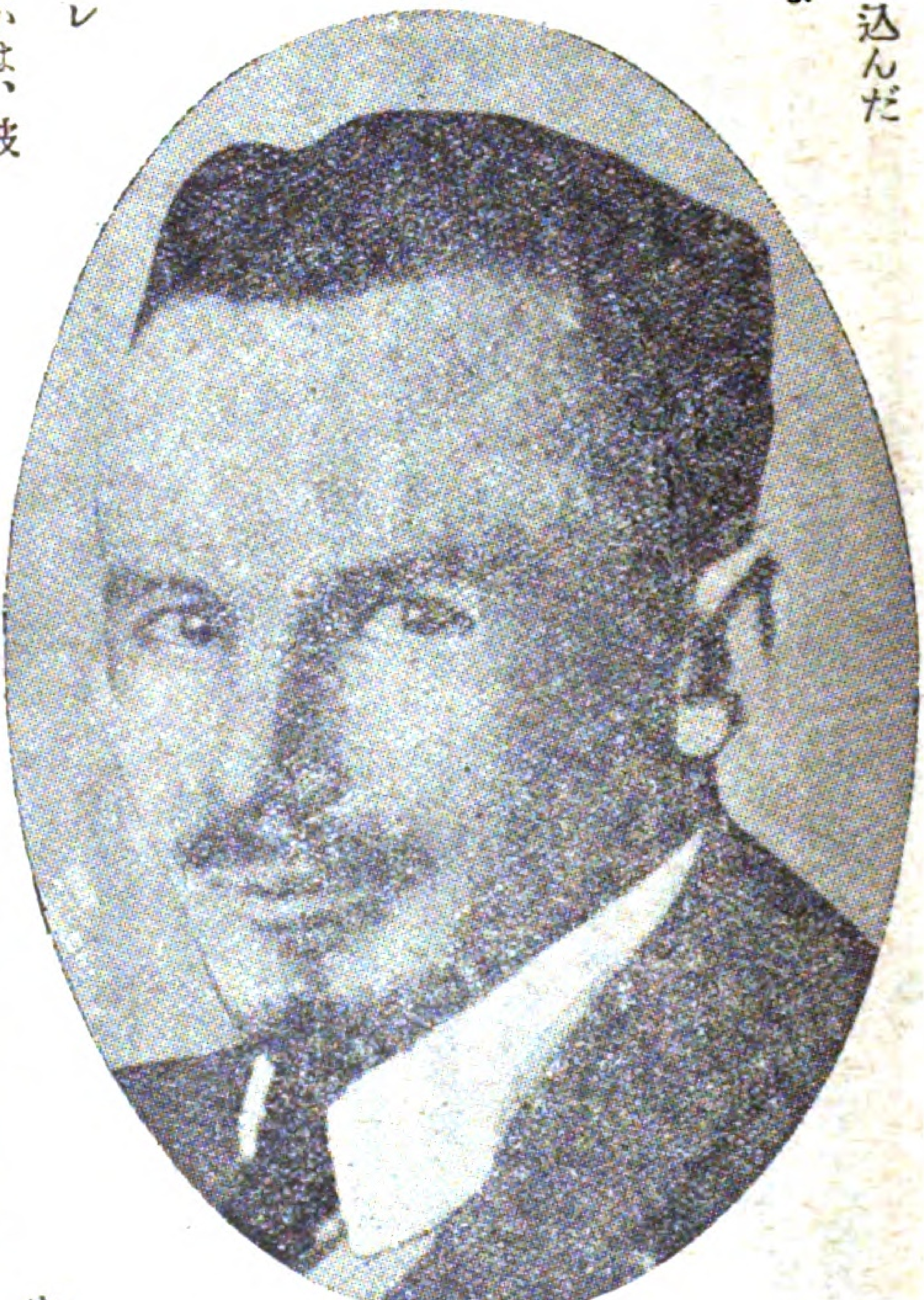
小學教師を父として生れたブハーリンが、未だ十歳に滿たぬ少年の頃に、レーニン等の革命黨――ロシア社會民主黨は組織せられた。全ロシアの社會的雰圍氣は強く一九〇五年革命を胎んでゐた。その一九〇五年革命が勃發した時、十八歳のブハーリンは、社會民主黨の青年學生團に投じた。そして翌年には早くもボルシェヴイキ黨モスカウ支部の宣傳部員として活躍し、大工場のストライキを成功的に指導してゐた。そして、その翌年にはすでに、モスカウ委員會の委員の一人

にあげられてゐる。

若きブハーリンの黨生活と革命鬪爭は、反革命と反動の暴風雨に抗してのみ續けられねばならなかつた。一九〇九年の春に、そして再び秋に、彼れは逮捕されてゐる。が、あくる一九一〇年末に、ボルシエヴイキ黨のモスカウ組織を襲つた大檢擧は、ブハーリンを、一九一一年の六月までモスカウ監獄にぶち込んだ後、北方ロシアへ流刑にしてしまつた。

◇

幸にも流刑地から脱走することに成功した彼れは、先づ獨逸に入込んだ。そして一九一二年の秋にはクラカウへ廻り、そこで初めてレーニンに會つた。二人は、この時はじめて親しく相見えたのである。レーニンが如何に彼れを信頼したかは、彼れが間もなくボルシエヴイキ黨の機關紙「プラヴダ」の主筆の地位についてレーニンと協力し始めた事によつて知られる。以來、ブハーリンは決してレーニンとの協力を斷たなかつた。彼れは、レーニンの最も信頼した同志の一人として、いかに遠隔の地にあつても頻繁な書信の往復によつて緊密な接觸を保つてゐた。



ブハーリン

一九一一年十月にロシアを脱出し、一九一七年三月の革命直後再びロシアに歸へるまでの亡命の六ケ年間に、ブハーリンは一貫した革命的活動の余力をもつて自己の革命的理論家としての確乎たる基礎をつくりあげてゐる。

ブハーリンが、「資本論」その他マルキシズムの基礎文獻を一通り讀破してしまつたのは、恐らく彼れの二十歳前の少年時代のことであつたであらう。そして恐らくその後、彼れの燃え立つ革命的熱情が、或は彼れを市街戰や大衆蜂起の中へと驅り立て、或は牢獄や流刑の寒地に自分を見出さしめ、或は脱走や流浪の危險に充ちた孤獨の旅を急がせた時、この青年鬪士は常に自己の行動を眞理の導く所に從はしめんがため、全身的な智識慾に燃えとほしたに違ひない。そして一見、自己當面の行動とかゝわりもない、ブルヂョア社會の基礎構成や運動の理論や法則を、マルクス＝エンゲルスの古典の泉から汲みつくさうとしてゐたに相違ない。

何故といつて、二十五歳のブハーリンが、クラカウからウイーンに移つて筆を執りはじめ、一ヶ年餘にして書きあげた理論的著作『金利生活者の經濟學』の機構と内容と學問的水準とが、何よりも雄辯にそれを語つてゐる。

メンガア＝ボエム・バヴエルクによつて理論的土臺を築かれた現代ブルヂョア經濟學の根本的徹底的批判として此の著作の右に出るものは未だないのである。

◇

この現代ブルヂョア經濟學批判の理論的著作が、いかなる環境の下に、いかに書かれたかについては、著者自らの語る所をきくがよい。

『（この）著作は、一九一四年の秋即ち世界戰爭の當初に、既に完成されてゐた。この序言は、同じ年の八月から九月頃に書かれた。

最近のブルヂョアジーの理論經濟學に對する組織的な批判を與へやうといふ考へが、ずつと前から私を勉強させてゐた。うまく追放から逃げ出すことが出來てから、私はその目的をもつてウイーンに行つた。私は同所で、今は故人となつたウイーン大學教授ボエム・バヴエルクの講義を聽いた。ウイーンの大學圖書館では、墺國の理論家達の文献を研究した。しかも私は、ウイーンで仕事を完結する譯にゆかなかつた。墺國政府は、戰爭の勃發前に私を要塞に監禁し、同時にこの秩序の保護者達は私の原稿を入念に檢閲してくれたからである。

私が追ひやられて行つたスイッツルにおいては、ロオザンヌ大學圖書館において、本場で「ローザンヌ學派」（ワルラス）及びそれ以前の國民經濟學者等を研究することが出來、從つて限界効用説をその根源にまで追跡することが出來た。同所で、私はまた、英米の國民經濟學をも細かに調べた。政治的活動が、私をストックホルムに行かしめたが、こゝでは、帝室圖書館と高等商業學校の特殊の國民經濟學文庫とが、私の、近時のブルヂョア國民經濟學の研究を、繼續することを得しめた。

私の逮捕とノルウエーへの追放とは、私を、クリスチヤニヤのノーベル・インステイチュート圖書館に移らしめた。アメリカへ渡つてからは、私は今や本場で、ニューヨーク公衆圖書館においてアメリカの國民經濟學文献を、更に精しく學び知ることが出來た。

原稿は、長い間クリスチヤニヤで見つからず、私の友人、ノルウエーのコンミユニスト、アルフイード・ハンセンの大變な骨折によつて辛うじて發見されて、一九一九年二月にソヴイエット・ロシアに屆けられた。私はたゞ、その原稿に、主として「英米學派」並びに最近の諸現象一般に關する若干の備考や註釋を書き加へたに過ぎない。』

◇

卒然として右の一文を讀む者は、――そして「監禁」、「逮捕」、「追放」等の簡單な、事もなげな言葉のうへを讀み辷つてそれらがあらはす嚴酷な生活事實を味讀しやうとしなかつた者は、ブハーリンが學問研究のために持つた多くの時間とよき機會とを羨むことに終つたかも知れぬ。だが、記憶せよ、研究に向けた彼れのエネルギーこゝには、彼

れの革命的闘爭の全的緊要の生活から拔け出したエキスであつた。それ以外のものでは決してなかつた。

ブハーリンは、有閑的に『正則の學問』をする機會を持つたのではなかつた。また、その必要もなかつた。一九〇七年――彼れの二十歳の秋――モスカウ大學に入りはしたが、彼れの時間と努力の大半は黨の活動に捧げてゐた。墺國においてレーニンとの直接の接觸が始まつてからも、そして前記の理論的著作に手を染めてからも、彼れの生活活動の中心は絕えず黨の仕事に置かれてゐた。彼れは、「プラヴダ」の外に、ボルシエヴイキ黨の合法的機關紙「プロスヴェスチェ・ニエ」の編輯を助けた。一九一二年には、黨代表として、ヘムニッツにおけるドイツ社會民主黨大會に臨んだ。また、ロシアに對しては、そのデューマにおけるボルシエヴィキ・フラクションの運動に參與し、メンシエヴィキ並びにトロッツキイストとの抗爭を續けた。開戰後、瑞西に行つてからは、眞の無產階級國際主義のために、ロシア及び各國の裏切社會主義者、「祖國防衞者」共に對する容赦なき闘爭を遂行した。第三インタナショナルの母胎となつたことによつて有名なチンマアワルド大會への雰圍氣と潮流とは、かくしてつくり出されたのであつた。一九一五年には、彼はスウエーデンに渡り、そこのヘルグランドに率ゐられた「チンマアワルド左翼」と結び、熾烈なる闘爭を開始した。そしてヘルダランドと共に逮捕され、ノルウェーに追放されるや、更にノルウェーの國際社會主義者等と手を握つて左翼闘爭を押進めた。

かゝるあひだにもブハーリンは、第二の理論的著作を準備してゐた。卽ち彼れが一九一五年に書きあげた「世界經濟と帝國主義」がそれである。レーニンは、此の論著のために長い序文を書いた。

「金利生活者の經濟學」の原稿がさうであつたやうに、「世界經濟と帝國主義」の原稿もまた決してやすくと上梓されて世に出る譯には行かなかつた。ブハーリンは言つてゐる――『この著書の原稿は外國からロシアに送られ、そこで檢閲の爪牙にかゝり、過つて他の出版所の手に渡つた。(一九一七年の)三月革命の後「それは發見された」。そこで七月に印刷に附されることになつてゐたのだが、我々の出版所を破壞した××××××と××とは、私の原稿を持つて行つてしまつた。その後久しくして私は、たとひ滅クチヤにされ破られてはゐても、私の原稿を遂に世に出すことが出來た。しかし、その際、私の感謝措く能はざる同志レーニンの序文、豐富な、そして極めて價値ある序文は、なくなつてしまつた。』

このレーニンの序文もまた、十二ヶ年もたつてから發見されはした。だが、こゝに吾々は讀者諸君と共に、かのレーニンやマルクスの如く、最高の人間的活動をば「世界を變革する」ために戰ひぬくことに見出したところの、偉大なる人々の理論的勞作が、最も絢爛なる理論的勞作が、――實はその原稿ならば必然的に最も穢はしき者の手において堙滅破壞の的たるであらうやうな勞作が、そもくいかなる動機と信念

との下に始められ續けられるかを再思してみる機會を持つ。例へばわがブハーリンはどうであつたか？　彼れにあつては、理論的勞作こそはまさに、いかなる環境、場面、事情の下においてもなし續けられねばならぬマルキスト的義務であつた。見よ、彼れは言ふ――『この著作（現代ブルジョア經濟學の批判）を、私がいま、歐洲の荒れ狂ふ内亂の一時期に當つて公けにするといふことは、或は妙に思へるかもしれぬ。だが、マルキストは、いかなる場合にも自己の理論的勞作を中止する義務はない、――最も尖鋭な階級闘爭の時期においてさへ、ただそうした勞作のための肉體的可能がありさへすれば。』と。

◇

一九一六年の十月、ブハーリンは、ノルウエーから大西洋を渡つて密かにニューヨークに上陸した。アメリカにおける彼の活動は、瑞西にあつたレーニンとの緊密な連絡の下に、或は「ノーヴイ・ミーヤ」（當時の米國における唯一の國際主義的革命的新聞）の主筆として筆をとり、或は組織宣傳者として米國各地を奔走しつゝ、ひたすら左翼結成を押進めることに傾注された。

◇

當時、世界戰爭の進行と共に各國のプロレタリア陣營内に生じたところの、「分離と結合」の必然的過程の進展、――第三インタナショナル結成の過程を、吾々は茲に想起しておく必要がある。

周知の如く、ブルジョア陣營に隨屬して愛國的社會主義者に、そして中間的な一派もまた、かの帝國主義戰爭の渦中にあつてブルジョア的「××の防衞」を合言葉とした。それはプロレタリアートの仇敵の××組織を防衞することを意味した。このことの論理的歸着は「階級間の休戰」の合言葉でなければならなかつた。そしてそれはブルジョアに對する一般的屈從を意味した。彼等は叫んだ、――吾々は何よりもまづ外國の敵と勝負を決しなければならぬ、すべてはそれからのことだ、と。

だが、世界戰爭の最初の日から、信頼すべき社會主義者の群は諸國に見出だされた。彼等は、「××の防衞」並びに「階級間の休戰」こそは、プロレタリアートの手足を縛るものであり、かゝるスローガンこそは、勞働階級に對する直接的な裏切りであるとした。就中ロシアにあつては、一九一四年に早くもボルシエヴイキは、ブルヂョアジーに對する休戰に斷乎として反對し、彼等に對してはたゞ不斷の闘爭――××××のみと叫んでゐた。ドイツにおいては、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグに率ゐられる同志の一團が登場した。古き社會黨の分裂は、その他の國においても生じた。スウエーデンでは、左翼社會黨とよばれた一派が擡頭し、ノルウエーにおいては「左翼」が黨の全指導權を握つた。イタリーの社會主義者は、戰時を通じ確乎たる階級的立場をもつて一貫した。

かくの如く、諸國において、×××左翼する諸黨が勢ひを得て來たここに、それらを糾合して國際的な統一的行動に導かんとする企てを

必然ならしめた。チンマアワルド及びキンタールにおける同志の[illegible]的大會は、かくして實に第三インタナショナルの礎石を据ゑたものである。だが、チンマアワルドで結ばれた國際的團結の内部にあつても、レーニンの指導下に結成された「チンマアワルド左翼」は、特に決定的行動の必要を強調し、カウツキーに率ゐられたチンマアワルド中間派を峻烈に批判した。

ロシアにおけるボルシエヴイキ革命の勝利、ソヴイエット權力樹立の後、ボルシエヴイキ黨は、「古く麗はしき戰鬪的黨名に立ちかへるべく」共産黨と改稱せられ、ドイツのスパルタカス團もその名をとつた。共産黨はいまや、ハンガリー、オーストリヤ、チエツコ・スラヴオキヤ、フインランドに、やがてフランスにもまた、相次いで結成を見た。米國においても中間派は左翼を除名し、左翼は戰鬪的共産黨に結成された。英國では二つの左翼團體の合同による共産黨の結成が進行した。

かく、直接の×××情勢を前に、左翼の中間派からの分離、それによる眞の×××プロレタリア黨の結成、及びそれらの諸黨の積極的發展こそは、新しきインタナショナル、×××インタナショナルの形成となつたのだ。そしてこの國際的左翼の結成、——これこそは實にまた、かの亡命のブハーリンが、一九一四年以來、スヰツツルに、スウエーデンに、ノルウエーに、またアメリカにおいて、レーニンの指導下に戰つて戰ひとつたものなることを知らねばならぬ。

◇

一九一[illegible]史的轉期を告げる警鐘の異常な旋律を世界の隅々におくつた時、勇躍してブハーリンはアメリカを去つた。そして太平洋を越え、この日本を經てモスカウへ急行した。かゝる旅上においても彼は、自國の軍隊に對する宣傳を怠らなかつた。そのためにしばしばメンシエヴイキの手に逮捕監禁されさへした。

すべての同志の歡喜のうちに迎へられたブハーリンは、直ちに黨のソヴイエット委員會並びにモスカウ委員會のメンバアであり、黨機關紙「ソシアル・デモクラット」の主筆であつた。そしてその持場から、右傾潮流に對する峻烈な鬪爭を開始した。更に、その夏の、動亂の全雰圍氣のうちに開かれた黨大會においては中央執行委員に選出せられ、四月のボルシエヴイキ大會にすでに現はれてゐたところの、當面の革命の性質並びに黨のとるべき行動に關する意見の對立が、秋に入つていよ〳〵深刻化した時、ブハーリンはレーニンと共に、敢然として動搖逡巡の徒と戰つた。

その時の問題は、三月革命を口火としてロシアに展開しつゝあつた革命の本質及びプロレタリア勝利の見透しにかゝつてゐた。

カメネフ、ジノヴイエフ、トロツキー等は主張してゐた、—ロシアにおける資本主義の發達はなほ甚だおくれ、それ自身としては社會主義社會建設の條件を缺いてゐる。ロシア無產階級は數において極めて少なく、人口の壓倒的多數は農民である。したがつてこの革命は本質

においてどこまでもブルヂョア民主主義革命である。微力なロシア・プロレタリアートは、革命の主勢力たる農民の支持を失ふや否や敗北する。しかるにいま、プロレタリア黨が政權を奪取してプロレタリア權力を樹立し、社會主義革命に進出することは、社會主義的無産階級に對する民主々義的小ブルヂョア的農民の衝突、反抗、蜂起を必然ならしめる。それこそ、今日までの一切の革命的成果の埋設に、否なプロレタリア黨そのものの破滅に向つて進むものではないか。

これに對してレーニン、ブハーリン等は主張した、――ロシア資本主義の發達はなほ甚だおくれてゐるにも拘らず、この革命の特殊の具體的諸條件は、直ちに無産階級權力の樹立による社會主義革命への出發を可能、必要ならしめてゐる。第一に、この革命は國際的な帝國主義戰爭から生じたといふ特殊條件を持つ。第二、おくれたるロシア經濟のうちにも、革命的社會主義的建設の運動の出發點と爲し、根據地と爲すに足る物質的條件が具はつてゐる。第三、ロシア・プロレタリアートは少數で微力なるにも拘らず、ロシア・ブルヂョアジーもまた極めて弱く、且つロシアには、かのマルクスが無産階級勝利のための最も有利な條件と見做したところの、「プロレタリア革命と農民戰爭と」の特異の結びつきが存在する。從つてこの革命は、あきらかにブルヂョア民主主義革命として始まり、またその性質を帶びつゝ進行するとはいへ、一切の主觀的及び客觀的條件によつてそれはプロレタリアの社會主義革命へと轉化し發展する必然性をもつてゐる。言ひかへれば、ロシア無産階級は、無産階級權力のもとに、農民多數の協力を得ることが出來、このブロックの基礎の上に社會主義的建設は可能であり、同時に一方、諸國の無産階級の國際的支持を得て世界××を進行せしめ得るものである。故に、ロシア・プロレタリアートは今や直ちに起つて政權を奪取し、社會主義革命への具體的一歩を踏み出さねばならぬ。

この、レーニン＝ブハーリンの主張の勝利は、そしてその輝ける結實は、今や偉大なる歷史的事實として周知のものである。

反對意見を唱へたものも、人によつて異る結論を持ち、且つ異なる行動をとつた。トロツキーは言つた、――内在的諸原因によつて破滅は不可避的であるとはいへ、恐らく西歐プロレタリアートは結局その國家的援助を吾々におくるであらう。されば、前進せよ！　かくして彼はレーニンやブハーリンと共に十一月革命の先頭に立つた。しかし、カメネフやジノヴィエフは言つた、――内在的な諸勢力の結びつきにより、破滅がすでに不可避的であるとすれば、この際の慌たゞしき進出は無用である。されば、退却せよ！　かくして彼等はボルシエヴイキ黨の政權奪取と同時にその中央執行委員を辭任し、革命的大進軍の尻について行つた。

一方、あの「世界を搖り動かした十日間」の最も劇的な一齣として、「國民議會」の解散が强行される時、その全光景を歷史的な演說をもつて飾るべく、まさに新たな權力者ボルシエヴイキ黨の名において演

場に立つた者は、二十九歳の闘士ブハーリンであつた。

◇

ソヴイエット政權の中心人物の一人となつてからも、ブハーリンの活動は主として第三インタナショナルの分野において續けられた。

一九一七年から一八年にかけて、變裝のブハーリンは幾度びか諸外國の同志の間に見出だされた。例へば彼は、ドイツにおいてはリープクネヒトに會ひ、スパルタキストとボルシエヴイキとの緊密な連繋をつくり出したが、一九一八年のドイツ革命の數日前にロシア公使等と共にドイツから放逐された。間もなく彼は、獨逸ソヴイエット大會にロシア代表の一行と共に賓客として招かれたが、途上、ドイツ軍閥の徒に逮捕せられ、辛うじて死を免れた。また、一九二二年には、いはゆる「三つのインタナショナルの會議」——ベルリンに開かれた——に出席し、一九二三年にはノルウエーに渡り、トラウメル派と抗爭した。

他方、一九一九年三月に第三インタナショナルが正式に創立されてからは、世界大會の度每に、その最高の理論的指導者としてのブハーリンの足跡は太くのこされてゐる。第二回大會においては、「議會主義」に關する彼れの報告が光つてゐる。第三回大會における彼れは、コミンテルンの戰術に關する論爭の先頭に立ち、レヴイ、ゴルテル等の右翼分子と鬪つた。第四回大會において「綱領問題」に關する長大な理論的報告をなし、綱領草案を起草した彼れは、次ぎの大會において再び綱領問題を取上げ、一方ではラデック＝ブランドラーの右翼的偏向に、他方ではボルディガの極左的偏向に對して鬪爭し、一九二二年に書かれたる農業＝農民問題に關するコミンテルンのテーゼ、ドイツ極左翼に與へた ECCI の公開狀もまたブハーリンの筆に成る。その後の彼れの勞作——英國總能業及び支那問題に關する諸テーゼの如きはなほ讀者の記憶に鮮やかであらう。

第三インタナショナルの最高指導部におけるブハーリンの地位と役割とは、一九二六——七年の交から特に重要を加へて來た。ジノヴイエフが、プレジデントの地位を退いて後、名稱こそは廢されたが、ブハーリンは事實その他位にある。

◇

ブハーリンは、マルクス主義指導者として、自らも認めてゐるところの若干の誤謬を犯してゐる。

彼れは、一九一五年には、「民族自決」の問題に關し、ピアタナフと共にレーニンの見解に反對した。それは、農民の役割の過小評價に基いた誤謬であり、その誤謬が更に一九一八年には稍や形を變へ、レーニンのブレスト・リトウイスク平和條約に對する反對運動といふ極左翼的誤謬となつて現れた。

一九一二年の末以來、ずつと「プラヴダ」の主筆であつた彼れも、このブレスト條約に對する反對運動を指導した期間だけはその地位を捨てゝゐた。しかし、誤謬を自認して之れを淸算するや否や、再び「プラヴダ」に歸り、爾來今日に至るまでその主筆である。

三度目の誤謬は、一九二一年、勞農ロシアにおける勞働組合政策に關する政治的論爭において、彼れがレーニンの主張とトロッキーの主張との中間に立ち、折衷主義の緩衝的理論を唱へたことである。が、此の誤謬をも彼れは間もなく清算した。

◇

『ニコライ・ブハーリンの著書の科學的意義は、彼が、或る全體としての帝國主義、最高度に發達せる資本主義の一定の發展段階としての帝國主義に關聯せる世界經濟の、最も重要なる事實を研究した點にある。』――このレーニンの言葉は、吾々が前に言及したブハーリンの第二の著作『世界經濟と帝國主義』に對して述べられた。

右は一九一五年の作である。一九一七年の大革命の後、僅かに息つく暇を得るや否や、ブハーリンは矢繼ぎ早やに三つの著書を書きあげた。一九一九年の『ABC・オブ・コンミユニズム』と、一九二〇年の『轉形期經濟學』と、それから一九二一年の『史的唯物論』と。

『ABC・オヴ・コンミユニズム』は、プロブラジエンスキとの共著であるが、大半はブハーリンが書いてゐる。此の書物は、プロレタリア政權のロシアにおいて、また第三インタナショナル創立後の各國において、コンミユニズムの戰列に加はる新しき若き同志が急激に増大したる事實に面し、これらの同志にマルキシズムの基礎智識を與へる目的をもつて書かれた。從つて、それは、謂ゆる入門書に屬するものである。[illegible]つてうかゞはれる。基本的一般的理論を、やさしくわかり易く書きあらわすことは、それがゴマ化しでない限り、誰れにも出來ることでは決してない。英國共産黨の最も信頼されてゐる指導者、トーマス・ベルは、此の書物を讀み、文字通り卷をおくことが出來なかつた。彼れは全卷を讀み返した。更に三讀し、四讀した。そして彼れが最も敬愛してゐた同志の一女性に言つた、――『此の本を君にあげやう。君への贈り物として、これ以上のものを考へることは出來ない。すばらしい書物だ！』

『轉形期經濟學』は、資本主義社會から社會主義社會への轉形過程を理論的に分析したマルキスト的勞作である。レーニンは、本書の內容に對しては若干の批判を加へてゐる。が、それにも拘らず、最も興味あり價値ある著述であると激賞した。

『史的唯物論』は、『ABC・オヴ・コンミユニズム』と同樣の目的をもつて、その姉妹篇として書かれた。本書は、全體としてマルキシズムにおける最も基礎的なもの、マルクスの哲學、社會學のポピユラー・エデイションではあるが、しかし多くの點において更にそれらを發展せしめ、新しき規定をうち立ててゐる。また、表現のスタイルの優秀さにおいては、たしかに他の追隨を許さない。

ブハーリンの獨創性を見度いものは、就中、『轉形期經濟學』を讀むがよい。彼れの博學さに打たれたいものに、就中、『史的唯物論』を[illegible]

する[illegible]るものは、ローザ・ルクセンブルグに對する彼れのポレミーク『帝國主義と資本蓄積』に行くべきである。

吾々はさきに、多くのパンフレットが彼れによつて書かれてゐると言つた。その代表的なものとしては、『露西亞における階級鬪爭と革命』、『共產主義者綱領』、『革命の假面をつけたカイザリズム』、『國際的ブルヂョアジーと其使徒カウツキー』等をあげ得る。最近數年間に書いたものには、農民問題に關するもの、ロシア共產黨「反對派」を批判したものが多い。例へば「社會主義への道と勞働者＝農民の同盟」。

これらすべてに加へて、讀者諸君がもし毎月の『インタナチオナーレ』を、毎週の『インプレコール』を、また毎日の『プラヴダ』を一瞥するならば、まさに論文の濆湧泉としてのブハーリンを見出すだらう。しかもそれらのいちく\が今や、勞農ロシア幾百萬の勞働者農民の、更に世界各國幾千萬の勞働者農民の解放鬪爭の、指針としての役割を演ずる！

マルキストとして彼れは今や世界的指導者である。

◇

『自然と歷史』は往々にして、『巨大なる理智と、非人間的意思と、個人的勇氣と、かの選ばれた人のみが持つ珍らしき人間味』とを、肉體的外觀の極めて凡庸な個人のうちに、『目ざましく結合』して見せる。わがブハーリンもまた此の例に近い。一九一七年の四月の或る日、歸國の途にあるロシアの一社會主義者であるといつて、日本の社會主義者堺利彥氏を訪ひ、氏の許に一泊して去つた二十代の若者が、數年後[illegible]づら」のことなのである。ブハーリンは、レーニンと同じやうな[illegible]で、しかもレーニンほどの風貌も、また岩疊さも持たない。[illegible]その毛皮外套（シューバ）に包まれた時の彼れは、人をして——恐らくは彼れ[illegible]んだ彼れ人のやうな——田舍學校の教師を思はせる。ルバシカを[illegible]々しい彈力や——その姿でいつもオフィスで仕事する彼れ——は、或る敏捷さをその身ごなしに感じさせても、それは「世界的指導者」の代りに寧ろ何處かの學生を思はせる。人によつては、彼れの双眼のうちにさへ、インテリヂエントといふよりは寧ろミスチヴアスを見るだらう。事實において彼れはすばらしいいたづらをする。

アメリカの婦人記者がブハーリンをオフィスに訪ひ、「新經濟政策」のことを話せと迫つて止まなかつた。彼れは、「たゞ新經濟政策のこと」といふのでなく、新經濟政策に關する多くの問題のどれか一つをあげてくれなくては、と——室內を歩きながら相手になつてゐたが、頭のよくない婦人記者は、たゞ「新經濟政策のこと」で頑張つてゐた。そこで彼れは、折柄迷ひ込んで來た小猫をヒヨイとつまみあげ、そいつを婦人記者の手に抱かせてしまつた。君はこれが欲しいのだ、と言はぬばかりに。

もつとひどいのは、レヴイーがモスカウに來た時である。レヴイーを中心に、レーニンを始めコミンテルンの首領達がみな集つてゐた。そしてレヴイーに對する駁撃と、彼れのトンチンカンの長廣舌とで論戰の火花が散り、いつ果つべくも見えなかつた。そんな場面でブハーリ

ンは何をしたか？　小供にうんこをやらせるための穴のあいた小椅子にレヴイーが掛けてまさにそれをやつてる漫畫を書きあげてみんなに廻した。漫畫にはかう書いてある——Levi is making things clear!

◇

トロツキーの熱辯、特異の旋律を持つた男性的な美音、謂はゞ「堂に入つた」演説を、全聽衆は畏敬をもつて聽いたとしやう。そしてその次にブハーリンが演壇に立つたとしやう。彼れの低音と小躯とが目だつ。おまけに彼れは無雜作にあちこちと演壇を歩き、抑揚もなく話してゐるではないか。だが、聽衆は最も親しみのある熱心さで聽き入つてゐる。そして嵐のやうな拍手を送る。

・ブハーリンは、事實、彼れの同僚の誰れよりも、すべての同志から親しみを持たれてゐるのだ。ひとり彼れのみが、「ブハルチキ」といふ愛撫的な名で呼ばれてゐるではないか。それは、勞農ロシアの首領中彼れのみが持つ人間的特權でなければならぬ。曾つて彼れは、感ずる所あつて禁煙を際明し、黨内の禁煙同盟に加盟した。と、不思議にも彼れの寫眞が雜誌に載つた。見よ、彼れは煙草をくわへてゐる。——みんなが笑つた、——眞に同志的な笑ひを。

一人間としての彼れは、では何を愛し好んでゐるだらう？　曰く自然、曰く子供、曰く動物。そして彼れの性的純潔と貞操とに至つてはすべての同志が口を揃へて保證する。

◇

勞農ロシアにおける社會革命の進展の見透しに關する前記の如き根本的な見解の[illegible]る「ロシア共産黨の內紛」の一要因をなしてゐる。

現に第三インタナショナルの最高指導者であるブハーリンは、組織の性質上必然的にまたロシア共産黨の中心勢力をなさねばならぬ。事實において彼れは、そのZKにおいて、ポリト・ビユローにおいて、最も重きをなす一人である。そして彼れこそはいまロシア革命の進展の見透しをレーニンの線に沿うて把握し、その社會主義的建設の偉業のために最も緊張した努力を捧げつゝある。

レーニンは言つた、——『ブハーリンは、黨內の最も尊重すべき理論家であり、また事實において最大の理論家であると同時に、全黨員から最も愛されてゐることは公平に言つて事實である。けれども、ブハーリンの理論が眞にマルキスト的理論であるかどうかには大なる疑ひがある。といふのは、彼れにはどうしても何かしら學究的なものがつき纒つて離れない。彼れは辯證法なるものもあまり勉強したことがないやうであり、またあつてもよく理解し得なかつたもののやうである。』

かやうにレーニンが述べた時には、恐らくはその直前のかの勞農ロシア勞働組合政策の論爭におけるブハーリンを強く思ひ浮べてゐたのであらう。だが、それはもはや七年前のことである。そしてこの七年間におけるブハーリンの眼ざましき理論的進境は、主として政治の分野及び辯證法的思考の方向において遂げられてゐる。

吾々は安んじて言ふことが出來やう、——ブハーリン、彼れ

時評

田中内閣の尺蠖的豫算

山川均

第五十六議會は、政友會内閣がその政策をもつて議會に臨む最初の機會であるといふ。この内閣が過去の二つの議會に、政策ならざる如何なる物をもつて臨んだかは、すべての國民が知つてゐる。

この政策は、勢ひ豫算のうちに具體化されてゐる。

この豫算を一瞥して、貧乏な民衆は、いつもながらその尨大なことに驚かされる。最近數年來、國費節減の聲を聞かなかつた年はない。そして出來上がつたものが、『空前の大豫算』でなかつた年は殆んどない。それは空前であるが、決して絶後ではない。田中内閣の政策を具體化した明年度の豫算も、忠實にこの傳統を守つてゐる。追加豫算を除いても、すでに四千三百萬圓の空前振りを示してゐる。これは田中内閣の財政が、無い袖は振れぬと云ひつゝも、この無い袖をちぎれるほど振つたことを意味してゐる。田中首相によると、明年度の豫算は積極政策のための緊縮政策であり、大に伸びんがために先づ縮ちまる尺蠖的豫算だそうである。しかし尺蠖は伸びんがために縮ちまるように、縮ちまらんがために伸びるとも云ひ得られる。無い袖を振り切るまで無理算段をした空前の大豫算は、伸びんがために先づ縮まつた尺蠖的豫算といふよりも、財政的破綻の大なる退縮に向つて急がんがために、少しばかり伸びようとする尺蠖豫算であると云つた方がよい。

田中内閣の財政々策は、伸びんがためにどれだけ縮ぢまつたらうか。豫算に現はれた經費の節減は、事業の繰り延べ（これは固より節減ではない）をも入れて、八百萬圓であつて、豫算總額の僅かに千分の四・五にすぎぬ。これに反して、縮ぢまらんがために無理矢理に伸びた新事業費は、一億三千萬圓に達してゐる。政府はこの一億三千萬圓の無い袖を振るために、さすがに新税をおこしたり、増税を斷行しようと云ふほどの勇氣はなく、二億の公債増發や、ありたけの剩餘金をはたき出して、辛うじて辻褄を合せてゐる。しかし剩餘金といへども、國庫の中で獨りで湧き出たものではない。それは究極において、生産階級の過去の負擔にほかならぬ。また公債による國家の借錢は、究極においては、生産階級の未來の負擔によつて尻拭ひをしなければならぬ。

この事業費がどのように使はれてゐるかといふと、繼續事業の追加増額をも合せると、驚く勿れ、二百十數項目に上ぼる新規事業の間にばら撒かれてゐる。これらの項目のうちで勞働者の福利に關係のあるもの、健康保險寄附金の増額四十五萬圓をほかにしては、遞信省所管の通信現業員勞働條件改善費、郵便現業員二十四時間連續勤務制改善費、通信現業員休暇付與費の三百七十萬圓などを引き去ると、相變らず陸海軍で總額の二割に近い二千五百萬圓を占めてゐる。同じく二千四百萬圓を占める内務省所管の新規事業は、謂ゆる新規事業の性質を最もよく代表したものであつて、そこには十五萬圓、二十[illegible]九つの築港修築が頭を揃へてゐる。これらの新規事業なるものは、頭も何十萬圓でゞも二十萬圓でゞも、文字通りに唯だ申譯の頭だけをのぞけてゐるのであつて、數年または十數年に亘るこれらの繼續事業の財源がどこから出て來るかを心配することは、固より田中内閣の任務とするところではない。あとは野となつても山となつてもよい。差し當つて『肥料』は分配しなければならぬ。政黨の地盤を肥沃にするための速効肥料は、出來得るかぎり廣い面積に、出來得るかぎり多くの方面に、振り撒かれねばならぬ。

明年度の豫算もまた、第一には、一方には緊縮の必要が痛感せられつゝ、殆んど不可抗的な（既成政黨に取つては不可抗的な）力によつて、國費は急速に膨脹してゆくといふ、奇異にして而かも奇異とするに足りない事實を、もう一度新たに證據だてゝゐる。第二には、その結果として、これに應ずるための財源は、愈々ます／＼不健全な糊塗的な方法に訴へられ、國家財政の基礎が、愈々ます／＼脆弱なものとなつてゐることとである。その影響が、一般經濟生活の上に、どのように作用するかは想像するにかたくない。第三には、政府は『經濟界の現況に照し歳入の増收を見積るの餘地乏し』きことを承認し、現に所得税、地租、營業收益税等々の減收を見込んでゐるにも拘らず、砂糖消費税、織物消費税、關税などは出來得るかぎりの増收を見込んでゐる[illegible]これ、一方に公[illegible]

き、これを一方[illegible]であるか、[illegible]これに照應した緊縮の伴はぬ限りは、これは單なる負擔の輕減ではなくて、或る階級または社會層の負擔を輕減して、これを他の階級または社會層の上に轉嫁することを意味してゐる。かような富の分配に對する干渉が、いつでも一般大衆を犧牲として行はれてゐることは云ふまでもない。

日本大衆黨の成立

日勞、日農、無産大衆黨の三つの全國的政黨と、四つの地方政黨との合同によつて、日本大衆黨の組織せられたことは、無産者政治運動における昭和三年掉尾の出來事として、また昭和元年—二年をもつて最高潮に上りつめた分裂への傾向が、二年—三年に至つて合同への傾向に轉じたこの新運動の小決算として、特に記錄せられるに足る重要性をもつてゐる。

この七黨合同は、多くの人々によつて、『中間派政黨』ないしは『中間黨』の『結成』と名づけられてゐる。最近、『中間』と『結成』といふ言葉ほど、極めて漠然とした不精確な意味をもつて、流行的に濫用せられてゐる言葉はない。假りに社會民衆黨の社會民主主義を右翼とし、新黨準備會のコムミユニズム（!?）を左翼とするならば、この二つの翼のいづれにも屬せぬ要素は、あたかもその『中間』にあるものゝ如くに見える。けれども、事實は必ずしもさうでない。大衆の壓倒的[illegible]は、[illegible]主々義者でもない。彼らは唯だ、無産者としての、眼前の具體的な利害をもつてゐる。これらの大衆に、社會民主主義とコムミユニズムとの中間に立つといふよりも、或る意味においては、社會民主主義よりも右に立つとさへも云ふことができる。もつと精確に云へば、これらの大衆の意識は、社會民主主義とコムミユニズムとに分化する遙か以前の段階に立つてゐる。それは社會民主主義ないしはコムミユニズムによつて濾過せられるに至らない前の、生のまゝなる無産者的要求にほかならぬ。單一無産政黨といふ場合の大衆的政黨とは、かような生のまゝなる無産者的要求を、適切に代表し得る政黨である。かような意義と性質とをもつた大衆的政黨は、たとへば數年前のドイツにおいて、獨立社會民主黨が、共産黨と社會民主黨との『中間』に立つところの『中間派黨』であつたといふのと同一の意味をもつて、中間派政黨と名づけることはできぬ。

さらに新たに組織せられた日本大衆黨の、中央及び地方における謂ゆる指導的な分子について見るならば、社會民主主義よりも左に立つ多くの人々を見ると同時に、社會民主黨の謂ゆる『右翼的指導』と、その見解において何らの相異のない要素を見るばかりでなく、明らかに、それよりも更に右に立つところの人々さへもある。

これを合同前の各政黨について見るならば、たとへば日本農民黨は、無産政黨と稱する諸分派のうちの、極右に立つ黨派と見做されて

ゐた。ことにこの政黨は、『農民は農民黨へ』を標語とし、この指導精神の上から、原則的に、他の工業勞働者を包容する政黨との合同を不可能とするかの如くであつた。この日本農民黨が、僅々數ケ月のうちに、この原則的な態度を一變して七黨合同に加はつたことは、唯だ單にその指導者の定見や守操の上の問題としてのみ解釋することはできぬ。かような指導精神の上に立つ極右黨と見做された日本農民黨が、それよりも一つ左に立つてゐる筈の社會民衆黨を飛び越へて、そのもう一つ左に立つてゐる日勞黨や無産大衆黨と合同し得たといふ事實は、無産諸政黨の少數指導者によつて掲げられてゐる謂ゆる『指導精神』なるものを（その輝やけると褪れるとを問はず！）その額面通りに、それ／＼の政黨の性質と見ることが、如何に皮相の見解であるかといふこと、そして社會民主主義の政黨、中間派の政黨等々と烙印せられた黨派も、少なくとも今日までは、なほ性質の固定した社會民主主義黨ないしは中間派黨等々ではないといふ吾々の主張を、如實に立證したものだと云つてよい。

かように新生の日本大衆黨は、しば／＼中間派黨と名づけられてゐるにも拘らず、事實においては、明らかにこの稱呼を裏切つてゐる。これは黨員大衆の場合には無論のことであるが（黨員大衆の場合には、社會民衆黨といへども、勞農黨といへども略ぼ同一であつて、決して純一な要素によつて成り立つてゐるものではないが）、さらに中央及び地方の指導分子について見ても、そのうちには、右翼的傾向から左翼的傾向にいたるあらゆる色合ひを含んでゐる。この點では、日本大衆黨は、曾ての勞農黨よりも、現在の社會民衆黨よりも、その内容が一層純一でないと云ふことができる。

日本大衆黨のかういふ性質こそ、この政黨の成立に、單一無産政黨形成の過程における特に重要な意義を持たしめる。單一政黨が可能であるか不可能であるかといふことは、かように政治上の意識においては必ずしも純一でない諸要素が、ブルジョアジーの政權に對する反對勢力として作用してゐるといふ共通の方向によつて、一つの政黨に組織せられることが可能であるか、不可能であるかといふことである。さらに言葉をかへて云へば、ブルジョア政治に對する無産大衆の當面現實の要求のために、社會民主黨でもない、コムミュニスト黨でもない、またドイツの獨立社會民主黨（中間派黨）でもない大衆的政黨が可能であるかどうかといふことである。そこで若し、單一無産政黨が實現せられるとするならば、その内容は必然に純一でない要素、即ち右翼から左翼にいたるあらゆる色合の要素を包容するものでなければならぬ。この點では、日本大衆黨は將來における（若し將來に實現せられるなら）單一無産政黨を豫示するものであり、その縮圖となるべき性質をもつてゐる。

これに反して、日本大衆黨が左翼政黨に變質し、もしくは右翼政黨に變質したならば、この政黨が、單一政黨形成の過程における、特殊にして重要な性質と任務とを失つたものである。その如く、日本大衆

黨が、最も完全な意味での中間主義の政黨として固定するならば、この黨合にも、同じくこの政黨が、全無産政黨の合同による單一政黨なる立黨の精神と、大衆に對するその約束とを放棄することを意味してゐる。

日本大衆黨はその立黨の宣言において、『眞に大衆の要望するものは、全無産政黨の合同であり、單一無産政黨の樹立である。いま我々無産諸政黨は、これが實現の具體的な第一歩として、こゝに先づ可能なる範圍の合同を決行したものである。從つて我々無産諸政黨は、更に殘されたる爾餘の無産政黨をも含めたる全合同による單一無産政黨の實現を期しつゝ、これが促進の拍車たらんとするものである。有力なる無産政黨の中軸となる合同は今やなつた。更に全無産政黨の大合同の展望と槓杆も與へられた……』ことを、全無産大衆の前に誓言した。そして日本大衆黨が單一政黨實現のための『拍車』となり、この機運の展開する『中軸』となり、この形勢を動かす『槓杆』たる作用を失はないためには、日本大衆黨は、右翼的傾向から左翼的傾向にいたるすべての傾向を包容し、これをブルジョア政權に對する共通の反對勢力として結合するところの、文字通りの大衆的政黨の性質を保存しなければならぬ。

いかにその内容の純一な團體の内部にも、必ず左右兩翼がある。これは各國の共産黨や社會民主黨の内部に、ほどんど例外なく、左右兩翼のあることによつて知ることができる。何が左翼であり何が右翼であるかは、決して一定した性質と分量ではなくて、時と處とによつて變化する性質と分量であつて、左右兩翼を分かつ分界線もまた、勢ひ固定した線ではなくて、常に變動する。或る形勢の下においては、左翼と右翼といふことが、精密に、コムミユニズムと社會民主主義との二つの『主義』に符合があるにはちがひない。けれども左右兩翼といふ言葉の本來の意義を、固定した『主義』であるかの如く考へるのは、根本的に誤つてゐる。そこで前述のような、變化する性質と分量としての左右兩翼は、大衆的政黨の内部に當然に存在することは云ふまでもない。かような意味での左右兩翼の存在を認容せぬことは、單一政黨の可能を、絶對的に否認することを意味してゐる。

そこで單一無産政黨は、從つて單一無産政黨の實現を主要な使命としてゐる日本大衆黨は、かゝる左右兩翼を包容しつゝ、なほこれを結合するに足る強靱な、彈力ある組織でなければならぬ。今日までに、内部的な對立のために日本大衆黨の前途を悲觀し、若しくはこれを期待して喜んでゐる人々がある。無産大衆黨がこの困難を克服するためには、少なくとも、三つの條件が必要である。第一には、黨内におけるデモクラシーの確立である。第二には、特に黨の指導分子（右翼的分子も左翼的分子も）が、大衆的政黨の性質と任務とに對する理解を明確にすることである。第三には、團體的訓練である。團體訓練の缺如が、過去における多くの不幸な分裂の原因となつたことは、爭ふことができぬ。多くは右翼的分子の間に見るところの、反對少數派の存

在を寛容することのできない狹量と、多くは左翼分子の間に見るところの、少數派的存在に忍耐することのできない焦躁とは、均しく團體的行動の訓練の缺如が生んだ双生兒である。自己の主張が差徹しないと忽ち旗を卷いて去るといふ態度も、主張に對する忠實と勇敢とを立證するものではなくて、却つて團體的訓練の缺乏を告白する以外の何ものでもない。

新黨準備會の解散

舊勞農黨大衆の一部分は、悪戰苦鬪のうちにも、新黨準備會を積極的に支持して來た。更に他の大部分は、他の無產政黨への加入を差し控へることによつて、消極的に新黨準備會を支持してゐた（これらの要素のうちのかなりの部分は、政治上の無關心に陷入つたゝめに、かやうな消極的態度を取るに至つたといふ重大にして顯著な事實は、しばらく別として）。そしてこれらの舊勞農黨大衆が新黨準備會を支持し來つたのは、少數の指導分子は別として、その壓倒的な多數にとつては、新黨準備會が約束する舊勞農黨の再建に、一切の希望を懸けたからにほかならぬ。

舊勞農黨の再建に對する新黨準備會の態度と方針とは、幾度びか變化動搖し、その指導精神の極端な機會主義的性質を暴露したにも拘らず、遂に大衆的な合法政黨樹立の方針を確定するに至つたことは、かゝる大衆の要求が、一部の[illegible]的整理に打ち勝つたことを意味するものであつて、吾々は新黨準備會のために慶賀するばかりでなく、政治戰線統一への一歩としても、熱心にこれを歡迎した。

しかるに、この時すでに新黨準備會の內部には、全く反對の潮流が流れてゐた。十月下旬に開かれた新黨準備會代表者會議の合法政黨樹立の決定は、この思潮に對して、大衆の要求が勝利を得たことを意味してゐた。しかるにこの思潮は、代表者會議の決定後、再び猛然として勢ひを得たばかりでなく、その見解は一そう明白にして決定的な形を取つてきた。いま公けに發表せられた文書によると、その主張は、大凡そ次の諸點に歸着する。

『（一）（舊）勞農黨は×××ではない、と同時に、勞農黨は政黨とも言ふべきものでない、勞農黨が無產政黨として生じ、またそれであるかの如く見られたのは、我國の×××が解黨派的であり、セクトに立脚してゐたからである。』

（二）では舊勞農黨は一體何だつたのか？『正確に言ふならば』、舊勞農黨は無產政黨ではなくて、『×××の活動によつて動員された（動員する、ではない）鬪爭團——即ち種々なる政治要求の鬪爭が政治的自由獲得、即ち××者××の××樹立のスローガンの下に結集したる鬪爭の實體』である。

（三）『×××以外に無產政黨はあり得ない。』從つてまた『政黨としての合法性を獲得する必要あるのは正に×××であつて、それ以外の政黨ではない。新黨準備會が合法政黨たらんとするのは、『×××以外に

無產政黨を組織せんとするものであるといふ點で、根本的な誤謬を犯した』ものである。

（四）新黨準備會は、合法政黨化すべきものではなく、『鬪爭の實體』として發展せしめねばならぬ。

この思潮は、最近の新勞農黨創立大會の直前に迫つて急激に勢力を加へ、大會は完全に、この思潮に指導せられたかの觀があつた。謂ゆる『玉砕主義』はこの思潮の表現にほかならぬ。

しかしながら、若しこの理論（？）が正しいとしたならば、新黨準備會はまさに十二月二十二日をもつて、『根本的な誤謬』と眞理との、岐路に立たしめられてゐたことになる。新黨準備會は、一歩間違へば結黨といふ誤謬の奈落に轉落する危機一髪のところにあつた。十二月二十二日、全國の舊勞農黨大衆は、この誤謬への墜落を翹望して東京を見つめてゐた！　そして新黨準備會の結黨を慶賀した吾々は、まさしくこの誤謬を慶賀してゐたものなのである！　そして獨り『田中反動內閣』だけが、新黨準備會をその恐るべき原理的な誤謬から救ふことに、效果ある協力をしたのだといふことになる！

けれども、更らにこれよりも重大なことは、新黨準備會の結黨が妨げられた結果として、まづ差當り、無產者政治運動の戰線統一の實現が、どのような影響を蒙るかといふことである。新黨準備會が取らんとする今後の方針については、吾々は固より知ることができぬ。けれども十二月二十四日の、、に對する準備會の檄文は、『凡ゆる方法を以つて組織の實體を確立することに努力せられてゐる、この『組織』が政黨を指すものではなくて、先きに引用した代表的な文書に現はれてゐる『實體』を指すものであることは、ほゞ推測することができる。かゝる指導原理の上に立つ以上は、この『實體』が如何に成功的に確立せられようとも、舊準備會が再び原則的な誤謬に陷入らないかぎり、それは政黨ではあり得ない。從つて舊勞農黨の大衆を政黨の形で再組織する努力（この誤謬！）は、田中內閣の彈壓を機會に、永久に放棄せられるかも知れぬ。その結果は、いふまでもなく、舊新黨準備會の影響下にある大衆と、その他の無產政黨とが團體的全體的に合同する機會は、永久に失はれることゝなる。新黨準備會は、かつて無產政黨に向つて、しば〳〵合同を提議した。けれども『政黨』の合同が問題となつてゐる範圍內においては、いまだ『政黨』ならざる準備會との合同なるものは、固より問題となり得ない。ことに合同を欲せざる人々に取つては、これは合同を拒否する最良の口實——しかも正面からは反對の餘地のなき口實——を提供してゐたものであつた。從つて新黨準備會が政黨の形を取ることは、その影響下に立つ舊勞農黨大衆とその他の無產政黨との『合同』のために、無條件的に必要な條件であつた。しかるに今や、新黨準備會そのものまでも失はれたことは、この合同を殆んど絕望的たらしめたと云つてよい。

かように、舊準備會分子が、前述の『指導原理』の上に立つかぎり、團體としての合同は最早や考へることが出來ないが、なほ個人と

して、または部分的に、既存の無産政黨に流入することによつて、合同の實を收めるといふ道は殘つてゐる。けれどもこれは前述の『指導理論』によれば、明らかな誤謬であるばかりでなく、新黨準備會が政黨を組織すること以上に、遙かに大なる誤謬でなければならぬ。なぜならば、これらの既存無産政黨は（右の理論によれば、固より×××ではないのだから、從つて無産政黨ではないのであつて、若し强いて政黨であると主張するならば、ブルジョア政黨の一變種と認めるのほかないものだからである。無産政黨を僭稱するかゝるブルジョア政黨に對しては、如何なる目的にもせよ（右の理論の上に立つ限りは）これに加入することは、勞働者と農民に取つては許るすべからざる階級的罪悪であつて、たゞ選ぶことのできる唯一の態度は、外からその眞性質を暴露することである。

かように舊準備會を支持し來つた大衆に取つては、現に準備會を支配してゐる指導原理に反逆せぬ限りは、個人的または部分的にも、×××以外のいかなる既存の無産政黨にも流入することはできぬ。

かくの如く舊準備會の指導理論は、舊準備會大衆が既存の無産政黨に流入することを、少なくとも理論的に不可能にしてゐるにも拘らず、既存諸政黨の側では、却つてこの流入に對して、極度の警戒を加へてゐる。現に全無産政黨の合同を旗幟とする日本大衆黨さへも、結黨最初の執行委員會は、この意味の決議をした。この決議の必要と無用はしばらくおき、×××以外の一切の無産政黨の存在を絶對に否認する分子の參加に對して、×××ならざる無産政黨がその神經を尖らすことも、一應無理からぬことだとも云ひ得られる。

かように新黨準備會の解散とその政黨樹立方針の挫折とは、戰線の統一に取つての大なる損失であつた。そしてかゝる見地に立つての み、十二月二十四日の、、に抗議することができる。三月十五日の彈壓に對して抗議の聲を擧げた無産諸政黨が、準備會の彈壓に對しては當然豫期せられた抗議の聲さへも擧げなかつた理由の一つが、準備會の結黨不能をもつて、却つて準備會を誤謬から救ふものだとするかの『すばらしい』指導理論にあつたことは、爭ふことができぬ。

しかしながら、十二月二十二日の大會を支配した非政黨主義の理論が、新黨準備會の全體の意見を代表したものでないことは、疑ひがない。新黨準備會が幾度びかその態度の動搖を現はしつゝも、遂に十二月二十二日の新黨創立大會を召集せざることを得なかつたのは、大衆の要求に對する妥協であつて、大衆は明らかに、非政黨主義と反對の方向に動いてゐる。大衆が、十二月二十日の創立大會の經驗によつて、その求めるところの政黨を與へないものは準備會の指導者ではなくて、、、、であるといふことを說得せられたなら、これらの大衆の間からは、猛然として抗議の運動が捲き起るにちがひない。これに反して、彼らに政黨を與へないものは、反動政府の彈壓と共に、かの非政黨主義の指導理論そのものであることを信ずるに至つたなら、大衆はおのづから、誤つた反動作用を起こすにちがひない。

この反應作用には、もとより種々なる形を取つて現はれるにちがひない。二十二日の創立大會の直前において、岩手縣における新黨準備會十七支部全體が非政黨主義に反對して準備會を脫退し、過渡的な地方政黨を組織したのと、岡山縣支部の一部分がほゞ同一の理由（前者ほどに明確に言ひ表はされてゐないが）をもつて、準備會を脫して七黨合同（卽ち日本大衆黨）に參加したこの二つの事實は、大衆の反應作用が如何なる形を取つて行はれるかを暗示したものである。

大衆が自らの手によつて非政黨主義を淸算したときに、舊準備會大衆は、初めて統一戰線の舞臺に登場する。

無軌道的軌道を走る床次氏

憂欝な昨今の政界に、一人の床次竹二郎氏のあることは、幾分の滑稽味と快活さとを與へる効果を奏してゐる。床次氏は、無軌道的な政治家だといはれてゐる。脫線すべき軌道の無いことは、永久に脫線せぬことを意味すると同時に、常時に脫線してゐることをも意味してゐる。彗星は無軌道的に走つてゐるようである。けれどもその實は、無軌道的な軌道の上を走つてゐるにすぎぬ。床次氏が、政界の彗星であるかどうかは暫らくおき、この無軌道的な政治家も、案外、無軌道的な一定の軌道の上を走つてゐるのかも知らぬ。

もと〳〵床次氏は、謂ゆる官僚の畑に育つた人であつた。しかし將來の政權が政黨に歸着することが明らかになると、床次氏は官僚の泥から足を洗つて、素人となつたが、それでも日本の政界には、ブルジヨアジーの政權確立以前の殘存勢力と因襲とが、なほ有力に蟠居してをつた。床次氏は多年の官界游泳によつて、政權授受の表裏に最もよく通曉した人であつた。博學汝を狂せしむ。床次氏の敏感は、却つて床次をして勘違ひをさせた。淸浦內閣が成立して政友會が謂ゆる特權階級內閣に反對して起つや、床次氏は、これによつて政友會は、少なくとも當分の間、政權をその門前から追つ拂つたものと見た。況んや政友會には、高橋總裁があつた。政友會內閣は高橋內閣であつても、床次內閣ではなかつた。そこで床次氏は、間違ひなく幸運の足音は我が家の前で立ち止まつたものと思ひ込み、政友會の泥足を洗つて待つてゐた。

憲政會の若槻內閣に對しては、床次氏は、政友會を道づれにして、例の朴烈問題で內閣に肉迫した。しかし次の瞬間には、政友會に見事な脊負ひ投げを喰はせておいて、憲政會と合同した。その次の瞬間には合同黨にも痺れを切らし、曾ては朴烈事件で若槻首相の深甚の考慮を促がした相役の田中首相に對して、支那問題をもつて深甚の考慮を求めてゐるもの丶如くである。

かうして床次氏は、後にも先きにもたつた一度だけでよい床次內閣の幻ろしを追ひつ丶、政界の一端から他端に走つてゐる。實際床次氏は、幾度びか、この幻ろしを、今度こそは捉まへたと信じてゐたらしい。議員二三十名の新黨クラブの孤觸で、政權の大鯨を押さへようと

してゐるところに、見物人を陽氣にする床次氏の力がある。けれども床次氏の政治的喜劇のうちには、云ふべからざる悲劇がある。これは見物人の心を暗くする。たゞに見物人の心を暗くするばかりでなく、床次氏が政治そのものを暗くしてゐる責任は免がれることはできぬ。

田中首相は政界の素人と云はれ、床次氏は政界の玄人と云はれてゐる。いまこの素人相撲と玄人相撲とが、土俵の上で見合つてゐる。床次氏は、支那問題といふ敵の急所にしがみついて喰ひ下がらうとする。支那問題の面目と地租委譲問題の面目とは、物々交換に最も都合のよい商品である。もし田中首相に、深甚な考慮の手形を發行することができたなら、この取り組みは圓滿な取引となり、五十六議會は、極めて平穩無事な議會となることができるだらう。しかしこの素人相撲には、多くの玄人の控え力士がついてゐる。一と度び物言ひがつけば、議會には意外な波瀾を巻き起こすかも知れぬ。さすがに床次氏は、結黨の延期、地租委讓問題に對する緘默などによつて、たゞに前後ばかりでなく、その無軌道的な軌道の轉轍機を縱横に切り替へる準備を示してゐる。五十六議會の興味の中心は、在朝在野二大ブルジョア政黨の正面衝突よりも、寧ろこの取引にあるかのやうである。そしてブルジョア政治の陰鬱を一そう陰鬱ならしめる政爭の低調もまたこゝにある。

（十二月三十一日）

米國化（アメリカニゼーション）の機關としての映畫

平林初之輔

アメリカの映畫資本は、今日少くも、全世界の映畫の六七割若しくは七八割を支配してゐるであらう。一昨年の英帝國會議で、アメリカ映畫防遏のことが問題になつたことがあるし、日本でも近年、アメリカ映畫のボツコイトが企てられて、短期間ではあるが實行されたことがあつた。ヨオロツパ大陸、特に南部ヨオロツパの大部分の映畫及び濠洲、南アメリカ等の映畫も恐らく大部分アメリカの映畫資本によりて動かされてゐるであらうと思はれる。

映畫は一つのスペクタクルとして、最も大衆的であり、最も實際生活に食ひ入りやすい要素を備えてゐる。この點から見ると、アメリカの映畫資本が全世界の映畫の大半を支配してゐるといふことは、全世界が擧つてアメリカナイズしつゝあることを物語る。といふのはアメリカの映畫が必らずしも、露骨なアメリカの國家的背景をもつてゐるわけではないが、映畫といふものは、極く低い民衆の隅々にまで、視覺をとほして、行きわたるものであるから、その宣傳力の强大なことは、他に類例がない。歐洲大戰當時、交戰國は互に映畫を最も重要な武器として中立國の國民に宣傳した。ロシアでは勞働者の政治教育に映畫が利用されて、重要な教育機關とされてゐる。日本でも、禁酒や貯蓄の奬勵から赤化防止の宣傳にまで映畫が利用されてゐる有様である。

映畫は前にも言つたやうな直接眼に訴へて、イメージをのこすものであるから、記憶に便利であるのと、いくらでも複製して、同時に數ケ所數十ケ所數百ケ所の常設館で數萬數十萬の大衆に短時間に接觸せしめることができるとのために、不知不識の間に觀衆に宣傳し、觀衆を感化し得るものであるから、アメリカの映畫資本が全世界を風靡してゐることは、アメリカの金融資本が全世界を風靡してゐることゝ同様に、資本主義列國にとつて油斷のならぬことであるかも知れぬ。イギリスなどでは、アメリカ映畫を驅逐するために、國家が、補助をして自國の映畫製作を奬勵してゐる位である。

一八九〇年、シカゴに開かれた萬國博覽會に、トマス・エヂスンの映畫撮影機が現はれてから通算しても、映畫の歷史はまだ四十年に滿たない。そしてエヂスンが、はじめて映畫を作製し、人間の動作をカメラにおさめたのは五年後の一八九五年フイツツゼラルド孃のダンスを撮

影した時である。しかも當時の映畫は數十呎せいぜい二三百呎に過ぎないもので映寫時間一分にも足らぬ位なものであつたから、たゞ好奇心のためにのみもてはやされたゞけで、娯樂機關として、更に獨立の藝術として映畫の地位が確立して來たのは二十世紀にはいつてからであると言つた方が適當である。

日本にはじめて映畫が輸入されたのは明治三十三年頃らしく、電氣館が映畫の常設館として設立されたのは明治三十六年だといふことである。因みに活動寫眞といふ譯語は福地櫻痴の命名によるのである。いづれにしても映畫の歴史は約三十年と見るのが至當である。

この短時間の間に、本場のアメリカでは、映畫製作業は今や、數十億の資本を擁する屈指の大産業（ビッグ・インダストリー）の一つとなり、常設館の數は二萬を越え、一躍して興業界の王者となり、ホリウッドは或る意味に於て、全世界を無形の領土とするキングダムとなつて、遂に國際問題をさへ惹起するに至つたのである。

日本も亦、映畫に於ては完全にホリウッドの屬國である。どんな田舍の常設館へ行つてもアメリカ映畫の一本位プログラムにのつてゐないところはなく、大都市には西洋物（その大部分はアメリカ物）の上映を専門とする常設館と、西洋物以外に映畫を見ないことに決めてゐる多數のファンとが見られる。ホリウッドのスターのプロマイドはどんな田舍町の繪葉書屋の店頭にでも並べられて、日本の映畫スターの寫眞と相俟つて、明治時代の藝者の繪葉書を完全に驅逐してしまつた。更に新聞雜誌に映畫の占めるスペースは益々増大し、映畫専門の定期刊行物も十種以上にのぼつてゐるであらう。農村の朴訥な若い衆から都會の女學生、會社員、中學校の國語の先生に至るまで、ロナルド・コールマンとか、リリアン・ギッシュとか、ハロルド・ロイドとか、クララ・ボウとかいふ名前の二つや三つを知らぬものはなくなつた。

かくの如き恐るべき浸透力をもつアメリカ映畫が、日本人の生活の上に、影響を及ぼさずしてやむ道理がない。

映畫は、アクションとテンポの藝術である。その最も代表的なものはアメリカを本場とする活劇と喜劇とであらう。活劇が日本に飜譯され、日本化したものが所謂劍劇である。多くの人は劍劇はたゞ反動的な、懷古的な趣味に投ずるばかりのものと見てゐるやうであるが、私は必らずしもそればかりではないと思ふ。スクリーンの藝術の生命ともいふべき、アクションとテンポは、日本では劍劇によりて、最も手つ取りばやく實現される。日本の映畫は小量生産の悲しさに、自動車や、飛行機や、短銃や、爆彈を無數に使用した、大規模な高價なやりかたでアクションとテンポとを現はすわけには行かないので、それが劍劇となつてあらはれたのであるととるのも確かに一面の解釋であらうと思ふ。

喜劇は、最近日本でも、ぼつ／＼試みられやうとしてゐるが、悉く失敗で、こればかりは全く日本の映畫の模倣し得ざるアメリカ映畫の獨壇場である。これは日本の映畫に喜劇スターが一人もないのを見てもわかる。

このアメリカ映畫の本領とする活劇と喜劇とは、日本人の生活を、今現に、急激に變化しつゝある。カフェのウエートレスの服裝から、ボーイ・スカウトの服裝に至るまで、映畫の影響のあとをとゞめぬも

のになく、チエス盤のスポンヂ、ロイド眼鏡や、[illegible]と直接の關係がある。そしてその最も端的な産物に、モダン・ガール、モダン・ボーイの徒であらう、カフエも、洋酒も、ダンスも亦映畫と無關係であるとは言へない。

だが、アメリカ映畫の影響はさうした外形だけにとゞまつてゐない。日本人の心的生活（メンタルライフ）をも刻々にアメリカナイズしつゝある。日本人は或る西洋人が言つたやうに笑ひを禁ぜられてゐる國民ではないが、長い間の鎖國と、專制政治と、封建的道德とのお蔭で、喜怒哀樂を色に現はさぬことを誇りとして來た國民である。男は苦み走つてむつつりしてゐるのが男らしく、女はうつむいて、だまつてゐるのがしほらしいとされてゐた。アメリカ映畫はかうした日本人の先祖傳來の「美風」を急速に破壞しつゝある。日本の家屋に窓が多くなつたと正比例して、日本人の表情は明るくなり、日本人の行動は輕快になつた（勿論まだ本場のメリケンから見るとぐず〳〵して鈍重極まりないが）。銀座の步道を步く婦人の速度が速くなり姿態が直立して來たと正比例して、日本人の顔面筋肉の運動が活潑になつた。アメリカ映畫を見ない人と映畫ファン特に喜劇ファンとの顔面筋肉の比較研究を解剖學者にさせたらきつと興味ある數字が得られるであらうと、私は冗談でなく信じてゐる。わけても映畫の影響による心的生活の變化の最も著しい例は男女の戀愛の意志表示が大膽になつたことであらう。

アメリカはかつて、金をつかつて、宣教師を送つたり、教會をたてたりしてやらうとして成功しなかつた、後進國に對するアメリカニゼーション[illegible]を今日、[illegible]い顔をして說教をするかはりに、笑つたりあばれたりしながら易々と成功せしめてゐるのである。その點でアメリカの大統領が、映畫業者や、スター達を表彰したかどうかは寡聞なる私はまだ知らぬが、アメリカの立場に立つて見ればたしかに表彰に値する。

一九一八年にフランスの戰線で、多少の手柄をたてたジエネラル・パーシングよりも、チヤーリー・チヤツプリンの方が恐らく世界の文化史にあづかるところは偉大であらう、と私は、これも眞面目に考へるのである。

日本人のアメリカニゼーション！ときいて、國難來と大騷ぎすることは、近頃國難ずきな政治家にまかせておけばよい。アメリカニゼーションは、日本では嘉永六年からはじまつてゐることで、今更うろたへる必要はない。日本の特殊性が、漸次うすれて西洋化してゆくことを歎くなら、映畫より先きに、代議政治も、裁判所も、學校も、新聞も、鐵道も、電信も全廢してしまはねばならぬ。

たゞ今日、西洋化（ウエスタニゼーション）のかはりにアメリカニゼーションの方がより色濃くなつて來たのは、他でもない、アメリカの資本が、ヨーロツパの資本を征服したといふ簡單な事實の反映である。資本主義の社會に於ては、資本の力がオールマイチイである——物質界に於ても、精神界に於いても。私たちは、アメリカの剃刀で髭を剃り、アメリカのタキシーに乘つて、アメリカの映畫を見て、さて、アメリカ綿で織つた木綿の布團にくるまつて寢てゐるのである。、これは今日どこの國へ行つても大同小異であらう。偉大なる哉資本の力！

Onoto the Pen

オノトが働いて呉れる

私がどんな困難な研究でも見事に爲し遂げて行くのは私の爲めに忠勤を勵んで呉れる此のオノトのお蔭です。云はゞオノトが援けて呉れる樣なもので、書きよい此のペンを持つと骨の折れる問題でも直ぐ片付いて仕舞ふのです。

× × × × ×

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ　三十五錢
送料各十八錢

（カタログ進呈）



Y1.80

"VALET" Auto-Strop Safety Razor

バレーが陶醉させる

「私は毎朝吾れと吾が頰の滑かさに陶醉する。それはおかしい事の樣だが、切れ味のよいバレーで剃つたあとのこの艶々しさを見て呉れたまへ！」と、彼は逢ふ人毎にバレーの効果を吹聴して居ります。

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

價一圓八十錢（革砥一本 刃三枚付）送料十八錢

他に二円、三円三十錢、四円八十錢、十三円五十錢以上等あり

販賣所　大百貨店著名洋品雜貨金物店等

（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

東京市會解散と市民の態度

市會の刷新と市政の實務化

緒方竹虎

板舟權補償問題、京成線引入問題、西久保市長追出し問題に伴ふ大疑獄が起り、市會議員の半數近くが容疑者として引張られ、とう／＼市會解散をも見るに至つて、東京市は今や鼎の沸くやうな大騷ぎである。これで目が醒めて東京市政が刷新されるか、どうかは判らぬが、市會といふものが腐り切つた芥溜のやうなものであつたことだけは、今度の事件で相當徹底的に判つたらうと思ふ。しかし東京市會がどんなに腐つてゐても、天から馬の糞が降つて來たやうに驚くことはないのである。板舟權位のものは議會には幾らもある。直ぐに運動費を捲上げぬにしても、總選擧の時の御用金がそれである。議會の終り頃に束になつて出て來る何々鐵道布設等々のいはゆるお土産案は、ほとんどすべてが京成線引入問題類似の利權問題である。市長追出しに類する内閣倒壞運動は、これまた今の政黨の年中行事といつても宜からう無論その裏には政黨の切崩しがあり、金錢の授受があり、官職の豫約があり、曰く第三黨の旗上げ、曰く何とかクラブの誕生その他、到底西久保市長追出し等の生優しいものではない。もし東京市會が腐敗してゐるとすれば、議會の方は、さらにその上に茸が生へてゐるといつてもよい。たゞそれを見て人が餘り驚かぬのは、何とはなしに國政は市政より遙かその生活に縁遠い感じがあるのであらう。そこに今日の政治が民衆と離れ／＼であり、政治のカタストロフの恐れられる所以があるともいへる。

しかしながら、東京市會位の腐敗は議會の中にザラにあるといつても、市會の廓清を放擲してもいゝといふ譯では無論ない。鐵は赤いうちに打つべしである。市民が市會の腐敗にそれほど驚いたとすれば、その驚きの去らぬうち、その義憤の冷めぬうちに、せめて市政だけで

も浄化させたい。否、この少くも市民が市會の腐敗に懲いた時、そして多年の懸案であつた普選をはじめて市會選擧に實施する時、この機會を逸しては市會廓清の機會はあるひは永久に來ないかも知れぬのである。市政刷新の道は極めて簡單である。市會に正しい人を送りさへすればよいのである。人物本位といふことは、市會の場台においてはじめてこだはり無く唱へ得ると思ふ。しかし道は極めて簡單でも、これまた生優しい決心と努力では出來ない。前回の市會改選の際、それは普選の前哨戰であるといふので、市政刷新の聲が到る處に起り、市會改造の機運が相當に動いた。實業同志會は、市政の刷新は市民の教育にはじまらねばならぬといふので、武藤會長が先頭に立つて全市に亘り七十回の講演をやつて歩いた。阪谷芳郎、鎌田榮吉、井上準之助、土方寧、内田嘉吉、渡邊鐵藏等の人々は、理想選擧協議會といふものを組織し、これは進んで候補者をも押立てるといふ噂であつた。その噂の候補者の中には、平沼淑郎、磯村豐太郎、藤山雷太、添田壽一、吉野作造、岩波茂雄、末弘嚴太郎、山科禮藏、杉原榮三郎などの名も見えてゐたと思ふ。ところがだ。しばらく滿を持して機會を狙つてゐた三木武吉氏等憲政系の一團が、名も麗々しく市政刷新聯盟と掲げ、後藤閥打破をスローガンとして打つて出るや、理想選擧協議會は、市政刷新の本家爭をする勇氣もなく、たちまち腰が摧けて、消えるが如く活動を中止して了つた。その結果は、市政刷新聯盟(後の革新會)が定員八十八名中の五十名を占むるに至り、市會は三木一派の壟斷に任せて、勢ひの極まるところ、今回の疑獄の誘因を作ることにもなつたのである。この革新會が一擧にして絶對多數を占めたのは、政府の背景を有してゐたからにも因らう。東京市會の歴史を見れば、それが政府の膝元であるだけ、毎も政府黨が優勢を占めてゐることは爭はれない。しかしながら、理想派の敗因は、他のすべての場合の然るが如く闘志と根氣の足らぬところにある。後藤閥といはれるのも詰らぬといふ娘のやうな氣の弱さは、逆に取つて市政刷新の名を騙して來る雲助のやうな図々しさの前に、一溜りもない。これでは何時まで經つても悪貨は良貨を排するばかりであらう。たゞ今度の選擧に對する新しい望みは、それが最初の普選であり、これまで市會に代表されなかつた新有權者の間から、市會の情弊に染まぬ多少の新顔の現れ來らうことそれだけである。組織あることは選擧運動の上に何よりも必要であるが、一人の無産黨議員ですらも栃木縣會の形勢を動かし得た如く、何人かの情弊に染まぬ新顔あることは、それだけ汚れた舊顔を排除すること丶新しい空氣を注入することにおいて、二重に市會を善くし得る。しかしてそれは新しい有權者にのみ期待し得るのである。

× × × × ×

しかしながら、假りに新しい有權者の間から新顔が出ても、今のま丶の制度では、結局利權の足は拔けそうになく、腐敗は跡を絶ちそうにない。しからば如何に制度を改めればよいかといへば、根本において、市政に實務であるといふ建前から、市の制度をその目で見直す必

要があると思ふ。デモクラシーは公議機關に重心を置くのが通則である。市政の制度も市會中心になつてゐる。しかしながら、市政が國政と異り、本質上實務であることゝ、市會中心主義とは兎もすれば相容れない。相容れないばかりでなく、市會中心であれば、如何に市政の政黨化反對を叫んでみても、政黨勢力の介入を防ぎ得るものでない。その結果は、名稱は違へても市會は中央政黨の出店であり、それによつて選まるゝ市長は、何と理屈をいつても、結局多數黨の傀儡たらざるを得ない。のみならず、二重の監督を受けるその監督官廳も、ほとんど除外例なしに多數黨と同穴の貉であるところから、市長が自由の手腕を揮ひ得ざるはもちろん、市政は中央政黨の喰物となる外ないのである。今日まで東京市政の擧がらざる理由は、常にそれであつた。

市政を今日のまゝの市會中心主義とし、同時にこの弊を救ふためには、吉野博士などの唱へられた議論の如く、市會を職能代表制度にし各種の職業團體から比例代表によつて市會議員を選出するのは、たしかに一つの方法である。市會に政黨勢力の介入を防ぐ方法はこの外にない。職能代表制は、今の如く市政商賣の市議の代りに實務上の知識を市會に集める外に、第二義的ながらこの最も重要な役目をも併せ果すのである。市政は、道路公園の施設でも、衞生の事でも、上水道下水道でも、職業紹介、公衆食堂、浴場、幼少年保護、牛乳配給等の社會事業でも、教育や電車、乘合自働車、電燈電力の事に至るまで、こと〲く實務で、これを審議決定する市會にもそれ〲專門の知識を要すると共に、中央の政務の如く、政府の異動ある毎に、施設の變更あることを避けたいのである。この意味からは、職能市會の意嚮によつて市政を秉ることは、おのづから市會中心主義の餘弊を免れることにもなる。

しかしながら、實際の問題としては、すべての職能制度は今少しく任意なる職能結社の發達するまでは不可能であり、差當り何までを有資格團體と認むべきやを決する困難に會するのである。もしそうだとすれば、市長をして市政を實務的に處理せしむるためには、市長の選擧を市會の選擧とせず、市民の直接選擧として市長の位置を強くし、同時に市會との衝突ある場合、市民のレフエレンダムに問ふの道を開く外ないと思ふ。市長の直接選擧制については、山師政治家を出すとの危惧說もあるが、唯一人の選擧となれば相當市民も熟慮して大人物を選むに努め、單なる演說會場の昂奮によつて投票することはなからうと思ふ。少くもそれは、市會から選まれた市長に、一切情實を無視せよと注文するよりは無理が少いであらう。もちろんこの場合においても、職能市會の場合においても、いはゆる都制の實施により、市長の位置を中央勢力のお節介から獨立せしむることは、絶對の必要であらう。市長の直接選擧、レフエレンダム制度は、アメリカの都市が、長い間市政の腐敗を經驗した結果、今日ほとんど大部分の都市に實行してゐる制度で、市長を市公民の直接選擧とする以上、市會の解散權

を市長には與へず、最後の審判をレフェレンダムに問ふといふことは、これまた當然の結論でなければならぬ。かくて市長の位置が鞏固になつて、はじめて實務的に市政を處理し得るのだと思ふ。

市政と國政とは違ふ。市會と議會とは同一に見る譯にはゆかぬ。議會は、その選擧を通じて如何なる政策を行ふ政府を撰ぶかを國民に決せしむるのであるが、市會の場合は、問題は道路公園といひ、電燈電車といひ、すべて實務で、むしろ實際上の知識を要求するのである。その政府を作り、したがつてこれに對して完全なる監督權を有する議會でも、最近の傾向は、政黨制の發達と共に、有爲有能の政治家を政府に送つた以上、アトは成るべくその政府をして存分に手腕を揮はしむるに傾き、それがイギリス流內閣制度の特長だとすらされてゐるのである。しかるに市會が議會と同じやうな氣持になり、しかして今日の如く、最後の審判權が內務大臣、すなはち中央勢力の手に握られてゐるのでは、市長は到底自信をもつて市政の實務を處理することが出來ない。市政の改革については、いろんな議論があるが、根本においてこの問題に觸れるまでは、市政の面目は改まるまいと思ふ。

× × × × ×

が、それにしても、市會の內容が改善されなくては市長ひとりでは相撲が取れない。それにはイギリス市制のオルダーメン制度の如く、特別の名望家經驗家を市會に送り得る制度を作ることも一つの方法であらう。あるひは、今の參事會制度をむしろ明治四十四年の市制改正前に歸して、市會外から一流の人士を選み、一種のオルダーメン制度をこゝに實現するのも、一案たるを失ふまい。しかしながら、直面する市會改選に對する市民の對策如何といへば、私は何等の躊躇なく、すべての舊顏を排して、ことごとく新顏を選べといふのである。（それは當然に市長の改選をも意味する）差當り市會の空氣を新にするには、如何に考へてもこの外に途はない。しかしてこのスローガンを實現するためには、この前の理想選擧協議會の經驗から見ても、特に舊來の情實に染まざる新有權者と、はじめて市政參與の機會を得た無產者團體の義憤に訴へねばならぬのである。

東京市疑獄事件と登場人物

河野　密

大正九年十一月明治神宮の參道工事にからまる不正事件が、恰かも

世を擧げて明治神宮鎭座祭でお祭り騷ぎの眞最中に突如として新聞紙に發表せられた。これが大正九年の有名な砂利及び瓦斯事件の發端である。一波あがれば萬波の響へで、一度口火がきられるとそれからそれへと飛火し、關係市會議員十七名が珠數つなぎにされると云ふ大疑獄事件が展開された。

事件が漸く發展し、東京地方裁判所の松田檢事が市役所に出張帳簿を臨檢するに及んで、物情騷然、庭内喧囂、流石無頓着な田尻市長も十一月二十六日とう〳〵辭表を提出して東京市を去ることになつた。その別離に當つて田尻北雷市長の述べた挨拶が面白い。曰く、

大きな疑獄事件が暴露して世間疑惑の眞只中に東京市政を去つて行くのは感慨無量である。私の今の氣持はかの菅公が左遷の當時に詠じたと云ふ『東風吹かば香おこせよ梅の花、主人なしとて春な忘れそ』と云ふ古歌に似かよつたものがある。私が去つて東京市は主人のなき宿となるかも知れない、然しそれにからまる疑惑もやがて晴れて、東京市政の上にも馥郁たる梅の香をたゞよはす春が立ち歸つて來ることを衷心から望んで止まない、云々と。

この挨拶は極めてしめやかなもので、平生の北雷居士にも似なかつたとは當時の新聞紙の報道したところである。いかな北雷居士でも、非常の際平生の駄じやれや皮肉もなかつたのであらう。然し結果から見れば、北雷居士のこの言葉は居士の一生一代の大きなしやれであり皮肉であると言ふことが出來る。何となれば、東京市政は、前に馥郁の香を送るべき春に會はなかつた如く、後にもまた一陽の來復を見ず、流すものは瞬間的なる局部の見方許りであつたから。北雷居士の挨拶は東京市政史全體に對する最も要領を得た皮肉でなければならぬ。

二

東京市制が施かれてから滿三十年。然しこの滿三十年の東京市政史は宛然一編の疑獄史である。

先づ明治二十八年の水道鐵管事件を皮切りとして、明治三十三年の汚物掃除事件、大正九年十年の砂利及び瓦斯事件、昭和三年の板舟及び京成電車乘入れ事件。世間の視聽を聳動した大事件ですらざつとこれ丈けある。若しこれに配するに單なる醜聞を流すに止つた大小の事件を以てするならば、何人と雖も『東京市政史即東京疑獄史』に異議を挾むものはないであらう。

が東京疑獄史は單に事件の頻出に依つて特筆される許りでなく、表面、裏面、側面の、多種多様なる登場人物の賑かさに依つてまた特筆すべきものがある。

明治二十八年の水道鐵管事件に於ては、當面の責任者は日本鑄鐵株式會社々長濱野茂、同社取締役雨宮敬次郎、技師長野呂景義等二十五名であり。市會議員の關與するものは僅に三名、それも不起訴に終つた。然るに明治三十三年の汚物掃除事件に至ると、中心は漸く市會議員に移り、豫審決定書に依つて有罪として公判に附せられたものは、

稲田政吉　太田直次　峰尾勝春　長谷川深造
今井英輔　横山富次郎　利光鶴松　朝倉外茂鐵

中島又五郎　福島甲子三

であつた。越えて大正九年十年の疑獄に至ると、市會議員の連累者は更に增加し、左の十七名に及んでゐる。

山口　憲　丸山名政　所澤貞太郎　中村鐵二
淺川保平　辰澤延次郎　酒井　泰　棚橋一郎
高橋義信　增野　豐　宮崎三之助　根岸治右衛門
伊東　清　岩松余經　松山傳十郎　安住佐太郎
渡　紐造

昭和三年度に於ける板舟權問題及び京成電車乘入れ問題は未だ豫審の終結を見ず、その連累者が那邊にまで及ぶか今日に於て豫測するとは出來ぬが、既に市會議員の收容者二十餘名を出してゐるに徴してもその規模のほどが窺はれよう。かく疑獄事件每に益々連累者の擴大し行くとも、東京疑獄史を繙く者の忘れることの出來ない一徴表である。

由來大都市行政には利權に關係ある問題が多い。從つてそれを中心とする利權漁りの集團が常に存し、醜聞を一代に流し、秕政の指彈を天下に招くことが往々にして生ずる。これは單に日本丈けの問題でなく、紐育市のタマニー・ホール、倫敦市のメトロポリタン・ボールズ・オブ・ワークス等の先驅者が既に存する。然し東京市に於けるそれの如く市政の腐敗紊亂が永年に亘り、事件每にその規模を擴大して行くのは何れの國にも見られぬ奇現象である。從つてこれには自ら特別の理由がなければならない。

三

東京市の疑獄事件には常に覆面の人物が登場する。この覆面の人物こそ實は曲者なのである。

明治三十三年の汚物掃除事件の連累者――表面の登場人物が、利光鶴松、中島又五郎、長谷川深造等であつたことは前揭の通りであるが、これ等の人々は、實は、憲政黨から政友會の領袖として、はたまた東京市會の大御所として、中央政界と東京市政とに一大羽翼を張つてゐた星亨の兒分に過ぎなかつた。これ等の人々は唯星に依附して市會に出で、虎衣を假りて市政を壟斷したものに過ぎない。そこで市の疑獄事件があばかれて內部の醜怪なる事實が白日の下にさらされると共に、かゝる事件の覆面の登場人物として星亨が指彈の的となつたのはもとより當然である。當時第一次政友會內閣の下に遞信大臣であつた星亨は、ために輿論の總攻擊を受けた。流石剛愎の彼も、この痛手にはよほど弱つたと見えて、明治三十三年十二月二十一日『累を內閣に及ぼすことを恐れる』と云ふ理由の下に遞信大臣の印綬を解いて下野した。然し負けじ嫌の彼は、同時に次の如き聲明書を出すことを忘れなかつた。

謹んで社會公衆に告ぐ。
東京市參事會員中收賄の說あるや、物議囂々推して予の一身に及ぼし竟に予に冠するに公盜醜賊の文字を以てするに至る。然れども事全く虛妄にして予を陷害せんとする政敵の術策に過ぎざるが故に之を抛棄して顧ざりしなり。身補弼の重責に任じ行政の長官に膺す。不德と雖

も當選を潰し萬衆を垢しめんや。（中略）大丈夫の事棺を掩ふて後知るべし。予の自ら處するや屑々己を飾つて時俗に迎合せんとせず。是を以て世の予に抗するに堂々政見政策の爭を以てする能はざるの徒、毎に風影を捕捉して予を奸惡の徒と呼び、公道を壞亂し道義に悖戻するものとし、予に醜辱を加へ時俗の厭惡を被らすを以て唯一の術策とし、竟に誣ふるに虚妄彼の如き事態を以てし、狂暴彼の極に達し自他を欺きて國家の公正權威を弄するに至る。それむしろ憫れむに堪へたり。（下略）

紅焔萬丈以て一代の怪傑星亭の風采を想望するに足るものがある。然し乍ら我々は、星亭の鬱勃たる怪氣焔に醉はされる前に、考へなければならぬことがある。それは、星亭を通じて中央政治の金權化と東京市政の利權化とが、緊密に結ばれたと云ふことである。星亭は日本の憲政發達史に於て忘れることの出來ない足跡を印した。然かも日本の政黨運動を妥協苟合の隧道に導き入れた帳本人であるてふ香しからぬ足跡を。陸奧宗光と策應して自由黨と藩閥との抱合を計劃したのも彼である。憲政黨をぶち割つて憲政黨と憲政本黨とし、憲政黨を伊藤に賣りつけて政友會を作り上げたのも彼である。金權の力を以て政界を壟斷し、その資源を東京市政に求めると云ふ先例をひらいたのも彼である。東京市の疑獄事件が年と共に深刻化し、事件毎に大規模化して行くのは、實は東京市の疑獄事件が常に覆面の人物に依つてあやつられてゐるからである。その覆面の人物は、或は星亭として、或は森久保作藏として、或は高橋義信、三木武吉、、、、として常に疑獄事件の舞臺並に舞臺裏を提供してゐるのであるが、それが描いてゐる精神は、星亭に最もよき根母を見出したかの『金權政治』のそれに外ならない。從つて東京市の疑獄は、日本の政黨政治に遺傳された梅毒の吹出に過ぎない。金權政治、買收政治、賄賂政治等々がその極點に達した田中反動內閣治下に於て、最も大規模化された東京市疑獄事件のバクロされたのは、この意味に於て極めて當然な歸結である。

四

東京市の疑獄事件がバクロされる度に、いく度か東京市會の淨化運動が繰り返されて來た。

大正三年中央政界に於て例のシーメンス事件に依つて政友會が未曾有の苦境に立つた時、多年東京市政を壟斷してゐた政友會の勢力をもこの際一擧にして驅逐しやうと云ふ計劃が立てられ、萬朝報の黒岩周六、大谷誠夫等の人々に依つて革正會なるものが組織された。これ等革正會の人々は同年の市會議員の選擧には連日連夜の奮鬪を續け、殊に森久保作藏の地盤である深川に於て最も猛烈を極めた。この結果森久保作藏は叩き落され、それに代つて出たのが太田信治郎である。

また大正九年十年の砂利及び瓦斯疑獄事件の後を受けて、大正十一年に行はれた市會議員の選擧には、理想選擧團なるものが組織せられ實業家から山崎龜吉、宮島清治郎、學者から末弘嚴太郎、堀江歸一の四氏が推された。末弘、堀江二氏は不幸落選したが山崎宮島二氏は輿望を擔つて當選した。

然らばこれ等の淨化運動に依つて東京市政が多少なりとも淨化されたかと云ふに決してさうではない。唯一時市民の人氣を煽り立てゝ、時に目新しい人間を市會に送り込むだと云ふに過ぎない。再び市政の齒車は利權の軌道を轉落し、より大きな疑獄事件へと急いだのである。結果から見れば、小さなペテン師の退場は、より大きな詐欺師の登場を促す幕間に過ぎなかつたと言へるのである。然しそれは極めて當然である。何となれば、東京市政をめぐる疑獄の渦は、單なる一二のペテン師の仕事ではないのだから。表面に浮き上がつた塵芥を取り除いても、その由つて來る根源を淨化しない限りは斷じて淨化されるものではないのだから。

森久保作藏に代つた太田信治郎は斷じて市政を淨化はしなかつた。『理想』と銘を打つて出て來た山崎龜吉も宮島淸治郎も斷じて市政を明くはしなかつた。大正九年の疑獄事件の責を負つた加藤正義や横山勝太郎は勿論のこと、これに代つた早川千吉郎や小島七郎と雖も、寸毫も市政淨化の實を擧げることは出來なかつたのである。況んや『市政淨化』の名の下に市會に登場して來たそれ等の人々が、却つてより多くの腐敗と紊亂とを培はなかつたと誰れに言へやうか?!

五

以上私は東京市疑獄事件を中心として、これに登場する表面、裏面側面の人物を拉し來つて、『東京市疑獄史』の全幅を讀者の前に傳へやうとした。既に賢明なる讀者は、何人が『東京市疑獄史』の責任者であるかを理解されたであらう。言ふまでもなくそれは、既成政治の脈管を流れてゐる『金權萬能』精神なる惡血の發疹に外ならない。然らば何人が『東京市政の淨化者』であるか? これまた既に賢明なる讀者の既知せられるところであらう。東京市政の眞實の淨化者こそは、『金權政治』の中に『金權政治打破』の旗幟を掲げ得るもの、既成政治の眞實の否定者——『無産政黨』以外にないと言ふことを。

東京市政を淨化することは斷じて東京市政のみを淨化することではない。既成政府一般を打破し革正することである。東京市政を民衆の手に奪還することは、單に東京市政を民衆化することではない、既成政治の全機構を民衆の手に奪還することでなければならぬ。この意味に於て東京市政を單なる大都市行政の一點から覗き見るものは東京市疑獄史の全意義を見失ふものである。

星亨、利光鶴松、森久保作藏、高橋義信、中島守利、三木武吉、、、、。——これは『東京疑獄史』の暗黑面を徘徊する人物である。黑岩周六、大谷誠夫、太田信治郎、山崎龜吉、宮島淸治郎、早川千吉郎、加藤正義。——これは『東京市疑獄史』の端役をつとめるエキストラに過ぎぬ。この外側面の人物として次の人々が登場する。曰く、田尻稻次郎、曰く、尾崎行雄、曰く、奥田義人、曰く、阪谷芳郎、曰く、後藤新平。而して『東京市疑獄史』の全幅の意義を見出し、その根源にメスをふるうものは遂にこの中にないのである。今こそ我々は『東京市疑獄史』にまつはる一切の迷妄を拂ひ退けて、眞實の淨化者を顯正しなければならぬ。來るべき東京市會選擧を前にして全民衆に對して私は『覺めよ!』と叫ぶ。

國民政府の所謂 滿蒙及滿鐵回收論

我國民と對支外交

植原悅二郎

我國民は概して國家觀念に富み、且つ鋭敏ではあるが、島國育ちの爲めか、又火山脈上に住む爲めか、極めて燥急性である。若し、我對支外交上、孰れの政府を問はず、國家の不利を招いたとすれば、之れは總べて主に事を焦つた爲めであるといふても過言でないと思ふ。現下の對支外交に就いても、少しく外交上の交渉が中絕すれば、我國の政治家や新聞雜誌は、ソレ田中外交は行詰りである。速かに之れを打開し、若しくは展開せねばならぬと大噪ぎをする。南京政府なるものが創設されて以來、まだ五六ヶ月すら經過して居らぬ。而已ならず、南京政府が所謂三民主義を標榜し、孫逸仙の遺物なる五權憲法に基き、五院制度に依り、稍々統一せる政治機關を設立せしは、僅か三四ヶ月前のことである。それ迄は田中內閣成立以來、時には北京の張作霖の政府や、奉天政廳や、局部的の南京や、漢口の政廳を相手とし、應急の問題を臨機處理して居つたのだ。勿論此の間、田中內閣は、成立當時聲明せしが如き、一定の對支及對滿外交方針に基き、常に其政策の實現に努力し來つたのである。されば田中內閣にとつては、其對支外交の行詰りを感ずることもなければ、之れを打開し、展開し、若しくは變更せねばならぬ必要もないのである。

然るに、支那の現狀は變轉極まりなく、恰かも、百色眼鏡の如くである。夕べに、蔣介石、李宗仁、閻錫山、馮玉祥、白崇禧、李濟琛等が互に干戈を交へ、其勢力爭ひに沒頭して居るかと思へば、朝には、此等が妥協して張作霖討伐を企てる。濟南事件を惹起せしむる。而して北伐に成功すれば、直ちに北京の遷都を企て、北京の名稱を北平と改め、之れを廢都とし、南京に政廳を設立し、其基礎未だならざるに、早くも、日支通商條約の廢棄、臨時辦法實施を聲明する、不當課稅を試み

る、打倒帝國主義、不平等條約撤廢を高唱する、排日排貨を煽動する、山東撤兵問題を宣傳する、又利益關係の尠き歐米諸國と空文に等しき條約を締結することに狂奔する。關稅制度及び海關組織等の變更をも畫策する、殊に最近に於ては、滿洲に於ける易幟を實施せしのみならず、文明國民を戰慄せしむるが如き、楊宇霆、常蔭槐等の暗殺を敢行する。又新聞電報であるから確報ではないが、南京の王外交部長は、東三省に關する日支各條約を一切無効とすること、旅順大連及び滿洲安奉兩鐵道回收準備に着手すること、及び東三省の外交權一切を南京政府に附隨せしむることの方針であるとも傳へられて居る。勿論此等は、王正廷が如何に大言壯語しても、實行不可能のものであるけれども、南京政府の聲明や、其無責任なる行動は、我國民をして之れを眩ゆく感ぜしめ、動々もすれば、其去就に迷はしむる程である。而して南京政府の當路者は、其部内の不統一や、各軍閥の勢力爭ひの爲めに、內政的には頗る不安定であり、且つ尙幾多の難關を控へて居るけれども、其外交上の立場は極めて容易である。彼等は暴言を吐いても、無責任なる言辭を弄しても、其聲明を實行しなんでも、食言しても、痛く國際信義を無視したといふて、非難されることもなく、又熾烈なる國民の反對に遭遇することもない。假令、あまり効果なき、空文に均しき條約を締結しても、不平等條約撤廢や、打倒帝國主義を高唱して、排外運動を煽動して居りさへすれば、國民の信望を維持することが出來る[illegible]

由平等を主張して居つても、一黨一派によつて、政權を支持し軍閥を背景とし、國民を威壓し、專制政治を行ひ、ムッソリニーや、露國勞農政府の如く、徹底的に其新聞雜誌を利用し、國民の言論を一途に歸せしめ得るのみならず、南京政府の宣傳以外に國內には、國民の輿論なるものが存在し能はざる狀態であるが故に、所謂輿論の反對を受けることもない。加之、南京政府は其組織內に於て、國民黨の黨部なるものを有し、政府の別働隊として政府を援助する爲めに、凡ゆる排日排貨や、幾多の暴行をも實行せしめ、之れを政府の宣傳に利用する方法をも講じられて居るのである。されば南京政府は、其外交を補佐する爲めに、國內に於ける凡ゆる宣傳方法を用ひ得るのみならず、國際信義を破壞するが如き排外運動をも利用して、外交交渉の手段と爲し得るのであるから、其外交は極めて容易である。

之れに反し、日本政府は何人が其局に當るせよ、其對支外交は極めて困難である。日本政府は苟くも一言半句と雖とも無責任なる言論を弄したり、國際信義に悖る行動を敢へてすることは出來ぬ。日本政府の行動は常に正義を基調とし、凡べて合法的のものでなければならぬ。縱しや、南京政府の當路者が食言しても、日本政府は之れに對抗することが出來ぬ。又國民黨黨部が不法行爲を示しても、排日排貨を斷行しても直ちに之れに酬ゆべき方策を講ずる途がない。而已ならず、日本の國內には、國家の重大なる外交問題さへ、政爭の具に利用せん

館の魚力や、帝劇の芝居でも許するが如くに、不謹愼なる言辭を弄するものさへも稀れではない。且つ我國の新聞雜誌中には、理りなく弱者と思ふものに極度に同情したり、猥りに政府を非難攻擊することを以て、其販賣政策に之れを利用せんと試みつゝあるものもある。概して我國の新聞は、事毎に、政府を攻擊せんとする傾向を有して居る。其結果我國民の一部には、支那に迎合することを以て、對支政策の正道なりと誤解して居るものもある。而して我國民は既に述べたる如く燥急性なるが故に、何でも早く處決することを外交上の成功なりと思惟する性癖を有して居る。加之、近來一般に我國民の士氣は大に弛緩し、如何に重大なる對支外交に就いても、國論の統一を見るが如きことは容易でない。何事に就ても、支那の要求に對し、唯々諾々たれば萬事は迅速に解決する。併し之れでは我國の權益は擁護出來ぬ。豹變常ならざる支那の如き國に對し、我權益の擁護を圖らんとすれば、燥急、事を決することは絕對に禁物である。されば我國の對支外交は、彼我の實狀に鑑み極めて困難なる場面に直面して居ると謂はねばならぬ。

差等稅率問題に關しては、我上海矢田總領事と支那財政總長宋子文との間に數旬前、畧其協定纏りしに拘らず、外交總長王正廷は、近く我國に於て支那に有利なる政變あるが如くに臆斷し、一時其進捗を遮斷せしめた。而して、我國が速かに、山東撤兵の期日を聲明するに非らざれば、日本と一切の外交交涉を中絕せしむるが如き口吻を洩らしゝに到つた。而して斯く日支間の幾多の懸案に對し、常に其進捗を停頓せしむるものは、支那の當局者である。されば我國は努めて隱忍自重せねばならぬ。支那政府の不當不法なる要求を容認することは、決して支那國民の健全なる發達に資する途ならざるのみならず、我國の權益を擁護する所以でない。又支那政府の條約廢棄を企つるが如き國際信義を無視する暴行を默認することは、東洋の平和を確保するものではない。歐米諸國の如き地理的にも、支那と密接に關係を有せざる國は兎に角、接壤の邦土たる我國としては、如何なる困難に際會するとも支那國内の混亂を局限し、其國民の健全なる發達を期すると共に、飽迄我國の權益を擁護し、且つ東洋の和平を確保せねばならぬ。之れには、常に一定の對支政策を持し、嚴然として其遂行を期さねばならぬ。それには、變轉極まりなき支那の政狀に對し、不動不變の態度を把持し、臨機應變、事に當らねばならぬ。縱や、一時支那の政變により、半ヶ年や一年、懸案解決が停頓すると雖とも、之れを以つて、外交行詰りと唱へ、國家の大計を誤るが如き事があつてはならぬ。殊に滿蒙は、我國と歷史的、地理的、經濟的、且つ政治的特種の關係を有する地域なるが故に、如何なる場合と雖ども、日支兩國民のため及び東洋平和の爲め、斷乎として其權益を擁護する覺悟と決心とを備へて居らねばならぬ。南京政府が如何に三民主義を唱へても、支那の現狀は法治國の夫の如くではない。南京政府の組織は、寧ろ露國の

勞農政府の夫の如くである。其基礎未だ鞏固なりと觀ることは出來ぬ。濟南撤兵問題の如きは、日本にとつては實に易々たる問題である。政府は居留民保護のために、不得止山東に出兵したのである。而して政府は屢々之れを中外に聲明せしが如く、居留民の生命財産安全の保障さへ確實になれば、何時でも其撤兵を斷行することに躊躇するものではない。日本政府は未だ曾て國際信義を侵犯したることはない。山東撤兵を遲延せしむるものは、日本帝國の政府ではない。支那の無責任なる行動と南京政府が國際信義を尊重する其誠意を表現し能はざるためである。奉天政府の如きは、最近白日旗を揭揚し、三民主義を遵奉すると稱して居る。然るに楊宇霆常蔭槐等暗殺事件の如き悲慘事が勃發せしめられる。而して此狀態は、直ちに我國の元龜天正時代を想起せしむる。之れが支那の現狀である。我國民は今や支那に對し、朝野擧つて輕擧妄動を愼まねばならぬ。支那國民に大に同情すべきである。又南京政府の健全なる發達を希望すべきである。而して之れには、今や方に我國民は暫らく變轉常なき支那政情の推移を靜觀し、其變化に應じて擧國一致嚴然として、對支政策の實現を期し、支那四億民衆の健全なる發達と東洋平和の確保とを謀すべき秋である。

田中内閣は支那の大勢を洞察せよ

大西齋

一

張作霖の爆死といふ劇的事變の發生から、東三省の政情はがらりと一變し、從來の對南關係も、これが爲めに急激なる轉換を來し、所謂南北の合流が、具體的に實現さるゝに至つた。が、東三省態度の不安と紛糾した關係は、張學良が父存命中片腕と頼んだ奉天派巨頭一のきけ [illegible] は付く。良くも惡くも、今から思へば、張作霖は流石にエラかつた。その支柱張作霖の存在は、東三省における唯一の力の存在であつた。文字通りの統制力の本體であつた張作霖の倒れた後の滿洲は、支離滅裂だ。尤も張作霖が生きてゐたところで、舊來の統制力を發揮し得たかどうかは保障の限りでないが、張學良を表面に立てた今日の

[illegible]しても、張作霖無きあとの東三省において、楊宇霆のゐたことには兩方に對しても、力ある一個の存在であつた。楊のあることによつて、政治的にぼんちである張學良の缺陷は、ある程度補なはれたと思はれるが、それを捥ぎ取つた張學良の前途は、心細いものだ。楊宇霆を眼に目の瘤とした張作相一派の舊派は、快心の笑を洩らしてゐるだらう。張學良の手で舊派を押へて行けるか、新しがりをもつて自任する張學良は、舊派の傀儡には決して滿足しないだらう。こうした環境において新舊兩派の關係が果してどう保たれて行くであらうか。

二

これと同時に、今後の重大なる局面の變化が、南京國民政府との關係においてどう進行するか。換言すれば國民政府の對滿進出振りである。楊宇霆一派處斷の一つの理由として、東三省における青天白日旗掲揚に反對したことが數へられてゐる。さうしたこともあつたとすれば、我武者羅に南方との合流に猪突したのは、張學良で、國民政府との關係は、一層緊密となると見なければならぬ。このことは、日本の對滿關係をいよく＼困難なる立場に陷れるものである。日本の對滿政策は、對南方政策の行詰りと同樣、全面的行詰りを招いてゐる。張作霖の在世中においても、對滿關係は一つとして思はしくいつたものはなかつた。張作霖は日本を利用するだけ利用して、自己の勢力を築いていつたが、その晩年には、日本の要求などは殆と受付けなかつた。恰[illegible]關係であつた。それでも、張作霖との間には永い間手がゝりがあり、張作霖の威望は三省を壓してゐたので、交渉相手には尚その方が便宜であつた。張學良になると、親爺とは思想が違ひ、日本の要求などはてんで受付けない。林權助男を態々煩はして、三ヶ月の南北妥協中止を勸告させ、やつとその目的を達するには達したが、その間に解決しやうとした鐵道問題の交渉など、幾度か有利の解決に近いたやの說は傳はつたけれど、今以て何等目鼻が付かずにゐるではないか。三個月の期間は遠慮なく過ぎて、本年一月一日に青天白日旗を掲揚するとの豫定に先立つて、舊臘二十九日早やくも奉天を始め東三省各地に實行するに至つた。而かも、これに就いては、日本に事前一應の挨拶も無く、日本の面目も威信も全然踏みつぶして了つたのである。それにも拘らず、日本政府は、換旗は實行したが、東三省の實質には變りは無いから、依然交渉は東三省當局との間に繼續すると涼しいことをいつて平氣でゐる。彼れに若し多少の誠意があれば、交渉も進捗すれば、換旗問題も遠慮してゐた筈である。交渉は成立せず、無遠慮無警告に日本を尻目に妥協を實行して憚らなかつたその事が、取りも直さず日本を忌避し、田中内閣の對滿交渉を敬遠した證據でなければならぬ。

三

田中内閣の對滿交渉は、張學良のために思ふ存分翻弄された形であ

る。如何に贔引目に考へても、今後交渉が甘く行きそうには思はれない。のみならず特に注目すべき重大なる消息は、王正廷が東三省民間代表との會見において一、東三省と日本と締結せる各條約を一律に無効とすること。二、旅順大連及び南滿、安奉兩鐵道の回收準備を進めつゝあること。東三省の外交權はその一切を擧げて中央に屬せしむることを言明したと傳へてゐることで、また上海の新聞報の消息は旅大其他の回收案を提起せんとしてゐることおよび、東三省當局と日本との間に交渉中の滿蒙五鐵道問題を即時停止すべしと南京國民政府より命令したと報じてゐることである。日本と國民政府との交渉が行詰つて以來、國民黨部や反日會の猛烈なる日貨排斥の繼續的勵行と相待つて、國民政府の對日態度は俄かに硬化し、外交部長王正延の鼻息も大分荒くなつてゐるので、傳へらるゝ如き事柄は、日本いやがらせの宣傳の爲めだとして一笑に附する譯には行かぬ。然し、國民政府の手で現實の問題として、東三省外交權の中央移讓は早晩行はるるかも知れないが、東三省における日支條約の無効宣言や、旅大その他の回收案を近々提起せんとするまでに眞劍に考慮してゐるかどうかは、目下のところ疑問の餘地が無いでもない。尤も不平等條約の撤廢を對外方針の一大眼目とする國民政府の立場からすれば、南北統一した今日、いよ〳〵東三省の外交權を完全に收むることになれば、必ずやこれを問題として持出すに違ひない。旅大回收は、今日に始まつた譯でなく、大正十一年[illegible]

一個條條約無効の決議案に基き、露國との條約に規定された三十五個年の期限滿了を機會に、日本にその返還を要求したことがあつたが、日本はこれを一蹴したのである。北方軍閥の全盛時代に、北京政府が既に一度このことを持出した程であるから、國民政府が權力を握つた今日、こうしたことのあり得るのは、考慮に入れて置くことが當然であり、安全でもある。日本のこれに對する立前は、當時も今日も變るまいが、これが爲めに日支外交の紛糾を來たす恐れのあることは、今日と當時とでは丸で比較にならない。たゞさへ行詰つて動きの取れない兩國の關係は、若しこの問題まで飛出すことになれば、彌が上に油を注ぐこととならう。

四

そこで、日本はどうしたらいゝかといふ卑見を述べて見たい。滿洲問題の行詰りも、對南政策の行詰りも、田中内閣の對支外交が、要するに當を得てゐないからで、その根本的原因は、田中内閣の對支認識の不足、換言すれば今日支那における時代の大勢を無視してかかつてゐる點にあると思ふ。徒らに對滿積極政策を高調して、これを貫徹する確乎たる方針も腹もなく、相手方には最初は相當の威力を感せしめたが、それが、ゝに過ぎないことが知れ渡り、出先官憲すらその無方針と不徹に愛憎を盡かし、その結果は不統一を遺憾なくさらけ出し、支那側からはすつかり足許を見透されて、今日の如き散々味噌をつけ[illegible]

[illegible]

來ない點は多々あるが、[illegible]これをして[illegible]強硬な態度を取[illegible]んで反撥せしめてゐるのは、田中內閣の無理解なる、、的態度が與つて力あるのである。國民政府の現狀は複雜であり、また雜駁でもあるが、蔣介石と馮玉祥とが今にも喧嘩を始めるやうに思つたり、廣西派が分裂しさうに思つたりするのは、必らずしも眞相に觸れたものではない。曾て、ナポレオン三世が、プロシアの獨逸盟主たるを、他の各王侯が喜ばぬのを見て、獨逸の內訌を確信し、新興獨逸國民の旺盛たる統一熱の大勢に氣付かなかつたために、不覺の失敗を招いた。今日の國民政府を見るに、蔣や馮やの個人的關係のみを基礎において判斷し、支那統一の大勢を無視して、差支へないとすることは、ナポレオン三世の獨逸に對した短見に類するものといはれねばならぬ。

五

日本としては、良くも惡しくも、國民政府を唯一の支那政府と認めて、日支關係を時代ともに合理的に更新し、新環境に順應する外はないのである。颯々と方向を轉換し凝滯しない英國の遣方は賢明である。羨ましいものと思ふ。英にせよ。米にせよ。彼等の眼光は、田中內閣よりはずつと支那の大勢に徹してゐる。獨り日本の外交は、硬直のまゝ脫線し、果して何處まで此上に脫線しやうとしてゐるのか。滿洲問題の解決も、滿洲の局部的眼光に捕へられてゐては、解決出來ない。寧ろ、根本的に南方との大勢を認識してかゝらなければなら[illegible]りま、私は大勢を認識しやうとしないで、何時までもこれに逆行せんとする田中內閣の對支外交に無限の恐れを抱くものである。日本のヴアイタル・インテレストは飽迄擁護しなければならぬが、これとて、國民政府を認識してこれと取組み、讓るべきは讓り、援くべきは援けてやる雅量を示して日本としても初めて、護るべき權益の擁護を庶幾し得るので、かうした方法以外には望みやうが無いのである。然るに田中內閣は尙この上にも頑强にこれを拒否せんとしてゐる。、、、、、、、の風說とともに、南支に出兵せんとする內意が動きつゝあるやの噂さへある。萬一そんな事が起れば、それこそ、孤注一擲の暴擧で、狂氣の沙汰といふ外はない。マサカ本當に實現はしまいと思ふが、現在のまゝ日支相反撥する限り、その勢力の趨くところ、滿洲問題に限らず、何が飛出すか、凡慮の及ぶところでないことだけは確かである。

日支關係の惡化と滿鐵回收問題

中野正剛

一月十三日發の上海電報によれば、國民政府は愈々滿鐵回收の議を決し、襲學遂、張遠東の兩人を滿鐵回收事務の正副局長に任命したとの說があり、同時に國民政府は十二日奉天の張學良氏に對し「從來奉天當局と日本との間に交涉中の鐵道交涉は斷然これを中止し、總てを中央政府に移管せよ。もし日本が林總領事を通じて交涉繼續方を要求し來らば中央の命なりとして即刻拒絕せよ」と電命したとの報が傳へられつゝある。この報道に對し山本改造社長は私の所見如何を質だされた。

私の見るところによれば滿洲問題に、日本の全國民的關心の焦點である。滿鐵及旅大租借地を中心とする日本の權益は、形式及び實質に於て正當なる國際條約の基礎の上に立ち且つ東亞現勢維持の支柱をなすところの原則的理解である。この原則的理解は支那の衝動的策謀を以て一時に破壞さるべき性質のものに非ず、從つて、新國家創成早々の國民政府が、直ちに日本の心臟を搾んとするが如き行動に猪突し、進いでその建設所謂事業[illegible]斷じてこれなきを信ずる。國民政府の滿鐵回收說なるものは、斯かる意味に於て、一つの浮說にあらずんば、僞にするところの宣傳であろう。

たゞそれ、今日に於て、日支の關係は全面的に惡化した。獨り支那全土を通じて排日の惡氣流が橫溢するのみならず、滿洲に於ては、歷陰慘なる陰謀沙汰が繰り返され、それが常に、日本と關聯して考へられてゐる。今回の楊宇霆銃殺事件の如き、支那人同志の內面の經緯如何にせよ、歸する處、それが反日本的策動の大膽なる最後的爆發であることは、佛國の諸新聞紙がこの事件を以て「日本保守黨內閣の對支政策の全敗」であり「太平洋戰爭の危機」を孕むものと評論せるにも察すべきである。今日の日支兩國民間の空氣は、內閣當局が強いて空虛なる樂觀を裝ほへるに關らず、實は甚だ燃えやすく醱酵してゐる。

滿鐵及び旅大の回收問題が、今日問題たるべからず、又、問題になるべき實質上の理由もなくして、しかも、不自然に日支兩國民の感情

[illegible]切りを「電命」し得る位のことは今日當然あり得ることと思はねばならぬ。ここに於て、滿洲を國民政府と切り離して解決することに、一切の政策の基調を置いて來た現內閣の滿洲政策は根本から覆されて了つたのである。現內閣は昨年夏の南北妥協中止勸告に於て、滿洲に於ける青天白日旗の掲揚を抑壓した。全支那の排日熱と列國の猜疑を代償としつゝ、兎にも角にも、一二の鐵道交渉を成立せしめることによつて、辛うじて面目を糊塗せんとした。その計畫は無慘にも最後の息の根を止められた形である。滿洲の國民政府化は昨年十月十日、張學良が國民政府の委員に任命された時已に明瞭である。舊臘二十九日、遂に青天白日旗が奉天城に飜へつたことは、一應日本の對手にはならぬぞ」といふことを駄目を押したものである。然るに、當局は「改旗問題は表面上のことで、東三省內部の組織には變化はないと認むる。從つて、懸案交渉はあくまで東三省當局を對手としてつづける」と嘯いてゐたのである。今日この狀に對して、果して、如何の言を爲す餘地がある乎。當初現內閣は、對支強硬方針を高唱し「一城を讓づれば一城を陷られ、十城讓れば十城を陷らるゝ」を非として現地保護主義を力說した。今日、國民政府によつて、たとへ風說にしろ、滿鐵回收說を唱へらるゝが如き、現內閣自ら強硬政策の空中樓閣に舞踏し、爭端を排撥して、却つて自らの牙城に肉薄されて悲鳴をあげてゐるに異ならぬのである。

その時代錯誤の支那觀が支那の大勢に對して、背を向けてゐることに出發する。當局が事後に於て如何に辯護するにせよ、國民政府の組織が新しき支那の國家主義的理想に基礎づけられ、その全國支配の必然の大勢を認識し得なかつた。山東第二次出兵と、南北妥協中止勸告とがこの心理の二面的表現として行はれた。滿洲を含む支那全土に於ける日支關係があらゆる點に停頓し、しかも日本自ら局面を攻勢的に整理するの道義的自信を失つた所以のものは、現內閣の政策の基調が支那の統一そのものを否認せんとする不自然の基礎に出立してゐる致命的な理由からである。

飜へつて思ふに、現下の日支關係の混亂より、直ちに、兩國民が昂奮的結論に陷らざるの冷靜を保つことは、今日の事態を更に惡化せしめざるために、相共に深甚の注意を要するところである。支那の國民政府が排日の取締に就て、徹底を缺ぐの憾あることは、吾人が此際支那當局に對して、一層の注意を促さざるを得ぬところであるが、「田中內閣に對しては飽まで戰ふけれども日本人に對しては毛頭敵意はない」といふ種の口吻を屢々支那人の口から聞くにつけても、排日の問題は兩國爲政家の態度如何によりては、尚十分轉回の余地あるを示すものである。支那が大體として農業國であり、日本が工業國である現段階に於て、日支兩立し難しとの過度の悲觀に陷ることは禁物である。支那を主とする東洋諸國の政治的解放は日本の國家的生活に對する脅威

に非ず、實に日本の市場擴充の重要なる鍵である。支那の統一はこの意味に於て、日本の繁榮の一つの條件である。

　滿洲の國民政府化が日本にとつて、障害たり得るものは政策中の部分的のものである。日本の滿洲に對する關心が經濟的性質のものである限り、滿洲と支那本部との一元化は、兩者の關係を整理する上には必須の條件である。過去に於ける日支交渉を妨げたる最大の理由は、交渉の對象が親日的であるか、或は反日本的であるかの問題でなく、實は滿洲そのもの丶本質的な主人公を缺いだ點に存した。明治初年、大久保卿が臺灣問題を處理するに際して、初め北京政府から臺灣が化外の民であることの言質をとり、然る後第二の手段に出でた用意の周到なるに比すれば現內閣の待合政治的滿洲政策は正に五十年の時代遲れと稱するも不可ないのである。青天白日旗が滿洲に翻り、青天白日旗の下に於て、近代的支那國家が誕生した日こそ、日支全國民が此々たる技術的取引の域から飛躍して、日支兩國民の全國的握手により、東方の現勢に理想の一線を劃すべき絶好の機會であり得たのである。

　支那の政治的解放運動が、合理的に展開せらる丶限り、日本は實質的に、これを、、するの理由を有せざるのみならず、日本は隣邦としての積極的好意を持つものである。然ると同時に支那は、生産資源の貧弱なる日本の現實に對して、偏見なき洞察を必要とするのである。この兩面の調和こそ兩國の爲政界が平明なる政策の重心として、考慮を盡すべき點である。滿洲問題の本質的解決[illegible]純理論や乃至は素朴なる帝國主義策動のいづれによりても期待すべからず、日支兩民族の友情と現實的聰明によりてのみ庶幾し得る所以である。

　如上の大勢に顧みる時田中內閣は時局收拾の力無きことを剩す所なく暴露した。現內閣は速急に引責辭職すべきである。

厨川白村全集總内容

近代文學十講

●第一講　序論―一、緒言。二、時代の概論。●第二講　近代生活―一、世紀末。二、道德的方面。三、疲勞及び神經の病的狀態。四、刺戟。●第三講　近代の思潮(其一)―一、「世紀の病疾」。二、哲學と宗教。三、懷疑と個人主義。四、物質的機械的の人生觀●第四講　近代の思潮(其二)―一、近代の悲哀。二、思想界の暗潮。三、近代思潮と文藝。四、文藝上の南歐北歐及び英國●第五講　自然主義(其一)―一、過去の一瞥。二、浪漫主義より自然主義へ●第六講　自然主義(其二)―一、その名稱。二、自然主義の由來●第七講―一、科學的製作法。二、醜なる獸性の描寫。三、「人生の斷片」。四、精細なる「周圍」の描寫。五、個性の描寫。六、印象主義。七、短篇小說及び近代劇●第八講　最近思潮の變遷―一、新しき努力の時代。二、輓近の思潮と哲學科學●第九講　非物質主義の文藝(其一)―一、新浪漫派。二、文藝の進化。三、最近文藝史上の事實●第十講　非物質主義の文藝(其二)―一、心理解剖。二、輓近文藝の神秘的傾向。三、象徵主義。四、耽美派と近代の詩人

文藝思潮論

●第一　序論●第二　思潮史の回顧(古代)―一、肉の帝國。二、靈の曙光●第三　思潮史の回顧(中世)●第四　思潮史の回顧(近世)―一、近代思想の黎明。二、近代史の波瀾●第五　希臘思潮の勝利―一、靈肉合一觀。二、聰明の知力。三、現在生活の享樂。四、美の宗教●第六　Epilogue―現代文學の新潮

苦悶の象徴

第一　創作論―一、二つの力。二、創作生活の欲求。三、强制抑壓の力。四、精神分析學。五、人間苦と文藝。六、苦悶の象徵●第二　鑑賞論―一、生命の共感。二、自己發見の喜び。三、悲劇の淨化作用。四、有限の中の無限。五、文藝鑑賞の四階段。六、共鳴的創作●第三　文藝の根本問題に關する考察―一、豫言者としての詩人。二、理想主義と現實主義。三、短篇「一顆かざり」。四、白日の夢。五、文藝と道德。六、酒と女と歌●第四　文學の起源―一、祈禱と勞働。二、原始人の夢。

文學雜考

病的性慾と文學。文藝と性慾。藝術の表現。遊戲論。東西の自然詩觀。文學者と政治家。宣傳と創作。

近代の戀愛觀

近代の戀愛觀。再び戀愛を說く。三たび戀愛に就いて言ふ。結婚式を評す。戀愛と結婚のこと。有島さんの最後。かの一瞬を。黎明期の第一聲。

最近英詩概論

●第一章　英國近代詩壇の革新―第一節　佛國革命前後の英詩概觀、第二節　詩界の新潮●第二章　最近英文學の後景●第三章　新時代の代表的詩人―第一節　テニソン、第二節　ブラウニング●第四章　懷疑厭世の詩派―第五章　スパズモディック派の詩人●第六章　ラファエル前派(P・R・B・)第一節　詩人ロセッティ兄妹。第二節　この詩派の諸詩人

象牙の塔を出て

象牙の塔を出て。觀照享樂の生活。靈より肉へ、肉より靈へ。藝術の表現。遊戲論。勞働問題を描ける文學。文學者と政治家。藝術としての漫筆。現代文學の主潮。藝術より社會改造へ。英語の研究に就て(英文)。

十字街頭を往く

惡魔の宗教。僧正イングそのほか。文藝上のリアリズム。文藝と性慾。再び民衆の手に。演劇の觀客。西洋の「蛇性の淫」。强ひられたる文明。有島さんの最後。戀愛と結婚のこと。オオプン・フォオム。何が故の侮蔑ぞ。東西の自然詩觀。裸體美術の問題。西班牙劇壇の將星。ゴルスワアジイの劇論。ダンセイニの邦譯と新作。作家の外遊。宗敎と迷信。冷嘲熱罵。婦人と讀書。小泉先生の舊居を訪ふ。詩人クロオデル。人間讃美(絕筆)

狂　犬(飜譯小說)

狂犬。短篇七章。

小泉先生そのほか

小泉先生。果して虛榮の罪か。病的性慾と文學。ルウエイルの漫畫。お伽噺の話。わかき藝術家のむれ。詩人ヴン・レルベルグ。現代英國文壇の奇才。奇文一篇。ヴロットンの版畫。神秘思想家。老女優サラ・ベルナール。女の表情美。戲曲「亡靈」に寄す。英國思想界の今昔。ケルト文藝復興概觀。アナトウル・フランス。蘆笛(散文詩)。平和の勝利。

印　象　記

北米印象記。左脚切斷。太平洋上より。ジャック・ロンドンの小著。文藝通信。ナイアガラを見物せざる記。無言劇の復興。愛蘭文學の新星。歐洲戰亂と海外文學。米國の新劇團。米國の文學。米國研究に關する書籍。英字新聞より。

新刊

マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそれはボナーが適切にも言つた如く磨滅した通貨の如の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は[illegible]

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解說はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の內容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を喜惠する。その材料は著者が英國滯在中集め得たるもの、世に現はれざる

菊判アート・カンブリツク 定價三圓卅錢

四一五頁 索引六頁 送料十八錢

東京日本橋通

丸善株式會社

大阪 神戶 京都 名古屋

橫濱 福岡 [illegible]

東京―神田・三田・早稻田・丸ビル

伊豆温泉記

川端康成

1　南國の模型

自然の形のままの岩を無造作に並べて、例へば岩の多い山川の淵のやうな湯船、

「そこはまだ脊が立つの？」と、女はこはごは縁の岩につかまつて、うつかり中へ進むことが出來ぬ。踏み外したら、ずぼりと沈むのだ。つまり、底へ小石を埋めたり、板の簀子を張つたりする、面倒を省いた湯船なのだ。

それでも中程に申しわけばかりの板を立てて、男湯と女湯とに分けてはあるが、男はその下を潜つて泳いで行き、女達の足にぶつつかつて、ぽかりと浮ぶと、

「きやあつ。」と大騒ぎになる。男はまた潜つて男湯に歸る。

宿屋の食事を頼むと、一人や二人面倒臭いとことはる。自炊するよりしかたがないが、とにかく一部屋借りて一日二十錢か三十錢、五十錢も茶代を置かうものなら、手拭、繪葉書、石鹸、干魚なぞ、宿にあるものを皆揃へて土産に出す。合計の値段は茶代を食み出してゐるかもしれない。そして、荷物を持ちながら何町も送つて來て、宿の者は恐縮してゐる。

これは、鉛温泉のことである。盛岡の花巻温泉から奥へ入つた山の湯である。

伊豆も――とりわけ奥伊豆は野趣に溢れてゐる。しかし、この鉛程に素朴な温泉はない。

また、ある地の温泉では、湯船の眞中に板を渡し、藝者も客も湯につかりながら、その不思議な食卓に對ひ合つて飮む。と云ふ話を聞いたことがある。

伊豆にはこんな風變りな遊びのある温泉場はない。例へば、熱海温泉は町全體に色町の匂ひがある。伊東温泉は都會風に洗はれてはゐないが、女遊びの網は熱海よりあらはに張られてゐる。玉撞き場なんかへ藝者が呼びに來るさうだ。

伊東の音無森では、例年十一月十日の夜、臀摘み祭がある。氏子達

はその日歌三味線もつつしむ。謡へ謡るのに提燈を禁じる。そして、無燈無言で祭式を行ふ。だから神酒を飲むにも、順々に臀を摘んで盃を送る。

「送るのは盃ばかりぢやないでせう。」とは誰しも思ふ。

人知れずあひし昔をしりつみの
祭に神もおもしいづらん
（高崎正風）

昔、謫居の源頼朝が伊東祐親の娘八重姫と、この森で忍び逢つたといふ。それゆゑ音を忌み、音無森——側近くに音無川、鳴らずの瀬などがある。

とにかく、臀摘み祭は伊東の特産物ではなく、いろんな地方に散在する奇習である。

「萬葉時代の歌垣と同じやうに——近江の筑摩の鍋被り祭なんかも名高いが、上古の亂婚の遺風だといふ人があるね。」

「さうかもしれない。しかし、その祭が伊東にある場合は、特に町の感じを現すものになつてやしないかね。」

けれども、雲國の或る温泉のやうに、旅館が直ちに娼家であると云へるやうな温泉は、伊豆にはない。

また、下田の古老の松村春水氏は唐人お吉傳で、下田を異人國と卑しめられる。これはお[illegible]伊豆の[illegible]

みの酒量しか持つてゐない。

伊豆の温泉廻りさへすれば、到るところ海の乙女山の乙女が、ロマンス待ち顔に旅人を迎へるかのやうに思ふのは、大きな間違ひだ。凡そその反對の顔ばかりと思つていゝ。天城の北、狩野川の流れるところ、いはゆる口伊豆では、このことが一層甚だしい。

そもそも伊豆の國は、神龜元年に遠流の地と定められて、比較的重い罪人を流す、都遥かな配所だつたのだ。東海道の箱根道が開かれたのが平安朝の初め、しかしまだ足柄道の方を選ぶ習はしであつたから、その頃は人も通はぬ國だつたにちがひない。歴史に誌された一番古いのが、天武天皇の時に麻續王の長子、その後名高い流人は數へ切れぬ程だ。

その恐しい遠流の國が、いつから、そしてまたなぜ、詩の國として人々を惹きつけるやうになつたか。

「無論、伊豆が生き生きと動き出したのは、頼朝が蛭が小島で旗を擧げてからだよ。彼が遠い京都から近い鎌倉へ、政治の中心を移して來てからだよ。——志賀烱川さんは、日本歴史の縮圖の土地を求めるなら、口伊豆だと云つてゐる。」

「その史蹟と傳説といふ奴が、伊豆では實にうるさ過ぎる。干物を百種類も並べた膳に坐らせられるやうだ。名所舊蹟を訪ねたくて伊豆へ來る者が、今時千人に一人あるかね。新鮮な興味のあるのは、幕末[illegible]

だ。その頭を子供心に覺えてゐる古老が、生きた話をしてくれるから
ね。」

「そんなことよりも温泉さ。」には違ひない。

湯「出づ」から、伊豆といふ國の名が起つたと稱へる俗説もあるくらゐだ。海岸線五十五六里、面積百四方里の半島に、二十四個所の温泉が湧き出てゐる。別な數へ方をすると、三十三の温泉だ。十二村、三ケ町が温泉場だ。

傳説よりも温泉だ。歴史よりも地理だ。例へば、修善寺を歴史的温泉とすれば、熱海は地理的温泉だ、と云ふ人がある。熱海の勝利は地理の勝利にちがひない。

ところが、初めに書いたやうに、その温泉は人の感情を抜く程の變り種ではない。伊豆を詩の國とするのは、出で湯よりも風景だ。海の美しさと山の美しさを持つた半島だからだ。

「しかし、日本三景、日本新八景、その一つだつて伊豆にはないぢやないか。」

「いかにもね。だが、その風景を見る眼をもう少し擴げて貰ふんだな。伊豆半島全體を纏めて一つの景色と見るくらゐにね。そしたら、新三景の首席になるかも知れないね。伊豆を國立公園にしようといふ説もあるが、いかにも公園の繪だわ。伊豆には風景のあらゆる美しさの模型がある。」

そして、詩の國と繋いでゐる郷土の特徴は、伊豆が南國の模型だからだ。熱帶の感じを小さくしたのが伊豆、と誰かが云つてゐた。熱帶を南國の大きい模型とすれば、伊豆は南國の小さい模型だ。

伊豆には、椿の花、蜜柑類、紫陽花、石楠花、海の色、鹿、植物の醍醐的な繁茂、河鹿——

石楠花は高山植物だが、天城では南國的に花を開く。熱海の渠裁判所の庭には、サボテンが私の頭より高く、熱帶的なふてぶてしい茂りやうだ。

伊豆の海山は男性的なところもあり、より多く女性的なところもある。南國の男と女と、それも人形のやうに可愛い——。

2　肌觸りと匂ひ

温泉は勿論丸裸の皮膚で、すぽりとつかるのだから、觸覺の世界だ。肌ざはりが頭を痺れさせて來る喜びだ。湯にもいろんな肌のあることは、女と同じである。

私が知る伊豆の湯で、一番肌のいいのは長岡だつた。宿はたしか大和館だつたと覺える。これは卵の白味のやうに、つるつると粘つてゐる。女が入湯すれば、いかにも肌理が細かになり、滑らかになりさうな感じだ。長岡へよく行く人に話すと、お世辭かもしれないが彼は、

「ほんたうにさうらしいですよ。」

しかし温泉の效能書に、肌を美しくするとは書いてない。

けれども、例へば伊東の淨の池には、

「天然記念物淨之池特有漁類棲息地」

と書いた石標が建つてゐる。湯鯉、横縞魚、迅奈良、蛇鰻なぞ、天然記念物に指定される程奇怪な魚が棲んでゐたと云ふ。その池の水がなまぬるく、つまり温泉の湯だから、特有の魚が育つたのだ。温泉が魚の肌を變へるなら、人間の肌も美しくしないとも限らぬ。

そんなことはじやうだんに過ぎないが、例へば船原、あすこの湯の肌は皮膚病の人間のやうだ。それがまさしく皮膚病に効くと云ふから不思議だ。鈴木屋の内湯へ行くと、まともに見られぬ皮膚病の男、それに皮膚病のやうに水垢が多く、黄色く濁つた湯、私は早々に飛び出した。部屋へ歸ると、髮を振り亂し、頭のてつぺんを大きく剃つて氷袋を縛りつけたヒステリイ女が、凄まじい形相で廊下越しに睨みつける。廊下へ出ると、日光浴をしてゐた結核の男が話しかける。

船原へは二度と行くまいと思つた。けれども、二三年前にホテルが建つて、その頃とはすつかり變つた。名ばかりでない洋館のホテルは、熱海以外ではここだけかと思ふ。

また、湯ヶ島の西平温泉は、天城の山氣らしく嚴しい肌ざはりだ。熱海の湯ざはりには、黑潮の暖流が流れてゐる。

しかし私には、湯の肌ざはりよりも先づ湯の匂ひだ。

湯ヶ島について云ふならば、天城街道で乘合自動車を捨てて、谷に下りる路に一歩踏み出すと、谷の音に乘つて湯の匂ひが漂つて來る。

[illegible]

すりつけて、綿にしみ込んだ湯の匂ひを嗅ぐ。湯船に身を沈めて、湯の匂ひを一ぱいに吸ひ込む。

「この匂ひが嫌ひかね。それぢや君は温泉が嫌ひなんだよ。——煙草好きが匂ひを樂しむやうに、いろんな温泉のちがつた匂ひを嗅ぎ分け給へ。」と、私は同行の友人に云ふ。鼻の曲る程烈しい匂ひの温泉は、伊豆にはないやうだ。

湯の匂ひばかりではない。温泉場程いろんな匂ひのあるところはない。岩の匂ひ、樹木の匂ひ、壁の匂ひ、猫の匂ひ、土の匂ひ、女の匂ひ、庖丁の匂ひ、竹林の匂ひ、神社の匂ひ、馬車の匂ひ——。温泉がもろもろの匂ひを感じさせるのだ。東京の錢湯でも、上つたばかりの時は、鼻がよく利くのと同じ理窟だ。

「あの女は今——。」と、私はよく云つて、友人に笑はれる。全く温泉宿では、女のその匂ひがひどいのだ。温泉に長くゐると、温泉を離れてもその匂ひが鼻につくやうになるのだ。

いくら厚着の女を見ても、湯殿で會ふ時のやうに、その體の形が分るやうになるのと同じだらう。

3　男女混浴

嗅覺のとりわけ鋭いギイ・ド・モウパッサンはお湯が好きだつた。

「凡そ温泉場なるもので、一種獨特の臭いものは——っ」と私は云

[illegible]湯殿の女に[illegible]
れに彩色するに致つては──。」
相手があいまいな笑ひを見せると、私は更に、
「畫家にも念の入つた人があつて、例へば石川寅治氏なんか、わざわざ天城の麓までモデル女を引つぱつて行つてね──湯ヶ島の湯本館の裏の谷川に、大きな岩の湯船があるんですが、それに二三人の女が浴するところを描いたといふ話です。銀座の元のカフエ・プランタンにその繪がかゝつてゐたのを、僕も見たことがあります。中澤弘光氏も温泉の女姿を澤山スケツチしてゐるやうですね。」
勿論、これら大家の繪は手拭の女と較ぶべくもない。しかしながら、山の湯で見る女の裸は、銀座のカフエにある繪から思ひ及ぶべくもない。俗にいふ千人風呂──大きい湯船が自慢の宿屋は、女中達なぞがその湯にしやつちよこばつて入つてゐる繪葉書を、よく土産に出す。あの寫眞の阿呆らしさからは、尚更思ひ及ぶべくもない。
「だけど、温泉だつて男女混浴は禁じられてるんぢやないですか。」
「禁じられてるらしいですね。少くとも伊豆ではどんな田舍へ行つたつて、形ばかりにしろ、男湯と女湯との隔てのない共同湯は先づないでせうね。それが可笑しいんですよ。混浴に慣れない客が來る宿屋の内湯には、却てその隔てのないのが多くて、子供の時から慣れてゐる村人の湯には、それがあるんですからね。しかし、女の裸を見るのが珍らしいなんて温泉場も、めつたにありませんね。」

りでなく、東京へ近さは近く、温泉つきの別荘地や町の目拔きの場所の地價は、東京市内の目拔きでないところより高く、坪二百五十圓から三百圓。
「熱海で安いのは油ばかりです。」と、椿油屋のおかみさんの云ふのが噓でない程に、全國の温泉中での都會だ。
だが、町の共同湯からは手拭一つの女が、道端へ涼みに出てゐる。細い道を歩いてゐると、湯氣が足首を舐める。穴倉のやうな女湯の窓の上を歩いてゐるのだ。
小澤湯といふ湯屋の二階は碁會所だつた。女達が裸の片膝を立ててゐる脱衣場を通り拔け、地の底の湯船を見下しながら厠へ行く。碁盤の上に湯が匂ふ、湯女のゐた大江戸の湯屋を思ふ。
間歇泉のある大湯、錢湯の萬人風呂なぞの二階も娛樂場だ。その廣間で書畫骨董の即賣會や東京の呉服屋の出張大賣出しがあつたり、素人義太夫會があつたりする。眞下の湯船から浴みする聲が聞える。とにかく熱海でも、女の裸は珍らしくない。この珍しくないといふこと──温泉の男女混浴の味ひはこゝになければならぬ。
「夏の海水浴場を、男海と女海とに分けたとして、その殺風景な不自然さを思つてもみ給へ。」と私は云ふが、温泉の男女の隔てだとて、湯に育つた土地の人々には、全くこれに近い感じかも知れぬ。
夜の大雨が美しく晴れ上つた南伊豆の小春日和の朝だ。山川は土色

の激しさに溢れてゐる。宿屋の内湯にゐる私を川向ふの村湯から見つけて、旅藝人の娘が裸のまま川岸へ走り出し兩手を高く伸しながら、何か叫んでゐる。その體を日の光が白く染めてゐる。——湯ケ野溫泉のことであつた。

湯の町の匂ひは裸のすさまじさをやはらかくする。でも、熱海のやうに店の立ちならんだ道で、それを見るのはいけない。山川を隔てて見るのでなければ。木がくれの湯の窓に見るのでなければ。竹林のそよぎ、波の音の傍に見るのでなければ。

母子づれ、または男となく女となく誘ひ合せて打ちつれ、谷川添ひの路を提燈の火で湯に行く。そして湯船は村人達ののどかな世間話の樂しみどころ。山の湯の老人達は實に長湯だ。湯船の縁に腰かけ、長々と寢そべり、次々に來る人と語り、半日を湯で過すことも珍らしくない。深夜人のない湯船が戀に使はれることがあつても、それは極めて稀だ。なにげなく、そしてのどかな混浴だ。男湯と女湯の隔てがあつても、その隔てを忘れてゐる。また、形ばかりの板簀子の隔て越しに見える女湯は、却て風情だ。あちらこちらの湯で私は、

「ここの湯も實に可笑しいね。湯船には男と女の別があつて、脫衣場は一つなんだからなあ」

長くゐると宿の女達が、

「これから[illegible]に來る。」

を出し、湯船の縁に頬をべたりと投げて眠つてゐる。葉漏れの月が射し込んで、硝子戸の中の湯氣は霧の夜の瓦斯燈じみたほの明るさだ。河鹿の聲が月の光に浮んでゐる。揺り起すと、二本の指で瞼をむりに開いて見せながら明るく笑つて、

「またあの乾物屋が來たんですもの。夜が明けるまでここにゐようと思つて——。」

乾物屋は月の中頃と末とに沼津から掛け取りに來る商人の一人、必ず酒に醉ひ、必ず、、、、、、、、、、十年この方變りがない。

圓めた座布團に長襦袢を着せた人形を寢かせといたり、いばらを忍ばせたり、冬の寢床に氷袋を入れたり——女中達は手を變へ品を變へて寢床を守る。戸の錠くらゐはちぎり取られてしまふ。廊下の戸につつかへ棒をすると、物干によぢ登つて裏窓を破る。女中の代りに宿のおばあさんが床にもぐつてゐても、朝まで、、、、、、、、、、。度重なると、女中の寢床を守る氣持は遊戯となる。その遊戯も面倒臭くなる。神經の新しい小娘は、湯船で眠らなければならぬ。

乾物屋ばかりではない。湯治客のうちにも、とにかく女中部屋へ乘り込まないと、虫のおさまらぬ癖の男がゐるものだ。

その小娘の胸には、湯のために赤い輪が殘つてゐる。それを笑ひながら、妓女の身の上話[illegible]

思ひつめた駈落ち者が深い湯に溺れてゐるのは、見るも哀しい。娘は部屋を一足も出たがらず、夜中の湯船に抱き合つてめそめそ泣いてゐる。同性愛の女教員二人が晝も夜通しでゐたことがあつた。これなぞは女中達も障子に穴をあけて覗く。しかし、心中しさうな男女は、なんだか近よりがたい。その彼等を捜して姉夫婦が來る。四人が一つ湯船に沈んで固くなつてゐる。やがて姉が妹の腿に小さい創痕を見つけて、

「あら、まだあるわよ。」と幼い思ひ出にはしやぎ出す。子供の時に喧嘩して、姉が火箸で突いた創なのだ。妹が生きて見つかつた嬉し涙を、姉は手拭でざぶざぶと洗ひ落す。そのきつかけで、初めて會ふ男同志も親しみ合ふ。混浴はこんな氣持でありたいものだ。

醉つたまぎれの娼婦二人が、谷川の石傳ひに客を引つぱつて、寢靜まつた宿の内湯へ裏から忍び込んで來る。どうしたものか、それに村の百姓娘が一人まじつてゐる。娼婦達が男の背を流しはじめると、娘も負けずに一人の男のうしろに膝を突いて、腰を浮かせる。そこが、三月前のサラブレツト種の馬のやうに張りつめた美しさを失ひ、新しい圓みである。彼女は十六だ。次の年は沼津の牛肉屋の女中になつてゐて、村に歸つた時湯船で會ふと、豐かな女らしさに體の線がくづれてゐる。美しいものゝ毀れるいたいたしさが、私を悲しくする。

「新婚旅行で温泉に餘り長くゐるのは止し給へよ。」と私は人に教へ

裸の女は決して美しくない。形の美しいのはまこと千萬人に一人、一年湯の宿にゐて一人見られれば神の恵み——それには頭が下つて、まともに目を向けることが出來ぬ。

或る新聞に三助の言葉として、

「女なんてまるで芋みたいなもんでさ。裸よりか着物を着た方が、ずつと魅力がありますよ。」

三助の強がりではない。混浴に慣れた者も同じだ。裸よりも着物を脱ぐ時、着る時——脱ぐ時の縮んだ淋しさよりも、着る時のゆるやかな温かさを私は取る。

だが、例へば淺草の松竹座樂劇部のボオドビル——あの日本の娘のダンスを映畫の中の毛唐の女達のレヴイウの場面なぞと直ぐ續けて見ると、日本の女の體の貧しさが悲しくなるが、その悲しさには、素樸じみた幼さ、子供の自由畫じみた温かさがまじつてゐる。この幼げな温かさは日本の女の體の線のよさかと思ふ。だから、湯船の女にも美しくないゆゑの親しさといふものもあらう。

湯船の中で一番見るのが厭なのは、知り人の細君。それから、客につれられて來た遠出の藝者、恥しがり過ぎる女。少しも恥しがらない女。一番見るのが樂しいのは、新婚旅行の花嫁。それが温泉場を二つ三つ廻つて、混浴しかたがないと幾らかあきらめた頃。ほのぼのとし

た新しさが、こちらにしみる。それから女學生の團體。こちらが健かになる。それよりも、なにげない村の男女の間に、ぼんやり湯に沈んでゐることだ。けれども、なんでもない男の背をなにげなく流してゐても、女の腕は突然ぶるぶると顫へ出さないとも限らぬ。そして、

「十二三から下の女の子は、却て湯の中でべたべたと甘へたがるものかと、思はれることがありますね。女の本性たがはず！。」

4　異風の湯

獨鈷の湯

弘法大師十八歳の時來りて、惡魔降伏の法を修す。後大同二年再來りて、佛像數軀及自像を刻み安置す。——（修善寺寺記）

この大同二年が修善寺の創立、その時留錫中の大師が獨鈷で、桂川の流れの巖を掘ると湯が出たのだと言ひ傳へる。

おのづからくぼめる岩を湯船にて
いで湯あむなり伊豆の里人　（大口鯛二）

谷川や一つ流れの岩がねを
いかに湧きたるいで湯なるらむ（本居豐穎）

今もその岩を湯船としてゐる。岩の上に石造の獨鈷が立つてゐる。天明年間に修善寺僧の大鼎和尚が作つたと云ふ。小岸から板を渡つて岩へ行く。大正の初め頃はまだ四方硝子張りの湯殿であつた。虎溪橋[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]する人が見えたであらう。は板格子張りだ。しかし、川瀬に浮で浮見堂のやうな湯殿だ。湯口もその岩にあるので、湯の湧き出るさまが見られる。一たい修善寺の溫泉は、角閃安山岩の岩脈の兩端とその割れ目とから湧くのださうだ。幅一丁程のこの岩脈は、桂川を南北に横斷してゐて、獨鈷の湯はその西の端、少し川下の白糸瀧は東の端にあたるのださうだ。（八木昌平氏著北豆小誌による）。

溪流の中の自然の岩の湯船は、ここと湯ケ島湯本館と、伊豆には二つしかないかと思ふ。湯ケ島のは石川寅治氏が描いた湯瀧だ。しかし、これは竹の樋から岩へ湯を落したに過ぎないもの、獨鈷の湯のやうに川瀬の岩から湧くのではない。そのかはり、湯殿のない露天、川向ふはそそり立つ杉山、女は湯瀧で髮が洗ひたくなる爽かさだ。

「ぐるりに宿屋が立つた川の中の湯になんか、白々しくつて入れるものかね。」と、私は修善寺で笑つた。

「しかし、とにかく伊豆の名湯にはちがひないのだらう。」

「さうさ、古さから云つてもね。——修善寺には歷史つきの名湯が外にもある。例へば今の四方樓の杉の湯は、昔熊野神社の境內の神湯で、伊勢長氏が時々入りに來たんださうだ。源賴家が殺されたのもこの湯だとも云ふし、また淺羽樓の湯だといふ說もあるんだが、弘法大師と同樣あてになりやしないよ。」

元久元年七月八日於浴室中被害（鎌倉大日記）

修禪寺に於て、[illegible]

には得とりつめざりければ、頭に緒をつけ、陰嚢を取りなどして殺しけりと聞えき。（愚管抄）

「芥川龍之介氏だつたかの小説に、酒を飲んで温泉におつとつかつてゐて、朝までのうちに自殺を果したといふのがあるが、獨鈷の湯を夜更けに覗いたら、そんな感じがするかもしれないね。新井旅館のあやめの湯といふ古風な湯船にも、尾崎紅葉がどうとかかうとかの話がある。」

小島の湯

谷川の湯の話で思ひ出した。

湯ヶ島の夏、夜の客も村の子供も早瀬の淵に泳ぎ戯れ、體が冷えると岩の湯船で溫まる。湯船に入つてゐると、子供達は向ふ岸の岩の間にしやがみに行く。

「どうしてみんなあの岩へ行くの。」

「あすこに湯が少し出てゐるんです。冬になると渡り鳥がよくあすこへ下りるので、捕へようと思つて行つてみると、お湯が湧いてゐたんです。それで、漁師が石を集めて湯船を拵へたんです。小島の湯です。」

もとより、[illegible]を入れるだけの湯[illegible]しかし、この子供の答へは、[illegible]の温泉が[illegible]かた秘事だつた。今の世では湯[illegible]の權利[illegible]、またその所[illegible]

[illegible]

出來湯

この子供の溫泉ごつこの小島の湯のやうに、いかにも自然に出來た感じの湯は、伊東の松原區の出來湯だ。寶永年間の發見と云ふ。湯船の底が道路と水平――つまり少しも掘り下げないのが、よそには見られないこの湯の珍らしさだ。廣々とした葦や茅の茂みの中に自然と湯が湧き出てゐた。それを長さ二間ばかり石材で桝形に圍んで湯船とした。かうして出來たのだと云ふ。だから、桝湯といふ通り名がある。底の砂利一面から、ぶつりぶつりと泡立つて湧いてゐる。湯の中に青みどろのやうなものが生えてゐる。それを友人に覗かせて私は、

「ただ石を運んで來ただけの無技巧さが面白いし、それがまた湯の豊かな伊東を思はせてもゐるぢやないか。」

伊東は南、西、北の三方が天城、巣雲の火山に圍まれ、東が海に開けた、沖積層の海岸平地、一方里程の狹さだが、それでも伊豆の東海岸では最も廣い野のある港、昔から伊豆七島へ出漁船の唯一つの避難港、そしてまた伊豆の溫泉場のうちでは廣い方だ。ばかりでなく、大正十年には湯口が四百九十四ケ所、それが大正十五年四月までには八百箇所、その後も續々新溫泉が發見されたであらうし、松川のほとりから海岸へかけて、どこを突ついても湯が出ると云つていいくらゐだが、とにかくこの數字だけでも分る通り、伊東は伊豆の溫泉中で最も目覺しい發展を遂げつつある町だ。また、これからもさう[illegible]ゐるであらう町だ。

修善寺温泉は既に老いた。東京山の手の屋敷町か、田舎の城下町かの古い落ちつきだ。温泉宿では新井へしか藝者が入らなかつたが、今も變りはないかと思ふ。そんな風に家族向きだ。長岡温泉は明治四十年五月に大和館の主人が掘つたといふ新しさ、それから東京郊外の新開地のやうな勢で宿屋が立ちならんだだけに、温泉場全體が安普請の借家の感じで話にならぬ。熱海は例へば古い呉服屋の越後屋が三越百貨店となつた、花やかさと狹さ、もう滿開近い花である。金を知つた女である。いづれも發展の餘地が少い。

そこへゆくと、伊東が生き生きと動き出したのは、熱海から自動車道が開けた近年だ。鄙かな處女地らしい面影は、まだこの桝湯にも殘つてゐる。

吉奈の大湯

駿陽城畔一貴侯得妻累年無子。參禮觀音薩埵求一子蒙靈夢。欲得好子者往豆州浴吉奈靈湯必得一子。夫妻共歎來此郷浴湯經半季得一子。

この古記通りに、子供が出來る湯として全國的に名高い温泉だ。京大阪からも子供ほしさに遥々と來る。女の湯だ。

　寶見ねどあかぬ手弱女うば玉の
　　吉奈の里に誰とかぬらん（小出粲）

男ばかりで吉奈へ行くと云へば、婦人客が目あてかと冷かされる程に女の湯だ。宿屋で男を多く使つてゐるのが目立つのも、女の湯だからだ。

母になりたい女の一念は、氣ちがひじみて、時には物凄い怪しの火だ。――と今更胸を突かれる話を、この湯で聞くことがある。子を授ける松の大木があつた。夜明け前などに女が人目を忍んで、この木を蛙のやうに抱きつきに來る。（それからは書けない。）、、、、、りをまた、村の若者が盜み見に行く。風儀をみだすとあつて、この名物は十何年前に縣廳の命令で切り倒されたさうだ。

「その材木で家が二軒も立ちやしたぜ。」と、湯ケ島の散髮屋の思ひ出話だつた。

今も尚、東府屋の小さい柿の木には「子持柿」と立札がしてある。こんなものよりも、直ぐ傍の石楠花の大木――この花木の丈が特別に伸びると云はれる天城、その山にもあるまい見上げるばかりの古木、大輪のつつじの花束のやうに咲き揃つた驕りの春は、この一本の花を見るだけに吉奈へ行つてもいい、その石楠花をなぜ名物としないのか。

「吉奈つて、ほんたうに子供の出來る温泉ですか。」と、大阪で聞かれたことがある。

「さあ、非常に温まるお湯だから女にいいにはちがひないでせうか、實に皮肉なことがあるんです。東府屋とさか屋、この二軒しかない温泉宿に兩方とも子供が出來なくて、貰ひ子なんですよ。」

七八ヶ所から湯が出てゐるが、子が授かるといふ名湯は大湯だ。聖武天皇の神龜元年に行基菩薩が[illegible]して、諸國巡遊の途すがら、

この地に行基菩薩善名寺を開き、藥師瑠璃光如來の像を彫み、一然尊谷安置之後、忽湧出靈泉、異香四滿矣」と書き傳へられてゐる。湯船は自然の石を素朴に組んで古風だ。小石の底から湧いてゐる。しかし、一時間も沈んでゐないと温らぬぬるさ、子のほしい女のおつき合ひは到底してゐられぬ。

この名湯のぬるさは吉奈の人氣にかかはるとあつて、二三年前に村人が底を掘り返さうとした。内湯をさわつて貰ふまいと、東府屋が苦情を云ひ出した。昔からの共同湯だと信じてゐた村人達は、夢かと驚いて調べてみると、以前この湯のことで縣廳へ何かの屆け出をした時、村の委任を受けた東府屋は自分一人の名儀で、したのだつた。それを村は今まで知らなかつたのだ。そしてたうとう法廷の爭ひとなつた。これは村方の云ひ分だ。東府屋の云ひ分は知らぬ。

しかし、例へば修善寺の新井旅館も町を相手の訴訟をしたことがある。湯ヶ島と落合樓も村と爭つたことがある。何か一流の温泉宿にしたか。熱海では大きい旅館の陰に、貧しい町民が屋賃や諸物價の暴騰に苦しんでゐる。土地の繁榮のためには土地の娘を娼婦にして顧みぬところが多い。客が湯で温まつてゐる時、宿の女中は指の霜燒けを縫針で突いてゐる。彼女等の夜具や食物はどうだ。そんなことを知るやうになれば、温泉情調も何もあつたものでない。

世古湯

吉奈の大湯がぬるい今、猫越、達磨の兩火山に源する、狩野川とその支流の温泉のうちでは、温まる湯として、昔から伊豆の人に知られた名湯である。二三年前に有田ドラッグ氏が天下の靈湯と折紙をつけた。湯ヶ島の松崎街道から、急な石段を猫越川へ下りると、流れのほとりにある共同湯だ。近頃立派な湯殿が建つて、山古い感じはなくなつたが、谷の深さ、岩の大きさ、淵の青さ、流れの清さでは、伊豆のいはゆる名湯中の第一である。

夕かげであみんとすれば奥山の
いは根の湯つぼ月ぞ宿れる（金子元臣）

友寢して猿と月見ん石の上　（也有）

それは昔としても、湯の傍で鮎や山女が釣れる。湯船の底からぼこりぼこりと泡が出る。この泡に觸れるのが體に効くと老人は云ふ。

こころせよ山女つる子ら早川の
石つぶらなり苔もむしたり。（金子元臣）

寶温泉

天城を南へ越えた奥伊豆にも温泉は多いが、異風の湯に數へる程のものはない。下加茂と峰との吹上温泉は僅かにそれと云へようか。峰温泉は昭和二年の發見で、四十尺の高さに熱湯が噴き出すと云ふ。手石川のほとりの下加茂は古くからの湯だが、吹上温泉は大正十年頃に岩崎吉太郎氏が掘つた新しさ、高さ三十尺、それを寶温泉と名づけた。噴泉はパラソルを箱に入れたやうに、高い箱形の筵か何かに包まれてゐたが、その隙間から湯の霧が吹いてゐるのを、私は遠くから見た。

またここには、溫泉を利用したので名高い溫室がある。やはり南伊豆で萊豌豆の溫室栽培に一生を送りたいといふ、園藝學校の學生に會つた時私は、

「あの溫室はずゐぶん廣いが、正月に入つてみると、カアネエシヨンの花ばかりでつまらなかつたですよ。」

「でも、カアネエシヨンはクリスマス時分に、一輪十錢十五錢するんですよ。」

「だとすると大したものだ。」

吉田松蔭での蓮臺寺溫泉、曾我兄弟の谷津溫泉、南伊豆で溫泉場らしい設備の稍整つたのはこの二つと河內溫泉だが、珍らしい湯船はない。

○

土肥溫泉の洞窟じみたまぶの湯は入つたことがなく、また熱海の間歇泉は餘りに知られてゐるから書かない。

私の伊豆溫泉記は以上につきるわけではない。

天城の植物、鹿獵、熱海名物の情死、浴衣と女、溫泉場の移動娼婦と旅藝人、下田の港、日本造船史と伊豆、幕末江川太郎左衞門のことども、狩野川、奧伊豆の港の風習、東海岸と西海岸、一大遊歩場または自動車のドライブ場としての伊豆、いはゆる伊豆循環鐵道開通後の豫想、湯の宿の女中の話——等等も書くつもりだつたのだか、今は稿を新にするより外はない。

アムステルダムを中心に

——私の滯歐日記——

在ロンドン改造社特派員　木村　毅

一九二八年七月二十三日。晴(ロンドンにて)

テームズに練習してゐる日本のボート選手の口から出たのだと言つて、大變な噂話を放送した者がある。——今頃からオリンピックを見に出掛けたつてどうなるものか、第一、旅館が滿員で寢る所がない。第二には切符が手に入らぬ。これは水泳のだけでも八十圓、全體を通じては參百餘圓を要するのだが、それにプレミアムが付くから天井知らずだ、等等。

そんなら折角だが、アムステルダム行きは止めだと、二三の氣早な友人はその場ですぐ斷念した。だが私は少し考へた。

切符が手に入らないとあれば、私は、必ずしもそれを見なくたつていゝのである。もともとオランダは私に取つては長い間の憧れの國だ。南蠻紅毛の歴史に幾分の興味を抱くものに取つて、オランダは特殊の魅力を持てゐる。で、今度歐洲に渡つたについても、オランダを訪ふことは私には、書き入れのプログラムの一つになつてゐたのだ。それにオリンピック競技に甥(背泳選手木村象雷)も來る。ならう事なら彼に會つて、私が日本を立つてから後の留守宅の樣子も聞きたい。——宿は或る素人下宿を紹介して貰つてゐるので、その方の心配はない。

だから私はどうあつてもオランダへは行くのだ。只、同じく行くとなれば折角の機會だからオリンピック競技も見ないよりは見た方がいい。幸ひと大阪毎日新聞の觀光團が來合はせてゐる。彼等の中には運動競技なんか見たくもないと云ふ連中が相當に多いと云ふ話だから、都合に依つてはその切符が融通して貰へないにも限らない。

——さう思つて、日本を出る時紹介狀を貰つてゐたのを幸ひ、大阪毎日新聞ロンドン支局に高田氏を訪ふた所、早速に快諾してアムステルダム駐在の特派員上原氏に添書を書いてくれた。

七月二十四日。曇

午後滿鐵の留學生なる多田君と一緒に議會傍聽。今、英國に於ける最大問題の一つたる失業者の所置について、前の勞働黨內閣の首相なりしマクドナルドと、現在の保守黨內閣の首相なるボルドインと一騎打の舌戰。――言葉が分れば嘸ぞ面白かつたのだらうが、何しろロンドンへ草鞋を脫いでから丁度二週間目の私には、多少の單語が聽き取れただけだ。

七月二十九日。曇。

日刊デイリイミラアに今度、オリンピック競技へ出場する最高年齡の選手として、六十何才かの日比野マラソン先生の寫眞が出てゐる。今日開場式だ。

三十日。午前晴、午後大雨。

午後二時、ロンドンの下宿を立つ。これも滿鐵の留學生なる關屋君のカアで、且つ同君の操縱で、エセックスを橫斷する。丁度こちらの麥秋で、刈られた麥が雨に霑ふて枯草のやうな匂ひを漂はして來る。

『君は乾草の匂ひは好きかね。』と、關屋君が聞く。

『嫌ひではないね。』と、私が答へる。『夏休みに水を泳ぎに行つて、池の堤で乾草の匂ひをかいだ子供の昔が思出されて懷しい。』

『さう云ふ聯想と切りはなしたらどうだ。』

『エヽそんなら嫌ひ好きと云ふ程でもないさ。』

『さうだらう。所がこちらの國は違ふね。あれが好きで堪らないと言つて乾草の中に顏を埋めて、いつまでもその匂ひをかいでゐるのがゐるよ。香水にもヘイと云ふのが特別に出來てゐる。』

ハルキッチの港近くは、一寸、銚子から犬吠岬へ行く間の景色を思出させる。さう言へばこの港は正に英國の犬吠岬と言つていゝであらう。只、犬吠岬が廣い太平洋を隔ててアメリカ大陸と向き合つてゐるのに反し、ハルキッチは狹い海峽のすぐ向うに歐洲大陸を臨んでゐる點が、違つてゐるのだ。

十時十五分ハルキッチ出帆、二等室は機關の音が直接に枕に響いて、充分に安眠出來なかつた。

三十一日。雨、午後晴。

眼がさめて見たら船はいつの間にかオランダのフツクのドックに入つてゐた。

六時何分かの汽車でアムステルダムへ向けて立つ。さすがに海面より低い國だけあつて山はどこまで行つても見えない。滿目の平原、離離として生ひ茂つた雜草――その間に散點してゐるものは、時に人家、時に牧牛、時に鵞鳥、そして時には又例のオランダ特有の風車だ。

アムステルダムへ着いたのは八時過ぎであつたらう。

Willem Straat 27 Amsterdam。これが私達の宿だ。

最初に出迎へてくれた者が、先づ廿歳前後の美しい娘さんであつたことが、私達を喜ばせた。ついで彼女が頗る上手な英語を話すことが私を安心させた。土屋君は東大の獨法出だからドイツ語が話せるが、私はドイツを知らないのである。

入浴、朝食。

お母さんを助けて、凡てこの娘が一人で家の中を切つて廻してゐるらしい。

『今朝の新聞を見せて下さい。』

『だつて、オランダのしかございませんが……。』

『それで結構です。』

『あなた、オランダ語がお分りなの？』

『ええ、』

とは言つたが、實はオランダ語なんて、今迄殆んど見たことも、聞いた事もないと言つていゝのだ。

彼女はすぐ別室に行つて "Der Telegraaf" と題した新聞を取つて來て、それを私に手渡しながら、

"Can you understand really?"

と、更に念を押す。最後の堅めにカンと一本、金鋲を打ちこんだやうな美しい響きをもつた聲だ。

"Not quite, but perhaps I can guess its meaning."

と、私はへどもどしながら少し退却した。

聞けば彼女は十四の時に奨學資金を得て、ドイツへ二ケ年留學したので、ドイツ語は元より、英語もフランス語も話せる。專攻したのは音樂だつたさうだ。道理であの聲がよく鍛錬されてプラチナのやうな響きを以つてゐるのだ。

『ドイツから歸ると、暫く、タイピストをしてゐたんですけれど、今は家にかうしてくすぶつてゐます。月に五百フルテンの收入の得られるやうないゝジョッブに有りついて、ピアノが一臺買ひたいわ。……私の名前？ Lenora Lunsdorp と言ふのよ。だけれどそれでは餘り長すぎるから、皆さんにはノラ、ノラと呼んで貰つてゐるの。』

『では、イブセンの……』

『人形の家のヒロインと同じ名前たつて仰有るのでせう。えゝ、さうよ、同じよ。』

ノラは私の英語をすぐ掠つて、應答して行く術のよさは、まるで避雷針のやうだ。

お母さんは片頬に瘤のある太り肉の四十五六の女だ。弟が一人、名はレオ、十七才で家具を作る大工である。が、羊のやうにおとなしい男だ。妹が二人、上はナンニイと言つて十一才、下はネッテイと言つて八才。

扨て此のチチアン・ストラアトは場末の新開町だが、非常に清潔で、新らしい白いオークの机のやうな堅實な感じがある。集合住宅の好模範として、都市計畫の留學生など一度見ておくといゝと思ふ。

十一時頃から雨が晴れたので、入場出來るか出來ないかは二の次きとし、兎も角も技場の景氣を見に出掛ける事にした。

此の下宿から技場まで徒歩で五分とかゝらないことは、既にノラからの手紙で承知してゐたが、さて實際に當つてみると、どちらの方角なのやら分らない。

『私、案内して上げませう。だが妹が二人、ついて行きたいと言ふからお伴さしてもよござんすか。』

オーライ！

雨後のオランダの景色は水郷の感じだ。青い空を白い雲の悠々と動くところ、空氣のどことなく水分を含んで冷や〳〵する所、蘆に似た草に風のそよぐ所など。――私は、かつて雨上りの霞ヶ浦を横斷した經驗を持つが、丁度こんな氣持だつた。

切符が何十圓するとか、到底得られまいとか言ふのは嘘の皮だ。ためしに二フルテン半のを買つて中に入る。

立派な技場だ。これは後に大毎の特派員で建築專門の中尾工學士もかなり高く賞讃してゐた。まだ少し早いので選手は入場してゐない。フイールドを埋めた美しい芝草の上には蝶々が舞ふたり、鶴が飛んだりしてゐる。

一時半選手入場、二時半開會。

競技の結果など新聞で疾く御承知の讀者に向つて書くまでもあるまい。たゞ百メートルハードルで三木君が豫選には一着を占めたのに轉決勝で落ちたのは殘念だつた。

それからカナダのクック孃が百米突でスタートを誤つてオミットされ、全大會を通じての氣の毒な話を殘したのも此の日だつた。此の競技で彼女が一着を占めるだらうとは自他共にゆるしてゐる豫想だつた。併し彼女は極端に神經質なので、用意の合圖があると共にドイツの某孃が誤つてスタートしたのに釣られて、つい自分も駈け出した。その同じミステイクが三度繰り返されたので、規約に依つて二人共オミットされた。クック孃は言はゞ他から誘はれた謬ちであるだけに、諦めが付きかねたと見えて、いつまでも競技場の一隅で泣いてゐたのは、見物の涙を誘ふに充分だつた。

これに引き換へて、陽氣なのはディスクで素晴らしい世界記錄を作つたポーランドのコパナツカ孃であつた。何でも三四回目に投げたのが馬鹿に遠くへ飛んだのだつたが、その時彼女は嬉しさの餘り、ベンチへ歸ると自國の應援團の方へ向いて、水を飛び出た鯉のやうに、無性に跳ね廻つた。應援團も狂喜して旗を振つた。

競技がすんで家へ歸つてから夕飯までにまだ少し間があるので、ナンニイが學校で使つてゐる歷史の敎科書を借りてみた。併し日本への記述は一ヶ所も見當らない。ノラは自分の讀んだ遙かに詳しい形然たる大冊の歷史を貸してくれたので、これも綿密にインデキスを搜し、更にこの國の東方發展の諸章を一語一語虱つぶしに當つて行つたが、日本への記述は遂に一語も見當らない。これは誠にいさゝか意外だ

つた。何だか遊郭の女な[illegible]
も多少感じないではなかつた。

『ノラ、あんた方は、學校では日本のことを習はないの。』

『地理で習ふわ。大變に氣候のいゝ美しい國だつて。』

『たつたそれだけ？――オランダと日本の特殊な關係に就いては何も習はないの。』

『大學では調べてゐる人があるでせう。』

『僕達は小學校の時から、オランダに就いては特に澤山の事を教はつてゐるよ。』

と言つて、私は十七世紀からオランダがスペイン、ポルトガルの勢力を驅逐して日本の貿易を獨占したこと、最初に日本へ着いたリーフデ號に付いてゐた貨狄の像はエラスムスで最近日本の學界でやかましい問題になり、オランダ政府から買戻したいと言つて來た事、島原の亂ではオランダは幕府を助けたゝめ基督教を迫害するものだと言つて歐洲列强から抗議を受けた事、日本は開國以前にもこの國へ使節を派した事がある事、最近日本では日蘭關係の研究が非常に盛んで、新設の臺灣大學は特にそのために力を注ぐこと、前には幸田教授、今は又板澤教授がレイデン大學へ資料の蒐集に來たことなど語つたが、彼女は“Really?”“Is it true?”とか、時に合の手を入れるだけで少しも反應を示さない。

『僕達はこんな話も聞いてゐたよ。全歐がナポレオン軍の鐵蹄に蹂躪

これでも[illegible]
ランダ屋敷にだけはその三色旗が翻つてゐたので、彼女は自國は未だ滅びずと言つて、それを誇りにしてゐると云ふ話を。』

『私は知らないわ。』

『出島の日蘭貿易のことも、丸山の遊女と蘭人のエキゾチックな艶物語も、あんたは何も聞いてゐないのか。前年、何とか云ふこの國のプリンスが日本へ來た時、その出島と云ふ所では戸毎に日蘭兩國の國旗を交叉して歡迎したので、そのプリンスは感激の餘り涙を流したと言ふ話だ。尤も日本でも、心ない役人が日蘭貿易當時の出島は疾くにつぶして了つて、今は昔の面影を偲ぶ由もないが……。』

『惜しいわね。私の國に取つても不幸だわ。』

と、初めて彼女も少し殘念さうな表情を示した。

夜、關屋君はザンダムにゐる水泳の合宿に行く。私はナンニイとネツテイを一緒に自動車に乘せて、クラスノポルスキイ・ホテルに大毎の上原特派員を訪ねる。不在。このホテルは全歐洲を通じても最大の逆旅の一つであるさうだ。

仕方が無いから暫く町をドライヴする。

アムステルダムは『北歐のヴエネチア』なる異名を持つてゐる。正にその異名を耻しめぬ美しい町だ。――縱横に開鑿された運河には美しい水が豐かに湛えて、それに灯が映じ、更に堤の上からは柳の繁みが房々と水面に垂れ下つてゐる。光と闇がハイド・アンド・シークをし

なかから躍つてゐるやうだ。路はよく洗はれて塵ッ葉一つ留めてゐない。

八月一日。雨、後曇り（アムステルダムにて）

朝、霖雨。それを衝いて再び上原君を訪ねる。切符の心配は萬無いとは思ふが、もし手に入らないやうな事があつたら、よろしく頼むと、頼んだ。氏の話によると開場式の時だけは、みんなが入りたがつた加減か、本當にプレミアムが付いて入場券が貳拾圓位で賣買されたと言ふ事だ。ロンドンで吾々の聞いた噂は、これの更に擴大されたものであつたに違ひない。

同じ大毎の運動部で、競技のためにわざ〳〵派遣せられてゐる星野君も同室だから、連日來の日本選手の不成績について樣々な話が出、そして人見絹枝孃のことに及んだ。西洋人が大抵、人見孃を美人だと言ふのが不思議だと上原君も星野君も言ふ。

成程さう言へば私も今更さう言ふ經驗を持つた。ノラが人見孃を美人だと言ふので、私がそんな筈はない、尤も彼女は別に品のない顔つきをしてゐるから寫眞では美人に見えるかも知れないが、實際は色氣に乏しい娘だと言ふと、ノラは、いや、私は彼女が練習してゐるのを實際見て言ふのだと、斷然に人見孃美人説を支持した。――私も兩國の間にこの意見を總括して、結局西洋人にはあんなのが美人に見えるのかも知れないと云ふ點へ、話がおちついた。

なほ大會を目あてに、パリや、ロンドンや、ブリユツセルや、ベルリンから全歐の淫賣婦がアムステルダムに蝟合して、夜になると、ホテルの廊下をうろ〳〵してゐるとの話も出た。

歸りにオランダ語の自修書と讀本を買ふ。

雨は止む氣配もない。今日の八百米突にはノラのボーイの一人である Aug. Moorman 君もオランダ選手として出場すると云ふので、觀覧出來ない彼女に代つて應援位してやりたいと思つてゐたのだが、かう降られては出かける氣もしないので、ノラに賴つて誰れか英語でオランダ語の教授のできる先生を見つけてくれと頼んだ。

僕のやうに片寄つた歷史癖を有し、たまに大衆文學も書いたりする者は、どうしても多少のオランダ語の心得が無いと差支へることがあるので、どうせ物にならない事は分つてゐても、後で獨修のできる位な手ほどきだけは付けておきたいと言ふのが、前からの希望であつたのだ。

『そんな先生を見つけるのは六ヶ敷いわ。私ではダメか知ら？――あなたは私に、それができるとは思はない？』

願ふてもない幸ひだ。すぐ始める。

"Oi, Oi!"
Oi hoort niet, dat zij n Moeder hem noept.
"Oi, Waar ben je?"
Moeder zulke daar je [illegible]

此れは第一リーダアの冒頭だ。譯するとかうなる。

『オットよ、オットよ』

彼の母が、彼を呼んだのが、オットには聞えない。

『オットよ、オットよ。汝はどこにゐるか。』

母は窓を通して見た。彼女にはオットが見えなかつた。

急に中學の一年生に歸つたやうな氣もするし、又、文久、天保の昔の老婆になつたやうな氣もする。愉快だ。

レッスンが濟んでから、先日から讀みかけてゐるN. Ognyov の小說の英譯 "The Diary of a Communist schoolboy" を讀み上げた。この本も既に日本で千葉さんか誰か紹介されたらうとは思ふが、勞農ロシア誕生の小縮圖を見せられるやうな氣のする所に面白さがある。そして第一學期では特にブルジョア教育思想としてのダルトン・プランの批評、第二學期ではイデオロギイの問題、第三學期では性の問題に重きを置かれて書かれてゐるやうに思ふ。

午後雨は上つたが薄くガスが罩めてゐる。家の者はみんな買物に行くと言ふから、私もアムステルダムの概念を一層明確に構成するため、ついて行く事にした。ナンニイと腕を組んで歩く。

見れば見る程いよ〳〵美しい町だ。盛り場へ出ると大會をあてこんで、オリンピックのマークなる丸を五つ繫いだ模様のネクタイや、ピンや、帽を賣つてゐる家もあるし、"Buy the Olympic souvenir" とショウキンドウに麗々しく書き出してゐる店もある。

大變な人出だ。その大部分が外國人だ。いつもはこんな人出は無いさうだ。ノラはその群集の中から『あれもアメリカン・レディよ、あれもよ』と言つてはヤンキイ・ガールを拾ひ出して指さしてゐる。私には特に目立つ特長も見つからないが、彼女達は豪勢な成金ぶりを示した服裝をしてゐるのですぐ分るさうだ。

さう言へば應援所でもヤンキイは團體を作つて屋根のある特等席に陣取り、最後を『……ユウ・エス・エイ』と結ぶ新らしいエールを合唱して景氣よくやつてゐる。アメリカに次いでは英、獨、佛が一、二等位な所に屯してゐる。スエデン、フインランド、ポーランドなどと云ふ貧乏な國になると最下等の場所に寄り固まつてゐるのは、可哀さうだ。併し彼等も兎に角團體を作つて來てゐるのは感心だが、日本などと來ると大毎觀光團の歸つたあとは旗一つ見えない。

さう言へば、技場の入口で賣つてゐるマークにも日本のだけは無いやうだつた。

八月二日。好晴。

織田君がとう〳〵ホップ・ステップ・ジヤンプで、大會に初めての旭日旗を擧げた。

樂隊が君ケ代を奏し出すと、方々からそれに合せて歌ふ間のぬけた

歌聲が聞える。これで見ると日本人も大分來てゐるのだ。奏樂と歌と調子が合はなくて、樂が濟んでも彼等は臆面もなく歌ひ續けてゐるものだから、樂手は、自分達の奏樂が間違つたのか知らと言ふやうな、呆氣に取られた顏をして、こちらを見てゐた。歐洲人の間で方々から笑聲が起つた。

國旗と奏樂――それを目にし、耳にすると所詮は此のオリンピックも巧妙な帝國主義的精神の刺戟劑であり、涵養機關である事が殊に明白に分る。ロシヤは無產團體を國際的に糾合して別にゲームを組織するので、このオリンピックには參加してゐない。

日本では鳩山內閣書記官長が、何かの剩餘費から體育協會長の岸博士に何十萬圓かの選手派遣費用を出す約束をしたが、後で調べてみたらその金はとうの昔に誰かゞ使つて跡方も無かつた。そこで鳩山氏はあわてて富豪二三に電話を掛け、その費用を調達した。そのゴシップが新聞に見えたが、鳩山氏が世話をし、金を命よりも惜しがる資本家が電話一つで悉くこれを投げ出したと言ふ所に、この選手派遣に關する凡ての意味が含まつてゐると言へるであらう

タイムスは社說で、これこそ絕好の國際的親和機關だと論じてゐたが、表面さう見えながら內面に、無意識裡に國民的感情の昂揚劑となつてゐるのは見遁し難い。

併しさうした批判は後から起つた事で、國旗の高く飜へるのを眺めた。

隣席にゐた外國人達も『ジヤポン、ジヤポン』と言つて私達の肩を叩きながら喜んでくれた。此れは一つには、參加國の中で日本が最も遠距離にある事を彼等はよく知つてゐるので、その點からの好意もあらうし、一つは壓倒的優勢を示さうとする英米、中んづく米國に對する諸國の反感からも來てゐるであらう。

ふと、觀覽席の中に甥を見つけた。

『叔父さん、日本もとう／＼旗を上げましたな。』

これが彼の放つた最初の挨拶であつた。叔姪天涯に邂逅したと云ふやうな感慨は、若い盛りで、而も競泳の一秒の差が爲替相場の暴落より大問題になる彼には全然起らないらしい。

歸りに、優勝の慶びを述べやうと思つて選手の合宿に寄ると、一派のキザな日本人がうよ／＼詰めかけてゐた。選手が土地不案內で合宿の選定その他にまごついてゐる時、即ち彼等の助力を最も要求してゐる時には顏も見せないで、選手のズボンの折目がついてゐない事や、食事に謬つてナイフの音をさせたのを、國辱だと蔭口を言ひ、どうせ又慘敗して歸るのだらうと冷評してゐたのは彼等だつた。その彼等が一度優勝ときくと逸早く駈けつけて、自分が勝つたやうな大きな顏をしてゐたのには驚いた。私は生れつきから云ふ人間が最も嫌ひなので、少し醜くて氣持惡くなつたから早く引き上げた。

歩いてゐる。警官はしばしば道の眞中に制札を立てて人を遮断し、辛うじて交通の整理を付けてゐた。

私も關屋君と二人、レンブラント・プライスのシルレル・バアと言ふのへ入つて、シエリブランデイを飲んで選手の健康を祈つた。非常にうまかつた。

テレグラーフの夕刊に日本人觀客の漫畫が出てゐる、多分、渡歐代議士の一群を描いたのであらう。胸に双眼鏡を掛けた間拔面が眞に迫つてゐる。

八月三日。曇、寒し。

朝、ストーブを焚く。

午前中、水泳の練習を見る。

晝過ぎ、飛行機で運んで來るタイムスを買つて、昨日の競技の記事を見たら、果して日本の國歌に就いての若干の言及があつた。彼等日本人は狂喜の餘り、最も異色ある國歌を、勇敢にも歌はうとしたと書いてゐる。

西洋の國歌は、たとへばマルセイエイズが代表するやうに、みんな急調子な、快活なもので共通の特色を以つてゐるが、日本の國歌の節は宮中の雅樂から出たのだから、勇壯活潑を尊ぶ競技場には釣合はない。成程、異色があると言へば大いにある。而もそれを訓練も何もな

午後は五千米突の決勝。リトラ(フインランド)一着、ヌルミ(二着)、ギデ(スヰデン)三着。

本氣で駈けたらやつぱり巨人ヌルミが一着になつたらうと思ふ。併し彼は一萬米突で既に一着を占めてゐるから、此の回では同國出身のリトラに花を持たせたのであるらしい。

ヌルミの駈け方は悠々たるもので、しばしば英米選手の間を後になり、先になりして、最も巧妙に妨害してゐた。後で決勝點に入る時をスナップした寫眞を見たが、やつぱりリトラは既に参つて、舌を吐きさうな顔をしてゐるのに、ヌルミのそれは平然たるものである。イタリ、スペインなどのラテン人は、最初に馬鹿にヘギイを掛けるが、回の半ばにも達しない中に言ひ合せたやうにへたばつて了ふ。北歐人と南歐人との特質は競技を見てゐてもよく分る。

夕食にノラが飯を焚いて呉れる。うまい。こちらの若い娘達は飯に牛乳と砂糖をかけて食ふさうだが、私には、とてもそんなものは食へないから、日本流にそのまゝ食べてゐると、「こゝでは此れをかけて召上りなさい」と言つて、マッへと言ふものを持つて來て呉れた。醤油とソースとの合の子のやうなものだが、仲々うまい。

さう言へば幕末に渡歐した栗本鋤雲が、オランダは日本との交通が久しいから到る所に醤油を賣つてゐると書いてゐるが、今日では然

くオランダのどこを捜しても醤油は得られまい。併し此のマツへは或は醤油が西洋化したものではないだらうか。

夜、若い青年が三人遊びに來た。勿論、ノラをはりに來たのだらうが、母も彼女も喜び迎へて、すぐ衣類を更めて來た。盛装するとノラはいよ〳〵輝いて見える。この青年達もみな英語を話しはするが、私より餘ッ程下手だ。

八月四日。曇、後、雨。

水泳の觀覽中雨が降つて來たので、歸つて晝寢をした。昨日の夕食に日本飯とビールを過ごした加減か下痢の氣味がある。吉野作造氏、大宅壯一氏、及び家へ、手紙、又はハガキを書く。

八月五日

勉強の甲斐があつて、みんなの話してゐるオランダ語が少し宛、キヤッチ出來だした。オランダ語の『ヤア』はドイツ語程強くなく、尻が輕く上つて、一種の艶がある。日本語の『びつくりした』がラテン語か、ポルトガル語の『ビ・クリスト』なら、日本語の『おや〳〵』はオランダ語の『オ、、ヤア、ヤア』の轉化かも知れない。

競技を見て歸ると、ノラはアニヴアサリイ・ブックを出して、私の誕生日の所へサインとアドレスを記してくれと言ふ。

『いゝえ、日本のよ。ロンドンへはどうせ一年位しか居らつしやらないんでせうから。――毎年あなたのバース・デイにお祝ひのおたよりをするわ。』

即ち二月十二日の欄に記入する。――記入した後で私の悪い癖が出た。

『ノラ、僕は一つ、僕の大好きな支那の詩が書きたくなつたんだがね。構はないか。』

『え、いゝわ。』

『だが、僕のバース・デイの所へはもう餘白が無い。』

『その次ぎは二月十三日ね。――十三日が誕生日の人はないから、そこへお書きなさいな。』

成程、十三は西洋人の忌む日である。だからたとへその日に生れても、外の日に生れたことにして了ふのだらう。いい幸ひだから即ち一ペンを揮ふ。

遺却珊瑚鞭
白馬驕不往
章臺折楊柳
春日路傍情

併しその後で英譯してくれと言はれたのには弱つた。漢語に堪能な原著者の觀殺に會ふから茲に掲げることは出來ないが、それでも茲に簡

多分遊女町だらうと思つたので、a town wellknown by its entertainers と註を施したら、この its entertainers が分からない。仕方がないから『ゲイシヤガール』と簡單に片付けた。

八月六日。晴。

一週間分の下宿代を拂ふ。一泊朝飯付四フルテン、晝飯を食へば一フルテン、夕食は二フルテン半。日本の拾錢が丁度十一フルテンになるから一フルテンは一圓端と見ればよかろう。一週間分五拾圓足らずの勘定になる。

英國はロンドンで一週間三十五圓平均だからそれに較べると下宿代はアムステルダムの方が遙かに高い。が此れはオランダは戰禍の外に超然としてゐて小さいながら富有な國だから生活費は全歐洲中で一番高いのださうだ。併し私の下宿はまだ安い方で一泊平均相場は五フルテンである。中にたつた一人三フルテンの宿にゐると言つた日本人があつたが、そこは狹くて汚い上に、蚤が多くて寢られないさうだ。それに私の下宿のいゝのはノラのお母さんが料理の上手な事だ。ロンドンの私の下宿はかなり大きくて專門のクツクもゐるのだが、それなどより遙かにうまい。殊に、何が食ひたいかと一々聞いて、こちらの註文通りのものを作つて吳れるのが有難い。——日本でも御大典の通路は各戸、疊一枚でいくらとか儲けたなどと云ふ話を聞いたが、東西欲

素人下宿に早變りしたのである。併し豐田氏の話を聞くとクラスノポルスキイは一日どうしても二十フルテンは掛るさうだから、吾々貧書生には此の速成下宿の發生は何より福音だ。

十一時の汽車でベルギイへ向けて立つ。私のオランダ語も多少は役に立つから豪氣なものである。今度の列車は第何番プラツトホームから出るとか、此れは貸切とか、此れは婦人專用の函とか、一々讀めるから、自分ながら感心した。

ハルレム、レーイデン、ハーグ、ロツテルダム、ドルドレヒト、ロゼンダール、エツセン——エツセンの附近だつたと思ふ、珍らしくも日本のやうに赤松の林が所々に見えたのは。ベルギイの國境には十二三世紀頃の砦の跡らしい長堤が續いてゐる。アントワルプでは町の所々が大戰に傷ついた肌を、まだ生々しく晒してゐるのが痛ましく眼に映つた。

ブリツセルへ着いたのは四時頃だつたらう。抑々、私が此の町へ來ることを思ひ立つたのは、四日から此處で、レエバア・アンド・ソシアリスト・インタナショナル（L・S・I・）大會が開かれてゐるのでそれを傍聽するためである。

インタナショナル！　この言葉と共に離すべからざる聯想となるのはマルクス、エンゲルスを初めベエベル、ジヨレス、リープクネヒト、ハーデイ、プレハノフ、片山潛などの叙事詩的な名前である。そ

してこの大會は常に一切の社會主義運動へのインスピレーションの根原であり、人活の基礎であつた。

それ故に資本家とその走狗を除く外、誰しもその健全な成長を冀はないものは無いのに、戰前に於て分裂を來し、大戰と共に崩壞したのは人の知るが如くである。大戰以來は一つはモスクワを中心とする第三インタナショナルとなり、今一つは茲にブリユッセルに第三回大會の開かれるレエバア・ソシヤリスト・インタナショナルとなつたのである。その兩派の主腦部は互に輕蔑し合つてゐる。殊に日本などに於てはこちらのインタナショナルは恐らく大して問題にする人も少なからう。が、此れはつまり第二インタナショナルの正系になるのだ。

そこで私は、折角惠まれた機會だから傍聽したいと思つて、こちらへ立つ前にI・L・P・（獨立勞働黨）へ寄つてその希望を通じたのである。併し私の所屬する日勞黨は勿論このL・S・I・に加入してゐないので、やゝ難色があつたが、それでも結局ブリユッセルへ行つてゐるI・L・P・の代議員ジョン・ペトン氏へ紹介狀を書いてくれ、フエンナ・ブロックエイ氏の名で發せられたプログラムも與へてくれた。それには先づかうある。

『本大會の主要議題は左記の五目とす。

1 軍國主義と軍備撤廢

2 植民地問題

3 戰爭に於ける勞働者の[illegible]

4 婦人インタナショナル大會よりの報告と提案

5 L・S・Iの組織』

私は汽車の中で從來のインタナショナルの歷史と日本人との關係などを考へ合せてみた。日本人で最初にこれに列席した人は吾々に分つてゐる限りでは酒井雄三郎氏で、即ち明治廿四年ブリユッセルで開かれた第二インタナショナル第四回大會に列席したのである。併しそれは知る人が殆んどない。この大會に日本を明白に認識せしめて、大會史上に一つの輝やけるエピソードを作つた人はやつぱり片山潜氏であつた。それは日露戰爭の眞最中にアムステルダムで開かれた大會に於て、氏はロシア代表のプレハノフと共に副議長に選まれ、彼我兩交戰國の代表が各國代表の前で握手して『、、、、、、、、、と云ふものは無い』と演說して大喝采を博したのである。

私は今その歷史あるアムステルダムから、歷史あるブリユッセルに赴きつゝあるので、さすがに一種の感慨なきを得なかつた。

Ermitage rue d'ypres Brussels に宿る。それは茲が英國I・L・P代表の John Paton 氏の宿であるからだ。私がこの人への紹介狀を貰つて來てゐるのは既に書いた通りである。

開會の四日だかに共產黨の一味が大會を引つ掻き廻しに來たので、傍聽者の資格審査がやかましい。私は日勞黨からの親任狀をも添へて出して、漸く明日の朝、會場の入口で傍聽券を交付して貰へることに

な、ベルギイの金に非常に安い。僅少の日本貨を以てしても、なに五十圓が八百何十フランかになつた。併し諸物價は、安いには安いが、必ずしも噂にきいてゐた程ではない。自動車はメエタアに出たただけの金額より六割餘計に拂はねばならぬし、食事も一皿々々に税金一割が掛るのである。大使館を訪ふたら成瀬書記官が、この國はショウウヰンドウだけの安い國ですよと言つたが、成程その通りだ。

八月七日。曇。

朝十時、インタシヨナル大會場なる Maison de Peuple へ行く。入口で様々な宣傳印刷物が撒かれてゐる。たとへば『パレスチナに於ける猶太人の勞働運動』と言ふ册子は英、獨兩文のがあつて菊版百頁内外の分量があり、立派な資料だ。水平社關東支部の深川君からその方面の資料も捜して呉れと頼まれてゐたので貰つておいた。又小國聯盟の様々な印刷物も撒かれてゐる。『壓迫された小國民のために』に傍題したアンリ・バルビュッスの『ヴエリテ』なる册子が眼についたから此れも貰つておいた。

併し會議の内容は私の期待した程緊張したものでなかつた。議長がしば／＼警卓を打つて靜止しても、みんながてんでにがや／＼と話し合つてゐて、演説など聞えはしない。

午後になつて英國のフエンナ・ブロツエイ氏が立つたので、これは多少分ると思つて傍聽席の一番前に席を移してみたが、頭の上に据ゑ付けられた擴聲器がガン／＼喋るだけで、何も分らぬ。第一、その日のプログラムのプリントを各國の代議員と新聞記者以外には配付しないのだから、各辯士の演説の内容はおろか、何が討議されてゐるのやらその見當さへ付かないのである。

私は場合に依つてはオリンピツクの見物は止めて、そのまゝブリユツセルに滯在して最終日までこの會議を傍聽する積りでゐたのだが、この様子では徒らに欠伸を買ふ以外に、何の收穫も無ささうだから、早々引き上げることに腹をきめた。

その前に別室で列國の社會主義的文獻の展覽會があると云ふからのぞいてみたが、此れも獨佛にオランダのが少し交つてゐるだけで、大した事は無かつた。

（この、第二インターナショナル正系であるブリツセルの會議についてはも少し書いてもいゝが、いゝオヒシアル・レポートが第二卷まで出てゐるし――第三卷未刊。三卷で完結――會議の所屬者側から見た批判は英國I・L・Pの代議員なるフエンナ・ブロツエイやブレイルス・フオードがニユー・リーダアやフオレン・アフエアに寄せて居り、共産黨の方の側から見た批評はコンミユニスト・インタナシヨナルに載つてゐる――英國でもこの雜誌は先月あたり永久の發行停止の厄に遭つた――日本でも或は最左翼の方からの痛烈な批判が現はれてをりはしまいかと思ふ。この日記は元來正面からそんな事を論究するつもりでないから以上の如く簡單に片付けておく）

エハガキを買つて、日勢黨本部と宮島新三郎君と家とへ出した。

午後二時頃、ワアテルロオ行きのシャラバンを見つけたので、それに乗つた。

實を言ふと私は、ワアテルロオにさう興味をもつてゐるわけではないが、その一區劃の小村モン・サン・ヂャンにヴイクトル・ユーゴーが『レ・ミゼラブル』の一部を書いた家が殘つてゐる事を案内書で知つてゐたので、それを見たいと思つたのだ。言ふまでもなく『レ・ミゼラブル』の大部分はイングリッシュ・チャンネルにあるガアンシイの小島の、詩人自らの考案になる有名なガラス張りの家の中で書かれた。併しワアテルロオの一戰を描く時にはわざ〳〵その地に赴いて暫く滯留して、詳細に材料を集め、實地に景を望みながら執筆したのだ。さればその章は『一管の筆先に千軍萬馬を躍らせた』と稱されて、『レ・ミゼラブル』の中でも有名な章となり、よく色んな讀本や美文集に拔萃されてゐる。

プリユッセルからワアテルロオまでは、シャラバンで一時間位揺られたかと思ふ。聯合軍の戰勝記念なる百四十八呎のピラミットの下で停まると、同乘の諸君は掛茶屋に休憩した後で思ひ〳〵に二二八級あると言ふ石段を踏みながらピラミットに登つたが、私は數町を引き返して、例のユーゴー館を訪ふた。

樹の四辻に建つてゐる小さな洋食屋で、入口の額には Hotel des Colonnes, Mont St-Jean, Waterloo. Victor Hugo y logeant en 1861 Pour écrire "Les Miserable" と書いてある。

私は酒を命じ、親爺をとつつかまへてユーゴーに關して殘る色々な逸話を聞き、それからユーゴーの使用してゐた室を見た。二階の二間で、一間は寢室になつてをり、一間は執筆室になつてゐる。彼が使用した机や椅子が古びたまゝに殘つてゐるのは懷しい。

私が餘りしつこくユーゴーの事をきくので遂に親爺が、

『旦那は一體どんな商賣の方です。新聞屋さんですか。』と、問ひ返して來た。

『まあ、そんなもんだ。日本人でね、ユーゴーと同じ筆の商賣だ。』と、大きく吹いた。これは、一つは彼は英語がよく出來ず、私はフランス語が殆んど出來ないので、話の了解を早く付ける便宜からでもあつた。

『さうですか、道理で。——何なら、一晩泊つて行きませんか。ユーゴーの寢室を提供しますよ。』

『よからう。』

話はすぐにきまつた。

あたりを散歩する。見渡す限りの平原で、丘陵が浪の如くに起伏してゐる。日本の八月上旬の夕方と言ふと盛夏のやゝ傾きかけた頃で、眞紅の夕燒に、燃えさかつたもののまさに崩れやうとするやうな、一種の悲痛味を含んだ賑やかさを感ずるのだが、北歐の八月はそれらとは全く變つて靜寂た

る感じがそこはかとなく感取して來る。それに古戰場と云ふ懷古的情趣が伴ふので、謂はゆる血も腥ふとはこんな景かと思つた。

宿は丁度、聯合軍の戰列を敷いた跡になつてゐるので、そこから南へ下つてナポレオン軍の屯した跡を訪ふ。丁度麥の刈り入れ時だが、この邊の農夫は殆んど日本人を見たことが無いらしく、わざ〳〵仕事の手を止めて私を眺めてゐる。

數種の木の實を拾ひ、野生の躑躅栗の種子を採取した。日本へ持つて歸つて庭に植ゑやうと思つてゞある。私の狹い花壇にワアテルロオの野草の花が咲き充ち、又その木が亭々と繁つたら愉快に違ひない。

その中に暗くなり初めたので、ピラミツトを目標に歩を返した。ピラミツトの側面に丸い小石がごろ〳〵轉がつてゐると、本當にさう思つて近づいて見たら、それはみんな羊であつた。用があるので、ピラミツトの上に登つて一際の眺望をほしいまゝにしたいと思つたが、夜は門が鎖されてゐるので、止むなく宿へ歸つた。

夕食をすますと"A Voice from Waterloo; A History of the battle"と云ふ案內書を買つて、室に退いた。半世紀前にユーゴーの寢起きしたベツドに入つて讀みかけたが仲々面白い。著者はこの大戰に參加し、後に長らくその案內人となつてゐたエドワード・コツトンと言ふ軍曹だ。諸種の命令や書翰や戰報が參謀本部の報告のやうに頻繁に豐富に引用してある傍ら、仲々ドラマチツクな記述もある。たとへば戰ひの初まつた後の如き、ウエリントンはナポレオン軍の進擊を豫め知つてその備へはしたが、リチモンド侯爵夫人邸で盛んな夜會が催されるので、多くの將士と共にそれに臨んだ。以下を譯すとかうである。

「侯爵夫人邸の客間は朝野の名士で埋められた。多くの華麗な禮裝の士官が、綺羅を飾つた美しい婦人と入亂れて踊り狂ふさまは目も眩しい程であつた。丁度その夜會が最高潮に達した時であつた。ウエリントン將軍が、今やナポレオンは全軍を率ゐてサンブルを橫ぎり、シヤルロアを占領したとの確報に接したのは。ナポレオン軍進擊の報に接した衆客の錯愕は異常なものであつた、一瞬間前までは歡樂と悅喜とに輝いてゐた顏色が、今や最も嚴肅な樣相を帶びて來た。ブランスヰツク侯は膝に愛兒を抱いてゐたが、立上り際にそれを床の上に取落した程、顚動してゐた。あゝ、衆客の中の何人かよく察知し得たであらう。夫人邸の賑やかなダンスに伴奏した音樂が、かくも速かに戰線の軍樂と變じ、はた又、當夜宴に列席した多くの士官がその夜會服のまゝ戰場に臨んで、その或る者は戰死者の中に自分を見出さうとは。」

サツカレイの名作「ヴアニテイ・フエア」には、作中に出現する女性達がブリユツセルに滯留の日、十二三哩を離れたワアテルロオからは終日砲聲が殷々として遠雷の如くに耳朶を脅かし來るの情景が描かれてゐるのが、此の案內記は更にそれよりも劇的である。

又バイロンは「チヤイルド・ハロルド巡禮記」のワアテルロオの項に、大戰のまさに初まらんとする前夜の舞踏會の情景を敍つてゐる

が、それが單なる詩人の空想に非ずして實事の傳聞に基づいたものである事が、これによつて明瞭である。

　本をよんでゐると眼が冴えていつまで經つても寢られない。止むなく寢卷きのまゝで起き出て、バイロンの詩の中から左記の一部を日記の中に書きこんだ。

And Harold stands upon this place of skulls,
The grave of France, the deadly Waterloo!
How in an hour the power which gave annuls
Its gifts, transferring fame as fleeting too!
In "pride of place" here last the eagle flew,
Then tore with bloody talon the rent plain,
Pierced by the shaft of banded nations through;
Ambition's life and labours all were vain;
He Wears the shatter'd links of the World's broken chain.
(Childe Harold's Pilgrimage. canto the Third XVIII)

　バイロンなどは今の氣持とかなり遠いやうな氣がしてゐるが、やはりワアテルロオへ來るとこれを思出し、更にかうしてペンを取つて詩句を書けつけてみると、かなりな程度まで同感出來るのは、子供の時に譯本で彼を讀んだ私の昔の幾分の教養の然らしめる所であらう。『くり返す』と云ふ歴史に祟られてか、百年後に於てベルギイは再び世界大戰の序幕の中心舞臺になつた。併しながら今日リエージュの戰跡を訪うて先づ胸臆に浮び來るものは——それは詩ではあるまい。インピリアリズムの上に容赦なく揮はれつゝある無產階級的立場からの解剖刀である筈だ。この對比に依つて、ベルギイは百年の世界の推移を最も具象的に把捉せしめる。

　八月八日。雨。

　早く起き出て、昨日登りそくなつたピラミツトに登る。この頂上に大理石の獅子が球を抱いて睥睨してゐるのは、何人も寫眞で見て知つてゐるであらう。

　上から大觀したワアテルロオは、その中を歩き廻るのとは又別樣な感じを誘ふ。

　高濱虚子氏の名作『朝鮮』の中に、主人公が何とかいふ朝鮮の志士と、ワアテルロオと平壤とどちらが古戰場として立派であらうかを語り合ふの一節がある。それには確か平壤の方が立派だと斷定してあつたと思ふ。私は去年の晩秋、はからずも平壤に往くの機を得、牡丹台から大同江を臨んで、立見軍や元山支隊進擊の情景を追想し、左寶貴奮戰の跡を偲んだ。そしてはからずもワアテルロオを思出して、成程、これなら平壤の方が立派かも知れないと思つたのである。されば今實地にワアテルロオに來て平壤との比較を忘れなかつたのは勿論だが、今度は輕々にその優劣は定められないと思つた。同じく古戰場と言つても兩者は偉觀を競ふので、平壤の山も水も市街も平原も整へてゐる

に反し、ワアテルロオはこの數個師團大な、只一面の平野から成つてゐるのである。私は柄になく軍隊にゐた時、將校に讀んでやつた英文の戰術書に、しば〳〵ワアテルロオの言葉のあつたことを思出し、どのあたりに砲兵陣地を構へ、どのあたりに散兵線を敷いたのだらうなどと空想した。今のやうに戰術が變つて了つてはさうでもあるまいが、ナポレオン戰爭當時から日露戰爭當時までは、ワアテルロオでも平壤でも、實に絕好の陣地で、乾度面白い戰爭が出來たに違ひない。

歸りに、試みにどんな野草があるかと思つて採草してみると、花をつけてゐるものでは、をつとえし（おみなえしの白きもの）たんぽぽ、きんぽうげ（日本のとは少し違ふ）クローバア、ひなげし（こちらでは野生してゐる）野にんじん、おばこ、レッドトップ、あざみ、のこぎり草、野あさがほなどが最も多かつた。盛夏、たんぽゝときんぽうげが滿開で、空に雲雀が鳴いてゐる。以つて氣候の一般が推察出來やう。

朝食後から土砂降りになつた。電車でブリユッセルへ歸る。

私の財囊の底には、ロンドンを立つ前に正金銀行の支店で換へて來たベルギイの金が半分位殘つてゐる。持つてゐても仕方がないから使つて了ひたいのだが、この國は、私には決して感じのいい國でない。ポーターでも運轉手でも、隙さへあれば一厘でも多く外國の旅客をだまして取つてやらうと考へてゐる點が丁度イタリによく似てゐる。爲替相場の慘落はベルギイとイタリが最もひどいので、そんた關係から和蘭國民のこゝまでが似て來たのかも知れない。

吾等の歷史で知るブリユッセルは、正義と自由のため暴虐と戰ふ者が、或は祖國を追放され、或は首に懸賞金をかけられて潛竄する時、足だまりに必ず立寄る町で、その度に彼女は母の如き溫き寬容を以てそれらの士を擁護して來た榮譽をもつ感謝すべき町であつた。今やその昔の光輝はどこにあるかと言ひたい。

私は又オランダへ引き返すことにきめた。アントワルプの或る女郎屋にルーベンスが描いた有名な大幅の春畫がある。政府が遊女に嚴重な取締りを加へた時、多くの遊女屋が滅びると共にその春畫も一時隱されてゐたが、近頃又政府の態度が寬容になつて、海岸通りに遊女屋が復活すると共に、その名畫も遊客に又見せるやうになつたと聞いたので、立寄つて見る興味が無いでもなかつたが、廣いアントワルプの、遊女屋と聞いただけではどこだか搜すのが大變だし、それに、ベルギイ人との交渉はつく〴〵厭になつて來たので、すぐ汽車に身を投じた。

夕方に又好きなアムステルダムへ歸りついた。ブリユッセルで放尿の少年の噴泉の模型の玩具を買つて來たので、ネッテイに與へた。ノラもその母親も『マンネケン・ピス、マンネケン・ピス』と、口々に笑つて言つて、晩餐の時が特に賑やかだつた。

留守中のオリンピックの成績を關屋君にきくと、私の甥は背泳に四着で豫選でふり落され、鶴田君は二百のブレストで一着を占めて、

田君に繼いで旭日旗を擧げた。試みに關屋君の計つた鶴田君のタイムを示すとからである。

鶴田	$\frac{37}{50}$	$\frac{1.18}{100}$	$\frac{2.02}{150}$	$\frac{2.48}{200}$
ラデマッヘル	$\frac{37^{2}/_{5}}{50}$	$\frac{1.21}{100}$	$\frac{2.06}{150}$	$\frac{2.50}{200}$
スペンス	$\frac{37^{1}/_{5}}{50}$	$\frac{1.19}{100}$	—	—

公認記録と多少の差があるのは、審判者と關屋君の占めてゐた位置の差異の加減であらう。鶴田君に對するラデマッヘルの追窮が急なのが心配になつて手がふるへたのと、スペンスはひどく落伍して點にも入らなかつたので、隨つて百五〇米突と二〇〇米突の彼の記録は缺けてゐるのである。

八月九日。曇(アムステルダムにて)

オリンピックも峠を越えた。それにいつまで競技ばかり見てゐても仕方が無いので、ノラに案内になつて貰つて、第一に船のミュゼアムを見た。船はオランダの象徴と言つてもいゝだけあつて、仲々よく材料を集めてある。日本に關する文獻を見せて貰ひたいと言つたら、係りの親爺さんが、明日來るなら全部揃へて出しておかうと言つた。それからミュゼアムをのぞいて豐富にあるヷンダイックとレンブラントを見て廻つたら足が棒のやうになつた。その次ぎが古本屋巡りだ。

幕末に勝海舟が蘭語を飜譯したり、文久年間にロビンソンの蘭譯からの重譯が出たり、同じく神田孝平の『楊牙兒奇談』と題する探偵小説の飜譯があつたりする。何とかしてその原文を得たいと言ふのが私の願ひで、アムステルダムへ來るとから方々へ手を廻してさがしてゐるのに一向に手がかりが無いから、一つ自分で捜してみる事にしたのだ。神田譯の探偵小説は明治文化全集で複刻され、吉野博士が解題で『その原文は未詳だが、他日木村君によつて或は捜し出される日が來るかも知れない』と書いてゐられるのだから、是が非でも私の手で捜し出さないと少し具合が惡い。

併し雲を掴むやうな話で、一向に手がゝりは無い。或る本屋では『環海異聞』の寫本を見せられた。シュヘルテマ・ホルケマと云ふ本屋には蘭譯原文モンタヌスの日本誌があつた。英貨五ポンドだから決して高くはないと思ふが、讀めないものは持つてゐたつて仕方がないから買はなかつた。つまり此の一日の探索は無効に終つた。

夜、親が遊びに來る。日本飯を御馳走してやつた。その上小遣を五いゝ音樂があるので有名な何とか云ふカフエで、ノラとシエリを飲んで歸る。

拾圓ばかりせびられた。

八月十日。曇。

午前中競技。

午後イヴアンス（Ivans）氏を訪ふ。平たく言へば大衆作家として欧洲の読書界を風靡してゐるもの、英にあつてはエドガア・ウオレース、獨にあつてはイヴアンスであらう。英獨からオランダ、ベルギイへかけて、書店や汽車の売店には両氏の著書が洪水をなしてゐる。

歸りに再び[illegible]のミユゼアムを訪ふ。昨日の若い女事務員が日本に関する諸文献を悉くテーブルの上に出して積み、本の標題を一々英訳してタイプライタアで打つて、表紙裏に挟んで呉れてゐる。"Van Overmeer Fischer Bydrage tot de Kennis Van het Japansche Ryk" と標題した本は "Book on Japan of a Dutch officer, who lived in the years on Deshima" と英訳（文法的に言へば前置詞が少し怪しいが）を付けてくれてゐるので面白さうだけれど読めないから仕方がない。それから徳川時代に出た蘭書が比較的に沢山集められてゐるのに驚いた。

門のしまる前に外へ出て、ボンボン一箱を買つて贈つて彼女の好意に報ゐた。金をやつては怒るからボンボンがいゝでせうと、予めノラから注意を受けてゐたのである。

八月十一日。

朝、宿を出ると、丁度高石君などが技場へ行く自動車とぶつつかつたので、同乗さして貰ふ。リレイで日本は二着、四百米で高石君は三着。

午後整理をしてゐると、この下宿のおかみさん付けの醫者が来た。彼は偶然にもイヴアンス氏の友人で、昨夜会つたところ、氏は日本人の訪客があつたのに逢へなかつたのを非常に残念がつてゐたと傳へた。

昨日の午後、氏を訪問した日本人が私以外にはあると思へないから、早速ノラに電話を掛けて貰ひ、再び氏を訪問した。そして先輩の神田孝平譯の『楊牙児奇談』の事をきいた。

『千八百六十年代にオランダに探偵小説は無いと言つてゐる。それは大概英國ものの翻譯だらう』と、氏は言ふ。

『併しどうも舞台が英國でないので、オランダの創作でないとすればドイツかも知れない。』と私が答へる。

氏の經歴をきいたら、コンマアシヤル・アカデミイで法律を修め、殊に『生命保險事業』が專門であつた。その關係から生命の問題に興味を以て『生死論』の著書がある。この書は珍らしくも明治三十八九年の頃栗津清亮と云ふ人によつて邦譯されてゐるのである。イヴアンスとはペン・ネエムで、氏の本名がゼト・ヴアン・スケヴイハトヴエンであると言つたら、或は古本屋の店頭にこの書を見たことのあるのを思ひ出す人もあらう。

それから或は訴訟で友人のために辯護したのが元で、急に探偵や犯罪に興味をもつやうになり、それが今のやうな作家生活に入る動機だとの事であつた。

『歐洲の諸作家の中では、どんな作がお好きです。』と、きくと、

『ガストン・ルルウの「黄色の室」だ。』と、即座に答へられた。
日本の何かの雜誌に紹介したいと思ひ、寫眞を貰つて、氏の許を辭した。

今夜はアムステルダムで送る最後の夜だ。私は此の宿の人達の好意に酬ゆるためナンニイとネッテイを近くのサアカスに誘うて、荒くれ男が象を使ふのや、若い娘の曲馬を見せた。最後に世界の人種の行列があつたが、中の日本人はどうも西洋人が扮したのでなくて本物の日本人であるらしい。それについてゐる日本娘も一人は確かに擬ひのない日本の少女だ。

運よく彼等は私の前に留まつたので、よく見ると、もう頭のつるつるに禿げてゐる老人である。台の上に横臥したかと思ふと、直角に兩足を上げて、盥廻し、樽廻し、屏風廻しなどを初めた。

かうした足藝も、今は、日本の本國では殆んど見られない。私が最後にこれを見てからも廿年近い月日が經つてゐるだらう。さうしてたまに岡本綺堂氏などの兩國を題材に取つた物語などでその記述に出遭うては子供の昔を懷しんだのだが、それを此の遠い異鄕のアムステルダムで實物に邂逅しやうとは思はなかつた。殊に華やかで賑やかなオリンピツク競技の裏に、これを見出したのだから、何だか永井荷風氏の或る作品でも讀んでゐるやうな、妙に感傷的な哀愁をそゝられた。會つて話したら、終生を異鄕に流浪した物語にはさぞ面白いものがあるだらうとは思うたが、既に十二時近くなつてゐる上、親は二人の子供をつれてゐるので、彼女の母が私達の歸りの遲いのを心配してゐるだらうと思つたから、遂にその機を得なかつた。

ノラはどうしてもオランダ語の教授料を取ると言はない。そこで私はロンドンへ歸つてから友禪縮緬を贈る約束をした。私が日本を立つ前に、妻がどこからか西洋人は絹の贈物を歡ぶと云ふことをきいて來て、三組の友禪縮緬を荷物の中に入れてくれたのである。

『高いのだから滅多な人に遣つてはいけませんよ。――あなたが本當に感謝する事があつたらその時こそ贈物になさい。』妻はかう念を押した。ノラは私が西洋へ來てこれを贈りたいと思ふ最初の人であつた。

八月十二日。晴。

さやうならアムステルダムよ。さようならノラよ、ナンニイよ、ネッテイよ。

汽車をハーグで途中下車して市街を一巡し、更に海岸を見て廻つた。海岸はいゝ。併し氣分は鎌倉あたりの日本の海水浴場と變らず、ブルジョアが砂の上に芋の子を洗ふやうに群がつてゐる。歸りにフエファンフエンポールトの古牢獄をのぞいた。此れは昔の拷問道具の澤山揃つてゐる事で有名なので、ロンドン塔や、バスチュの牢獄も同じく、中世から近世への推移期に於ける幾多の罪惡幾多の慘虐が玆に行はれ、それに伴うて又幾多の哀しく、美しいロマンスを生んでゐる。シャトウ・ディフを訪ねては、モンテ・クリストを聯想し、バス

チュに於ては『バスチュの占領』を創作したアレクサンドル・デュマの『黒チュリップ』は確か此處が舞臺になつてゐたのだと記憶する。大小幾多の斧や、刀や、鎖や、首枷や、いづれを見ても氣持がよくないが、中には壁に殘る幾多の遺書の跡を掩うて、黑々と血痕の殘つてゐる室もあつたのには膽を冷やした。それから罪囚を石の上に立たせて、上から一滴一滴、水滴を頭上に垂らして徐々に殺す刑具があつた。堅い石が點滴によつて深い穴をうがたれてゐるに見ても、それが如何に慘酷な刑であつたかゞ想像出來る。

『これは多分東洋傳來のもので、歐羅巴人の發明ではあるまい。』と、說明者は室一ぱいに詰めかけてゐる見物人の中、特に私の方をヂロリと睨んで言つた。東洋人が特に慘酷で、西洋人はさうでないとでも思つてゐるのか！ 厭な奴だ。

大哲スピノザの生家と像とは見落した。

ロツテルダムへも一寸降りて、同じく町を一巡し、特にエラスムスの生地と像とに氣を留めて見た。

夜、十一時四十五分フック發、英國へ向ふ。

追記——私はオランダから歸るとその翌日すぐ立つてヨークシヤアに開かれてゐるI・L・P・の夏期學校に臨み、それがすむとすぐグロスタアに開かれてゐるフエビアン協會の夏期學校へ行つた。

ノラへは約束の通りにすぐ友禪縮緬を送つた所、彼女からはかう云ふ返事が來た。

"So many many thanks for the silk cloth you sent for me. I never saw such a beauty, I am going to make a spanish shawl of it. It will be topping, ripping beautiful."

(十一月六日ロンドンにて)

二宮尊徳

武者小路實篤

序

個人の力を無視する傾向が流行しだし、個人や個性が無視されがちになる時、頭をもたげてくるのは個人の力である。個人主義になりすぎることはわるいことではあるが、社會主義になり過ぎることも悪いことである。少くも個人の力、個人の價値は正當に見なければならない。個人の生命を尊敬することを忘れる社會がわるいことは元よりわかつてゐる。資本主義に我等が贊成出來ない點は個人の生命を尊敬することを知らないからである。個人の生命を本來の姿で忠實に尊敬する社會が一番正しい社會なのである。個人を奴隷あつかいしたり、一兵卒あつかいする社會は悪しき社會である。ある個人だけが個人ではない。すべての人が個人なのである。利己は制裁される必要がある。しかし個人の生命は正しき姿に於て尊敬されなければならない。そして個人が正しき姿で生きると云ふことは容易なことではない。社會が悪ければ[illegible]

かつて、自己を正しく生かす人もたまには出るものである。そして人々を理性的に内面的に指導する人は實にさう云ふ人である。

自分は日本に於て最も正しく自己を根本から生かし、又他の個人に向つても自己を正しく生かすにはどうしなければならないかを、本當に教へた人の最大の人として二宮尊徳を尊敬する。世界にも二宮尊徳位ゐ、正しく自己を生かし、他人を生かすことを心得又、實行した人は少ないと思つてゐる。

實際一生を通して自分の確信通り生き、又他人を生かした人と云ふものはさう多いものではない。殊に自分のなすべきことを正確に知り、それを一生を通して行つた人と云ふものはごく少ないやうに思ふ、そして二宮尊徳は實にさう云ふ人である。

自分は二宮尊徳のことをよく調べたとは云へない。しかし二宮尊徳の精神や人となりをいく分か理解してゐるつもりだ。他により適當な人がないとは云はないが、自分が二宮尊徳のことをかくのに適當な人[illegible]

二宮尊徳のことをかいてみたい[illegible]と思つてゐる。それは二宮尊徳のことをまだまるで知らない人のために、日本にもこんな野性な聖人がゐたことを知らせ、そして同時に人間はいかに生るのが本當かを考へて見たく思ふ。

自分はこゝではたゞ「二宮翁夜話」だけについてかくつもりだ。この一冊で尊徳の人となりは十分にわかると思つてゐる。（引照は昭和三年十月發行の改訂版の第二十五版による。自分は舊い本の方がなじみがあるが、改訂版によることにした）

一

尊徳は自己流に随分勉強した人らしい。しかしその讀書の範圍は限られてゐたのは云ふ迄もない。彼は正式には學ばなかつたし、國文、漢文以外は勿論よめなかつたらうし、それもごく一部に限られてゐた。しかし尊徳はその點耶蘇と同じく、赤子のやうな心をもつて、學者が知ることが出來ず、よむことが出來ないものをよんだ。

尊徳はそれについてかう云つてゐる。

「眞の道は學ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覺へ、書籍もなく記錄もなく、師匠もなく、而して人々自得して忘れず、是れぞ誠の道の本體なる、渇して飲み、飢て食ひ、勞れていね、さめて起く、皆此類なり、（中略）夫我教は書籍を尊まず、故に天地を以て經文とす、わが歌に「音もなくかもなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ」[illegible]天地の經文に誠の道は明らかなり、斯る尊き天地の經文を外にして、書籍の上に道を求むる學者輩の論說は取らざるなり云云」

尊徳の確信がいかに強いかは之で知ることが出來る。彼は又云ふ。

「世の中に道を說たる書物、算ふるに暇あらずといへども一として癖なくして全きはあらざる也。如何となれば、釋迦も孔子も皆人なるが故なり、經書といひ、經文と云も、皆人の書たる物なればなり、故に予は不書の經、則物言はずして四時行れる物なる處の天地の經文に引當て、違なき物を取て、違へるは取らず、故に予が說く處は決して違はず云云」

人の書たる物皆癖ありと云ふのは事實である、尊徳自身にもこの癖はある。予がとく處決して違はずは少し云ひすぎてゐる。さう云つたすぐあとに嘘を云つてゐる。

即ち

「燈皿に油あらば、火は消ざる物としれ、火消へば油盡たりと知れ（之は本當だ、だが次ぎがいけない）大海に水あらば、地球も日輪も變動なしと知れ、萬一大海の水盡きる事あらば世界はそれ迄なり、地球も日輪も散亂すべし云々」と

之は出たらめだ。しかし自己の道が天地を以て經文としてゐるから、「日輪に光明ある内行はれざる事なく、違ふ事なき大道なり」と云ふ自信は彼にとつては事實であり、又人間にとつても一番大事な處に

於て眞實である。

二

多くの人は本をよみすぎると事實を無視する傾になりやすい。他人の教をうける時、一々それが何處まで本當か、何處から嘘か、何處までは見ぬけてゐるか、そのさきはどうかをよく見ぬくことが必要である。さもないとその人は末者根性に墮し、眞實より理論にかぢりつく醜態を演じることになる。その時、その人の頭の底が露骨にあらはれ、心ある人に愛想をつかされる。

尊徳は釋迦や孔子の名におどろかないだけの深さをもつてゐた。彼は自然に深かく根をはることを知つてゐる。

しかし正直に云つて尊徳は自然科學の智識があまりになさすぎ、又世界を自分の住んでゐる温帶ばかりのものと思つてゐる。それで今の自分達がよめば馬鹿氣てゐることに時々出こわす。しかし自分は今こゝでその馬鹿氣てゐる處を、人々に示す必要はない。我等が金坑に入るのは土呂をとつてくるためではない。我等が美術館に入るのは下らない畫をひろい出すためではない。我等は高山の美を、その低き處に捜さない。大木の美は虫食ひの葉で滅じられないことを知る。

自分はこゝで萬古不易のものを求めたい、本當のことを求めたい。二宮尊徳は幾多の本當のことを云つてゐる。その云ひ方に不足な處があつても、その精神にまちがいがない時、自分はその言葉の前にその精神をすてたくない。

正直に云つて尊徳を自分が孔子や釋迦のやうに尊敬出來ないのは自然科學を知らなすぎるにかゝわらず、天地の經文を讀まうとしたゝめに、よみちがいが多く、あまりに自己流なよみ方をしすぎてゐる點だ。その點で頭がいゝとは云へない。しかしそれにもかゝわらず、彼が孔子や釋迦に對立するだけの意力を内に感じてゐたのは事實である。

それはへんな例をとつて云へばクルベーがレオナルドの前にでも威張つて立つことが出來るやうな具合だ。尊徳はどこまでも封建時代の百姓である。しかし大地の上につつ立つて、何ものをも恐れない。現實の上に根をはり切つて、自然と人力を實によく見、又眞實に生かした人だ。孔子や釋迦は手に鍬を持つたことはあるまい。大地から米をつくり出したことはあるまい。尊徳はさう云ふことにかけて一番はつきりした考をもつてゐるのだ。

之は孔子や釋迦にとつて恥でないにしろ、尊徳の強味であることはたしかだ。彼は天地の經文をよむと同時に、天道と人道とはどんなものか實にはつ切りした考をもつてゐる。

「人道は之と異なり、如何となれば、風雨定めなく、寒暑往來する此世界に、毛羽なく鱗介なく、裸體にて生れ出で、家がなければ雨露が凌がれず、衣服がなければ寒暑が凌がれず、爰に於て人道と云物を立て、米を善とし、莠を惡とし、家を造るを善とし、破るを惡とす。皆人の爲に立たる道なり、依て人道と云ふ、天理より見る時は善惡はな

く、其證には天理に任する時は、皆荒地となりて、開闢のむかしに歸るなり……」

「人道は譬ば水車の如し、其形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻し、丸に水中に入れば廻らずして流るべし、又水を離るれば廻る事あるべからず、夫佛家に所謂知識の如く、世を離れ慾を捨たるは譬ば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教義も聞ず、義務もしらず、私欲一偏に著するは、水車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社會の用をなさず、故に人道は中庸を尊む、水車の中庸は宜き程に水中に入て、半分は水に順ひ、半分は流水に逆昇りて運轉滯らざるにあり、人の道もその如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、慾に隨て家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり」

之等は本當を見てゐる人の言葉と云つてい丶、云ふことは實にはつきりしてゐる。

尊德はくり返し、くり返し天道と人道とをといてゐる。そしてその人道と云ふのは人間生命のために益にたつ仕事をさしてゐる。彼はただの道學者ではなく、實によく現實を見てゐる。

「人界に居て家根のもるのを坐視し、道路の破損を傍觀し、橋の朽たるを憂へざる者は即ち人道の罪人なり」

道學者はこんなことは云はない。

そして尊德の生きてゐる覺悟は次ぎのやうなものであつた。

「それ人、生れ出でたる以上は死する事のあるは必定なり、長生きとい[illegible]も實は毛弗の論なり、譬へば蠟燭に大中小あるに同じ、大蠟といへども火の付たる以上は四時間か五時間なるべし、然れば人と生れ出たるうへは必ず死する物と覺悟する時は、一日活れば則ち一日の儲、一年活れば一年の益なり、故に本來我身もなき物、我家もなき物と覺悟すれば、跡は百事百般皆儲なり、予が歌に、かりの身を元のあるじに貸し渡し民安かれと願ふ此身ぞ、夫此世は我人ともに僅の間の假の世なれば、此身ばかりの身なる事明らかなり、元のあるじとは天を云ふ、このかりの身を我が身と思はず、生涯一途に世のため、人のためのみを思ひ國のため天下のため、益ある事のみを勤め、一人たりとも、一家たりとも、一村たりとも、困窮を免れ富有になり、土地開け道橋整ひ安穩に渡世の出來るやう、夫のみを日々の勤とし、朝夕願ひ祈りておこたらざる我此身であるといふ心をよめる也、是我が畢世の覺悟なり、我道を行はんと思ふ者はしらずんはあるべからず」

實際この覺悟をもつて一生ぶつ通したのが尊德である。この點で世界的に云つても無比の人である。尊德の弟子の人達は今日本に大勢あつて働いてゐられることゝ思ふが、この精神が實行出來る人を自分は實に尊敬するものである。小作爭議だけでは穀物は出來ない、地主は土地を自分のものと思はず、小作の方達の困窮をまぬかれることを心がけ、小作の方達は又自己を實質的に困窮から免れるやう協力すべきである。それが出來ない限り田園は益々荒れる。尊德の精神が生きれ

二宮尊徳

武者小路實篤

かつて、自己を正しく生かす人もたまには出るものである。そして人々を理性的に内面的に指導する人は實にさう云ふ人である。

自分は日本に於て最も正しく自己を根本から生かし、又他の個人に向つても自己を正しく生かすにはどうしなければならな、かを、本當に教へた人の最大の人として二宮尊徳を尊敬する。世界にも、宮尊徳位ゐ、正しく自己を生かし、他人を生かすことを心得又、實行した人は少ないと思つてゐる。

實際一生を通して自分の確信通り生き、又他人を生かした人と云ふものはさう多いものではない。殊に自分のなすべきことを正確に知り、それを一生を通して行つた人と云ふものはごく……ふ、そして二宮尊徳は實にさう云……

一（二宮尊徳）一

序

個人の力を無視する傾向が流行しだし、個人や個性が無視されがちになる時、頭をもたげてくるのは個人の力である。個人主義になりすぎることはわるいことではあるが、社會主義になり過ぎることも悪いことである。少くも個人の力、個人の價値は正當に見なければならない。個人の生命を尊敬することを忘れる社會がわるいことは元よりわかつてゐる。資本主義に我等が贊成出來ない點は個人の生命を尊敬することを知らないからである。個人の生命を本來の姿で忠實に尊敬する社會が一番正しい社會なのである。個人を奴隷あつかいしたり、一兵卒あつかいする社會は悪しき社會である。ある個人だけが個人ではない。すべての人が個人なのである。利己は排斥……しかし個人の生命……

[illegible]出すことが出來たらう。

それがうそだと思ふものは四五年後の新しき村を見てもらいたい。

「我が教は德を以て德に報うの道なり、天地の德より、君の德、親の德、祖先の德、其蒙る處の人々皆廣大なり、之に報うに我が德行を以てするを云ふ」

[illegible]ただ尊德の[illegible]教を根本から實行する力のある人があるなら[illegible]が出來ず、殺されるまでは目がさめな[illegible]

四

尊德は實によく道のことを知つてゐる。

ば與村は必ず救はれるのだ。尤もそれには第一に勤勉が必要になる。怠惰で氣焔をあげる人々が尊德を喜ばないのは當然である。

そんなつまらぬいや味はぬきとして、尊德の精神には誰もが頭をさげていゝと思ふ。

彼は所謂外部からの革命家ではない。だが內部から新しい世界を生み出すことですべての人の生活を根本からかへる力は持つてゐた。

三

彼は所謂ブルジョアに收入の半分で生活することをすゝめ、あとの半分を國益に捧げることをすゝめてゐる。彼は又人々が自分のために働くだけで勤めを果したものと思はず、他の生命のために働かねばならぬことを實によく知つてゐた。彼の教への報德と云ふのは、まさしく他の恩に報ゆるのである。他の德をたゞでうけとり、なほ多くを要求するもの多き世の中において、彼は人々に本道に歸ることをすゝめたのだ。彼の言葉はどれをとつて來ても、この精神が實に生きてゐる。

つまり彼はたゞ人々に勞苦を要求するのではない。彼はすべての人が生きることを實に心の底からのぞんでゐて、それから一歩もはみ出ない稀有の人間だつた。そして又その望みにどうすれば叶ふかを、實によく知つてゐた。彼は天地にあまへたがらない、彼は天道を信じ、それを實行することによつて人々が救はれることを知つてゐた。しかしその人道は他人を道德的批評するだけの人道ではない、人間が生きるためにしなければならないことを實によく知り、それを實行することを人々に先つて行ひ、又說いてうまなかつた。

一々彼の言葉をあげては限りがないが、彼の片鱗を示すには矢張り彼の言葉によるのが一番いゝと思ふから、その內のごく一部分をかいて、彼の精神をはつきりしたいと思ふ。

靑柳又左衞門と云ふ人が彼に「越後の國に、弘法大師の法力に依り、水油地中より湧き出でゝ今に到つて絕えない」と云つた。尊德はそれをきくとすぐから云つた。

「それは奇は奇なりだが、只其一所だけだから尊むに足りない」

實にうまいことを云つてゐる。たしかに弘法大師の法力で出るものなら、何處にでも出したがいゝ。眞の宗教家は偏愛をよろこばない。彼は少數の人のことは考へない、人間全體のことを考へる。彼はつゞいて云ふ。

「私の道はそれとちがふ。最も奇である。何國にても荒地を起して菜種を蒔き、其實法を得て是を油屋に送れば、種一斗にて油二升はきつと出て永代絕へない、是皇國固有天祖傳來の大道にして、肉食妻帶暖衣飽食し、智愚賢不肖を分たず、天下の人をして、皆行はすことが出來る、是開闢以來相傳の大道で日月照明ある限り、此世界あらん限りまちがいなく行はるゝ道だ。だから大師の法にまさる萬々である」

尊德はつまりは天公の地下資源を元のまゝにする

「且つ我道又大なる術あり、一錢の財なくして四海の民窮を救ひ、普く施し海内を富饒にして猶餘りあるの法なり、其方法は只分度を定むるの一のみ、予是を相馬、細川、烏山、下館等の諸藩に傳ふ、然といへども、是は諸侯大家にあらざれば、行ふべからざるの術なり、此外に又術あり、原野を變じて田畑となし、貧村を變じて福村となすの術なり、又愚夫愚婦をして、皆爲さしむ可き術あり山家に居て海魚を釣り、海濱に居て深山の薪を取り、草原より米麥を出し、事はずして必ず勝つの術なり、只一人をして能せしむるのみにあらず智愚を分たず、天下の人をして皆能せしむ、如何にも妙術にあらずや、能學んで歸り能勤めよ」

この言葉は尊徳だから云へ、又この言葉は生きる。他の人が云へば空々しくなる。しかし本當である。今と時代がちがうと云ふ人があるかも知れない。しかし尊徳はつぶしのきかない男ではない。今なら今で最も適當な術を見出すであらう。又人類はつぶしのきかないものではない。尊徳の熱誠をもては、今の人でもこの術は獲得できる。尊徳が今生きてゐれば、必ず封建時代よりはらくに自分の精神を生かす道を見出すことが出來たらう。

それがうそだと思ふものは四五年後の新しき村を見てもらいたい。

「我が教は徳を以て徳に報うの道なり、天地の徳より、君の徳、親の徳、祖先の徳、其蒙る處の人々皆廣大なり、之に報うに我が徳行を以てするを云ふ」

「汝等能々思考せよ、恩を受て報いざる事多かるべし、徳を受て報せざる事、少からざるべし、徳を報う事を知らざる者は、後來の榮のみを願ひて本を捨てるが故に自然に幸福を失ふ。能徳を報ふ者は、後來の榮えを後にして前の丹精を思ふが故に、自然幸福を受て富貴其身を放れず……」

之等の言葉の内には今の時代の人が誤解したがる言葉がある。だが精神は今も昔もかはらない。友人や仲間に愛敬されるものは徳に報ゆる誠意がどこかにある人である。それがない人は信義において裏切りものになりやすい。

又本當に恩を感ずるもの、資本家は勞働者に本當に恩を感じ、又勞働者は資本家を自己の生活の安定さしてくれる世話人として恩を感じるやうになれば其處に調和がとれないこともないと思ふ。しかしそれは今のありさまでは望むことの出來ないものだが、しかしすべての人が自分の身はかりもの、自分の財産はかりものたゞ兄弟姉妹の生命のためにそれを本當に生かしたいと思へば、今不可能と見へることも不可能ではなくなるのだ。たゞ尊徳のやうな至誠な人が少なく、又その教を根本から實行する力のある人がゐないから、萬事は調和することが出來ず、殺されるまでは目がさめないのである。

四

尊徳は實によく道のことを知つてゐる。彼は所謂「なくて叶はぬ一

つのこと」を實によく知つてゐる。だから云ふことも行ふことも自由自在でまちがいがないのである。

彼は大道についてから云つてゐる。

「大道は譬へば水の如し、善く世の中を潤澤して滯らざる物なり、然る尊き大道も書に筆して書物と爲す時は、世の中を潤澤する事なく、世の中の用に立つことなく、譬へば水の氷りたるが如し、元水には相違なしと云へとも少しも潤澤せず、水の用をなさぬなり、而て書物の註釋と云物は又氷に氷柱の下りたるが如く、水解て又氷柱と成に同じ、世の中を潤澤せず、水の用を爲さぬは矢張り同樣なり、扨此氷となりたる經書を、世上の用に立んには胸中の溫氣を以て能解して、元の水として用ひざれば世の潤澤にはならず、實に無益の物なり、氷を解すべき溫氣胸中になくして氷の儘にて用ひて水の用をなす物と思ふは愚の致なり、世の中は神儒佛の學者有て世の中の用に立たぬは是が爲なり、能思ふべし故に我が敎は實行を尊む、夫經文と云ひ經書と云、其經と云は元機の立糸の事なり、されば堅糸ばかりにては用をなさず、橫に日々實行を織込て初て用をなす物なり、橫に實行を織らず、只堅糸のみにては益なき事辯を待たずして明かなり。」

之は本當である。

しかし多くの人は本をよみすぎるが、實行する力と暇がない。それ程よみすぎる。だから本で得たものを自由自在に生かすことが出來ない。そして本から得たものをこなるべく觀察を離さずにつかうのが、學者の務のやうに思つてゐる。愚かしいことである。尊德は學問は少ない、しかし大精神を生かす點で彼の如きはまれである。

彼は又かう云つてゐる。

「佛者も釋迦が有難く思はれ、儒者も孔子が尊く見ゆる內は能修行すべく、其地位に至る時は、國家を利益し世を救ふの外に道なく、世の中に益ある事を勤めるの外に道なし、譬へば山に登るが如し、山の高く見ゆる內に勤めて登るべし、登り詰れば、外に高き山なく、四方共に眼下なるが如く、此場に至つて仰ぎて彌々高きは只天のみなり、此處まで登るを修行と云、天の外に高き物ありと見ゆる內は勤めて登るべし、學ぶべしに」

云ふことは大きい。だが實感である。尊德は天より外に恐るゝものがない域に達した。彼にしてこの言葉を大言壯語ではなく、實にあたりまいの言葉として聞くことが出來る。彼は日本では珍らしい大きい人物である。

彼は實際、世を救ふこと許り考へてゐた男だと云へる。彼程日常座臥世の中を全部的に富まし、人々の生活を安らかにすることを考へてゐた男は少ないと思ふ。それも彼はたゞ天道に從つて人道を生かすこと許りでそれを實現出來ることを信じ、又その呼吸をのみこんでゐた。

彼は又實[illegible]

「むかしより人の捨てざるなき物を、拾ひ集めて民に與へん」とあるを山内董正氏見て是は人の捨たると云ふべしと云へり」

尊徳はそんなことを云はれて驚くやうな男ではなかつた。彼はすぐかう云つた。

「その時は人が捨てなければ拾へないでせうそれでは甚だ狹い、捨てるのを拾ふのは僧侶の道で我が道ではない、古歌に「世の中に慾を捨よと勸めつゝ、跡より拾ふ寺の住職」と云ふことがある」と大笑した。

其處で董正氏が云つた。

「捨てざるなきものとはどう云ふものですか」

「そんなものはいくらでもあります。第一に荒地、第二に借金の雜費と暇潰し、第三に富者の驕奢、第四に貧しき者の怠惰等です。夫荒地の如きは、捨てたる物のやうですが、之を開かうとすると必ず持主が出て來て中々手がつけられません。是は無きものだが、捨てたもので はありません。又借金の利息、借替成替の雜費、皆同じたくいで捨るのではなく、無い物です、其外富者の驕奢の費、貧者の怠惰の費、皆同じです、かくの如く世の中には捨てるのではなく廢れて、無に屬するものがいくらでもあります。能拾ひ集めて國家を興す資本とすれば普く濟ふてなほあまりがあるでせう。人の捨てざる、無き物を拾ひ集めるのは、私の幼年より勤めた處の道で今日に至る所以です。則ち仕法金の本根です能心を用ひて拾ひ集めて世をお救ひなさい」

又彼はこのことをもつとはつきりかう云つてゐる、我道は荒蕪を開くを以て勤とす。而して荒蕪に數種あり、田畑山林に荒れたる荒地あり、又借財嵩みて、家祿を利息の爲に取られ、祿ありて益なきに至るあり、是國に取て生地にして本人に取て荒地なり、又薄地麁田年貢高掛り丈けの取箇のみにして作益なき田地あり、是上の爲に生地にして、下の爲に荒地なり、資産あり金力ありて、國家の爲をなさず、徒に驕奢に耽り財産を費すあり、國家にとつて尤も大なる荒蕪なり、又智あり才ありて、學問もせず、國家の爲も思はず、琴棋書畫などを弄して、生涯を送るあり、世の中の爲め尤も惜むべき荒蕪なり、又身體強壯にして、業を勤めず怠惰博奕に日を送るあり、是又自他の爲に荒蕪なり、此數種の荒蕪の內、心田荒蕪の損國家の爲に大なり、次に田畑山林の荒蕪なり、皆勤て起さずばあるべからず、此數種の荒蕪を起して、悉く國家の爲に供するを以て我が道の勤とす、「むかしより人の捨ざる無き物を、拾ひ集めて民にあたへん」是予が志なり」

理窟はどうでもつくかも知れないが、この尊徳の志は尊敬すべきである。この志が今の青年にはなさすぎるやうに思ふ。自分達は新しき村の仕事の內にこの精神を多分にとり入れたいと思ふ。本當に今の時代は眞の意味での人類の生命のために働いてゐるものが少な過ぎるやうに思ふ。巡査とかくれんぼすることだけが世の中を救ふ道ではない。もつと骨折るべき道が他にもあるやうに思ふ。

都會の生活を見て自分が恐れるの は怠惰け者が過度にふへつゝあ

ることだ。文明の利器を本當に人類の生活のために益だゝせることが出來る、第二、第三の二宮尊徳が出て來ることを自分は望んでゐる。

自分は尊德のこの言葉の前には内心云ひわけをしながら恥かしがらないわけにはゆかないが、自分は若き自分達の仲間に、この尊德の精神を新しい姿で生かしてくれる者があることを信じることが出來るのをよろこんでゐるものだ。

自分達が新しき村の仕事を始める時、既成の田を買はなかつたのは、既成の田を荒すのを恐れ、新しく少しでも開田をしていつて雜草のかはりにいくらかでも米をとる道をとりたかつたからだ。今や水路も出來、兄弟の手で少しづゝではあるが開田が出來つゝあることをこのさい、一寸兄弟のために自慢したい。今に自分達は日本中の荒地で買へる處は片端から買つて開墾してゆくことを夢みてゐる。之はいくらでも同志を得られる自分達にとつては不可能ではない。

尊德の精神と我等の精神との間に、大事な處で共通のあることを自分は知り、大いに教はりたいと思つてゐる。

（時代はちがうと云ふか、しからば君達は飯は食はないのか。米は何處からどうしてとれるものか君達は知つてゐるか。之は冗談だが）

五

彼は又くりかへし云ふ。

「……（開[illegible]）凡そ數種の荒蕪は其元心田の荒蕪より

する物なれば、我が道は先づ心田の荒蕪を開くを先とすべし、心田の荒蕪を開きて後は、田畑の荒蕪に及びて此數種の荒蕪を開きて熟田となさば、國の富强は掌を運らすが如くなるべきなり」

之は彼が云ふから本當である。彼は實際、貧村を富村にする天才である。その方法についても彼は簡單にかう云つてゐる。決してむつかしいことは云つてゐない。

「村里の興復は直を擧るにあり、土地の開拓は沃土を擧るにあり、然るに善人は兎角に退いて引籠る癖ある物なり、勤めて引出さゞれば出ず、沃土は必ず卑く窪き處にありて掘出さゞれば顯れぬ物なり、此に心付ずして、開拓場をならす時は沃土皆土中に埋りて永世顯れぬ物なり、此に心付ずして、開拓場をならす時沃土皆土中に埋りて永世顯はれず、村里の損是より大なるはなし、村里を興復する、又同じ理なり、善人擧て隠れざる様にするを勤とすべし、又土地の改良を欲せば沃土を掘出して田畑に入るべし、村里の興復は、善人を擧げ出精人を賞譽するにあり、是を賞譽するは、投票を以て耕作出精にして品行宜しく心掛宜しき者を撰み無利足金施回貸附法を行ふべし、此法は譬へば米を臼にて搗くが如し、杵は只臼の正中を搗くのみにして、臼の中の米は同一に白米となると同じ道理にて返濟さへ滞らざれば社中一同知らず〳〵自然と富貴すべし、而て返濟の滞るは、譬へば臼の米の返らざるが如し、是此仕法の大患なり、臼の米返らざる時は、杵搗しなり一に拂れ[illegible]る物なり、此仕法にて返濟滞る時は、仕法廢絶し

て救はざる物なり、借財取救ひの時能々注意し説諭すべし」

彼は又から云つてゐる。

「論語に曰、信なれば則民任ずと、兒の母に於る、己れ何程に大切と思ふ物にても、疑はずして母には預くる物なり、是母の信、兒に通ずればなり、予が先君に於る又同じ、予が櫻町仕法の委任は、心組の次第一々申立るに及ばず、年々の出納計算するに及ばず、十ヶ年の間任せ置者也とあり、是予が身を委ねて、櫻町に來りし所以なり、扨此地に來り、如何にせんと熟考するに皇國開闢の昔、外國より資本を借りて、開きしにあらず、皇國は皇國の徳澤にて開きたるに相違なき事を、發明したれば、本藩の下附金を謝絶し、近郷富家に借用を頼まず、此四千石の地の外をば、海外と見做し、吾れ神代の古に、豐葦原へ天降りしと決心し、皇國は皇國の徳澤にて開く道こそ、天照大御神の足跡なれと思ひ定めて、一途に開闢元始の大道に據りて、勉強せしなり、夫開闢の昔、葦原に一人天降りしと覺悟する時は、流れに潔身せし如く、潔よき事限りなし、何事をなすにも此覺悟を極むれば、依賴心なく、卑怯卑劣の心なく何を見ても、浦山敷き事なく、心中清淨なるが故に、願ひとして成就せずと云ふ事なきの場に至るなり、この覺悟、事を成すの大本なり、我悟道の極意なり、此覺悟定まれば、衰村を起すも廢家を興すもいと易し、只此覺悟一つのみ」

尊徳の言葉を上げては切りがないから、この位いにしておいて、自分の見た尊徳について一言したいと思ふ。

六

尊徳に感心するのは先づその覺悟である。何物にも惑かず、何物にも動かされない覺悟が徹底してゐる。その覺悟は今時にあてはまらないといふ人があるかも知れない。たしかに今時に天から一人で降りて來たと思つても、一坪の地面も自分の自由にはならず、一本の木の實も自由に食ふことは出來ない。しかしそれは理窟である。尊徳の覺悟、尊徳の決心、尊徳の勤勉があれば、必ず何處かで自分の精神を生かすべき道を切りひらくにちがいない。

たとへば草履をつくつてゞも彼なら生活し、そして道を段々切りひらいてゆくであらう。彼の覺悟と實力は一通りではない。この覺悟が出來てゐる人と云ふものは珍らしいものである。

彼は誰にもやつけられない男である、彼はたゞ天だけを恐れゝばよかつた男である。

自分はこの頃、人間はどう生れればいゝかを考へた結果、自然、必然、當然の道を歩く事が出來れば一番いゝことを知つた。

しかし多くの人は自然や必然の道をふんでゐない。彼等は多くどうでもいゝ道をふんでゐる。毎日、しなければならないことをしてゐない。どうでもいゝことをしてゐる。金をとるのでも、自然の道を通つてとつてゐるのではない。不自然な道を通つて金をとつてゐる。自然

れない。しかし彼は偏狹な男ではない。自分の精神を生かすには自由自在な處をもつてゐた、水のやうな男である。彼は大事なことは手ばなさないが、大事のためにはやむを得ぬ時は臨機應變の方法をとることを辭さなかつた。(上役が口を出して邪魔されて仕事がはかどらない時自分の妻に上役を醉つぶさせたやうな、しかし後にその上役は彼の忠實な弟子になつた)だから人によつては彼を策士のやうに云ふ人があるさうだが、しかしそれは彼の精神を知らず、豚にも眞珠を食はせろと云ふ議論にすぎない。

彼の言葉や、逸話をあげては切りがない。しかし彼はたしかに日本の生んだ眞人の一人で、西郷隆盛や勝海舟にまさる男である。恐らく、彼の自然科學にたいする無智な處をけづれば、彼は日本の生んだ最大の世界人である。トルストイが彼のことを知つたら隨分喜んだであらう。

自分は誰もが知つてゐるはづの、尊德をそれも殆に誰もが知つてゐるはづの二宮翁夜話によつてかくのは氣もひけるが、しかし今の若い人は尊德のことを知らなすぎるやうに思ふ。そして今の時代の思想は、人間をよくし、土地をよくし、生産を豐富にするために苦心し、努力する人を無視しすぎてゐるやうに思ふ。自分は日向の新しき村に住んで、農村の人達をいくらか知り、その人達の內の秀れた人々に尊德のよき感化がおよんでゐることを知つてはゐるが、しかしもつと教育のある人々が、尊德の精神と共鳴する精神に動かされてもいゝと思つて、この文をかいて見る氣になつた。

大地をはなれて生活する人々、人間の生命と關係のないことで金をとり、生活する人々が多い時、尊德が忘れがちになられることは當然かも知れない、だが我等は大地をはなれた生活をすると荒んでゆきさうに思ふ。こゝらで又大地の生活に人々は頭を向けてもいゝ時ではないかと思ふ。

少くも新しい日本、新しい人間として、新しい生命力を感じて生き出さうと思ふものは生活をひきしめることが必要ではないか。そして人間は遊んで許りゐては生活が出來ないものだと云ふことを知り、尊德の云ふ人道を行ふことが必要であることを時に反省して見ることはいゝことゝ思ふ。

實際覺悟を新にして、立ちなほることが必要な人は存外多いやうに思ふ。自分の足下に穴をほつて、その上でうかれてゐるものが多いやうに思ふ。

このさい、大地に立つて自分の生活を築き上げ、さうして新しい社會を大地の上に築き上げる力をもつ尊德の精神と事蹟をもつと強く顧みられていゝと思ふ。

僕自身十何年尊德のことは忘れて居、二宮翁夜話も何處かへなくなしてしまい、今度友人からもらつてよみなほして、改めておどろいたわけである。よろこんだわけである。

勿論自分は若い時、尊德の名を喰はず嫌ひしたことがあつたが、尊德

徳を知つてからいつも尊徳はしてゐた。しかし尊徳のことは忘れるともなく忘れてゐる時が多かつた。思ひ出すのは子供時代の勤勉さ位いと云つてもよかつた。あの勤勉さにはいつも感嘆し、あの精神でやらなければ運命と本當に取組んだとは云へないと思つてはゐた。しかし今度「夜話」をよみなほして、今更に感心した。大した奴だと思つた。相手が相手で言葉の調子がさがつてゐる所もないとは云へないがさう云ふ時でも、本當のことは底に厳然とひかへてゐる。

彼の精神は何處にあるか。

一言で云へばすべての人が生きると云ふことである。

世を救ふと彼が云ふのはすべての人が安樂に働け、安樂に生きられる世界をつくり、すべての人が饑饉の時も安心して生きられる世界をつくることをのぞんでゐる。

そしてそのためには人道をふまなければならないし、自分の蟲のいゝ考を押えつけて、他人の生命のために譲るべきものは譲り、働くべき時は働かねばならない。

大事な處は全部の人が生活出來る社會をつくることだ。それには怠けものは働かなければならないし、富めるものは譲らなければならない。そして土地はよくし、人々は覺悟を新にしなければならない。

かう云ふとあたりまいになるが、そのあたりまいのことを彼は根本から知り、又實行したのだ。彼は決して無意味に人に儉約をすゝめなければ善行もすゝめなかつた。

彼は梅辻と云ふ神學者の話を批評してから云つてゐる。

「其人となり、辯舌爽にして飾なく立居ふるまひも安らかにし一物に関せず、虚に近へと云ふべし、然れども未だ盡さざる事のみ多し、彼れ位の事にては一村は勿論、一家にても衰へたるを興す事は出來まじ、如何となれば其説く所目的立ず、至る處なく、專ら儉約を尊んで、謂れなく只儉約せよくと云つて儉約して何にすると云事なく善を爲よと云て其善とする處を説ず、且つ善をなすの方を云ず、其説く處を實行する時は上下の分立ず、上國下國の分ちもなく、此の如く一般儉約を爲たりとも、何の面白き事もなく、國家の爲にもならざるなり、其他の諸説は只論辯の上手なるのみ、夫我儉約を尊ぶは用ひる處有が爲なり、宮室を卑し衣服を惡くし飲食を薄うして資本に用ひ、國家を富實せしめ、萬姓を濟救せんが爲なり、彼が目途なく、至る處なく只儉約せよと云とは大に異なり、誤解する事勿れ」

この言葉を見ても彼の覺悟と精神はわかると思ふ。

まだ云ひたいことはいくらでもあると思ふが、以上で彼がどんな人か大概は察知することが出來ると思ふ。實際彼は救世の大業を自從をもつて始めたのだが、あとの者がつゞくことが出來なかつたのは惜しい。しかし彼の精神は死なゝいであらう。見へない處で生てゐることを自分は知つてゐる、又信じてゐる。

それにしても彼の確信の強さ、又その強さのよつてくる深さと、確かさに自分は敬意を示すものである。

又勇氣づけられるものである。

そして我が若き兄弟姉妹の内から第二第三の尊徳のやうな人が出てくることを私かに期待するものである。(二九、一、八)

導訊問のあつたらしい形跡は多々あるが更に角寒子は峻嚴なる追及に一たまりもなく保險金詐欺放火と自狀に及んだ。越えて其翌日大森署で××司法主任に放火の事實は認めたが其放火の原因は現住所を他に移轉したい爲であると申立を變更した。

事件は即日東京地方裁判所檢事局に送られ武藤小山檢事の訊問に入つたが、寒子は亦た初めの如く保險金放火と供述したので、直ちに松南豫審判事の訊問を受けたが、其第一回訊問の前半は放火を認め、後半では否認した、判事が是れを責めると寒子は興味ある問答を重ねてゐる。

（判事）廿七問、被告が放火したるは間違ないのか

答、實は私が放火したのではありませぬ、警察で責められたから、やつたと云ふて仕舞つたのです。

（判事）廿八問　けれど外から放火したとは見えぬし失火の樣にも見えない狀況と思はるるが什かね。

答、それでは私が點けた事にして置きます。[illegible]すから御判斷を願ひます。

（判事）廿九問、それではいかん、やつたら、やつたと云つたらどうだ。

答、私が本當に放火しました。

松南予審判事第二回訊問調書、放火を認む。
役林予審判事第三回　〃　〃、放火否認。
同上　第四回　〃　〃、放火否認。
同上　第五回　〃　〃、放火否認。
同上　第六回　〃　〃、放火否認。
同上　第七回　〃　〃、放火否認。

かくて豫審は終結を告げ公判に付するに足る可き犯罪の嫌疑なしとして免訴の決定を與へられた所之に對し檢事が抗告し、東京控訴院で審理の末、充分なる嫌疑あり、故に東京地方裁判所の公判に付すとの決定があつた。そこで愈々寒子は陪審裁判の檜舞臺に上せられ、その是非を問はるゝ事となつたのである。

十一月廿二日公判準備手續を終へ、廿九日管地檢證、十二月十日迄に田中地方裁判所長が抽籤により選定したる三十六名の陪審員に對し櫻木裁判長より夫れ〳〵呼出狀を發すると共に廿八名の證人にも召喚狀が出され準備[illegible]

開廷の十七日は非常な人氣で早朝から傍聽者が殺到し、午前六時には既に定員を越してゐた。午前十時出頭した陪審員候補者卅二名（四名缺）と係判檢事辯護士、被告人とは先づ第二號法廷に入廷、非公開の內に陪審員の除斥忌避の手續を取り結局十二名の正陪審員と二名の補充陪審員を選定した。今陪審員を職業別にすれば、機械販賣業二、無職二、農二、酒屋二、組紐商一、そばや一、こんにやくや一、會社員一であつた。十一時廿五分法廷は公開された。此日判官席の後方には原法相、小原、鈴田兩次官、局長大審院長檢事總長を始め司法大官、綺羅星の如く居並び又た普通傍聽席には[illegible]其他の特別傍聽人、一般傍聽人を以て立錐の地がない。陪審員の服裝に付て一寸思ひ出した話がある。今は昔獨逸で初陪審の時Aさんは法廷に行くのだから威嚴を示さうとハイカラーにモーニングの出立ち、Bさんは民衆裁判だからと日本なら差しづめ印半纏の通常服で出かけた。二人は法[illegible]

通常服Bさんはモーニングでお互に顏見合つて呆然としたと云ふ滑稽談がある。今度の陪審員には十二名中二名は洋服それも通常服で和服も極めて質素なもの民衆裁判には相應はしい服裝と思つた。暫時休憩、午前十一時半書記の敲く拍子木の音が廷内に響き渡ると「起立！」滿廷の傍聽席は水を打ちたる如く鎭まり、しはぶき一つ聞えぬ中を鬱水裁判長は大野、石田の陪席判事を從へ正面中央の扉を排して入廷。場内の空氣はいやが上にも緊張した。裁判長は先づ陪審員に注意を與へ「良心に從ひ公平誠實にその職務を行ふ」と宣誓書を讀み下し陪審員はこれに署名捺印する。滿場固唾を呑んで裁判長の一擧一動に目を見張る。寒子が被告席につく、友禪の袷羽織、髮は無造作に束ねて伏目勝になつて居る、先づ北條檢事が立つて「被告は負債返還の窮迫から千圓の保險金を詐取せんと、三月十五日午前二時頃、前日女中をして買はしめた揮發油を、新聞紙に注ぎ、二階の襖に放火したが、思ひ直して消し止めた」と、詳細に公訴事實を述べる。

陪審員は事件の内容を聽き洩すまじと熱心だ。裁判長の取調べに對して被告は放火事實を全然否認し、刑事が火を初めに見付けた、お前がおかしいと責めた事。揮發油の壜を隱したのは疑はるるのを恐れてやつた事。大森署で放火した事と云はねば歸さぬと言はれた事。檢事局で事實を認めたのは警官が檢事局では唯だ、あやまればよいと、云つたから等と細々と誘導訊問の説明をして最後に家庭の事情を調べられ休憩。

午後三時再開、劈頭、夫卯一が取調べられ、續いて女中の鹽澤とみが證人として呼び出されたが要點に行くと忘れました、覺えませぬと申立てたのであるが裁判長から揮發油の瓶を示されると買て來た當時の分量を筆で印を付け、お神さんは夫れでテガラを洗つてゐたのを見たと述べ更に現量が豫審で見せられた時より減つてゐると意外の陳述をしたので陪審員の顏には不審の影がさした。公判第一日は、かくして七時十分に閉廷した。

陪審第二日に保險について[illegible]證言があつた。先づ千代田火災の[illegible]後援者方と取引ある菓子屋さんが六千圓[illegible]を受けたが賠償金は次第に支拂を受け別に破損した保險はしなかつた旨を述べて引下る。卯一の母が實家は三萬餘圓の資産があると述べて綺麗な事を示せば、寒子の實姉は汚れたテガラを五枚遣つたがそれが皆綺麗になつてゐると、揮發油の減つてゐる譯を説明する。寒子の實父は襖の破れ目に新聞紙を突き込んだのはお可笑い、襖は自分が張り替へた、寒子は臆病者でそんな事は出來ないと性格の方から有利な證言を呈する。寒子が警察に引かれてから子供の措置は、どうしました、との私の問に對して「私共夫婦は泣く孫を抱いて一晩中寢ませんでした」と泣聲で答へるや寒子は泣き伏して身をもだえ實父も面を伏せた。陪審員席から貰ひ泣の聲、傍聽席にすゝり泣の聲。我々辯護人も暗然涙を呑んだが眞に陪審裁判らしい劇的場面であつた。

第三日午前は同居人其他の證人調べあり。

午後は本件の鍵を握り居る大森署の警官が證人に立つと云ふので陪審員は一言も聞き洩すまいと耳を欹てる。清水屯駐在巡査××がガラス戸は戸締がしてあり外に足跡がなかつたと云ふと、寒子は金切聲を擧て「違ひます外に足袋の滑り跡があつたと云つたではありませんか」と喰つてかゝる。××刑事陳述後、寒子はこの刑事が自白しなければ歸さぬと云つたのです。嘘ばかり云つてゐます。新聞紙に揮發油を注いでマッチで火を點けたろうと自白の方法まで敎えたのですと申立ると陪審員は怪しからぬ事だと計り膝を乘り出す。續いて××司法主任が小泉陪審員からマッチ箱の指紋をなぜ取らなかつたと鋭い質問を受け、マッチ箱は指紋が取れませぬからですと答へるや、辯護人は威丈高に「夫れは證人の獨斷でしよう。貴官は警世社から出てゐる指紋の本を讀んだ事がありますか」と切り込む。中中の劇戰であつた。八時閉廷。

第四日目裁判長が豫審廷での第一回第二回聽取書を讀み聞かせる頃には[illegible]に豫審廷に於ける寒子の意外な陳述に緊張する。午後北條檢事が峻烈な論告をした。流石は地方裁判所切つての腕利きだけに要所々々を突て水も洩さぬ戰陣を張つた。私は立ちて十八點の事實を提げて無罪論を主張し上原坂田兩辯護人犯人外來說を高唱する。陪審員は夕食を延期し空腹をこらへながらもノートを取る。其熱心さには滿廷一人として感激せぬものはなかつた。最初裁判所の豫定では此日結審の筈であつたが、午後九時卅分陪審員は疲勞した頭で此重大な答申をするのは、差控へたいとの希望を申出で、裁判長は理由ありとして其願を容れ總てを翌日に延期した。

第五日目の法廷では白粉氣のない寒子の頰に寠さへ見えてゐた。裁判長より陪審員に向つて丁寧な說示あり、其間陪審員から種々の質問が出て約二時間の後、問書が讀み上げられたが、此問書に付て多少の波瀾があり漸くにして陪審員は評議室へ退いた、時に午後二時半運命の鐘を鳴つた陪審員は中々現はれて來ない[illegible]る。午後四時半小泉陪審長が運命のサイ四つ折の紙を兩手にして出廷する。徐に夫れを裁判長に提出する。答申は「然らず」であつた。寒子はハンカチに顏を埋めた。續いて裁判長が「被告を無罪とす」と嚴かに判決を申渡した。折から停電、蠟燭の光を浴びて寒子も陪審員も滿廷悉く嚴かに頭を垂れた。陪審五日四十五時間、此處に陪審は大團圓を告げたのであつた。

かく陪審裁判は豫期以上の好結果を示したのみでなく警察官の捜査訊問上に一大革命を齎し、從來とかく批難のあつた人權蹂躪誘導訊問等に一大鐵槌を下して意義ある陪審の第一幕を閉ぢた。

法廷に於ける寒子の陳述によれば「自白すれば歸す」とか「揮發油を三分の一注いで火をつけたのだらう」とかの如き誘導訊問によつて自白を強要したと云ふ、若しこれが事實ならば、そしてマッチの指紋も採らず、戶が開き硝子が破壞されてゐるにも拘はらず、他より[illegible]

て、最初の發見者愛子を嫌疑者と認めて訊問[illegible]警察の萬全を期す現在のやうな遣り口では陪審の度毎に警察は益々威信を失墜するに至るであらう。然し此度の公判には幸に警視廳から捜査關係の人々が多數傍聽に見えてゐたので今後の捜査訊問等には必ず大なる改良が行はるゝ事と信ずる。

公判中心主義となつた結果として勢ひ多數の證人が喚問さるゝので裁判の公正確實さは從來とは比較にならぬ程、保證される樣になつた。而して證人には記憶の新らしい所を述べさせる必要上事件を短時日で片付けねばならず、從て被疑者が未決監で苦む期間は、自然短くなる譯であつて人道上にも又た大きい貢献があると謂はねばならぬ。

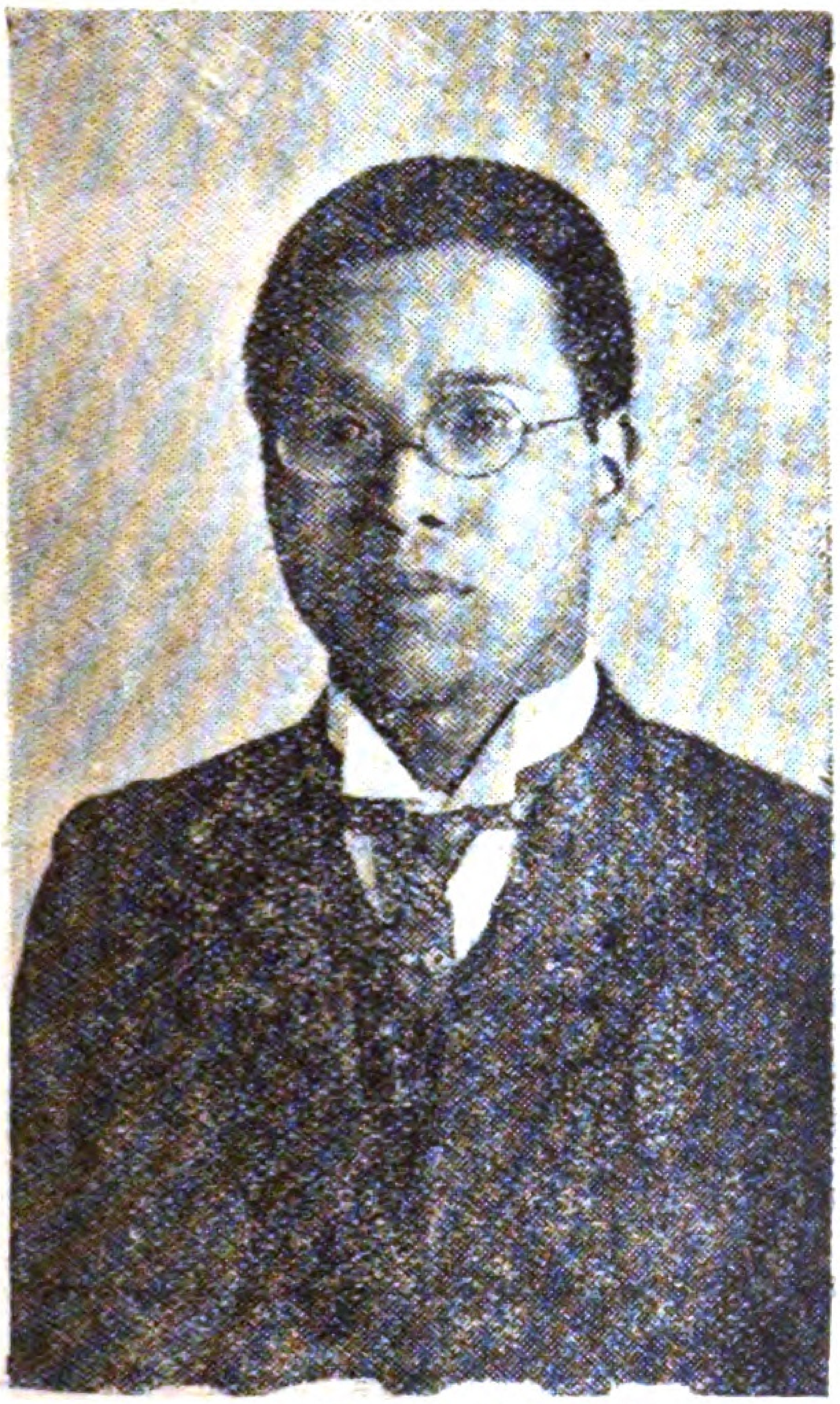
陪審裁判になると無罪が增加するのは事實であり、世の批難も此點にあるが、夫れに付て面白い話がある。嘗て鵜澤博士が原敬氏に陪審の弊害は無罪の增加であると云ふと原氏は言下に「無罪が增える。左樣な弊害なら結構ぢやないか」と陪審法制定に付き努力されたと聞いて[illegible]か。終に臨み陪審員に付て一言するが本件の陪審員諸君は實に公平誠實而も熱心で世人をして流石は帝都の陪審員なりと思はしめた。或陪審員の如きは克明にノートを取つて居た。殊に小泉陪審員の指紋に關する追及、村岡陪審員の問書に付ての質問等は實に熱誠より迸る賜でなくて何であらう。評議室内の事は知る由もないが二時間に亘つての事であるから議論沸騰苟くも人を裁く身の、事件の眞相を摑むに苦心焦慮したであらう事は想像に難くない。私は嘗て外遊の途次西歐諸國の陪審法廷を見學したが日本の陪審員程熱誠公正な陪審員を見た事がない。何卒今後の陪審員も此精神意氣を以て其尊き職務にたづさはつて貰ひたい。かくして官民一致意義ある陪審裁判の完成に努力し小にしては司法上に大にしては國家の上に大なる利益を齎らす樣御互に精進して行きたいと思ふ。

新人評

三木清

谷川徹三

三木清の名は必ずしも新しい名ではない。カントやヘーゲルを口にするもの達の間に於いてはすでに十年前から將來を約束する名として知られてゐた。五年前彼がパリから「パスカルに於ける愛の情念に關する說」を手始めとした一聯のパスカル研究を「思想」に寄せた時彼に對する賞讃は一層一般化され、やがて彼が歸朝したとき彼はその周圍に一團の崇拜者追隨者をもつた。しかし彼の名が「平素カントやヘーゲルを口にする者達」以外により廣く知られ出したのは、その後河上博士が——博士とその周圍のために三木はその頃は哲學的顧問をしてゐたのであるが——彼の哲學的立場、解釋學的現象學の立場を採つてその唯物史觀解釋に資し、從つて彼の名が社會問題研究にたびたびあらはれるやうになつてからである。尤も河上博士のこの「採用」は、博士の哲學的教養の足りないために十分正しくは行はれず、またやがて博士自身博士にとつて一層整合的な立場にと徹底して行つたが。しかし他方三木もまた主として博士の感化によつていはば方向轉換をした。彼はその解釋學的現象學の立場から（しかしディルタイやヘーゲルや更にアリストテレスについての十分な蘊蓄をもつて）マルキシズム——その唯物史觀と唯物辯證法とを再解釋し、そこに獨自の境地を拓いた。「唯物史觀と現代の意識」及び最近彼の主宰する雜誌「新興科學の旗の下に」（昭和三年十月創刊）に載せられた數篇の論文はその成果である。



三木清氏

これらの論文に於いて彼はますますマルキシズムに深入りして行つてはゐるが、しかしまだ所謂「マルキシスト」であるよりはより多く所謂「哲學者」である、——マルキシストが嘗にマルキシストであるためには實踐的マルキシストでなければならないことをしばらく忘却の棚に置いても。とい

のに少くとも今までの彼の主なる功績は、一般哲學とマルキシズムとの間に一つの新しい相互理解の通路を拓いたことにあるが、かかる試みは實踐的マルキシスト達からしばしば無意義とされ、或は有害とされるに反して、哲學的には——あらゆる立場、あらゆる理論をその大きな關心の流れの中にとり入れる哲學的精神の上からは——十分意義あることであるから。前世紀の終りにドイツに於いて新カント派の人達がマルキシズムの哲學的乃至論理的「基礎づけ」を試みたのも、また九十年代のロシアに於いて一部の人達がマルキシズムのマッハ主義的解釋乃至修正を試みたのも（それが純正マルキシスト達から如何に嘲られ罵られようとも）、哲學的には、それぞれ意味のあることであつたから。それゆゑたとひ三木の試みがそれらと同じ運命をもつにしても——現に一部の純正マルキシスト達は三木の解釋に對して、九十年代のマッハ主義に對してレーニンが戰つた如くに戰はねばならぬと說いてゐる——それは大して問題ではない。通るべき道を一度通るものとしてこの意味をもつのみではない（それだけなら純正マルキシストの側からも十分意味を認めるであらう。）マルキシズムをもその內に包攝することのできる最も廣い哲學的關心からすればそれは十分それ以上の意味をもつてゐる。それは困難な道で傳統の哲學者からも純正マルキシストからも多くの非難を浴びるであらう。しかもそれに三木は敢然として進んだ。われわれはその三木の勇氣を賞讃してよい。いはんやその勇敢なる試みはすでに相當の成果をあげそしてなほ未來を期待せしめるに於いては[illegible]ある。彼は[illegible]しい哲學の名をもつのみではない。その眞意義に於いて新人である。

しかし、であるからと言つて、彼は一部の人達の信ずるが如き獨創家では決してない、むしろ輝かしい解釋家なのである。そのマルキシズム解釋の出發點も全く主としてハイデッガーの解釋學的現象學に據つたものであり、更にそのパスカル研究も解釋學的現象學の立場の一つの適用である。ただ、その解釋の輝かしさは十分獨自性をもち、それがその秀れた文體と相俟つて彼に獨創家の、またいはば天才の、光輪を與へてゐるのである。考へて見ると秀れた哲學者の多くが獨創家であるよりもむしろ却つて輝かしい解釋家であつた。哲學は創造ではなくて新しい解釋である。もつともその解釋そのものの如何に、或は解釋の及ぼされる範域の如何に、獨創性の有無、廣狹、深淺があり、ハイデッカーがフッサールから出て獨自の道を拓いたのと、彼がハイデッガーからマルクスに向つたのとはその意味を必ずしも同じくしないが、しかしそれにしても彼の手際はなかなか見事である。それはヨーロッパ的學問の未だ十分根を張つてゐない、學としての哲學がまだ十分地盤をもつてゐないこの國に於いては十分驚異とするに足りる。

彼の最近の方向はますますハイデッガーを離れ、その哲學のもつ、またその哲學に影響を與へたディルタイやヘーゲルやアリストテレスの哲學にも共通な「觀想的性格」を、マルキシズム解釋に於いて一層整合的に拒否し、その拒否に於いてマルキシズムの辯證法の「實踐的

性格」を力説してゐるが、しかし彼がどこまでその哲學を（マルキシストの口調を借りればブルジョア哲學を）離れうるかはなほ今後の問題に屬する。今のところ彼の研究は結局なほ「唯物史觀と現代の意識」に於ける彼の序文にあるやうに「理論の系譜學」を目指してゐる。すなはち「如何にして一定のイデオロギーは出生し、成長し、崩壞し、そして新しいものによつて代られるか、の系譜を理解すること」が彼の意圖である。「その系譜學の根本命題、「歴史に於いて存在は存在を抽象することによつて理論を抽象する」ことをたとひ「マルクスから學んだ」と彼自身言つても、その態度は全く「哲學者的」であつて所謂マルキシスト的ではない。

それにしても彼のよく活動するのには驚く。學校にゐた頃から彼は精力家で、その勉強振りは目覺ましかつたが、今年などは法政大學で一週十二時間といふ時間をもちながら（すなはち講義として哲學概論、「ヘーゲル研究」、「アリストテレスに於ける精神の現象學」をそれぞれ一週に二時間づつ。更に演習としてアリストテレスのエテイカとマルブランシュの Recherche de la vérité とを、そして更に課外にドウロイセンの Grundriss der Historik を讀んでゐる）なほ一二の大學にも出て居り、その上岩波講座や、「新興科學」へ毎月のやうに書いてゐる。この夏は滿洲まで講演に出かけるし、秋には早稲田大學の有志の人達に辯證法の連續講義をしてゐるし、漸くなつてからあわたしの願つてゐる[illegible]二ケ月前から新しくロシア語まで始めてゐる。全く忙しさうだ。それにまた夥しい訪客らしい。いままでかなりみつちり勉強してゐたからいいやうなものの（彼はハイデルベルクやマールブルクでもそれぞれ約一年づつ講義を聽くばかりでなくゼミナール――前者ではリツカートの、後者ではハイデッガーの――に入つて全く向ふの學生と同じに勉強して來てゐる。二ケ年半の外國滯在に於いても大きな旅行はほとんどしなかつたやうだ）もう少し落着いた勉強と休息との時間を與へたい。

最後に彼の人柄は？　さう。彼の人柄は、彼自身がそのかつて「思想」に寄せたドイツ通信にハイデツカーについて語つてゐる丁度それである。「ハイデッガーは全くの田舍者です。無骨で、ぶつきらぼうで、しかもねばり強い……。しかしそれと共になかなか利口で、氣の利いたところのあるのは面白いことです。」と。彼もその通りだ。彼は野人である。外國から歸つてもちつとも變らない。相かはかず泥靴で、ネクタイをよく横つちよに結んでゐる。どこでもかまはず文字通り口角泡を飛ばして放談する「無骨でぶつきらぼう」で、始めて會ふ人などはちよつと取りつくしまがなささうだ。（これはいつかたまたま彼と一緒の席でさういふ光景を見たからいふのだが。）しかしそれと共に「なかなか利口で、氣のきいたところのあるのは面白い」。彼は十數篇の、或は數十篇の美しい詩をつくつてゐる。彼の文體はその明晰と敷[illegible]

品よく紳士的でその點損をしてゐる。これも、彼がまた本當のマルキシストになつてゐない一つの證據かも知れない。（これは冗談。）

に背くといふ事に僕に危險を感じる。危險を感じるとはつまり責任を感じる。つまり友情を感じるのだ。この意味で僕を覗つた改造社の矢は少し遲かつた。この頃僕は新らしい文學概論のやうなものを作り上げるといふ事で、横光とは或る意味での共働の仕事をしてゐるのだから。——

恐らく横光利一は短文で片付けるべき作家ではないだらう。

わが「横光利一論」

犬養健

横光利一に對する友情を、僕は深く信じてはゐるが、しかし僕はまだ横光に對して向ふ横町の親しい友だちといふやうな位置にある。つまり、習慣の上でこれまで同じ街に住んでゐなかつた、といふ一種の差別が二人の間にはある。この意味で僕よりも親しい友達は横光にとつて澤山ある。たとへば川端康成、石濱金作、池谷信三郎、永井龍男。——この人達に聞けば、恐らくその日の横光利一が何處に何をしてゐるかも分るくらゐだ。

また立場が違ひ、もしくはさほど始終會はなかつたりはするが親しい、といふ部類の友達に、片岡鐵兵、中河與一、橋本英吉、藤澤桓夫、武田麟太郎がある。それにも係らず、このよい友人達を飛び越して改造社が僕に「横光利一論」を書かせようといふのは何故か？

それは僕に「忌憚なき批評」をやらせようといふのに相違ない。そしてこの場合、「忌憚なき」とは「十二分な」といふ意味にとつても差

×

先づ横光の風貌から語らう。横光の第一印象は善人だといふ事である。それから溫かいといふ事である。彼の友人は皆この魅力につかまつてゐる。二年前まで僕はこの魅力につかまらなかつた。横光とは文通もなし、一種朦朧とした、且つ鼻つぱしの强い人間らしい、といふ風に考へてゐた。これには彼の初期の作品に特に著しく現はれてゐた。超人情性から受ける先入見も手傳つてゐた。しかし、二年前に或る用事に關して横光と手紙を二三度往復したあげく、僕は自分の先入見を綺麗さつぱり捨てゝしまつた。僕は横光の溫かさに見事降參したのである。横光はその朦朧とした、超人情的な身振りの陰に、僕への親しみを長い間隱してゐてくれたのである。それは當時の——過渡期の僕には過分な友情であつた。その時に僕は發見したやうに思つた。横光利一は恰度谷崎潤一郎が作品の上で風流につかまる事に脅迫觀念

を持つてゐるやうに、人情につかまる事に脅迫觀念を持つてゐるのだな、と。

これ以來、僕は横光に對して他流試合の氣構へを撤廢した。何の氣構へもなく横光の實質に觸れる事でもつて、自分に不足してゐるものへの刺激にしようと試みた。そして自分には横光へ友情の借があると考へた。かういふ文章のうちに私事を澤山語ることの不遜をよく知つてゐるが、要するに僕の云ひ現はしたいのは、横光が第一に先づ暖かい人間だといふ事實なのだ。

恐らく、この「友情の借」の觀念は、彼の內輪の友達のすべてが持つてゐる事だらうと思ふ。

×

第二に、彼の過去の仕事に就て語りたい。

横光自身も云つてゐるやうに、横光の師は菊池寬だが、横光の初期の作品はむしろ志賀直哉風のものだつた。その標本に「笑はれた子」といふ作品がある。[illegible]をなしてゐる「田舍人の體格」の匂のする點で、この小品も明らかに彼自身の所產ではあるが、「笑はれた子」は志賀直哉風の寫實味──日本の自然主義文學の次に現はれた新らしい寫實味といふ點では、今日讀んでも感服するほど完璧に近づいてゐる。つまり、作品のうへの彼の最初の着物はそんな風だつた。

それから横光はしばらくの間、發表するといふ當てもなく、この穀物の匂のする、肥料の匂のする、そして少しばかり長閑で少しばかり低徊趣味の交つた寫實風の作品を澤山書いた。讀者の便宜のために「横光利一集」をひろげて見ると、「村の活動」とか「南北」とかいふ質のものが恐らくそれに當る。しかし、これも僕の推測だが、この時期に横光は激しい迷ひを感じたに違ひない。なぜならば當時の志賀直哉風の新らしい寫實味の魅力といふものは、强いエゴのレンズを一度とほした作用から生れた新鮮さであつたに引き替へ、横光利一自身は作品のうへにエゴのレンズ──少くも度の强いエゴのレンズを使ふ事には齟齬ひが少



横光利一氏

實味を取り入れてゐたのだ。然るにこのエゴのレンズの作用を除いた新寫實味といふものは、日本に於ける在來の自然主義的寫實味と殆ど一頁である一方、横光にはもともと的確な寫實味への誘惑はかなり强いのである。そこで當時の横光の道は謂はゞ田圃のなかの道であつて、力を入れるたびに「自然主義」の土が足に粘き纏つたに違ひない。

「こりやいかん」

と彼は、彼獨特の訛で警戒したに違ひない。そしてこのやうにすぐさま本能的に——理論的によりもまづ本能的に「いかん」と思つたところに、今日の彼の本質がある。

「こりやいかん。ひと工夫しないといかん」

そこで彼は泥臭い足の重さに閉口して、「形式へのひと工夫」へ脱走した。「形式への工夫」は彼にとつてそもそもこれ以來のものである。しかしその「形式への工夫」の最初の行動が脱走のかたちを取つた事も僕の推測のとほりだらう。——そして作品のうへで云へば、文藝春秋の創刊號に載つた「蠅」といふのが、その脱走の結果の第一作に當るのだ。「蠅」は彼が「やれやれ」と快活にひと息ついた時の作品であり、この「蠅」に表はれた彼の本質を、横光はその儘今日まで血液のうちに保存してゐるのだ。それ故、彼自身も「蠅」をもつて處女作と云ひたいのであらう。

「蠅」「頭ならびに腹」「ナポレオンと田虫」「靜かな羅列」「風呂と銀行」して來た自己流であり、[illegible]のだ。

×

第三に、横光と新感覺派の運動——つまり「文藝時代」以後の横光を批評したい。

以上のとほり本能的な——それ故に一種絶對的な動機でもつて新舊兩樣の寫實主義から逃走したあげく、横光はいはゆるエゴをとほして表現するといふ方法のかはりに、感覺をとほして表現するといふ方法へ落ち着いた。しかしこの動機は決して横光を傷ける所以にはならない。なぜならばこのやうに本能的な、そして本來の意味での自己成育的な動機を持つてゐたといふところに、「新感覺派」の主張を長い間持ちこたへるにあたつて、多くの理論上の不備にも係らず、また多くの包圍攻擊にも係らず、奇妙なねばり强さを見せながら彼自身は益々細はず脊丈を伸ばして行つた理由があるのだ。

横光の持つ一種變な純粹さとねばり强さとを理解する鍵は大部分ここにある。又彼が徹頭徹尾の理論家であるマルキシストに屢々閉口なさせられる譯もこゝにある。

さて、脇道に外れたが、エゴをとほして表現するといふ方法のかはりに感覺をとほして表現するといふ方法へ落ち着くと同時に、横光は

一變して作品のうへで强氣になつた。そしてこの强氣は、今日文學史的な物言ひをすると、千葉龜雄氏の「新感覺派」への應援でもつて一段と氣勢をあほられたのだ。一體「新感覺派」といふ名稱それ自身が千葉氏の命名であつて、嚴密に云へば千葉氏がさういふ名前をこしらへてくれる以前の横光の行動――もしくは「文藝時代」の作家たちの行動は、結局從來の文學からの避難といふ狀態であり、それは大して尖銳なものでなかつた。が、周圍からの默殺といふ贈り物をしばらく耐へてゐた當時にあつて、千葉氏のやうな年配の批評家から示された好意は、この若い作家たちに想像以上の勇氣を與へたのだ。或る場合、この新進の作家たちは千葉氏の好意を十分受け入れるのあまり、「新感覺派」といふ名稱にこだはり過ぎる過失を冒した。例へば文藝作品に於ける「感覺」の司配を明らかにして「新感覺派」といふ稱號を名實共に充實したものにしようといふ意氣込みから、ひとりひとりの作家がまちまちの「感覺論」を發表して、結局「新感覺派」は「快樂派」だといふやうな燒印を貰ひ受けたりした。

作品のうへでも同じ事が云へる。「表現派の役者」といふ短篇以來、横光は描寫のうへで見違へるほど强氣になつたが――そしてこの强氣を最初に獲得したといふ意味でこの時代は横光にとつて決して無意味ではなかつたが――彼にしてもやはり「感覺派」といふ立場についての意識が强すぎるあまり、その作品はともすると奇嬌第一趣味になり、怪奇趣味にさへ近づいて行つた。

この怪奇趣味と、横光の持つ血液のうちの優良な分子との混血兒が「無禮な街」にあたるのだらう。この作品は決して成功してはゐない。それにも係らず――殊にその結末で、明るい綜合力への認識をほのめかしてゐるところは、やはり横光がこの時代でも「蠅」や「頭ならびに腹」を書いた本質を全然捨ててはしなかつた證據になる。

實際、彼はこの綜合力への認識によつて健全になつて行つた。彼は「靜かなる羅列」を書いた。「ナポレオンと田虫」を書いた。しかし一方、この綜合力への客觀性が彼の頭腦のなかで大きくなつて行くにつれて、明らさまに云ふと「新感覺派」といふ名稱はもう不適當であつた。たとへばこの時期に彼は「内面と外面」といふ、斷片的な文學論風の感想を發表した。これは明らかに現在の彼の「形式主義文學論」の前身である。そして僕と横光との文通は、この「内面と外面」の發表された月に始まるのだ。この感想文は、新らしい文學を創り上げるについて根氣よく考へてゐる男でなくては云ひ得ない味はひを持つてゐた。しかし僕はその時思つた。横光はもうそろそろ、「新感覺派といふ着物は自分には寸法が合はなくなつた」と公言すべきだと。さうすればこの「新感覺派」といふ名前が脣に合はない僕自身にしても、公らに彼と親しい友だちになれるのだが、と。――しかし横光はなほしばらくの間、この肩書に甘んじてゐた。が、率直に云ふと、これは横光の不明から來てゐるといふよりは、文壇の揚げ足取りに對する警

志」としての効果に、時とすると情に溺れる程に弱い。

×

第四に横光の謂はゞ、例外的な時期に就て語らう。

それには横光の私事にもわたらなければならない。横光はこの時代に結婚した。そして直ちに夫人を病没で失つた。横光はこの出來事を幾つかの作品に現はした。彼は純情に壓倒された。横光風に云へばリリシズムに組み伏せられた。生涯横光がこれほど自畫像を開け放しにして見せた事はない。これほど横光が素朴そのまゝの歌を歌つた事はない。

しかし、横光にとつては前にも述べたやうに、エゴのレンズをとほして表現するといふ方法はもともと膚に合はないのだ。その上、一體に大がかりな「筋」への慾望があつて、このやうな身邊の出來事をその儘「筋」とする作品には、本來物足りぬ感じを抱くのだ。更にリリシズムに溺れる事については、彼は膚に合はない以上に羞み屋である。恐らく「花園の思想」のやうな記念文を書きながらも、彼は昔のとほりに「こりやいかん」と幾度か警戒した事だらう。しかしそれにしても、悲痛を忘れるためには彼は一度その悲痛を一つの吐け口から追ひ出さなくてはならなかつた。即ち、表現の吐け口から。——

この「内容」についての羞み、この膚に合はぬ意識、この物足りなさを退治るために、横光は「花園の思想」其他の記念文でどんな[illegible]をした[illegible]——彼は反撥して「形式」の仕上げに熱情をそゝいだ。「俺はセンチメンタルではないぞ」と怒鳴りながら、あらゆる形容詞を集めてこれをバラ撒いた。それ故、「花園の思想」を愛する人たちはこの強烈なモザイック模様の一種の朗らかさに惹かれたためであり、反對に嫌ふ人たちはこれを「形容詞の機械的な自慢」だと貶しめはしたのだ。しかし、僕は「花園の思想」を美しさから云つて横光の作品のうちの一流のものに數へてゐる。

恐らく「花園の思想」「春は馬車に乗つて」其他は讀者にとつて、何方かと云へばエピソード風な時期の作品だつたらう。しかし[illegible]はこの時期に思ひがけぬ契機から外面の形式を眼覺めさせた。つまり「内容」を離れたための余裕である。

×

最後に現在の横光を對象にする。

この、純情をむき出しにして公表した[illegible]のあとで、横光は[illegible]身を洗滌し、快活にし、何事も忘れ、[illegible]ために、彼の[illegible]つである「道徳家氣質」を[illegible]る。横光は元のやうに自由になつた[illegible]。しかし結果から云へばこの[illegible]のために、彼の[illegible]りも大きくはなつたが、作品全體としての[illegible]は一時[illegible]り、そして[illegible]

である。

この意味で、僕は最近の「風呂と銀行」を讀んだ時はホッとした。横光はやはり「蠅」以來の、「頭ならびに腹」以來の、「ナポレオンと田虫」以來の、そして「靜かな羅列」以來の優良な血液を失はない横光であつた。嚴密に云へば「風呂と銀行」にも頽廢とニヒリズムへの危險の名殘りがまだ多少ある。しかしこの作品では、さまざまの音響をたてゝゐるエロテイシズムは第二義的のものになつてゐる。この作品の第一義的なものは現代の經濟生活を切斷して見せた巨きい構成法である。それから、彼の作品に屢々現はれた、綜合力への認識である。作品の巨きさといふ事に就て僕は彼に學ばなければならない。そして僕は何となしに信じてゐる。――未完結の作品である「風呂と銀行」の後半は、きつとこの頽廢とニヒリズムの名殘りを蹴散らして新らしい健康人としての横光の抱負――暗示を描き出してくれるだらうと。なぜと云ふのに、作家としての横光の本當の面目は腕力的であり、健康なのだから。

さて、「風呂と銀行」を書く前後から、横光は形式主義の文學論といふものを發表しはじめた。これは前にも述べたとほり、「內面と外面」を發表した頃から引き續いてゐる彼の文學論であつて、それ故横光としては所謂「新感覺派」の文學論を一度建て直して、發展させたものと見てもいゝのだ。[illegible]

[illegible]へで、「形式への考察」といふ片方の坑道からはかりトンネルを根氣よく掘つて行つた作家はないであらう。そして何故片方からばかり忍耐強く、野暮に、質朴に掘つて行つたかといふ點は、僕のこの文章を讀んだ人たちは既に納得した事だらう。しかし、横光はたうとうそのトンネルを物にした。少くとも最初の鑛脈を掘り當てた。今度の所謂「形式主義文學論」がそれである。

そしてこの文學論を一種の文學概論として完成する事に就て、今のところ横光、池谷信三郎、それから僕なぞが、互ひに缺を補ひ、反駁をし合ひながら、しかし、愉快に或る意味での共働の仕事をはじめてゐるわけだ。しかし、これは現在なしつゝある仕事であるし、それに紙數が盡きたので、「形式主義文學論」の說明は他日に讓らう。

×

こゝで今、ふと想ひ出す事がある。一昨年の五月の非常に快い晩に、横光と僕とは改造社主催の講演會で喋つたあげく、一所に食事をした。その時に僕は何の氣なしにかう云つた。「おい君、いつか横光論を書かうかね」

すると横光利一も半ば冗談にシッペ返しをした。しかし僕は僕の約束を、何となしに遠い未來の事のやうに思つてゐた。横光自身にしても、僕が當時の約束をこのやうに早く果さうとは豫想しなかつたらう。………（終）

東京學生消費組合の躍進

有馬頼寧

我國に於ける專門學校程度以上の學校數は約二百、其學生數約十二萬を算し其內最低三分一以上は他人の補助に依り又約一割は內職に依つて學費を支辨してゐる。學生生活は其父兄の經濟的地位に依存するものであるが其父兄の殆ど凡てが中產階級以下に屬するものであることは右數に依つて明かである。從つて今後の學生の經濟的地位は益々低下するであらう事が想像出來る。然るに一方物價は騰貴し下宿費は嵩み其他種々の學費は增大するといふ現狀勢に於て學生の經濟的慾求として學生消費組合の設立を見ることは當然の結果と云はねばならぬ。

學費の低減と消費組合の教育宣傳を主旨として大正十五年以來活躍を續けて來た東京學生消費組合は現在早大正門前に早稻田大學學生消費組合（組合員貳千五百）を拓大內に拓殖大學學生消費組合（全校生組合員）を東京帝大正門前に赤門學生消費組合（昭和三年十一月七日設置）を有し其他友誼團體として商大共益部、自由學園消費組合がある。

組合員となるには卒業迄に唯一回一圓を出資し而も其は卒業又は退學の際に返却され每年決算後には各自の購買高に應じて利益の配當がある。政府の設立認可を受けた完全な學生自治體であつて卒業生も引續き又は新に組合員たり得るのである。取扱品としては洋服、靴、文房具、化粧品、洋品等があつて市價の約三割安く例へば制服の如きは直營工場に依り市價四十圓以上のものが二十八圓で出來る。地方から出京する新入生諸君は甚利の目的物にされるが少くとも東京に來る人であれば學生消費組合を利用することに依つて安心して安價な品物を買ひ得るのである。其他直屬靴生產部、直屬洗濯部等は新入生諸君の期待を裏切らぬであらう。經驗に見るも新入生は組合を利用することによつて、[illegible]圓を節約し得る。

以上の樣に學生消費組合の設立は必然的であり、實利に於ては斯く程安價な物を提供してゐるが將來我々は先づ全國の專門學校大學等に組合の設立されん事を希望し又努力し其聯盟體を組織するであらう。現在東京に於ては聯盟組織が既に準備されてゐる。

大寄宿舍、大食堂の經營其外小學校及中等學校に於ける模擬消費組合の設立等は興味ある事業として殘されてゐる。學生諸君は父兄のために、父兄諸君は子供のために組合設立に努力あれ。我々は喜んで援助する。

前述の如く健實な過去を持ち將來も持つであらう處の學生消費組合に對して學校當局及其監督の位置にある人々は最もよく之を指導し助成する必要はないであらうか。殊に經濟國難、思想國難等の叫ばれてゐる今日將來社會の中堅となるべき學生に對し其學生生活時代に相互扶助に依る消費組合の理論と實際を教へ導く事は社會政策の上から見ても最も意義あることと言はねばならぬ。

哲學者の槍さび

——逝ける高畠氏のことども——

白柳秀湖

『一』

高畠君が死んだ。惜しいことをした。何とも知れず寂しい。

高畠君はよく例の調子で、マルクスを骨までしやぶつた。己がマルクスで食ふのもモウ此邊が行詰りだらうなど云つて居た。僕はさうは思はず、マルクスのやうな大きい思想家はちやうど太洋の珊瑚礁の上に立つて居るラヂオの柱のやうなものだから、その柱をシッカリと抱へ込んで居さへすれば、慌しく旅行鞄を解いたり、詰めかへたりし目まぐるしい日を送らんでも、坐らにして世界と共に移り變つて行くことが出來るだらうぢやないか。方面は異るが坪内さんは、シェークスピアといふ柱を懐きかゝへて、立派に一生を送つたぢやないかと云つたが、ナァニさうぢやない、マルクスでも何でも要するにその人間の看板に過ぎない、さう云つて笑つて居た。

高畠君がマルクスで一生食へたか食へなかつたかは保障の限りにあらずとして、高畠君の實際運動はマルキシズムの解説と批評とが輝かしかつたほどに映えなかつた。尤もあれで實際運動の方までが映えた日にはチヨツト手のつけられないと云つた形もあつたであらうが、天はヤハリ高畠君に二物を與へなかつた。併し、高畠君も世間の期待に對し、乘出した實際運動の方を何とかして展開させなければならぬ立場に立つて居た。僕等には高畠君が何うして實際運動の行詰りを打開するかゞ深い興味であつた。

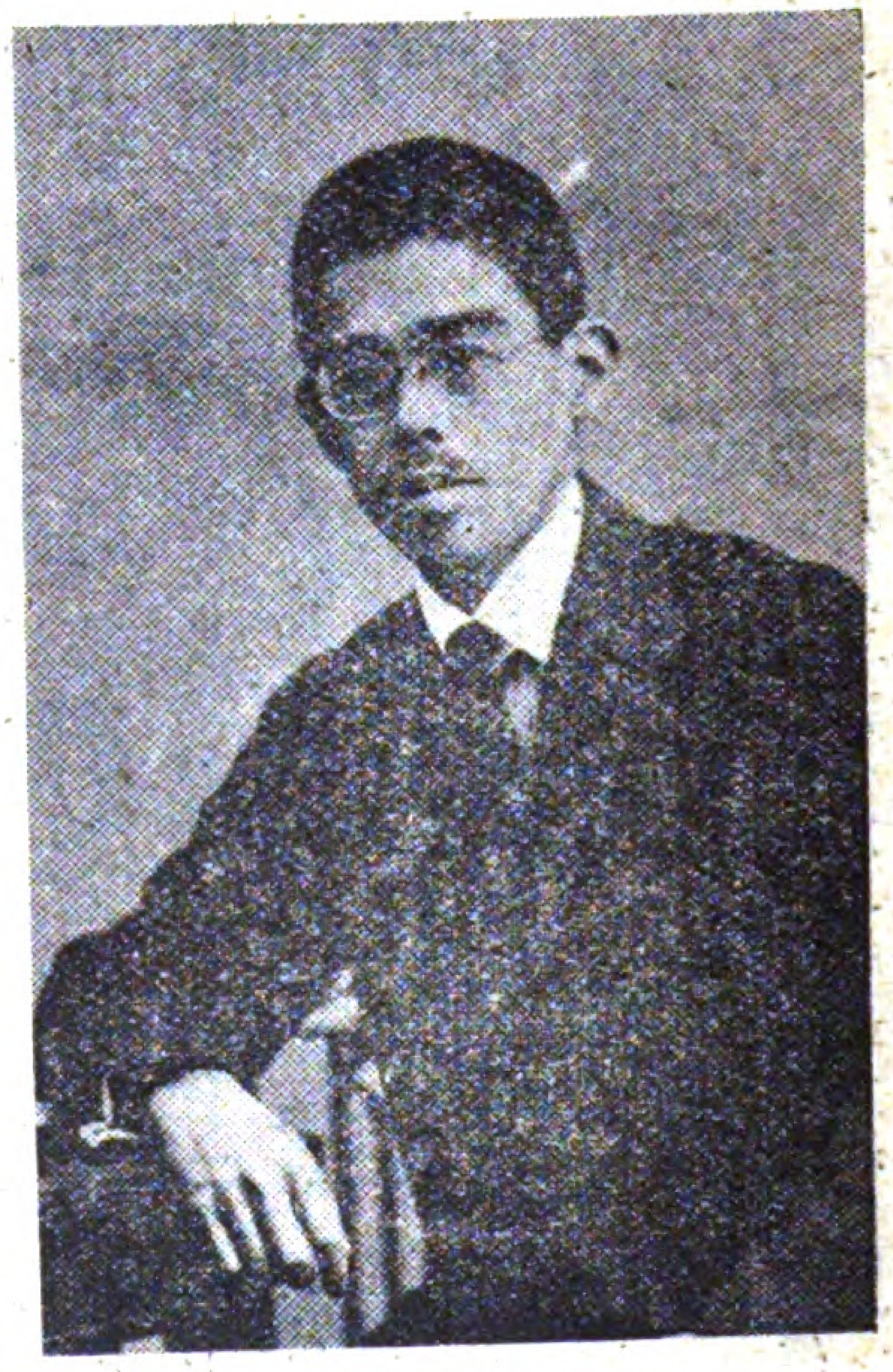
『二』

高畠君の展開に二つの途があつたやうに思ふ。その一つは走り過ぎた右傾諸團體との關係を整理して、その身拵へを今少し輕捷なものにし、國家社會主義あたりまで後戻りして今一度出直す、ことである。他の一つはマルキストとしての學究的地位と名聲とに執着を斷ち、右傾諸團體を統一してその陣頭に立ち、驀地に實際政治の上に進出することである。

併し僕に云はすれば、此二つの途は何方も高畠君にはいふべくして行はれぬことであつた。何故となれば高畠君にはそんなことをせぬでも、立派に立つて行かれる藝があつた。昔から彼はよく一身の利益幸福を犧牲にして主義の爲道理の爲、に殉じたとか、鐵鎖牢獄を恐れずして信念の前に直往邁進したとか云つて賞め立てるけれども、靜かに考へて見ると、人間が態々その不得意とする途に進んで、自分を立こして行くといふことが果して出

來るものであるか、何うか。鐵鎖牢獄を甘しとして道理の前に直往邁進する義人も、猛火と白刃とを履んで、信念の前に驀然馳突した烈士も、要するにそれより外に行くべき途がなかつた。それが彼の進むべき最善の途であつたと、かやうに解釋することは、古來の義人烈士を冒瀆する、許し難い臆病者の、己を以て人を律せんとする不埒千萬の見方なのであらうか。

初めに忠臣藏をかやうな立場から書いて見ようと試みたのは僕で、而も先年『改造』に掲載した『郡兵衞の脫走』がそれであつた。腹を切つて死んだ四十六人の義士の中にも、復讐の即時決行論者と、大學樣の先途を見屆けた上でといふ論者の二派があり、それが血で血を洗はんばかりにして爭つて居たなどは面白いではないか。さうして尙ほ仔細に觀察すると、復讐の即時決行論はそれより外に進むべき途のなかつたものであるといふことがよく分る。即時に復讐を決行して世間の期待に副ひあはよくば赦されて高祿に有付かうといふものもあつたに相違ない。それで行くより外に生きる途のなかつたものもあつたに相違ない。生きる途はあつても、江戸に居て、江戸の人氣をマザ〱と眼の前に見ては、乘るか反るかの大冒險をして見たいといふものもあつたに相違ない。


逝ける高畠素之氏

高畠君ほどの藝のある人が、果してその藝で食はうとせず、高畠君としては寧ろ割の悪い實際運動に投じて多くの子分の爲に金の心配をして暮すと云つた途を歩いたであらうか、何うか。假に高畠君が、今後尙ほ二三十年生き延びたとしても僕は何うしても同君が思切つて實際運動の方面に深入りしたであらうとは思はれぬ。高畠君はやはり、書いたり、しやべつたりしてホントに實際運動に身を投じなかつた人ではないかと思へてならぬ。勿論、死ぬ前に何か云つて居たこともあらうが、僕等はそれを久しい以前から聽かされて居た。云つて居たことは必ずしも實現されると限らぬ。

『三』

高畠君は話して氣持のよい人であつた。それは高畠君が滅多に人の話の問題を取ちがへて反駁したり、聞き迫つたりせぬことであつた。世間には相當に學問素養ありとされて居る人で、よく人の話して居る問題を取ちがへて批評する人がある。勿論事の是と非とは各人の見る所によつて異るのであるが、その是と非とを論斷したり、批評したりする前に問題だけはお互に理解し合つて置くことが大切である。

小學校からアメリカで教育を受け、アメリカ語（所謂英語）の素晴らしく達者な人を二三知つて居るが、頭腦の働きに同じクセがあり、よく人の話して居る問題を取ちがへる。又、それらの人々は云ひ現はし方こそ違ふけれども、意味は全く同じであるといふことが揃ひも揃つてよく分らぬ。無暗に人の説に異を立てるが、自分の云つて居ることも結局同じである。といふことに氣がつかぬ。アメリカ育ちの人は物事の第一義的解釋と、第二義的、第三義的解釋との比較がとれぬ。それで往々第二義的、第三義的解釋を以てして、第一義的解釋に置きかへようとする。

高畠君は例のベランメー式に話をして居る時でも決してさういふことがなかつた。彼の頭腦は先天的に哲學的であつた。高畠君がヘーゲリアンであらうともカント流の理想主義者であらうとも、又、新カント學派であらうとも、それは高畠君の勝手であつて、それに異議があれば各自の立場々々から爭へばよいまでのことである。高畠君もマルクスの『資本論』を完譯して置きながら、マルクス主義の信者になれなかつたのであるから、ツガン・バラノヴスキイ位は擔出して來なければ納まらなかつたであらう。併し、高畠君がマルクスを解説する時には、マルキシズムの基礎工事となつて居るヘーゲルの哲學を實によく理解して居た。又、ツガン・バラノヴスキイを解説する時には、その新マルキシズムの根柢をなして居るカント哲學を實によく理解して居た。高畠君が何ほどの哲學史家であつたかは知らぬが、彼の頭腦が先天的に哲學的であつたことだけは確かである。彼は哲學に腰をかけて槍さびをうなつて居た。

『四』

高畠君には哲學史があり、又、其頭腦は著しく哲學的であつたと思ふが、その素養の中に一つ缺けて居たと思ふものがある。それは日本のクラシックスである。

高畠君は晩年社會時評をやつて、その方面でも大に世に持て囃されて居たが、時々歌舞伎座から昨日仕入れて來たばかりではないかと思はれるやうな生々しい科白などを入れて僕等をハッと思はせて居た。僕等としては、梅の由兵衞を見て來たからと云つて、直に『殺すも金、生かすも金』の科白を援用したり、桃中軒雲右衞門を聽いて來たからと云つて、直に『四百四病のやまひより、貧ほど辛いものはない』を文章の中に入れて讀者を唸せようとする勇氣はない。然るに高畠君は時評でアレほどに世に持て囃されながら、そんな文句を得意になつて援用して居た。その邊になると全く初心なものであつた。併しその初心な場あたりが存外若い人々に持囃されて居たのであるから世の中は不思議なものである。

『五』

僕は曾て高畠君を七段目の由良之助にたとへた。世間では高畠君がその右へ右へと止所もなく走つて行く脱線振りを見て、ひどく危つかしいことに思つたものであるが、存外腹の中に締つた所があり、己は何んなに世間から持て囃される時が來ても調子には乘らないぞと、自分で自分を引締めて居た。

人氣が出來、金が出來、その上にアノ通りの氣象であるから、三角關係でも四角關係でも後から後からと出來さうなものであるが、少しもさういふことがなかつた。女といふものは高畠君のやうな明るい頭腦の窓に對してはマトモに向いて坐ることが出來ぬものと見える。家庭は至極平和で、逆境時代に京都で或る西洋人の門番をして暮しわびた時の細君を一生大切にして、三人の子達の好きお父さんで畢つた。

死ぬ少し前、高畠君が或る人に語つて白柳は己を七段目の由良之助にたとへたが、あれは間違つて居る己が大酒を呑んだり、無暗に人と喧嘩をしたり、かうして反動的に右へ右へと走つて居るのは、己としては少くとも正氣である。深い考へがあつてこんな眞似が出來るものではないと云つたさうであるが、一面確に如才ない所があり、調子に乘つて三角關係だの四角關係だの起さぬ所から考へると、他の一面に於ける高畠君の闘爭性には、幾分發作的の所があつたとも考へられる。高畠君も或る人に語つて己には發作の血が流れて居ると云つたことがあるさうである。

人が一代かゝつても出來ぬほどの仕事を僅々十四五年の間に成し遂げ、その間に酒も呑む、喧嘩もする。門人も取立てる。僕のやうな意氣地のない友達も引張つてくれる。細君も仕合せにする。娘も立派に教養する。犬も可愛がる。それでは長命の出來なかつたのも無理はない。働きすぎて短命に終つたのは調子に乘り過ぎたと云へぬこともないが、人間何人でも高畠君のやうに花を咲かせて、きれいに散ることが出來るものであるとしたら、誰が長命などを望むものであらう。（昭和三、一二、三一）

無產黨の臺所調べ

木 下 義 雄

本稿は日本大衆黨の成立前の執筆にかゝるものであるけれども、依然としてその興味と意義とを失はないものだから茲に掲載する。(記者)

一

無產政黨の臺所調べ……さても『臺所』とは遣り繰りと切りつめのクラシカルな響きを傳ふることよ！それは眞に貧しい無產黨の財政に應はしい言葉ではある。三井、三菱を本家に持つ既成政黨ならさしづめ『金庫調べ』と云ふ所だらう。

さて瘠せたりと雖も無產黨も天下の公黨である。金の世の中で一家を賄つて行く上には、それ相當の金がいる。彼等はどう工面して、どう使つてゐるかを、一つ筆者は、會計檢査官の公正と稅務官の敏捷と興信所員の人の惡さを併せ用ゐて、各方面から洗つて見たいと思ふのだ。

二

無產黨の費用と一口に云つても、大した差額はないにしても、各黨それぞれ異る。出來たてで小さな無產大衆黨は勞農黨や日勞黨、社民黨と異るし、選擧戰以外には手を出さぬ社民黨や農民黨は日常鬪爭をやる他黨と異るし、凡てにハデな勞農黨——勿論、解散後の新黨準備會は火の消えたやうなものであるが——は、またそれ丈け異る。既往に於いては、勞農黨が一番財力を動かしたらしい。それは他黨の臺所に對して文化住宅の『調理所』位の開きはあつた。その對立鬪爭に隨分惱まされたらしい日勞黨邊では、大分それをうらやましがつてゐたものだ。しかし、それも共產黨事件後に、一時ほど思はしくないらしい。近頃では、むしろ社民黨の方が財力動員を行つてゐるらしい。

無產黨は一體どの位の金を使つてゐるか？臺所調べとはいふものの、先づ表玄關から乘りつけて叩いて見やう。

既成政黨では、とても難事業の黨費公開は無產黨では『待つてゐました』式にやつてゐる。どの黨も全國大會で公表してゐるが、特に勞農黨と日勞黨は印刷にまでして發表してゐる。勞農黨のを見ると次の通りだ。

一般會計(昭和二年度)

支出の部

總支出額	六、九二四、四二五円
(内譯)繰越金	五六、三六〇
事務所費(室代、電話料、光熱費)	一、一四五、九四〇
人件費	八三七、七〇〇
出張旅費	三九八、〇五〇
通信費	五二九、〇八〇
備品費	九四、一八〇
消耗品費	三七一、六〇〇

雜費	五、〇九〇
料金	九、七四〇
借入金償還	二一〇、六五〇
臨時費（大會費、演說會費）	七四二、二二〇
特別會計（機關紙等の）へ繰入れ（缺損補償）	七四二、一五五

收入の部

總收入額	六、九二四、四二五
（內譯）繰越金	一一、二一〇
黨費（十五年度分一、六〇八、六〇〇 昭和二年度分 七八九、四五〇）	二、三九八、〇五〇
寄附（有志寄附 維持會員）	一、五二九、九六〇
雜收入（小口寄附金 圖書賣上）	二九五、二七〇
臨時收入（大會代議員費等）	三一七、七〇〇
借入	八二九、九〇〇
利子（振替貯金）	一、二七〇
特別會計より繰入れ（圖書取次の利益金）	二六四、一三〇

日勞黨の會計報告は手許にないが、たしか總額が五千圓足らずで、收支の項目は殆ど同一であつたやうに思ふ。右の表を少しく說明せんに、支出に於ける人件費といふのは、月給三十圓位の常任書記二三人と月額十圓內外の電車賃支給の定期書記の費用である。通信費、消耗品費の額が多いやうであるが、無產黨は『通告』、『指令』、『黨令』、『達示』といふ支部に對する太政官式の指揮書や『情報』、『黨告』と稱する報告書と更らに數多の聲明書を毎月五六回から十回も數百通宛發行するので、その謄寫の紙代と郵稅でも大きいものだ。（これは舊勞農黨が最も多く、日勞黨これに次ぎ農民黨に到つては甚だ少い）。機關紙の欠損補償といふのは一萬部を一回出せばどうしても四五十圓は欠損になる。三回發行の所では少くも百圓餘不足になる。これは新聞社として借入金、寄附金を集める外に一般會計からも借入になつてゐるのだ。

收入の方を見る。無產黨の收入の途は、黨費、維持會費、有志寄附、黨員寄附、圖書出版取次利益、特別借入金より外にない。黨費は右の舊勞農の計算を見て明なる如く、極めて集りが惡い。これは對立鬪爭の結果、商人の競爭が顧客の借倒しを導くやうに、地方黨員の義務觀念を喪失させ、また一旦黨員から集めても、地方聯合會の運動に消費して了つて本部まで到着しないのである。尤も黨費を黨員に集めてゐるのは、舊勞農黨と日勞黨のみで、取る所か農民黨は與へる方である。その中でもそれを最大の財源としてゐる日勞黨は黨費納入率が一番いゝらしく、後述するやうな別途に收納の道ある舊勞農黨は案外惡く、その地盤を切りとつた大衆黨などは、未だ一錢の黨費も入らぬとのことである。次は維持會費であるが、月に一圓宛維持費を出し、機關紙、出版物の配附を受ける後援會式のものである。舊勞農黨、日勞黨には各百名位あり、社民黨、農民黨にはそんなものはないらしい。維持員になつてゐるのは、舊勞農黨でいへば社會科學研究會の男女學生、新聞記者、河上、森戶、大內等の學者教授連、日勞黨では社會思想社の諸君、新聞雜誌記者、特志黨員等である。しかしこれも大した額ではない。次は黨員寄附であるが、これをやるのも社[illegible]と日勞黨のみで、よく『寄附金の願[illegible]

ろ！『同志二萬一人十錢でも二千圓！』などとビラやポスターを出してゐるが、舊勞農黨は月に七八百圓も千圓も集り、殊に無產者新聞社は五萬圓募集をやつてゐるが、日勞黨の方は月に七八十圓から百五十圓しか集つてゐないらしい。この不景氣のとき、しかも再參の募集に、舊勞農黨や無產者新聞のやうに千圓も萬圓も集るわけはないので、日勞黨の方が案外正直らしく思はれる。舊勞農黨方面のは、『サクラ』や『カラス』を使用してゐないのなら、、、、などと噂されるが、とまれ大口の金があつて、その出處を寄附に假托せんための手段としての寄附募集であるといふのが當つてゐるらしい。特別借入金といふのは、本部の著述家達が書店、雜誌社に對して叢書計畫、原稿豫約をやつて千圓とか二千圓といふ金を連名で借り出すのである。舊勞農黨は『マルクス主義講座』『ブハーリン全集』だとか大分やつたらしい。日勞黨の方はこれは大した額でないらしい。尤も改造社の『マルクスエンゲルス全集』に社會思想社の連中が多いので、『これは日勞黨の運動資金を作るためだ！』と憤いて舊勞農黨の人々は五社聯盟の全體を以つて對抗したやうだが、そして失敗したやうだが、しかし私の聞く所によれば社會思想社の人々は河野や細野や三輪の外は、超黨的の紳士諸君で教授の首の心配から日勞黨の選擧應援にさへも出兼ねる程の上品な「日勞黨同情者」で、月に一圓や二圓の維持費を出す位で、細君の春着を節約してまで日勞黨に全印税を投げ出すほどの、野武士も見えない。大衆黨は最近大いにこの手をやつてゐるらしいが、社民、農民には勿論ない。その他の財源として圖書取次と代議士歲費の一部取上げがあるが大したことはない。殘つた唯一の財源は有志寄附である。有志と云つても黨幹部と同情者だ。舊勞農黨では大山氏を始め、河上博士、森戶、櫛田、大内の面々である。しかし舊勞農黨は、今日明かになつたやうに、、、といふ財力のある機關の外廓であつたから名目的に金の出口を作る丈けの無名氏の寄附が相當あらう。この點に眞に困つたらしいのは日勞黨である。その大口の寄附者は平民病院長加治時次郎氏である。この人は大の社民黨嫌ひで、その立場から日勞黨に毎月四五百圓から千圓の金を出してゐたらしいが、最近日勞黨中の棚橋、山名、吉田、河上の諸幹部が社民黨との合同說を唱へたり、、それ等の人々が院長の所へ出かけたり、更に稻山狂二氏邊りが出かけたので、遂に日勞黨と資金の關係を斷つたといはれてゐる。苦勞人の多い筈の日勞黨もとんだヘマをやつて弗箱を失つたものである。その外では麻生黨首、三輪財務部長、稻田博士が大口の寄附をしてゐる。山名、吉田、棚橋等はカラけつであり、網島その他の浪人は金でも出すから日勞黨員であるやうにいふ人もあるが、御兩人とも選擧地盤に月に五六十圓位の小金を出してゐる以外に、黨本部にはビタ一文も出してゐないとは本部の人のグチである。

黨費を集めない農民黨、社民黨はどうして一般會計をやつてゆくか。前者は平野力三の私黨であり、彼が凡てを作出する。後者には

金作りの名人、鈴木文治、松岡駒吉がゐる。少し額は小さいが細井、片山、小池が出す。安部黨首は金を作つても貰はなければ、作つてもやらない。不可侵權の上に超然として『無產黨は各人自給自足でやるべきです』と云つてすましてゐる。『晝と夜一度に來たか安部磯雄、あいた目もあり、あかぬ目もあり。』と早稲田田圃の蛙共の蔭口をそのまゝに、苦勞なき彼は開いた右眼を以つて『フェアプレー』を叫び、閉じた左眼を以つて、一切の裏切りと鈴木氏等の、、、、を看過してゐる。大衆黨はピカ一鈴木茂三郎の腕とその外援隊なる堺、猪俣、大森、山川の勞農派が財源となつてゐる。

三

表から入つて來た會計檢查官は會計一覽表の帳尻が合つてゐるのでこの邊で『檢閲濟』の印を押して引上げる所だが、どつこい、税務官は裏口から襲つてくる。以上の會計一覽表は要するに本部事務費を中心とした經常費であつて、黨全體の活動費ではない。收賄した税務官以外はこれを看過しない。

第一に一般活動費だ。卽ち演說會、ビラ、ポスターに多額の失費を伴ふ各種の所謂日常鬪爭費と、府縣聯合會の活動費だ。日常鬪爭は主として舊勞農黨が最も活潑で、日勞黨はこれに次ぎ、社民、農民になると全くない。『請願運動』、『出兵反對運動』、『檢閲改正運動』、『共產黨被告釋放運動』、『治安維持法反對運動』等々の運動の出版物費と解散になる演說會の會場費だけでも大したものだ。舊勞農黨の會計報告にはこれがないが、これは恐らく舊勞農黨の支出でなく、、、、の支出であつたのだらう。こゝに『、、、』の宣傳が政府筋から出る所だ。この種の運動は日勞黨は金のないためか舊勞農の三分の一位の運動しかやつてゐないが、その財源は結局麻生、三輪、加治、河野の財布を搾るらしい。府縣聯合會の活動費といふのは、府縣聯合會が相當大きく府縣聯合會の財政に於いて常任をおき活動費を捻出するならば模範的だが、そんなのは日勞黨の群馬聯合會、舊勞農黨の香川聯合會位のもので外にはない故に、實際に對立鬪爭を組織して黨勢擴張をするには、各府縣にその生活保證した本部員を駐在させ、それに運動資金を供給せねばならぬ。これは舊勞農黨は攻勢のために、農民黨は守勢のために張つた陣形であつた。舊勞農黨は全國の各府縣に京都事件等で退學された學生連中を駐在させ、俸給と運動費を供して活動さした。この費用は月額どうしても一萬圓には上る。農民黨も九州山梨、北海道、中部、群馬等に平野力三麾下の面々を配屬してゐて、これも月に三四千圓位はかゝるだらう。この陣形の故にこそ、舊勞農黨はかの彈壓に抗して、農民黨は行ゆる惡評漫罵を浴びて、なほ現有勢力を維持したのである。前者の財力の出處は舊勞農黨そのものでなく、、、、であつたらしく、それは凡ての駐在員は、、、、に連座したのでも解る。後者の出處は御大平野であるのは勿論である。日勞黨、社民黨は黨としてかゝる陣形を立て得ない。兩者とも、代議士候補者が地盤開拓の意味で個人的に養ふのみである。

麻生の栃木に於ける如く、鈴木の大阪の如く。しかし最近社民黨は大右翼結成のために赤松が栃木へ駐在して指揮したり、大分計畫的なので、それにからんで國際聯盟——第二インタナショナルの、、、の噂がとび出した。金輸解禁促進のための外資輸入!?

第二には特別人件費と非常費だ。特別人件費といふのは、黨の運動者の生活の問題である。黨の中堅幹部及び同系統組合運動者で生活の出來ないものが多數にある。知識階級出身で原稿生活の出來ないもの、勞働者出身で工場にも入れないもの、またさうした人々を運動に專心させねば黨の活動が出來ないこの『職業的運動者』（プロフエショナルリボウリュショナリ）。しかも彼等の生活は實に榮養不良と睡眠不足の交錯である。筆者の同窓で無產黨の有力幹部がゐるが、しかも彼は一日二食で、まゝ電車賃にことかいてゐる。勞農黨でも細迫氏邊りは實家がいゝから食へるだらうが、外の連中は著述業者以外は食へない。しかし勞農黨の方は、、、關係の駐在員として展開されてゐるから見易い。農民黨も前述の通り平野の食客的子分である。悲慘なのは日勞黨の陣笠連である。本部にゐる人々で麻生、三輪、山名、吉田、河上は、それぞれやつてゆける。河野は文筆でもやれるし、實家もいゝ。田所は原稿生活でやつとこ自活してゐる。加藤、淺沼も最初は有給らしいかつたが、今は無給で加藤は産婆なる妻君に依存し、淺沼は大阪の農民組合にあつて盛んに家から金を引いてゐるらしい。その他かゝる陣笠は無數にある。組合同盟の方面には、分裂前に有給であつた連中が澤山あがつたりになつてゐる。九州にも鑛山にも關西にも、本部にもウヨ〳〵してゐる。この人々はさし當り麻生、三輪に依存せねばならない。また社民の方にも澤山ゐる。小池、片山、宮崎、赤松は食尙ほ足れりとしても、組合が分裂したので有給としておけないのが多數にある。その一部は『團體交涉權』の名の下に御用組合式に組合幹部を會社の人事掛に入れてゐるが、多數は鈴木派、松岡派、赤松派、西尾派と云つた風に個人的に生活資料を與へてゐる。かゝる傾向が勞農黨では宗派主義を、農民では私黨主義を、日勞、社民では親方主義を形成してゐる。大衆黨はまだ小さいので、その邊のことは問題でないらしい。この外に非常費として運動者の病氣、收監の費用、大會議の費用は、、、、を基金とするといふ噂のとふ救援會を持つ勞農黨以外は同一の出口しかない。

四

第三には選擧費用だ。日勞黨は總選擧費用として本部は次の如く發表してゐる。

選擧費用（昭和三年總選擧）

支出

總額	一、〇二六圓、八〇
（內譯）通信費	一四七、三八
應援辯士旅費	三〇四、九〇
本部交通費	二〇、七八
消耗品費	四七、九七
備品費	七、〇五
雜費	八、七二
印刷費（パンフレット二種 ポスター、ビラ）	四九〇、〇〇

總額	一、〇二六、八〇〇
（內譯）候補者寄附金	八〇〇、〇〇〇
一般寄附金	二二六、八〇〇

（備考——吾黨は一切の候補に對し保證金、運動費を支給或は貸與へず。候補者は寄附金を出し、その代りパンフレット、ポスターを無代送附す）

これは要するに本部の選擧事務費用で、選擧そのものゝ費用ではない。府縣會選擧でも保證金二百圓の外に、運動費が三百圓位はかゝる。代議士選擧になると二千圓の供託金の外に三千圓はどうしてもかゝる。無產黨の選擧戰として一番いゝのは、黨の指導者を候補者とし、その地區の黨員が選擧運動費を支出するのが一番いゝわけだ。府縣會選擧でも、この分裂の現狀ではさうした聯合會は極めて少く、況んや代議士選擧に於いてをやで、總選擧に於いてさうしたやり方をしたのは舊勞農黨の奈良と日勞黨の群馬位のものだ。そこで舊勞農黨の方はどうしたかといへば、對立とで、黨員三十人か四十人の支部でも立候補さした。舊勞農黨では細迫書記長以外の凡て本部、地方、評議會の指導者が立つた。評議會の山本、松澤、野田、秋和に金のありやうがなく、その地區でも金は出ない。辯護士をしない德田球一に到つても同一である。その凡ては、、、の支出であつたらしい。、、、、が、、、、、であることはこの間の事情を雄辯に物語つてゐる。日勞黨、社民黨に到つては幹部の中で金のあるものしか出れない。安部、麻生、松谷、吉田、鈴木、西尾、赤松、龜井など然り。しかし對立上地盤擁護の上で立候補させねばならぬ。良い指導者には金がない。そこに於いてか、金のあるかけ込み候補を搜さねばならぬ。日勞の河上などはまだいゝ方で、その他綱島、福田及び、社民黨の多數の『何處の、、、か解らぬ』連中がそれだ。佐野學が日勞黨を罵つて『綱島、福田等のゴロつき連を立候補せしめ……』と云つたが、ら必所に對立の候補があるのだらう。社民や日勞には舊勞農なら必ず立てるといふやうな秋田、千葉、埼玉、青森等の地盤は候補者のなきために遺棄されてゐた。スカンピンの加藤の立候補は事務長河野の腕と、協定を破壞した舊勞農黨に對する大衆の怒りによる寄附金によるのだ。農民黨の方は平野力三のスゴ腕で供托金と資金を與へて、當選のためか他無產黨叩き落しのためかズクンズクン立てゝゐた。

五

稅務官もこれだけ刷せば歸つて行くが、與信所員はこれから洗ふのだ。今迄の金の出口は凡て直接出口で、それは殆ど仲介人なのだ。鈴木や松岡がゼネヴア行きの旅費を使ひ殘して來たつて大したことはない。平野力三が飛驒の木村屋の息子でもさう大金を動かせる筈はない。舊勞農黨が一番金をつかひ、社民、農民とつゞき日勞が一番困つてゐるらしい。舊勞農黨の方は積極主義をとつたために人

用であり、社民、農民は、理論的に大衆をつかはず金で結ばれた親方主義、私黨主義のために、無駄に多額の金を要するらしい。日勞黨は僅かの金だが理論的牽引を以つて、比較的有効に用ゐてゐるらしい。舊勞農黨の凡て金は、無產者新聞社、產業調査所の費用と共に一連なる、、の金たるは明かである。如何に有權者名簿から氏名をひろつて寄附應募者を作つても『、、、』の逆宣を打消し難い。

日勞、社民、大衆、農民の幹部はどうか？第一には、有數幹部はパトロンを有する。パトロンは何にも階級的に惡いものでなく、役者や角力のファンの熱の高い奴で、その人間にほれ込んだり、同窓であつた關係から出來た個人的支持者である。日勞の麻生には石田といふ大土木業者のパトロンあり、更らに福岡の政友會の重鎭麻生官八といふ伯父があり三輪には大阪の大株屋あり、社民の鈴文には紡績の宮島淸次郎と古河の中島久萬吉あり西尾には大林組あり、大衆黨の鈴木茂三郎は東田切つての[illegible]鄕誠之助、松永安左衞門がある。日勞黨と大衆黨は大した金もかゝらぬので、幹部がパトロンからせしめる金で大體間に合はしてゐるらしいが、金のかゝる社民幹部やパトロンのない平野は少しく、、を稼がねばならぬ。尤も、日勞黨の麻生も伯父官八が今春死んだ。彼が葬式にかけつけたとき、留守の本部員は『十萬圓を久にやれ』との遺言があるだらうと待つてゐたが、實は『久は社會運動を止めよ』との遺言で、その後金も出ず大分苦しいとの由。しかも一方、九州邊の幹事は『身を挺して十年戰つて地盤を作つても代議士にも立てす、かけ込み候補の應援にやられるとは何事ぞ。勞農黨が、、、、、、、、、、より社民黨が、、、、、、、からとつてやつて勝つ以上、淸貧は愚鈍に等し。吾々は日本の反動貴族の金でも使つてかまはん。左も右も凡てを金で行くなら、吾々中間も金で行け』と叫び『九州大衆新聞』を出して、反幹部運動が起つて來た。麻生はこれをなだめすかすめに併を持つて、そのために最近は、小むな[illegible]正直者の彼には荷の勝つた役目の風評が立つてゐる。

社民黨の幹部の、、稼ぎは有名なもので、、、、が、、、、と、、、との連名で田中大將から『日本農民組合を潰す』といふ口實で一萬圓の手つけをとつたのは古い話。野田爭議特別會議には、こんどは民政黨の安達濱田と結んだとやら。殊に、、は總選擧に於いて、政友系の正義團長酒井榮三と地盤協定をして立候補し、しかも酒井を通じて、鈴木前內相から相當の金が出たとやら。それを酒井の地盤まで喰つて酒井を落したので、先日も大阪の演說會で、、は正義團員に撲りつけられてゐる。また龜井は八幡製鐵所長官の推薦で立ち、民政黨の淺原と共に政友系であるべきなので、特別議會で鈴木前內相が新聞で『社民の中二人は大丈夫だ』とは鈴木、龜井を指したとのこと。そんな『とのこと』でなくとも、鈴木は工業俱樂部で『日本でロシアの金で生活するものが六百人ある。しかしこの文治の眼の黑い中はガタリとも云はせない』と資本家を喜ばして献金募集をやつたり、また[illegible]

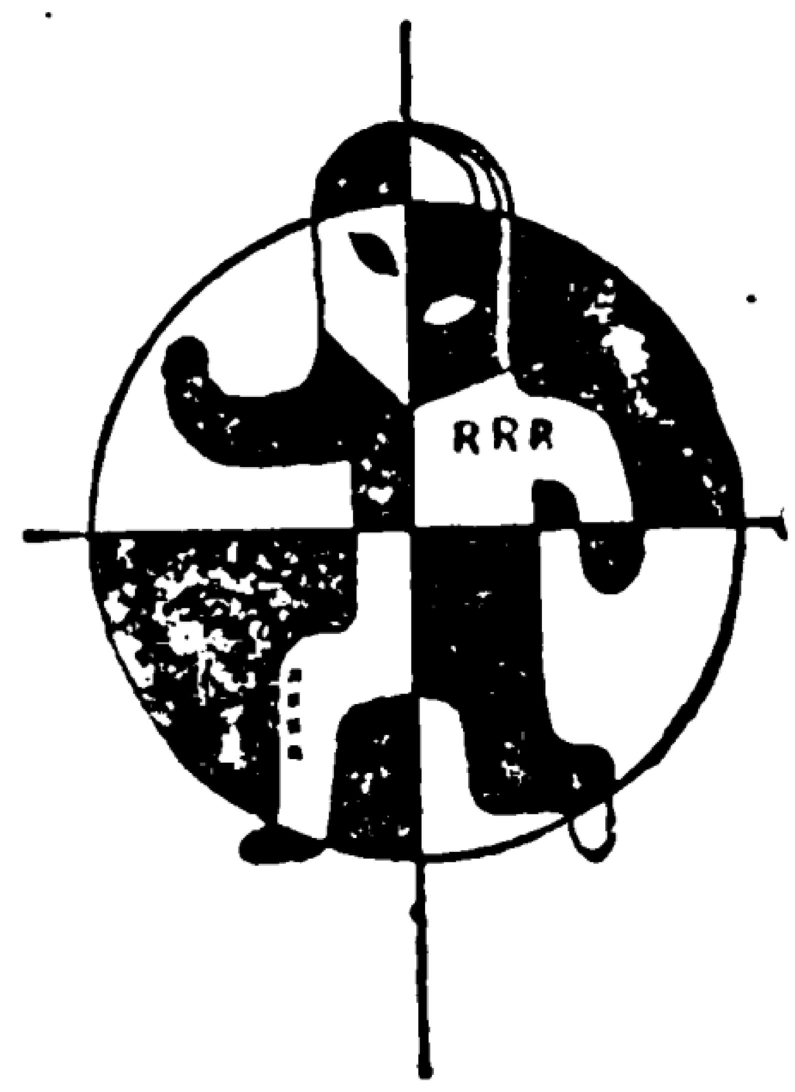
といふの[illegible]は月三百圓の資本家官廳以外は極秘の甲種通信と、月三十圓の新聞社向の乙種通信を出してゐる。去る十月に中央亭で資本家三百人を招待し、席上松岡は『この通信の利益は總同盟の罷工基金になる。總同盟は決して他組合・・のやうに諸君の御迷惑になるやうなことをしないから大いに買つて貰ひたい』と廣告してゐる。近頃はトーマの來朝とからんで、、、の噂がとんでゐる。こんなことから關西の正義派が怒つて擡頭しつゝあるのだ。農民黨の、、に到つては極めて明瞭である。彼は有馬伯爵を通じて政友會の別動隊である。それは農村の選擧の場合に他の無產黨候補と政友會候補と對立する場合に、政友會の金で無產候補叩き落しの役割を演ずる。香川の三土と舊勞農の大山の對立には日勞の藤本を買收して大山を叩き落し、群馬の武藤金と日勞の須永の對立には、坂本を立てた腕はスゴイものである。だから農民黨は新潟の須貝、山梨の高橋以外は常選を期せずに、相手の無產候補の抱き落しを目ざしてゐる。府選擧でもこの手を用ゐ、その鞘取りから凡て農民黨の費用を[illegible]

六

金の使ひ方、作り方から見ると、例勞農は月給を目當てにせず、郷里からの送金で暮すモダン・サラリーマン夫婦の文化生活の如く、社民は小額投資者の角逐する小無盡會社の如く、日勞は親父の脛嚙る大家族の如く、農民は未亡人が帳場に眼鏡を光らしてゐる商家の如く、大衆黨は下宿住の青年サラリーマンの如し。興信所員も切上げてかへつた。筆者はこゝで政治記者のジアーナリズムを去つて、眞面目に無產黨幹部に云ひたい。

こゝで金金金といつたので、既成政黨の連中が俺達と同じぢあないかといふなら、私はその額は一人の代議士の鞍替料にも及ばぬことを指摘すると共に、一般大衆は全々そんなことを知らずに戰つてゐること。幹部もそれを知らせずに苦心してゐる點が異ると申したい。また、、、や、、、で賣國奴呼ばりをするならば、、、、から選擧費用をとり、西原借款で鞘取りをやつたのはどの既成政黨かを伺ひたい。さはさり乍ら、私はいふ。今の無產黨運動は餘りにもアブノーマルな軌道を走[illegible]て、對立鬪爭上、必要以上に金に執着してゐる。その結果は幹部の墮落と陰謀を導き、不斷の內紛を呼び起す。カアフエの四疊半と待合の四疊半は異つても、金のことのみに沒頭してゐると、やがて同一なるブルジョア的四疊半政治を導く。黨や組合の活動は黨費、組合費により、その幹部はその公費の俸給をうけたときでなければ、宗派主義、私黨主義親方主義以外の中央集權的な健全な活動は望み得ない。その ためにはどうしたらいゝか唯一途、戰線を統一することである。そのときこそ對立鬪爭の必要なくして費用は三分の一にもなり、不良分子は淘汰され、一方黨費組合費も集るやうになるであらう。分裂前の總同盟や日本農民組合の財政のみが眞實のノーマルな無產團體財政である。それによつてのみ大衆團體の統制上のデモクラシーが凡ての親方主義と宗派主義と私黨主義を克服するであらう。かくて大衆の統一の要求は、單に當面の階級利害の防衛のみならず、階級運動の倫理性の擁護をも意味すると、私は信ずる

(十一月二十日)



むらさき（詩十五章）

深尾須磨子

あはれ秘めおくの情念に、誦みつるおろかしき詩そこばく。なべてみづからが手筥の底にとのねがひのみ、他はあらず、さるにても儚なき歌心のなどてかくも切なる。かき抱ける火桶の灰白う、世はいつしか寂滅の頃としもなりぬるに。

むらさき

「それは年増の好きな色……」
しゆにつれるのお話の怖かつた。
女は十七娘でした。

お召は千筋の袖口から、
ちらりと覗く何やらが、
不思議ではないか。不思議ではないか。

先生、
見つめられてじつと見かへすのが、
この頃の女の瞳です。

いつはり

たしなめてもくづれる口もとに、
うごめく鼻に、
うれし哀しい、秘めごとさへもてあまし。

ほんにこの世はわびしいもの、
嬉しいもの、

しやうのないもの。

蟋がみ空の鍵になる、
せえぬの市の世わたりを。
女は覺えすぎたやうです。

自白

きはめたこの世を片頰笑みに、
白薄様のうなじから、
悔いを包はせる女です。

せめて束ねた花束の、
忘れやうのない七つの名を、
誰に捧げよとおつしやるのか。

戀しとよりもいとしい人よ。
細めて下さい。

灯を、灯を。

あきらめ

合せた掌と、
閉ぢた瞼と、
もう身じろがぬ御像。

一つ目小僧に大入道、
大切に魔物をかくまつた、
心などとは勿體ない。

行ひすます觀世音菩薩、
うゐのおくやまけふこえて、
あさきゆめみしゑひもせず。

ちかひ

すは、

かはすのはいのち。
うごめくのは梁の夜の蜘蛛。

わが子でもはらからでもない人よ。
お呼び、
姉よと、母よと、聖母よと。

亂れるのは血の花。
空鳴るのは念珠。
女はもう息絶える。

女

涙より
哀しかる、
微笑みの。

しじまより
寂しかる、
ざれ言の。
女ぞや。
無の眼に、
ゑにしある。

溜息

おごそかな下知ののがれがたさ、
背く空怖ろしい報いには、
焔の舞ひもかけませうに。
思ひあまつた女心が、
不覺にも洩らす溜息に、
荒ぶのは罪の王子様。
あはれな終の生贄の、

いのちにかはる贖ひには
千と一夜の物語もかけませうに。

怨み

ふかぶかと、ふかぶかと、
引きかついでもつれないしとねの
夢の寒さは、冷たさは。

抱き寝の歌はこがらしの、
とぎれとぎれの
三十一文字。

男どこへ行た、
油買ひに、酒買ひに
篠田の森を越えて行た。

焦躁

今はとて
こちたかる、
色に香に。

昨日を追ひ、
明日を呼び、
今日に酔ふ。

散るは、
をはりの花ぞ。
なごりの花ぞ。

拒絶

約束は、
青い小鳥の棲むと云ふ、
お伽噺の國のもの。

雨の降る品川驛

中野重治

×××記念に　李北滿　金浩永におくる

辛(しん)よ　さやうなら
金(きん)よ　さやうなら
君らは雨の降る品川驛から乘車する

李(り)よ　さやうなら
も一人の李(り)よ　さやうなら
君らは君らの父母(ちちはは)の國に歸る

君らの國の河は寒い冬に凍る
君らの反逆する心は別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて夕暮れのなかに海鳴りの聲を高める
鳩は雨に濡れて煙のなかを車庫の屋根から舞ひ下りる

君らは雨に濡れて君らを、、、、、、を思ひ出す
君らは雨に濡れて　、、、、　、、、、　、、
、、　、、、　、、、、、、を思ひ出す

降りしぶく雨のなかに綠のシグナルは上がる

降りしぶく雨のなかに君らの黒い瞳は燃える
雨は敷石に注ぎ暗い海面に落ちかゝる
雨は君らの熱した若い頰の上に消える
君らの黒い影は改札口をよぎる
君らの白いモスソは歩廊の闇にひるがへる
シグナルは色をかへる
君らは乘り込む
君らは出發する
君らは去る
おゝ

朝鮮の男であり女である君ら
底の底までふてぶてしい仲間
日本プロレタリアートの前だて後だて
行つてあの堅い　厚い　なめらかな氷を叩き割れ
長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ
そして再び
海峽を躍りこえて舞ひ戻れ
神戸　名古屋を經て　東京に入り込み
、、、、に近づき
、、、、にあらはれ
、、、
、、顎を突き上げて保ち
、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、
溫もりある、、の歡喜のなかに泣き笑へ

自傳的に見た 日本社會主義運動史（二）

堺　利彦

目次

序

本篇の前回は幸ひにして可なり好評だつたように、私に感じられた。それで兎にかく、私はこれを書き續ける勇氣を得た。

いつでもの事だが、私は何か少し長い物を書きかけた時、先づ大なる恐怖を感ずる。飛んでもない事をやりはじめた。一體、これをどうまとめて行けば善いのだらう。然し今さら仕方がない。失望と煩悶と苦惱が始終續く。然し又、その中に思ひ直して奮發する。書き續けて行く中、少しは得意に感ずる點もある。結局、どうやらこうやら一部分が出來あがる。先づ善かつた。その中、人が何とか云つて呉れる。惡評ばかりでもない。それでヤット助かる。二十歳から六十歳の今日まで、大體いつでも、そんな經過を繰返して來た。今度も又實にその通りであつた。

讀者諸君、どうぞ私を勵まして當分この書き物を續けさせて下さい。と云つて、勿論、お世辭や氣休めを聞かされては困ります。私は遠慮のない親切な批評と、種々なる有益な註文を聞きたいのです。

前回に『萬朝報』に『まんてうはう』とルビが振られて居るが、あれは『よろずてうはう』と云ふのが正しい。『マンチョウ』とは、他からそれを、冷笑的輕侮的、揶揄的、或は愛撫的に見た呼方であつた。社長黒岩氏は權威ある語調を以て、いつも自ら『朝報』と呼び、『朝報社』と呼んで居た。

日本社會主義史としては、明治四十年、石川旭山（三四郎）氏が日刊平民新聞に書いたのが最初で、それには幸徳秋水が『補筆』して居た。後に私が雜誌『社會主義』に『日本社會主義小史』を少しばかり書いたが、それも石川氏のに據る所が多かつた。荒畑寒村氏の『日本社會主義運動史』と題するパンフレットも、大體右二種に據つて居り、近來山川均氏が雜誌『太陽』の創業記念版に書いた『社會主義運動小史』も主として荒畑君のに據つたのである。外に安部磯雄氏の『社會主義小史』が大隈伯撰の『開國五十年史』（明治四十一年發行）下巻に載せられてある。猶外に、片山潜、西川光二郎共著の『日本の勞働運動』（明治三十四年發行）、片山潜著 "The Labour Movement in Japan"（大正八年發行）の二つがあるが、共に絶版で容易に手に入らない。近來の著書として、『社會科學』第四巻第一號「日本社會主義運動史」（昭和三年、改造社）日本社會運動史講話（昭和三年、横溝光暉、松華堂）日本社會運動史（昭和三年、岡陽之助、解放社）などがある。その他、勞働運動に關する『年鑑』や『講座』などの中に、幾種か關係の記述がある。

私の『自傳的運動史』としては、直接、私自身の見聞した事、或は關係した事を書くのが主眼であるけれども、然しそれより以前の歴史も一通り書かないわけに行かないので、その部分は前記の諸書に依つて或はその他の材料に依つて、成るべく簡單に記述する事を努める。

前回に於ける甚だしい誤植を二三訂正しておく。一九四頁、「三木愛藏」は「愛花」の誤。二〇三頁、九行目、「獨立自營」は「自前」の誤、同頁、「理想國」は「理想團」の誤。猶前回中の「××××」と「････」は、私自身の爲した伏字と省略であり、「、、、、、」は改造社編輯部の親切な考慮の結果である。

一　社會主義研究會、社會主義協會

前回には、私は先づ萬朝報に於ける初期の社會主義傾向を敍し、續いて社會民主黨の創立と解散を記した。本回には、先づ社會民主黨の母體であつた社會主義研究會と社會主義協會の事から記す。

社會主義研究會は明治三十一年十月、初めて東京芝區四國町ユニテリヤン協會の一室で開かれた。會員の姓名左の如し。

高木　正義	河上　清	豐崎善之助	岸本能武太
新原　俊秀	片山　潜	佐治　實然	神田佐一郎
村井　知至	幸徳傳次郎	金子　喜一	安部　磯雄
平井　金三	杉村廣太郎		

この人々は主としてユニテリヤン主義の、そしてアメリカ戻り、或はアメリカ關係の、クリスチヤンであつた。但し片山氏はユニテリヤンでない、アメリカ戻りのクリスチヤンであり、佐治氏は佛教僧侶から轉じたユニテリヤンであつた。杉村氏も佛教出身で、後に新佛教徒として名乘を揚げた。この中、宗教と全く關係のないのは、幸徳氏一人であつた。

社會主義研究會の目的は『社會主義の原理と、之を日本に應用するの可否を考究する』に在つた。そして會長が村井氏、幹事が豐崎氏であつた。安部氏も中心人物として、協會設立の議にあづかつたのであ

自傳的に見た日本社會主義運動史（二）

堺利彦

目次

序

本篇の前回は幸ひにして可なり好評だつたように、私に感じられた。それで兎にかく、私はこれを書き續ける勇氣を得た。

いつでもの事だが、私は何か少し長い物を書きかけた時、先づ大なる恐怖を感ずる。飛んでもない事をやりはじめた。一體、これをどうまとめて行けば善いのだらう。然し今さら仕方がない。失望と煩悶と苦惱が如く續く。然し又、その中に思ひ直して奮發する。書き續けて行く中、少しは得意に感ずる點もある。結局、どうやらこうやら一部分が出來あがる。先づ善かつた。その中、人が何とか云つて呉れる。惡評ばかりでもない。それでヤット助かる。二十歳から六十歳の今日まで、大體いつでも、そんな經過を繰返して來た。今度も又實にその通りであつた。

讀者諸君、どうぞ私を勵まして當分この書き物を續けさせて下さい。と云つて、勿論、お世辭や氣休めを聞かされては困ります。私は遠慮のない親切な批評と、種々なる有益な註文を聞きたいのです。

前回に『萬朝報』に『まんてうはう』とルビが振られて居るが、あれは『よろずてうはう』と云ふのが正しい。『マンチョウ』とは、他からそれを、冷笑的輕侮的、揶揄的、或は愛撫的に見た呼方であつた。社長黒岩氏は權威ある語調を以て、いつも自ら『朝報』と呼び、『朝報社長』と呼んで居た。

日本社會主義史としては、明治四十年、石川旭山(三四郎)氏が日刊平民新聞に書いたのが最初で、それには幸徳秋水が『補筆』して居た。後に私が雜誌『社會主義』に『日本社會主義小史』を少しばかり書いたが、それも石川氏のに據る所が多かつた。荒畑寒村氏の『日本社會主義運動史』と題するパンフレットも、大體右二種に據つて居り、近來山川均氏が雜誌『太陽』の創業記念版に書いた『社會主義運動小史』も主として荒畑君のに據つたのである。外に安部磯雄氏の『社會主義小史』が大隈伯撰の『開國五十年史』(明治四十一年發行)下卷に載せられてある。猶外に、片山潜、西川光二郎共著の『日本の勞働運動』(明治三十四年發行)、片山潜著"The Labour Movement in Japan"(大正八年發行)の二つがあるが、共に絶版で容易に手に入らない。近來の著書として、『社會科學』第四卷第一號『日本社會主義運動史』(昭和三年、改造社)日本社會運動史講話(昭和三年、横溝光暉、松華堂)日本社會運動史(昭和三年、岡陽之助、解放社)などがある。その他、勞働運動に關する『年鑑』や『講座』などの中に、幾種か關係の記述がある。

私の『自傳的運動史』としては、直接、私自身の見聞した事、或は關係した事を書くのが主眼であるけれども、然しそれより以前の歴史も一通り書かないわけに行かないので、その部分は前記の諸書に依つて或はその他の材料に依つて、成るべく簡單に記述する事を努める。

前回に於ける甚だしい誤植を二三訂正しておく。一九四頁、「三木愛藏」は「愛花」の誤。二〇三頁、九行目、「獨立自營」は「自前」の誤、同頁、「理想國」は「理想團」の誤。猶前回中の「×××」と「・・・」は、私自身の爲した伏字と省略であり、「、、、、、」は改造社編輯部の親切な考慮の結果である。

一　社會主義研究會、社會主義協會

前回には、私は先づ萬朝報に於ける初期の社會主義傾向を敍し、續いて社會民主黨の創立と解散を記した。本回には、先づ社會民主黨の母體であつた社會主義研究會と社會主義協會の事から記す。

社會主義研究會は明治三十一年十月、初めて東京芝區西久保町ユニテリヤン協會の一室で開かれた。會員の姓名左の如し。

高木正義　河上清　豐崎善之助　岸本能武太
新原俊秀　片山潜　佐治實然　神田佐一郎
村井知至　幸徳傳次郎　金子喜一　安部磯雄
平井金三　杉村廣太郎

この人々は主としてユニテリヤン主義の、そしてアメリカ派の、或はアメリカ關係の、クリスチヤンであつた。但し片山氏はユニテリヤンでない、アメリカ戻りのクリスチヤンであり、佐治氏は佛教僧侶から轉じたユニテリヤンであつた。杉村氏も佛教出身で、後に新佛教徒として名乘を揚げた。この中、宗教と全く關係のないのは、幸徳氏一人であつた。

社會主義研究會の目的は『社會主義の原理と、之を日本に應用するの可否を考究する』に在つた。そして會長は村井氏、幹事は豐崎氏であつた。安部氏も中心人物として、[illegible]にあつかつたのであ

るが、氏は當時京都の同志社に在つたので、翌年春上京後、初めて實際に參加した。金子氏は當時まだ名を列したに過ぎなかつたが、數年後にアメリカから我々の運動に參加した。

安部氏はこれにつき『開國五十年史』に記して云ふ。『社會主義の研究を目的として起りたる團體は、社會主義研究會を以て第一とす、創立は三十一年の秋にして、芝のユニテリヤン協會を以て會場となし、會員は交互例會に於てサンシモン、フーリエー、プルードン、マークス等の社會主義に就きて講演を開き、時に實際問題を捉へて討論せしこともありき。此の如く社會主義研究會は殆んど二年間、全く研究的態度を執り、其會員中には社會主義を奉ずるものもあり、之に反對するものもありといふ有様なりしが、三十三年の暮に至り、活動的態度を取ると同時に、社會主義者のみの團體を組織するの必要ありたるを以て、其名稱を社會主義協會と改め、社會主義者にあらざる者は其際に於て退會することとなりたり。然れども活動を試みんとて起りたる社會主義協會は、僅に三四十名の會員を有するに過ぎざりしを以て、未だ政治運動を開始すること能はざりき。』

幸徳氏はこれにつき日刊平民新聞に記して云ふ。『予が初めて朝報社に入れるの年、即ち明治三十一年の十一月中旬、予は「社會腐敗の原因及び其救治」と題する論文を二日に亘りて萬朝報に揭げしに、即日村井、片山、二氏連名の端書を以て社會主義研究會設立の旨を報じ、且つ予の入會を勸誘し來れり、予喜んで之に應じ、同月廿日芝ユニテリヤン惟一館の圖書室に開ける同會に赴けり、此日列席せるは前記の安部、片山、杉村、岸本、神田、佐治、豐崎の諸氏にして、予に取つては皆な生面の人なりしも、一見舊知の如く、眞に愉快に堪へざる者ありき、其他十數名のユニテリヤン會員の傍聽者ありき。

此日規則を設け、役員を置き、每月一回惟一館の圖書室に會して講演討究を爲し、六合雜誌の一部を其筆記報告の機關に充つることとしたり、當時の六合雜誌を繙かば、每月必ず社會主義研究會記事てふ一欄あるを見ん、如斯にして社會主義研究會は殆どユニテリヤンの一事業たるの觀ありき。

「會は每日開會せり 初めは歷史的講演より、漸次に實際問題に及べり、予は岸本能武太氏がサンシモンを述ぶるを聞けり、豐崎善之助氏がプルードンを讃するを聞けり、河上清氏が土地制度を論ずるを聞けり、佐治實然氏の市政を談ずるを聞けり、而して予は謂へらく、此會や實に眞面目なる學者の淵叢にして熱誠なる志士の集合なり、此會にして能く發達せば日本思想界の一勢力、一明星たること、猶ほ英國のファビアン協會の如くなるを得んと、而して會員諸氏の志も亦此に在りし也、嗚呼十年の春秋は早く夢と過ぎぬ、日本のファビアン協會の諸名士、今將た如何の狀ぞ』

二　社會民主黨の出現した理由

この社會主義研究會と社會主義協會とからして、急に社會民主黨が

て居る。

『社會民主黨は何が故に斯く突然創立せらるゝに至りたる乎。……黨に日本鐵道會社の矯正會が旭日天に冲するの勢を以て發達せしは、既に述べたるが如し。當時若し勞働者を味方とする所の政黨起らんには、彼等は殆んど全會一致を以て之に入黨するの氣勢を示したり。社會主義者は時機到れりと踴躍し、四月某日、片山潛、幸德傳次郎、木下尚江、河上清、西川光二郎、安部磯雄の六人は、日本橋本石町の勞働組合期成同盟會の事務所に集合して、政黨創立の事を決す。……』

安部氏は更にそれを、『社會科學』の『明治三十四年の社會民主黨』の中に、左の如く語つて居る。『三十二年頃から……ユニテリヤン協會の教壇は殆んど社會主義的思想の宣傳場となつた。……日本鐵道會社の勞働組合內にも社會主義の思想は漸次受入られるようになつたので、若し社會主義を基礎として政黨が組織されるならば、二千有餘の組合員は悉くこれに參加すべしといふ意味のことを幹部から片山君に傳へたので……片山君は好機來れりと考へ』云々。

幸德氏は別にそれを次の如く語つて居る。『斯くして社會主義研究會は一個の學術團體として二年有餘の命脈を保ちしも、後には其事業の單調なるが爲、會員多く倦怠の色を生じ、萎靡として振はざるに至れり、之と同時に、外部に於ける勞働運動の潮流は頗る急に、日鐵矯正ゝ一政黨を組織せんことを企て、木下、西川の二氏亦外より來り加はるに、予も亦之に參して、社會民主黨の發表とはなれり、實に卅四年五月也、而も他の研究會の諸氏は多く職を教員、官吏に有する者なるが故に、實際運動に加はり難きの事情あるを察し、強て諸氏の來り投ずるを求めざりき』

幸德氏は、社會民主黨の創立以前に、社會主義研究會が社會主義協會に變じた事を書いて居ない。その點は彼の考へ違ひかと思はれる。然し彼は更に、『研究會』と『協會』との關係について、次の如く記して居る。

『社會民主黨の禁ぜらるゝや、予等は一時殆んど中絕したる社會主義研究會を再び繼續し、學術團體として社會主義の弘通に力めんとせり。而して此時や、政府當局の物色稍嚴なるに至ると同時に、社會主義研究會發起者の多數はいつか離れ去り、會の形式性質倶に全く一變せり、其中心は最早ユニテリヤン會員の學者に非ずして、勞働運動者及び新聞雜誌記者なりき、其名は社會主義研究會に非ずして社會主義協會となりき、其會場は惟一館樓上の客室に非ずして、片山家若しくは三崎町の貸席となりき、其事業はユニテリアンの講演に非ずして、青年會館の公會演說なりき』

安部氏の記述に依れば、社會主義協會は社會民主黨より三四個月以

前に存在して居た筈であるが、然しその實際の活動は社會民主黨の解散以後にあるのだから、幸德氏の書方の方が、實際の情勢には却つて善く當てはまつて居たのかとも思はれる。

三　勞働運動の先驅、職工義友會

『明治廿七八年の日清戰爭は、「日本帝國」の武力と財力とが決して馬鹿にならぬことを世界に示した。「帝國」自身としては又、この意外の大勝利に依つて途方もない自惚心を增長させた。』

『領土は……臺灣まで擴張される、勢力範圍は朝鮮まで延長される、二億三千萬兩の償金は取れる、「帝國」は今後……どこまで膨脹するか分らないと考へられた。此に於いて、折角一度引つくわえた肉の塊りを吐出させられた（謂ゆる三國干涉の）怨みを抱きつゝ、「帝國」の「志士」は盛んに軍備の擴張、實業の發展、殖民政策の急要等を呼稱しだした。帝國主義が最も露骨に提唱されだした。

『當時、實業！　實業！　といふ叫びが如何に強く全國に響きわたつたかは、恐らく今の青年の想像し得ない所であらう。それが卽ち戰後に於ける企業熱のモットーであつて、……日本は此時からして初めて本統の商業國、工業國、資本國となつた。一代の青年は殆んど皆な黄金崇拜教の信者となつた。

『三井物産[illegible]

爭の出來ない事を充分に悟つた。換言すれば、當時資本家が商工階級の中堅であつて、政治も、外交も、戰爭も、皆それが爲に出來るものだといふ事が、初めて幾分か理解されて來た。……日本の資本家階級は此時から愈々其の大威力を發揮し、日本の資本家制度は此時から愈々本物になつた。

『政治上においては、伊藤內閣が自由黨と提携して戰時中を切拔け、戰後廿九年には松隈內閣が進步黨を率いて一時を糊塗し、漸く藩閥と黨閥との妥協を示して來た。然しこの現象も、實は財閥を中心として藩閥と黨閥とがノッピキならず接近しかけたものと解釋する事が出來る。卽ち藩閥と黨閥とが同じく共に財閥化しかけたものと見る事が出來る。

『然らば多數人民は、この帝國主義熱、實業熱、膨張熱、黄金熱の下に於いて、如何なる地位に在つたかと云ふに、彼等は增稅に苦しめられ、兵役に苦しめられ、物價騰貴に苦しめられ、奢侈に苦しめられ、農村は爲に甚だしく疲弊して、その青年は續々として都會に向つて溢れ出した。然るに實業熱で煮えくり返つて居る都會が、その地方から流離して來る青年を待ち受けて居た事は勿論である。斯くして都會の工場に於ける賃金勞働者は俄に其の數を增大した。從つて勞働運動が起らざるを得なかつた。』（大正九年、堺利彥、日本社會主義運動小史）

[illegible]階級にして、[illegible]

その形勢に乘じて三十年四月、東京に『職工義友會』が起された。職工義友會は『職工諸君に告ぐ』と題する長文の趣意書を印刷して、普ねく各工場に配布した。その趣意は、明治卅二年から内地雜居が行はれて、外國の資本家が低廉なる我賃金と怜悧なる我勞働者とを利用すべく入りこんで來る。又内地でも雇主と勞働者との關係は最早や昔と違ひ、『到底、實利以外、情實の入るを許さぬ』事になる。だから勞働者はそれに對抗する爲、早く『同業組合』を作れ、勞働は神聖にして、結合は勢力なりと云ふのであつた。但し彼等は『健全なる思想』と『着實なる行動』を強調し、『斷乎として革命の意志を拒めよ、儼然として急進の行ひを斥けよ』と云ひ、特に『貧富平均論』に反對した。

この會の發起者は城常太郎、澤田半之助の二氏であつた。二氏は久しく米國桑港に勞働して居た人々で、明治廿三年の夏頃から同地で高野房太郎氏等と共に勞働問題を研究し、他日それを日本に應用するといふ目的で、職工義友會といふ團體を作つて居たが、それを今、日本に歸つて豫定の通り應用しかけたのであつた。高野氏はその時、横濱の英字新聞の記者であつたが、それも直ちに來つて加入した。又同じくその頃、米國から歸つて來て居た片山潛氏もそれに加入した。……それから猶、工業學校の經濟學の講師鈴木純一郎、秀英舍の社長佐久間貞一、島田三郎、松村介石等の諸名士もその運動を援助した。

四　勞働組合期成會　鐵工組合

明治三十年六月廿五日、義友會は佐久間、島田、松村等諸氏の援助を得て、神田青年會館に勞働演説會を開いたが、來會者無慮一千二百名といふ盛會であつた。蓋し之が『勞働演説』の最初であつたらう。同年七月五日、義友會は其の成功に乘じ、『勞働組合期成會』と改名して其の發會式を擧げ、片山、澤田、高野等の諸氏が幹事となり、佐久間、鈴木、二氏が評議員となつた。後に日野資秀、島田三郎、村井知至、安部磯雄等の諸氏も評議員に加はつた。組合運動が漸く物になりかけたのであつた。

勞働組合期成會は其後會員の增加驚くべきほどで、十二月一日には會員中の鐵工より成る『鐵工組合』の發會式が青年會館で擧行された。高野、佐久間、鈴木、島田、片山の諸氏が演説した。（この時、高野岩三郎氏も演説者の一人であつた。岩三郎氏は房太郎氏の弟で、後の大學教授、大原研究所長、そして今、日本大衆黨の執行委員長に擬せられて居る人である）

鐵工組合の發達は著るしく、卅一年末には既に卅二の支部と二千七百人の組合員を有し、卅三年には四十二の支部と五千四百人の組合員を有して居た。片山、高野の二氏は、この組合の本部常任會員に加はり、殊に片山氏は組合發會式の當日を以て、雜誌『勞働世界』を發行した。これが日本に於ける此種の刊行物の最初であつた。片山氏は高

野氏と共に、旣に勞働運動の中心人物であつた。

卅一年四月三日、『期成會』は勞働者大運動會の計畫を立て、吳服橋内の永樂町原に集まり、列を整へて上野公園に赴く準備をしたが、警視廳から禁止されて實行を果さなかつた。然し同月十日、彼等は『奠都三十年祭祝賀』の名の下に、可なり盛んな行列を行つた。蓋し之は日本に於ける勞働者示威運動の最初であつたらう。『うす痘痕のある引緊つた顏に鐵緣の眼鏡をかけた片山潜が指揮官で先頭に立ち、此の八百餘名の行列は各支部の旗を振りながら、お揃ひの帽子をかぶつて繰り出したが、先づ宮城に向つて萬歲を唱へ、上野公園に進んで行つた。此の日、勇ましく行進歌が唱はれたが、それは我國最初の勞働歌であつた。』（岡氏著、日本社會運動史）

その勞働歌の文句は左の如し。『天に聳える富士山も、一簣の土の塊りぞ、我が同胞よ同胞よ、右と左に手を組みて、進むも退くも諸共に、かたく結びて團ふべき、時は來れり今ぞ今、きそへ／＼富士の山に、奮はゞ何か成らざらん、奮はゞ何か成らざらん』（横瀨氏、日本社會主義運動史）

五　活版工組合、調和主義と社會主義

鐵工組合の外、『期成會』の鼓吹に依つて作られた組合が二つある。

[illegible]ふ團體が組織された。會社が直ちに壓迫の手を加へたので、會員は遂にストライキを決行した。すると會社は更に其の首謀者七名に對してブラツクリストを宣告した。懇話會はそれで一應つぶれたが、同年十二月、更に『活版工組合』が組織された。組合員の數は二千餘名に達した。會頭として島田三郎、名譽會員として石黑忠悳、加藤弘三、片山潜、高野房太郎、村井知至、桑田熊藏、松村介石、手嶋精一、宮川鐵二郎、日野資秀等の諸名士があつた。（後の活版工組合誠友會も、信友會も、今日まで存在して居る印刷工組合も、皆これから系統を引いて居る。）

この活版工組合の發展は、漸くにして勞働運動に於ける主義態度の爭ひを生じた。明治卅二年七月九日、神田青年會館に於ける同組合の演說會には、桑田熊藏、片山潜、金井延の三氏が辯士として出席したが、その演題と順序は、改良主義（桑田）、調和主義と社會主義（片山）、社會主義を駁す（金井）であつて、正に明かな討論會であつた。當時の情勢を見る爲、その討論の要點を抄錄すれば左の如し。

△桑田氏曰く。勞働者と資本家が調和して助け合つて行かねばならぬと云ふ事は、經濟上の自然法である。社會主義一派の勞働運動を爲す人が資本と勞働の關係について間違つた考を持つて居る、……資本家を敵視して[illegible]悉く勞働者にする所の國家が

さは、それに[illegible]資本主人と奴隷の關係だ。…眞正の調和をするにはだうしても勞働者に旗幟を揚げさせなければいけない、…だから組合は必然である、同盟罷工も必要である。

△金井氏曰く。組合は純然たる經濟上の目的を以て進むべきものと考へる。猥りに政治法律に關係したがるのは不利益だと思ふ、社會主義の約まる所は、…私は日本國民の一人として迚も贊成が出來ない、この主義は到底、今日の國家組織を打破するに至らずんば實際行ふ可らざることである。

つまり社會主義の片山氏は勞資調和主義の桑田、金井、二氏から挾み擊ちに會つて大いに奮鬪したわけである。そして結局、片山氏が敗北して、組合は調和主義を採用したのであつた。

六　日本鐵道矯正會、勞働者懇親會

次に三十一年二月初旬、日本鐵道各驛機關方の間に、『我黨待遇期成大同盟會』と題した、非常に面白い檄文が配布された。曰く、

『右諸件成就するまでは、全國機關方心得以上は心中にて堅く同盟し、所謂以心傳心を以て固く相誓ひ、人知れず二錢の郵券を封發し東西南北より、社長、副社長、及び課長に宛て不絕訴上して止まざる義務あるべし、而して心中同盟なれば、之れが會長もなく幹事も書記もなし、又犬の憂もなし、反心者の悲もなし、少しく假令は非なれども、彼の露國の虛無黨の如く、歐洲の社會黨の如くせん』

[illegible]

首謀者と認むる者十名を解雇し、それを以て首尾よく此の秘密運動を鎭壓し得たと思つて居た。然るに同月廿四五の兩日、福島を中心とし、上野より宇都宮、仙臺を經て青森に至る各驛の機關手は、電報を以て氣脈を通じ、四百餘名一時にストライキを決行するの準備を定めて居る事が知れた。そこで會社は狼狽して、遂に機關手の要求を入れ、先の解雇者をも復職させて、僅にストライキの厄を免れた。

こゝに於いて、機關手等は四月五日、日本鐵道矯正會と稱する公然の團體を組織した。會員數一千名の多きに達し、三十二年末には二萬圓の積立金を有して居た。この運動が、內面に於いて『期成會』と關係を持つて居た事は無論である。又この會について特に注意すべきは、その中心人物が多くクリスチヤンであり、又禁酒會員であつた事である。蓋しそれは片山その他、期成會の人々の因緣からであつたらう。

前に、社會民主黨が『突然創立せらるゝに至りたる』理由として、安部氏が『日本鐵道會社の矯正會が旭日天に冲するの勢を以て發達せし』事を舉げたのと、幸德氏が『日鐵矯正會の如きは殆んど社會主義の旗幟の下に來らんとするの勢ありしかば』と云つて居るのとは即ち右の事實を指ざしたものである。そしてこの矯正會の幹部が社會主義政黨の組織を片山氏等に勸めて來た事も、前に記す通りである。

この前年、即ち明治三十三年十月、三宅雄二郞、片山潛、佐久間貞

一、樽井敬吉、ガルスト等の諸氏が社會問題研究會と云ふを起した。ガルストは米國人でヘンリー・ジョージ主義（單税主義、土地國有主義）の熱心な宣傳者で、日本名を單税太郎と稱した程であつた。『單税經濟學』といふ日本文の著述もある。この研究會も矢張り當時に於ける形勢の成熟を示す一事實である。（この研究會の事が安部氏の『小史』にも、私の『小史』にも、廿三年の事と誤記されて居る。それが近來、木村毅氏に依つて指摘訂正された。）

又、三十四年四月三日、當時大人氣の二六新報社の主唱で、向島白鬚前の廣場で勞働者懇親會を催した。これは前に記した勞働者運動會の繼續とも見るべきもので、安部氏の『小史』に次の如く記してある。

『入場券を買ふもの頗る多く、二六社は十二萬と豫言せしが、確かに其半數の勞働者は向島に集まるべしと見えたり。警視廳は二六社を諭して自ら中止せしめんとしたれども、頑として應ぜざりしを以て終に集會は五千人を限ること、集會者に對し一切酒類を與へざること、（豫告されたりし馳豚の如き行爲をなすべからざること、集會者に旗幟類を提携せしめざること等の命令を下せり。各工場の雇主も亦手を盡して勞働者の此會に出席することを妨害したり。然れども懇親會の當日は午前七時に入場者既に五千を超えたり。會場を公開するや、非常なる大混雜を來し、會場内の建物は悉く、、せらるゝに至れり。』この事[illegible]直ちに亦た會社長者等を解散したに過ぎない。[illegible]れりと

それから間もなく、三十四年四月廿一日、安部、片山、河上、幸徳、西川、木下の六氏は、日本橋石町の勞働組合期成會の事務所に集合して、社會民主黨創立の事を議決した。そして翌五月廿日を以てその創立を發表した事は、委しく前回に記した通りである。

七　日本のオーエン、民友社の功勞

我々は次に社會民主黨創立者六人の人物風采等を見たいのだが、まだその前に、もすこし古い歴史を考へて置く必要がある。勞働運動の第一の先驅は、既に日清戰爭以前、明治廿年代にも現はれて居た。即ち明治十七年頃、秀英舍長佐久間貞一氏が自分の勞働者を助けて印刷工組合を作らせようとした事がある。佐久間氏はそれらの爲、日本のロバート・オーエンと呼ばれたりした。廿二年、古い鐵工の小澤辨藏氏等が『同盟進工組』と稱する組合を作つた。但しその目的は積立金を共同資本として工場を設立しようと云ふのであつた。又その頃、明治廿一年には高島炭坑の坑夫虐待事件があり、廿二年には横濱の（外人所有の）製茶工場に於ける職工締出し事件があり、勞働問題が頗る世人の注意を引いた。

この時、勞働問題と社會主義思想の爲に最も多く役立つたのは、――今では不思議に感ぜられるけれども、當時に在つては紛ふ方なく、――德富蘇峰氏の民友社から發行された雜誌『國民之友』であつた。

[illegible]
威所、平民主義の鼓吹所として、天下に響きを爲すに至つた。[illegible]富氏は社會主義者ではなかつた。然し自由黨や改進黨の論客などとは全く流派を異にした。新らしい學問、新らしい教養の平民主義者であつた。云はゞ基督教的平民主義者であつた。新鮮潑溂たる文章と意氣とを以て貧者弱者の爲に氣を吐いた事は、實に目ざましいものであつた。』

『國民之友』は第一號からヘンリー・ジョージの論文を記載して、頗る善く社會主義の思想を紹介した。又この新雜誌には、『勞働者の聲』と云ふような目新らしい欄もあつた。『同業組合』（即ち勞働組合の組織を語り、『罷工同盟』の必要を說き、『土地の所有者は政權の所有者也』と喝破した論文などもあつた。萬國社會黨やメーデーの運動に關する歐洲通信も掲載された。この通信は酒井雄三郎氏がパリから送つたもので、當時に在つては實に異彩を放つた獨特の文字であつた。酒井氏は又『社會問題』と題する論文の結論において、『民主社會主義も亦何ぞ我國に起るの日なしとせんや』と豫言した。

又少し後に民友社から發行された國民新聞には、「社會の罪」と題したユーゴーの小說が原抱一庵の筆に依つて譯載されたり、松原岩五郎（廿三階堂）氏の「最暗黑の東京」と題する貧民生活の寫實記が掲載されたり、鐘淵紡績會社の女工生活の悲慘な內幕が暴露されたりした。そしていづれも間接に社會主義思想を鼓吹する力を持つてゐた。又單行本としても、「現時の社會主義」や、カーペンタアの「文明の弊

我々は德富氏の其後の態度行動に對して云々するよりも、むしろ此の最初の功勞に對して深く感謝したいと思ふ。』（堺著、日本社會主義運動小史）

八　自由黨左翼、東洋社會黨、車界黨

我々は更に自由黨の左翼、若しくは自由民權運動の左翼としての、社會主義傾向とその運動を考へて見る。

謂ゆる自由民權が、實は新たに勃興する財力階級の爲の自由民權を意味するものである事は、當時まだ廣く知られて居なかつた。自由民權とは、藩閥的專制政府に對する、眞に一般人民の爲の自由民權と信ぜられて居た。そして智力と才力のある士族と、財力のある農工商とが、一般人民の代表者と自信して、自由黨および改進黨の運動を起して居た。

『そういふ情勢の間からして、自由黨の一部、若しくは其の系統の中に、借金黨、小作黨、貧民黨、社會黨などといふ名稱が頻々として出現した。これらは一個の政黨として明白な結社をしたと云ふのでなく、只だ當時の政黨流行の勢ひに連れて、それらの運動者間に於ける談話の題目となり、氣焰の題目となつたに過ぎなかつたらうと思はれるが、それにしても兎にかく、社會黨といふ名稱が、最も急進的な內容を意味する者として、屢々使用されて居た事だけは確實である。』

（堺著、小史。以下大體それから引用）

明治十五年五月、東洋社會黨と稱する具體的の政黨が初めて肥前島原に創立された。何故そうした僻地で創立されたかの事情は今明かでないが、發起人は樽井藤吉、赤松泰助等の諸氏で、同地の江東寺に創立會が開かれた時、數百人の來會者があり（と傳へられて居るが、實は七八十名に過ぎなかつたといふ）、議決された綱領その他の文章も中々堂々たるものであつた。政府は大いに驚いたものと見え、二個月の後、之に禁止を命じた。

右の創立會で先づ問題となつたのは黨名で、或は立憲急進黨とすべしと云ひ、或は突飛黨とすべしと云ひ、議論沸騰の末、結局、原案の東洋社會黨に決したと云ふ。一般黨員の思想と氣分が略ぼ想像される。

綱領は三個條で、『我黨は道德を以て言行の規準と爲す』『我黨は平等を主義と爲す』『我黨は社會公衆の最大福利を以て目的と爲す』とある。說明の中に社會主義といふ言葉は使つてあるが、その內容は甚だ空疎である。『其社會黨と稱するは大なる親和黨といふ義なり』ともある。そして『盟約』の文中には、少なからず無政府主義的の、そして極端な道義的の思想傾向が現はれて居る。石川三四郎氏はこの黨の綱領組織を以て『日本に於ける最も重要なる無政府主義的一文獻』と云つて居る。然し吉野作造氏は之に反し、『適切に言へば國家社會主義と云つた方が當る』とも評して居る。

ぬが、不思議に獨創の見に富んだ天才肌の人で（吉野作造氏に依る）當時三十三四歲であつた。後ち衆議院議員となつた事もあり、普通選擧運動に奔走盡力した事もあり、銀行國有論を公けにした事もある。

大正八年、私は意外にも同氏の訪問を受けたが、その時、氏は更に銀行國有論の新草案を作つて居て、それを私に示された。氏が白頭の老軀を以ていまでも社會改革の素志を貫かうとせられる熱心には、深く敬服せざるを得なかつた。今は既に歿せられた事と思ふ。（明治廿二年、指原安三著、明治政史に、東洋社會黨に關する可なり詳細な記事があり。又近ごろ木村毅氏は、島原に遊んで前記の江東寺を尋ね、東洋社會黨加入者中の唯一の生存者宮崎百八郎氏に會つて居る。それらの材料は『社會科學』の『運動史』に收めてある。）

明治十六年、自由黨の奧宮健之、三浦亀吉の兩氏を中心として、東京に車界黨といふ結社が現出した。これは馬車鐵道會社に對する反抗運動で、市內の車夫を糾合した團體であつた。

當時、自由黨は三菱財力の横暴を憤り、海坊主退治と稱して盛んに之を攻擊し、又改進黨と三菱との關係を摘發して之を痛罵してゐた折柄であるので、黨內の少壯連に偶々馬車鐵道を好材料として、人力車夫の結合に依り、一般貧民の爲に氣焔を吐いたわけである。これは昔イギリスで、紡績機械をこわしにかゝつたのと善く似た幼稚な運動ではあるが、兎にかく資本の勢力に對する勞働者の團結運動といふ點

を持つて居たものである。車界黨が社會黨の黨を取り、車夫の車の字を取つたのである事は云ふまでもない。

それで車界黨は先づ神田明神に車夫大懇親會を開き、次いで兩國井生村樓に車夫大演說會を開いた。この演說會には植木枝盛、栗原亮一などいふ自由黨の名士、その外若手のあばれ者として知られた伊藤仁太郎氏などが出席し、いづれも車夫のハッピを着て演壇に立ち、中止の命令で大混雜を起し、煙草盆が盛んに飛んで、ヽヽにブッつかるといふ騷動もあつた。(その時以後、演說會に煙草盆が禁ぜられたとは、伊藤氏の直話である。)

そこで政府は直ちに車界黨を禁止し、併せて車夫の組合に嚴重の取締を加へた。程なく奧宮氏が名古屋事件で石川島監獄に入れられたので、この運動は自然に消滅した。

奧宮健之氏は土佐の人、當時僅かに廿二歲、自由黨の少壯者中に在つて大いに頭角を現はし、演說文章を以て『南船北馬、席暖かなるに遑あらず、極力自由の大義を鼓吹し』たが、後『言論是れ虛器のみ』と稱して秘密の實行運動に入り、遂に名古屋事件を起し、強盜殺人の罪を以て無期徒刑に處せられた。(同氏の晩年に於ける行動と運命——我々の社會主義運動に參加し、遂に大逆事件で死刑に處せられた事實——に就いては、後に委しく記す。)

三浦亀吉氏は元と根津遊廓の車夫であつたが、後ち自由黨の名士吉田正春氏および大井憲太郎氏の車夫となり、遂に自由主義の運動者となつた。(但し晩年には、餘り芳しくない事件の犯人として知られて居た。)

九　中江兆民系の社會主義者

明治廿三年、帝國議會が開設されたが、それと同時に自由民權運動の夢は覺めた。自由黨も改進黨も實は地主黨、資本家黨に過ぎない事が、漸く分りかけて來た。自由民權運動の率先者であつた小士族等は、その實、新興の財力階級の爲に先驅の役を務めたに過ぎず、一般の下層階級は財力階級の崛起の爲に利用されたに過ぎない事が、漸く識者の眼中に見えかけて來た。フランス自由主義の代表的學者として又濟世奇俠の傑士として知られた中江篤介(兆民)氏の如きは、議會の形勢に憤慨して間もなく議員を辭した程であつた。

そこで自由黨內には、單なる自由主義から更に一步を進めて、社會主義に向ふ者が、續々として現はれた。明治廿四年頃、自由黨の機關紙『自由』の編輯局には、主筆江口三省氏があり、記者に大道和一、佐藤勇作、石谷富藏等の諸氏があつて、いづれも社會主義的傾向を有して居た。そして大道氏は江口主筆の勸により、『社會主義』の歷史と現狀を譯述した續き物を『自由』に連載し、佐藤氏は普通選擧や地主全廢論などで盛んに其の紙上を賑はし、石谷氏は『社會黨瑣聞』を著したりなどした。

同年、中江兆民主筆、新井章吾主幹といふ組織で、『自由平等經綸』

といふ新雜誌が發行された。中江氏も新井氏も、自由黨の現狀に飽き足りない急進論者で、直接に自ら社會主義に進む事は爲し得なかつたらしく見えるが、社會主義を包容して、それを前進させる事は出來た。從つてこの雜誌に現はれた、牛原磊之氏の『平民主義』と題する論文には、『有産は無資者を使役し細民は富民の奴隷たるを免るゝ能はざる慘狀』云々の文字があり、又江口三省氏は『貧富の懸隔は去る可らざる乎』と題する論文を同誌に載せたりした。

當時の事につき、石川三四郎氏の懷舊談がある。當時石川氏は十五歲の少年で、茂木虎次郎氏（後の佐藤氏）、橋本義三氏（後の粕谷氏）、櫻井平吉氏等の合宿所に寄食してゐた。所が右三人の中、櫻井氏は飯田事件の首謀者として有名な、自由黨のあばれ者であり、茂木、橋本の二氏は『自由』新聞の經營者兼記者であり、常連の來訪者の中には中島信行、江口三省、直原守次郎等の諸氏があつて、皆が集まればいつでも『財產平均論』で議論が沸騰した。然るに『今（明治四十年）は惡人茂木、橋本の二氏、共に代議士であり、共に資本家であり地主である。世の變遷は怖ろしいものではないか』と石川氏は云つて居る。當時この人々の間に社會主義がどこまで理解されて居たかは疑問であるが、兎に角、『財產平均』が流行語になつてゐた事がわかる（前に記した職工義友會の趣意書が、特に『貧富平均論』に反對して居るのも、こうした流行の反映だと考へられる。）

顚倒將に起らんとす』と云ひ、『富者が勞者を壓するの弊は愈々甚だし、』と云ひながら、結論としては、『我黨の自由主義は富者勞者をして各々其分に從ひ相共に社會の利を享けしむるにあり、強て之を平均せしめ之を共有せしむるが如き社會主義は我黨の自由主義と相反る所なり』と云つて居る。自由黨は最早や社會主義に反對することを特に明言せざるを得ざるに至つたのである。その時、小林樟雄氏は自由黨大會の決議に『勞働者保護法を設くる事』の一項を加へたいと提案したが、板垣總理の反對に依つて否決された。自由黨は最早や勞働者を保護すると公言する事をすら憚るのであつた。斯くて自由黨は漸くその左翼を排斥して、財力黨たる實質を暴露しかけたのであつた。

廿五年冬、大石和一、佐藤勇作、酒井雄三郎、上野岩太郎、小島龍太郎等の諸氏が社會問題研究會を作つた。小島氏は當時衆議院の書記官で、中江兆民の系統に屬するフランス學者であつた。（小島氏は後に我々の運動と深い關係を持つたが、その事は猶ほ後に記す。）酒井氏も同じく中江系統のフランス學者で、前年、フランスから歸つて盛んに『國民之友』へ寄書した事は前に記す通り。上野氏はたしか民友社出身であつた。自由黨左翼と民友社とがこゝらで結合して居る所に興味がある。

この人々は個々小島氏の邸（恐らく官邸）に會合して研究を續け、酒井氏は『國民之友』に寄書し、上野氏は『自由』に書き、他の人々はそれ〴〵分擔を定めて調査に從事した。所が、その後、幾許もなく

つたので、[illegible]の新領地」は社會問題に在り、今の自由黨は須らく此の新領土に向つて手を下さざるべからずと云ふのが、彼等の主張であつた。然るに上野氏はそれが爲に板垣伯の御機嫌を損じ、遂に退社の止むなきに至つた。そんなこんなで『研究會』も『自然的解散』に歸した。佐藤氏はその後、小野瀬文氏等と共に『急進黨』といふを組織して多少世間の注意を引いた。小野氏はその宣言の爲に入獄した。

猶、酒井氏の事につき、木村毅氏がその著『明治文學展望』の中に記した事は極めて有益であり、又『最大の珍材料』であるから、少しくこゝに轉載する事を許して貰ひたい。

『酒井氏は肥前小城の士族だつた。』『已に長じ……東京に遊び中江篤介氏に就き佛蘭西學を修め。……中江氏を助けて政理叢談の發行に從事し、……明治二十三年、佛蘭西萬國博覽會の際、……農商務省の小吏となり、以て巴里に遊を試みたり』『政理叢談は……明治十五年發行で、……兆民居士の筆に成る漢文譯民約論が連載され、自由民權論の理論的指導としたので有名な雜誌である。確か第二號あたりから歐洲社會黨の沿革なる記事が連載されてゐるが、後の傾向から言つて、此れが或は酒井氏の筆になるものではあるまいかと私(木村氏)は見當を付けてゐる。』

『「國民の友」には、酒井氏は渡佛以前から寄稿してゐた。蘇峰氏へ酒井氏を紹介した者は勿論兆民居士で』あつた。

『一八九〇年五月一日……最初の世界的メーデーが行はれ……たが理論とを以て、これを[illegible]した。……「國民の友」明治[illegible]……所載「社會黨の運動」と……「五月一日の社會黨運動會に就て」とがこれだ……』

『(彼の竹馬の友)伊藤(佐佩)氏の弔文(の)一節。「君(酒井)はフランスよりの)歸國に際し、余を倫敦の客寓に訪ひ、……余に示すに一大版の撮影を以てして曰く、此れ余が頃日白耳義ブラッセル府に開設したる歐洲社會黨大會に臨み、……撮影しにる所のものなりと、就て之を視れば、……婦人あり、壯夫あり、勞働者あり、面貌何れも壯快、而して君亦破帽弊衣××××其の間に立てり。」(堺云、××の二字は活字の無いほどの六かしい漢字である。)

『明治三十三年パリに開催された大博覽のため、氏は再び農商務省の囑託となつて渡佛した。……所が……十二月になつて突如として氏の訃報が傳はつた。それも旅舍の三階の窓から下の敷石道へ墜落して死したと言ふ異常な報知である。……未亡人などは堅く過ちによる死と信じてゐられる。』『私(木村)は兆民居士の最初の門下に酒井雄三郎氏があり、最末期の門下に幸德秋水氏があつた事を、常に不思議な因緣だと思つて眺めてゐる。』

十　大井憲太郎氏の東洋自由黨

明治廿五年十一月、大井憲太郎氏は自由黨を脱して、別に東洋自由黨を組織した。大井氏は元來、自由黨中の急進派で、かの有名な朝鮮事件を起した程の人物で、既にその以前『あづま新聞』を發行して、

盛んに貧民の爲に氣を吐いて居たが、帝國議會の開設以後、自由黨が次第に軟化し、陸奧宗光を通じて長閥の伊藤内閣と妥協する傾向を示して來たので、彼は遂に別個の運動を開始するに至つたわけである。然し一面から見れば、圖太くて腹の黑い星亨が自由黨内に勢力を植ゑつけた爲、正直で一刻な大井氏は其の首領權を奪はれて排斥されたのだとも見られる。

東洋自由黨はその政綱として、何よりも先づ『貧民勞働者保護』を標榜した。そして黨内に『日本勞働協會』と『普通選擧期成同盟會』とを設置し、それらの機關紙として週刊『新東洋』を發行した。その紙上にはベラミーの『ルッキング、バックワード』が譯載されて居た。

然し此の二つの會の經營に當つた人々の顏觸を見るに、會頭大井氏の下に主任柳内幾之進氏があり、外に山崎忠和、福田友作、島内實治、鈴木修吾、中井榮次郎等の諸氏があるのだが、何となく寂寥の感を生ずる。當時何故に自由黨左翼の諸勢力を糾合する事が出來なかつたかは、今我々に分らないが、兎にかく東洋自由黨は、大井氏の名聲と經歷とから考へて、甚だしく振はないもので、殆んど何等の影響をも社會に與へないで消滅した。(その後も大井氏は老齡に係はらず、普通選擧運動に、勞働運動に、幾度か旗擧をしかけたが、いつも失敗に終つたのは、誠に惜むべき次第であつた。)

兎かくする中、朝鮮問題がやかましくなつて、とう〳〵日清戰爭が起つた。社會問題や社會運動は、當分總て表面から消えてしまつた。そして自由黨は遂に公然、伊藤内閣と提携した。

以上で、社會民主黨から遡つて社會主義研究會を一覽し、次に社會主義研究會と相並び、及びそれに先だつた所の勞働運動を回顧し、更に遡つて民友社を瞥見し、自由黨左翼を觀察し、それで大體、筆者たる私が直接に見聞し關係したより以前の、日本社會主義史を總括し得たわけである。

そこで之を要するに、日本に於ける初期の社會主義は、大體上、クリスチャン系統に屬するアメリカ式の者であり、更にその前期は自由黨左翼系統に屬するフランス式の者であるが、その二系統が、前には民友社に依つて互に輕く連絡せられ、後には幸德秋水に依つて深く、堅く密接に結合せられたわけである。秋水は元來、中江系の自由黨關係者で、そして後の社會民主黨に於ける、唯一の無宗教者であつた。

社會民主黨の宣言書が發表された時、それを掲載した新聞雜誌は、先づ第一に片山氏發行の『勞働世界』と、幸德、河上、二氏の在籍する萬朝報と、木下氏の在籍する毎日新聞とであつた。報知新聞がそれを載せた關係は今わからない。外に京都の『日出新聞』と、千葉の『新房總』『東海新聞』の二紙ともそれを載せたが、千葉の分は、前記の(そして幸德氏の舊友たる)佐藤勇作氏がいづれか一方の主筆であつた關係からだと記憶する。

× × × × ×

從て續いて、私は社會民主黨創立者六人の人物評論等について、私自身の記憶と印象とを書く積りであつたが、本回に許された紙數が既に盡きた。止むなく之れは次回に譲る。

無產黨大合同への前哨戰

獨自の闘爭に精進せよ

加藤勘十

一

日本大衆黨の結成——七黨合同——は從來四分五裂の狀態におかれた無產政治戰線の整理——最大可能の限りにおいて——の一役を果すと共に、更に全戰線の統一への具體的第一歩を履み出したものである。全戰線の統一への具體的第一歩をふみ出した日本大衆黨は當然の發展として、第二歩第三歩をふみ出して、全戰線の統一てふ具體的果實を收穫せなければならない義務を負つてゐる。資本主義の客觀的情勢に著しい變化のない限り、この義務を果すべき責任をもつてゐる日本大衆黨は、今後如何にしてこれが具體的な第二歩第三歩をふみ出すべきであらうか、一般的規定として戰線統一に、苟しくも無產階級運動に關心を有する限りの誰一人として異議のあらう筈がない。問題は其の具體性の把握にある。

今、結黨直後の大衆黨の立場に立つて戰線統一の具體性を把握すべく展望するとき、吾々は其處に大衆黨結成過程に見たるが如き——若干の障碍はあつたにしても——平坦な道を發見することができないのである。吾々は先づ第一に自らが冒されてゐるであらう處の合同前の各黨意識及び多かれ少かれ內包せる對立意識の芟除に努めなくてはならない。これは支配階級に對する猛烈果敢なる闘爭によつて除却されるとは云へ、各自が意識的に努めなくてはならない事柄である。斯く主體の完成——黨意識の固定化と誤る勿れ——と云ふ緊急重大事を控へての大衆黨は、然らば統一の具體的客體として如何なる條件を有ち得るであらうか。

吾々の視野にのぼりくる客體の一つは、資本攻勢の現實的情勢を無視して、卑俗なる機械的常識的對立理論をもつて大衆を僞瞞し、大右翼結成を唱へて分裂を固定化し、支配階級へ奉仕せんとする改良主義幹部に指導せられる社會民衆黨であり、他の一つは、口に統

一を叫びつゝ依然として誤まれる對立分離主義を金科玉條と心得る宗派分裂主義者の指導下にある所謂新黨準備會——準備會は反動内閣のために、、、されたとは云へ、何等かの形において運動主體を殘存せしめるであらう——である。

二

吾々は社民黨幹部の洞嚇にも拘らず、社民黨大衆の間に戰線統一の力強き叫びが漸次に高まり來りつゝある事實を見る。又、舊新黨準備會大衆の中にも、幹部の觀念的理論的飛躍の當然の結果としての合法黨無用論——歷史的過程に於ける階級的大衆黨の任務について彼等が考察したることありやを疑ふ——に反撥して、合法黨結成の叫びを上げつゝある事實を見る。それにも拘らず、私は戰線統一への道平坦ならず、と唱へざるを得ないのである。何故か、曰く、それ等の黨、集團が依然として分裂主義者の指導下にあつて、統一欲求の叫び微々たるものあるが故に。

ある者は曰はん『それ等の黨、集團の内部に於ける統一論が力弱ければこそ、合同を持ちかけて、それ等の合同統一論を生長發展せしめるのである。それこそ全戰線の統一を使命とせる大衆黨の正しき任務でなければならぬ』と、こは、機械論的には尤ものように見えるが、統一の全き完結を望む上から、又當面の戰術立場から決して妥當なる戰術とは云へない。

それ等の黨若くは集團の中に生長しつゝある合同論を高揚發展せしめることは必要欠くべからざる仕事である。而してそれが拍車の任務を果すべきものは我が日本大衆黨をおいては他にない。我が大衆黨に負荷されたることの拍車の作務を効果的に果すことは、決して機械的な合同の持ちかけにあらずして、大衆黨獨自の力によつての支配階級への闘爭そのものである。

支配階級へ迎合せんための意識的な右翼改良主義者の分裂政策にしても、理論の觀念的飛躍の故に、空想夢幻の境に陶醉せる極左主義者の分裂的實踐にしても、これを克服するの道は、現實に妥當なる正しき戰術をもつて支配階級と果敢なる闘爭することにある。支配階級への撓みなき闘爭こそ、一般大衆の信頼をつなぎ得る道であり、左右兩翼の分裂主義を實踐的に克服するゝ道であり、同時に之等の分裂主義者の指導下にある組織大衆をして、其の指導幹部に對して分裂理論及び政策の放棄を迫らしめるの道であり、而して斯くあらしめてこそ眞に戰線の統一が可能となり具體化すのである。

この戰術上の成熟を待たずして、かの彌勞農黨が企てゝ失敗した他黨の大衆奪取の戰術を再びくり返へすが如きことあらば、徒らに分裂主義者の障壁を硬化せしめるに過ぎないであらう。されば、私は最も熱烈に全戰線の統一を翹望する一人として、大衆黨が彌々獨自の闘爭に精進せんことを欲するものである。

この故に、日本大衆黨が結黨直後の執行委員會で決定した、左の執行方針

一、日本大衆黨は主陣の完成を以て當面の任務と考ふるが故に、合同協議會に於て獨

誘せし諸黨以外には、合同問題は當分打ち切るべし

二、新黨組織準備會は宗派分裂主義者の指導下にあるものと見なし、これが合法性を獲得すると否とに關らず、日本大衆黨は合同せず、また合同の申込に應せず

三、新黨組織準備會に屬せしものを入黨せしめる場合には、黨支部、黨支部聯合會に於て嚴重なる調査を遂げ、宗派分裂主義者の指導をはなれたるや否やを見究め黨本部の常任執行委員會の承認を受くべし

の三項は、戰術上妥當である。ある一部にはこれをもつて、一方に戰線の統一を旗幟とせる大衆黨としては、恰も門戶を閉塞するに似て矛盾せるものであると難ずる人もあるが、この方針をもつて門戶閉塞と見るが如きは、ものを機械的にしか把握し得ない人々の僻論である。現實に展開されたる戰線統一の各個體間の情勢に鑑みるとき、この方針は戰術的に從つて現實的に充分の妥當性をもち得るのである。（一、四）

日本大衆黨と社會民衆黨

赤松克麿

日勞黨、日農黨、無産大衆黨の三個の全國的政黨が合同して日本大衆黨を結成した。新黨準備會は捨鉢的な玉碎主義に祟られて、こゝしばらくは合法的存在性を失ふことになつた。そうすると全國的無産政黨として社會運動戰線に存立するものは、社會民衆黨と日本大衆黨の二黨だけになつてしまつた。そして多くの地方政黨はこの兩黨に向つて合流しつゝある。戰線はよほど整理されてきた譯である。ところがこの兩政黨の對立關係は今後どうなるのであらうか。とは誰もが一應胸に描いて見るインタレステイングな推測である。改造記者の私に命じた論題は、たしかに大衆的興味に立脚して居ると考へられるが、しかし私の見る所では、本當の玄人的興味は、兩黨の對立關係に在るよりは、もつとそれ以外の方面に在るのではないかと思ふのである。

日本大衆黨は社會民衆黨に對して、右翼分裂主義者（右翼幹部）を克服して、社會民衆黨と合同すると言明して居る。誠に意氣壯んなりといふべしである。社會民衆黨の方ではいやに落つき拂つて、日本大衆黨に對しては靜觀主義を取ると聲明した。日本大衆黨の態度がやゝ昂奮的なるに對して、社會民衆黨の態度は悠揚迫らざるものがあるが、實際の話が我々の方では日本大衆黨が結成されたからといつて、別に脅威を感ずる譯ではない。吾々は社會民衆黨立黨の指導精神が正しかつたことを實感し、今後も一貫した方針を以て進

んで行くことが我國の客觀狀勢に適合するものなることを知り、かくして社會民衆黨が我國勤勞無產大衆の代表的公黨たるべき輝ける地位を獲得することをも確く信じて居るので、今のところ日本大衆黨とかかはりあつて、地盤の爭奪戰でもしなければならぬやうな必要は毫も感じないのである。しかし折角日本大衆黨が結成されたとあれば、それは誠に結構なことであつて、我々としては、「兄弟分しつかり頼むぜ、俺達はまあゆる／＼御手並を拜見するとしやう」といつた位ゐのところである。

日本大衆黨は社會民衆黨の幹部を追つ拂つて、その大衆を獲得するといつて居るが、そんなことは事實全然不可能であるし、またそれは今日まで左翼派の理論家共によつて何百遍か云ひ古るされて來た陳腐極まる愚論であつて、現在我々に取つて雀の脅しにもならない程度のものである。我々の興味を以て見て居る所は、日本大衆黨が他黨に働きかけることよりも、一體あの左翼から極右に至る雜然たる寄合世帶をどうしてまとめて行くかといふことである。我々の實驗的確信によれば、相異る指導精神を有する諸勢力が合同すれば、必ずや內部的不統一、動搖、分裂の過程を辿るにきまつて居る。左右兩翼の混合型であつた日勞黨が、最近內部的動搖のために如何に苦しみ拔いたか。この一事を見ても我々の確信は裏づけられる。

新生の日本大衆黨は、各派の指導精神の展覽會の觀がある。農村國家主義の平野力三君一派があり、右翼主義に立つ舊日勞黨右翼派があり、修正共產主義を奉ずる舊無產大衆黨及び舊日勞黨左翼があり、依然として中間正道主義に立つ麻生君一派がある。若しこのまゝの狀態を何んとか圓滿にまとめて行かうとするならば、事實それも困難なことであるが、この黨は何等の指導理論を持たない機會主義的集團になつてしまふ。尤も合同問題の立役者平野力三君は、今度の合同は反社民勢力の物理的合同だと解釋して居るから、反社民意識に於て一脈のつながりはあるとしても、そんなものは新黨の結束を維持するに足る根强い恒久的のものではあり得ない。

ところが新黨內の右翼勞働組合同盟は、黨內にあつて飽くまで左翼と戰ふことを宣言し、左翼の舊無產大衆黨一派は合同を通じて横斷左翼を結成し、新黨の指導權を左翼に收めやうとする態度を示して居る。既に右翼主義を以て邁進せんとするものがあり、また左翼主義の旗の下に新黨を率ゐんとするものがある以上は、新黨の前途は大なる不安をはらんで居るを見なければならぬ。今後さま／＼の曲節があると豫想されるが、結局の所、日本大衆黨が完全な左翼政黨となるか、又は完全なる右翼政黨となるか、その何れかの時期に達して始めてこの政黨の基礎は安定するであらう。その過程に於いて多くの波瀾、動搖、犧牲を生ずるであらうことは勿論である。

我々は社會運動戰線を左右兩翼の二大分野に整理しやうとする方針を依然として持ち續けるものだ。それが最も合理的であるばかりでなく、社會運動の大勢に立脚するものだと信ずる。日本大衆黨の生誕は、この大勢の進行過程に起つた一變態現象である。だから我々は新黨が生れたからといつて、直ちにこれ

と抗争するとか、これを克服するとかいつた[illegible]やうな昂奮した態度を取ることをしないで、[illegible]である。すべては時が解決する。

[illegible]それは固よりかの合同を持つ處の積極的な反無産階級性である。

日本大衆黨の反階級性

細迫兼光

一

日本大衆黨が結成された。それはなる程四黨合同、更らに十二黨合同であるかも知れぬ。だが無產大衆黨の代議員をして云はしめた樣に、『それは組織員數に於ても勿論だが、その闘爭力に於て、遙に遠く舊勞農黨のそれに及ぶべくもない。故意に手前味噌を並べる者に非ざれば右の事實を否定し得る者はない』從つてこの合同は、極めて常識的な考だけから見ても、何等勞働者農民の全闘爭力を强め得たものでも何でもあり得ない。況んや階級闘爭に於ては、支配階級の、、、、、を身に浴びながら被壓迫階級の最前線に立つて戰ふ者によつてのみ、被壓迫階級の行動の合法性や利益は伸長せられるものである事に思ひ至れば、遙か後方、着彈距離圏外にあつて、然かも支配階級の庇護の翼の下に安逸の夢をむさぼつて居る者達が、いくら頭數を併せたとて、それが勞働者農民の闘爭力を寸毫だに增加せしむるものであり得ない事は言をまたない事である。過日、無產大衆黨の大會に於て、かつては其の姿を演壇の上に現すことすら不可能であつた堺利彥氏が、長々と祝詞を述べられたのを見て、「あの合法性は一體誰の手によつて獲得せられたものであらうか」と、轉た感慨深いものがあつた。

かの中間派合同は、斯くして何等の力を勞働者農民に添へたものであり得ない。だが、只にそれだけなら何も大した問題ではない。然し吾々はかの合同の中に、それ以上のもの

二

與へられた紙面が狹少であるが故に、以下私の覺書式に略述するであらう。

(1) 大衆黨は闘爭しない。元來かの合同は、吾々の『闘爭の爲めの合同』の主張に反對した方針の下に進行せられた。吾々の準備會が解散せられても抗議一つしようとしない。それは資本家地主の政府の、、を是認するものである。彼等の「言論集會結社の自由」の政策は果して如何なる場合に活躍させんとするのか。否、彼等議會萬能主義者は所謂代議士を通じて議會で一片の質問位させるかも知れぬ。然し背後の大衆的抗議は彼等の問題であり得ない。これが果して何の効果を持ち得るものぞ。只大衆の、、の安全瓣を議會で開く以外のものではあり得ない。それこそ支配階級が待ち望んで居る、、、、の錚々たるものではないか。

(2) 大衆黨は反左翼勢力の結成である。その幹部、殊に河野、田所若等をその手先とす

る堺、山川氏等は、「大左翼結成の第一歩」、「全無產黨合同の一過程」だと聲を大にして叫ぶ。だが絕對にそうではあり得ない。それは小兒病、極左、分裂主義等々の名によつて機會ある每に左翼の排斥、孤立化に憂〻をやつした彼等の過去の全過程が證明する。堺、山川氏等の鬪爭拔きの、合同萬能論者に於ては、假りに、左翼的に、鬪爭的に、舊勞農黨も含めて如何に熱望するとしても、それは、一須貝一平野中澤輩の決然たる反對を、どうする事も出來ないので、結局須貝、平野等札付の裏切政策を支持する事に陷つて了ふのである。

見よ、準備會の解散に際して彼等の聲明は「準備會とは、それの合法非合法に拘らず合同しない」と言つてゐるではないか。堺、山川氏等の舊無產大衆黨、舊日勞黨等の云つてゐた處の「結黨したなら合同」は既に此所まで發展したのである。否、それは發展ではなくて、彼等が最初から胎內に持つてゐた脈が局面の進展に應じて次第にその正體を現して來たものであるのだ。

反左翼勢力の結成。之れは決定的に彼等の反階級性を曝露するものだ。何となれば、資本家地主の權力と徹底的に戰ひ得る唯一の左翼政黨を支持するか否かが、その階級鬪爭に於ける分野所屬を決定するものであるからである。

(8) 更らに彼等は積極的に左翼の無力化、孤立化を策するものである。大衆が既にその反動性を知つてゐる須貝、平野の輩は恐るゝに足らない。然しながら堺、山川、河野、田所氏等は常にマルクス、レーニンを引き出し左翼的言辭を巧みに用ひて戰鬪的勞農大衆を僞瞞せんとするのである。彼等は左翼の主張を、時に原則的に或は公式として承認する。だが彼等一流の「客觀的狀勢」「戰略」「戰術」は、具體的方策を飛んでもない須貝、平野の膝下にまで運ぶのである。而して左翼の陣營をかき亂し、分裂せしめて、大衆を須貝、平野の膝下に運ぶのだ。その一例は彼等の「階級的事業」たる無產大衆黨の歷史に於てのみでも明に見る事が出來る。

之れが階級的だらうか。否、これこそは資本家地主が必死になつて希望してゐる處のものであつて、然かも須貝、平野に出來ない藝當を、より巧者な堺、山川氏等が遂行しつゝあるものでなくて何であらう。

(4) 而して彼等は大衆を非階級的に教育するものである。彼等は、鬪爭欲求によつて進出せんとする右翼中間の大衆を、又左翼から分裂せしめて得た大衆を、自己の膝下にヒレ伏させて、(1)に於て述べた如き、、、の幻影を注ぎ込み、勞働者農民の信賴の威力である大衆的鬪爭をサボタージユせしめ、、、の好まざるものならビラ一枚も撒く事をしようとしない徹底的な合法主義の殼の中に閉ぢ込めるものであるのである。

要するに、以上によつて盡くし得ない諸々の事業こそは、資本家地主が、彼等左翼社會民主々義者に課したる任務であり、日本大衆黨は、「合同」「戰線統一」といふ美名によつて彼等の任務の地ならしをするものである。

だが、かゝる大衆黨が如何なる運命を辿るものであるかは明かだ。その幹部の社會民主々義は、社會民衆黨の揭ぐる、より鮮明なる旗印に抗すべくもなく、大衆の鬪爭欲求は、眞實の左翼の旗印の下にのみ集るものであるのだ。(以上)

支那は動く（その二）

前田河廣一郎

10　孫文の像

私は支那へ來てから、まだ一枚のレニンの繪端書をさへ見たことがない。

その代り、孫文の像は、飽き飽きするほど眼先に突つけられてゐる。

試みに一弗の銀貨を手にして見れば、それには、頗る拙劣な孫文のパ・レリーフが浮き出てゐる。寫眞屋の看板に使はれてゐるかと思へば、掛筒にも彼れの肖像が顔を出してゐる。民家に、迷信打破とあつて、關羽のいかめしい掛圖が取除かれたとすれば、そのあとには孫文の像がぶら下げられる。殊に、新都南京へでも行くと、私達の觸目するものに、必ず何かの形をした Sunbunism の混じてゐないものはないのである。

同じ現象が、國府の要人達の間にも、殆ど官制的に、政策的にさへ踏襲されてゐる。政府の役人が、三人以上集まつて何かを討議する場合には、必ず先づ孫文の像の前で半宗教的な儀式が行はれる。たまたま、第五次全體會議のやうに、左右と中間派と話がまとまらずに決裂したとしても、左派は左派で『聯俄、容共』當時の孫文を楯にとつて右翼を攻めると、右派は『三民主義、五權憲法』時代の孫文を振り翳して、これに應戰する。日本で、よく親の戒名を書いた本の札で、必要以上に家族制度を破壞しようとする息子を打擲する話があるが、支那では、政治家が、めいめいに、同じ孫文の『主義』を提げて、反對派を克服すべくセクタリアニズムを發揮してゐる。

最近、この三月に開くと云はれてゐる第三次全國代表大會を控へて、汪兆銘を盟主とする第三黨建設の噂がかなりなシヨツクを諸方面に與へてゐるやうだが、そのプログラムを一瞥しても、國民黨の改組、民國十三年の共容改組時代の黨治精神恢復、聯俄、容共、農工扶助――などといふ、ヨツフエ＝ボロヂン＝孫文時代の支那を復活しようと、しきりに陳公博のやうな折衷派的才人は焦燥つてゐるらしい。

かういふ準共產派左翼に對抗するに、元老派、西山會議派、無政府主義者達は、吳稚暉や李石曾のやうなアナーキスティックな色彩の勝つた策士を動員して『農、工、商、學』の四社會府を聯結した政治地盤を獲得しようと力めてゐる。この二つのオポジッションのグループにしても、亦、中間に挾まつて、やや窮屈な恰好で政府を維持してゐる江蘇、浙江財閥の蔣介石一派も、一つの點で共通してゐることは事實である。卽ち前述のとほり、どれもどれも、孫文主義を正面に振り翳すといふ喜劇である。

何かの悶着で蔣介石が辭表を出すとなれば、きつとその流暢な文辭の中に、『孫總理の靈に賴つて』といふやうな文句が劈頭に出て來るに定まつてゐる。それから、又、左翼の靑年國民黨員が、蔣の右派との提手を難ずるにしても、『孫文主義の反逆者である』などと憤慨するのである。

支那は大家族主義であると云はれてゐるが、今の國民政府の主腦部の身元をちよつと洗つて見ても、孫文の遺族の多いことには一驚を喫せざるを得ない。第一に未亡人宋慶齡、次に彼女の妹を二度目の妻君にした蔣介石、それから孫文の妾腹の子である孫科、宋慶齡の弟である宋子文——かう云つた具合に、蔣介石は、所謂土豪劣紳が第一夫人からちよつと手をつけた女まで、同じ土塀の中に共同生活をさせるやうに、孫文の遺族をもつて嚴重な人垣を拵へてゐるのである。しかも、この人垣の中樞となつてゐる政府では、莫大な犧牲を(民衆から)拂つて、南京に中山道といふ大道を貫通しようと試み、五十萬元の豫算とかで、碧雲寺にある孫文の遺骸を三月八日までに昔の西太后の乘つた貴賓車を修理して南京の紫金山へ移し、一般民衆は、その日は脫帽最敬禮をして行列を迎へ、市中に半旗を掲げ、三十三發の禮砲を放つといふ、——誠に死せる孫文は正に帝王の待遇を受けようとしてゐる！

かういふ孫文偶像化の御祭り騷ぎを、あきれ返へつて見てゐたらしい、興中會當時の孫文の同僚である章太炎のやうな爺さんは、この間の上海招商局株主代表の宴會の席で、『孫文は支那の禍首である！』と罵倒したので、國民政府へ彼れの逮捕命令を願ひ出たものがあつたほどだ。

だが、章太炎も耄碌してゐることは疑を容れない。

現實の支那に於て、私の見るところでは、孫文ほどに彼れの存在を認められてゐないものはないのである。口に筆に、裝飾に書册に、スタンプ服裝のスタイルにまで應用されてゐる孫文主義は、實は『ボロヂンを俺だと思へ！』と遺言して死んだほんものの孫中山ではなくて、アメリカ人がいざといふ場合に持ち出す人道主義者アブラハム・リンコルンと同じ種類の、罪のない、革命的理論を持たない當時の孫文の幻影なのである。その點から云ふと、支那に於ける孫文は、到底、現在のところでは、ロシアに於けるレニンの比ではない。むしろ、ほんものの孫文の靈は、北平の碧雲寺などには眠つてゐないで、世界

資本主義の攻勢現狀を痛感しながら、未亡人宋慶齡といつしよに、今は外國を流浪してゐるのではなからうか。

蔣介石といふ人間は、可なり友情に厚い性質らしく、ついこの間も、孫文當時からの革命援助者としての宮崎民藏君が死んだ時、千弗からの慰弔金を出してゐるが、かういふことから押しても、彼れの恩師義兄に對する情誼については一點の批難をも容るべきではなからう。しかし、人情に富んでゐるといふことと、頭腦が明晰であるといふことは、時に一個人の併有しないことであつて、誰が考へてもわかりそうな、孫文の最近の遺志を斷行することが卽ち孫文を最も多く感謝することに該當するといふ明白な事實が、どうも彼には徹底しないらしい。階級鬪爭と民族鬪爭とを、車の兩輪とした成熟期の孫文主義は、今や國民政府側の總退却戰術によつて支那國家主義運動だけの標語となつてしまつた。甚だしい場合には、それは奇怪至極なる軍國主義思想にまで展開せんとする餘勢を示すのである。

民族鬪爭と階級鬪爭とが、しかく簡單に切り離し得べき有機的聯結であると判斷することが、すでに孫文主義から五步も十步も退却した妥協主義的解釋である。晩年の孫文は、無産階級を基礎とした鬪爭の展開によつて支那を革命し、その對外政策としてはアンテ・帝國主義の民族鬪爭を行はねばならぬといふ鐵のやうな意志を持つてゐた。その點、彼れの農工、聯俄、容共の戰術には、世界資本主義の現階梯に徹した深い洞察があつた。

どんなに今日の支那の中産商人やギルドが、『日貨排斥』を叫んでも、それが本質的な階級鬪爭の響きを伴はず、かへつて、自國の無産階級を壓迫するための道具に使はれるやうなボイコットならば、私達に、この敵本主義的ブルジョアジーに何の、、するところもないのである。甚しきにいたつては、劣貨抵制を叫ぶ當人が、大阪のゴム靴屋やマッチ會社へ、排日宣傳の標語を印刷した日本製品を、わざわざ註文して、世界の珍標本『排日成金』たらん（讀賣新聞十月十五日）とするなどとは、民族鬪爭の墮落も糞泥に委したと云はねばなるまい。

私は、ややもすると、日本の有識者の陷りたがる誤謬であるところの、

『蔣介石がファシスト化したのが悪いのだ。』

といふやうなことは云ひたくない。

それは組織にあるのである。今日曲がりなりにも成立した國民政府の政治的プログラムなるものが、果してどれほどの勞農階級の代表によつて討議され可決された結果であるかを見れば、その第一の過渡的失敗が判明しよう。國民黨全國代表大會が、果して孫文の意志を反映し農工を遺憾なく網羅した全國的代表制度であるか、どうか。勿論、さうでないことは昨年度に於て、青年部、婦人部、工人部、商民部などを廢したのでも判明する。『以黨治國』を標榜するといふ國民黨の支配を外にして、黨外黨在り、共産黨の存在は別としても、軍閥あり、官僚あり、茲に第三黨の出現をさへ見ようとしてゐて、蔣介石中心

の國民黨の地位はぐらついて行くとも決定し得ないといふ事實は、明かに、民黨が大急ぎで建てた、この厳めしげな三民主義、五權憲法の殿堂から離れようとしてゐることを暗示してゐるものでなくて何だらうか。

現在、國民政府法令の一になつてゐる、そして試驗的に九月七日北平特別市黨部指導委員會から發布された『共産黨人自首法』九ケ條といふ、モナコ警察が考へそうな法令は、その滑稽な存在そのものによつて如何に政府が己れを甘く見てゐるかが判明する。

『第一條　共産黨人未曾在共産黨執行重要職務並無暫行反革命治罪法第二條至第六條之犯罪爲於發覺前自首者得免除其刑。』

といふのが、其一項である。これによると支那では『反革命』といふものをロシアとは正反對な意味に使用してゐる。北平ではこの法令を向ふ一ケ月間の有効期間と定めたが、十月七日までに、定めし似而非共産黨員の一大悔い改めが起つたらうと、容想でもしたものに北平黨部があるだけであつて、事實は、北平を圓心として、猛烈な無産階級運動の擡頭を見て、今日に到つてゐるのである。孫文の像もここまでは睨みが利かない。

支那へ、レニンの寫眞を探がしに來たのではないから、私は、街に、書店に、インテリゲンツイアの書齋に、レニンの一枚の寫眞もないことを、すこしも悲しまない。

しかし、レニンの[illegible]

レニニズムに於り、、、、、、、、、、、、、、、。そして、今日、支那がやつと北伐軍敎兵といふ段取にまで彼自身を運び得たのは、疾にそのレニニズムのお蔭であるのを知つて居ると同時に、支那の無産階級の前衛がそのことを自覺してゐる事實を認めて私は滿足しよう。

徒らに一國の表面からレニンの寫眞を隱匿することも子供らしい虚僞であれば、それに代つて撒布される孫文の寫眞の裏に、レニンの思想が生きてゐたといふ事實を拒げることは更らに更らに自己欺瞞の骨頂でなければならない。しかも、私には、その孫文の寫眞でさへもがボロヂンと同じ失望をもつて、何か爵勃とした不滿に唇を尖がらして、後輩を叱咤したげに現實の支那を俯瞰してゐるやうに見えるのである。

11　貧乏

支那人の貧乏は、エレメンタルで、絶對的である。

富の不平均分配を自覺しなければしないほど、彼等の貧困には原始的な峻厳性があるのである。

彼等の貧窮状態は、私達の周圍に絶え間なき灰色の蠢動と、器具を引掻く音と、悲鳴に似た喧騒となつて、その暗い水溜を示してゐる。

私の窓の下の塵埃箱は、午前中の二時間内に十七人の襤褸を着た男女によつて、曾て食物であつた固形物の最後の殘片まで攫はれて行つた[illegible]

大通りに、誤つて世界で一番單位の低くい銅片一個を飯碗の上へ落とすと、十四五人の苦力が、音を聽きつけて闇の中で爭つた。總じて、街の中を、しかも循環的に同じ街へ五遍も六遍も、精一杯の觸れ聲で何かを賣りに來る行商人があるから、何をあんなに大聲で賣つて歩くのだらうと不審がつて見ると、小笊に半分ほどの南京豆であつたり、生オリーヴの果であつたり、一荷の豆腐を一日持ち廻はつたりするのである。市內の目貫きの場內に設けられた共同便所の入口には、客の這入つて來るのを待つて、落し紙を鬻いでゐる商人がゐる。試みに銅片一箇差し出すと、彼は最下等のすきがへしを一枚私の手へ渡した。上海の街路には、よつほどどうかした拍子でないと、シガレットの吸ひ差しは落ちてゐない。それは工部局の赤い星の中に S. M. C. と染め拔いた市街掃除夫が箒で掃き去るからではない。生れて齒磨といふものを使つたことのなさそうな人物が、ボール箱や古鑵を持つて、丹念に葉巻や巻煙草の切れつばしを採取して歩るくからである。これらの煙草の殘片にも商品價値がつくといふ話であるが、不幸にして、その取引は目擊してゐない。大馬路と云へば、稍殖民地式なニユー・ヨークの第五街であるが、そこでしきりに古るいブリキ鑵から手摑みで何かを食つてゐる婆さんがあるので、立停まつて見ると、洗ひさらしの殘飯を歩るきながら食つてゐるのである。これが『申報』や『民國日報』を賣つてゐる新聞賣子であつた。

北四川路裏通りへかけての淫賣窟を見て歸へつた途中、ごろた石の上へ、松脂を使つてゐる蓄音機のやうに聲をおこさせた人力車の蓆があつたので、ちよつとステッキの尖端で捲くりあげて見ると、寒むそうな廣東語がいきなり私を罵倒した。更らに乍浦路に新築中の店先の、掘りかへしたばかりのじくじくした地面に、每晚同じ場所へ同じ恰好をして寢てゐる人物がある。その二三間先には、これも每晚同じやうな恰好した巡査が交通整理兼見張りをして立つてゐる。巡査はその男を知らない。その男も巡査を氣に留めない。支那には、浮浪罪などといふ有難い法律はないのである。大概の車を挽く苦力は、夜具に該當するぬのこを常に携帶して勞働に從事してゐる。

これらは個人の貧乏ではない。相對的な貧乏ではない。社會を横斷した集團の窒息させるやうな貧困である。人間といふ自覺をもつた動物が、一旦社會生活を營みかけて、再び動物に還元しかかつてゐる時の貧困の種々相である。これは、たしかに後戻りである。かういふ貧乏の各形體を見てゐても、私達には即座に、用意して置いたやうな涙がこぼれない。涙は苦痛の最初の表現ではあり得ない。——私達は、ぐいぐい思索の上を、強い手で絞めつけられるだけである。呆然として、その恐ろしさに戰慄するのみである。

もし、『ノース・チャイナ・デリー・ニュース』の特派記者の叙述にして誤りないものであつたならば、北方支那にはこんなことがある。——

——

『…過去三ケ月間(一九二八年九・十・十一月間)、山東と吉林省との

間の最も非道い地方を視察してゐる日分には、たしかに飢饉と窮乏とが白晝この地方を横行してゐるのを知り得たと斷言出來る。一日、一ケ村から二十人の女と娘の子が遠方へ歩るいて行つた。皆賣られに行つたのである。その大部分は人妻となるので、一人四弗から四十弗位の相場である。子供達、ことに女の子は、一袋の穀物と取引され、時には無料で提供される。……この春のひでりが、飢饉の第一原因であつた。それに次から次へと厄災が來た。退却する軍隊もあつた、進軍する軍隊もあつた、彼等はあらん限りの食物を徴收した。税金は日に益々重くなるばかりか、他の名目でも加はつて行つた。次には、蝗の大軍である。……民家の木材や戸や窓は、時に一室について五弗から八弗に賣り拂はれ、その金は天津や山西地方、滿洲方面への移住費に宛てられた。過去數ケ月間に、何萬となく農民は出て行つた。土地は殆どどこでも買手がつかず、自作小農に高い税を拂つて持つてゐるよりも先祖傳來の田畑を捨てた方が良いと考へるやうになつた。……食物代用となつてゐる物はもみがらであるが、これが缺乏して高價を呼んでゐる。その他、あらゆる木の葉を乾したのや鋸屑などが使用されてゐる。……」

もう一つの邦字新聞にはかういふ話が出てゐる。また二た月とは經つてゐない記事だ。

「……夜間は此等避難民が哭喊號叫し慘狀は目もあてられない。其他[illegible]を賣り子を賣つて一家路傍で泣いてゐる者である。隣縣では此種賣買が一日十件以上あるそうで、官憲も取締りに手を束ねてゐる。包頭停車場に下車した時も老幼の男女四五人が相抱いて泣いてゐるのを目撃したが、聞けば妻を山西南關に賣つて了ひ殘つてゐる者は何も食べず四歳の子供が泣いて仕方なく途方に暮れてゐるのだと——云々。」

これらの飢ゑた民衆の上には、今や北部中部支那へかけて、百萬の家畜群のスタムペードのやうな、一大移動が行はれてゐる。それは、食を求める夥しい集團の流れである。じつとして、村落に坐つてゐると、誰かが不意に襲つて來て、自分の食糧を食はれてしまふのが恐ろしいために、ちりぢりに逃走した饑民が、やつと弱い者同志手をつなぎ合ふて、都會へ都會へと雪崩落ちる『餓死』のパノラマである。その間、家族制度は、行列の重みに押ひしがれて跡形もなくなつてしまふ。國家、政府などといふものはどこにあるか、そんなことも問題ではない。土を掘り、草の根を探つて最後まで生き殘つた人間が、南京に着き、ほかの都會へ這入る。北伐戰爭のあさましい裏面史として、久しいことこの物淒い行列が支那にはつづいてゐる。

その一部が、たうとう、或る日、私の窓の下へ到着した。

その日、私は、窓の下の平和な役町に、大の男のわんわん泣き叫ぶ聲を耳にした。それは大勢の支那人の叫喚がさうであるやうに、頗る動物的な聲であると共に——もつとほかの聲でもあつた[illegible]

すこし[illegible]に投つて置いた。しかし、もつとも耳障りになるのに子供の泣き聲であつた。私は窓を開いた。

袋町の支那人が四五人立つて見てゐる。貪食と饒舌に肥つた、醜い近所の女房どもである。髪をぐるぐる卷きにして、見られてゐるものは、藁の包みに腰を掛けて大聲で泣いてゐる父親と、すこし離れて、壁にもたれながら乳呑兒を抱いてゐる母親らしい女と、もう一つの町角に、これも乳呑兒を抱いた前記の女の妹らしい女とである。年上の女の前には二人の男女の子供が、壁を向いてわいわい悲鳴をあげてゐた。

と、男の子と娘とは、坐つてゐた場所を放れて、ころころと石の上を轉がりはじめた。男の子も娘も、腹を撫でては犬ころのやうに轉がつて泣いた。しきりに母親に何かを訴へてゐるのである。それを見ながら、母親も、周圍の見物人に大聲で訴へるのであつた。が、周圍の小市民達は、支那語がわからない人種のやうに默りこくつて、この一家族を瞶めてゐるのである。

彼等はたしかに穢なかつた。彼等の姿には、長途の旅の痕跡があつた。上衣はどれもどれも泥と垢とで錆びた襤褸船の底のやうだつた。そして一家の財産と思はれる藁包は、何が這入つてゐるのかを理解しなくとも推察の出來そうな屑にちがひなかつた。

支那語のわからない私の方がつい動かされてしまつた。私は金網の[illegible]たつた。一昨年の暴動以來[illegible]てゐる譯である。仕方がないので、有りつたけの銅片を摑んで、窓の下のやつと銅貨が通過するほどの隙間から、一つづつ彈き落した。鋪石の上に銅片の音を最初に聽きつけたのは、母親であつた。走り寄るなり、彼女は兩手を合はして私を拜んだ。

私は生れてはじめて他人に拜まれたのに苦笑しながらも、ありつたけの銅貨を投らないわけには行かなかつた。子供達は小鬼のやうに飛んで廻つた。父親も立つた。若い女も窓の下へ歩み寄つた。急に、私の窓が重要性を帶びて來た時に——私の銅片はもうなくなつてゐた。

私は窓を締め切つた。數分間の後に、そつと外を覗ふと、近所のワンタン屋から借りて來たものらしい茶碗で、一家族が一碗づつの麵を啜つてゐるのを見た。私は、心から氣の毒になつた。しかし、これ以上私は慈善といふことを信じないのである。

これらの一家族が職業的乞食でなかつた證據には、彼等は再び窓の下へ姿を見せなかつたことでも判明しよう。

かういふ地方貧民の移動の裏に、不可解とされてゐる支那のいろいろな現象が横はる。それらが、土匪となり、海賊となり、人攫ひ團となり、掠奪となり、又、それらの自然發生的叛逆が一つの目的意識的運動の下に結びつけられた場合には、もう遲いのである。

12 『打倒』の二字

商業主義本能の發達してゐる支那人は、最も良く他人の同じ本能を直感し、理解する民衆である。

彼等ほどすべての所有品に商品價値を發見するものがない。そして、その發見を他人に知らせる場合には、どんな努力をもいとはないのである。その點に於て、私は、世界に最も支那人と共通した國民性を、アメリカ人に認めるのである。

かういふ國民性の反映として、廣告術の發達してゐることは否めない事實である。廣告術の發達といふ反面には、廣告をまに受ける民衆の存在が背景になつてゐることは云ふまでもなからう。

北平でも、南京でも、上海でも、廣東でも——苟くも、支那人獨自の商取引を營むでゐる大都會の支那城内へ這入ると、私達は、東京なら東京の、年に一度か二度行はるる年の暮れや中元の、町内聯合大賣出しと云つたやうな光景を、のべつに目撃するのである。

さういふ光景は、無數の赤い、袖幅の半分ほどもある屋號や商品や營業品目を書きつらねた大旗の波と、龍跳り虎搏つと云つた、半分かた繪になつてゐる文字で書かれた大看板、提灯、小看板の配列や、出來るだけ人目を奪はうとするきらびやかな飾りつけ、家の構造、電燈の發光などによつて道具立てられてゐる。しかも、[illegible]の商品の[illegible]し[illegible]人によつて、それ[illegible]タン・シティには、無數のローマ字の螺旋形的組合せを見せてゐるのみならず、一種のアメリカニズムの直輸入であると同時に、廣告術の自然な發展形態として、あらゆる佻い女の繪や、モダーン・ボーイと現在の支那人が思惟する種類の、糸瓜のつるにぶら下がつて生えてゐそうな青白い資本主義の寄生蟲然たる青年の顔などが、ペンキで塗り出されてゐるのである。

これらに、數限りもない、[illegible]の高くない人間の洪水と、會話觸れ商業交際の一大騒音團を加へ、甚だしいヘットや揚げ物の臭ひ、[illegible]を作らせるほどの屎臭とを與へれば、典型的な支那街の『覗き眼鏡』が出來るわけである。しかも、この繪に、例の銅片のかしましい音樂を[illegible]にしないと、完全なものとは云はれない。

如上の、比較的平和な古代的に紛沓した光景に、私達は、ただ二つの支那文字を見出すことによつて、俄然、その全情景を近代化することが出來るのである。

その二つの文字とは、……『打倒』の二字である。

新しく進出した新興の廣告にも『打倒』の二字がある。私の知人の或る者は、五卅事件以來街に描かれた傳單の各種類を蒐めてゐるが、それらを一瞥すると、その殆と大部分が『打倒』何々といふ文字で始まつてゐる。又、一部分の掲示ポスターなるものにも、いかにも『××』なとといふ、[illegible]

「打倒[illegible]中國[illegible]、、、」

と書いてあつたり、その他、

『打倒日本帝國主義。』

『打倒小日本』

などといふ文句はざらにあるのである。

しかも、最近、やつと中江兆民時代ほどの科學研究熱が民間に流布されてゐる傾向を裏書きするかの如く、一種の迷信打破運動が民間に起つて、この十二月十日の『時事新報』（支那新聞）の如きは『打倒泥菩薩』と題した小論文で『泥塑木雕、牛蛇鬼神、姸媸不一的這種偶像』の破壞を叫ぶのにも『打倒』の文字を使驅してゐる。

ひと頃、日本の『無産者新聞』が、盛んに『打倒』の文字と、『！』マークを、軍艦のリベットのやうに使用したものであつたが、私は、支那の都會へ來て、いろいろな意味に場合に、又、ちがつた政治的立場から、この二字が使用されてゐるのを見て、日本のやうに一本調子に無産階級運動者だけがそれを占有してゐるのでないことを知つた。

例へば、ブルジョア化しつつある國民革命軍の膝元の南京の大通りには、殆ど揚子江にある英日米の軍艦からさへも見えそうな大文字で、比較的大きい一軒の家の壁へ、

『打倒、徐謙、鄧演達』

と横書きに書いてあるのなどは、如何に、徐謙や鄧演達のやうなコムミユニストによつて『打倒』さるべき筈の政府が、謂はば反對の立[illegible]か[illegible]何等を一打倒[illegible]してゐるか[illegible]。

實際、この『打倒』の二字は、近代の支那人には一種異樣な新感覺を伴つて響く文字らしく、何か言葉そのものに既に新時代の民族鬪爭の戰術が傾向づけられてでもゐるかのやうな宣傳性を持つてゐるのである。しかも、元來が商業主義に長い歷史の間訓練されて來た民衆だけあつて、かういふ華やかな文字で、無理に日本のコムミユニストの一部が會て、『鬪ひ取れ！』とか、『勞働者農民の政府を作れ！』とかいふ命令的な、いかにも高い處から民衆を指揮してゐるやうな、權柄づくな呼び掛けをしたのとはちがつて、

『同胞快醒！』

『同胞快來救國！』

などと、より親しみを含んだ文句で煽動された時には、堪らぬほど、一種團結の氣持が鼓舞されるものらしい。そして、感情的なクランシツプを持つことに於て、支那人は日本人をも遙かに凌駕してゐるやうに見える。

宣傳の利く民衆――このまがうべくもない一特性の爲に、私達は、車賃が足らぬと云つて大聲で通行人一般に演說的アッピールをしてゐる苦力から、五九記念日に租界の奧深くまで侵入して排英排日貨の傳單やパンフレットを撒いて潮のやうに引上げてしまふ學生隊にいたるまで、あらゆる支那人社會の民衆運動を織り成す、群集心理的諸現象を發見する。

つひこの間、友人K――の住んでゐる餘慶坊といふ小汚い街を訪問した時、私は、實彈を籠めたライフルを肩にした二人の警官が、その袋町の入口を警備してゐるのを稍ものものしく感じたのであつたが、ものの十五分間も知人と談して歸へりしなに、何氣なくそこの重い扉を押して外へ出ると、十五分時前には何も書いてなかつた黒い扉の上に、

『打倒帝國主義。』

と、白墨で走り書きしてあるのを讀んだのである。

そこには、別に物々しい便衣隊が飛躍してゐたわけではないが、一見、苦力らしい淺葱の襤褸を着た、垢だらけな青年が、私達の一行をじろじろ見送つてゐるきりであつた。

それから電車通りを三丁ほど歩るいてゐると、次には、

『打倒蔣介石。』

『打倒國民政府。』

といふ二聯の句が、べつべつな電柱へ、やはり白墨で走り書きしてあつたのを目撃した。

かうして、新聞では譚平山が何處にゐるの、陳友仁がボローヂンと茶行商人に化けて這入つて來たの――と、大部分は、出鱈目の模索をやつてゐる際に、無名の青年や苦力達が、南京政府が軍隊にまで使用する『打倒』の二字を、逆に、南京政府へむかつて使用するやうにな

この鬪爭は、端的に『打倒』の文字の使ひ分けだけに終るだらうか……？

13　階級列車

支那の鐵道で旅をした人は、誰しも、まつ黒な、監獄をそのままレールの上へ引摺り出したやうな、奇怪な貨車の列を見るであらう。

それが何であるかを、私達は、赤と金筋の這入つた帽子の下に動いてゐる驛長に訊ねる必要はない。何故となれば、貧民を輕蔑することに何の躊躇をも感じない支那の鐵道局では、どこからでも見えるやうに、車體の兩側に、大きい文字で『貧民小工車』、『四等車』と書いてあるから。

この『貧民小工車』は、日本の等級で云へば該當する客車のない車で、日本の三等が混むやうな、生やさしい混み方ではないのである。

その紛沓の狀態がまた殊の外支那的である。最も非科學的に發賣される切符の總數に應じて、乘車定員數の何倍もの客が、押すな、押すなで詰め掛ける必要上、客席といふものはわざと忘却されてあつて、正當な乘車賃を拂つた苦工貧農及びその家族は、めいめいの足と肱とを椅子や肱突の代用にして、目的地點まで運ばれなければならないのである。卷煙草の箱を拵へるにも、十本入なら十本、二十本入なら二十本と、横から一本づつの煙草が一定の密度を求めて相互に密接

け、[illegible]に、乘客の數や手荷物などは度外視して、辛うじて客車の外觀を保たうと努力してゐるのである。――そこに、鐵道局と乘客、乘客と乘客、乘客の衛生狀態乃至は思想形態に、ごく自然な內訌が生じることは免れ得ない。

支那の群集の特質は、やたらに唾を吐き、手鼻をかむことである。かうして口腔と鼻腔の粘液の一部を排出した彼等が、思ふさま空氣を吸入して、頭に泛んだ事柄をすぐ放言することである。自由な會話は、話術を補助するための手、殊に指尖の運動を伴ふ。また、それらの活動を終熄してゐる時には、必ず、その當人は、葡萄色の味付豆腐やら、蜜柑、燒餅、南京豆、丸るいおこしなどを食つてゐるか、それとも、どんなかのポーズを作つて居眠りしてゐる場合である。

これら諸範疇に屬するいづれもの活動や休止を阻害するものに、國民政府がある。

私の乘つた滬寧鐵路六百十里(支那里)は、英國借款三百十五萬ポンドによつて起工された(國民政府側發表、一九二九年版『新國民年鑑』による)鐵道で、その實、缺損だらけなので、利權回收の後支那政府が經營してゐるものである。だから、この國營鐵道の客車が、老人の吐瀉物にまみれてゐたり、糞尿臊臭手鼻唾液が流れてゐたり、赤ん坊が悲鳴を擧げ、娘が青くなつてゐたりしたところが、それは鐵道を利用することを知らぬ民衆の無智が、政府の鐵道に缺損をさせてゐ[illegible]るために、この自動監獄を製造したのが悪るいのである、

私は、孫文が鐵道十萬哩、車道百萬哩計劃を抱懷してゐたといふことを聞いてゐる。現在の支那には、六千八百三十六里の鐵道しかないのである。同じ里數で行けば、日本のやうな狹小國にも、八千四百三十八里の鐵道が在る。この孫文の途方もない計畫を、孫文の哲嗣である行政院鐵道部長孫科君などは、不可能事として嗤ふかも知れない。しかし、昨年の六月三日、津浦鐵道で徐州から南京へ歸つた蔣總司令が、特別列車十八輛をモノポライズしたやうな威勢なら、少しぐらゐの軍事行動を差し控へても、十萬哩は後廻しにして良いとして、先づ、この『貧民小工事』だけは廢止してもよからうと思はれる。

このうす汚い、移動監獄のやうな火車こそは、實に、私財を蓄へるに汲々乎としてゐる支那の新興資本主義政治家達の、直接民衆に投げつける階級反目の好適例であるのである。

しかも、最も皮肉なことには、沿線の崑山驛の如きは、電柱にこんな宣傳を塗りこくつて、民心を革めようとしてゐる。

『革命先從自身革起』

14 迷路

上海の表通りだけを眺めることは、決して現實の支那を知ることではない。

…は、表通りといふものは、或る友人から聞いた話の、北京政府の役人で百五十元の月給を貰つてゐて、ホテルに月百六十元の妾を圍つて置き、自分は貸間に棲んでゐて、客が來ると美裝して妾の前で應對して見せる——と云つた種類の支那人のやうに、一面非常に華かでリズミカルでさへあるのだが、そこには不平等條約國的僞善の發達した官吏、軍人、ブローカア、買辦などの二重生活層が發見されるだけで、時には、全然私達の興味を離れることすらある。

上海の錢莊や兩替屋の銀貨の音を聞いてゐた耳を、直ちに十六舗や、小沙渡や、楊樹浦邊の裏町の迷路へ移すときに、はじめて、私達は、支那人の物音を聞くのである。

私は、或る日、例の無目的に疾走する車夫君に誘拐されて、上海の中心へ行くべきところを、上海とは正反對な、むしろ大陌方面にむかつた地位に飛んでゐる自分を見出したのであつた。そこは、もう已に都會といふ區域を遥かに離れてしまつて、狭い一本路が、ガボリオの小説に出て來る、怪しげな村落のやうな物にまつ直に滑り込んでゐたのである。

きまり切つて、かういふ郊外の村には、支那風に兩端を撮みあげて、無愛の細瓣を敷いた城門があり、その城壁に圍まれて、一村落が古風な生存を營んでゐるのであるが、その雨や風に曝れた城壁に、監獄のキールより汚くしみついてゐる一種の破れ[illegible]に溶れきつた、原始生活のまん中へ黄包子を曳入れてしまつたのである。

街幅と云へば、わづかに細くなつて行くばかりの六——五——四尺ぐらゐの、建築と建築とに壓迫された、無責任な空間の放置にしか過ぎない。

だんだん行つてゐるうちに、私は道に恐ろしくなつて、車夫君を體力をもつて引留めざるを得なくなつた。それも、この場合、出來るだけ周圍に氣取られぬやうに賃銀を拂つて、そつと降りなければならぬのである。——眼、眼、眼、よごれた炭坑夫のやうな無數の顔に、眼だけが光つて、この私を四方八方から瞶めてゐるのである。

突然と、戸口から飛び出すものがある。十二月に素裸になつた子供である。その母親の逞しい腕がぬう——ッと私の鼻先に突出されて、子供を背後から抱き取る。灰を被つたやうな蓬髪である。容易に腕づくにはならぬ支那人同志の喧嘩が、賣湯屋の店先や、何かしらがんがん打敲いて踏へてゐるまつ黒な店の中に、怒濤のやうな捲きかへしを起こしてゐる。そこには、擴げられた五本の指や、小刀で截るやうな手や、折曲げられた黒い腕や、銅色の脛などが、はげしい摩擦動を營んで揉み合つてゐる。店と店との間には、すべての廢物が灰まみれになり、水に浸つてうづ高く列んでゐる。それらを踏んで、殆ど足跡 [illegible]

にも止めようとはしないでゐる。

しかも、一度、彼等の視線が、全然異分子であるところの私の上に留まつた刹那、そこには、野獸の間の敵意のやうな沈默が、漸次に擴がつて行くのである。

その私は、古物のレーン・コートを着てゐる。ヴエロアの帽子を被つてゐる。一圓強のステッキを突いてゐる。白みがかつた服に、靴を穿いてゐる。いかにも、この悽慘な背景の前には、文明人の服裝をした日本人である。

暫らくあつけらかんと開かれた男の口から、一語二語、何かの知らせめいた早口が飛ばされる。無表情な顏が、懶げにこちらを見て、鋭く眼で私の全身を捜査する。その眼は、不思議な吸引力を持つて、私の體につけた金目の物全部を吸ひ取るやうに思へる。そして、その間、不穩な舌尖だけの言葉が、群衆の間を、めらめらと燃え移つて行くのである。……

かういふ道路の上に、無數の汚い襤褸を乾した姿がある。その姿は、今にも崩れ落ちんばかりの、あらゆるがらくたを堆積した信用の出來ない支那家屋によつて挾まれてゐる。行く先にも、同じ種類の街が枯れ葉の破片のやうに散らばつてゐる。そこにも惡鬼羅刹のやうな姿をした、夥しい村民の群が、右往左往して騒いでゐる。この村は、何の理窟もなしに、富の平均分布を面に發表してゐるのだ。銅鑼が鳴る。銅鑼の音は、私は、今汚い高い城壁に圍まれてゐるのだといふ自覺を起こさせた。私は、急いで、今[illegible]ばかりの[illegible]の後を追ふた——。

15 芝居と活動

支那の芝居では、役者がカーペットの上へ手洟をかみ、唾を吐く、一とくぎり歌曲を唱ひすますと、くるりと背景の方を向いて、舞臺方の持つて來るお茶を飲む。時には、その長い袖で顏を掩ふて、茶を土瓶や鐵瓶の口から啜る。

よく百官やお姫様が、眼上の前で跪く時には、舞臺方は一尺四方ぐらゐの蒲團を投る。黄ろい塵埃がぱつと揚がる。それを終ると、役者が舞臺方へ蒲團を投りかへす。同じく狼火のやうな黄煙が揚がる。舞臺方は、すぱすぱ煙草を喫ひながら、小蒲團をもとの場所へ積み直ねる。

オーケストラ、或ひは下座は、便衣隊の小班を舞臺の隅へ屯させたやうなものだ。一定の音律に從ひ、歌曲や歌謠の相方となつてゐるにはちがひないが、私達には、一見、各人各様に、自分の持つてゐる樂器から最高調の音響を出そうと競爭してゐるやうにしか思へない。ただ、ずぶの素人である私達にも、響の音の冴えた妙技と、日本ではワンタン屋の專有であるチャルメラが特種の役割を果してゐるといふことだけはわかる。鼓弓のむづかしさも推察に出來る。

私は、榮記大舞臺と天蟾舞臺とを見た。大世界の落成式は、殆ど

通りして、望樓から青、黃、ピンク、黒の娘々が、階下に點々として客を引いてゐる光景を見たに過ぎない。

双方の舞臺ともに、一幕物ばかりを出してゐたマチネーの日にぶつかつた。小楊月樓だとか、麒麟童だとか、孟麗君だとか、高百歲だとか、梅蘭芳だとか——名代の出場を心得て『通』になつても仕方がないので、私は、むしろその奇々怪々な隈取りなどを見てゐるのである。

最初は假面をかぶつてゐるものと思ひ込んでゐた、黒、白、赤に塗り潰された顔や、多數の人間の顔を描き込んだ顔などが、實はいくらも手の込んでゐない隈取り術の起こす幻覺作用があるのを知るにつれて、かういふクラシシズムの名によつて謳はれてゐる、支那の民衆藝術に於ける英雄崇拜主義や、封建思想や、硬化した倫理觀などが、どんなにその民間に於ける官能主義、神秘主義と結びついて荒唐な藝術を無雜作に卽現するやうになつたかを思はざるを得なかつた。ごく稀な場合以外には、女主人公及び女性の役割はこの隈取りを適用しないことなども、古い支那の貴族主義が生んだ性の高調のための藝術である所爲ではなからうか？

次には衣裳である。私は、こんな種類の衣裳を着流してゐる支那の現代人があつたなら、彼に張作霖といつしよに斃死しても差支ないと思つた。これに、豪奢なる封建制度の服飾術である。

ウルトラ・オリエンタルな歌の節廻しも、わづかに一脈西洋のオペラに似通つた點を樣式上に拾ふとして、勿論現在の新しい支那には濟度し難い宿文化である。殊に、女優などが、あざとくも看客に媚を呈してゐるしなや眸は、げばりと支那の都會民の間に於ける性慾生活を解剖して見せる。その濃艶さには豚の脂肪がこべりついてゐる。

最後に、立廻りである。私の觀た俳優では、黃小樓と麒麟童との二男優が、支那流な頗る凝つた武術まがひの殺陣を見せて呉れたが、かういふ半曲藝式な技術に於ては、日本にはその比を見るものがない。村松梢風君と南京へやつて來た、歐陽予倩君は現代支那一流の新進俳優であるが、同君のやうな人でさへも、やはり最初はかう云つた體のこなしや、模擬武術や、高蹈術を習得する必要に迫まられたさうである。實際、見てゐると冷汗の出さうな際どい藝當をやる。——柔道の岩石落とした云つたやうに、手下の軍兵を小ひどく舞臺面へ敲きつけたなと思ふと、棒や青龍刀を一秒時に二十回も廻轉させるほどの早業をして、やはり科をつづけてゐる。一度アメリカで、極度のダイナミズムをダンスの上で發揮する黒人の藝人を見て感服したことがあるが、支那の立廻りもたしかに、人間の成就し得る最極限度の動きによつて、

『好！好！』

[illegible]

て、支那側の劇[illegible]へ、二人の[illegible]に連れられて行つた。田君は、拙作『盗人』を舞臺に掛けると云ふので、半ば好奇心に驅られても居つたのであつたが、時間がないのでその方は夜へ廻はされた。『白茶』、『生之意志』、『湖上的悲劇』といふ三つとも田君の譯したり創作したりした一幕物であつて、筋もきちんと通つてゐたし、俳優の表情もかなり西洋化したものであつた。『生之意志』はロシア物の換骨脫胎で、屠格涅夫の『父と子』からヒントを得た作だと斷り書きがしてあつた。

舊劇や廣東劇が蒸汽機關と支那菜館を合併したやうなものなら、これは、また、何と靜かな、低聲の、配光の寫眞的な、心理葛藤をのみ主題とした劇ぞ。——私は、支那へ來て須磨子時代へ逆戾りしなければならないのか？ 取扱つてゐるテーマが自然主義的であると同時に、俳優のしぐさも科白廻はしも、その當時の藝術座を髣髴させるものである。しかし、同時にかうも考へられる。これは決して、演出者作者舞臺監督の一切を兼任して活動してゐる田君だけのせいではない、たしかに何かの反動である、と。

長期の、極度の動亂を通過した支那の一部は、今すこしじつとして考へて見たいのだ。ただ、どういふ風に考へるか——それに迷つてゐるにちがひない。一概に政府はマルクス主義を排し、コムミユニズム運動を焚殺してしまつた。インテリゲンツイアは、闇に手を伸べて自[illegible]

[illegible]の藝術を生む[illegible]

飾り出すまでに、民衆は××のヘゲモニーを把握してはゐないのだ。

かういふ劇運動の一面を見た眼で、私は最近の支那に於て、異常な浸潤性を有つ活動寫眞を見る。これは極端なアメリカニズムである。接吻の場面が（今度國民政府に檢閲を開始して取締るさうである）映出されると、看客席の不良外人、不良支那人男女は、わいわい云つて喝采する。そして主題は、例によつて、金持のお嬢さんを中心とする、千遍一律な監督のメガフオーンから生れるブルジョア道德感であり快樂主義である。したがつて、陰鬱な鈍感性を持ち、快活に笑ふことの嫌いな支那人に、かういふ淺薄な樂天主義や滑稽の爲めの滑稽が欣ばれてゐる、といふ半面を私達は見逃がしたくはない。今日の支那のモ・ガやモ・ボは、解放の第一歩を先づこの弗萬能の溫床に運んでゐるのである。

最後に、支那の活動寫眞であるが——これは、到底、その惡るい奴に掛つたら、荒唐無稽で御話にならない場合が多い。やたらに拳鬪術や棒使ひや魔術などを織ませた、『猿飛佐助』流な武勇傳へ、『名金』時代の惡漢追跡、御家騷動の境界線に低迷してゐるものの傍らには、その筋の宣傳物らしい中山帽を着た快男子が軍閥と爭ふなどといふ長発物が多い。ただ一つ、伊藤博文を暗殺した朝鮮人の一生を仕組んだ活動は、かなり面白い物であつたといふ話であるが、不幸にして是れは

見はぐつてしまつた。

16 外國人

『英國人も近頃はよくなりましたね、』

『何しろ、沙面事件以來、漢口でもやられてゐますし、多少、支那の民衆運動の根强いのには閉口したでせうからね。』

『今度は米國人ですよ。國民政府ぢやア今年から大々的に排日運動を起こすそうですが、内々アメリカの金が随分と廻つてるらしいですな？』

『さアかういふ事は、その道へ這入つて見ないとわかりませんが——それよりも今後支那で勢力を張るのはドイツ人だと思ひますがね。どうです、この上海での商賣振りは！質實で、執拗く、支那人の氣持をよく迎へてやつてる半永久策——あれにア道がのアメリカ人も敵はんらしいですな。』

『……ともかく支那は諸外國の勢力の渦卷と云つた感じですね。』

これとそつくりた對話は、總領事館の應接間から、クラブの喫煙室、それから甘くない長崎所輸入の食物を澤山の小さな器物へ入れて持ち運んで來る習慣の、日本料理屋の濡れた飾臺の上にまで、ちがつた口吻で遣取りされるのが、上海の日本人間のごくまじめな一面である。それほど、日本人は外國人に對する關心を持つべく餘儀なくされてゐるのである。

私達も、速製上海觀を拵へるために、良くさういふ場合に列席して見る。なるほど、一應のコスモポリタニズムの浸潤は感得されるのであるが、さてかういふ實生活から餘儀なくされた批判や評判には、何かしら間の抜けたものがある。それは、支那で朝日麥酒と呼ばれる朝日ビールが、どことなく日本臭いと同じ程度の『Made in Japan』臭を伴つてゐる。——つまり、支那に於ける外國人のことを云ふ日本人は、支那人の立場から云はずに、日本人乃至は日本の國家主義的見地からだけそれを云ふからである。

この間、日勞黨のN——君といつしよにバスへ乘つてゐたとき、私は不意に質問ともつかぬこんなことを云ひ出した。

『多少外國に滯在してゐた加減で、僕なぞはさほどでもないですが、かう云つた光景に接すると、普通の日本人が日の丸の下に塊まらうとする心理は理解出來ないこともありませんね。……』

恰ど二人はエドワード七世路を佛租界へと走つてゐたのである。N——君は、沈々と答へた。

『——さうです、私なども、もとはそんな氣持になつたものです。しかし、上海へは七八遍も來て、今は慣れてゐますからね。』

普通の場合の日本人で、『Chinese Puzzle』を著はした漢口事件當時のアーサア・ランソム君ほどの、リベラリズムを發揮することが困難であるとすれば、それは、漢口事件當時に於ては、總ち生え抜きのジ

[illegible]

いては、日支双方とも考へてゐる。考へてゐる場合にには、幾部分の公平さが双方にあましてゐる。その意味で、外國人をも、支那人をも、私達は見なほしてゐるのである。したが、リベラリズムは國家主義思想のアンチ・ドートではない。それは殘るのである。根底には、いつも汎日本的な外國人觀が蟠まる。

かういふ見方は、非常に煩雜で神秘的で、人間を神經衰弱にさせずには置かない。もつと簡單な見方がありさうなものだ。尠くとも、暫定的に、支那人の眼から外國人を見てみよう。――

最近、支那に永らくゐるアメリカの新聞記者が、自費で『Shanghai Nights』といふ長編小説を、ノオス・チヤイナ・デリー・ニュース社から出版した。勿論、匿名であるが、著者はタスマン・アイルといふ名を使つてゐる。もし私が、郁達夫のやうな支那人であつて、この本を一讀したとするなら、どんな考へを持つだらうか？　幸ひにして、この間會つた時、郁君は讀んでゐないと云つてゐたから、讀まぬことを勵めて置いた。

この小説には何が書いてあるかを説明することは、餘りにも原著者を侮辱することにならうから省くとして、第一に考へさせられることは、永住してゐるアメリカのインテリゲンツイアが、支那人の生活については全然無智であり、また、無智であることに矜負を感ずるやうな智識的頽廢者であることである。この著者に從へば、滿目の支那人口は悉く色情狂であり、陰謀團であり、盜賊であり、密輸入者であ

る。この不思議なアメリカ新聞記者に[illegible]理生活を營み、支那人を奴隷化する心理活動に慣れてゐるといふことになる。そして、このだらしない、アメリカ人と支那人との混血兒である『ニア』とかいふ娘を中心とした性慾生活の下手な敍述と描寫とが、本屋ケレー・アンド・ウオルシユに於て、四弗で賣られてゐる！

上海ナイツ！

これが、典型的な外國人の上海に於ける生活の一面であることに氣がついた私は、やつと、その四弗も高くはないと、自分にむかつて云ひなだめたのであつた。實際、曲がりなりにも『お菊夫人』の方が、より多く日本らしい。全然、支那に來て、支那の無産階級の膏血を絞つてゐるアメリカ人の大部分は、支那と支那人とを知らうと思はないのである。特殊に支那に興味を持つ學者や社會事業家はある。しかしさういふ專門家は、經濟戰の第一戰に立つて、支那人を籠絡してゐる資本家の手先ではないのである。むしろ、さういふ人達は、英國艦隊が長江一帶に大砲の柵を作つたときに、支那の幼年工、少年工の弊害を緩和して歩るいた、英國の非公式な顧問使、『Humanity and Labour in China』の著者、アデレード・アリー・アンダースン女史のやうな役割にしか廻り得ないのである。

上のやうな部類の、殆ど彼等の存在そのものが、強盗的な侵略主義であるアメリカ人は、へべれけなセーラアから、ダイヤづくめの大班にいたるまで、各自の可能範圍で支那をアメリカナイズすることに

してゐる。最近では、北四川路附近に、最もニユー・ヨーク生活の醜現象である『ナイト・クラブ』までを彼等は輸入してゐる。活動寫眞の項でも云つたとほり、一面現實主義的で、快樂主義者であり、同時に商業主義本能の發達した支那人は、甚しい内面的抗爭を感ぜずに、むしろ進んでこの皮相な樂天主義に合流するやうな傾向を示してゐる。――しかも、終局に於て、誰がこの代價を拂ふのかも知らぬらしく。

かういふ弗と活動とダンスとビルデイングを先立てたアメリカ人の一隊が跳つてゐる傍らには、老練な植民地業者である英國人が、上海の土地、政治などに實質上の權利を增殖して、支那の一年間の二十六件ある國恥記念日に、十五件の侵略主義行爲を敢てした歷史を忘れようと力めてゐる。彼等の特權的社會地位は、容易に他の外國人の追隨することを許さず、噓のやうな値段で買ひ取つた土地にモダーン設備を施して、着實にがらつぱちなアメリカニズムと對陣してゐるのである。

これら英米の對蹠的地位から、一種のクラシシズムと非協同的な租界と四五隻の軍艦に守られて超善主義を執つてゐるのはフランス人である。彼等の租界は、安南兵によつて守備され、租界の大半はブルジヨアの住宅區域に充てられてゐる。もしこの佛租界にあるアルカザールとか、ムムとかいふ[illegible]、[illegible]だけに[illegible]られるセンも、それは三ケ年以上租界に住居し、毎年一千法以上の稅金を納め、四千法以上の收入のある居留民によつて組織される、居留民會の中から推擧される參事會員達の關知するところであつて、通りすがりの支那人や、その邊にさらに小店を開いてゐる國民黨員の知つたことではないのである。

それからこの男は猶太人であるが、上海目貫の南京路を殆ど全部所有してゐて、靜安寺路に宏大な本邸を持ち、どこか杭州邊に王侯貴族も及ばぬ大邸宅を誇つてゐるといふハードンといふ七十歲近くの老人がゐる。この老人は、儒教や佛教を保護することに興味を感じ、邸内には學校や芝居の舞臺をまで設けてゐるそうである。どういふ風にして、この男が支那の土地買收にその魔手を伸ばしたかは判明しないが、彼れの妻君が廣東人であることだけはわかつてゐる。

白系ロシア人は謂はば、東洋人種に後戻りしかかつてゐる最後の白晳人種である。ボルシエヴイキが政權を握つてから、彼等の追放され亡命した數は三百萬人と傳へられてゐるが、パリにアメリカに滿洲に散つたうちに、一萬六千人位は上海へ移住したといふことである。アーサア・ランソムは、彼等が北軍に雇傭されて、反革命の戰爭に從事してゐて捕虜になつた光景を描いてゐるが、彼等の殺人鬼的獰猛狂は、さしもの支那軍人をさへ辟易せしめるほどで、仕方がないので、僅か二十人程をいつしよにつない[illegible]

云へば、それは最も支那的に、各自の[illegible]うな。

かういふ種類の國際的あぶれ者が、上海の裏面には到るところに散らばつてゐる。寒中に素足で、無帽、半裸體になつて、豆腐のやうな[illegible]體軀を惡酒に爛らせ、大道へごろごろ寢轉んでは支那人の交通を[illegible]し、唾を吐かれ足蹴にされても平氣でゐる圖などは、よく人の[illegible]る醜狀である。

私の知つてゐる畫家が、蘇州河畔の公園でその姿をスケッチしてゐると、これらの白露系ロシア人の群が集まつて來て、[illegible]の一人[illegible]がないから上衣を呉れと云ふと、最後の一人は素足を突出して[illegible]だつたので、しまひに恐ろしくなつて逃げ出したといふことが[illegible]てゐた。

これらの無頼漢は、上海の秩序を紊しこそすれ、[illegible]事をするでもなし、終日酒場の附近をごろごろしてゐて、[illegible]時代の生活惰力を持續してゐるに過ぎない。そのために、上海の[illegible]場では、年々[illegible]の落ちこぼれとして八十萬[illegible]人に寄附してゐるさうである。

ガーブン・ノリッチや四川路[illegible]、北四川路[illegible]
[illegible]

た。

五卅事件から上海のクーデターまで、この白熱した短かい年月の間に、支那人は革命の水平線を見た。そして、一部の進み過ぎた革命強行論者が、その水平線を指してゐるとき、背後から彼等の足を捕へて引摺り卸したのは、誰であつたか？――外見は、漢口や長江沿岸から軍艦を減退し、國民政府承認、條約改正の實行によつて、一歩退讓したかの如き諸外國人とその當該政府とである。この退讓の一歩は、同時に、買收、借款、支那の資本主義化を通じて、支那に於ける列國資本帝國主義の、もう二歩も三歩もの前進を意味するのである。かうなつて來ると、鮮かに、支那人は『階級なき民衆』ではなくなつて、中央集權主義を表面にして、社會改良主義を緩衝地帶とする新興中國資本主義の前に、搾取され壓迫される農民、工人、小市民、インテリゲンツイアの集團が對立を示すことになる。長江進出まで、一人であつた支那人は、南京政府樹立から二人になつてしまつた。この二人の支那人は、當然、仲の惡くなるべき立場に置かれてゐる。

どんなに南京政府が、孫文の靈廟を建てゝ、無學者を失くする運動を起したり、賣笑制度を撲滅しようとしたり、迷信打破に腐心したり、排日宣傳が支那民衆全部にかかる有力な戰術である（その當強弩の末勢に過ぎないのだが！）と云ひくるめて見ても、一旦目覺した勤勞は、到底それを見ないわけには行かないのである。

[illegible]を瞶めてゐる。支那人は無表情でゐる。[illegible]を見こんでも、何[illegible]にはないかも知れない。しかし、やがては、この無表情の沈默が恐ろしくなる時が來るかも知れない。

亡命の陳友仁が豫言したと云はれるやうに、英人マクドナルドが會長となつてゐる、江灣、大馬路、その他の三個所に、目にあまるほどの土地を壟斷する上海ゴルフ・クラブが、いつかは苦力の宿泊所になる時機が來ないとも限るまい。

そして、國民政府には、さういふ希望を誰が托そう！

（次回完結）

高野岩三郎博士

麻生久

一

明治二十八年の東大法学部卒業生の名簿を繰り開けて見ると、その中には幾多社会的に見て興味深い名前を見出すのである。

現民政党総裁濱口雄幸氏の名前がその中に見える。先年世人に惜まれ乍ら物故した濱口氏無二の親友下岡忠治氏の名前もその中に見える。前拓務総督伊澤多喜男、現文部大臣勝田主計の両氏も等しく其中に名前を連ねてゐる。それから学者畑の方では、現東大総長小野塚博士の名前があり、現帝国学士院長矢作博士の名前も見える。而して我等の高野博士の名前も亦、以上の諸氏と共に、明治二十八年東大政治科卒業生の中に列せられてゐるのである。

濱口、下岡、伊澤の諸氏は[illegible]卒業して東大に入学したに[illegible]士は、小野塚、矢作、[illegible]を卒業して東大に這入つた[illegible]一妙なものであるが、矢張り一高組は一高組に固まり、三高組は三高組に固まつて、どうも打解けない気になつて[illegible]のだが、、、、

何時であつたか、しんみりと[illegible]いて居た時に、博士は[illegible]昔を回想するやうに[illegible]

「濱口君は[illegible]下岡君が[illegible]たが、[illegible]になつても、もつと[illegible]に、[illegible]

[illegible]

博士に心からの擁護なしにはやられない。併しながら、高野博士の一身に就て、心からの關心を持ち、博士の身のためよかれと懸命になる人々は單に以上の二博士を以て限りとせられない。出身こそ異なれ、福田德三博士然り、長谷川如是閑氏然りである。喧嘩早いとして世に定評ある福田博士の如きも、一度高野博士の事になれば、心から一生懸命になる事は私の長年實驗して來たところである。

『學問の上では高野に負けないが、人間と云ふ點になると、どうも高野にはかなはない』

これは何時だつたか私が福田博士からしみじみと聞いた言葉である。

高野博士を心から思つてゐる者はたゞに以上の人々に止まらない。大原研究所の同人然りである。そして又、私共の如き端々の者まで心から博士の事を思つてゐるのである。

何故、高野博士は、かやうに心からの親友を多く持たれ、心から慕ふ多くの後輩を持つてゐるのであるか

心からの親友と、心から慕ふ者とをかくの如く多く持つと云ふ事は、其人に、人並すぐれた、眞實な人間性がなければ不可能である。一時の人氣や評判は擔ぐ者を有する事は出來るけれ共、心からの親友と心から慕ふ者とを持つ事は出來ない。

我が高野博士は眞實な人間性の所有者である、眞實な人間性の所有者は、パッとはしない。然し一度其眞實な人間性に深く觸るゝ者に對しては離るゝ事の出來ない强力な密着力を持つものである。我が高野博士に深く接する者は、其の如き眞實な人間性に觸れて、再び其人格から離れ去る事は出來ないであらう。高野博士は擔がれる人ではなくして慕はれる人である。

同窓の友濱口雄幸氏が民政黨の總裁として最高の權力者たる時、我が高野博士は、今、貧窮と無權力のシンボルたる無産階級から慕はれて日本大衆黨の執行委員長たる事を懇請されてゐるのである。何と云ふよき對照であらうか、そして、此事實そのものゝ中に高野博士の、[illegible]されてゐるのではないか。

曾て、日勞黨の存在せる當時、或る新聞記者が私に冷笑的語氣をもつて云つた。

『あなた方は、日勞黨の黨首に又誰れか博士を擔ぐのですか』

私は即座に斷乎としてそれを否定した。

『日勞黨はたゞ看板に何人をも擔がない。我我の心から許す人でなければ黨首なぞには斷じてしない』

我々が今高野博士を執行委員長として懇請するのは、斷じて擔ぐのではなくして慕ふのである。そして博士は眞に我々から慕はれる人である。

二

博士は明治二十八年東大政治科を卒業されてから大學院に於て、統計學を專攻し、三十二年統計學研究のために文部省から獨逸に留學を命ぜられて、ミュンヘン大學に入り、三十六年歸朝、東大の教授となり、三十七年法[illegible]

一回[illegible]件にからんで、大學教授を辭職されるに至るまで、大學に殘した功績は多々ある中で、經濟學部の獨立は其最たるものと云ふ事が出來るであらう。今日こそ、經濟學は、學問上、實際上、最重要なる地位を占むるに至つたけれ共、當時に於ては、未だ一般から輕視せられて、大學內に於ても、經濟學部の獨立は勿論、經濟研究室さへ確立せられてゐなかつたのである。博士は先づ經濟研究室を創設し、爾來幾多の困難を突破して遂に大學內に於て經濟學部の獨立を完成するに至つたのである。

大正八年大學教授を辭して後は、大原社會問題研究所所長となり、其同人に、森戸、櫛田、權田、細川の諸氏を集め、專ら社會問題の研究に從事し、再び獨逸に遊んで一昨年十二月歸朝せられた。現に博士は帝國學士會員の一人である。

其主要なる著書には、本邦人口の現在及將來、統計學研究、社會統計學史、財政原論等があ[illegible]的立場を明白にせられつゝあるやうである。

三

或る人が博士と無產階級運動との關係を評して、次ぎのやうな面白い事を云つた。

「高野博士と無產階級運動とは表向きの結婚式だけ擧げてゐない戀人同志のやうなもんだよ。長い間思ひ合ひ戀し合つてキッス程度迄は行つてるんだが、なか〱結婚式をあげて合巹するところまで行かないんだハヽヽヽ」

蓋し、これは眞相を穿つた適評と云ふ事が出來るであらう。

今日、勞働總同盟や日本大衆黨が、博士を其の執行委員長たらしめんと欲する事に對して、世人はやゝもすれば唐突の感を抱く如くである。併しながら、この事たる決して唐突の事ではない。唯博士の從來の行動が、安部磯雄氏や大山郁夫氏等の如く華やかに表面的でなかつたために世人には唐突の如く見えるのであつて、博士の從來の行動は、極めて地味な[illegible]運動の中にしみ入つてゐるのである。

そして、博士の學者としての立場も、[illegible]的行動も、[illegible]たて[illegible]した事はない。

博士の[illegible]二十年[illegible]の[illegible]運動に[illegible]なる人であつて、[illegible]

掛け、熱心に其調査に從事し、側ら私共の演說會にも援助された。博士の貧乏生活は徹底せるものであつて、いつもヨーカン色の洋服にオーバー、家には女中一人置いてない始末であつた。國際勞働會議の事件も其片鱗のあらはれ、大原社會問題研究所も其片鱗のあらはれ、而して、あらゆる機會に於ける、じみではあるが、不斷の努力は、悉く無產階級運動の側面的援助に對して拂はれてゐたのである。

げに、博士と無產階級運動とは長年の戀仲である。たゞ今まで表向きの華々しき結婚式が擧げられてゐなかつた爲めに、廣く世間に披露されてゐないに過ぎないのである。

四

私は最後に、高野博士が大學教授を自から辭職さるゝに至つた。所謂第一回國際勞働會議勞働代表選出事件の眞相を明かにして、博士の人格の如何なるものであるかを紹介したいと思ふ。

大正八年、第一回國際勞働會議が華盛頓に開かるゝに當つて、時の政府は、事實上に存在する友愛會等の勞働組合を無視し、官選的に勞働代表を決定せんとし、第一候補添田博士、第二候補高野博士、第三候補桝本卯平氏を選任したのである。之れに對し、私共當時友愛會に所屬せる者は、政府の斯くの如き態度を以て、國際勞働會議の精神に違反するものとして猛烈なる反對運動を敢行したのである。

添田博士代表たる事を辭退し、代表の選が高野博士の順となるに及んで、私共は全く苦しき立場に立たしめられた。博士は個人として之れを見れば私共の恩師であり同時に勞働代表としては申分なき適任者である。之れを私情より見れば反對すべき理由は毫もないのである。吉野博士は最も熱心に博士と私共との間を斡旋して博士の勞働代表たる事に努力されたのである。私共は此間に於ける立場に一方ならず苦慮し煩悶したのであるが、私共[illegible]して政府の勞働組合を無視せるやり方に對して反對したのであるからして、たとへ高野博士なりと雖も之れに反對せざるを得なかつたのである。

私共は相變らず頑強に高野博士に反對すべく決意してゐた。そして又私共は必ずや高野博士は之れを受諾せられざるべきを確信してゐたのである。

然るに事實は、豫想を裏切つて突如高野博士勞働代表受諾の報は私共の耳朶を打つたのである。私共の驚愕は如何ばかりであつたらう。私共は一時高野博士の心事を疑はざるを得なかつたのである。……之れは後に至つて分明したのであるが、高野博士の受諾は、周圍の斡旋者が私共と話し合ひがつくものとして、或ひは私共が承諾するものとして高野博士を說き落して受諾の決意をなさしめたのであつた。不幸にして當時、私共と博士とは面會する機會を得なかつたので私共の眞意は博士に誤まり傳へられてゐたのであつた。……[illegible]

[illegible]

訪れられて、非常なる昂奮をもつて、私を說かれたのであつた。

『君、高野の行く事に妥協せんだらうなあ。そんな事をしたら高野も死ぬし、君等も死んで仕舞ふ。』

私は即座に答へた。

『妥協はしません。私は高野先生の行かれる事には飽くまで反對です』

『うん、さうか、それで安心した。それぢやあ、何とかして明日は高野を探し出して止めさせる事に努力しやう』

其翌日、福田博士と私とは友愛會の本部で高野博士の行方を求めてゐた最中、正午頃當の博士は一人飄然として友愛會本部を訪づれられたのであつた。

其日の午後、友愛會の樓上に開かれた高野博士を交へた會議は、實に深刻な、眞面目な悲痛なものであつた。そして、その時、私の胸に燒きつけられた博士の高き人格は、其場の劇的シーンと共に私の一生涯を通じて忘れ

其場には福田博士も迫るが如き昂奮を以て列席してゐた。森戸君も、深刻な表情をして博士を守るが如くに深く沈默してゐた。友愛會の幹部は勿論居並んでゐた。そして其の深刻な表情をした人々の中に博士は相變らず溫顏に微笑を湛えて少しの激するところも見えなかつた。

私は最初に而も熱心に、もつと赤裸々に云ふならば寧ろ强迫的に云つた。

『私共は、先生の行かれる事に反對するのではありません。けれ共政府のやり方には絕對に反對です。そして先生なるが故に反對の意思を飜へすわけには行きません。私共の信賴する先生までが政府のやり方に從つて、勞働階級の意思に反して、行かれる事になるならば私共の如く智識階級から出て實際運動に從事する者まで、智識階級はあてにならぬと云ふ事になつて信賴を失するでしやう。さうなつたら私共は今後どうして運動を續けて行く事が出來るでしやう。どうか先生の行く事を

列席した多くの君達も夫れ〳〵の希望を述べた。博士は始終溫顏に微笑をたゝへて、じつとそれを聞かれた。そして最後に、

「僕は、君達の事を少し誤まつて聞いてゐたので承諾したんだが、君達の希望がさうであるなら止めましやう』

その夜高野博士の宅を訪づれた吉野博士は次ぎのやうな意味の血淚のこもつた悲痛な手紙を私共に送つてよこしたのであつた。

『高野先生は、勞働代表を止める決心と共に今度の責を引いて大學敎授をも止められる決心をされてゐる。此悲痛な先生の決心は諸君の氣持ちに殉ぜんがためである。諸君は今後に於て、先生の此尊き殉死に酬いるところがなければならない………』

私共は、斷じて一時の利用に高野博士を委員長に擔がんとする者ではない。博士の長き生涯に於ける無產階級運動に對する慈雨の如き態度と、其高潔なる人格の下に、集はんとするのである。

米國に於ける最近の婦人運動

市川房枝

婦人運動を、輕く、米國に於ける婦人の團體的運動と解釋して、その運動に於ける特種の乃至は最近の傾向を斷片的に書いてみる事にする。

米國婦人の集團的本能

最近歐洲から米國の首府ワシントンへ赴任して來た一外交官の妻君が

『この首府には八百萬人からの婦人を代表してゐる婦人だけのいくつかの團體の本部がある』

と聞かされてびつくりし、

『まあ！　米國の女は女をすくのに違ひない！』

といつたといふ話がある。

八百萬人と聞いたゞけでも驚くが、婦人團體に加入してゐる婦人の總數は、それよりもずつと多く、米國だけで千五百萬人はたしかにある。——[illegible]婦人の總數が約三千二、三百萬人あるとすればその四割、即ち十人の内四人迄は婦人會員であるといふことになる。

ワシントンは米國の首府だけあつて、婦人團體で本部をここに置いてゐるものが多く、その本部も會員が多いだけに仲々立派で、大理石で出來てゐるD、A、R、の本部、舊政廳を買ひとつた婦人黨の本部、それから婦人クラブ總聯盟の本部、女子大學卒業生協會の本部等は名所の中に數へられてゐる程である。

それ等の建物の中には或は數千名をいれることの出來るホールを持つてゐるのもあるが、大ていは會員のホテル兼用で、大なキヤフエテリアがついてゐる。會館といへば單にワシントンだけでなく、ニューヨーク、チカゴ其他各都市どこへ行つても、婦人會館乃至は倶樂部ハウスのない所はなく、然も仲々立派なものばかりである。

さうした會館では始終委員會だとか、講演會だとか、乃至は午餐會、お茶會、晩餐會といつた會合が終日絶え間なく開かれ、いつも婦

その會合の種類、集る人の職業等は數が多いだけに、一々あげる事が出來ない。がその大體を知るため、同國に於ける所謂婦人團體の名を少しあげてみやう。

米國全部にある婦人會の數がどれ位あるか、正確な數をあげる事は困難であるが、恐らく二三萬を超えてゐやう。それ等の大部分は、村、市――郡――州――地方――全國――といつた順序に、全國的な團體に組織されてゐる。然して更にその全國的團體の大部分は全國婦人協會（The National Council of Women）に組織され、これから世界に於ての最も大な婦人團體である國際婦人協議會（The International of Women）に結びつけられてゐる。尤も全國的な婦人團體はそれ自身、目的を同じうしてゐる各國際的婦人團體に聯絡されてはゐる。

全國婦人協議會には現在三十四團體加盟してゐるが、その中主なる團體には次の如きものがある。

米國女子大學卒業生協會、米國看護婦協會、婦人公衆衛生協會、南北戰爭從軍者婦人會、婦人クラブ總聯盟、國際サンシャイン會、マカビース、全國女醫協會、黑人婦人全國協會、米西戰爭從軍者附屬婦人協會、キリスト教女子青年會全國委員會、女子教育行政者全國協議會、ユダヤ婦人全國協議會、全國職業婦人クラブ聯盟、全國音樂聯盟、全國活動寫眞聯盟、全國キリスト教婦人矯風會、全國主婦聯盟、全國幼稚園協會、全國婦人有權者聯盟、全國婦人救濟會等、[illegible]が、同會だけに屬する會員は三百萬人、その一箇[illegible]、その[illegible]だけの一ヶ年の經常費約十五萬弗に達してゐる。

婦人協議會に加入してゐない全國的な婦人團體の中、有名なものには次のやうなのがある。

米國婦人著作家聯盟、ルーシイ ストン聯盟、米國家事經濟協會、米國婦人病院會、全國婦人共和黨クラブ、全國婦人民主黨クラブ、米國キヤソリツク婦人會、キヤンプフアイヤーガール、米國少女親善會、米國少女奉仕會、ガールスカウト、國際婦人警官協會、婦人法律家協會全國婦人美術家協會、全國兩親と教師會、全國婦人消費聯盟、全國キヤソリツク婦人協議會、勞働婦人保護同盟、全國少女クラブ聯盟、全國婦人勞働組合婦人保健會、婦人平和自由聯盟、婦人平和同盟、全國婦人黨、婦人法律勵行委員會戰爭防止全國婦人委員會、D、A、R、

あげればまだ際限なくあげられるが、これ位でやめておく。

各團體が何を目的としてゐるかはその名稱によつて大體察する事が出來るが、それ等の大部分は、個人の修養、自分達の權利の擁護乃至は婦人子供、社會の福祉の增進を目的としてゐる。

それは全國婦人協議會に設けられてゐる常設委員會に、

兒童福祉、教育、男女の道德律、法制、移民、勞力、活動寫眞、音樂、平和、公衆衛生

があり、婦人クラブ總聯盟に、

米國市民權、家庭、教育、美術、國際平和、社會福祉（兒童福祉、

火事道路、アメリカ印度人、勞働公衆衛生)等の委員會が設置されてゐるのによつても知られやう。

ハード、インスティンクトといへば所謂動物が自己防衛の爲め、自然に群をなしてゐるのを稱するので、米國婦人が前に述べたやうな婦人團體を組織するのを呼ぶのは少々酷評に過ぎると思はれなくもない。が皮肉屋をして、さう稱せしめる程、米國婦人の團體組織熱——然も何でも婦人だけで組織したがる狀態は、一種の本能と見ゆる程盛であることは、實例によつて承認せざるを得ない。

此の現象は東洋は勿論、歐洲でも稀れで——英國婦人は多少似てゐるやうである——特に米國婦人に限られてゐるやうである。

その原因については見る人によつて異るが、或英國評論家は

『米國で女が、女同志で無暗に固い團結をつくり、熱心に會合したり、運動したりするのは、確かに焦燥から來てゐる。家庭生活に滿足出來ない、夫に對して滿足する事の出來ない焦燥から來てゐる』といひ、

一獨逸哲學者は

『米國の女は女性中心の社會を持ち來たさうとしてゐるのだ。米國の女はその强大な婦人團體の力で傳統的な男性中心の社會組織を破壞しつゝある。さうして現在に於て已に男子が男性中心の社會で振舞つたと同じやうに振舞つてゐる。米國の女は支配能力を極度に發達させたのだ』

『米國の女が他の國よりも女同志で活動する事の多いのは、其國では女性の中の男性的分子がよく發達してゐるのだ。米國の女はその植民時代に肉體よりも頭を使ふことにならされた。從つて自ら計劃し立案する能力が發達し、それが婦人團體の組織となつてあらはれたのだ。男子はどこの國でも黨をくむものだが、男と同樣の獨立性を持つてゐる婦人は、同じやうに同性だけで遊んだり活動したりすることを好むらしい』

といつた見方もあり、

『米國の女が他の國々の女よりも率直で、女同志の間にありがちな偏見嫉妬といつたものを割合に持つてゐないから、女だけの交際が美しく、從つて共同し易い』

こともあげられよう。

がそれ等よりもつと直接の根本の原因ともいふべきものは、米國婦人には時間の餘裕がある事であらう。——それは換言すれば米國の富の程度が高く、生活に餘裕があることに歸せられるが。

妻が自分で職業を持つ必要がなく、然も婦人の仕事とされてゐる家庭の雜事が、機械化され、簡單化された爲め生じた時間の餘裕である。

家庭の雜事が如何に機械化され、簡單化されて來たかの一々の實例は拙くなるから省くが、その點では世界中及ぶものはない。相當の家

[illegible]い、若しくは子供の成長した場合に於ては、婦人には[illegible]剰つた時間の費し場所を探さねばならぬ事になる。

此の時間が、マチネー見物、カード遊び、ゴシップにも使はれるが、その大部分は讀書の時間となり、婦人會への出席となつてゐる。その意味からいへば婦人會は、さうした婦人の引受所、避難場ともいへる。これは所謂婦人會への出席者の大部分が四十乃至五十以上で孫のあるやうな人達が多いことによつて證明される。

勿論、時間の余裕の問題は、前に述べた如く、特種の職業を持たない家庭婦人、獨身婦人で、中流階級の——中流階級といつても漠然としてゐるが、兎に角夫一人の收入で生活し得る家庭、その中には、巡査、車掌、熟練勞働者で這入る場合があるが——婦人に限られてゐる。勞働婦人、勞働者階級の婦人は自分自身の生活の資を得る爲めに忙しく、時間の余裕等を持ち合はせてゐない。

然し勞働婦人の間でも歐洲には例のない、婦人だけの勞働組合があるし、勞働者の妻君達だけの婦人會もあり、會館等を持つてゐる。そこへ行けば米國だけに矢張時間の余裕があるといへるかも知れない。或はそれは矢張ハードインスティンクトだといつた方がいゝかも知れない。

それはともかくとしてこの婦人の状態に對し、一方男子は好景氣で[illegible]

[illegible]心の状態である。

此の結果は婦人の方が男子よりも知識の程度が高く、教會、文藝、教育、社會事業等は婦人に占領されてゐると稱せられる程で、女性中心の社會が實現されつゝあるといへるかも知れない。

然しかくして、米國の文明が——精神文明が女性から然も時間に余裕のある中流階級の婦人から産れ、否これ等によつて培はれつゝあるものとすれば、全く社會的事情經濟的事情を異にする歐洲乃至は東洋と比較して甚だしい相違のあるのは勿論で、我々から見て物足りなさを感ずるのは當然の譯である。

だが特に我々婦人としての立場からは、これが將來、どう發展するかを見る事は非常な興味のある問題である。

婦人平和運動の勃興とブラックリスト

婦人平和團體對愛國婦人會の對抗？は米國の最近に於ける現象として我々には非常に興味がある。

舊い平和運動の歴史はさておき、最近に於ける婦人の平和運動を少しあげてみる。

歐洲大戰の開かれた一九一四年の暮には、婦人平和黨なるものが組織された。さうして翌一月ワシントンで婦人會議がアダムス、キット

兩女史の名で招集され、約三千人の出席者があつた。同じ一九一五年五月ヘーグで開かれた國際婦人會議には、アダムス女史を會頭に四十五名の代表者が出席して活動をした。

然し一般婦人の間に廣く平和運動が行はれ初めたのは、大戰が終了し、婦人が參政權を獲得した一九二〇年以後からの事である。

大統領ハーデングが、一九二二年ワシントン軍縮會議を招集したについては婦人側の要求がはげしかつた事が一因としてあげられてゐる。尚その會議の進行、內容等についても、大統領から任命された四名の婦人顧問を初め、婦人の平和團體及、婦人團體で組織された軍備縮少婦人委員會等の活動が、少なからぬ影響を及ぼしたといはれてゐる。

現在米國にある平和團體の中には男女共同のものが多く、それ等に多數の婦人が參加し、役員として活動してゐるものが可成あるが、特に婦人だけの全國的な平和團體も組織されてゐる。

その中最も知られてゐるのは婦人平和自由聯盟(Women's International League for Peace and Freedom)で、アダムス女史が指導してゐる。

これは前に述べた婦人平和黨が改稱されたもので、ヘーグの大會後組織され、その米國の支部をなしてゐるのである。

同團體は單に國際間の平和だけでなく、人種、階級間の平和をも目的とし、自由の名稱の中には婦人[illegible]、[illegible]パシイフイスト(無抵抗主義者)等を含んでゐる所から、決議の中で戰爭の原因をなしてゐる所の經濟問題にも及ぶことがあり、ロシアの承認、政治犯人の解放等をも主張してゐるので、婦人團體中最も過激な團體とされてゐる。會員は一萬人位で全米各地に支部を有してゐる。

右の外に婦人平和協會、婦人平和同盟といふのがある。兩者とも平和團體としては前者よりも進んで絕對無抵抗主義の立場をとつてゐるが、會員數も少く、あまり知られてもゐない。

平和問題をその目的の一つとしてゐる婦人團體は極めて多く、有力な婦人團體のすべてはさうだといつてもいゝ程である。それ等の團體は各自に運動してゐるが、別に共同してそのための一つの委員會を組織してゐる。

それは戰爭防止婦人委員會(National Committee on the Cause and Cure of War)と稱する團體で軍縮會議當時の委員會が組織し直されたのである。現在同委員會に加盟してゐる團體は代表的な十團體で、何れも多數の會員を擁してゐる。

米國女子大學卒業生協會、(二萬五千人) 婦人傳道協會、(五百萬人) 北米海外傳道委員會聯盟(五百萬人) 婦人クラブ總聯盟、(二百萬人) 婦人有權者聯盟、ユダヤ婦人全國協議會、(五萬二千人) 全國職業婦人クラブ[illegible]

この委員會は毎年一回全國大會を開いてゐるが、その第四回は本年一月十四日から十八日迄ワシントンで開かれる筈である。單に全國大會だけでなく、前記の加盟團體は米國の各州、各都市にそれ〲支部を持つてゐるので、地方的な委員會も開かれてゐる。

此の會長には婦人參政權運動者として有名なキヤツト夫人がなつてゐる。

右に掲げた婦人の平和團體及婦人團體が最近最も主力を注いでゐるのは、海軍擴張案に對する反對運動及、不戰條約批准促進運動の二つである。筆者が滯米中は恰度後者の運動が盛に行はれてゐる最中であつた。

この兩者に對する運動のみならず、米國に於ける平和運動は教會側に於ても熱心に行はれてゐるし、其他の平和團體でも行はれてゐる。然し教會も、其他の團體も婦人が多數を占めてゐるので、米國の平和運動のバツクボーンは實に婦人にあるといつても過言ではない。所で婦人側の平和運動がかやうに盛であるのに、一方、所謂米國内に於ける軍國主義的帝國主義的勢力も亦相當に強くなりつゝある。それは海軍擴張案、メキシコ、ニカラグアに對する政策によつて知られる。

若しさうだとすればこの正反對の兩勢力の間には何等かの形に於ての衝突が起らざるを得ない事になる。

それは今から約五年程前の事であるが、自動車王ヘンリーフオードの經營してゐた週刊雜誌にデアボーンインデペンデントといふのがあつた。

この雜誌に二回連續で「婦人會は共產主義に利用されてゐる！」といつた題目の記事が掲載された。その記事には其の利用されてゐる婦人團體の名稱、人の名が表にして附加されて居り更に次のやうな詩？まで添へてあつた。

ロシヤ帽をかぶり、獨逸服をまとつたボルシエヴイキ女史がやつて來た。婦人會の中に確かにゐる。彼女は米國の軍備を全廢させる爲めに來たのだ。

彼女は首府にゐて軍事費を監視してゐる。彼女等の贊成を得なくては通過しない。彼女等は米國の軍備を撤廢させる爲にそこにゐるのだ。彼女等は活動寫眞や學校をも宣傳に使つてゐる。學校の教科書は彼女等の都合のいゝやうに變更しやうとしてゐるし、教會の講壇や會堂もそのために使つてゐる。米國から軍備を全廢させる爲めに。

所でその表の中にあげられてゐる婦人團體は殆と、全部有名な婦人團體ばかりで、十七團體によつて組織されてゐた議會運動委員會も這入つてゐた。

これを知つた婦人會はそれ〲對策を講じたが、特に議會運動委員會は由々敷い問題として直に委員をあげ、この記事の出所を調査せしめた。その結果、この記事は米國陸海軍省の毒ガス局から出てゐる事を發見した。然も同記事は同局の一局員が上官の命で作成し、同局で印刷して各方面へ配布した事が判明した。

そこで同委員會は陸海軍大臣ウイークスを相手に嚴重な抗議書を提出し、これが釋明を要求すると同時に、發送先への訂正を申込んだ。これに對し大臣から毒ガス局に殘つてゐる同印刷物は全部破棄させた事、發送先へは間違のあつたことを申送ると同時にその破棄を要求したことを述べ、事實相違の印刷物を省内から配布したことは遺憾であつたとの返事が來た。

此の事件は、婦人團體間にスパイダーチヤーツ事件（蜘蛛の巣表）として非常なセンセイションを起させたが、兎に角表面はこれで落着した。

この事件にこりてか其後かうした事件は起らなかつたが平和運動者、平和運動婦人團體に對しての妨害反對運動は別の形となつてあらはれ初めて來た。

米國には婦人團體が多いだけに色々なものがあるが、その中に米國の獨立戰爭に參加した人達を先祖とする婦人達の團體がある。Daughters of American Revolutionといふので、全員約十六萬人を有すると稱し、立派な本部をワシントンに持つてゐる。一種の愛國婦人會乃至は國粹保存婦人會とでもいふべきものであるが、各婦人團體が平和運動に熱心になるや、反動的に軍國主義的色彩を明瞭に、事毎に反對に出るやうになつた。

例へば平和會議、軍備縮少、毒ガス反對、軍事施設撤廢、軍事教練反對等を掲げてゐるのに對し、正反對にそれ等に贊成の旨を決議してゐる。海軍擴張案にも大贊成といふのでその運動をしてゐる。然して戰爭防止婦人委員會に對抗させるためか「愛國婦人團體國防會議」なるものを年一回ワシントンで開き、三十團體が參加してゐると稱してゐる。尤もその婦人團體は殆ど類似のもので、社會的に知られてゐるのは殆どない。昨年の二月開かれた大會の決議の中には極めて面白いものもあるが、兎に角その決議をその尻押しをしてゐる議員から議會の議事錄にのせさせ、政府の費用で宣傳をしてゐる。

この會合、乃至はD、A、Rの背後に陸海軍省の軍人乃至在鄕軍人會があることは周知の事實で、この團體を通して出所不明のパンフレットが引續いて配布されつゝある。

尚D、A、Rからは各國の支部に對して、婦人のブラツクリストなるものが配布されてゐる。その中には婦人團體並に平和運動者があけられてゐる。アダムス女史は勿論、婦人勞働組合長シユナイダマン女史、消費組合總幹事ケリイ女史等もその名譽を擔つてゐるとの事である。

筆者が、同會を訪問してブラツクリストについて質問した時、一役員はこれを否定してゐた。然し我々はパシイフイストの言論をきく必要はない譯だから、誰れがさうであるかを支部に知らせる事はあると附言してゐた。話してゐる時、役員の机の上に、プロフエツシヨナルパシイフイストと書いたパンフレツトが積んであつた。早速請求して一部貰つたが、どうした譯か、[illegible]

げられてしまつた。

ブラツクリストといへばこれは我々がホノルルに滯在してゐた時――昨年の八月の事であるが、同地のD、A、R、と在鄕軍人會及在鄕軍人會附屬婦人會から、汎太平洋婦人會議の議長として滯在してゐたアダムス女史に對し三ヶ條の質問狀をつきつけた。

その條項は左の如きものであつた。

一、國際婦人平和自由聯盟の規約は米國憲法と相反してはゐないか。

二、一九二四年の大會で決議された契約は其の後改正されたか、

三、會員が個人として戰爭に參加することに對し、會では何か誓約があるか、又戰爭に參加する他の人々に對し會はどんな態度をとるか。

これに對し、同女史は講演會の席上で答辯したのであつたが、當夜の女史は、汎太平洋會議にプレサイドしてゐる時とは別人の如き元氣で勇敢に述べ、質問者をして一言もなからしめた。それのみでなく聽衆の中から「どうしたらD、A、R、を米國にとつて役に立つ會にする事が出來るか」といつた質問が出たりして、聽衆から一度に笑聲が起つたりした。

筆者は滯米中、も一つこれに類することを目擊した。

それはニユーシヤーシーの或教會で婦人の平和運動者ミード女史に講演をさせた。所が土地の一D、A、R、がその牧師に公開狀を送り、ミード女史、アダムス女史、ラバイワイス、ホルムス氏、ウイラー・ヒリ等共產主義者であるか若しくは共產主義者と連絡をとつて米國に革命を起させやうとしてゐるのだ、そんな女を敎會で講演させるのは不都合だと攻擊した。これに對して牧師は共產主義者ではないとて反駁した所、D、A、R、は今度は牧師を名譽毀損で訴へた。そこで名前を上げられた人達及その代理人は一々裁判所へ召喚されて取調べられることになつた。

恰度筆者がチカゴでアダムス女史を訪問してゐる時、新聞社から此の事件についての問合せが來たのであつた。裁判の結果は共產主義者にあらずといふのでD、A、Rの敗訴になつてしまつたが、この事件は各新聞社に報道されてゐた。

この平和運動と軍國主義との衝突は、或程度迄米國社會の現狀を語るものであらう。

然しかうした迫害にも拘らず、米國婦人の平和運動は益々積極的になりつゝある。

急進的婦人が社會主義運動に赴かず、むしろ平和運動に向ひつゝあるのも米國に於ける特色として我々の注目をひく點である。

米國婦人の平和運動が、米國の軍國主義をどこまで克服し得るか、それは將來の問題として殘しておかう。

附　本稿では今一つ「婦人參政權運動の行方」を入れる積りで書いた。然し前二項で豫定の頁を遙に超過してしまつたので、これは別の機會に讓ることにする。

華族の沒落と其政治勢力

龜井貫一郎

華族令制定の當時は華族は社會的の一勢力であつた。貴族院は此の社會的勢力を政治的に表現し得る樣に考慮されたものである。處が今日では華族は社會的な勢力でない。其の政治的勢力は貴族院あるが故にのみ──そして只夫れ故にのみ──存續して居るのである。

× × ×

華族の社會的勢力の失墜は、何れも近代資本主義の進展に伴ふ封建的勢力の沒落とか何とか難しい事をいはなく共簡單に片附けられる問題である。要するに華族の貧窮化である。

今や華族は極度に貧窮になつて居る。明治の初年に於ける華族の社會的勢力は、勿論一部分は華族に對する一般の特殊な考へ方に其の原因を有したのではあるけれ共、其の大部分が華族の財産的勢力から來て居たと云ふ事は爭はれない。然るに其の財産的勢力は今日に於て一般に云つて無である。ある一部の華族は其の財産を資本主義的企業に變形さして、華族と云ふよりも資本家として依然たる社會的勢力を保つて居る。第二號の華族は新興ブルジョワジイに寄生して其の立場を保つては居る。だが大部分は沒落しつゝある。そして十五銀行問題は彼等にとつて實に最後の止めをさゝれたものである。池田長康男が十五銀行問題は華族にとつて革命よりもひどい影響を與へたと云つて居られるのは眞相を穿つて居る。

× × ×

華族の大部分は地方に土地を持つて居た。これがそのまゝ持ち堪へたられたなら、今日の日本の華族は、英國に於ける地主貴族の如きものであり得たかも知れない。處が仄聞する處によれば、華族の不當な政治的勢力を失はしむる爲めに、主として伊藤公の考へであつたと云ふことであるが、華族に對して農村土地の賣却を獎勵したと云ふことである。地方に於ける都會地以外の土地を賣らしめたのである。地方に於ける今のブルジョワジイの中には、其の際整理土地を安く買つて太つたものも多數あると聞いて居る。これ實に華族の滅亡の第一步

た。かくして華族が受取つた土地賣却代價は一部分は證券投資となつた。一部分は商業資本となつた。仙臺侯が三十間堀で質屋を始め、某侯某々伯が吉原の妓樓に高利融通資金を投資し出したのは此頃の事である。而して大部分は都會地、それも主として東京に於ける、市街地への土地放資となつた。だが華族が商業資本を運轉すると云つた處で、勿論、當主自身が夫れに當る譯ではない。いはゆる三太夫が之に當つた。彼等は善意に運營に當つた處で士族の商法であつた。又惡意に之に當れば無論自利こそ圖れ主家の爲めに圖ることはない。私は頁數がないからこゝに後者の實例を一々擧げないが多くの材料を手許に持つて居る。又市街地の放資にしても東京市内には華族地代なるものが出現するに至つた。鎌倉に安い寺院地代がある樣なものである。借地人としては土地の原價を知つて居る。華族の側としては搾取が極めて拙だ。其處で地價の高騰に伴はない低率な地代が存する事になつたのだ。少しでも地代を引上げ樣とすると町内一致の反對に會ふ。強いて引上げ樣とすると一騒ぎ持ち上ると云ふ事になる。世間體がある。體面がある。其處で華族側の泣寢入りとなる。之が華族の衰亡の第二期である。試みに東京市各區に於ける所得稅納稅者中に於ける華族の地位の變遷を考へて見るがいゝ。第一期の初頭に於ては大抵の華族は各區に於て納稅者の筆頭にあつたものである。然るに第二期の末期に至つては彼等は既に前頭以下の地位に陷落して來て居る。彼等は必ずしも其の財產が絕對的に減損したと云ふ可からざる迄も相對的には減少したのだ。換言すれば、この期間の半分は其の財產を浪費したのでもあらう。だが後の半分は其の財產が舊狀のまゝにあつて之を增殖するを得ないのであつた。

しかも、其の間に於ける新興ブルジョワジイの財產增加率は異常のものであつた。だから、いづれにせよ、華族の財產的勢力は相對的に沒落しつゝあつたのである。華族衰亡の第三期はかくて、華族が有する處の市街所有地の整理に始まる。最近松平侯の濱町の整理を聞く。震災を期として名園蓬萊園を中心とした土地を整理された松浦伯には最近佐世保市内の所有地賣却が傳へられ、研究會の重鎭小笠原伯にはそれも極めて最近の風說として、舊城下小倉市内の所有地賣却が傳へられる。しかし、今茲に擧げたのは極めて沒落過程の徐々たる部類であつて、大抵の群小華族はとうの昔に市内土地の處分を了して、杉並町だとか何とか東京の郊外に土地を買ひ換へて住居も其處に移して仕舞つて居る。市内土地賣却と郊外土地買入の差金こそ大部分の群小華族食ひつなぎの玉手箱であつたのだが、勿論土地會社にしてやられる上に、殘つた金を生產的に利用し得る筈はないのであつて、結局は喰ひへらして仕舞ふのである。

市内土地の賣却に開けた華族衰亡の第三期の中葉は、前述の如くして行詰つた華族の打開策としての「御家重代の寶物の賣立」を以て更に特色づけられる。兩國は美術俱樂部の賣立である。小數の例外を除いて、家の系圖には特に祖先に關係を有する由緒ある品の外に、多少

の美術的骨董的價値を有するものを手許に置いてある家が何軒あるであらうか？　處で美術倶樂部の賣立は倶樂部に二割はとられる。散錢は多い。元來整理の爲めの賣立である。之等が彼等の安定を圖るよすがにならない事は言はずとも知れて居よう。かくして、沒落の交響樂は加速度にテムポを早める。宮內省は世襲財產解除の手續を簡易にする——と云ふ事になる。

×　×　×

以上は大體舊華族に就ての記述である。しかしながら明治初年の華族の社會的勢力の中堅は舊華族であつたのであるから、以下の所論を爲すに舊華族丈けに觀察を限定しても毫も差支はないと信ずる。だが併し舊華族中でも例外はある。たとへ其の相對的地位はすべつても依然として今日經濟的優位にある小數華族はある。侯前田利爲、侯鍋島直映、侯山內豐景、伯松平賴壽、侯德川義親、侯德川賴貞、公島津忠重、公毛利元昭、伯松浦厚、公島津忠承、公德川家達、侯細川護立、侯伊達宗彰、侯黑田長成、侯淺野長勳、伯阿部正直、伯酒井忠克、伯松平直亮、伯久松定謨、侯松平康莊、侯蜂須賀正昭、侯德川圀順、公德川慶光等が之に屬する。併し乍ら之にも朝鮮、南洋、樺太等に投資した資本主義的企業によつて其の財力を保つて居る某侯又は大規模農業經營によつて立つて居る某侯等いはゆる近代的ブルジョワジイと同じ範疇の下にあるものと舊時の不動產が餘りに莫大で、從つて、未だに、不動產を手放さずに徐ろに一般的な沒落過程を辿つて居る處のものとの二種類がある。しかし、そのいづれを通じても見得る現象は、彼等に於ては、近代ブルジョワジイと違つて、其の固定した經常支出が餘りに多額で經常收入を償つて行けないと云ふ惱のあることである。だが本論に必要なことは、兎も角も現今の華族に於て相當財的勢力を現有して居るものは總べて公侯伯であつて華族中の絕對多數を占むる子爵級は完全に沒落した又は沒落しつゝあると云ふことである。この事實と研究會に於て子爵團が中心勢力を占めて居る事實との關係は看過す可きものでない。尤も子爵級に於ても子內藤政道の如き例外はある。だが之は偶然のことである。「金は內藤肥後の守、御運は段々下り藤」と云はれた內藤家は、其の舊領內所有の藪の地に錫にアンチモニイが多量に埋藏されて居ることを發見された。彼は今や鑛業者として其の財力を復活し得たのである。

×　×　×

要するに以上の小數の例外を除いて華族一般としての殊に其の中で多數を占むる子爵級の既存的財力は急激に沒落し又は旣に沒落した。然らば彼等は之に如何なる對策をとつて居るか？

×　×　×

男長松、男赤松の如く實業界に進出して居るもの又子眞松の如く進出の過程にあるものがある。之は稀少ではあるが兎も角も其の方針は、總べての人に可能な譯ではなく共、合理的な方法であると云ひ得る。又子田中、子石川、子大河內、子河鰭、子大久保の如く學者としての方針をとつて居るものもある。之も何人にも可能であるとは云ひ

得ないが而も餘も妥當な態度である。共に肩書よりも實力を以て立たんとし、又多かれ少かれ國民に對する經濟的文化的貢献の任務を自覺して居るからである。だが大多數は左樣でない。次に第二類として擧ぐるものはブルジョワジイに寄生せんと試むる處のものである。

× × ×

近代ブルジョワジイは名譽を欲する。其處につけこんで華族はブルジョワジイとの結緣、それは必然的に財政的支持又は就職口の周旋と確保を意味する處の結緣を求める。金持から嫁を貰ふ華族、金持に養子をやる華族、金持に娘をやる華族、其の例は一々枚擧に堪へない。近頃の結婚の殆んど全部が夫れと云つて差支はない。華族の好きなのは殊に名古屋の金持に多い樣である。金融業者、、某の如きはどんな華族でも華族なら娘をやるが華族でないものには絕對にやらないと豪語して居た。其の娘は二人共華族に嫁して居る。名古屋出身の銀行家、、某の如きもあらゆる缺點は知りながら某華族の妹を後妻に貰つた。そして家の法事のある每に後妻の實家から當主子爵某を名古屋迄引張り出して式に列席さしたものである。其の出入、車馬、旅館に某子爵の張り札を憚らなかつた事は勿論である。子、、の弟が某大新聞社長の養子となつ て其の事業を繼承す可き地位にあることは茲につけ加へる迄もない。だが一歩進んで華族の株の賣買が行はれて居ると云つて差支ない樣な事態に迄立到つて居ると云つたら人は驚くかも知れないが事實である。

華族が養子をするには宮內大臣の許可を要し養子は華族の戶籍內にあるものなるを要することを原則として居る。だから倒れかゝつた華族の當主を隱居さして金持の子がすぐ其の後をつぐ事は一寸困難ではある。とは云へ一旦姻戚となつた金持の家から華族の娘の血統を引いたものを其の娘の實家の籍に入れる事は比較的容易であり一旦華族の籍に入つた以上は何處かの倒れかゝつた華族の家を嗣いで何某子爵と名乘る事は一投足の勞である。のみならず金持の娘が某華族の二、三男に嫁して後、倒れかゝつた他の華族の當主を隱居せしめて其の後を相續するの例は極めて多い。、、、屋の娘は子、、、、の庶子男に嫁し、如何なる原因か知らないが太平記にもある「落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩り」と云ふ、、子爵老夫妻を隱居せしめて、、子爵と名乘つて居る。非常に不如意であつた、、老子爵夫妻は、其の事の後、至極安穩に生活して居られた。某新華族の二男は地方のある富豪の女を容れ夫婦養子として堂上華族子、、の後を嗣がれた。昔しは華族の養子は血統と家系を不可分のものとして撰擇された。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。今後數年にして多數の華族否大部分の子爵華族はブルジョワジイの出店となるであらう。之もその貧窮化から來ることである。

× × ×

華族の窮乏は更に國民生活に最も有害な方面に活動を望ましむることとなる。政治上の特權即ち貴族院に於ける、、を利用せんとするこ

とである。華族の窮乏は一般的である。十五銀行休業の發表された翌日華族幾十名の三太夫が宮内省に集つて岩波庶務課長に抗議した。三太夫の中には「、、警告もしなかつたのは宮内省として華族保護の職責を全うしたものとは思はれない」と言つた相である。こうなつては華族は、、、、、、、もあつたものではない。宛然華族の百姓一揆である。だが事程左樣に十五銀行休業は彼等にとつて打撃であつたのである。沒落し行く華族一般の中にあつて先づ當分の安定を得て居たものすらも之に依つて其の根抵を粉碎されたものである。其の當時から私は華族の政治鬪爭は深刻化するものと見て居た。果して最近の研究會騷ぎは深刻化の一樣相を見せたのである。

× × ×

理論的に叙述せずとも最早事の次第は明かであらう。華族は貧窮化した。しかし舊時の遺制たる貴族院互選の特權を持つてゐる。而して二院制は嚴存する。

政府は貴族院をして政府案を支持せしむる爲めには貴族院殊に其の中心勢力たる華族團を操縱しなければならない。其の數的中心は子爵團である。子爵團は殊に貧窮化して居る。彼等の要求する處は、、である。こゝに於て研究會の幹部が日銀、勸銀、鮮銀、正金、臺銀、等の特殊銀行、日魯漁業組合、中央金庫等の特殊組合、其の他特殊會社の役員となつた事が當然の歸結であり、又政權と政府を通じて、政商、株屋に近づいた事も當然であるのだ。即ち簡單に言へば、彼等にとつて其の政治上の、、は生きんが爲めの、生活せんが爲めの、、となつて居る。

彼等が政治的、、に死活的執着を持つのもかゝるが故であり又其の政治的、、の運用に死活的鬪爭を試むるのもかゝるが故である。

× × ×

物故された研究會の幹部子酒井の立志談を語らう。子はしみじみ言はれた事がある。大學を卒業した時傾いて居た家運を挽回するのにどうし樣かと思つた。安月給取りではやつて行けない。結局早く研究會の幹部になるの外はないと思つた。研究會の幹部になるには其の時の幹部にとり入るの外はない。とり入るには遊仲間となるの外はない。遊仲間となるには碁を知らなければならない。彼は其處で勤勉な學生として今迄手にした事がなかつた碁を勉強し始めたのである。かくて當時の研究會の幹部故岡部子に知られたのである。そして子酒井は研究會の幹部として正金監査役として日魯漁業組合の組合長として晩年には其の家運を立て直したことである。

遞信大臣子前田は志を政治に立てゝ貴族院に入つた。しかし、子酒井が寧ろ實質を志したに反して政治的野心の方が旺盛であつた。恐らく子酒井よりは多少家に財政的余裕があつた故からでもあらう。

其の政治慾が中々實現されないにつれて彼の煩悶期が來た。彼は僕[illegible]信した。[illegible]思つた。彼はある安

上げて彼の美髯の末のそよぎを見た。本國堂は云つた「今のまゝでやつていらつしやい。今から八年の後にあなたは大臣になれます。」子前田は莞爾としてうなづいた。爾後星霜八年彼は終に大臣となつた。本國堂には金二千圓也の謝禮が屆けられた。震災で本國堂が燒けたら金二百圓の見舞金が屆けられた。清浦內閣の成立に當つて本國堂は再び彼の訪問を受けた。「今度も大臣になれます。」かういふ本國堂の保證を耳にして辭去した彼は大木伯の俠氣に依つて再び大臣となつた。本國堂は金四百圓也の謝禮を受けたのである。今も本國堂を訪れるものは部屋と云ふ部屋の楣間に彼の筆になる額を見るであらう。

以上は會々の二插話を以て華族の貴族院に於ける政治的活動の二要素を分析するものである。生活の爲めに、、にありつき度い要素と常人ならば大した事でもない財産を有して居ながら、その多少の資産の故に華族である地位を利して政治的野心を滿足せんとする要素、この二者の混合形態が貴族院に於ける華族の政團特に研究なのである。時代は變つた。何時迄も舊人ではあるまいと云つて彼等が表面に立たせんとする處の人は、學問もあり比較的世間で難のない伯堀田正恒とか男八條隆正である。だが實體は變らないから彼等はこゝにスポイル、システムを發案する。研究會系統の力によつて獲得したる地位利權の金錢的役得は之を研究會主腦者に分配又は共同使用に供する制度である。かくして研究會內部の遊蕩的ギアングは依然として存續す

の[illegible]である。小派には[illegible]あり、[illegible]やには木々會がある。即ち今迄の研究會は新舊閥の有產者野心家と提攜利權閥の苟合であつたのだ。此間に於ては二遊離閥の對立抗爭は妥協に終り、一閥と閥外華族の對立もうやむやに終つた。結局彼等の利益のアヂヤストメントさへ出來ればいゝのであるから。だが時代は貴族院の隅にも流れて來た。先づ公侯は火曜會に固つて研究會を離れた。彼等は青年であり、又概して有產者であるが故に強いて、、を求めず、高爵であるが故に強いて地位を求めない。又伯爵團中には、研究會內の子爵の多數勢力を利用しつゝあつた有產野心閥に對して之を批判するものが出來て來た。

彼等も概して有產者であり、又多少共時代に呼吸して居るが故に同じく強いて、、を追はないものである。子爵團の一部でも有產者として左迄、、を必要としないもの及び多かれ少かれ時代を正視するものは研究會子爵幹部の從來の態度を非難し始めた。是等いはゆる正義派は時勢を味方にして居るが其の數は小數である。

多數の窮華族は貧窮化して居る。殊に子爵級にあつて夫れが著しい。しかも子爵級は數的に優勢である。從つて彼等の一部は其の生活上の必要の故にこそ利權閥に合流し、又他の一部は舊利權閥を排して元に取つて代らうとする。

以上諸種の流の交流する處が即ち最近の研究會の紛擾であるのだ。

×　×　×

貴族院内に正論を唱ふるものがあるにもせよあらざるにもせよ、吾人の貴族院に對する根本的態度は敢て變ることがない。日本の政治に於て貴族院の力は偉大である。小數の者が貴族院なるものを通じて過大な政治的勢力を有することは、、である。だが一方に於て、貴族院内に於て舊華族勢力が數的に重要な立場にあり、其中でも子爵團が數的に優勢な地位にあり、而して其の子爵團が事實一般に云つて華族中最も貧窮化して居り、貧窮化して居るの故にこそ、其の數的勢力を利用して政權に苟合し、、漁りをやると云ふ事實が當面の政治上の弊害であると云ふ事は之を認めずには居られない。現段階に於て、貴族院が眞に社會的勢力の上層を反映し、眞に嚴正批判の立場に立つ職能を發揮する事を、一歩讓つて妥當だと考へても、社會的勢力のないものが多數を頼み、貴族院華族互選規則を通じて、政治的勢力を有して居ると云ふ事は其の目的に叶つたものではない。其の爲めには先づ貧窮子爵團の貴族院内に於ける數的勢力を減殺し、其の横暴を制する爲めに、子爵内部の人材的淸算、勢力の擡頭を促がす可く現在の互選規則の連記とあるを單記にしなければなるまい。又子爵團の數的優重を防ぐ可く現在の伯、子、男の各爵別互選を止めて其の全體の中から互選する樣に改む可きである。如何なる既成政黨も、議會政治確立の爲めに戰ふと云ふ以上は之だけの事は斷然敢行しなければならない。事で豫斷は出來ない。しかし、假に貴族院に日本の上層勢力を反映せしむ可しと云ふ立前で進むなら、結局貴族院を公侯、勅選、大學選出、多額納稅を中心的實質とするものに改め、其の權限を縮少し、畢竟英國式のものになり行くことになるのではあるまいか？　繰返して言ふ、華族の大部分は其の社會的勢力を失つた。社會的勢力のないものが貴族院互選規則あるの故にのみ、正確に言へば、互選規則改正せられざるの只その故にのみ、途方もない大きな政治的勢力を持つて居る。無產階級の彈壓には極めて勇敢な政友會も兩稅委讓に對する貴族院の反對は彈壓し樣としないで御機嫌を伺ふと云ふ有樣である。其の然る所以は舊貴族院互選規則があるからで、昔は御前で飯を食ひ今は互選で生命をつなぐ。と言つた處でしやれにもならない。或時期の來る迄は、吾人は貧窮化した有爵階級が其の無產階級としての立場に目覺め貴族院外の勤勞大衆と力を合せ、又正論派人格派が當面利權閥、政權閥を倒して、共に貴族院令改正に猛進せらるゝを俟つて已まない。

彼等は、本來は、其の政治的特權を利用することに依つてに非ずして之を放棄して我等の卒伍に加はることによつてのみ、改造に貢獻し得るものである。だが、或時期の來る迄、其の互選と貴族院議員の特權によつて貴族議員互選規則を改正し、自らの政治的勢力を放棄せん事を祈るものである。彼等はブルジョアジイと異り既に財的基礎を持たない。唯一に、其の政治的態度に依據し一一勢力を持ち且つ生きむとし[illegible]

新刊批評

伊藤久秋氏著「マルサス人口論の研究」

矢内原忠雄

本書の主要部分は「第一篇マルサス人口論の成立と其内容」及び「第二篇マルサス人口論の反響」より成る。第一篇は主としてマルサス人口論の解說にして、所謂マルサス人口法則の公式的引用に滿足せず彼の人口論の全體系に亘れる點、並に人口論各版の異同變遷に關聯せしめつゝ解說したるものなる點に於て、マルサスを讀む者への有益なる手引である。第二篇は人口論第一版出版當時より第十九世紀半スペンサーに至る迄、即ち大體マルサスの同時代の人々の、人口論に對する贊否兩論をば、英獨佛の學者に亘りて叙述論評せるものにして、著者の最も力を注ぎし處と見られる。著者は「以て多少なりとも未だ世に顯れざる批評家を紹介し得たことがあるならば著者の幸とする所である」といふ。併し乍ら「其議論は誤解と獨斷と無智の發表‥‥從來殆ど何人の注意をも惹かなかつたのは偶然でない」（二八四頁）と著者自ら語るが如き批評家の紹介等は寧ろ無用の骨董癖に類する。且つ著者の此處に於ける取扱は一個の人口學說史といふよりも寧ろ諸學說の羅列たる觀がある。

著者は大體に於てマルサスの辯護者である。併し乍ら著者の目的は、著者自身マルサスを批評せんとするにあらず、「マルサス人口論を主として其時代の反映に於て見むとする所にある。」その爲めになされたる人口論の解說は忠實にして成功せるものと認め得る。併し「其時代の反映に於て見む」とせ

言はざるを得ない。何となれば同時代の贊否兩論の批評家を羅列することを以て、マルサス人口論を時代の反映に於て見るものとは解すべからざる故である。著者は結論に於て言ふ、マルサス人口論は英國の國土とその空氣の中にはぐくまれたる生粹の生兒であると。而してその空氣とは功利主義と「ピューリタニズム」によつて强められた宗教的目的觀であると。かくの如き見解が時代の反映としてのマルサス人口論を說明するものとして至つて力弱きものたることは、本書第二篇が自ら之を證明する。蓋しかくの如き思想的背景はマルサスに對する贊否兩派の論者に共通するのみならず、佛獨の諸學者中にも亦マルサス贊成家を多く見るのである。又何が故にマルサス人口論が多くの反對論に拘らず一世を風靡し得たるやを說明するものでもない。「時代の反映」は社會の經濟的政治的現實に於て、卽ち經濟史的政治史的に之を把握するを要する。

著者はボナーに私淑する如し。本書はボナーの名著に於ける鮮明さには及ばざるも、マルサス人口論の解説及び諸批評家の紹介たる限り、マルサス研究上有益なる一寄與たるを失はない。(東京市日本橋通・丸善株式會社發行・定價三圓三十錢)

坪内逍遙博士著

シエークスピヤ研究栞

平田禿木

今となるともう一と昔も二た昔も前のことであるが、沙翁生地のストラトフオードでクリスマスを過し、歸途バアミンガムに立ち寄つて、市會堂圖書館内の一室に、一萬何千卷といふ巷然たる沙翁文庫の大蒐集を見、一體この詩人の研究なぞといふものは、何處から手を着けたらよいであらうと、茫然自失したのであつた。今また逍遙博士のこの著を手にして、漫然とその頁を繰つて行くと、[illegible]の精粹のみを拔いたものであらうに、每章のうちに擧げられてゐる參考書類なるものは、その數殆ど千にも近いであらう、またしても自分は暫く、彼のバアミンガム市會堂圖書館内の一室に立つたと同じ感を抱いたのであつた。が、章を逐ひ順を正して、靜にその書に讀み耽つて行くと、老博士は實に勿體ない程の懇切をもて、門より堂へ、堂より奧へと、私達を導いて下さるのに驚いた。栞、手引草といふもので、斯くまで行き屆いた、親切の籠つた書物を自分は嘗て見たことがない。

して、その指導振り、案内振りには些かの危な氣もない、それもその筈、老博士は沙翁研究といふ一大殿堂の、隅々隈々に至るまでもよく精通されてゐるのであるから。さながらのあの迷宮も、博士の手で訓詁本位の研究、文學本位の研究、傳記本位の研究、實演本位の研究といふ風に、それ〴〵の廻廊に分たれて、その部に關するもの悉く、袋の物を[illegible]明振りといひ、材料の扱ひ方といひ、そのこなれにこなれ切つてゐる工合ひ、自分はこれに對して、唯「闊然」の一語を呈するより外ない。民衆文庫(ピープルス・ライブラリ)に收められたケヤ博士の「中世英文學史」と、牛津大學フオード記念講演の一つである、サア・レズリ・スティイブンの「十八世紀に於ける英文學並に社會」の兩著は、斯うした點で、自分の常に感嘆措く能はざるものであるが、博士のこの著に對しても、自分は唯同樣の感に打たれるのみである。

この著を前にして、自分はまた、シドネコルヴインのキイツ傳や、ルウカスのラム傳などを想起する。沙翁に關する一切を網羅して、細大洩らすことなく、宛らに歐米に於ける斯學研究の一大集成であるからである。各部門に亙る參考の書の如きは、最近、最々近のものまでも悉く擧げられてゐるに見ても、一方にその戲曲翻譯といふ重い事業を控へて、博士が如何に細心に斯學の發達に注意[illegible]

引草といふも、實は博士謙讓の命名であつて、四十年來その心血を注がれた苦心研鑽の結晶に外ならぬのである。この點に於て、自分はこの書を、今日に於ける最もアップ・トウ・デエトである一大沙翁辭典と見たい。既に一種の辭典とも見られる以上、そこになくてならぬは完全なその索引である。この書に索引のなきは、龍を畫いて眼を點ぜざる如き憾みがある。博士監修の下に、この缺陷の一日も早く補はれんことは、この書に對する自分望蜀の期待である。

書物の性質として、諸家の見を祖述して、それに對して一に妥當公平の批判を垂れるに急に、博士は如何にも愼ましやかに、その一家の私見を洩らすを控へてゐられる氣味のないでもない。が、流石に爭はれぬもので、嘗ては身親しく創作の境に出入され、我が文化、歌舞伎の史に精通されてゐる逍遙その人の着流し姿が、上に羽織つたガウンの蔭から、隨處にちらほらの見えてゐるのは、この書を繙く者に取つて此上もなく嬉しき極みである。(東京市牛込區・早稻田大學出版部刊行・定價金參圓)。

吉田英雄著「日本社會經濟編年史」

本庄榮治郎

今より十年前を回顧すると日本の社會經濟史に關する研究の發表は誠に隔世の感がある。斯學の研究に從事する我等としては同攻の士の激增したことは誠に喜ばしき限りであり、注目すべき新著の月々に公刊さるることは慶賀に堪えぬ所である。最近公にされた吉田英雄氏の「日本社會經濟編年史」も實にその一つである。著者は二十四歲にしてこの大著を成した。著者自ら本書は馬車馬式强行軍の激しき戰の幾連鎖の結果であり、勞働と研鑽の傍ら筆硯に親しむ數年間の血の出るやうな生活と戰ひて捷ち得たる結果であるといふ。その奮鬪の狀を想見し得ると共に、前途の進展に大なる期待を持つ次第である。

歷史記述の形式には、年次を追うて事實を記載する編年體のものと、一事件の顚末を明かにする因果體のものとがある。編年體のものは例へば日本書紀や德川十五代史の如きそれであつて通常編年史といふもの是れである。事件の內容を簡潔に概記し、これを年次を追うて表の形式にて記述したものは、從來之れを年表と稱して居た。吉田氏の新著は右の觀念に從へば年表であつて、編年史とは多少體裁を異にする如く考へられる。然し著者には自ら別の見解があつて、殊更に之を編年史といはれたものであらう。

本書は瀧本博士の序文にもある如く、歷史記錄の類を一々檢討するの勞を省き、精細明確に史實の要領を擧げられたものである。また圓谷氏の序文にいへる如く、我國社會經濟上の重要なる記事は擧げて洩す所なく、然かもその一つ一つに史實の出所を示して居られるものである。然し文字通りにそれ等のとを實現するとは何人にも不可能ではあるま

いかと思ふ。本書に於ても例へば雄略紀二十三條に大連等民部廣大にして國に充盈すとあること、大化二年八月の田を均しく民に給すへきことの詔、白雉三年に班田を行はれたこと(以上日本書紀に出づ)延暦十九年十二月に大隅薩摩地方にて初めて班田せしこと(類聚國史に出づ)天平十五年五月に墾田は永世民の私財たるべき旨定められたこと(續日本紀に出づ)等は上古の土地制度を理會する上に極めて重要なる出來事であるが本書には所見なき如くである。また享保七年七月に吉宗が參勤交代制度に改正を加へて上ヶ米を徴したこと(德川實紀に出づ)も社會組織上重要な事件であるが、本書には記載がない。次に引用書の如きも原本を引用された場合と、他書よりの孫引の場合とでは精確さに非常な相違があると思ふ。この點を區別するとも必要であらう。また重複記載の例(二一〇頁一三行と二一一頁六行との如き)或る年の途中に改元されたことを考慮されざ[illegible]も、寛文十三年九月廿一日に延寶元年と改元されたこと)もあるやうである。二五八頁以下の公武の欄が德川吉宗となるべきが德川綱吉となつて居ることは誤植ではあるが遺憾である。德川時代の記事中雜文字の多いことは瀧本博士の序文にも指摘された處であるが、これは德川時代の通用語に復活して欲しいものである。猶明治以後の記事に據るべき正史なく年鑑報告書の類に依つた旨が記され、最近の法律でも大原社會問題研究所資料彙報を引用されてゐるが、法令の如きは寧ろ官報によつては如何であらう。明治初期にも太政官日誌や法令書があるではないか。又德川時代に約三百頁を費し、大正時代に約百五十頁を費しながら明治時代に僅か四十五頁しか與へられなかつたのは如何なものであらう。猶目次に時代別の外、年號索引を加へ柱にも年號を加へて欲しいものである。

年表の記載方法として私は芳賀博士の新撰年表や[illegible]氏の美術年表の如き[illegible]濟一般・産業・貨幣・交通・社會・政治・人事・其他の横欄を設け、事件を類別記載する方法である。この方法によれば、例へば德川時代の貨幣制度に關する事實を知りたい場合は、貨幣といふ横欄だけを見ればよいのであるが、然らざる場合は德川時代全體の記事を一一通閲せなければならぬ不便がある。勿論右の方法による場合は紙幅の増大を必要とするが、それは止むを得ないことである。

以上は吉田氏の新著を所々披見したときの所感と希望とを述べたのであるが、それは全然望蜀の感に過ぎない。吉田氏の涙ぐましき努力によつてかゝる便利な年表の編述されたことは實に學界の至幸である。實は數年前私が大日本貨幣史を校訂覆刻しその年表を數氏の協力によつて編纂した際、上述の類別記載の方法による日本經濟史年表を私の研究室に關係ある諸氏、大學院學生諸君の協力の下に編纂したいと思つて居たのであつたが、未だ實現を見るに至らなかつた。今吉[illegible]

……まで蒐集されたる如き感があり、本書によつて學界の享くる利益の甚大なるを思ひ、吉田氏の努力に感謝と敬意とを表する次第である。

終りに一言したい。それは改造社の山本實彦氏が、一方に圓本によつて圖書の普及を圖らるゝのみならず、かゝる難事業の出版を引受けこれを敢行されたことである。世には需要多き圖書のみに着目して出版する者が少くないため、注目すべき特殊研究や面倒な出版物は、それが學界を益すること甚大であつても中々出版せられぬ傾がある。然るに改造社は必ずしも需要の如何を問はず種々有益なる圖書を出版されてゐる。先年私等の關係した近世社會經濟叢書の如きもその一例であつて、營業的にはお氣の毒なことを御依賴したものであつた。本書の出版の如きも山本君の意圖を知るに足るものである、この機會に同君に對しても敬意を表したいと思ふ。

（東京市芝區愛宕下町・改造社發行・定價八圓）

新刊紹介

◆**日本童話選集** 第三輯一九二八年版（童話作家協會編・現代童話作家三十五名の各自選の粹を拔いて集成されたるもの、各篇毎に一流畫家の挿繪をはさみ高雅である。定價三圓七拾五錢・東京日本橋通三丁目・丸善）

◆**東方主義へ**（室伏高信著・定價一圓八拾錢・東京麴町下六番町一〇・平凡社）

◆**政治思想の變遷**（高橋清吾著・プラトン、アリストテレスの政治思想より、現今のレーニン、ムッソリーニの獨裁政治に至るまでの變遷を遂次的に述べてある政治學入門への手引書であらう。定價四圓二拾錢・東京市外中目黑五八二・章華社）

◆**唯物辯證法批判**（古谷榮一著・マルクス主義の哲學的基礎を破壞する目的を以つて著述された眞面目な研究である。定價一圓八拾錢・東京麴町下六番町一〇・平凡社）

◆**草木虫魚**（薄田泣菫著・定價一圓八拾錢・大阪市西區靱上通一ノ三一・創元社）

◆**感傷詩集　鏡**（本田親男著・定價七拾錢・東京市外瀧谷町上通一ノ二一・さめら書房）

◆**大安住の地を求めて**（堂屋敷竹太郎著・定價一圓八拾錢・東京麴町下六番町一〇・平凡社）

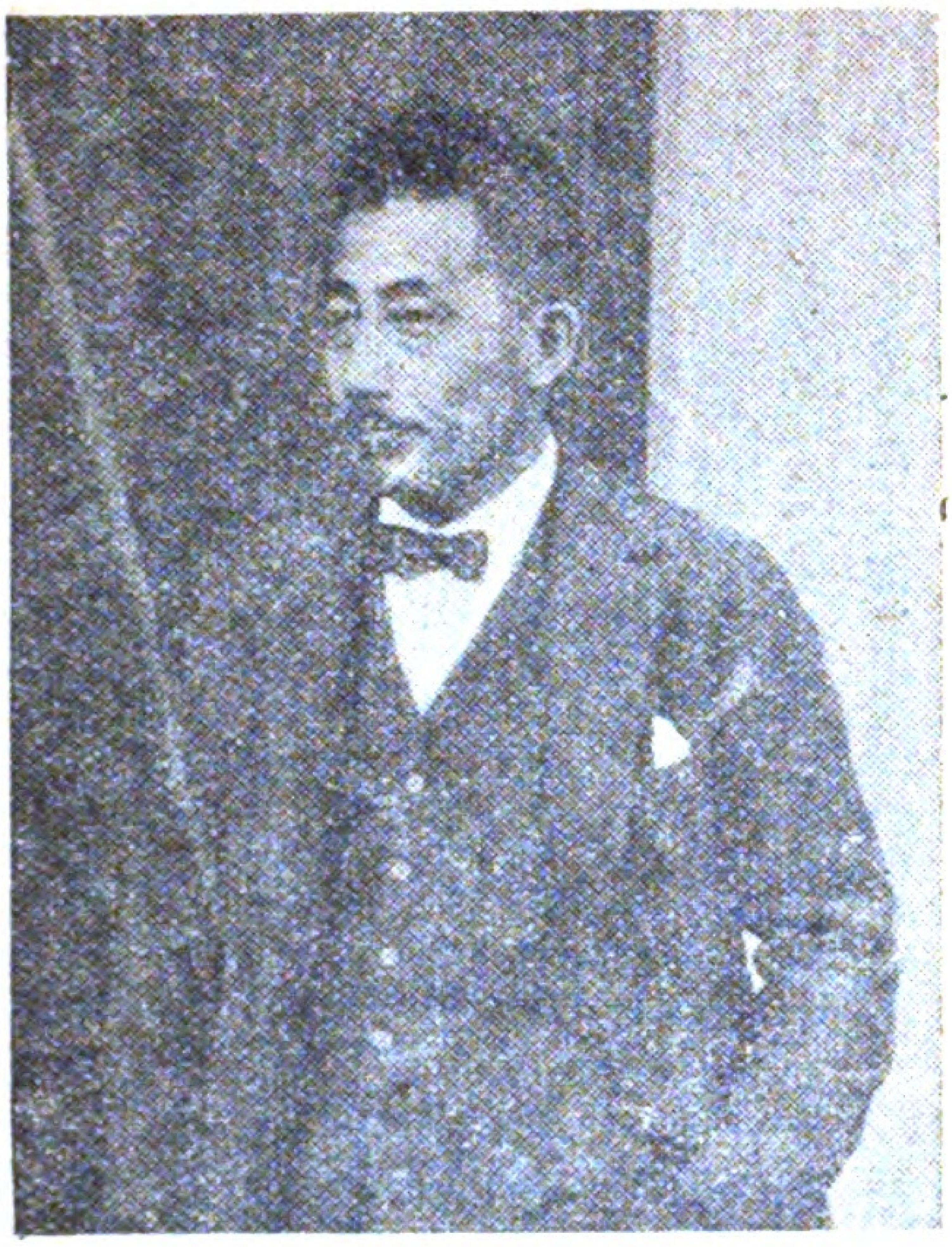
◆**比選と婦選**（坂千秋著・定價一圓・東京京橋加賀町九・帝國地方行政學會）

◆**詩集　鱗**（厚見他嶺夫著・定價一圓二拾錢・東京本鄉四ノ四・文武堂書店）

◆**農村社會問題と教育**（田淵藤藏著・定價一圓八拾錢・東京麴町下六番町一〇・平凡社）

小山内先生の死に會つて

土方與志



逝ける小山内薫氏

小山内先生は一昨年ソヴエエト・ロシヤ革命十週年祝典に列して歸朝後、病を發してつひに去る十二月廿五日、演劇其の他藝術方面に於ける不斷の研究と犠牲的な活動の幕を閉じて永眠された。

此の死は親しく先生を師とし又築地小劇場に働いて來た我々のみならず、多難な日本の劇界、藝術界にとつて大きい衝動であり、惜みつくせない損失であらう。

今改めて、小山内先生の一生を顧ると其の餘りに多方面にわたる功績に目を見はらなければならない。

明治三十二年第一高等學校に入り、帝大英文科に進まれた頃から、其の後二十餘年のめざましい活動は始まつてゐる。

詩人、小説家として又海外文藝の紹介者として其の活動は開始された。又伊井蓉峰氏に聘せられて眞砂座には入られたのも其の頃で演劇の實際家としての生活も此の時から始まつてゐる。

弟修業は此の時の眞砂座の道具裏で照明の水抵抗器を案配し、濡れたコードを握つて電氣に痺れながら豆電球の螢を明滅させる事等を始めとして十分に體驗された。

日本新劇史上最も輝やかしい運動と云はるべき自由劇場は市川左團次氏との協力によつて、明治四十二年に着手され、坪内博士の文藝協會と竝んで日本の劇界に潑剌とした黎明をもたらした。

「ジョシ・ガブリエル・ボルクマン」を始として、「寂しき人々」「星の世界」「夜の宿」等々の演出を完成し又「歡樂の鬼」「浅草觀王堂」「第一の曉」等の作者、長田氏、吉井氏、秋田氏等の當時の新進劇作家を紹介した事に當つての先生の努力と戰と當時の一般の社會と劇界の情勢とを考へ合せる時先驅者として邁進された先生に今日の劇場人たる我々は尊敬と感謝とを捧げなければならない。

大正元年最初の外遊を中心に更に先生の活動は鋭鋒を加へ、新劇、歌舞伎新派等を通じて少くとも今日東京に存在するものゝ最大多數の劇場或は劇場人で先生の指導啓發を受けな

年前、勞働運動と演劇の結合をはかつて勞[illegible]盟のS氏に當時戯曲作法について先生の指導を受けてゐた平澤計七氏をとほして提議された事等があつたと云ふ。先生は早くから社會全般に渉つての演劇活動を意圖されて來た。猶、キネマの先覺として松竹キネマに入り同研究所を起し理論と實際の兩方面に於いて日本の映畫界に指針を與へられた。

ラヂオ、發聲映畫等にも先生の進んだ研究は其の機運に力を與へた。劇作と評論、飜譯等に於いても尨大な業績が殘されてゐる。

大正十二年松竹との絶緣後一時實際運動から退かれた先生は、除ろに歐洲大戰を中心としての萬國的な社會思想、演劇其の代文藝諸藝術の變化に注目し研究を遂げられた。

築地小劇場の創立後同人としての小山内先生は四十數編の戯曲の演出者であつたのみならず演劇の理論と實際の指導者として我々の師であり又最も練達な共動者であつた。

云ふまでもなく、日本の新劇界は未だ技術的に未熟であり、政治的に經濟的にむしろ絶望的に困難である、先生程に其の困難を嘗めつくした劇場人は居ないであらう。我々は先生の[illegible]深い理解と指導に信頼して[illegible]を共に成長させて來た。

最近改築後の築地小劇場の國性爺合戰以後の四興行はロシアから歸朝後の大患後やゝ健康を回復された先生の發意によるものであつた。これに對する樣々な批評は築地に加へられた。併し是等を前提として今年の築地の活動に對して先生は多く期する所があつたやうである。

日本に於ける唯一の常設的新劇場としての築地小劇場の使命に對して如何なる抱負と計畫とを持たれてゐたかは今となつては詳らかに知る事を得ないが常に築地小劇場に對して最も廣く、最も遠きを思はれてゐたと信ずる。

ソヴエエト、ロシア訪問後の先生の新演出を見る事の出來なかつたのは甚だ遺憾である。

昨年、熊澤復六氏によつて飜譯されたア・トルストイの妖僧ラスプウチンは其の準備の爲めにされたものであつた。其の計畫に對して先生は築地小劇場全員に對して少くとも三ケ月の訓練と研究を要する事をのべられた。この事は先生の健康等の事情から實現するに到らなかつた。それは單なる試みとしての場合を指したのであつてもつと根本的に新しい演劇[illegible]如實にすべてに組織立たれ今年あたりから築地小劇場の實際事業に影響をば現したであらうと思はれる。

ゴルキー、チエエホフ等の演出者として、あくまでも寫實的演劇の技術的訓練の嚴格なる主張者であり演出者中心の綜合藝術主唱者であつた先生は同時に立體的な動力的な劇場的主張に對する肯定者でもあつた。

死の一週間前日本の劇場人があまりにギリシヤ劇の研究にのみ偏した事を擧げ今年コメデヤデルアルテの研究を共にする事を話し合つた事等を考へ合せて又更に先生の死は惜まれるのである。

小山内先生を失つた築地小劇場は如何に進むべきか、私としては約五年間の習練によつて得た技能を集成し現代劇場としての演目の合目的性、觀客層に對しての目標の確立、劇場人としての素質と技能の高揚に資すべき研究機關の活動等、小劇場内外の協力によつて成し遂げ此の大きな損失に對する方策とし度いと思ふ。かうしてのみ小山内先生の如き最も多能な演劇人を失つた築地小劇場に存在の意義をもたらすものである。築地小劇場に對して同情と關心とを持たれる人々に對して今後の批判と鞭達とを乞ひ度い。

勝海舟の事など

長與善郎

海舟と南洲

病中の感想はいろ〳〵あり、又多く忘れたが、僕はまづ最近に讀んで感銘の新たな「氷川清話」の事から書かう。「氷川清話」と云へば晩年の海舟翁に近侍した吉本襄と云ふ人が翁の經歷談と隨想とをその口づから書きうつした忠實な記錄であり、もう今から卅年も前に出版された衆知の名著である。

此秋僕は初めてこの衆知の書を讀み、實に近來にない感動をうけ、多くの事を啓示された。餘り讀書家でない僕も、たまにかう云ふ良書を讀むと今更のやうに本にもいゝものがあるものだと思ひ、この名著である割り合に現今の人々には存外「衆知」でないらしい本を讀む事を會ふ人毎に勸めてゐるわけである。

勿論今時の、マルクスがどうのかうのと云ふ靑年達が海舟や南洲に眼をくれない事は一向あやしむに足らない。僅かに時代の違ふ僕など

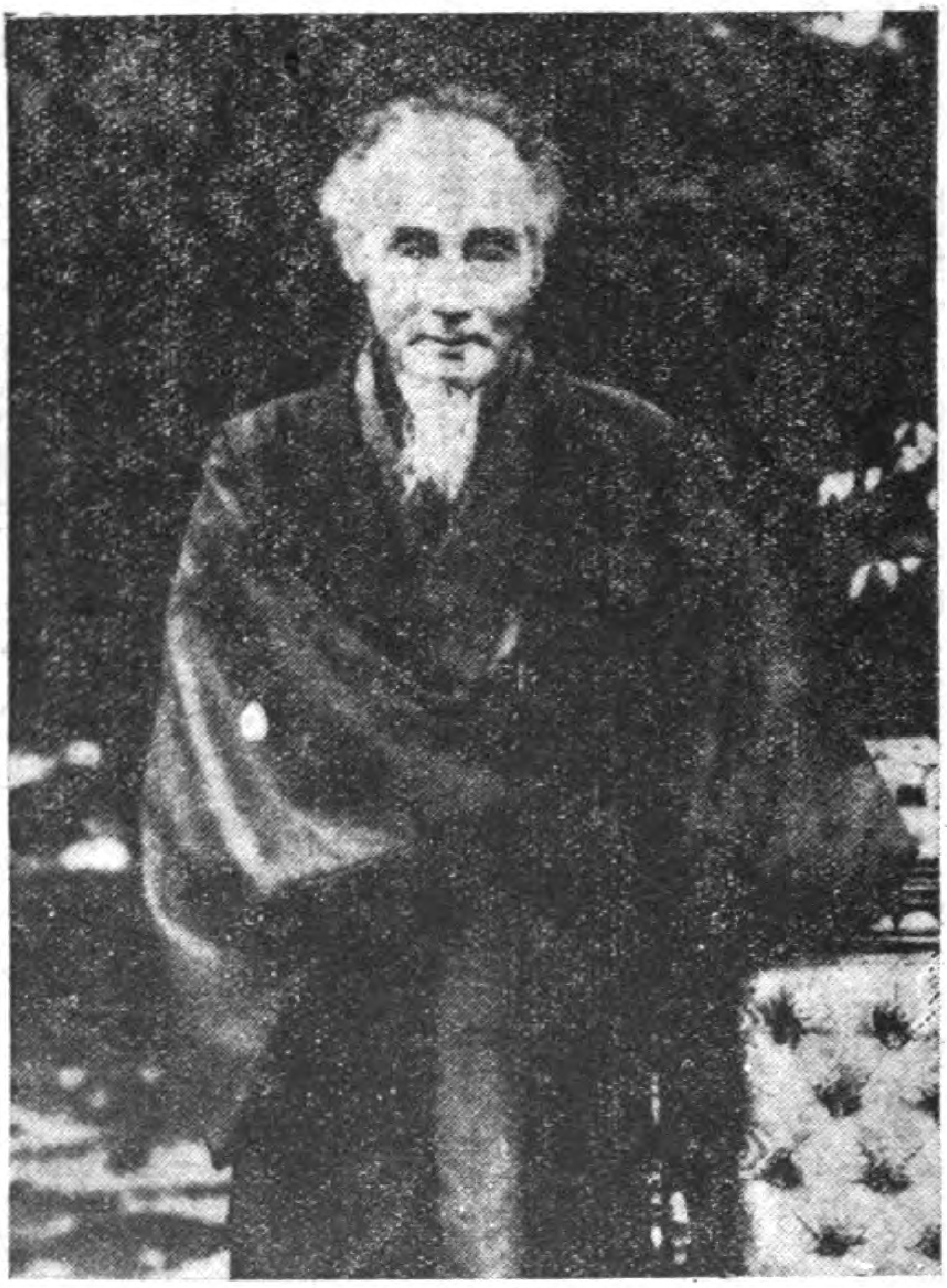
云ふのは、軍人である南洲が單に國家主義者以上のものでないからと云ふより、むしろ只、此「薩摩つぽの神樣」の崇拜者と云ふ手合ひが大抵僕らの知る範圍では定まりきつた頭のわるい、幼稚な野心家で、それが又いやに豪傑然と幅を利かしてゐたりした事からそいつらを輕蔑する行きがゝり上、云はゞ袈裟まで嫌ふと云ふごく簡單な旋毛曲りから本尊の南洲まで何となく臭くなつて了つたわけである。が、そこへ行くと海舟はさう云ふ擔ぎ屋が少かつただけに、毛嫌ひをされる心配もなかつた。むしろ海舟には薩長人の如き藩閥の感じがないためもあらうが、どことなく臭味がなく、一種すつきりした、爽かな氣持ちがもてるのだつた。

無論海舟も藩閥の總本家である德川を背景にして立つたとは云へ、それは他の藩の士が勝つた官軍の景氣に乘じてぞろ〳〵立つたのとは大に感じを異にしてゐる。あの際に及んで敗軍の幕府と江戸百五十萬の運命とを背負つて立つと云ふ事は既に云ふまでもなく悲壯である。

でも、個人としては別に驚く程の人物でもなかつたけれど、彼等は王政維新と云ふ氣運に乘じて來たからおれも到々閉口したのよ。併し氣運の潮勢が次第に鎭まるにつれて人物の價も通常に復し、非常にえらく見えたものも案外小さくなるものさ。」

尤も氣運の立ち場が對等で彼が「閉口」せずに濟むだら日本歴史は最も壯觀な一幕を失つた事になる。西郷の事は、しかし彼はいつも口を極めてほめてゐる。

「おれは今までに恐ろしいものを二人見た。それは横井小楠と西郷南洲とだ。横井は西洋の事も別に澤山は知らず、おれが教へてやつた位だが、その思想の調子の高い事はおれなどはとても梯子をかけても及ばぬと思つた事が度々あつたよ。おれは竊に思つた。横井は自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたらそれこそ由々しい大事だと。」



勝海舟肖像

「島津齊彬公はえいら人だつたよ。西郷を見拔いて庭番に用ひた處なぞはなか〳〵えらい。おれを西郷に紹介した者は公だよ。それ故廿年も以後に初めて西郷に會つた時に西郷は既におれを信じてゐたよ。云々」

「江戸城受渡しの時官軍の方からは豫想通り西郷が來ると云ふものだからおれは安心して寢てゐたよ。すると皆の者はこの國事多難の際に勝の氣樂にも困ると云つて呟いてゐたが、なに對手が西郷だから無茶な事をする氣遣ひはないと思つて、談判の時にもおれは慾は云はなかつた。只幕臣が饑えるのも氣の毒だからそれだけは賴むぜと云つたばかりだ。云々」

感じがあるので序に一寸寫して了ふと

「當日おれは羽織袴で馬に騎つて從者を一人つれたばかりで薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つてゐると西郷は庭の方から古洋服に引つ切り下駄を穿いて、例の熊次郎と云ふ忠僕を從へ、平氣な顏で出て來て、これは實に遲刻しまして失禮と挨拶し乍ら、

敗に通つた。その様子は少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。云々。」

どうも誰でも知つてゐる本の抜き書きをして頁を埋めるのは悶々しくて氣がひけるがどうせ乗りかけた舟だし、まんざら無意義な事とも思はないから、今度はもう少し當時の海舟の氣持の窺はれる言葉を引いて見やう。

「萬般の責任を一人で引きうけて非常な艱難にも堪へ忍び、そして綽々として餘裕があると云ふ事は大人物でなくては出來ない。こんな境遇に居つてはその胸中の煩悶は死ぬるよりも苦しいが、併し苦しいからと云つて事局の如何を顧みず、自分の責任をも思はず自殺でもして當座の苦を免れうとするのは畢竟その人の腕が鈍くて愛國愛民の誠がないのだ。即ち所謂屑々たる小人だ。かう云ふ風な潔癖と短氣とが日本人の精神を司配したものだから、この五百年が間の歴史上、逆境に處して平氣で始末をつけるだけの腕のあるものを求めてもおれの氣に入るものは一人もない。云々」

「死を怖れる人間は勿論談ずるに足らないけれども、死を急ぐ人もまた決してほめられないよ。日本人は一體に神經過敏だから必ず死を急ぐか、又は死を怖れるものばかりだ。こんな人間は共に大事を語るに足らない。元龜天正の間は日本武士の花だつた。併し當時に只死を輕んずるばかりを武士の本領とする一種の弊育が行はれ、一般の風が事に臨

うになつたのは實に惜しいものだ。

支那は流石に大國だ。その國民に一種氣長く大きな處があるのはなかく短氣な日本人などは及ばないよ。云々」

簡單な事のやうだが、彼の人間の出來てゐる事と賢さとはこれだけの中にもひらめいてゐる。

「氷川清話」を讀んで先づ最初に感ずる事はその意氣の盛なる事だ。人生意氣に感ずとか云ふが、實にその天を衝くばかりの勢ひには打たれる。あの意氣だけを見ても、今の人間はと云ひ度いが、自分が盜じられる。初めて自分の教へた生徒だけで、而も彼自身は大病の最中に、二三百噸の小さな船で、とう／＼アメリカまでおし渡つたあたりは聊か暴虎馮河にも近いが、彼の意氣は普通の人の破滅になる處をも飛び超えて了ふ。王政復古以後の晩年は、自然閑散な身となつて悠々餘生を樂しむだが、それ迄の何十年と云ふものは殆ど間斷ない眞劍勝負、死の門のくゞり續けであつた。死なゝかつたのが實に不思議である。妙に運の強い處があつた。

意氣の盛なのと同時におどろくのはその度胸、豪膽さである。勇氣である。これは勿論膽力を練ると云ふ事がまづ修行の第一歩であつた時世の關係にもよるし、彼自身も靑年の時にやつた劍術と禪とが自分の土臺となつたと云つてゐるが、併し之も素質があつての事で、又智慧があつてこそ生きる事である。初めて長崎との談判に出張で京都か

せまんまと長州の代表者をまるめて[illegible]は概とも云へぬ切れ味である。卅歳位の時には彼はもう立派に人間が出來上つてゐた。日本を呑んでゐた。

もし幕府にして彼を本當に認めて夙く登用するだけの知者を有つてゐたら幕府はつぶれずに濟んだかも知れない。結局大厦の崩るゝ處一木の支へられぬ處としても少くともまだ二三十年は壽命があつたであらう。歷史の事はくはしくは知らないが、どうも當時幕府の上役が用ひ得なかつた事は事實であつたらしい。德富蘇峰に井伊大老をも存外つまらぬ人物であつたらしく書いてゐたが、海舟はアメリカから歸つて來て浦賀へ着いて、始めて大老の死を聞いた時、幕府はもうおしまひだと嘆息した相だ。つまり彼はせめて井伊大老だけを賴りにしてゐたのか知れない。その井伊まで殺されて了つてはもう幕府に自分の味方、登用者は無くなつた、從つて幕府もお仕舞ひだと思つたのかも知れない。

海舟は維新の大役以前にも勿論用ひられてはゐるが、それは長州との談判以外には多くは對外國との切羽詰つた面倒の起つた場合で、國內の大事件には存外使はれてゐないらしい。つまり海軍奉行として丈けしか働く範圍を與へられてゐない。之は明かに幕府方の上役の嫉妬である。(もし慶喜が暗君であつたら彼は愈々不遇であつたであらう。)いつも、例へば伏見鳥羽の戰の前と云ふやうな大事な時には閉門を仰せつかつてゐたりなどしてゐる。あんな時に彼を海軍から陸へ廻はして[illegible]しめたら、流石の西郷も、五倍の兵力を有する敵に對して、あゝ易々とは勝てなかつた事は請合ひである。そして事によれば世は未だに德川のものかも知れない。

品川でいよ〳〵海舟が南洲と差し向ひになる事になつた時にはもう萬事は休して了つた後の事である。海舟は腹の中で馬鹿にしてやがると思つた事であらう。勿論幕府方の大將となつて打つて出て、血の雨を降らして官軍と勝敗を決するなんと云ふ事はどつちにしろ彼の望むところである筈はない。家康でも三成でもない彼はもつと新しい文明な爲政家、平和の經綸家である。萬止むを得ない場合には彼は武將として立つても恐らく南洲位の腕はふるひ得たでもあらうが、さう云ふ點は何と云つても武人肌である南洲とも大に違ふ樣だ。討死をして一方からほめられる事も、勝つて南洲の首を取る事も何れも彼にとつて有難く無かつたに相違ない。むしろ死の覺悟は同じであるにしても品川で談判して穩やかに降參した方が云ふまでもなく本望だつたであらう。彼の面目はかくしてこそ十分に發揮されたのである。

その面目のうかゞはれる言葉を一々寫してゐては限りはないが、なほ二三紹介すると

「維新の頃には妻子までもおれに不平だつたよ。廣い天下におれに贊成するものは一人もなかつたけれど(山岡や一翁は後から少し分つた樣だつたが)おれは常に世の中には道と云ふものがあると思つて樂しんでゐ

た──おれなどは生來人がわるいからちやんと世間の相場を踏んでゐるよ。上つた相場も何時か下る時があるし、下つた相場も何時かは上る時があるものさ。その上り下りの時間も長くて十年はかゝらないよ。──その上り下り十年間の辛棒が出來る人は卽ち豪傑さ。おれなども現にその一人だよ。

全體大きな人物と云ふものはそんなに早く現はれるものではないよ。通例は百年の後だ。今一層大きな人物になると二百年か三百年の後だ。それも現はれると云つた處で今のやうに自叙傳の力や何かによつて現はれるのではない。二三百年もたつとちやうどその位大きい人物が再び出るのぢや。そいつが後先の事を考へて見てゐる內に、二三百年も前に、丁度自分の意見と同じ意見を持つてゐた人を見出すのぢや。そこでそいつが驚いて、なるほどえらい人間がゐたな、感心な人物だと騷ぎ出すやうになつて世に知れてくるのだよ。知己を千載に待つと云ふのはこの事さ。今の人間はどうだ。今の事は今知れで今人にほめられないと承知出來ないと云ふ××××の小さな奴ばかりだらう。云々」

彼にとつては處世は卽ち處生であつた。素より謂ふ所の思想家でも哲人でもないが、而もその思想、人生觀の血のしたゝる體驗から生れて強く實地に生き且つ見識の卓越してゐるのには全く感服する。そして實に融通自在、人生の本當の機微に徹してゐる彼は、體裁のいゝ理屈をこねる學者が大嫌ひである。

懸命になるけれどもこれが一番毒だ。世間に始終有り勝ちの困難が一々頭腦にこたへるやうではとても大事は出來ない。こゝは支那流儀で不氣で濟ましこむだけの餘裕がなくてはいけない。さう一生懸命になつてはとても根氣が續かん。世路の險惡來つて坦々たる大道の如くなる鍊磨と餘裕とか肝要だ。」

「人間長壽の法と云ふも外にはない。俗物には飲食を節して適度の運動をつとめなさいと云へばそれでよいが、併し大人物にはさうはいかない。見なさい。おれなどは何程寒くつてもこんな薄つぺらな着物を着て煎餅蒲團の上に坐つてゐるばかりで別に運動と云ふ事をする譯でもないがそれでも氣血はちやんと規則正しく循環して若い者も及ばぬ程達者ではないか。さあこゝが所謂思慮の轉換法と云ふもので養生の第一義だ。つまり綽々たる餘裕を存じて物事に執着せず圓轉豁達の妙境に入りさへすれば運動も食物もあつたものではないよ。」

「全體何事によらず氣合と云ふ事が大切だ。この呼吸さへよく吞み込んで居れば假令生死の門に出入しても決して迷ふ事はない。──所で氣合と云つても口では云はれないが凡そ世間の事には自から順潮と逆潮とがある。隨つて氣合も人にかゝつてくる時と自分にかゝつてくる時とがある。そこで氣合が人にかゝつたと見たらすらりと横にかはすのだ。もし又自分にかゝつて來たら油斷なくづん〳〵推して行くのだ。併しこの呼吸が所謂活學問で、とても書物や理屈ではわからない。」

まない。單に道と云つても厚薄濃淡の差がある。然るにその一を掲げて他を排斥するのはおれの取らない處だ。人が來て囂々とおれを責める時にはおれはさうだらうと答へておいて爭はない。そして後から精密に考へてその大小を比較し、この上にも更に上がある事を想ふと愉快で堪らない。云々々々。」

「一人はよく方針々々と云ふが、方針を定めてどうするのだ。網を張つて鳥を待つてゐても鳥がその上を飛んだらどうするのか。我々四角な箱を造つておいて圓いものや三角のものを之にいれやうと云ふのはさて〳〵御苦勞千萬の事だ。……」

　大體がこの流儀――つまり一種禪式である。併し禪式と云つても自然に經驗上さうなつた彼獨自の禪である事は云ふ迄もない。劍術はかの「大菩薩峠」に出てくる島田虎之助に習つた相だが、その島田虎之助が劍道の奥を極めるには禪をやれと教へた相だ。考へて見ると昔の劍術と云ふものも見やうによつて面白い處がある。死生の瀬戸際に屢々實地に立つと云ふ事、それには心を所謂明鏡止水の境におかなくてはならない、意識的になつては必ず失敗すると云ふ處なぞ、たしかに禪に通ずる處があり、一つのいゝ修行道であらう。宮本武藏の事を海舟はほめてゐるが、たしかにあの畫を見ても非凡な人物に相違ない。「座忘」、物を忘れきつた心境の事を海舟はよく云ふ。「不用意の用意」とも云つてゐる。

―若い時のやり損ひは大概色慾からくるもので、正に孔子が云つてゐる通りであるが、併し乍ら無理に之を抑へやうとしたつてそれはなか〳〵抑へつけられるものではない。處が又、若い時分に一方盛んなのは功名心であるから、この功名心と云ふ火の手を利用して、一方の色慾を御する事が出來れば甚だ妙だ。そこで情慾が盛に發動して來た時にぢつと氣を靜めて英雄豪傑の傳を見る。さうするといつの間にやらだん〳〵功名心の方に驅られて、外の事を忘れたやうになつてくる。今の書生連中も試にやつて見るといゝ。損はしないよ。」

　こゝいらは又一寸ショーペンハウエルを想はすではないか。いろいろの人物の批評も實に鋭く、面白い。藤田東湖や佐久間象山も彼にあつては片なしである。

「足利義滿が明の皇帝から日本國王に封ぜられたのを歴史家は口を極めて惡く云ふが、彼が虛名の封册を受けたのは之によつて實際の利益を取らうと云ふ考へだつた事を忘れてはいけないよ。明に頭を下げてどし〳〵永樂錢の惠與を請ふた所を見ると彼も中々食へない男さ。」

　こんな調子である。

「こゝに俺の感服した人間が三人ある。それは何れも囚徒で維新の際におれが放免してやつた奴だ。その一人は馬丁の食客をし乍ら強盜をやるので江戸で大金を盜み溜めてそれをどこかへ隱しておいては上方へ飛んで行き、上方でも又盜んだ金をどこかへ隱しておき、一年も經つた頃に江戸へ歸つて前の金をつかひそれが盡きた頃には又盜み溜めて隱しておいて、今度は上方へ行つて先に隱しておいた金をつかふ。そのやり方が

實にうまいので表向は一寸も金のない風をしてまめ〳〵しく馬丁の手傳ひをしてゐる。その大膽と小心とにはおれも感心した。云々」

こんなのは又、頭のかたい凡くらな道學者流には一寸見當のつかない酒脱なものだ。併しかう云ふごろつきや、賭博打の親分や、茶屋の女將にも彼が相當眼をくれてゐたのは又それ〳〵目的のあつた事で、呑氣な顔をし乍ら用意周到なものである。

「誠」と云ふ事を彼はよく云ふ。自分の行き方については只誠でありさへすればいゝと思つてゐた。事實又彼に所謂權謀術數を弄するにしては人物が大きく、高過ぎた。そんなものゝ必要を感じる程度の才人ではなかつた。そのくせ誠と云ふ點では彼よりも南洲の方が猶ほ一段人々に感銘を與へたやうである。つまり海舟は第一に誠の人と感じられるには餘りに頭の融通が利きすぎる。剛毅ではあつても朴訥ではない。人がわるい。口八丁手八丁どころではない。一方から見れば誠心誠意とは彼がともすれば才智に走り過ぎる自己を矯め、戒めたモットーとも思はれない事はない。

「人間の元氣を減らすのに一番力のあるものは内輪の世話や心配だ。外部の困難なら大抵な人が辛棒もするし、又これが爲めに却つて元氣の出ると云ふ事もあるが、妻子とか、親兄弟とか云ふ内部の厄介には皆元氣を無くしてしまふ。どんな惡人でも恩愛の情には脆いものでこの情と云ふ雨露に打たれると忽ち元氣が衰へて善人になり變るものが多い。そしてこれが又すべて手腕と云ふものゝ加減に關はるやうだ。おれももし親や妻子がなかつたら今頃は強盗の頭にでもなつてゐたかも知れないよ。」

こんな冗談も云つたりする彼は、たしかに人を食つた太つ腹な粹人である。征韓論なぞをかつぎ出して乾兒のためにあたら「骨を秋風に曝す」やうな人のいゝ田舍者ではない。南洲の征韓論は眞の動機は那邊にあつたかいろ〳〵云ふ人があり、一概に非難は出來ないが、今から見ると何だか少し南洲のために惜しい氣がする。勿論あの時代の人に國家主義以外の思想を要求するのは要求する方が分らずやであり、國家主義が當然であるか、自分の自殺慾を國家のためと、乾兒のためとに役立てやうとした處はいかにも南洲らしく又、軍人らしい。

しかしこんな風に云へば、海舟は唯狡るい、冷やかな人間のやうにも見えるかも知れないが、彼が自ら「おれは人がわるい」と云ふのも、裏に裏のあるその一面の諧謔からも出た言葉で、又人が馬鹿に見える事の反語とも取れない事はない。しかし彼がどんな場合にもいかにダントンのやうに正々堂々としてゐたかは人も知る通りである。唯彼は南洲とちがつて冷熱自在な處があり、又衷心の人情として矢張り徳川に傾いてゐたであらうから、同じ愛國心を持つてゐるにしても南洲のやうにはひたすら皇威發揚に夢中になれなかつた點もあるであらう。

海舟は結局王政復古に手傳つたが、本當の肚は、、、、が理想であつた [illegible]

[illegible]してゐる[illegible]
事を讀者は感ずる。随分冗談半分に「おれ、〳〵」と自慢してゐるやうでゐてその實己れの功を割りに語らず、或は徳川氏の功に歸してゐる。随分又洩らし度い鬱憤を抑へてゐたり、或は又人の正體を暴露して了ふやうになる事を遠慮してもゐるやうだ。初め彼を殺さうとして後に弟子となつた坂本龍馬が南洲の事を「小さく敲けば小さく響き大きく敲けば大きく響く」と云つた話があるが、それは何れ傑れた人物なら當り前の事で、海舟にしろもつと敲き手が敲き手であつたらいくらでも凄い本音を響かしたにちがひない。その本音のすさまじさが想像されるだけ「氷川清話」も却つて餘韻はあるが。

しかし南洲と云ふ人もあれほど辛辣な口のわるい海舟があれほどほめてゐる處だけを見ても餘程珍らしい魅力と人徳との持ち主であつた事は分る。だからどうしても自然崇拜者——乾兒が出來すぎ、結局その犠牲になるやうな事になつたとも云へやう。海舟は自分でも乾兒のない方がいゝと云つてゐるが、又乾兒の出來る質でもないやうだ。彼には南洲のやうなヌーッとした大きさや、温かみも乏しかつたであらうが、（決して所謂冷たい人と云ふ意味ではない）又餘りに捷く人の裏の裏まで見抜く辛さと鋭さとがあつたために何となくそれが寒い感じとなり、人々は南洲に近寄る如くには彼に寄りつきにくかつたと云ふ處もあるであらう。

つまり彼は一生を通じて、天下のあらゆる有力者から、煙たがられ

[illegible]南洲を語る如くに、南洲も矢張り一目おいてゐたこの知己の事をどう云つてゐたかを多く知れないのが殘念である。併し一面から云へば南洲はつまり彼としてするだけの芝居は既に打つて了つたので死んだのだとも思へる。たとへ西南戰爭と云ふものが起らなかつたとしても彼は存外もう爲す事もなく餘生を終つたかとも思へる。言葉を換へて云へば彼は恰も明治維新と云ふ大芝居を打つがために生れて來た最適任者であつたやうに見える。あの大芝居の大立物として日本中の人氣を一身にあつめるには矢張りあの性格と、人徳と、そしてあの立派な六尺豐かの風貌が必要であつた。他の人ではリンカクが細くて駄目である。しかしそこへ行くと海舟は假令この昭和の現代に生れても必ず大に爲すところある役に立つ男である。この名刀はいつの時代でも新しい光を放たずにはゐないにちがひない。

僕らは割り合にいろ〳〵の人間のいろ〳〵の價値や美を知つてゐる。しかし海舟のやうに、僕らの平常住む世界とは一見全で懸け離れた世界の、型を異にした人物に接し乍ら、かくも出來上つた驚くべき人間を又新しく一人知る事が出來、而も現代の僕らと思想の違ふ昔の人とか、政事家とか云ふ何らのハンディキャップを附ける事なしにそのまゝ感服し、尊敬する事が出來たと云ふのは愉快である。

矢鱈に讃めたてるやうだが、固より僕はほめる爲めに書いて居るのである。批評したくて書いたのではない。又彼を批評するには——つ

まり或る點でケチをつけるには——「氷川清話」一册では不十分である。僕に云はせれば彼は正に日本の今迄生んだあらゆる範圍に亘つて一流の達人の一人であり、坊主になつたつて白隱位には成れた男、又武將に成れば信玄位には負けさうもない男に思はれる。兎もあれ彼に觸れる者は正に眞の「男」と云ふものを見た氣がするであらう。

「人間になると云ふ事が一つの藝術である。」と云つた西洋の詩人がある。海舟のやうな人間になると正にその藝術感がある。それは東洋だけに、殊に日本にだけ生れ得る一種の錆びた藝術感、譬へばいゝ書を見るやうな凉しい感じである。

福澤諭吉が「瘠せ我慢の説」と云ふ文章の中で海舟の事を難じて居るのを一寸見た。江戸城を明け渡す前に何故最後まで戰つて見なかつたかと云ふのであるらしい。これは海舟の心事をいさゝかも解しない取るに足らぬ簡單な愚論のやうであつた。

明治維新史はまだ完全に事實を傳へたものを書く事が出來ないとか聞いた事がある。そしてそれはまだ現今では薩長と云ふやうな外國にない日本特有のものが依然日本政府を牛耳つてゐるためだとか聞いた事がある。斯界の權威者として最早どの政府の顏色をも窺ふ必要のない筈の蘇峯なぞが思ひきつて本當に信用出來る歴史を書いてもらひたいものである。今書いてゐるのが即ちそれだと氏は云ふのであらうが。（「[illegible]日本[illegible]史」に自分は讀んでゐないので[illegible]これに就いて

「……元來人間の智慧は未來の事まで見透す事が出來ないから過去の事を書いた歴史と云ふものに鑑みて將來をも推測しやうと云ふのだが、然る處、この肝腎の歴史が容易に信用せられないのは實に困つた次第ではないか。見なさい。幕府が倒れてから僅か三十年しか立たないのにこの幕末の歴史をすら完全に傳へるものが一人もないではないか。それは當時の有樣を目撃した故老もまだ生きてゐるだらう。然しさう云ふ先生は大抵當時にあつてさへ局面の内外の表裏が理解出來なかつた連中だ。それがどうして卅年の後からその頃の事情を書き傳へる事が出來やう。況んやこれが今から十年も卅年もたつてその故老すら死んで了つた日にはどんな誤りを後世に傳へるか知れたものではない。歴史と云ふものは六ケしいものさ。」

思はず海舟論が長くなつて了つた。まだく書き度い事も有るが、餘りくどくなるから今度は只「氷川清話」と云ふ本を今頃再び播讀する丈けを以つて終る事にする。それは恰度エッケルマンの「ゲーテとの對話」がゲーテを知る上になまじ此文豪自身の代表作ならぬ著作を讀むより優つてゐるのと同じ意味で、海舟を知るには最も便利な書であらうと考へる。尤も之は想像である。

感傷家西郷

[illegible]
と部下に掘まれた穴倉の中で、[illegible]の死を知り乍ら、平常の如く碁を打つてゐた。翌朝早く豫定の總攻撃をうけ、彼は例の邇り輿に乘つて山を降り、逸見が「もう此邊で宜しからう」と聲をかけると「まだまだ本道に出て潔く戰死しやう」と答へ、更に一丁ばかり行くと彈丸が彼の股と腹に中つた。彼がそこで輿を出て靜かに東方に向つて跪き、兩手を合せて禮拜すると、その樣子を見てそれと悟つた別府は後ろから「御免」と云ひつゝその首を打ち落した。後にそこへ來た官軍の兵は道に捨てゝある輿を見つけて「之こそ先生の輿」と思ひながらあたりを見廻すとそのわきに首のない偉大な屍體が横はつてゐた。……

しかしこんな非業の最期が更に彼に對する同情と云ふものを加へる事になつて、南洲の人氣が一段と増した事は云ふ迄もない。つまり南洲の印象は一段と派手になつた。自分は南洲について詳しくは知らないが、彼の大きいと云ふ感じの中にはたしかにその運命の派手な處が一元素となつてゐる。派手な秀吉は地味な家康よりも大きい感じを與へる。海舟のコチッとした澁い地味と、家康の經濟的地味とは大に異なる處があるが、又同じ大きさでも南洲の大きさは太閤のそれに比べて、も一寸內面的なところがあると云へる。天分の廣さや事業の大きさでなく、どこまでも人間としての持ち味、心情の大きさである。

元來彼はセンチメンタリストであつた。肩幅は横綱の陣幕よりも廣く、馬は乘りつぶすおそれがあるので輿に乘つたと云ふ彼、閣議に臨[illegible]
因も、屡々の自殺慾の原因——彼はお互に心底まで惚れ合つた齊彬公と心中する氣であつたらしい。——も畢竟この感傷、情に脆さから發したとも云へるだらう。もつと想像すれば情熱家と云はれる彼の情熱もこのセンチメントに發すると云へ相である。そしてそのセンチメント(心情とでも譯しておかう)には或る種の深さがあつた。これが武人である彼の感じを殺風景でなくし、ゆつたりと柔らげ、人々から懷かしがられる所以にもなつたのであらう。

しかし大きい人物とは畢竟大きな、深いセンチメントそのものである。彼はこのセンチメントによつて自分に觸れ來る人間をホロリとさせたのである。そして一度彼にホロリとさせられた血氣の者は彼のためには死をも辭せなくなつたのである。そしてそれは勿論彼の手でも何でもない。彼のやうな魁偉な豪傑にしてそのセンチメンタリズムが効を奏しもするのだが、事實彼の獨特なすなほさと人の好さとはたしかに人の心を打ち、人を動かすものを持つてゐたらしい。もし非常に偉い坊さんか何かが彼を教育したら彼は或は一寸ジャンヷルジャンに似たものになつたかもしれない。兎も角日本人には一寸珍らしいタイプの男であつた事は事實である。

「人間一人前の仕事と云ふものは大抵高の知れたものだ。」と彼はよく云つたさうだ。人間一人前の仕事も一旦精神界に眼を向ければ決して

高の知れたものだとは云へない事は既に數多の代表者によつて證明され盡して居るところである。併し又一面に於いて人間、個人はたしかに微力なものである。そして其微力な事を本當に知る事はやがてパスカルではないが、人間の大なる證據である。南洲は人間の小さゝ、弱さをよく感じて居た人であるらしい。その知は及ぶべし。その愚や及ぶべからず。海舟と南洲の事を考へて一寸此の言葉を想ひ出した。

蛇足

海舟を考へる時僕等は未だ現代の日本人と彼との共通點を感じ得る。併し南洲と現代人との間にはおよそ微塵の共通點をも見出せない樣な氣がする。今では偽せ物の南洲――本物の南洲にとつては迷惑であつた南洲氣取りも殆ど見られなくなつた。現代の恥でも南洲の恥でもないのであらうが、兎も角、彼はそれ丈け過去の人物なのであらう。

南洲や海舟を慕ふにつけて現代人の卑小を頻りに嘆ずる人がよくある。併しそれは事實ではあるが狹い見方だと思ふ。世間で云ふやうな所謂大きな人物が出るのには勿論足場が要る。足場が無ければどれほど有爲な材があつても腕の振ひやうがないのだから、海舟でも南洲でも今日生れてゐたらあれほどの史的人物にはなつてゐないに相違ない。矢張り海舟の所謂「氣運」と云ふものを俟つて彼等に充分に自己つなりを川し崩れる芝居が打てたのである。それに[illegible]盟主がないだけだ、と人は云ふであらう。それも亦事實であるが、しかし見樣によつてはつまり現代にはそんな個人的英雄が是非共必要ではないからだとも云つて云へない事はない。政治的に云つて見ればつまり今時の政黨政治位のもので或は澤山――でない迄もどうにか事は濟むでゐるのである。濟むでゐると云つて、決して國民が幸福な譯ではないが、幸福でないと云つても維新前後の狀態と相對して見れば又決してわるいとも云へないであらう。もしわるいと云ふとすれば國民一般の精神がわるいので政府ばかりも責められない事は云ふ迄もあるまい。一體に今の日本は萬事が中途半端な時世で、多くの人はどう云ふ思想を持つて生活して行けばよいのか見當がつかない有樣だ。その中途半端が右か左かに煮え切つて何でもいよ〳〵大人物が出なければおさまらないと云ふ場合に立ち到れば一時は國民一般の氣持ちも變つてくるであらうし、所謂「國亂れて忠臣あり」と云ふ事にもなるのだらう。國亂れて忠臣豪傑が現れるのがましか、國亂れずして小人横行するのがよいか。兎も角今は苦しいの不景氣のと騷ぎ乍らもまづ〳〵呑氣な時代である。尤も僕らにとつては結局どつちでもよい事で、それも結構としておかう。どつちでもいゝとは云ふものゝ矢つ張り亂世は御免である。そんな必要はない。

挿繪私觀

足立源一郎



ブラマンク
自刻のカット

近代社會生活の變遷にともなつて文學、美術方面にも、それ〴〵に今までかへり見られなかつた新しい境地が開發されることになつた。美術方面について見ると建築は、神殿、寺院、王侯貴族の宮殿の建立が中心をなした時代は遠き過去に屬するとするも、官公省や高級學校の建築が主體をなした時期はさして古いことではなかつた。然し最も近代的な内容をもち、その構想に絶對的な自由を許るされるものとしては、現代生活と更らに密接な關係をもつものでなければならない。さうした點より現代の建築の中心はより大衆的な方面に遷りつゝある。病院、工場、デパートメントストア、ビルデイング、演戯場、橋梁、アッパルトマン、停車場、などの公衆的なものと一般の小住宅、それらの各方面に新しき建築の領域が擴められつゝあるのを見ることが出來る。彫刻は建築ほどに眼ざましい展開を現はして居ないが、在來の室内的なものより既に屋外に進出して、大衆の觀賞に近づきつゝあることが認められる。

それでは繪畫の方面における大衆化は、果してどうして行はれるかと見ると、最近建設された繪畫館に明治大帝の御事蹟が描かれると前後して、二三記念的な壁畫が施行された。これなども繪畫が公衆と接觸する一ツの方法であるが、更らに一歩進むで停車場の待合室や公會堂の壁面に描かれる樣にならない限り、直接大衆との接觸は極めて微微たるものに過ぎない。そこで繪畫において最も自由に大衆と接觸するものは、何といつてもポスターと書籍の挿繪であらうと思へる。この二ツは何も事新たらしく述べるまでもなく、隨分昔から行はれて來たものであるが、然し對社會の關係に至つては、現代ほど密接なものではあり得なかつた。びら繪或は引札の名においてされたポスターは



ダンテ「神曲」サンドロボツチチエリ

昔から開店、賣出し、披露などの場合に行はれてゐたが、多くは記憶力と注意を刺激するだけに止まつて、藝術的な配慮は殆どされず、最上のものといへども僅少な趣味性をもつだけであつた。現代においても大多數のポスターは未だその程度より多く離れてゐないが、そこに藝術的な創意をもたんとする試みは明瞭に進められてゐる。そして街上に於て、現在われ〳〵が展覽會場においてのみ、僅かに感受することの出來る喜びを、持つ事の出來る樣な日も必ず來るであらうと思ふ。フランスに於ては既にさうした街上藝術全盛の時代があつて、ツールーズ、ロートレツクやスタンランの優れた作品を電車の窓より觀賞したものである。

る表現力の不足してゐた時代には、寧ろ繪の方が主となり文字は從の位置に置かれた程であつた。日本にも古るい物語りには繪巻の形によつて殘されたものが多く、西歐諸國にもミニアチユールによつてされたものが多い。そしてこれらは文字を解せざる者にも易く内容を感得さすことが出來るもので、現在でも文字と親しみのあまり深くない幼少年の讀み物は、矢張り繪を本位とし、一見して直にその内容を解するに便してゐる。一般民衆に讀書力がゆきわたらなかつた時代には、東洋、西歐諸國とも等しく宗教の傳道書をはじめ歴史や物語りの書は、大抵美事な挿繪を加へて、その大意を悟らしめる樣にされてゐたのである。わが國に於ても天平末期より藤原期へかけてさうしたものが相當に行はれ、『過去現在因果經』や『華嚴五十五ケ所繪卷』の如き傑作があ



「トロア物語」ミレー（フランス—十五世紀）

法王廳所藏の「ギルジル詩集」を最古のものとして、[illegible]には十三世紀に描かれた『聖詩集』がある。これはフランスに於ける挿繪本の最古のものとされてゐる。然しそれらは何れも文字、挿畫とも肉筆で描かれたもので、美術品としては貴重なものではあるが、多くの人々が易々と見るを得なかつたものである。

挿繪がとも角も一般の讀書人と直接の交渉をもつ樣になつて、やゝ大衆的な色調を帶びる樣になつたのは、何と云つても印刷術の發明があつてより以後の事で、十五世紀後半より十六世紀初葉へかけてのものを最古とする。そして文藝復興の華やかな文化のもとに、先づ伊太利に於て美はしく花を咲いた。ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオなどの著、[illegible]







『聖書物語』フランス十六世紀

て神祕的な力の籠つた四騎士の挿繪は、今なほ天下の絶品として賞讃おく能はざるもの丶一である。佛蘭西においてはジヨツフロア・トリーが、フランソア一世の庇護のもとに從事した美事な挿繪が初期の代表作とされてゐるが、これは伊太利文藝復興期の優雅典麗な趣を多分に受け繼いだもので、後世のものに非常に影響を與へた。またバールのホルバインの描いた『死の幻想』の挿繪も立派な出來であつた。

爾來印刷術の進歩と並行して製版の技巧もます〳〵精巧となり、出版の隆盛に應じて挿繪も漸次に普遍的になつた。ルウーヰ王朝時代には文學、美術、娛藝の獎勵に從つて出版も眼ざましく全盛となり印刷

な線と陰映、濃影のこまかい調子を表す樣になり、單に書物の内容を暗示するだけにとゞまらず、内容の或る光景を明らかに表現する小幅の繪畫として、書物の一部を分擔する樣になつた。そして挿繪の特徴は美術史と同じく、ルウー十四世の初期にはシモンヴーヰの管理にあつたアカデミーの感化を受けて宮庭風な尊大、莊重な趣を示めすものが多く、次ぎの時代にはワットーやフラゴナールの流をくむ華美、流暢なものが喜ばれた。『モリエール作品集』に描いたブーツシエの挿繪は纖麗都雅な婦女を現はして好評を博したものである。

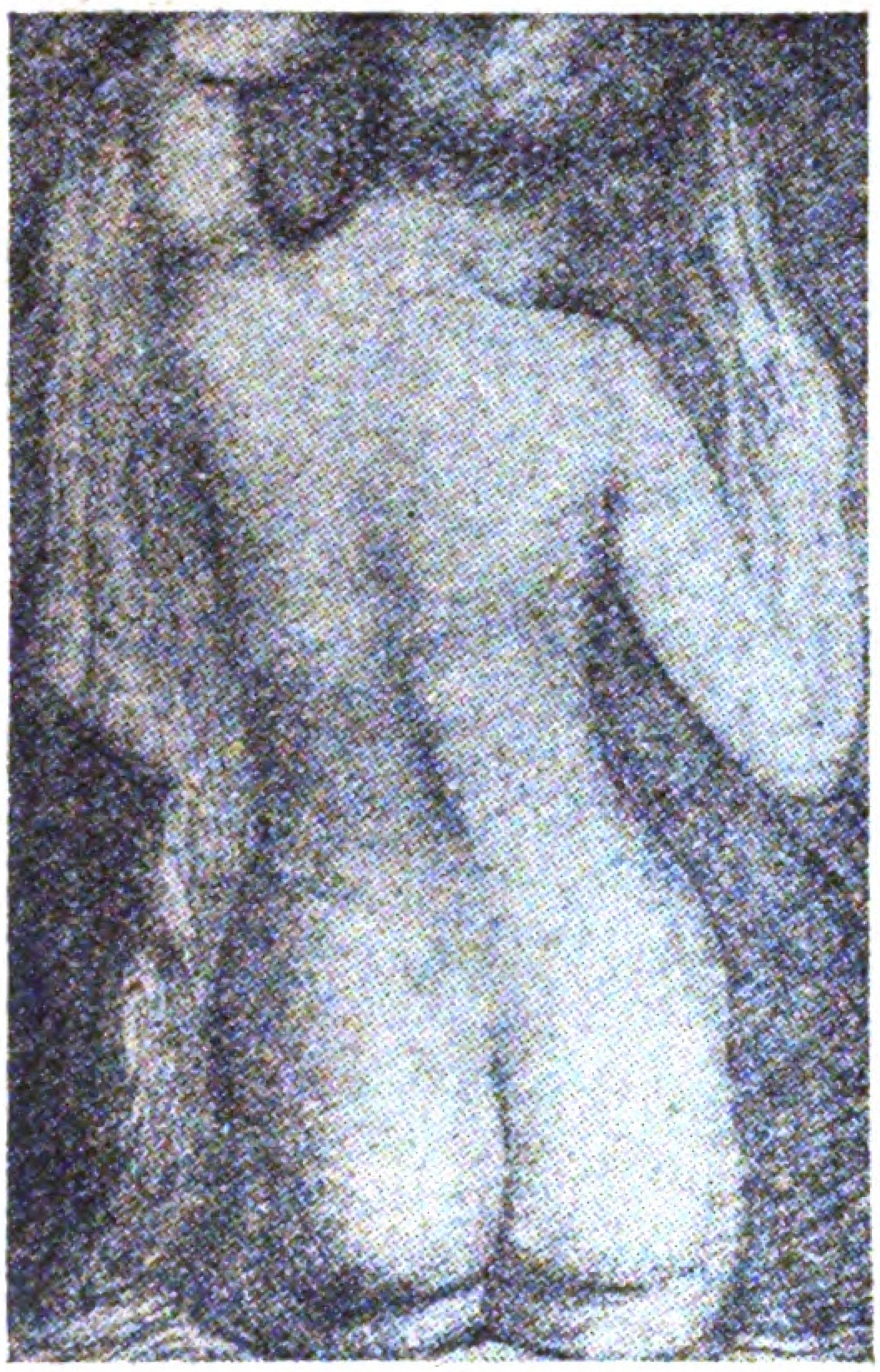
近代になつて挿繪を更らに活氣あり、自由なものとしたのは十九世紀のはじめの石版術の發明であつた。



「ドンキホーテ」　ギユスボフア

の著明たものとしては、タールベーの描いた『ポールとヸルジニー』やドラクロアの筆になる『佛蘭西民謠』『フオースト』などがある。これは當時彼等印象派の畫家達はあまり挿繪を描かなかつた樣であるが、等の作品そのものすら理解するに困難であつた大衆を對象とする出版者と、畫家の連絡がなかつた故かと思ふが、又他の一面には所謂專門の挿繪畫家が澤山にあつた故であらう。

然し劇場の内狀に通じすぎた作者に、演出法を改革せしむるが如き新味ある脚本が書けぬのと同樣に、製版の次第や印刷效果を知りすぎた專門の挿繪家の仕事が、次第に平凡になり常套的となりやがて無味乾燥なものとなるのは止むを得ぬ事であるが、十九世紀には特に優れたるものは少なかつた。



ピエール・ルウーヰ詩集　アリスチードマイヨール

そして沈滯してゐたフランスの装本は歐洲大戰を一區劃として、今や清新味に滿ちた活躍を再びはじめてゐる。最近出版になる重もな文藝物は、殆ど近代名家の挿繪をもつて装つてゐないものはないと云つていゝ位である。一九二三年に生誕百年記念として出版されたフローベル全集は、



アポリネール詩集ラウール・デユフイ

ロダン沒後彫刻界の第一人者たるアントアン・ブールデルをはじめ現代巴里の名家達デユノアイエー・ド・スゴンザツク、ラプラード、ヴロツトン、ルウツセル、ウーヴレー、デユフレノアなどの挿繪によつて装はれてゐた。モーリス・ドニやパブロ・ピカソの挿繪に装はれたものも少くなくない。それらの挿繪は何れも作品の内容の解説に役立つよりは、寧ろその作品を主題として描かれたる畫家の幻想を現はしたものが多く、何れかといへば裝飾的な要素の強いものである。も一ツ現代フランスに於ける挿繪の特色としてあげねばならぬことは木版畫の復興である。これは材料から來る一種の硬さと、明確な黑白の效果が印刷の工程を少なくしてよき結果を得るが故であると思ふ。アシール・ウーヴレーはさうした木版の大家で、黑一色によく近代的な纎鋭な感覺を現はした作品を見せる。その他コンスタン・ルブルトン、シ



【クローディヌ】　シャス・ラボルド

メオン、ダラニエーなどの作品は何れも木版によつて潑溂とした新味を漲らしたものである。

その他にエッチングや石版も屢々用ひられてゐるが、アポリネール詩集に描いたラウール・デュフイの挿繪、彫刻の大家アリスチード・マイヨールがピエール・ルウーヰの詩集に描いた挿繪などは、木版と反對な石版の潤かさをよく活かして潤か味のあるいゝ出來のものである。

現代フランスの挿繪は非常に藝術的なものが要求されてゐて、作中のある光景を現すと同時に、挿繪によつてよりよき雰圍氣を釀し出さんとするものである。勿論今まであげた例は僅かに自分の眼にふれた一少部より撰んだものであるから更らに優秀なものは澤山ある事と思ふが、要するにそれらは皆高級な著作に就いてのことで、低級な讀物の挿繪には單に殘忍、殺伐、陰慘、卑猥な狀景を描いて、いたづらに讀者の感情を刺激することを目的とする樣なものが極めて多い。然しさうした低級なものはフランスのみならず、歐米各地とも大體同樣の狀態にあるが、著名な作家の著述が發表される場合には、何れも必ずその裝幀や、特に挿繪について最上の配慮がされてゐる樣に見うける。

自分がフランスの書物にしか親しむでゐないが爲めに、自然フランス本の挿繪についてのみ例をひいたが、獨逸などもゲーテの『ヴエルテ



【アシジの聖フランチエスカ】モーリス・ドニ

れ〲に優れたものがあらうと思ふ。英吉利の挿繪畫家オブズレー・ビアヅレーの作品などは末梢神經的ではあるが非常に獨創に富むだものであり、日本の挿繪に少なからぬ影響を及ぼしてゐる。

わが國における挿繪を見ると、これは徳川期以前には殆ど稀れで、



「レヴィスとイレヌジャン・[illegible]

先づ浮世繪版畫の發達によつて始まるものと思ふ。大變に古いものは[illegible]、その變遷の歷史は浮世繪の發達に就て的に述べ[illegible]、故に今は最近のものについての私觀を述べるにとゞめる。[illegible]

[illegible]

るであらう。その一々について記すことは[illegible]、また同じ作家の挿繪でも其に[illegible]の時期によつて變化もあり、[illegible]あり、また挿繪を[illegible]

[illegible]

ラ物、小女小説などの挿繪は大抵この部に屬するものであつて、藝術的な味をもつたものは甚だ稀れであるが、感傷的な表情や劇的な光景に興味をひかれ易い讀者の間に一番歡迎されるもので、挿繪畫家の過半數はこの部に屬すると云つて差支へない程である。その第一線に活躍する人々に、田中良、岩田專太郎、小田富彌、寺島紫明、伊東深水、林唯一、伊藤彦造の諸氏がある。

田中良氏の挿繪は整つた形の美くしさがあつて、上品な趣味のものであるが、如何にも冷たくして情味に乏ほしい、またどことなく窮屈な感じがする。岩田專太郎氏の挿繪は纖鋭な線とはつきりした黑白の分布によつて、非常にキビ／＼した感じを與へ、好んで描かれる婦人の潤るんだ眼差しと、下顎の張つた痩せ氣味な男の顏に一種の魅力がある。

小田富彌氏の挿繪では、一作年頃大阪の新聞に連載されたものが非常によかつた樣に覺えてゐるが、最近のものは一種の型にはまつて、少し下品になつた樣に思ふ。然し通俗な繪畫にいつも快よいものが發



「ギルアンタクレール」　ブランギン

つゝある人の樣に思へる。氏の挿繪は瀟洒とよりは寧ろ重厚な感じのものであるが、素純にして可憐な趣きを多分にもつてゐる。時折り見受ける裸婦を描いたものなどには、第二類への試みを認めることが出來る。未來ある挿繪畫家の一人であらう。

伊藤彦造氏の作品は非常に強靱なものをもつてゐるが、如何にも灰汁が強く、病的に執拗な刺戟性をもつてゐるので、讀者に愉快な印象を與へない樣だ。朝日に連載された谷崎潤一郎の『黑白』に挿繪を描いた中川修造氏の挿繪にも、伊藤彦造氏と共通なこの病的な執拗さがあつたが、餘程貧弱で稚拙なものであつた。寺島紫明、伊東深水の兩氏とも濃艶な情趣を現はさんとしつゝあるが、深水氏のものゝ明快に比して、紫明氏の作は常に頽廢的である。

なほこの他に一類の先輩として幡恒春、渡部審也、鰭崎英朋、尾竹國觀、井川洗厓の諸氏あり、吉邨二郎、野崎貞雄、一木弴の諸氏をはじめとして新進に至つては無數である」

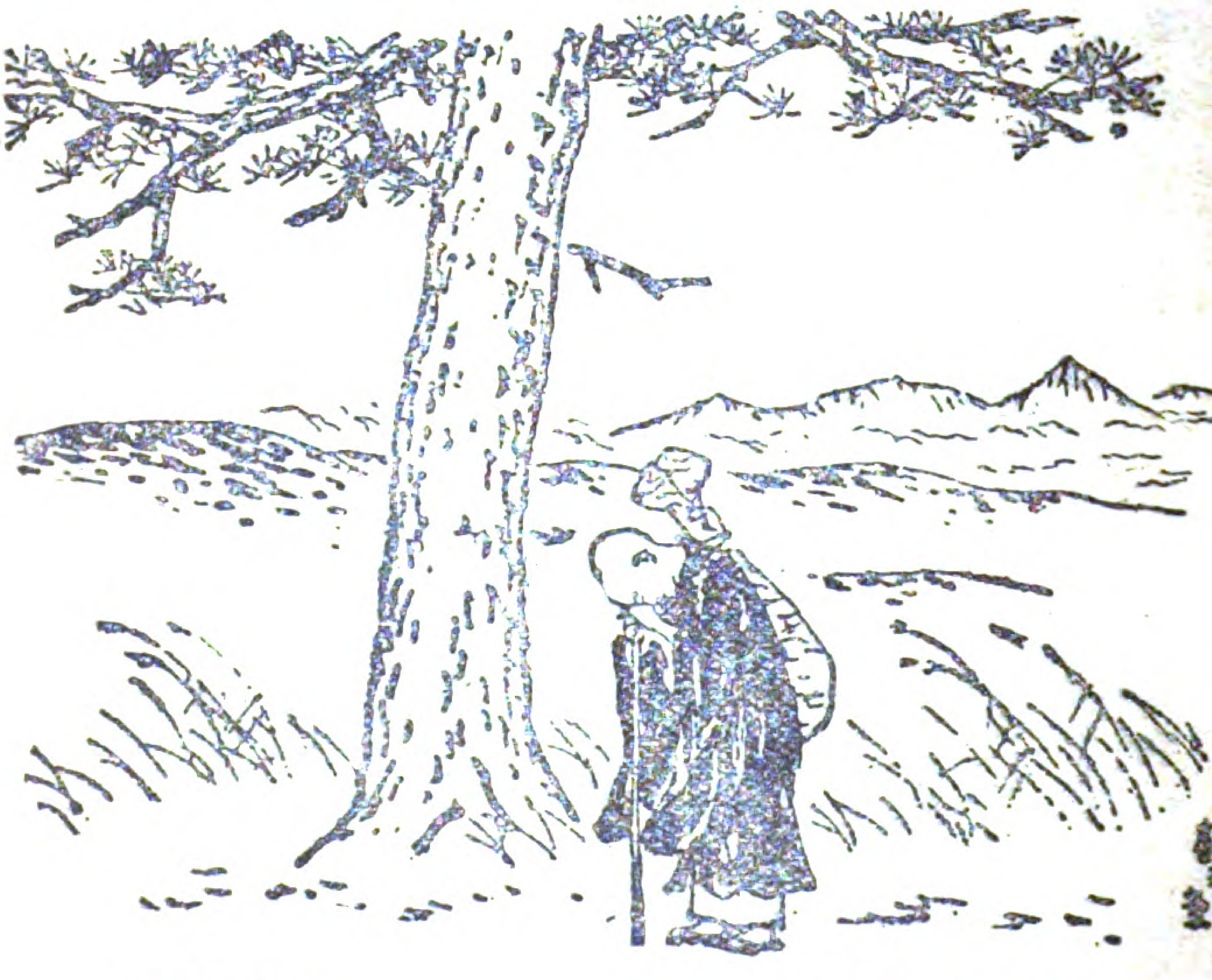
第二類に屬するものは、[illegible]



「愛染地獄」　岩田專太郎

者は第一義へ、或は第三義へと脫線して仕舞ふ樣である。美術家として相當の修業を積むだ人々が挿繪を試みる場合には、大抵なものは必ずこれを目的とするが、豫期の效果を護るまでには矢張り一苦勞ある樣である。その內で最もよきエッフェを納めた人々として、石井鶴三、小杉未醒、木村莊八、鏑木淸方、小穴隆一の諸氏をあげる。

石井鶴三氏が上司小劒の『東京』に描いた挿繪は新聞小說の挿繪として一轉機を劃するものであり、『大菩薩峠』の挿繪に至つては、ために紙價を高からしめた程の人氣を呼むだもので、大衆文學の挿繪をして藝術品の域にまで高上せしめ、讀者をして居ながらに美術觀賞をなさしめ[illegible]たる姿は、等なほ諸君の驚歎に價するものであらう。



「大菩薩峠」　石井鶴三

小杉未醒氏の『西遊記』の挿繪も、紙上藝術の代表的なもので、飄逸な筆に現はされた怪奇な狀景は、よく俗生活の繁雜を忘れしめて詩境に誘ふものがあつた。吉井勇の『大川端』に描かれたる木村莊八氏の挿繪の輕妙洒脫なる、鏡花の『深川情景』に描ける鏑木淸方氏の挿繪の情趣深

き、芥川龍之介の『本所兩國』に描ける小穴隆一氏の挿繪など、何れも作家と畫家の心持がぴつたりと融合してはじめて出來るもので、第二類の代表的なものとする。なほ第二類の挿繪を試みる人々に片多德郎、小村雪岱、田邊至、中川紀元、和田英作その他の諸氏がある。和田英作氏が楚人冠の『うるさき人々』に描かれた挿繪は、嚴密な寫實によつたものでその手法材料などにも多種多用な變化が試みられてゐたが、總てを一定の速度で印刷される新聞紙上の事とて充分な結果を見得なかつた。小村雪岱氏の近作では雜誌の挿繪より大每紙上の『綾衣繪卷』のものなどが優れてゐる。あまり纖弱なるを惜しむ。田邊至氏が描いたの挿繪は部分的な場景にとらはれ過ぎて、作を通じたる氣分を現はし得なかつた傾きがあつたが、最初の試みとしては又やむを得ぬことであらう。中川紀元氏のものは、漸くはじめられた池谷信三郎の『有閑夫人』の挿繪の初めの二三を見た時には暢達にして新味あるものとして樂しみにしてゐたが漸く第三類へ脫れて仕舞つた樣だ。挿繪專門でない畫家の描く挿繪は、すぐにかうした氣樂な方面にイージーゴーイングをやりたがる傾向がある。片多德郎氏の『山の手暮色』は遂に見落して仕舞つた。



【生ける人形】　中川一政

次ぎに第三類に屬するものに中川一政、村山知義、竹久夢二、太田三郎、河野通勢、小出楢重の諸氏がある。中川一政氏が描いた片岡鐵兵の『生ける人形』の挿繪は、第二類を志しながら遂に第三類になつたものと見受ける。挿繪としての是非は別として中々面白い出來であつた。河野通勢氏のものは最初から第三類的な態度で描かれたもので、江戸末期より明治初期に行はれた草紙趣味を現はす點で、小出楢重氏と共通したものがある。但し小出氏のものがより諧謔に富むでゐる。然し最近に大每紙上に出かけた谷崎潤一郎の『蓼喰ふ虫』の挿畫は餘程江戸阪畫臭から解放されて新味をまして來たが、矢張り第三類の域内に停止してゐる。竹久夢二氏のものは頹廢的な感傷を多分に表はしたものである。その他一般に隨筆、小品の挿繪は概して第三類に屬するものが多く、岡田三郎、山本鼎、結城素明、正宗得三郎、小杉

畫家の筆になる隨筆、紀行などの挿繪は、同一の心境において描かれるもので、或る場合繪が先きに出來て文を添す如きこともあるから、全く性質の異つたものである。

以上甚だ杜撰ながら最近の挿繪を一覽したわけで、自分としてはこ[illegible]



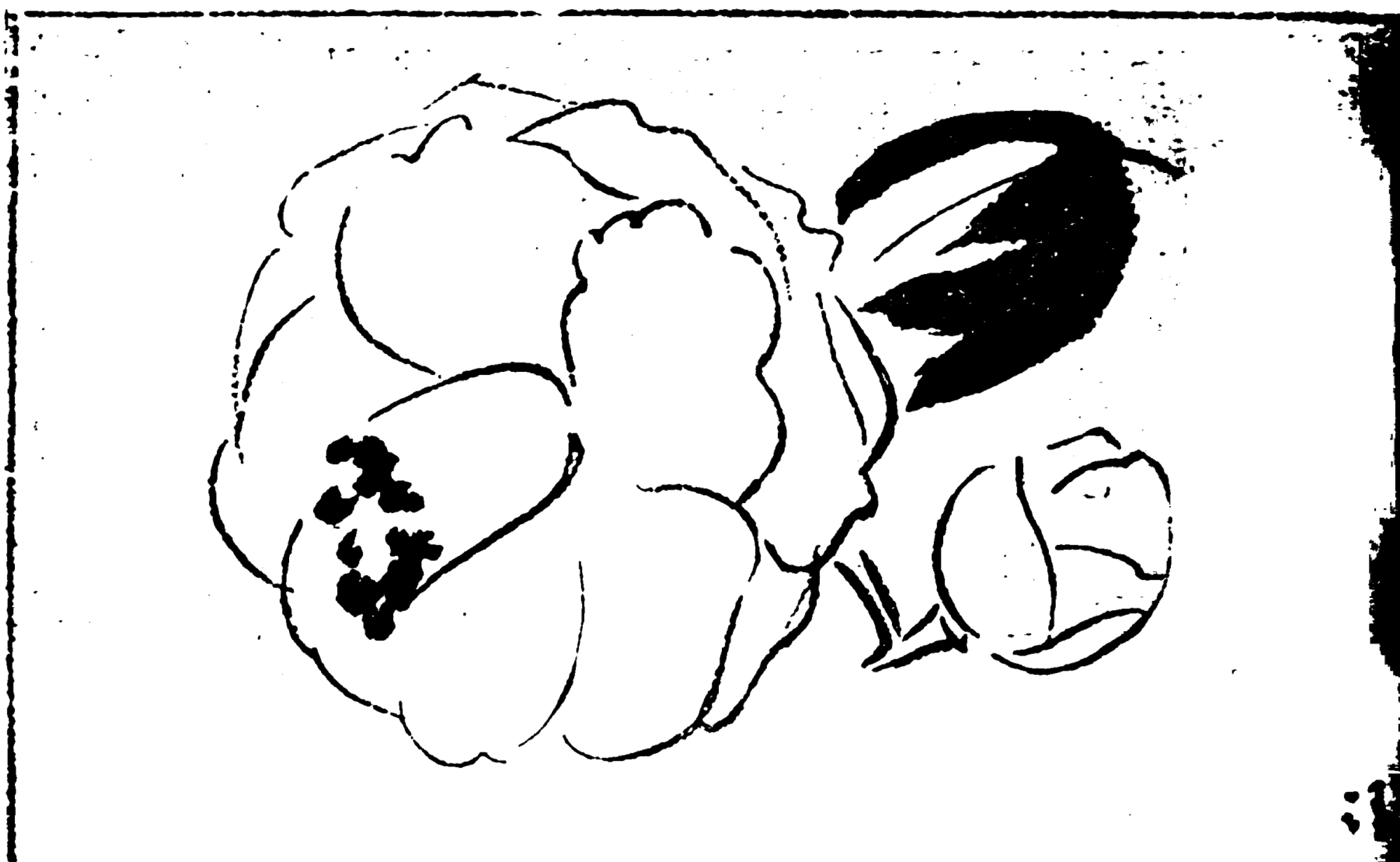
[illegible]

あると思ふ。

なほ昨今しきりと問題とされて[illegible]

ても、鏑木等が[illegible]

[illegible]



大地

一の二

里見弴

……足もとの方が、いやにひやひやするので目が醒めた。起き返つてみると、すつかりもう朝の光で、どしや降りの雨が、あけッぱなしで寝た縁側に吹ッかけ、重吹に濡れた白い蚊帳の裾が、風を孕む度に、爪先から脛のあたりまでも舐めてゐたらしかつた。出て行つて、全體は面倒だつたので、三疊の前だけ三四枚雨戸を入れ、序に濡れた蚊帳も、三方の釣手をはづして、片隅に丸めて置いてから、すぐまた横になつたが、同時に寝ついて了つたと云つても、大した誇張ではない。寝つきの速さでは、ふだん友達から野蠻人と揶揄はれるくらゐだつたし、それが何時頃だつたにしろ、東が白みそめてから床についた昌造にとつては、兎に角寝入端に相違ないのだから、慾にも得にも目のあいてゐられない、眠い盛りでもあつたのだ。

……どゝゝ、どゝゝッといふ響とともに、尻の下から突きあげるやうな劇しい震動に身を揉まれながら、枕さがりに、づるづると、寝床ごと滑り落ちて行つた。地震だな、とはつきり意識した時には、蒼穹が足もとに高く仰がれ、八疊との境の簀戸が、弓のやうに腰を曲げて來てゐた。すさまじい物音と埃ッぽい匂ひ……。波に揺られると云

ひたいが、それよりはずつと邪慳な、胸倉をとつて小突き廻されるやうた動揺のなかで、昌造は敏捷く身を起し、片足、阪になつた疊に踏ンばつて、どうやら、敷布團の滑つて行くのだけは食ひ止めた。折り曲げてゐる方の膝に、瑛龍がしがみついて來て、

「なんなの？　地震？　地震？」

「だいじようぶだ！」

　頭の上で、電燈が大きく揺ぶれ、阪になつた天井を叩いてゐた。ばたり／＼壁も落ちだした。海老に丸まつた瑛龍の小さな體を、敷布團でぐる／＼と簀卷にし、蒲團の掛布團も頭からかぶせてやつた。

「なんなの？」

「地震だよ」

「ばたん／＼落ちて來るのなに？」

「いろんなもんだよ」

「だいじよぶ？　え？　だいじよぶ？」

「だいじよぶ、だいじよぶ！」

「いま何時？」

　何を頓痴なことを云つてる、と、ちよつと腹立たしくもあつたが、あたまの働きの捷い瑛龍のことゆゑ、九月の朔日、午前、或は午後の何時と、自分の死際をはつきり知つて置いて死にたいのかも知れない、と思ひ、すぐいぢらしい氣になつた。

「何時だかわからないが、だいじよぶだ！」

　簀卷きにした上からしつかり抱きよせて、昌造は、天井の廻り縁の、東北の隅にあたるところをぢツと睨んだまゝでゐた。すさまじく家ぢうの軋き鳴り響くなかに、その合せ目の、口のあき具合だけを見詰めてゐた。柱のきツ斷が見えるほどの隙ができ、はツと思ふと、すぐまた緊く縮つたりした

（あすこがはづれるやうなら……。然し俺はこの事では死なない、きつと死なない！）

　こんな氣持ながら、然し昌造も、口のうちに唱名は斷たなかつた。なまんだアぶ、なまんだアぶ、それ以上もう口をあくなよ！　なまんだアぶ、なまんだアぶ、よせ／＼、もういけないぞ！　なまんだアぶ、なまんだアぶ……。

　急に物音がなくなつた。そのしーんとした一瞬間の方が、昌造にはよつぽど不慣な氣持だつた。世界中の生きとし生けるものが、一つ殘らず死に絶えて了つたやうに心細く、寂しかつた。いつか三十度ほどに傾いた疊の上から、いきなり青々とした夏の空を見あげる感じも不氣味なものだつた。と、じーい、じーいと、油蟬の啼声が、まづ第一にこの耳の聽覺を蘇つたのに、昌造はほツとした。

(生きてやがる、生きてやがる……)

が、さてどうしようといふ考へはなかつた。瑛蔵も、膝にしがみついたまゝ、おツと身を竦めてゐた。……そのうち、だん〳〵生き返つて來る物音のなかに、

「……さアん！ 千鳥に、お客様がゐるのよウ！」

締め殺されさうな金切聲が、遠く溜池の通りの方から、……[illegible]にお[illegible]だつた。

見ると、褐色の水を湛えた池のある庭園を隔てゝ、[illegible]來の、厖大な母家の屋根が、欠つ張りこつわと[illegible]じやうに、[illegible]て、ぐしやツとぶツ潰れてゐた。一體、[illegible]ある筈はないのだが、そんなものは、無論[illegible]のだらう……。

「千鳥たアどこだア」

[illegible]などは見えなかつたが、母家の屋根[illegible]かつた。

[illegible]

知らない男がはいつて來た。
「や、どうも有難う」
「早くお出なさいまし。搖り返しが來るとあぶないから」
續いて、この家の不寢番を勤めてゐる、本名か渾名か、「さぶ」と呼ばれる男も來て、昌造の着物や鞄を二人して持つてくれた。
「なんか、頭にのッけてくものないかしら」
瑛龍は、きちんともう着物を着更えて了つて、何かな、とあたりを見廻してゐた。搖り返しに、頭の上に落ちて來るものを防がうつもりらしかつた。
「これがいゝ。これ被つて行きたまい」
　麥藁のカン／＼帽を渡してやり、自分は、昨夜絞つて來たタオルで頬被りをして、いざ出かけようとなつても、さぶは、まだそこらをまごまご廻り歩いてゐた。
「さぶさん、もういゝから、行かうよ」
「えゝ、どうぞお先へ」
「ぢア行くよ」
　いくら搖れても二階は二階で、梯子段のけし飛んであとかたもないところを、おもてへおりやうといふのは、男でもなか／＼骨だつた。
瑛龍も、然し一生懸命で、階下の亜鉛庇の、傾斜面にへし折れたのを、ずる／＼と滑りおりたり、昌造にうしろから尻を押されながら、やつと手が屆くか屆かないの母屋の屋根の崩れを、無理無態に傳ひあがつたりして、どうやらかうやら溜池の電車通りを見おろす線の上まで來た。と、瑛龍は、すぐ麥藁帽子をぬいで、默つて昌造に渡してよこしたが、この騒動のなかで、なほ帽子を捨てないのも彼らしかつた。
　街路樹の下にひと塊りになつた女たちのなかから、お民が驅けよつて來て、
「加島さアん！　あたしもう……」
　手ばなしで、泣面をつくり、ぽろ／＼泣きだした。昌造も涙ぐみながら、屋根をおりて行つた。表に向つた二階の大廣間の前、玄關から帳場へかけての上が、今度新たに拵へた二十坪にあまるコンクリートの屋上庭園になつてゐたが、それが、そのまゝすとんと地びたの上にあるのを見て、これアきつと一人や二人は死人があるな、と思ひ、その上を行くのに、足の竦む想ひだつた。
　往來の土を踏み、思はずお民と、がつしり兩掌を握り合せると、
「よく生きてゝくだすつたわね」
「うん。……だから、もういゝよ、いゝよ」
　片手をほどいて、抱きよせるやうに背なかを叩いてやつた。
「あたしもう、とてもお二人とも焼けたと思つて……」

「生きてるよウ、つて怒鳴つたの、聞えなかつたかい」
「聞えませんでしたわ」
「私が、千鳥にお客様がゐるウ、つて云つてたの、こつちにはよく聞えたよ」
瑛龍は、お民の激情が鎮り、自分の目からも涙の乾くのを待つやうに、いやにゆつくり〳〵おりて來た。
「みんな、一人殘らず出たかい？　怪我、ない？」
「えゝ、いゝ按配に……。大工さんが一人、足場から振り落されただけで……」
「それアよかつた！　一階の君たちは、どつから出たんだい」
「玄關から」
「え？　ぢアこの下をくぐつたのかい」
聞いたばかりでもぞツとする話だつた。
「一番お仕舞に、あたしが飛び出すとすぐでしたわ。どツしんつて、大へんな響……」
そこに、瑛龍も、罅裂だらけのコンクリートを踏んで近よつて來て、
「ちよいと、どうして？」
と、さも氣樂さうに笑つてみせた。さうされゝば、お民も泣き顏ではゐられなかつた。
「あんたがたこそどうしたかと思つて、あたし、いま頭に摑んで……」
云ひながら見返すと、同じ側の人道に、七八間隔てゝゆかたがけの、あんまりきりツとしない形で、ぼんやりこつちを眺めてゐた出入りの鳶の頭と目が合つたので「あゝ、頭！　出ていらしつたわよ！」
それには、輕くちよいと頷き返したばかりで、頭はすぐ彼方を向いて了つた。この、容貌魁偉では堂々としすぎるし、苦味ばしつたでは弱すぎる程度に、可怕い顏をしたいゝ男の、五十に近い小頭は、普段から、一種特別な形で、昌造たちに對する好意をみせてゐた。北窓のそとが、庇間の通路になつてゐる土藏造りの階下の間にゐると、そこを通りかゝつたり、普請場をぬけて玄關の方へ行く途中ですれ違つたり、時々顏を合せたが、瑛龍とは舊くからの馴染で、――それにしてからが、にこりともしずに、たゞぶツきら棒な挨拶をするだけだつたし、倘而昌造とは、口ひとつ利いたこともないのだけれど、それでゐて、なんとなく嬉しさうだつた。無論昌造の方でも好きで、よく噂をし合つた。
「をかしな人ねえ。あんな不愛想な、可怕い顏をしてたから、お腹ンなかぢア、あたしたちが好きで好きでたまんないのよ」
「それほど自惚られもしないが、兎に角たゞぢアないね。なんかかう

逢ふたんびに、氣持の通つて來ることだけは確だからね」

「いゝえ、さうよ、好きなのよ。お藏のお客さん、まだ出ていらつしやらないか、なんて、時々お民さんに訊くんですとさ」

「こつちだつて好きなんだから、いくら好かれたつて、ちつとも負擔は感じないがね……」

「蔭ながら守護するそれがし……」

と、ちよつと聲色めかして、「あれよ、勝手に一人で、あの氣持ッなつてるのよ」

そんな風で、お互に一度も發表することなしに、好意をもち合つてゐる關係が、この日までも續いて來てゐた。それが、恐らくお民の話を聞いて、すぐ驅けつけようとするところへ、もう屋根の上に二人の姿が現はれて來たので、嬉しさと、いくぶんの手持無沙汰に、遠くから、思はずぼんやり見惚れてゐたものらしく、そこへいきなりお民に聲をかけられて、我に歸ると同時に、すつかりてれて了つた樣子は、なんともかとも云はれないほどよかつた。

「をかしな頭だねえ、一人でてれてるんだよ」

「さうよ。あつち向いて……。あら、どつかイ行つちまふわ」

「あんたのうちの方、どんな樣子だか、見て來て貰つたらいゝぢやないか」

「さうね……」

「あたし、行つてさう云つて來るわ」

肥つた體の、素足で、舗道の上をペタ〳〵と追ひ縋り、お民は、見榮も外聞もなく、「頭！　頭！」と大聲に呼んで行つた。

地の底を、大風の吹きぬけるやうな響とともに、第二震が來た。女たちのなかには、街路樹にしがみつく者もあつたが、昌造は、おもてでは、もう何も恐れるところはなかつた。それより、さぶはどうしたらうと思つて振り向いてみた時、丁度家の棟を越して、こつちへの下り勾配を、波立ち騷ぐ瓦を踏んで、

「ほッ、ほッ、ほッ」

と、口を尖らせて息を吐き吐き驅けおりて來た。痩て、丈のヒョロ長い、もとは演伎座の道具方だつたといふさぶの、尻からげのかい脛が、反跳むやうに宙を踏む具合は、氣の毒とは思つても、噴き出さずにはゐられなかつた。

「大抵はこれで出して來たつもりですが……」

さう云つて、違棚に飾つてあつた蒔繪の料紙箱の蓋を取つて見せた。昌造の着物の上から、ぎゆう〳〵詰めに、のみかけの敷島の箱ひとつ餘さず拾ひ込んで來てあつた。

「や、どうもこれア……。御苦勞樣、御苦勞樣」

昌造は、薄冷紗の筒ッぽの單衣一枚で居たから、こゝで着物を着更へて了はふと默つたが、往來なかでまさか素ッ裸になるわけにもいかないので、一重の羽お前をした。そんな時でも、何してもこれア、みつともないことが出來あがつて了つたもんだ、――この氣持だけだつた。めつたにないくらゐの地震には違ひないけれど、どこもかもこの騒動とは、決して思ひもよらなかつた。少し荷のかゝるトラックや騎兵の一小隊も通れば、沖津ほどの坪數を擴げた建物でさへ、どゝゝどッ、びゝゝびッと家鳴震動するこの邊一帶の地盤の惡さは、東京ちう探してもとんと類のないくらゐのところで、それ故にこそこの爲體なのだから、少し離れた場所の居住者たちの目には、白衣跣足で避難する圖などは、ただもういゝお笑草といふだけのものと思はれて、みつともないが先に立つた。それは また、これからどこへ行くにしても、自分一人だけ別れて了ふわけにもいかず、女連をぞろ／＼引きつれて……、といふ點にもかゝつてゐた。一體沖津の女將は、年ぢう體が惡くて、入院してゐるとか、避暑避寒の旅に出てゐるとかで、この夏も鎌倉の別莊の方に行つてゐたから、留守を預るお民は、こんな場合の處置にも、いくらか昌造をたよりに思ふ風だつた。

「どうしたらいゝんでせうね」

「どうしようにも、これぢアちよつと手のつけやうがないからなア」

そんな點で、いつか一同を保護しなければならないやうな立場になり、やがて外聞の惡さなども忘れて了つたが、最初往來へ出て行つた當座などは、停電した電車から降された連中でもあらうか、こつちに關係したことぢアない、といふ顏つきで、ぶらり／＼そこら見物して歩いてゐるやうな人たちもあつて、ことさら、馬鹿な目をみたのは自分たちだけ、といふ感じが深かつた。

同商賣の、隣の富久家といふのも、ひどく潰れてゐたが、そこの勝手口から出て來た若い女が、なかで人が壓されてゐるから、誰か手をかしてくれ、早く助け出してくれ、といふやうなことを、無造作のやうに喚きたてるでもなく、寧ろ呟くやうな、誰にともなく哀願するやうな調子で、――たゞ歩調だけは、氣忙しなく蹈鞴を踏み、勝手口の前、五六尺を直徑に、きり／＼と廻り歩きながら喋り續けてゐた。昌造が見てゐた限りでは、誰もそばへよつて行く者はなかつた。落ちついてゐたつもりでも、矢つ張り普段とは違つた氣持だつたとみえて、別にそれを不思議とも、怪しからんとも思はず、第一自分に行つてやらうといふ氣が出なかつた。――十三四年も前、吉原の大火に居合せて、あぶないところを逃れながら、二度三度と、自分から好んで火に近づいて行つたことなど思ひ合せ、もしあの年齢ごろだつたら、今でもすぐ飛び込んで行つて、あとから／＼と續けさまにやつて來る

餘震の、どれか一つで、きつと自分もやられて了ふのだ、と思つた。

折角助かつたものを、今さら危險に近よることはない、かう自分自身に呟きながら、くるりと、隣のうちへ背なかを向けて了つた。

見附よりの、一二町ばかり先から、もう〳〵と黑煙があがつてゐた。

「火事だらう」

「さうでせうね」

半鐘ひとつ鳴るでもなく、夏の眞ツ晝間のことで、口でさうは云つても、一向その氣になつて來なかつた。

「惡くすると、これア、こゝらも火ンなるぜ。出すものがあつたら、誰か男を賴んで、今のうちに出せるだけ出しといたらどうだい」

「さうですねえ……」

お民は、ぼんやりして了つた顏つきで、「でも、もうとてもはいれやしないでせう」

「よした方がいゝわ。うつかりはいつてつて、搖り返しで潰されでもしたら、それこそみつともないから」

琰龍は、尻をからげて、すつかりもう逃げ仕度をしてゐた。

蒼ざめた顏に、てれたやうな笑靨をよせ、洗ひ晒しの寢間着ひとつで、ふらり〳〵三平がやつて來た。

「どうです！」

「どうしたい」

「や、驚いたのなんのつて、寢てるところを、いきなり、がら〳〵がら〳〵ぴッしやん、と來たと思ふと、ちやアンともう二階が下階ンなつちやつて……」

「女房さんは？」

「あいつも寢坊してたおかげで助かつたんで、可哀想に、階下でまご〳〵してたあれの妹の方は、抑えられちまやアがつて……」

「え？　潰された？　どうしたい、そイで」

「いえ、いゝ按配にね、近所にわりに男手があつたもんですから、すぐみんなよつて引きずり出して貰つたんですがね、足をくぢいただけで、怪我は大したことぢアなかつたんですけど、相憎あなた、これだもんだから……」

ものの抱くやうな手つきで、姙娠の意を通はせ、あとは無理からの笑ひ聲に紛らした。

「でもまア、それくらゐのことですんでよかつた」

「そいで、あなたは……？」

「なんだい」

「どうしたんです」

「どうもしやアしないよ。御同様さ」
「あゝ、來てゐたんですか」
「ゐたさ。どうしてそんなこと訊くんだい」
「だつて、きちんと着物なんぞ着込んで、帽子まで被つていらつしやるから、どつか、番町のお宅かどつかから、いま駈けつけていらしつたところかと思つて……」
「なアに、矢つ張り寢ごみにやられた方さ。それも、いつもの藏二階にゐたら、今頃はもうどうなつてたかわかりやアしないんだけれど、いゝ按配に、昨夜に限つて千鳥に寢たもんだから、無事にまア傭ひ出して來たわけさ」
「さうねえ」
と、瑛龍も、肇てそれに氣がついたやうに口を入れて、「お藏、どうなつたでせう」
「つい見もしずに出て來ちやつたけれど、よしんば藏は立つてたにしたところで、千鳥がよッかゝつて行つた下が、藏前の、丁度あの廊下ンところだから、出ようにも、出る口がなかつたらうと思ふね」
「あゝ、さうねえ。窓にやア鐵の棒がはまつてるし……」
「何しろ、千鳥がそつくりよッかゝつて行つたんだから、藏だつて立つてるかどうかわかりやアしないよ。さうとすれア、無論……」
「から〳〵、ぴしやん、きゆう、ですね」
「それッてのも、お月樣のおかげよ」
お民の話のなかに割り込んで來て、「あんたのお歸りがおそいもんだから、二人で、お月見でもしながら待つてませうつて、あつちへ行つたのが、ついそのまんまになつちやつたから……。あゝ、いやだ、いやだ！　思つてもぞうッとするわ」
「全く、お月樣のおかげで命拾ひをしたやうなもんだ」
「そイで、あなたがた、これからどうなさるおつもりなんです？」
「別にまだどうしようつてあてもないんだが、いよ〳〵仕方がなけれア番町へでも行つてみるんだね。あすこらなら、きつと、大したこたアあるまいから」
「えゝ、それア、まるでこゝらたア地盤が違ひますものね」
そこに、今度は、刺子袢纏の火事裝束で、見違えるばかりきりッとした頭が、急ぎ足に近づいて來て、いきなり瑛龍に、
「行つて見ましたがね、お宅はちやんと立つてます。立つてるこたア立つてますが、××で火を出したから、まア、十中八九助らないつもりでゐてください」
「さう。どうもあり……。そイで、うちの人たち、だアれもなんともなかつたかしら」

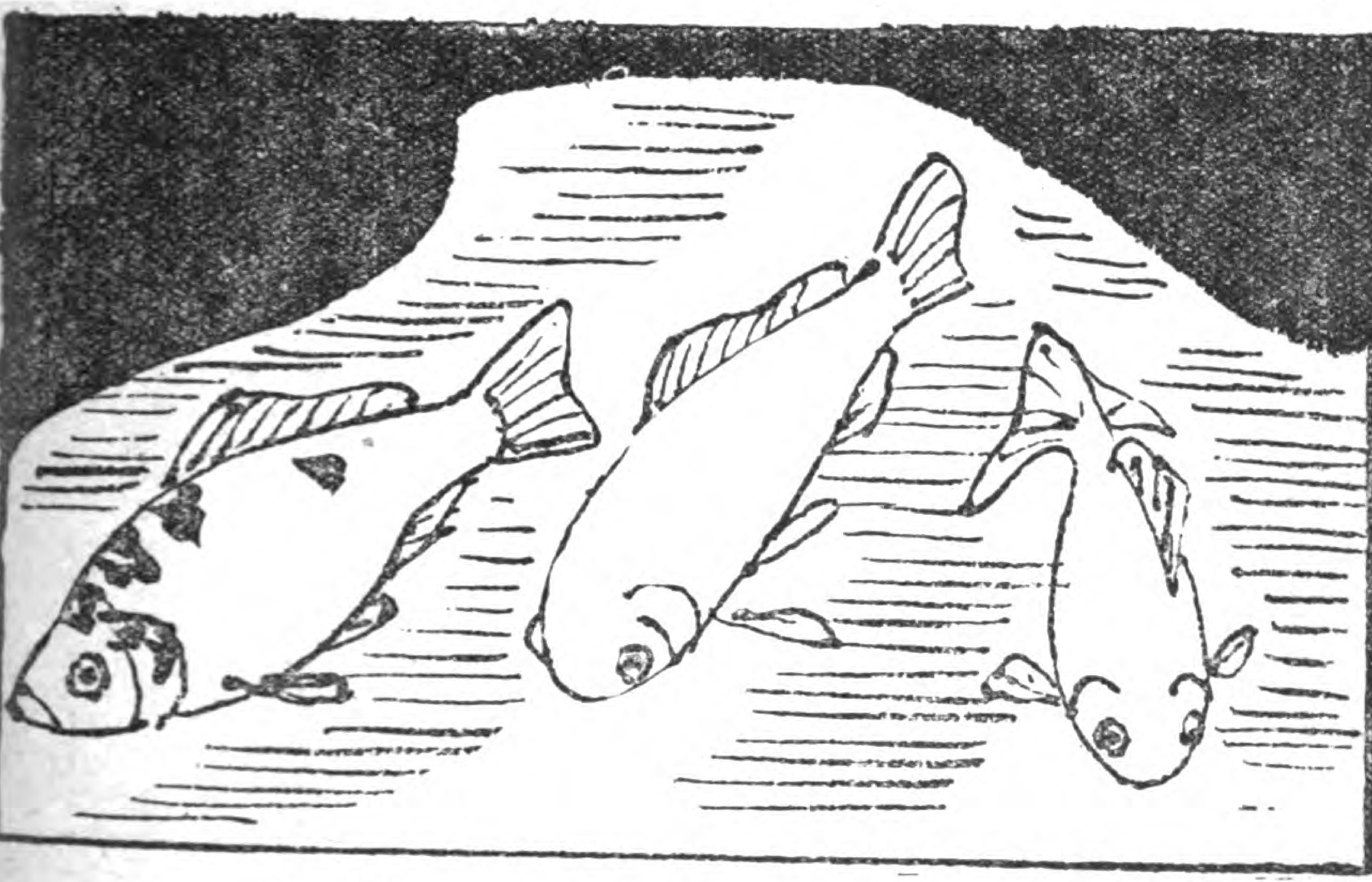
「さア……」
「もしそこらで逢つたら、あたしはここにゐるから、——うちのものなんぞなんにも持ち出さないでもいゝから、早く逃げて來るやうにつて、さう云つてやつて頂戴な」
「ようござんす。なんか、然し、是非出さなきアならないもんでもあつたら……」
「いゝわ、いゝわ。なんにも要らないわ。焼けちまつたつて構やアしないわ」
紫ずんだ唇に、ちらッと金歯を見せただけで、頭は、すぐまた取つて返して行つた。
「××つて云ふやア、お宅の一軒おいて隣ぢアありませんか」
「さうよ」
「ぢアもう駄目だ」
「だけど、あたし、ちよつと行つて見て來ようかしら」
「およしなさいよ、あぶない！」
「いゝえ、焼けるのは構やしないけど、うちの人たちも心配だし、阿母さんの方もどうなつてるか……」
「だいじよぶですよ、既にもうみんな逃げてますよ」
「知つ要りあたし行くわ！」
「よした方がいゝだらう。あぶないぜ」
昌造も、そこに始めて口を出した。
「頭につれてつて貰やア大丈夫よ。呼んで頂戴！　早く頭を呼んで來て頂戴！」
みんな一齊に、そつちへ目をやつたが、いつの間に、どこからこんなに出て來たかと思はれるやうな人ごみのなかに、丈の高い頭の首から上だけが、もう鳴戸の横町を曲りかけてゐた。
「呼んで來ませうか」
三平は、板のやうに摺りへつた下駄を鳴して、すぐあと追つて驅けだして行つた。
「然し、まア、大抵ならよした方がいゝな」
「でもね、あたし、うちにゐなかつたでせう、だから……。なんだか心配になつて來ちやつたんですもの……」
「それアさうだらうな」
無論それは、先刻から、昌造にはなほさら強く來てゐた氣持だつたけれど、それにしても、この報が傳つたら、さぞこつちの身の上を案じるだらう、といふだけの意味で、途中あたりまでこゝらと同じやうな、或はそれ以上ひどい災禍をうけてゐるようなことは、夢にも思ひよらなかつた。と云ふのが、第一には、自分のゐたところが、停車場地

縁の惡い溜池だつたために、なんとなく、災害の中心にこゝ、と頭からきめ込んで了つた態があつたのと、もう一つには、砂地といふものが、地震に對して、絶對とまではいかずとも、甚だ安全率の高いといふ、子供からの、不思議に堅い信念をもつてゐたからで……。

その確信の基を成してゐたのは、十三の年齡に死に別れた母方の祖母の言葉だつた。明治二十七年の、たしか七月だつたかの大地震の時、――それは、上役との喧嘩から向不見に官途を退き まだ實業界にも首を突つ込まないといふ 父親の浪々時代で 鎌倉の別莊に、急に二間ほど建増をし、滿身の不平を纔に田舍住居に紛らしてゐた頃だつたが 祖母だけは別に、東京の學校に通ふ文吉と綾子とを預つて、中六番町に貸家を借り、小體に暮しながら、時たまの鎌倉からの上京にも備えてゐたわけで、その頃にはまだ隼夫は生れず、末ッ子だつた昌造一人だけ父母のお伴が叶つて、その中六番町のうちへ出て來てゐるところへ あの大地震だつた。祖母のお尻に母親、そのまたお尻に昌造と、「こーとろ子とろ」の遊びのやうに繋つて、一本の柱の周りを、幾度となくぐる〳〵廻り歩いてゐるそばでは、折から晝寢をしてゐた父親に背を向け、早くこゝへ來ておぶされ、といふ形で、おもてへぬける木戸もないやうな狹い庭に跣足でおり立つた下女が、口は利けずに、たゞおいで〳〵をしてゐる、といふやうな、滑稽極まる慌て方はしたが、然し、棚のものが落ち、掛時計がとまつたくらゐのことで、家に大した損所もなくてすんだ。その時すぐ話題にのぼつたのは、鎌倉に殘して來たほかの子供たちの安否だつた。どうだらう、大丈夫かしら、――さういふ甲斐のない談合の間に出た祖母の言葉なのだが、後に思へば、父母を安心させようために、全然でたらめでないまでも、多分の誇張はあつたかも知れないけれど、「なアに、お前さん、砂地は大丈夫さ」と、こともなげに、一言のもとに片づけて了つたものだ。そして、その理由として云つたことには、土臺石が搖れる、砂だから、搖れるだけは搖れる、が然し、丁度米を搗く杵の周りに、絶えずぼろ〳〵ッ、ぼろ〳〵ッと新しい米がこぼれ落ちるやうに、搖れゝば搖れるほど、それだけ餘計に砂が流れ込む道理で、決して堅い土の上の土臺のやうに、がッたりいく筈はない、地震にかけたら、だから、砂地くらゐ安心なものはない、――と、かう云ふのだ。七つになる昌造は、成程なア、と悉く感心して了ひ、深くも肝に銘じて、これが今日が日までの確信の基になつて來た。それも、歸つてみると、鎌倉がひどくやられてゐた、といふやうなことででもあつたなら、また疑念の餘地も生じたのだらうけれど、偶然にも、震源地の加減か何かで、そこでは大した搖れもなかつたと聞いて、有繫は祖母さん、えらいことを云ふもんだ、と、まるで感服の止めをさゝれたや

うに、きゆうッとこれが、幼心に染みついて了つたのだ。
そんなわけで、逗子の家族の上には、少しの不安をも感じなかつたけれど、自分がかういふ災害の中心地に居合せたために、彼等にまで要らぬ心配をかけたことは、なんと云つても心苦しかつた。その矢先で、珠龍がうちをあけてゐたことから、何か責任感といふやうなものに苦しめられてゐる氣持は、手に取るやうに映つて來た。
「そんならよア、よく頭に頼んで、あんまりあぶなくないところまで行つて來るんだね。……尤も頭だつて、そんなことしてゐられる場合でもあるまいけれど」
「あゝ、それアさうね」
それが、いかにも、と腑に落ちた顔つきで、「わざ／＼こゝまで、あゝ云ひに來てくれたんだつて、大へんだわね。……そイぢア、どうしませう、よさうかしら」
「兎に角さア、頭に訊いてみたまいな」
そんな風に云つてゐるところへ、三楽が、人波をわけて駈け戻つて來た。
「駄目、駄目」
と、息をはづませながら、「とッても、あなた、煙草屋の角から彼方へたんぞ、一足だつて行かれアしませんぜ」
「さうお、そイで、頭は？」
「およしなさいつて、──行つたつて無駄だからおよしなさいつて。なんせ、あなた、水道が破裂しちやつて、水つてものは、ひとッたらしも出ないつてんだから……」
「あら、さうお！」
「あたしもそこまでは氣がつかなかつたけれど、成程聞いてみれア、それアさうでせう、──上に立つてるもんが、あれッくらゐ揺ぶられるんだから、地の底ちア揉みくちやでせう。水道なんぞの出るわきアないや
「ぢア、燃え放題つてわけね？」
口尻をひん曲げて、お民は、意味もなく笑つたやうな顏つきになつてゐた。「さうすると、うちも駄目かしら……」
「駄目々々！　いま×××の三階から、ぽッぽと火を吹いてまさア。あんたがたも、そろ／＼もうどつかへ避難した方がよござんすぜ」
「一體、君ンとこの女房さんや妹なんぞどうしたんだい」
「いえね、師匠ンとこへ預けといて、ちよいと樣子を見て來るからつて、飛び出して來ちやつたんですが、ひとつ、行つてつれて來ませう。かういふ時は、なんでも大勢ひと塊りになつてる方が、氣丈夫でようござんすよ」

「然し、火の都合ぢア、どつかイ行つちまうかも知れないよ。いつまでもこゝで、荷物たちを番つてるわけにやアいかないかも知れないよ」
「えゝ、それアどうも仕様がありませんや。きつとまたどつかで出ツくわしますよ」
「よく、だけど、下駄なんぞ穿いて出たもんだな」
「どういたしまして。師匠〻とこのお勝手から、斷りなしに引ッかけて來ちやつたんですよ。……さア、成可なら、山王様の方へおいでなさいな。さうすれア、あたしたちも、あとからあつちの方へ行くから」
　三平が別れて行つてから、お民のそばへよつて、
「どうしよう、もうちつとこゝにゐなくつちアいけまいね」
「さア……。でも、もう仕様がありませんわね」
「仕様がない。どうせ仕舞にやア燒けるんだよ」
　見返ると、いつの間にか火の手はもう、鳴戸の横道あたりまで燃え迫つて來てゐた。
「さうですわねえ。ぢア、行きませうか」
「本來なら、すつかり燒け落ちるまで見屆けるのが、君の役目だらうけれどね」
「いゝでせう、もう、行きませうよ。見てたところで、どうも、仕様のない話ぢアありませんか」
「それアさうさ」
　で、瑛龍と、沖津の女中がお民以下五人、あまりちらばらにならないやうに云ひつけて、いよ〳〵そこを離れに行つた。――そのとき壁て、罹災者らしい窶れッぽい氣持が、鋪道の上にぺたつく足音や、小砂利を踏んづけた痛みから、微かながら昌造の胸へも漂つて來た。
　乘り捨てられた電車のなかに、陽を避け、立ちつくした足腰の疲れを休めてゐる者があつた。何屋だつたか、隣近所が多く潰れてゐるなかに、一軒だけ立ち殘つた店の前の人道に、家族から店員まで十二三人、ずらりと一列に正座して、家に向つて掌を合せ、聲高に讀經してゐるそばも通りかゝつた。
　溜池橋から永田町へ曲り、やゝ往來から引つ込んだ高みの空地に、避難者の群が、あつちこつち塊つてゐた。當分の安全地帶と思はれたし、それに、火の子もかゝらないうちに我が家を見捨てたことは、お民にとつては多少氣がかりに違ひなからうから、一度にさう遠くまで立ち退かせるのも、と、ひとまづその草原にはいつて休むことにした。（つづく）



孤獨結婚

保高徳藏

一

新吉が妻の乘つた列車をまだうろうろと探してゐる中に、彼女はもうプラットホームへ降りて、小型の信玄袋を提げながら、なだれるやうな人々の群にまぢつて、彼の方へとやつて來てゐた。彼は、妻と顔を見合はせても、流石に笑つて彼女を迎へることは出來なかつた。

彼女が、新吉との諍ひで家を飛出し、京都の幼な友達の所へ身を寄せてゐた一週間ほどの間に、新吉は、あの住み心地のよかつた中野の家を疊んで、狹つ苦しい下宿の四疊半に移つてしまつたが、こんな破壞的な行爲を決行するまでには、彼の心持が、どうにもならない窮極に突き詰められて來てゐたからだつた。

強情な性質の彼女は、幾分極り悪さも手傳つてか、新吉から口を利くまでは彼女も利かないつもりらしく、ちよつと眼を見合つたまゝで、默つて夫と列んで歩いた。

「こつちだよ、省線で目黒まで行くんだ」

「さう」

新吉は、彼女を連れて電車のホームへ上つた。電車が來るまでには、まだ少し間があるかして、彼女が線路の方へ首を突き出して眺めて見ても、こちらへやつて來る電車のヘッドライトの光は遠くの方にまでも見えなかつた。

「どう、疲れたか」

「いゝえ、夜行ぢやないから」

「飯は」

「食堂で食べました」

ちよつと話が途絶えた。すると、今度は彼女の方から訊ねた。

「下宿の部屋は何疊です」

「四疊半だ」

「それぢや狹くはありません」

「ちよつと狹い」

「荷物なんかどうしましたの」

「僕の入用なものだけ持つて來て、あとはH君とこに預けてある」

「片着けるのに困つたでせう。何も壞れたものはありません」

「うむ、壞れたものはないつもりだが……それより面倒臭かつた」

「あんなことは男には出來ないから、私があやまつて、荷物だけは片附けに來ようと云つてるのに來させてくれないんですもの……」

妻は恨みがましく云つた。新吉は何とも答へなかつたが、時々に通つた代々木の原を、トラックの上で揺すぶられながら通つた引越しの時の、忙しい心持を思ひ浮べてゐた。

電車が來たので二人は乘つた。

下宿に歸ると、妻は、電燈に照らされた狹い部屋の中をくるぐる眺め廻した。僅か一週間ほどゐない間に、すつかり家をなくされ、新吉一人が中學生のやうに下宿の一室に起臥してゐることを、現實としてはつきり確めようとするやうな眼つきだつた。

「こんな部屋ぢや窮屈でせう」

「窮屈でも仕樣がないさ」

「辛抱が出來ますか」

「するよ」

「…………」

それから妻は京都に行つてゐた間のことをこまぐ\と話したが、そんな話が一と通り濟むと、今度は彼女自身の今後の身の振り方に就いて相談して來た。

「あなたがこんな處置をとつてしまつたのは、それあ私が惡いのだから仕樣がありませんがね……ですから私、三四年どこかで働かうと思ひますの」

「どんな處で」

「さうね、カフエなんかはいやだし、と云つて今更藝妓でもありませんからね……上品な一流の旅館か料理屋の女中でもしようかしらと思ひますの。そして三四年みつしり働いて、その上で、あなたにも私にも故障がなかつたら、更めてHさんでも間に立つてもらつて、お互ひの希望を話し合つて、また元通りになれゝばなりたいと思つてゐますの」

「…………」

分らない時には、滅茶なことでも生來の勝氣な強情でもつて押し通す代りに、かういふ場合には考へるだけ考へて來てゐるらしいので、新吉は話がし易いと思つた。

「尤も、あなたが私と元通りになるのがいやだと思ふのだつたら、もう一度京都へ行つて、かね子（彼女の幼な友達）さんに世話して貰つて、H屋へ入れてもらはうと思つてゐますのよ」

「かね子さんはどうしてH屋を知つてゐるのだ」

「何でも遠い親戚に當るさうで、あの人家にぶら〳〵してゐると、遊んでゐないで手傳ひに來てくれつて、H屋からやかましく云はれたさうです。だが、あんな病身だもんだから行かなかつたんですつて」

京都でも一流と云はれてゐるH屋といふ旅館に働いてゐる仲居の女中姿を、新吉は想像に浮べて見た。東京で働く彼女と、どうなるか豫想も出來ない三四年後のことを約束するのは、また心に重い負擔を背負ふやうに感じられるのに、すつぱり別れて京都へ行つてしまふと云はれると、やはり怪しい動搖を感じる彼の心を、新吉は自分ながら腑甲斐ないことに思つた。

「ねえ、私、どうなつても決してあなたを怨まないから、どちらか返辭を聞かせて下さらない」

「お前はどつちの方がいゝのだ」

「それや、先に話したやうな方法にして下さると、私嬉しいけれど」

「だつて一緒に暮してゐてもあれだから、三四年も離れてゐたら…………」

「いえ、そのことなら」と妻は不意に彼の言葉を遮つて、「私よく分つてゐますわ。それや、あんなことがあつて、私の信用のないことはよく分つてゐますが、今度はもう大丈夫。大阪の養父にも送つてやらなくちやならないし、お金もそろ〳〵溜めなくちやならないと思つてゐますから、そんな色氣なんぞはすつぱり棄てゝ、一心に働かうと思つてゐますのよ」

「どうだかな」

「[illegible]わ」

「今はほんとだつてことは分るよ。だが、長い間のことは、誰だつて分るものか」

妻の言葉には可成り眞實な響があつた。だが、新吉はそれを絶對のものとして信じることは出來なかつた。彼女はこの二年ほどの間に貞操の點で二度まで新吉に苦い味を嘗めさせてゐるのだつた。

「あなたのやうに云つたら、私、もう何も口を利くことが出來なくなつてしまひます」

から云つた妻の調子には遣る瀬ない響があつた。だが、新吉も妻を信じられないことを淋しく思つた。

「おいやだつたら仕様がない、わたしまた京都へ行きますわ」

「さう急に云つたつて、こんなことは簡單にいま直ぐ決定の出來るものぢやないよ。二三日待つてもらはなくつちや」

新吉は頭の中で頻りに鬪つた。たつた數時間前までは、すつぱり別れる決心でゐたのに、かうして話をしてゐる中に彼の心は何時かまた彼女に離れられなくなつてゐるのだつた。今の中だ、今の中だつたら、「別れてしまふから、京都へなりと何處へなりと行つてしまつてくれ」と云ひきつてしまふことも、それほど困難ではない、だが、今いひそびれたら、それこそ絶對に別れられる時は來ない——から彼の理性は叫んでゐるのに、彼は、ともすると、彼女の第一の希望とする方法の方へ心を馳せてゐるのだつた。しかし、彼女のいふやうに三四年後を約束することは、彼の心に、また一つの困難を思はせるのだつた。三四年の間にどちらかの心が崩れる——さういふ場合には、この約束があるために、崩れられた方は傷手を負ひ、崩れた方はそれに拘はれねばならない。それに、彼には絶對に心が崩れずにゐられるといふ自信もなければ、また彼女を信じることはなほ出來ない。結局は、愚かな惱みを繰り返へすことになる——と云つて、あんな事件の後で、また家まで搬んだ後で、無條件に同棲するといふことは、彼にも流石に意地でゝも出來なかつた。

彼は煙草を取つて吹かした。煙がゆるく立ち昇る。それが如何にも決斷に迷つてゐる彼の姿を思はせるのだつた。

二

新吉夫婦の生活は、結婚後四年目の夏に、妻が無名作家の貧乏な生活に堪へかねて、當時三歳になつてゐた女の子を連れ、彼の意志などには頓着なしに遮二無二大阪へ歸つてしまつた時から、破損した歯車のやうにガタガタになつてしまつた。

その後、彼も地震に遭つて歸郷したが、もともと妻の我儘な行動に對して不滿を抱き、夫婦間の感情にいつも不愉快な思ひをしてゐた彼

は、ふとした機會で他に情婦を作つた。だが、それは長いことは續かなかつた。間もなく、彼のたつた一人の子供が死んでしまふし、父の死後、兎角不振に陷つてゐた家の仕事が、どうやら危機に面して來たので、彼は子供の死を轉機に、女とも別れ、家の仕事を盛り返へすために懸命に働き出した。處が、今度は、彼の情婦を作つたことを根に持つてゐた妻は、その心に復讐的な氣持も働いてゐたらしく、出入といふ好餌で接近して來た男といつか戀愛關係を結んでゐた。

こんな風に、彼等は鼬鼠ごつこでお互ひの心に怨恨と憎惡の種子を植ゑつけ合つてゐたが、それでゐて彼等は別れることも出來なかつたのだ。

「さうだ、俺からさつぱりした氣持になつて何も彼も忘れてしまはう。何時までもこだはれてゐたら、それこそ鼬鼠ごつこの繰返しで、俺たちの生活は滅茶々々だ」

彼はその時から思つた。さうして父の仕事が沒落してしまつたのを機會に、泥沼に踏み込んだボロ靴をその儘脱ぎ棄てるやうなつもりで郷里を去つて、もう一度上京して來たのだつた。

「お互ひに生活の蒔き直しをやらう」

彼等はこんなことを誓ひ合つた。生活の上にせめてかういふ希望でも持たないと、彼等の[illegible]心から[illegible]つてしまふやうに思はれたからだつた。

そこで新吉はまた雜文を賣りに廻る生活に入つた。處が、蒔き直しどころか、一年も經たない中に、彼の妻は彼が生活苦で喘いでゐる中で、また一人の青年と戀愛關係を結んでゐたのだ。それは新吉の友人のGといふ作家に師事してゐた西田といふ青年の弟だつた。事實がはつきりしてしまふと、殘るものは殘滓のやうになつた彼の心だつた。妻の無誠意ないくつもの行爲が眼先きにちらつくと、もうそこには「生活の蒔き直し」といふ氣休めをいふ氣にはなれなかつた。彼はすつかりまいつてしまつた。この上彼が妻と同棲するのは、彼が妻の魅力にだらしなく引きつけられてゐるからだといふより他に説明のしようがなかつた。さうして事實はその通りだつた。彼等の上には、たゞ痴情の諍ひが續くだけで、他に何物もなかつた。彼は時に妻が憎らしく感じられて、直ぐにでも彼女と別れようといふ衝動に驅られた。だが、次ぎの瞬間には不思議なほどの魅力を感じて、彼女から離れられなくなるのだつた。新吉は妻のあらゆる行爲に嫉妬した。彼は仕事をしてゐながらも、彼の神經は絶えず妻を監視せずにはゐられなかつた。

これは彼にとつても苦しい生活だつたし、妻にとつても窮屈極まるものだつた。妻はこの窮屈さ[illegible]になつて、[illegible]

誤魔化した。それに[illegible]、一人の[illegible]たことは、嘘といふことと明らかに見え透いてゐても、決して追求しようとはしなかつた。そこにまた烈しい夫婦間の諍ひが起るのだつた。

一と月ほど前のことだつた。彼等のところへ、庄七といふ郷里の青年がやつて來て、毎日ぶら〳〵と見物に遊び歩いてゐた。來た時の話では、ほんの二三日と云つてゐたのに、一週間たつても歸らうとする氣勢がなかつた。彼も不審に思ひ出して來た頃だ。或る朝、突然警官に拘引せられて行つた。聞くと、單純な保護願でなくて、刑事手當の電報が郷里の警察署から來てゐるといふことだつた。

妻は涙ぐんでその青年のために心配した。彼は、妻が泣いてゐるのを虚心に見逃がすことが出來なかつた。

犯罪といふのは、母親の名義になつた家屋を無斷で賣り拂つて、その金を持つて逃走して來たといふことで、母親と兄とが郷里から身柄を引取りに來ると（刑事手當の手續きもこの二人がしたこと〻て）直ぐ渡された。

彼等の一行は、その晩の夜行で歸つて行つたが、一週間ほど前になつて、その青年から妻に宛て〻突然に手紙が來た。時候の見舞やら、その後の樣子やら、何でもないことを書き列べた末に、彼には意味の呑み込めない文句がたつた一と言あつた。「都合であれを願ひます」

こゝで彼の嫉妬が起つた。彼は妻にその文句の意味を訊した。妻は無論、彼女自身にも分らないと云つた。だが、そんな單純な辯解で彼は誤魔化されはしなかつた。これは妻に向つて何かを要求してゐる文句だ。要するに、妻と庄七との間に、他人には秘密な何かの約束があるに相違ない、――かう思ふと、彼はその青年と彼の妻との今日までのいろんな關係を思ひ出さずにはゐられなかつた。

その青年がまだ十五六才の頃、通りすがりに見た彼の妻（その頃はまた彼等とは結婚してゐなかつた）の容貌が、死んだ姉に似てゐて懷しいといふ理由で、交際を求める手紙を妻に送つたといふ話や、また彼と妻との間に戀愛が生じなかつた時分だつたが、庄七と妻とが手をつなぎ合つて緣日へ出かけて行つてゐる姿を、彼が見たことや、また彼と彼女との間に戀愛が生じて、結婚するといふことを庄七に話した時、しく〳〵泣いて何時までも泣き止まなかつたことやが、彼の記憶の中に物狂ほしく蘇つて來た。

その頃から見て、庄七は花街へも足を踏み入れ、カフェの女給にも戯れたりして、すつかり「男」になつてゐた。さういふ庄七と妻とを殘して、彼はその晩の夜行で歸る庄七の母親と兄とが、東京は初めてだといふので、二人を市中の見物に案内したことを思ふと、齒ぎしり

するほどの口惜しさと腹立たしさが起つて來るのだつた。新吉はその手紙を突きつけて執拗なほど妻を責めた。妻は強情を通して、容易に事實を話さうとしなかつたが、不斷は嘘を吐かれても泣き寢入りになる新吉も、その日は手紙といふ證據物があることゝて、いつまでも妻を責めることを止めなかつた。この執拗な追求に、妻はたうとう、庄七から百圓紙幣を一枚預つてゐるといふことを話した。それは無論拐帶した金の幾部を兄に渡す時に、狡猾な庄七がこつそりぬいて置いたものだつた。

妻はこれだけのことは彼に話したが、二人の關係は、これ以上に何ものもないと云ひ張つた。彼には、庄七が拘引せられた時の妻の泣いた顏や、晝間のうたゝねの醒めぎわに、何やらひそ〱話し聲が聞えてゐたのが、彼が寢返りを打つた瞬間にぱつたり止んでしまつたことや、二人つきりで話しをする機會を作らうと只管に心懸けてゐた妻の態度やがまざまざと思ひ起こされて、妻の言葉を素直に受け容れることは出來なかつた。だが、これには何等の證據物もないことゝて、何時まで彼女を責めても結局は徒勞に終るよりほかなかつた。その代り彼の心には殘滓のやうなものが殘つて、カラリと晴れた心持にはなれなかつた。

[illegible]

書く、と云つて、茶の間へ入つて行つた。彼は自分の仕事をしながらも、唐紙一重となりの茶の間で、手紙を書いてゐる妻の氣はいを感じてゐた。すると、少時して妻はまた顏を出した。

「もう手紙は書けたかい」と彼は訊ねた。

「いゝえ、書きませんでしたの」と妻は答へた。

「そんな筈はない、今そこで書いてゐたぢやないか」

彼は意外な感じがしたので、默みかけてから云つた。

「いゝえ、書いてたことは書いてましたが、面倒くさくなつて途中で止したの」

「そんな、むづかしい手紙でもないだらう。かね子さんにやる手紙ぢやないか」

「でも、書けない時には仕樣がないわ」

妻は早や不機嫌を顏に表して云つた。彼は、そんな筈はないと思つた。不斷から、字は巧くはないが、手早く書くのと、書き流しをしないのを自慢にしてゐる彼女だ、殊に、一通の手紙を書くのには長すぎるほどの時間をかゝつてゐるのだ。

「また嘘なんだらう」

「いゝえ、嘘ぢやないわ」

[illegible]

新吉がかう云ふと、妻はツンと[illegible]たりしく、[illegible]の

やうに出て來る大阪辯で、

「煩い人やな」と云つたかと思ふと、茶の間へ這入つて行つたが、直ぐ引返して來て、

「さあ、見なはれ」

かういふ聲と共に、一通の手紙をぽんと彼の机の上に放り出した。

見ると、書き潰しどころか、ちやんと封筒の封をして、京都の友達の宛名まで書いてあるのだ。

何の爲に書き潰してしまつたと云ふのだらう？　また、日頃強情な彼女が今日に限つて、何のために彼女自ら、こんなに易々と自分の嘘を曝露したのだらう？——かう思ふと、新吉は妻の心持を解しかねて、彼女の顏を見上げた。すると、妻はもうすつかり居直つて、挑戰的な眼をきらきら光らせながら彼を睨んでゐた。

「何故、書いたものを書かないなんて嘘をいふんだ」と彼は妻を詰つた。

「さうよ、あなたがあんまり重箱の隅をほぢくるやうなことを云ふからよ」と妻は不貞腐れした。

「云ふからと云つて、嘘を吐く必要がどこにある」

「あゝ煩い」と、彼女は頭から煩さそうに顏をしかめて、「嘘を吐かれ[illegible]いなら、どうなと勝手にしよれ」と云つたなり

彼女は、鏡を投げ出して彼に挑戰して來たのだ。新吉は怒りに駆られながらも、妻の態度に何處かぴつたりとした自然さがないやうに思つた。いくら、彼が重箱の隅をほぢくるやうに穿鑿をするからと云つて、書いた手紙を書かないと嘘を吐き、その嘘がまだ曝露しさうにもない中に、強いて自分から曝露させた揚句、いやに反抗的に突つかゝつて來る——この態度が彼に不自然を感じさせずにはゐなかつたのだ。

もつと他に、何か理由があるだらう？　かう思ふと、彼はその瞬間、

「貴樣、もう一本手紙を隱してゐるだらう」と呶鳴つた。

「阿呆らしい、何の手紙をです」

妻はぎくツとしたやうだつたが、直ぐかう云つて白らばつくれた。

「片七へやる手紙だ、それを見られるのがいやで嘘を吐いたのだらう。さあ、早く出せ。それとも、昨日云つたことが嘘で、僕に見せられないやうな文句が書いてあるのか」

「馬鹿々々しい。それや、あなたの妄想といふものよ。さあ、何處でも搜しなさい。そんな手紙、どこにあるものか」

「ようし、搜し出してやる」

新吉は茶の間へ入つて行つて、彼女が友達へやる手紙を取りに入つた時に手早く隱したであらうと思はれる、机や鏡臺の抽出しや、茶簞

笥の中から、箪笥の中や、それ等の衣類と紙との間まで、眼の届く限り捜し廻つた。だが、そんな手紙はどこにも見當らなかつた。彼は一層いらいらして、一層焦燥した。

「ふゝん、そんな馬鹿らしい物、どこ捜したつてあるものか」

妻は冷笑した。彼は憤怒に驅られて、妻の腕を引つ捕へると、彼女の懷中を捜さうとした。妻は烈しく抵抗して彼の手を掻きむしつた。それでも彼は怯まないで捜索を續けようとした。すると、妻は反抗的な調子で鋭く云ひ放つた。

「さあ、そんなに捜したけりや、こちらから見せてあげる」

「よし、見せろ」と彼は手を離した。

「その代り、なかつたら承知しないから」

かう云ひながら、妻は手早く帯を解いて着物をはた〳〵させたが、何も落ちる物はなかつた。袂を裏返して見ても、何も出ては來なかつた。彼は、彼のこの直覺が決して外づれてゐないといふことは飽まで信じるのだが、肝心の目的物の出て來ないのには、どうにもしようがなかつた。

「さあ、どうです。何處にあります。人を疑ふのもいゝ加減にしなさい。」

「…………」

「何とか云へるなら云つてごらんなさい……どんなもんだ、何かといふと人を疑ぐるが、自分のことを考へて見るがいゝ」

妻は手紙の出ないのに勢ひを得て、非は全部かゝつて彼にあるやうな口吻で、ぴしぴしと彼を痛めつけた。彼は口惜しくておろ〳〵したが、返へす言葉がなかつた。それだけに餘計焦燥した。彼はいきなり立つて、平手で妻の頬をピシリと打つた。妻は彼に武者振りついた。

「何のために打つたんです。自分がありもしないことを疑つて置いて、人を打つて法がありますか」

「何がありもしないことだ。貴様が最初に嘘をいふからだ」

「疑ふから嘘を吐かれるのだ」

「何ツ、そんな云ひ草があるか。もう一度云つて見ろ」

「聞きたければ幾度でも云つてやる」

新吉は思はず拳を振り上げた。

「何だ、また人を打つ氣か。さあ打て……さあ打て……さあ打て…………」

妻はかう云ひながら烈しい血相をして、満身の力で新吉にのしかゝつて行つた。新吉はたぢたぢとなつて妻のために箪笥の前に押し附けられ、[illegible]て、今にも[illegible]伏せようとしたが、こ

の正體のない悲しみが[illegible]ために[illegible]今日まで
の種々な生活のパノラマが、一瞬の中に彼の心に展開した。彼はまだ
[illegible]妻を突き放して、強いて顔を背けて云つた。

「もういゝから大阪へ歸つてくれ」

「なに？　大阪へ歸れ？」

「さうだ、もう一刻も一緒にゐるのがいやになつた。直ぐ歸つてくれ」

妻はちよつとたぢろいだが、直ぐ強情な調子で答へた。

「歸れといひなはるなら、よろしい、歸りましよ」

彼女は自分の机の前に來て坐つてゐると、少時、鏡台の前でがちやがちや身繕ひをしたり、當座の荷物を纏める氣はいがしてゐたが、やがて出掛しに、

「私の荷物は、あつちへ行つたら直ぐ人を取りに寄越しますから」と彼女は云つた。

「いや、僕のものだけは僕が持つて行つて、あとはH君とこへ預けておくから、そこへ取りに行つてもらはう」

彼は手強く云つた。

「フウン、さうですか、さうしてもらへば私も助かる」

彼女は負けてゐないで、[illegible]して、勝手の方から、降り頻る（その日は雨降りだつた）雨の音をサーザーと傘に當てなが
ら行つてしまつた。

三

下宿の部屋の窓を開いて、錢湯から歸つて來る妻を待つてゐる中に、新吉はいつか憂鬱な心持に捉はれて、ぴつしやり窓を閉めてしまつた。彼は自制力のない、自分のだらしない心持を考へると、自分ながら情ない思ひがするのだつた。

――あの翌日「ワルカツタ、ヨウアレバデンニテ、キヨトヘタノムー」といふ電報が妻から來た時、彼は冷やかな心持でそれを讀むことが出來た。彼はまた大阪にゐた時分、彼と喧嘩をして妻が姿を隱した時、物笑ひの種子となるのもかまわず、心當りとなる親戚や知人の家を片つ端しから尋ね廻つたことを思ひ較べて、「俺もやつとあの女から卒業することが出來た」といふ心持をしみ〴〵と感じた。大阪へ歸れば、また庄七に逢ふだらうといふ彼の疑惑を避けるために京都の友達の處へ行つた彼女の、彼に對する心づかひも分らなくはないが、平氣で嘘の吐ける彼女のことを思ふと、それも一片の形式に過ぎないといふ氣がするのだつた。一時間餘りで行かれる京都と大阪のことだ、あの女がどうして逢はずにゐるものか――と思ふと、彼等夫婦の間には、い

よく〳〵どうにも出來難い距離が出來たやうに思はれるのだつた。

「君もいよ〳〵八年間の總決算をするんだね」

二人の關係を知悉してゐる友人のHは、荷物を片附けるのを手傳つてくれながらから云つた。

「さうだ、その通りだね」

彼もから答へた。さうして、急いで荷物を片附けて、長い間忘れてゐた下宿住居をまたするやうになつたのだつた。

だが、それにも拘らず、たつた二た晩妻とこの下宿で逢つただけで、もう妻から離れられなくなつてゐる自分の心が、彼には憂鬱の種子となるのだつた。彼は肉慾にだらしなく破れる自分の意志の弱さを嘆いた。自分の上に強い魅力となつて迫る妻の肉體を彼は呪はしくさへ感じた。

數日前、彼は或る易者を訪れた時、易者が彼等の夫婦生活を指して、「孤獨結婚」だと云つたことを思ひ出した。その易者が「科學的豫言」といふことを看板にしながら、非常に非科學的な言辭を弄してから、彼は易者の言葉を信じようとはしなくなつたし、また彼自身でさういふ處を訪れたことを恥としたが、彼等の夫婦生活に對する易者の言葉だけは、彼の耳から容易に消えようとはしないのだつた。

「つまり感情で作り、習慣で行はない結婚ですな」

その時易者はこんな風に說明したのだ。

「もつと卑近に云ふと、晝間は喧嘩して夜分寢床に入ると仲よくなる。夫婦喧嘩のために夫は碌に仕事も出來ないで、だん〳〵生活に困つてゆく。そのため、終ひには夫婦別れをして、男は別に女を持ち、女も再婚したり、別の男を持つたりするが、運命はどうしても二人を離れさせることを許さないで、結局また元通りになる。だが、さうなつて見ると別れてゐた間の生活に嫉妬が起つて、以前より一層夫婦仲が惡い狀態となり、また別れる。だが何時かまた一緒になる。一度別れゝば一度づゝ夫婦間の感情が惡くなつて行くが、それでも別れきりに別れられない。こんなことをしてゐる中に、親戚や朋友知己にも愛想を叶かされ、だん〳〵見離されてゆくし、その結果、生活は益々不如意になるし、結局老年に及んで、零落はする、だが力になつてくれる人は一人もないといふ、孤獨な生涯を送る、これが孤獨結婚の定理といふものですな」

彼はまた昨夜、妻に、この「孤獨結婚」の受け賣りをしたことを思ひ出した。

「まあ、いやなことを云ひますわね。そんなこと本當にあるもんですか」

[illegible]

「たいとも限らないよ」

と彼は何氣なく卑近な例を語り出した。

「先づ第一にお前のお養父さんがさうだ、お前を養女に貰つたのは病氣をしたからにしても、その後でも二十年近くといふ間、お前の仕送りを受ければ暮してゆけないといふのは『孤獨結婚』をしてゐたからに違ひないよ。これは僕の想像だけれど、郷里を出て五十年からも身内のものと音信を斷つて、兩方とも生き死にも分らずにゐるといふのは、やつぱり、この『孤獨結婚』が原因してゐるのだよ。それにたつた一人の養ひ子のお前を養女に貰つてからは氣持がこぢれて、一緒に暮らすこともようしないで、大阪に頑張つてゐるぢやないか。それから、まだほかにも……そら、大阪の石井の兩親、あれもさうだよ、僕の母の話を聞くと、石井の婆さんが嫁いだ時は、花嫁が美しいのと、澤山な荷物なのとで、あの界隈では大變な評判だつたさうだが、結婚後は家庭が揉めて幾度も家を飛び出しては戻り、飛び出しては戻りして、その上、主人は主人で事業に失敗して、行方不明になつたりしたこともあるし、終ひには息子とも喧嘩別れをして、貧乏しながら淋しい餘生を送つてゐるぢやないか。そのほか、東京では神田の古本屋の買ひ出しに廻つてゐた吉田も、それから、本郷の酒館の亭主のゐた洋服屋の職人の家も、みんなこの『孤獨結婚』といふ一と言で説明が出來るぢやないか」

話してゐる中に、彼はまるで磁石が金屬類を吸ひ寄せるやうに、「孤獨結婚」といふ言葉に依つて、彼の記憶の表面に吸ひ寄せられた幾組かの老夫婦を妻の前に列べ立てゝゐるのだつた。その人達は全く「孤獨結婚」の條件を宛ら具體化したやうな、老いて孤獨で、貧しい襤褸屑のやうな慘めな生活をしてゐるのだつた。そして足許を顧ると、それ等の人達の生涯は直ぐ彼等夫婦の生活の延長となつて現れて來るのだつた。

彼は、彼のことを「のろまな兄」と軽蔑した二人の弟等――たつた二人つきりの肉身の弟等――を怒つて、大阪を立つて以來二年ほどの間、すつかり絶縁狀態であることを思つた。また、東京へ來てからの、妻の不品行を彼の面前であばき立てた友人のGとも、Gのとつた方法に不滿と屈辱を感じて、それ以來すつかり往來を斷つてゐることをも思つた。それ等の人々は、時に懐しい面影で彼の魂に訪れることがある。けれども、彼が妻と生活を共にしてゐる限り、それ等の人々と別れてゐることに對して、彼の方にも多分に理由があるらしく考へられるのだつた。さうして彼は、彼自身の上にもそろ〳〵「孤獨結婚」の一里塚が印されて來つゝあるやうな心持を感じるのだつた。

彼はぼんやり考へ込んでゐると、[illegible]廊下をやつて來る跫音がある。來た——と思つた瞬間、彼女は彼を驚かせるつもりで、手早く障子を開けると同時に「わッ」と叫んで部屋の中へ飛び込んだ。

「びつくりして？」

湯上りの彼女は、血色のいゝ顔をして、生き〳〵と光つた眼をゑませながら、この子供じみたいたづらの効果を驗すやうに、彼の顔を見入つた。彼は默つて答へなかつた。

「しまつたことをした、梯子段を上つた處でちよつとみし〳〵言つたのが駄目になつちやつた。でなけれや、ほんとに吃驚させてあげたのに—」

妻は自分の計劃の失敗を見てとると、かう云ひながら机の横側へ來て坐つて、鏡を前にして化粧を始めた。両肌を脱ぐと、中肉のふつくらした女盛りの肉體の上半身が現れた。彼女は慣れた手つきで掌に白粉を溶いて、ひたひたと頸から塗り始めた。手を動かすたんびに、いい具合にふくらみをもつた乳房がたほ〳〵と揺れる。一人の子供の母となつたが、彼女の乳房は何時までも若い形にくずれてはゐなかつた。新吉はそれを眺めながら、[illegible]「[illegible]れた兒」といふ小説の主人公が、妻を貰ひに行つて「[illegible]た、[illegible]た」と云ひながら、女の乳房を[illegible]

眺めてゐる自分に氣がついて、彼は自分自身に苦い顔をせずにはゐられなかつた。

「ねえ、あなた、わたし明日捜しに行つて、口が極まつたら今度こそ一生懸命に働くから、あなたも[illegible]た嫉妬をしちやア駄目よ」

彼女は化粧が終るとかう云つた。

「分つてるよ。その代りお前たつて今までのやうな心懸けでやつちや駄目だよ。それこそ我々の生活はお終ひになつてしまふからね」

「えゝ、それやよく分つてゐますわ」

「兎に角、お前さへしつかりしてゐれば、働きに出るつてことはいゝことだよ。女が經濟的に獨立して、男の支配から脱することは。ただ、その場合よつぽどしつかりしないと、折角意義のあることが何にもならなくなるんだ。自由な生活に入れる代り、自制力のない人間は生活が放恣になつて堕落するからね」

「さう。でも私は今度は大丈夫よ」

「僕もこれからはしつかりやるから、お前もやつてくれ。心持の上でもかつ〳〵のその日ぐらしは何うか抜出たいからね」

新吉は彼自身を激励するやうなつもりでかう言つた。

□

大きの時、彼等に妻の求婚のために働かせ[illegible]

に倚子を求めることも出来なかつたので、彼等はその日の新聞を買つて、案内廣告欄を探した。

「御座敷女中入用、二十歳より二十七歳まで。淺草相模　清風亭」

「御座敷女中入用　二十歳より三十歳まで。素人にてもよろし。所表　松井樓」

かういふ二つの廣告か、彼等にとつてのその日の目星しい物だつた。それからもう一軒、日比谷の鳥屋があつたが、「鳥やなんか」と彼女か云つたので、それは立ち消えになつてしまつた。

だが、新吉は電車を日比谷で乗換へる時、ふと思ひ出して云つた。

「さつきの鳥屋ね、あれ何でもこの邊だよ」

「さう」と妻は彼の指す方を眺めたが、急に氣が向いたものと見えて、「では、ちよつと素見に寄つて見ませうか」と云つた。

で、公園に沿つて少し行くと、ある保險會社と、あるビルデイングとの間の露路口に出てゐる鳥屋の廣告が直ぐ眼に着いた。

「あすこだよ」と彼が指すと、

「さう」と彼女はその方を眺めて、「では、あなたはこゝいらで待つててね。見つけられて、この女に慾氣があると思はれちや、何處か働きつ[illegible]」

かう云ひすてゝ露路口を入る時に、其の方を振り返つてにつと笑つた。彼は妻の云つた「慾氣」といふ言葉を口の中で繰り返して、獨りで苦笑をした。

ものゝ十分間ほども經つた時分、また露路口に彼女のにこ〳〵笑つた顔が現れた。

「今からゐてくれつて云はれて、困つちやつたわ」

彼女は近づくと、かう云つて、幾分上氣した顔をまたにこ〳〵させながら話しかけた。

「あれはね、誰かのお妾の商賣ですわ。二十七八の、玄人上りの、それや美しい女よ。だから、私もぐツと砕けてやれと思つてね、八年ほど前に藝妓をしてゐたことがあるつて云つてやつたの。すると、おかみも、同じ穴の貉だと思つたかして、ツンとすましてゐたのが急に砕けてね、おやさうですか、何處に出てましたつて訊くの。大阪に出てたんですが、六七年家庭を持つて、今度また一人になつたので、暫く働いて見たいと思ひますのッて云つてやつたの。するとね。此は何か多勢来たが思はしいのがなくつて、やつとさつき一人極めてしまひましたが、あなたがゐてくれるんだつたら、その人を斷ります、その代り、今からゐて下さいね、明日[illegible]斷りにくい

からつて云ふんです。弱つちやつてね……では、私も用事があつて今からはゐられませんから、夕方に來ますつて、やつと誤魔化して來ましたの」

「さうか、ではやつぱり素見ぐらゐの値打しかなかつたか」と彼も笑つて云つた。

「さうね、ほかを搜してもなかつたら行つて見てもいゝけれど」

今の交渉が幾分彼女の興味を引いたらしくもあつたが、この家は大いして問題にはならなかつた。そこで彼等は銀座裏の松井樓へ出かけて行つた。そこでも新吉は、人眼をはゞかる情夫のやうな恰好で、一つ手前の辻を曲つた處で待たせられた。今度は彼女が行つて歸つて來るまでには五分とかゝらなかつた。

「駄目々々」と彼女は彼の顏を見るなり云つた。

「どうしてだ」と彼は訊ねた。

「あの廣告を見ると朝早くから多勢詰めかけたらしいの。それで、ほぼ人も極まつたが、若しそれが纏らないやうだつたら、お知らせするから住所を知らせて置いてくれつて……もう遲いのだわ。でも、一時ですもの」

「それで住所はどうした」

「下宿ぢや困るからHさんとこにして置きましたよ」　いゝでせう」

そこで、いよ／＼もう一軒の柳橋の清風亭へ行くことになつたが、いまの松井樓の經驗で、時間が遲れてゐるといふことが氣になつて、彼等は銀座通りへ出たまゝ行くとも止めることも決しかねてゐた。その時偶然むかうから和服姿でぶら／＼歩いて來るHの姿を彼は發見した。

「H君、H君」

彼は二た聲ほど呼びかけた時分にはHも氣附いて、笑ひながら彼等の方へやつて來た。

「やあ、どうしたの」

「あゝ、一昨日君に話したやうに、今日は女房の求職にやつて來たんだ。これから柳橋の清風亭へ行かうと思つてたんだが、もう時間が遲いのでどうしようかと考へてゐる處だ」

「さう、それぢや行つて見たらどうだ。折角こゝまで來たんだから。よければ近くまで僕も一緒に行つて上げるよ」

Hに勸められて、新吉夫婦もまた新しく元氣の出て來るのを感じた。彼等は淺草行きの電車に乘つて淺草橋で下りた。柳橋へ出る電車道で待つてゐることになつて別れる時、彼は皆の氣持を陽氣にするために、おどけて云つた。

「今度は懶夫が三人だぞ」

これを聞くと、妻は何とも云はずに笑ひながら行つてしまつた。彼は、その後でHに備夫のいはれを話して、二人で笑つた。

十五六分も經つた時分、妻はハンカチで顏に當る西日を避けながらやつて來た。

「うまく行きましたわ」

彼女は二三間手前からから云ひながら、にこ〳〵して近づいて來た。

「それはよかつたですね」と彼より大きな聲でHが云つた。

「明日の朝から行くんですの。おかみさんか女中頭か分りませんが、四十位の上品な人が出て來て、いろんなことを訊ねますから、私、夫はない、泊り込みでも勤められる、それからかういふ經驗もあるつて云つてやつたの、すると、それぢや明日の朝から來て下さいつて云ひますから、今度はこちらから聞いてやれと思つて、私は郷里にゐる老人を一人養はなくちやなりませんので、大變厚かましいことをお訊ねしますが、收入はどれ位ありますかつて、すると、水商賣のことですからきちんと極まつてはゐませんが、本番とかいふものになると、むかうで食べて、い丶時は百五六十圓、惡い時でも八十圓から百圓は間違ひのない處でせうつて云つてましたわ」

妻は幾分興奮したせいでもあらう、歩きながら、一と息に喋つてしまつた。

「それはよかつた。男だつたらぽつと出て一二時間の中にこれだけの就職口はとても見つからないからね」と彼は云つた。

「さうだ、全くだね。それにあすこぢや一流の家だから、さう變なことをしなくつてもい丶だらう。兎に角よかつたね」

Hもから云つて、彼等のために喜んでくれた。

さて、その次の朝だ。

髪を髷か銀杏返しと指定されたが、髷の道具がないので、銀杏返しに結つて、襟のか丶つた着物の銘仙を着込んだ、それに着換への入つた風呂敷包みを抱へた、昨日までとはまるで身裝の異つた妻を送つて、新吉は電車に乘込んだ。

最初、髪を結ひ換へた妻の顏を見た時、新吉はまるで不斷の妻とは異つた感じを受けた。彼は髮一つの細工で、かうも變る女といふもの丶顏をまぢ〳〵と見ないではゐられないのだつた。

「お召か錦紗でも着てゐると年增藝妓位には見えますが、髮結が下手だから、これぢや低級な牛屋の女中のやうね。あなた、人が見るので極りが悪い？　少し離れてませうか」

妻は馴れない身裝に神經を使つてゐるかして、低い聲でこんなことを

云つた。

「人が見る位なんでもないぢやないか、心配しないで平氣で行けよ」

「でも、これが『孤獨結婚』の玉子かも知れないわ」

「なぜ」

「初めて東京へ來た時のことを考へると、こんなになるとは思はなかつたもの」

「過ぎたことは仕樣がないぢやないか。それより、これからしつかりして、『孤獨結婚』なんか蹴飛ばす位の勢ひにならうぢやないか」

「それや、さうなればいゝけれど……だが、私、今度はもう大丈夫よ。かうと決心したら決して間違はないわ。その代りあなたも絶對に疑ぐるのは止してね」

「うむ、僕も大丈夫だ」

新吉は電車の中だから簡單にかう云つた。だが、云つてしまつてからふと自分の心に突き當つたやうな氣がした。彼は離れて棲む妻の生活を信じてゐられるか信じてゐられないか、それは彼自身にすら分らないのだつた。殊に妻の入つて行く職業を考へると、たゞ彼は自分の心が平靜を保つてゐられるかといふことに自信が持てないのだつた。だが、次ぎの瞬間、彼は今妻に話した自分の言葉を思ひ出した。

「さうだ、過ぎたことを悔むのも仕方[illegible]ないけど、未來のことを[illegible]よく心配するのはたゞ無意味だ。積極的な強い愉快な氣持で日を送らなきや、それこそ『孤獨結婚』がやつて來る」彼は獨りで呟いた。

電車がだんだん市の中心に入つて行くにつれて、乘客が殖えて來たが、色の褪せた茶色のソフトに眼鏡をかけた新吉と、飲食店の女中然とした彼女の姿を、誰も彼もが變な一瞥としてぢろ〳〵眺めた。だが、電車が一層混み合つて來て釣革の下がる時分には、彼等の姿も乘客の中に埋沒しられて、ちよつとも目立たなくなつた。

今日もまた日比谷で乘換へだつた。その時、乘換への電車を待つてゐる間に、彼女は云つた。

「ちよつと公園の中へ入りませうよ」

これには彼は同感だつた。妻が變つた職業のために神經を使ひ、彼もまた職業が神經を使つてゐるといふことに神經を使つて、二人とも氣持の上では可成りに疲れてしまつてゐたからだ。

朝の公園は、めまぐるしい都會の中に、忘れられたやうに靜かだつた。彼等は人つ氣のない池の裏側の方の道をぶら〳〵歩いて、人眼に着かないやうな場所にあるベンチに腰を掛けて、煙草を喫つた。

「ねえ、かうしてゐる處を人が見ると、私が公園前の何處かの食ひ物屋の女中で、あなたがその情夫で、こゝで媾曳をしてるやうに見られますわ」と、[illegible]つた。

「よせ、そんな下らない空想は」

彼は妻を叱るやうに云つた。だが、そんな風に見てゐる人がゐはしまいかと、おろ／＼周圍を見廻した。

「ねえ、あすこはね一と、少時してまた妻が云つた「昨日の女の人の話だと、男のある者は隙があると外へ出たがつて長が續きがしないから、絶對に置かないやうにしてるつて云ふんですよ。ですから、電話は絶對に掛けないやうにね。それから手紙も女名前で下さいね」

「ふゥむ、さうかね」

彼は、妻の職業が、夫婦といふ形を全く沒却してしまはなくてはならないことに、一種の淋しさと滑稽さとを感じた。

「私も機會が出來たら歸りますから」

「あゝ、待つてゐるよ」

遲くれてはといふ懸念から、十分間ほども佇んでから、二人はそこを立つた。

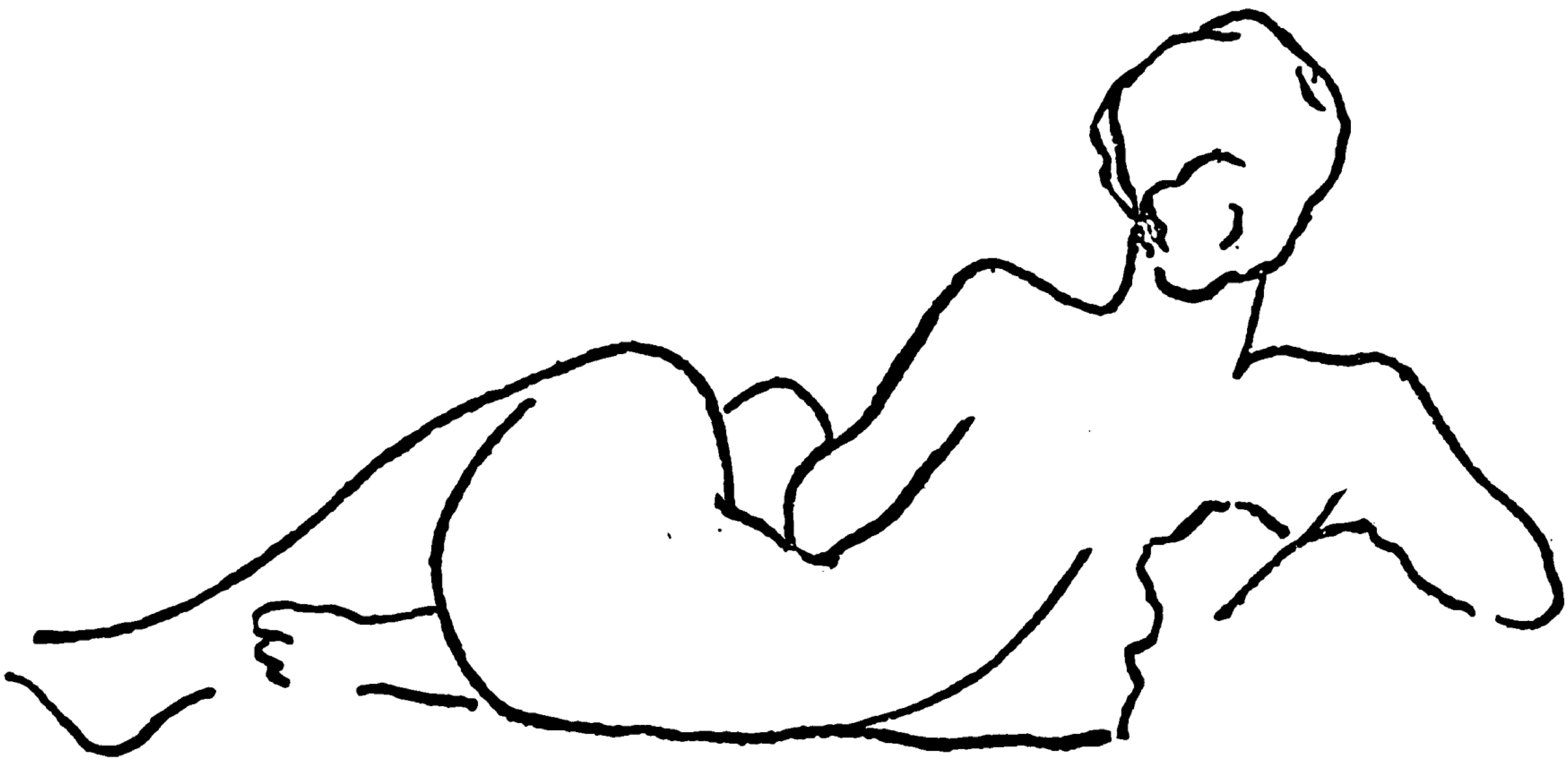
電車を淺草橋で下りて、柳橋の手前まで行くと、彼女は彼を押しとめた。

「もうこゝいらでいゝのよ。誰かにめつかるといけないから」

「それぢや……」と彼は立ち止まつた。

「では、左樣なら。二三日の中になるべく口實を作つて、あの家の様子を報告に歸りますからね」

妻はかう云ひながら眼で挨拶をしたかと思ふと、風呂敷包みを抱へながら、すた／＼と柳橋を渡つて行つた。新吉は少時そのうしろ姿を見送つてゐたが、銀杏返しに髮を結つて、襟のかゝつた縞物の銘仙を着た姿は、非常に職業的な外形であるにも拘らず、彼には非常に活動的な輝かしいものに見えるのだつた。



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十二

實際、張り合はせ云ふもんは不思議なことになるもんで、ほんちよつとしたはずみから物の間違ひが大きうなると思ひますのんは、その晩にしたかて夫がそんな邪推せんと、やさしいいたはつてくれますとか、せめてそんでない迄もなんにも云はんと大人しう寝てくれましたら、私かて自分の悪いことはよう知つてますよつて、謝つて濟まんことした云ふ氣になつて、何も彼も夫に打ち明けてしもて、みんなに嬲りもんにされた口惜しさを訴へたかも分れしません。何しろあんまりの出來事に氣が顛倒してましたんで、さつぱり夢中でしてんけど、つくづく自分の馬鹿やつたことを思ふにつけても頼りになるのんはやつぱし夫より外にない云ふ心持ちが、何處か胸の奥の方に潜んでたことはたしかなんです。けど夫にしてみますと、此なひだ喧嘩した時から二人の間柄がますます進んで來てましたんで、今に何ぞ事が起れへんかしらんと案じてたとこへ、そんな時刻に電話がかかつて來て風呂敷包みを持つて出たなり、いつ迄たつても歸つて來エへん、光子さんの家の[illegible]

り二人で家出しみたに違ひない」思ふんも無理やないのです。そんたんならそれで、アテはなうても大阪まで追ひかけて行くとか、光子さんの家の方へも相談するとか、女子家に心あたりを聞いてみるとか、どないぞしたらよろしおまずねんけど、夫云ふ人はそんな時になると、えらい臆病で、引つ込み思案なもんですよつて、お腹の中ではつかりやきもきしながら、誰にも話さんと獨りでぢりぢりしてたんに違ひあれしません。「なあ、お前、ほんまに逃げる積りやつてんやろ？ なあ、そやろ？ 今晩こないしてお前に會へよとは僕思てエへなんだ。」――夫はさう云うて、やつぱりはあはあ苦しさうな息をしながら、私の耳たぶへ唇をつけてるんですが、その時私は生え下りの毛ェから襟頸の方へかけて何や熱いもんがたらたら流れてるやうに感じたんで、最初はまさかと思たんですが、それが意外にも夫の涙や云ふことが分つて來ますと、一體どないしたんか知らんと、急に氣味わるうなつて又しても胸がどきんどきん云うて來ました。夫が、……ついぞ泣いたことのない夫が泣いてる。此の人にもパッション云ふもんがあるのんか知らん、一ぺん此の人の泣くとこ見たいもんやと思てたのんがとうとう泣いた。泣かしてやつた。そないと思ふとええ氣味のやうな、勝ち誇つたやうな氣もしますねんけど、さう云ふ人が泣く云ふことは、なんぼその晩はお酒の氣があつたにしましてもよつぽど變態やつたんに違ひたいのんで、なだめようとしたけど[illegible]したつて來て、じーッと睨り、身をちぢこましたきり默つてますと、「僕お前に感謝してんねんで。ほんまによう歸つて來てくれたなあ」云うて、兩方の肩が壓し潰されるほどぎゆうッと抱きしめて、「そやけど今晩どないしてん？ 歸つて來たんには何ぞ譯があつたんと違ふか？ 決して濟んでしもたことは咎めへんさかい、どうぞ僕に打ち明けて貰はれへんか、さうでなかつたら僕安心が出來んよつて。――」と、云ふあひだも涙がとめどもなう私の襟を濡らすのんです「あんた一體何云うてんのん？ 逃げる積りやつたら何で歸つて來るかいな。あんた今夜餘つ程どないぞしてんなあ」と、私は恐ろしさを紛らすため尚更向ふ意氣強う云ひました。すると夫は、「お前、何ぞ光子さんと喧嘩したんと違ふか、もしそやつたらどうぞ云うて欲しい」と、いきなり圖星を刺したんで、そない云はれるとそれが又癪に觸つて、「ふん、うちいつ光子さんと喧嘩したん？ あんたはそれを望んでんねんやろけど、………えらい濟んまへんけど、そんな仲やおまへんよつてなあ。なんにも知れへん癖にええ加減のこと云はんといて欲ツしや」と、まるで心と反對のことを云うてしまひますと、「隱す！」と、もう一度抱きしめて、眼玉と眼玉がグリグリ押し合ふぐらゐ顏を押しつけて、「僕なんにも知らんのん違ふで。お前等が逃げる約束してたことも何でも彼んでも

知つてんねんで」云ふんです。「逃げる逃げる云うて、そない逃げられるのん恐いかいな。あんた誰にそんなこと聞いたん？」「僕、お前の留守の間にあの抽き出しの中にある手紙見てたん。」――さう云はれたんで、「何やて！　人の抽き出し勝手に開けたんやて！　あんたうちを欺してんな！」と、私は子供みたいに暴れて、滅茶苦茶に突いたり蹴つたりして夫を向うへ押しやらうとしましたけど、「まあ、静かにしいなア」と、僕のことしつかり摑んで放せしません。「そら僕が悪かつた。氣にさはつたんやつたらどないでも詫まる。そやけど僕ほんまのことを知りたかつてん、ほんまのことを……」「そしたらほんまのことよう分りましたやろ。うちと光子さんとはなあ、どんな邪魔が這入つたかつてちよつとやそつとで切れへんよつてなあ。」「僕、お前に恥搔かす氣ないねんよつて、さう無闇に意地張らんと、もつと正直に話さうと思てくれへんか。僕かつてあン中に一杯ある手紙を一一見たんとは違ふけど、外の事は兎も角も、一緒に死にたいやの、何處ぞ遠くへ逃げて行つて暮らしたいやのと、そんなことがたあんと書いたあるやないか。それでもお前、逃げる積りなかつた云ふのんか。」「あんたそないに分つてんねんやつたら、聞かんかつてええやないか。そらほんまは逃げる積りやつてん。」「そんなら何で歸つて來てん？　お前さつきから探りでぶりぶりして、[illegible]

たいやないか。なあ、何ぞ譯あつたんに違ひないねんやろ？」――譯あつたかつてなかつたかつて、そんなこと話する必要あれへん。」「そない云ふのんなら聞かんかつてええけど、そしたらきつともう逃げん云ふ約束してくれるか？」「そらどうや分れへんわ、なんぼ約束したかつて光子さんが逃げてくれ云うたら、いつでも飛んで行くよつて。――」最初は意地でもそない云はんならんみたいな氣がして、ただ夫を困らすためにすつかり本當とあべこべなこと云うてただけですれんけど、そない云うてゐるうちに、ああ、此れがほんまやつたらどない嬉しいか知らん、今夜にしてもさつきのんが「逃げてくれ」云ふ誘ひの電話で、二人が人目を忍びながら夜汽車の中へ紛れ込んで何處ぞ遠くへ運ばれて行くねんやつたら、今時分はさぞ樂しやろなあ、と、さう思ふ心がだんだん強なつて來て、口惜しさのため忘れられてた戀ひしさが、抑へようとすればするほど、ぐんぐん頭を持ち上げるのんでした。ええ、まあ、自分はあない馬鹿にされながら、何でこないまで光子さんが戀ひしいねんやろ？　ああもうどない思たかてしやうがないやないか。自分は體よう愛想つかされたんやないか。「なんぼお人好しやかつて、あれくらゐにしてやつたらあきらめたやろ」と、蔭で二人が舌出してるやないか。もうあんな人、きれいに[illegible]にやつてしも[illegible]

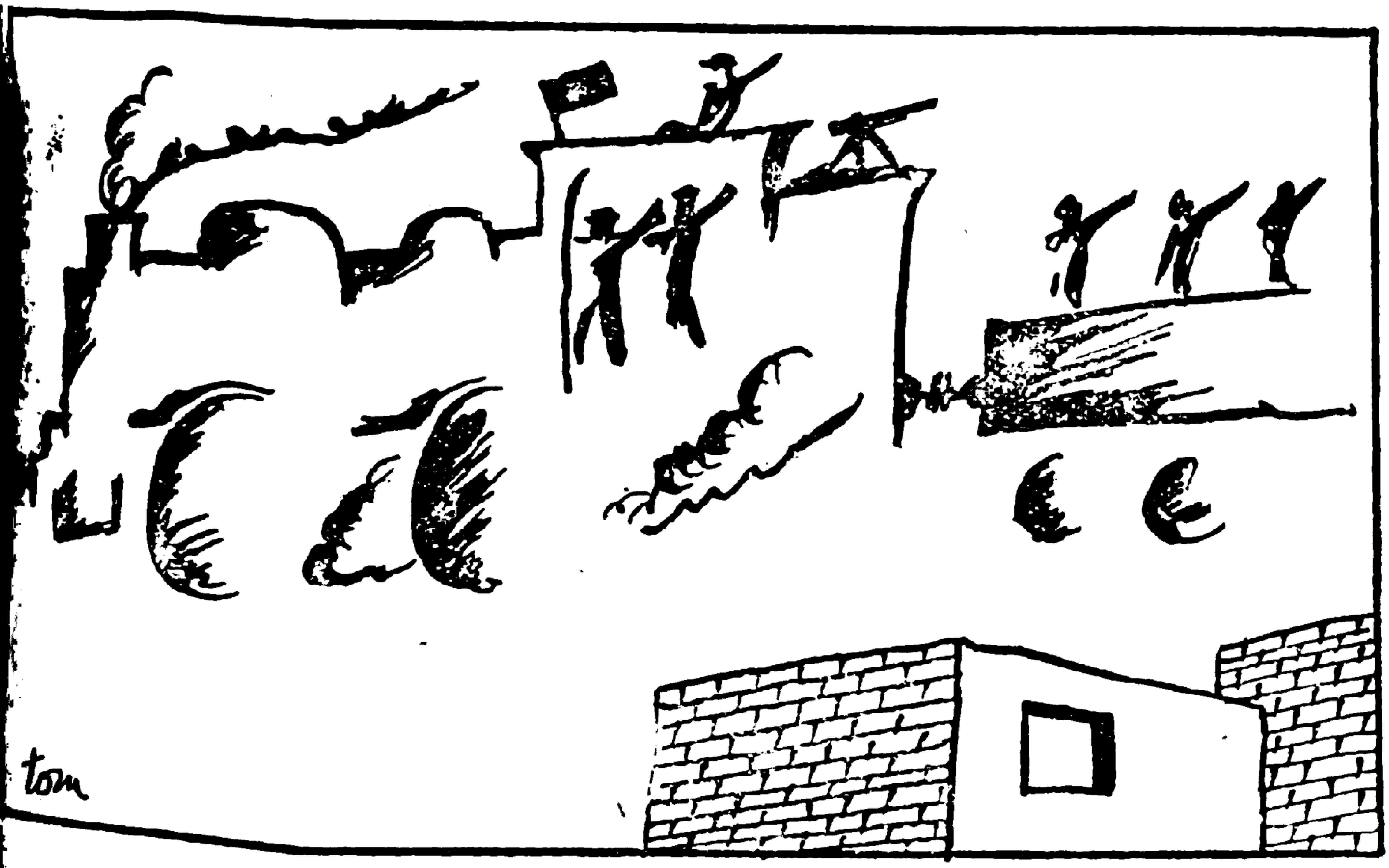
一

卍

一

か、きつと、きつと、眼に隠してたな！ 抑かされた事を隠してたな！ 云ふ氣持ちがムラムラ起つて頭の中が嵐のやうに激しう舞うてますのんに、夫は云ふと、いまだに私をしつかり抱きしめて、ちよつとの間途絶えてた涙が又たらたら私の頬の上を傳はつて來て、寢間着の襟がもうびちやびちやに濡れてるんです。「閑子、今迄は僕が惡かつた。僕は自分がどないにまでお前を愛してる云ふことが、今夜始めて分つてん。僕はお前を誰にもやらんで。どんな事があつたかて決してやらんで。」夫はさう云うて、肩へ手をかけて、私の體を力まかせに搖す振るのんです。

（つづく）



綾里村快擧錄

片岡鐵兵

上篇

漁村の三等郵便局で棟つゞきの局長の家の裏口から、ごめんなさいと入つて行つた。局長が出て來て、入つて來た女の顏を見ると舌なめずりするやうに頰を動かしながら微笑した。

女は、漁師の女房には惜しい容色だつた。手織木綿も、今日は夫の用事で局長さんに會ひに來たことゝて、垢付かぬのを着てゐる……評判の美人が一層健康さうに、肉付きもキリ、と引緊つて見えた。

「まア、こつち上らいん」と、若い局長はにやりとした。

上ると、こつちへと云つて、局長が先きにたつて、うす暗い家の中を奧の方へ導いて行つた。少しをかしいとは思つたが、女は素直について行つた。と、襖を一つあけて入つた。狹い座敷は一層うす暗く、正面に內藏の戶が黑塗の板の樣にしまつてゐる。

局長は立止つて振返り、[illegible]

家の中には誰も居ないらしく、しんとしてゐる。往來で遊んでゐる子供らの聲はかり、遠くで聽えた。

「俺、お前に惚れてたとう」

唐突に、局長が云つた。

亭主もあるし、子供も幼いのがある女を摑まへて、多分冗談だらうと思つた時、彼女は局長が背ろへまはつたのを感じた。逃げようとした時は、背ろから、しつかり抱えられてゐた。

「おら、厭んでがんす」

冗談だらうと思つたが、必死に身をもがいた。藻掻きながらキヤツキヤツと笑つた。

「やんでがんすつたら！」

激しく振りほどかうとした、が局長は無言のまゝ、ぐいぐいと、內庫の扉の方へ押して來た。

その無言の力には、冗談でない、恐ろしい眞劍が感じられた。彼女は初て、今が容易ならぬ瞬間であることを知つてピタリと笑ふのを止めた。內庫の扉がガラガラツと開いた。往來で遊んでゐる子供らの聲が、すぐ近くの外で聽えた。その聲が聽えなくなつた。內庫の中に、彼女は押し込まれた。

び臭い內庫の中に、局長の顏が舌なめずりして笑つてゐた。

漁師の長吉は、生みの母について考へるたびに胸の中が燃えた。二十年前に、母は父の用事で局長の家へ行つたまゝ、監禁されて再び歸つて來なかつた。局長は、本妻を離緣して、監禁した彼女をそのまゝ妻に直したのである。長吉の父は、妻を强奪されても、何の反抗も出來ない男だつた。

母を奪られた時、長吉はまだ物ごゝろつかぬ子供だつた。

「お前え、源さんの子か、局長の子か？」

十一の時、さう云つて村の或る小商人から嘲弄された時、長吉は何とも云へぬ恥と憤りとを感じた。その頃、それまでは家の奧ふかくにかくれて、めつたには外に顏を出さなかつた彼女が、時々は、じみな小さな丸髷に、鼠いろの手柄をかけた白い顏を、門口にのぞけるやうになつてゐた。

往來などで遊んでゐる時、長吉は時々さうした母を垣間見る事があつた。その度びに二人は顏を背向け合つた。小學校では、みんなから「お袋さ奪られた餓鬼つぺ」と罵倒された。

或日、爐ばたの膳に向つて夕食に取り掛つた時、長吉はふとその日

見た時のことを思ひ出して、父に話しかけると、
「馬鹿！」と父は恐しい顔で睨んだ。そして、今一杯喰べたばかりの茶碗をふせると、早々に立上つて、蛸壺に行つた。ほた〳〵チラ〳〵照らされる父の横顔を見ながら、長吉は唯の飯をもぐ〳〵嚙んだ。一昨の体格は母から來るのだと云ふ氣がした。彼はその時、十三になつてゐた。
「師匠の家さ、行くでねぞ」と、父は燃える鍋の上に眼を落したまゝで云つた。
「おら、行かねだが」
長吉は涙をぼろぼろこぼした。酢につけたホヤ貝を箸でつまんだが、貝の身はスルリとして再び皿の上にすべり落ちた。
「おら、行かねだが」
長吉は、鼻をすゝり上げた。
自分も生みの母を憎いと思つてゐることを、何故父親が知つて呉れぬのだらうと云ふ氣持だつた。やがて、彼は十五になつた。そして、一層のことをハッキリ知つた。けれども母に同情する氣持は起きなかつた。それどころか、母は一層憎むべき者に感じられた。
母は、[illegible]れた女だ、[illegible]た婦だ。[illegible]から、殺してやらうか？
[illegible]

う氣がした。[illegible]土地の人に自分[illegible]を軽蔑する。この母が生きてゐる限り、人並みの交き合ひもして貰へず、何所へ行つても、肩身の狭い、卑屈な心を持たなければならないのだ……
十五の少年の夢は、母を殺すことだつた。その場面を空想すると、激しい快感が湧き上つた。鋭い刀を振上げて、首を丁と打つ。丸顔の臓色の手首、白い顔に血がかゝる。そんな母の顔を幻に描いたから、彼は両手を姿に絞り、眼を寝床の中で細めた。遠い所から、世の罪悪が聞こえて來るやうな思ひがした。
この漁村の網元ともあらう身分なら、一人の漁師の女房を獨占する位は何でもない事だつた。網元の山村は、村の有力者だつた。財閥であつた。山村一家に逆らつたら、恐らく漁師渡世も出來ないだらう。山村一家の一番年上である兄の市郎は村長だつた。網元は二番目の次男である。末の弟の三郎は校長をしてゐた。兄弟三人が村の要職を悉く占めてゐた。その上に、たいくわいの漁師が、この財閥から少らぬ金を借りてゐた。
[illegible]ない[illegible]である。三方を[illegible]たる山[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]の中でも特に交通の便のない、離れ島の一部落である。隣りの町へ行くには、四里の山路を越えて[illegible]間に行くかでなければ、日に一回出る石油發動機船で、岬に押し寄せる荒波を突切り、大船渡港に入つて行くか、どちらかの路を選ばねばならぬ。

このやうに浮世はなれた漁師村も、經濟關係に支配されて、其所の住民は二つの階級に分れてゐた。其所には村長局長校長の三人兄弟山村一家の權力の下に集まる隣手の小市民階級と、働く漁夫の貧民階級があつた。

局長は、この浮世はなれた王國に君臨してどんな我が儘でも振舞へる自分の位置をよく知つてゐた。彼は、この位置を、もつともつと利用しなければならなかつた。一人の漁夫の女房を強姦するなどは、端の[illegible]のことである……

もつと大きな事を——いや、この綾里村で最も大きな眼の付け所は、鮑の採取についてでなければならない。

綾里の[illegible]は、日本一の鮑の産地だつた。鮑を乾鮑にしたのが、支那に輸出される。あの固い乾し鮑を、支那人がどう料理して食ふのか想像に[illegible]つて居よう。兎も角、その漁期になれば、遠く神戸あたりから商人[illegible]入り込んで來る。だから、年々漁師に入る金は大部分に[illegible]

[illegible]

あらゆる[illegible]に、働く漁夫の[illegible]ない。漁夫は[illegible]借りて「働かせて貰つて」ゐるのだ。綾里村の鮑の漁場もさうであつた。綾里村の漁業組合が、本省から借りてゐるのだ。

この漁業組合の組合長は、土地の有力家で多くの漁民を抑へ付けるだけの權識のある人でなければならなかつた。働く者はえらい役についてはならぬと云ふやうな考へが、いつとなしに漁民たちの習慣になつてた。いや、さういふ考へ方に習慣付けられるやうに、日本の貧民層は何百年か強制されて來たのであつた。殊に漁業組合は、公から漁場を借りてゐると云ふ關係から、縣廳の役人などゝ交渉がある。その場合、組合長が漁民であつたら、役人が馬鹿にする。役人は馬鹿にする事で以つて、組合長に漁民が成ることを、、する。[illegible]階級の物である漁業組合を、その階級の一手で支配することは、權力階級の喜ぶ所ではない。

そこで、田舍では、漁業組合の組合長に、漁業家でない者が就任しても、誰一人として不思議がらなかつた。いや、漁師たち自身さへ、それが當然であるやうに思つてゐた。

綾里村では、村長の山村[illegible]が、漁業組合長であつた。

[illegible]が組合長をしてゐる漁業組合なら、[illegible]を合はせさへしたら、

これを自由に都合よく料理することは容易だつた。そこで局長の山村次郎が計畫したのは、年産額六萬圓の鮑漁を、漁民から強奪することであつた。

或日、漁師の吉の所へ、「居せんか」と云つて入つて來たのは、山村一家の番頭みたいな事をしてゐる百三だつた。

爐ばたで、よく燃えぬ薪の煙で眼をしばたゝきながら、二つ三つ煙管をハタくと、

「今日は金儲けの話で來た」と、百三は眞面目な顔で話し始めた。

百三の話によると、こゝの鮑は、年産額六萬圓どころではなく、まだく採れる、恐らく、その倍も採れる筈だつた。然し、何分にも、組合に金がないので、大仕掛けの漁が出來ない。たとへ三百人の漁師總出で、モリを持つて沖へ出掛けたところで、晴合による一週間の採鮑期間に、六萬圓以上の稼ぎは出來ないのだ。然し、もしこれを大仕掛けに、組織的に、たとへば潜水夫などを入れてやつたら、組合員の收入は倍になるだらう。そこで、どうしても必要なのは資本である。

さう説明しておいて百三は、

「そんでね、こだらんねえ好い相談が持ち上つたどう」と云つた。「漁に加りつゝ[illegible]に、[illegible]持ち[illegible]入れて、[illegible]

云ふ相談さ持ち上つてゐんだに

「倍になる？　俺たちも倍になるべか？」

「倍どころぢやねえ。吉さんには三倍も儲けさせると云ふ話だどう」

百三はそこで話を切り出した。

局長や村長や、それに百子澤の風早草右衛門といふ大地主まで仲間に入れて、計畫を立てた捕鮑組合といふのは、二百名近い漁業家の他に、金を出す人たちを加へて、三百二十株で拵へる。株はみんなに一株づゝ持たせる。で、この捕鮑組合が、今までの漁業組合から漁場を、向ふ十年間借りて、採鮑事業をやることにするのだ。

漁場を借りる貸借料として、捕鮑組合は一ヶ年一萬六千圓を漁業組合に支拂ふ。この一萬六千圓を漁業組合員だけで分けると、一人あたりザッと年五十圓の交附金を受ける勘定になる。尤も、五十圓受けるのは、漁業專業の組合員だけで、半漁民は四十圓、それから漁業組合員の中でも全然漁業家でないのも少數ある、そんなのには二十圓、斯う三段に分つて、一萬六千圓を分配するのである。

で、普通の漁業家なら、一年五十圓の交附金は泣いても笑つても貰へる。だが、これは收入のほんの一部分に過ぎない。從來の漁業組合員は加[illegible]通しく出來る捕[illegible]組合の株を持たせられるのだ。その[illegible]商が、

[illegible]圓になる。

收入はそればかりではない。漁場が捕鮑組合の物となると、漁師は鮑を採つても個人の物にはならない。採つた鮑はみんなの物である。だが、一貫目採つたら、一貫目採つただけの賃金が、捕鮑組合から貰へる。一貫目の賃金二十錢として、一人が一日五十貫、十圓は稼げる。一家三人が稼ぎに出れば、一年一週間の漁期に二百圓は儲かるだらう。そこで、前の百圓を併せると、三百圓の總收入となる。

「それにまだある。」と百三は急に聲をひそめて「お前えは、好い事さしてるね。局の旦那がな、お前えを、見張り人にして、月三十圓の月給やるつて――つまり年に三百六十圓さ!」

見張人といふのは、他村から鮑を竊みに來る船を監視する役だつた。

「それだけで、お前えは六百六十圓あるでねか。それから、まだあるんでがつぞ。今度の捕鮑組合が出來上るやうに、お前えが漁師衆の間を話してまはらいと云ふ事だ。その奔走料だな、それとして、お前えは、功勞株さ二株貰へる。この二株から百圓の配當が來る、みんなで七百六十圓、配當次第では八百圓にも、千圓にもなる――何と、二倍どころか三倍でねか、へゝゝ、一杯買へ」

吉は默々として聽いてゐたが、心の中はだんだん明るくなつて行つた。[illegible]幸運でなくて何であらう。吉は、今年はどうしても拂はなくてはならぬ借錢が百二三十圓あるのを思つてゐた。借錢がなくなつた生活――それが、まぢかに迫つて來た。さう考へると、永年爐の端でいぶされた家中にほの〴〵と明るみがさして來たやうな氣さへした。

「どうで? 贊成するけえ?」

百三に念を押された時、吉は、めつたに笑つたことの無い顏をニヤりとさせた。

話を濟ませて、一旦外に出た百三が、しばらくすると再び歸つて來て土間に入つた、

「あんた、ちよつと來さい」と云ふので、吉がのつたり立つて上り框に行くと、

「お前えを見張りにすつと云ふ話は、誰にも内緒でがつぞ」と、百三は吉の耳もとに口をくつ付けるやうにして囁いた。

「いよ〳〵福の神が來たと!」

吉は、百三が歸つたあと、無暗矢鱈に爐の中に薪をくべた。どんどん燃やしでもしなければ、昂奮の持つて行き所がなかつた。心の中では、八百圓、千圓! と叫んでゐた。

だが、その晩、百三は提灯をぶら〳〵さげて、こつちの濱から、あ

つちの濱へ行つてゐた。やがて、漁師の孫助の家の戸口まで來ると、

「お晩、お晩！　居えせんか！」と、愛想の好い聲を掛けてゐた。

漁師の中には捕魚組合に反對する者もあつた。收入が倍になるでねか、と云ふと、

「これまでは百七十人の漁師が分け取りしてゐたのを、三百二十人に分けようと云ふのだ、何が倍になつか！」

功勞株に有り付かうと思ふ連中は、一生懸命にそれらの反對派を說いてまはつた。長吉の父の源次も反對した一人だつた。彼は、この巧い話の裏には、何か局長のたゞならぬ惡だくみがあるやうに感じて、うかつに話に乘つてはならぬと思つた。それに、さうでなくても、局長のやる事なら、意地からでも反對せずには居られない彼の立場であつた。

然し、大勢はどうする事も出來なかつた。漁業組合は、その殆ど唯一の財產である船溜を、向ふ十ヶ年、捕魚組合に賣る事を決議した。捕魚組合は、三百二十人に一株づゝ持たせるといふ新しい組織を、立派なものと認めて一株[illegible]の[illegible]を許可した。

[illegible]、[illegible]二十日までに、捕魚組合の株を受取るべく、[illegible]には、證據金として十圓を要求した。

百七十人の漁師はみなこの通知を受取つた。不思議なことに、功勞株を貰つた者は、十人ばかりしかなかつた。最初から賛成した者は、みんな貰ふつもりでゐたのに……

そして、一株につき、十圓の證據金を作ることは、漁師にとつて容易ではなかつた。みんな血の出るやうな金を用意した。期日の三月二十日になつて、やつと十圓が工面出來た者もあつた。この淋しい漁村――商人、百姓の家を合せて五百戸に足らぬ――のあちらこちらで、十圓札が交流した。太平洋の荒浪の浪がしらの一つ一つに、十圓札が躍つてゐるやうに見えた。

二十日の日に、長吉の父の源次は二十圓を懷にして、隣りの樋さんの家に行つた。

「あんた、行きすか？」

源次は聲を掛けた。

「おゝ、まア上つて休まいん」と、樋さんの女房が內から呼ばはつた。

樋さんは出仕度をしてゐる所であつた。源次が腰掛けて待つてゐる間に、樋さんの女房は茶と漬物を出してもてなした。

を中心にして五つ六つの[illegible]に[illegible]瀨は港の左手に突出た岬に、小さな箱のやうな岬で隔てられてあつた。田濱から峠を越えた向ふ側の海べに、野々前部落があつた。それらの部落から出て來る漁師たちの姿が、チラリホラリと、海岸の街道の木の間に見えかくれした。

「みんな株を受取りに來てるでねえか」

係さんは嬉しさうに云つた。港の右手の灘から歩いて來ながら、二人は何となく、のどかな氣持ちだつた。十萬圓の金が懷ろにある。これが、向ふ十年間年五十萬圓の交附金を保證して呉れてゐる！

だが、港の銀行の受付に行つて見ると、二十人ばかりの漁師たちが、何かたゞならぬ樣子で騷いでゐた。

「何した？」

二人が近づくと、吉が青い顏をしてゐた。

「時間がおくれて駄目なんでがつそ」

「時間が？」

「正午までゝ締切りださうだ」と宗吉といふ漁夫が眼を血走らせて、はたから云つた。

潤は夢中で人々を押し分けながら、受付口の所へ首を出した。そして叫んだ。

[illegible]

「駄目でがんす。〆切りの時間を過ぎてゐる」

係りの行員が、冷たい顏で云つた。

「そんでも……俺、一生懸命はたくちや駄目だ！」

「物には〆切りがあるんでがす。いつまでもダラ〳〵してゐては………」

「通知には、二十日までと書いてあつた。正午までとは、書いてなかつたでがすつぺ」

「駄目でがんす」

行員は、何か帳簿の上に首をかゞめて、振向かうともしなかつた。

「スハッピリめが！」

しんとして、漁師たちは顏を見合はせた。其處へ、白濱や、小路濱や、田濱の連中が三々五々つれだつて、銀行へ入つて來た。

「おい、駄目だ、駄目だ！」と、こちらの漁師たちは口々に叫んだ。

十萬圓惜かつた。と思ふ者よりも、何か球を取落したと感じる者の方が多かつた。

十圓札を持つた漁師たちが、あとから次々へと殺到して來た。やがて銀行の狹い土間が一杯になつて漁師たちは往來にまで溢れ出た。

一杯食つた！　彼らは次第にこみ上げて來る憤りを、どうする事

も出來ないで、只寒さうに、罵り合ふばかりであつた。

百七十人の漁師たちの中で、正午まで株を取りに行つたものは、五十人に過ぎなかつた。資本家階級は、働く者たちに不意打ちを食はせる事で、株を撰び取つた。つまり、あとの二百六七十株を、少數の金持ちが、分ち合つたのであつた。そこで、大多數の漁師たちは、鮑については、組合の交附金五十圓と一貫二十錢の賃取りとだけを收入と頼まなければならなくなつた。このやうに「三百二十株を平等に分ける」と主務省に認可を願ひ出た捕鮑組合の主旨は、態の好い欺瞞だつたのだ。

その年の終りに、源は五十圓の交附金を誰よりも待つた。かねてから、村の金貸しから借りてゐた百貳拾圓の借りを、きびしく催促されるからであつた。五拾圓の金では、とても足りないのは分つてゐたが、それだけ納めたら、あとは何とか話が付くだらう、さういふ肚だつた。

けれども、催促は例年の何倍かの嚴びしさで、毎日のやうに來た。兎も角、年末には五十圓の交附金が入る。それは全部入れますから、それまでは待つて下さいと云ふと、

「五十圓？　[illegible]と、[illegible]

をした。

「そんでも、鮑が自分の物で無くなつたでねえか。百二十圓と云ふ金は、とつても出來ねえど」

「出來ねなら、家さ差し押へるべ！」

源はカッとなつた。が、借りた金を催促されるのは、仕方がない、と半分は媚びるやうに、

「よし、百二十圓拵へつから」と、つひ云つてしまつた。だが、これは絕對絕命の見得であつた。土着の漁師が、女房を奪はれた上に家まで取られたら死ぬ他はないのだ！

然し、押し迫つて、百二十圓の金が出來る目當ての有らう筈はなかつた。源は、驚すべき程の希望にも取縋つて、あらゆる心當りをあたつて見た。時々は苦しさの餘り、自分の女房を奪つた局長の所へ泣き付いて見ようかと云ふ氣にさへなつた。「糞！　どうして吳れべか」と思ひ餘つては、つひ口に出して呟いた。

源は苦しさを、漁師仲間の彌十に洩らした。すると彌十は、

「お前えもか」と顏をしかめた「俺も、局長から責められ抜いてるんだ。八十圓だがな。どうして、この暮れまでに、あとの三十圓さ拵へ、たら好いだんべか」

「[illegible]

[illegible]

だが、借金の皆濟を責められてゐるのは、源や彌十ばかりではなかつた。いつもの年なら、鮑の採取で、十分に返せる見込みがあるから、漁師の多數は村の財閥——山村一家か、その身邊を取り卷く誰かから、百圓前後から二百圓近い借りを拵へてゐた。そして、彼らは皆一樣に、きびしい催促を受けてゐた。もし拂はなければ、家を差し押へると脅し付けられてゐる事も、云ひ合はしたやうに、同樣だつた。

彼らは、今年の年末の漁期に、鮑を採つた金で返濟するつもりだつた。それだのに、鮑は組合の物となつてしまつた。さうなると、もう返濟の見込みは、全然無いのだ。

明日、交附金が渡されると云ふ日だつた。

交附金といふのは、勿論、捕鮑組合が漁場を借りた料金として、漁業組合へ年々支拂ふ一萬六千圓の分け前であつた。その交附金が一人分五十圓渡されるといふ前日、源の家に金貸しの爺がやつて來た。

「百二十圓出來さうかね」と金貸しはニヤリニヤリしながら訊いた。

源が無言で答へないでゐると、金貸しは、意外な事を云ひ出した。それは、源になら、村の旦那衆が五百圓貸しても好いと云つてると云ふ話だつた。

つまり、捕鮑組合が、お前えに五百圓貸さうと云つてるのだ。借り[illegible]

「それは——借りられるものなら」と答へたが、今度も話が巧まずぎると思つた。

それでも、愁眉を開いた氣持ちで、翌日、源は金貸しと同道で、捕鮑組合の事務所へ出向いた。事務所の書記をしてゐる百三が、源と金貸しを、奧の一室に導き入れた。

その部屋に入ると、火鉢もない寒さで、源と金貸しは、百三と對坐させられた。百三は苛り切つた顏で、用件は何かとも訊いて呉れなかつた。

源は、金貸しの方に、救ひを求めるやうな眼を投げたが、金貸しも默つてゐるので、仕方なしに、

「金を貸して貰へるさうで」と切り出した。

「判を持つて來いしたか？」と百三はニコリともせずに訊いた。

源が、持つて來てゐると答へると、

「金は五百圓貸すと云つても、これは、捕鮑組合から漁業組合へ拂ふ奴の交附金の前貸しでがつそ」

「………？」

「あんた、年に五十圓の交附金を受取るだらう。捕鮑組合は十年の年限だから、つまりあんた、その十年にはみんなで五百圓を受取ること

になる。そこで、その五百圓を今日一時に立替えて上げるのだが、好

えですか?」

源がうつむいて暫く考へてゐるのを、百三と金貸しはあはれむやうに見おろしてゐた。源は、どう考へても、わるい話ではなさゝうなので、好いと答へた。その瞬間、百三と金貸しとは、素早く、意味ありさうな眼を、チラト見交はした。

「然し、十年間で五百圓といふのを前以つて立替えるのだから、十年間の利子が要る。それは承知でがすつぺ」と百三が云つた。

源はうなづいた。ぢやアと云つて百三は立つて、次の部屋に行つた。しばらくして、歸つて來て、

「十年間の複利で計算すると、あんたの取前は、二百圓になる」

「やんでがす」と源は叫ぶやうに云つた「利子を差引くのは、やんでがんす」

「あんた、人が只で五百圓貸して呉れると思つてゐしたかさ」

百三はせゝら笑つた。

「うむ」

叫ぶまいと悶えても、自然に喉から叫ぶ聲で、源はどうする事も出來なかつた。今二三年にも、やゝハツキリと分つた。彼らは、人の

[illegible]

のだと。源は目の前の百三に武者振り付いても足りない憤りを感じた。だが、此所で怒つたとて、どうなるものぞ? たゞ騙されさへしなければ好いんだと思ひながら、心は目前の二百圓の上に釘付にされたやうに執着して動かなかつた。

「やんだつて、どうする氣だね? お前え、それでは、俺に拂ふ百二十兩さ、どうして拂へる?」

金貸しの眼が光つた。家を差し押えるぞ。と脅しつける眼が……、

「うむ」

叫ぶまいとしても、呻き聲は、押へられたゴムのやうに彈みを打つて喉から飛び出た「うむ」と、源は息を飲んだ。又しても「うむ」と喉が鳴つた。胸からこみ上げて來る塊まりが、次第に熱くなつて來た。怒りは、次第に激しい悲しみにと變つて來た。

「好い。二百圓で好い!」

みすみす騙り取られるのだとは分つてゐたが、どうしても無ければ——家を押へられるのだ——然も困るのだ、だから、五百圓を二百圓で叩き賣らう。それに……と源は思ひ直して自らを慰めた。それに、僅に五十圓づつ入つたつて、何にもならないではないかと。さうと心を決めると、いきなり猛々と怒鳴りたい程欲しい二百圓であつた。この上

[illegible]

そこで源は、
「親子も權利が千年も離れれば、馬鹿にはたんねえものだな」と云つて、相手の機嫌を取るやうに、へらへらと笑つた。
「だから、金は大切なもんだよ」と百三は嘲るやうに云つた。「さ、判を」
源は二百圓を受取つたが、すぐその場で金貸しに百二十圓を取られたので、手には八十圓しか殘らなかつた。源は最初女房を取られた。それから、みんなと一緒に持つてゐた鰊漁を賣つて出來た捕鮑組合の株も奪はれた。今は又、漁業組合員として受取るべき交附金も、卷き上げられた。これらの物を強奪したのは、村の金持ちたちだつた。そして、これらのすべてを奪ひ取られて、源の手に殘つたのは八十圓の金であつた。
年末に、借金のきびしい催促を受けた者が源ひとりではなかつたやうに、此の手で十ヶ年の交附金を奪ひ取られた漁師は無數にあつた。彼らは、十ヶ年は懷手しても年に五十圓づつ入るといふ約束が、僅かな金だけ殘して消え去つたのを知つて、夢のやうにボンヤリした。
けれども、それでも善良な漁師たちは、年末に財閥たちの誰も彼もが、一齊に借金の催促をきびしくしたのが、漁師たちから交附金の權利を卷き上げるための戰術であつたことに、久しく氣がつかなかつた。

もはや資本家たちは、[illegible]
後には只、五十錢ばかりの漁夫が持つてゐる株を奪ふといふ仕事が殘るだけだつた。これらの五十名の漁夫は三月二十日の正午までに銀行へ株を受取りに行つたため、僅かに奪はれる事を免れた少數者だつた。そこで、資本家たちは、最後に觸手を伸ばすために、五十名の株主漁師を睨んで身構へた。
漁師の吉は、百三が口約束したのと相違して功勞株を貰はずに濟んだ。のみならず、三十圓の月給を與れるといふ見張りの役も、百三の弟にせしめられて終つた。あとから聞くと、百三が見張り役を約束したのは、吉ひとりにではなかつた。それで吉は再びめつたに笑はない男になつた。借金のない生活――そんな物が貧乏な漁師に來るなどとは、飛んでもない空想であるのが分つた。
然し、吉は、三月二十日に銀行へ驅け付けた時が、偶然正午前だつたと云ふ原因で、捕鮑組合の一と株にだけは、有り付くことが出來た。その幸運な五十人の一人だつた。
だから、吉は、矢張り交附金の權利は、借金に責められて失つたのだが、株一つだけはまだ手に殘つてゐた。けれども、吉はやがてその株も何のために持つてゐるのか、譯が分らなくなつた。
吉ばかりではない、他の五十人足らずの株主漁夫は、みんな株を持

つ理由に著しやうになつた。と云ふのは、捕鮑組合が出來て三年の間、株については何の酬當もなかつたからだ。

株主漁夫たちは、當がはづれた。吉が失望したのはそればかりではなかつた。百三の話では、鮑を一貫二十錢で買取りしても、一家三人で稼げば、一週間の漁期に二百圓はとれると云ふことだつた。然し、あとで考へて見るまでもなく、永年の經驗からでも、そんな計算は成立つ筈がなかつた。

あの時は、どうしてあんな無茶な計算を不思議がりもせず、百三の云ふ通りに思ひ込んだのか？　素人ぢやあるまいし、全く可笑した話である。三人で稼いでも、日にみんなで五十貫も取れたら頂上であつた。成程、多い時には、熟練した漁師は一人で日に九十貫も採る事はある。けれども、そんな事は實に稀れなのだ。それに、一貫で二十錢の賃錢を拂つたのは最初の一ヶ年きりで、二年目からは不景氣を口實にして組合は十五錢しか拂はなくなつた。

波のおだやかな冬の日に、吉と、弟二人で船を彼らの部落の石濱から漕ぎ出してゆく。濱の中程から、そこいらは淺いゆゑ、短い竿のモリを海底に突く。船ばたから水中眼鏡で覗くと、蒼々として明るい水底に、大きな明き盲目の眼玉のやうな鮑が點々と落ちてゐる。片手にモリを銜へ、[illegible]

竿のさきは冬空を指して、鮑が青く黒く、光り、光り、船の中に落ちる。冷めたい水のしぶきが顔にかゝる。兄弟三人が一人づゝ、代る代る艫を漕いで、次第に沖へ、沖へ、と出て行く。濱を出て、岬のはなをまはると、外海で、波が大きくうねつてゐる。遠い岩礁に、白々と立つ水煙り……モリの竿は、一層長い奴に持ち替へなければならない。鮑も、だんだん大きいのが、海の深さに從つて採れて來る。

兄弟三人が、さうして稼ぐうちに、船の中には、生々しい鮑が三十貫、四十貫、多い日には七十貫と重なつて行つた。

たとへ七十貫採つても、それは自分たちの物ではない。一貫につき十五錢の賃金で、捕鮑組合に引渡さねばならないのだつた。すると七十貫で、十圓五十錢だ！

だが、これが自由採鮑の三年前まではどうだつたらう？　採れば採るだけ、採つた者の所有になつた。賣つて、一貫二圓から二圓二三十錢の相場だつた。すると、七十貫で百四五十圓になる！

そんな事を考へると、船ばたにしやがんで鮑を狙ふ格好が、何とも云へぬ滑稽なものに思はれた。糞！　こんな馬鹿らしい仕事があるか！

これは吉だけの事ではなかつた。吉の船の近くの部落の上には、[illegible]

[illegible]

つた。

けれども彼らは、モリを海に捨てる事も、船を薪にかへす事も出來なかつた。どんなに今は少數の者の手に歸した捕鮑組合に捲り取られようとも、もし漁師たちが賃十五錢の賃仕事を失つたら、彼らは稗と麥との粥さへ食べることが出來なくなるのだから。

鮑採りが詰らない仕事になつた時、綾里村の漁師に何の好い仕事が殘るか？ 小學校を卒業した若者たちは、だんだん石油發動機の渡し船に乘つて、故郷を見捨てゝ行つた。彼らは都會で奉公するために、商人を見習ふために、自働車の運轉手になるために、同じ氣仙郡の高田港や、或は盛岡や、仙台や、東京を目指して行つた。

そして、その頃、不安な噂が、村の濱々に擴り始めてゐた。

「支那人が、鮑を食はなくなつた」

さう云ふ噂であつた。

何故、あれ程鮑を好いた支那人が、それを食べなくなつたか？ それについては誰も知らなかつた。

支那人が鮑を食べなくなつたとすれば、それは捕鮑組合にとつては、殆ど致命的な打擊であるに違ひなかつた。事實、村長も、局長も、それから事務員の百三も、苦い顏して會ふ人毎に愚痴をこぼし始めた。

「捕鮑組合も、あと一二年で潰れるんだな」

彼らは、人の顏を見ると、嘲るやうに、投げやりの調子で吐き出した。

忽ち、浦から浦へ、この噂が擴つて行つた。支那人が鮑を食べなくなり、鮑の輸出先きがなくなれば、捕鮑組合は解散の他はない。この不景氣な話で、局長も村長も、近頃はひどく機嫌がわるい。局長は、昨日も戀女房の頭に蜘蛛の巣を引つかぶせた。それほど皆に當り散らしてゐる、そんな事までが、いつとはなしに村中へ傳はつてゐた。

其所を狙つて、あの大地主の風早草右衞門や、村長局長校長の山村一家などが手先きの男を四方に飛ばした。「捕鮑組合の株は今に只でも貰ひ手のないぼろ屑になつてしまふだらう。だが、今のうちなら、まだ、四十圓位で買つても好い」手先き共はさう云ひ觸れてまはつた。

善良な、株主漁夫たちは考へた。事實、今まで三年間、一文の配當もなかつた株は、持つてゐたつて持ち腐れになるばかりだ。それに又、支那人が鮑を食べなくなつた。この事も、考へなければならない。今にこの株を、只でも貰ひ手がなくなると云ふのは、本當のことだ。それが四十圓で賣れる、こんな好い話はない……

株を持つた漁夫たちは、次第にそれを手放し始めた。資本家の手先き共は、我こそ一枚でも多く買ひ占めようと、狂奔した。一人殘り、

三人賣ると、それを聞き傳へて、爭つて賣る者がふえて來た。加速度を以つて。

が、加速度を以つてふえて來ると、資本家共は、其所に乘ずべき隙のあるのを見た。

「もう四十圓では買へぬ。二十五圓ならば……」

そして、二十五圓から二十圓に下落した。それでも只よりは好いと云つて賣る者はあつた。

たゞ、頑固な漁師の十七八人が、どうしても株を手離さなかつた。吉もその中の一人だつた。然し、吉は、やがて、株を賣つた者が案外多いのを知つてびつくりした。そんなに皆が賣る程なら、矢張り、賣らない自分が間違つてゐたのだ。四十圓で賣れば好かつたのに！　俺は損をした！　吉はさう考へていまいましくてならなかつた。

聞けば、今では株は二十圓にまで下落してゐると云ふ。これを放つておけば、今に只になつてしまふだらう。吉は、今からでもおそくないと云ふ氣がした。さうだ、百三の所へ行つて三十圓で買つて貰はうと思つた。百三は、最初組合が出來る時に、吉に功勞株や見張りの役などの約束をして、それがみんな駄目になつた事を、吉に對して多少氣の毒に思つて呉れてゐる筈だつた。だから、三十圓で買つて呉れと云つても、まんざら斷られる事はないだらうと考へた。

「百三さん、居せんか？」

捕鮑組合の事務所を覗いて、吉が手招きすると、百三は、羅紗の厚司の筒袖に兩手を引込めながら、戸の外に出て來た。その顏を一と目見たゞけで、吉は、三十圓で買つて貰はうなど、とても駄目な相談だと知つた。果して、株の話をすると、百三は飛んでもないと云ふ顏をした。

「大きな聲では云へないが、捕鮑組合も今年中で潰れるだらうと思ふ。いよ／＼、支那人は、鮑を食はなくなつたんだ」

百三はそんな事を、聲をひそめて云つた。もはや、そんな組合の株など、只でも貰ひ手はないと云ふ口振りだつた。吉は諦め切れないで、功勞株のことや、見張り役のことなど愚痴つて見せた。すると、百三は、懐ろに入れてゐた手をもじ／＼してゐたが

「これ、これでも只よりか好かろ」と、バットの箱を摑み出して、吉の前に突き出した「まだ七八本はある。只よりは好かろ」

バット七八本でも、只よりは好い。これは眞理であつた。そこで吉は、自分の株を煙草一と箱と取り替えた。

吉が歸つて行つたあとで、百三はクツ／＼笑ひながら、事務所に來て坐つた。其所には、刑事があつて來てゐた驛長と、村の鰹節商とがゐる

[illegible]

「どうした？　何が可笑しい？」と傍らに訊いた

「取つてやつた、取つてやつた」クツクツと笑つてゐる。

「株か？」

「うん。吉から、バツト一箱とすり替えてやつた。

「バツトと？　ほんとか」

彼らはやがて聲を合はせて大きく、ゲラゲラ笑ひ出した。

「凄い奴だ、百三の野郎、凄い奴だ」

局長は太い眉をピク〳〵動かしながら、感心したやうに呟いた。

漁師たちから株をせしめ上げてしまふと、その年から、捕鮑組合は俄かに莫大の配當をやり始めた。漁期になると、沖には大きな發動機船が幾つも泛び、他所から雇入れた潛水夫たちが、幾尋の底から吹き出す白い泡は、船の腹を叩いては消え、叩いては消えた。一貫十五錢の採鮑賃銀は、二十錢に戻つた。支那人が再び鮑を食ひ始めた！　一株について百何十圓の配當！　けれども、その好景氣は漁夫たちには何の關りもない、他所の事だつた。

今は、捕鮑組合の三百二十株は全く少數の有力者の分割する所となつてしまつた。白子濱の風早草右衞門は百五十株を持つた。村長局長校長の、山村三人兄弟だけでも、合せると百株以上にのぼつた。支那人が鮑を食ふことか、彼らの粥の爲に關係であらう！

こゝの海は、年六萬圓の鮑を産出した。その六萬圓は、祖先代々潛いて鮑を採る漁師の物であつた。その他の誰の物でも有り得よう筈のないことが有り得る時代が來た。漁師が漁師の物を潛いて採る、それを横合ひから、懷ろ手して奪ひ取る者が現れた。この強奪者は見事に成功した。彼らは懷ろ手して、ぬく〳〵と陸の日向に暖まりながら、鮑の全收益を我が物とした。

漁師たちは、昨日までは自分の物として採つた鮑を、今日は他人のために採るのであつた。一貫とれば二圓、百貫とれば二百圓が自分の收入となつたのに、今日は百貫とつても二十圓の賃銀で他人に引渡さねばならない。この馬鹿らしい仕事を止すか、それとも、餓死するか？

然も、このやうに強奪されるまでには、彼らは、風早や山村一家が百株を狙つてゐる時に、僅か一と株を奪取から防禦するため、證據金の十圓を、血の出るやうな思ひで工面したのであつた。けれども、そのやうに苦しんで拵へた十圓も、一株を衞ることが出來なかつた。一方の強奪者たちは、百株の證據金千圓をさへ、自分の懷ろを痛めずに拵へることが出來た。何故なら、銀行が、彼らの強奪の計畫に贊成したからである。銀行は、この冒險は必ず成功するものと信じて、幾ら

でも彼らに融通したのであつた。

そして、この强奪は、主務省の許可のもとに行はれたのだ。それは「合法的」であり、「村の繁榮のため」の搾取組合だつた。村の繁榮とは、この時代では、働く者が、、、、、、、、、、、、金持ち共が益々それによつて、、、、といふ事であつた。

だから、强奪者共は、綾里村で益々繁榮した。白晝の强奪者共を眺めながら、働く漁師たちは手も足も出なかつた。

搾取組合は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、のもとにある！

冬凌うして春の訪れの如し何らの快
東洋萬里、青雲に接す、
瑞氣たなびく所廻船の道
綾里澄朗として夕日照る。

朝鮮髭の口をあけて、高らかに唱ひ終ると、

「どうだ、嵐翠の七言絶句、ハ、、、」と、愉快さうに笑つた。

嵐翠と云ふ雅號で、この地方を放浪して食つてる畫家だつた。字は、達者だが、誇張した豪宕の書風は、徒らに俗を賣るのみで、更らに品のないものだつた。

久し振りに綾里村に來て局長を訪ねたのだが、一月の交で、鮑の漁の成績がひどく面白かつたので、局長は上機嫌だつた。

局長は、旅館も經營してゐた。だが、この酒飲みの畫家を、自分の家に泊めるのは、何となく不安な氣持ちがした。そこで、近所の東屋といふ宿屋につれて來た。

宿屋と云つても、農業の片手間に女房がやつてゐるので、女中もなければ、その他にこれと云ふ設備もあるのではない。他の漁師や百姓の家と同じやうに、便所だつて、汚いのが戸板にある。その手洗水の用意もしてはなかつた。只、他の百姓や漁師の家とちがふのは、この家には二階がある、と云ふことだけだつた。

二階に通ると、すぐ酒が始まつた。畫家は瞬く間に醉つた。そして、即興の、拙い七言絶句を唱ひ出したのだ。

「綾里澄朗夕日照る——ふむ、ちよつと好かつぺ」

肩を落として肘を胡座に支へた手で、猪口を舐めながら、畫家は相手の賞讃を促すやうに云つた。

「ふむ」

太い眉を動かして、局長は舌なめずりするやうな笑ひを泛べた。

「俺、駄目だ、詩なんか、分らねつから」

「金儲けと女とか、分るのは？」

「これな様で、鉄砲けなどありますか」

「ハ・・・・ヽ」画家は、肩をゆすつて笑つた「君は完全な人格者だが、詩心のないのは惜しい[illegible]」

局長はさゝれた盃を受け[illegible]

お[illegible]

[illegible]

画家は、立上りかける局長の腕にすがり付くやうにして叫んだ。

「[illegible]る」

「徹夜して飲むと云つたでねえか」

「うん、[illegible]し、おら、[illegible]くなつた」

「ね、おい」と画家は[illegible]しく口を歪めて笑つた「お[illegible]の[illegible]、[illegible]つにな

るぞ、お前の顔にも、白髪さ見えるでねえか、へ・・・・」

局長は[illegible]つて[illegible]さないで[illegible]つた、そして[illegible]

[illegible]

若い時、熱情的だつた女房の姿が、ふと心に泛んだ。あの熱情には、源の匂ひがあつた……その源が死んだ。けれども、あの女の何所かには、源が生きてゐるやうな氣がした。

すると、久し振りに、局長は、自分の女房に、何か色情的な氣持ちで惹かれる自分を感じた。

家に歸つて見ると、女房はさきに寢てゐた。

「おい」と身をこゞめて揺り起すと、

「酒さ飲んで來いしたね、臭い」

半分眠りながらさう呟いて、彼女は寢返りを打つた。

局長は寢床にもぐり込んだ。彼女はあちらを向いて眠つてゐる。

「源さん死んだで、悲しかんべ。泣いてるでねか」

すると、女房はくるりと此方を向いた。

「馬鹿らしい」と眠むさうに笑つた。

「用事がある、起きろ」

「あんた、好いやうにしたら好いんでないべか」

下篇

大正十五年の春だつた。

黑色の海の白い浪を蹴りながら、岬の角をまはつて、やがて綾里村の入江に入つて來る石油發動機船に、一人の若者が乘つてゐた。

入江の浦々は日に輝いて、石ころばかりの濱べに子供らの遊ぶ姿が小さく見えた。港の背には、高い山が聳えてゐた。その山の上には、白い雲が湧いてゐた。

若者は、久し振りに歸つて來た故郷の景色を眺め入つた。

やがて船が港の棧橋に近づいた。

すると、黑々とつゞく漁師の家が、陰鬱な影の中に浮き出て見えた。板を葺いた屋根の上に、無數の石を載せて、只一樣に黑く燻つた貧しい家々――それが若者の胸を打つた。

あの漁師たちのために、若者――殿村賢治郎は歸つて來たのであつた。

「俺の故郷は暗い！」

船から眺めて、彼は眼鏡を光らせながら心で呟いた。

彼は村の商人の子で、小學校時代から秀才だつた。遠野の中學を經て、盛岡の高等農林を出るとすぐ、群馬縣の農林學校の教諭になつた。

つい少し前に起つた、、、、、、、彼をひどく刺戟した。その頃の社會的狀勢から考へると、そんな僅かな人間が、、、、、、を願ふに違 [illegible]

、、、、、、、、、、、、、、、？

では、それほどまでに人を犠牲的ならしめ、熱情的ならしめるその理想は、何所から來るか？

それが、若い賢治郎にとつて興味ある問題となつた。やがて彼は、眼を瞠いて、周圍の現實を見るやうになつた。今までこれが現實だと教へ込まれた現實とは、何とちがつた世界に、彼は生きてゐる事だつたらう。

賢治郎は、今まで抱いてゐた自分の故郷に對する考へ方も、間違つてゐたのに氣がついた。その前、休暇で歸つた時、田濱にある父の家の隣りの入山茂平といふ漁師が次のやうな事を云つた。

「何も彼も表と裏とは大違ひだ表は綺麗でも、裏は滅茶滅茶なんだ。捕鮑組合がさうだ、三百二十株をみんなに分けた、漁業組合には交附金を出してゐる――成程、表は綺麗だ、だが裏は――

入山茂平は、漁師の中でも一番しつかりして、物もよく分り、人望もある中年の男だつた。賢治郎はその茂平を思ひ出した。

賢治郎は、茂平に手紙を書いた。茂平から返事が來た。二度三度の手紙の往復から、賢治郎は教諭の職を擲つて故郷に歸ることを決心するやうになつたのである。

は、何を考へたか、殆ど專斷で、同村の商人、農民等々二百人を、漁業組合の中に入れた。理由は簡單だつた、

「藻を一つ拾ふ者も、立派な漁業者である」

そして、それらの商人、農民等の誰もが、俺は藻を拾つたことのない男だと云はなかつた。

漁師たちも別に反對しなかつた。どうせ今年からは十年の年限が切れて捕鮑組合は無くなるのだし、漁業家でもない者が組合に入つて來たところで、痛くも痒くもないのだから、それに商人たちが組合に入るのには、一人前五圓の入會金を取つた。今、漁業組合に千圓入るのは、わるいことでもなかつた。

然し、茂平はもつと深く物を考へる男だつた。

「二百人の新入組合員は、みな村長や局長らの廻し者だ。二百人の味方を入れた彼奴らは多數の決議權を利用して、漁業組合に、もう一度鮑濱を賣らせようと云ふ肚にちがひない」

茂平は考へる通りを賢治郎に書いて送つたのであつた。

その茂平が、暗い暮の棧橋に、柔和な微笑を湛えながら、賢治郎を出迎えてゐた。まだ四十をすぎて間がないのに、帽子も被らぬ茂平の頭の薄い毛の底は赤く禿げかゝつて、日の光をチラ〳〵滑らせてゐ

た。

「今日からこの男が同志だ」

賢治郎は船から棧橋に飛び移つた。

賢治郎は、歸鄕するとすぐ、忙しい身體となつた。漁業組合の總會が近づくに從つて、局長らは、再び鮑濱を彼らの捕鮑組合の物にしようとする意志を露骨に表して來た。

過去十年の苦しい經驗は、漁師の忘れる事の出來ないものだつた。十年の磨けで、漁師たちは貧乏と悲慘のどん底に落ちてゐた。この上又もう十年苦しめられたら、どこに落ち込まねばならなくなるだらう？

然し、局長を中心とする財閥の者たちは、漁師がどこまで落ち込んで行つたつて困りはしなかつた。彼らは、この十年間自分たちが捕鮑組合で、どんなに甘い汁を吸つたかを忘れる事が出來なかつた。

彼らはどうしても、もう十年間は、その甘い經驗を繰り返へさねばならないと考へた。

茂平の考へは當つてゐた。局長や村長らは二百人の新組合員を勸誘するのに、次のやうな巧い話を持ち出したのであつた。

「今、二百人が漁業組合に入つて頭を合せたら、決議權は此方のものになる。それで俺たちが決議して、もう一度鮑濱を、捕鮑組合に貸る事にするのだ。そしたら、捕鮑組合から漁業組合に、毎年二萬圓を拂ふ。その二萬圓を漁業組合員に分ける。つまり交附金が組合員に渡る。漁業專業でない者は年二十五圓づつの交附を受ける事にならう。だから諸君は今五圓出して入會しておけば、毎年二十五圓づつの不勞所得が得られるわけだ」

この巧い話に乘らぬ者はなかつた。彼らは貧乏な漁民の上に蠅のやうに寄つて集つて、吸へるだけの血を吸ひ取らうとするのだ。

一方で、賢治郎は漁業組合に入會すると共に、漁民の間に、互助會なる物を組織するに忙しかつた。賢治郎と茂平とは、漁民たちの間を、濱から濱へと説いてまはつた。

百七十人の漁師のうちの百四十八人が、互助會に加はつた。殘る二十人ばかりの漁師は、金錢關係や情實で、局長や村長に弓を引くことの出來ない意久地なしだつた。

互助會員百四十八人の漁師は、結束して資本家團と最後まで闘ふことを誓つた。その中に長吉がゐた。彼にとつて、彼の血を搾り取らうとする者、彼からあらゆる物を掠奪した者、彼の母を、、した者、彼の父を、、した者、それらの者は、みな一つの同じ者だつた。彼の血を搾り取らうとする者を叩きのめすことは、敵に報ふことと、、した

者、彼の父を、した者を叩き伏せることであつた。

彼の一族の不幸の源である彼奴らを、叩き伏せるために起つ時が來たのだ。彼は眞先きに立つて闘ふだらう、、自に、、てす その■てくするたら飛才て来てますなく、、——彼は俄かに世の中が明るくなつたやうな氣がした。

吉が居た、彌十が居た、梅さんが居た、その他、誰も彼も、この十年の怨みを骨の髄にまでしみ込ませて、互助會の旗の下に集つた。

總會の日が來た、鮑の漁場を捕鮑組合に貸與する事の可否が、議題に上つた。賢治郎が反對意見を述べた。茂平がそれに續いて立つた——が、議長は採決に入らうとした。

が、採決したら、二百名に對する百四十八名の漁師側が負けるに決つてゐる

「俺たちは、こんな議案を採決する意志を持たない」

さう云つて、百四十八名の互助會員は、一齊に退場した。

あとに殘つた二百餘名が、勝手に決議した。勿論、漁業組合は、その採鮑漁場を向ふ十ヶ年間捕鮑組合に年二萬圓で貸與することを決議したのだ。

改めて組織された捕鮑組合の設立は、またもう一度主務省の許可を得る必要があつた。斯う云ふ時に、主務省の方への運動を引受けるのは、代議士といふものであつた。その選擧地盤を失はたいために、そして又、、、、、、、、、たいために、代議士は必ず土地の資本家の手先きになつて働くのだ。彼らは決して貧乏な階級の味方になりつこはなかつた。その土地で勞働階級と資本階級とが爭ふ時、もし代議士が勞働者の味方をしたら、彼は決して二度とその土地で多數の投票を得る事は出來なくなるだらう。

そこで、主務省は、岩手縣に諮問して來た。縣では、代ま二く卩ーらくー、、、、、きてくく會議員が、既に、縣の役人の間を運動してゐた。縣は、氣仙郡綾里村に於る捕鮑組合の設立は、許可して差し閊へなきものと答申した。

その間に、殿村賢治郎は三人の漁夫と一緒に上京した。そして彼らは、主務省を訪れて懸命に實狀を陳情した。けれども、代議士でも何でもない漁民の云ふことなどに、、、、、、ではなかつた。

賢治郎らは、思ひ餘つて勞働總同盟の門をくゞつた。幹部の×××が逢つて呉れた。××は堂々たる體軀と、髭と、そして大きな顏のギヨロリと光る眼とで、どこか大陸的な感じを與へた。けれども、賢治郎らに對する返答は更らに要領を得なかつた。前金で千圓出せば爭議してやらうとか、勝てる見込みはないとか、あるとか云つて、最後に、法廷にかけて見たらどうかと云つて、民衆黨の辯護士の片×××

を紹介して呉れた。

　然し、×××に會つても、矢張り要領を得なかつた。組合の決議に違法はないから、勝てさうもない、と白皙の顏を振立てゝ彼は云つた。そして、法律相談料として、五圓を請求した。賢治郎は財布から金を取出しながら、微かに手の震へるのをおぼえた。

　賢治郎らが村に歸ると、漁師たちの氣勢は俄にあがつた。小學校で演說會が開かれた。

「どんな事があらうとも、漁師は漁業權を賣つたのではない」

「漁師は過去十年の血の出るやうな苦しみを、忘れようたつて忘れはせぬ！」

「彼奴らは、俺たちの血をすゝり、骨をしやぶつた。俺たちが彼奴らを叩き付けてやるか、彼奴らが俺たちを餓死させるか？」

　、、は滿々に充ち溢れた。今はこの村の全住民が、[illegible]、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

　縣廳から役人が、山を越え、谷を渡つて村に來た。もはやとくに、、、、、、、、、、ゐる水產課の技師の顏は、互助館の事務所にな[illegible]りてゐる[illegible]を訪れた。

「君たちの云ふ事は分つてゐるが、然し、君たちが飽くまで突張れば、この村の平和は永久に破れてしまふ。そしたら、君たちの損でもあるから、此所はおんびんに手を引いて、一つ村の平和のために我慢した方が、好いではないか」

　水產課の技師はそんな事を云つた。

「漁師が餓死しなければ村の平和は來ねえでがすか？」

　柔和な性質で甚平は其所まで云つたが、急に此奴も、、、、、だと思ふと腹が立つて、「歸えれ！」と怒鳴つた。もう斯うなれば何奴も此奴も、容赦することぢやねえ！

　が、農林省からの漁業組合設立の許可は村に屆いた。、、、[illegible]の、、、、、、、、、、、、、、、、漁業組合などは至極結構だと云ふのであらう。

「もう俺たちの味方は天下に何一つない。、、、、、、、、、、、、、、」

[illegible]」

　だから、俺たちは誰をも頼まない、俺たちは俺たちの勝手にする…

…

「自由漁業だ！」

　漁師たちは鳴をしづめて、鰹の漁期の來るのを待ち設けた。

秋の色は太平洋の逞しい胸の上から褪せて行つた。海はやがて黒々と張り緊りながら、冬をその荒浪の上に乘せて來た。荒浪の下には、氣味わるく笑ふやうに、無數の鮑が口を開けてゐた。

十一月、鮑の漁期に入ると、漁師たちは今日か明日かと日和を待つた。捕鮑組合は不安を感じて、半島の峠を四里越えた盛町の、、に電報を打つた。

港の西手に、峠をおりて來る坂があつた。或日、、、、、、、、、、、、が、杉の並木の木の間がくれに、、、、、、、、、、、、、下りて來た。その、、、、は、忽ち村の彼方此方に散つて行つた。やがて又、港濱の浪打ちぎはに密集した。ソオ[illegible]

「[illegible]！」と、、、、、、、[illegible]。

その二日後だつた。機は熟したと告げるやうに、夜半から風は凪ぎ、海は漆で塗つたやうに光つてゐた。午前四時、やゝ白む空には星が溢れてゐた。浦と浦とに傳令が飛んだ。石ころ濱に時々浪が白く泡立つた。傳令は足を濡らして走つて行つた。

村のあらゆる濱から、船は舳をそろへて浪打際をはなれた。小路濱から、石濱から、白濱から、田濱から――更らに、田濱の裏の岡を越えた所の野々前から――

互助會百四十八名、その家族を合せて三百人の海の男は、今は屋根に石を乘せた黒い家から、海の上に躍り出たのであつた。それらの百艘の漁船は、あけ方の闇を破つて灣を沖へ、沖へと漕いで行つた。

けたゝましい音がする。三隻の大きな發動機船だつた。ソ[illegible]

[illegible]、、、、、[illegible]。

灣の中ほどを、殆ど密集した隊形で、百艘の漁船が進んで行く頃、夜は殘りなく明け渡つてゐた。

「オーイッ」

「しつかりやれよつ」

「はア、氣持ちが好いでれえか」

船と船とが呼び交はす聲は、鈍色に光る海の上を、餘韻ながく渡つて行つた。三百人の漁夫は、一齊に鮑を突き始めた。今日採る鮑は我が物と思へば、淸新な感激がモリを持つ手に力を加へた。モリは、六間竿のさきに鋭く尖つてゐる。その長い無數の竿が、亂舞する林のやうに動いた。水中眼鏡を鮑が睨み上げた。狙ひ定まつて、竿は一瞬間靜止する。忽ち突く。忽ち引き上げる。空高くモリの尖きに光る鮑、垂るゝ滴！　おゝ、誰に搾取されるのでもない勞働の美しさ！

百艘は灣の出口を暫く一杯に塞いだ。いつの間にか灣を出はづれてゐた。と、次第に廣い外海の上に、散り散りに擴つて行く。海はやゝ大きくうねりを打つた。モリの狙ひが定まらぬ。長い竿の動く速度が

ちがつて來る。が、そのテムポはすぐ元に戻つた。再び、狙ひ勝れて、發動船と動き始めた。ひろい漁場一杯に船はひろがりながら、百艘が縱横に入り亂れ、行き交うた。三艘の、、、は灣の出口のあたりから、漁場を睨みながら、悠々と遊弋してゐた。

と、突如して、港の棧橋に、、、、、、、、、が、押し合ふやうに走り出た。それは、板の上に黑豆をこぼしたやうに見えた。棧橋は、、に溢れて、押された一人が、海の中へ、水煙りあげて落ち込んだ。

、、たちは、二艘の發動機船に分乘した。全速力！ 黑豆を蹴り上げたやうな二艘は、沖の漁船をめがけて、まつしぐらに走つて來た。

「來たな！」

「網は採るのを止めるなら」

「ようしつ」

「俺らは、引受けた」

漁船と、、、との間で通信が交はされた。

、、の船は、大敵に近づいて行つた。すると、三艘の、、、は、陣を備えるやうに、、、の船の行く手に立塞がつた。その三艘のふなばたには、何十人かの若者が、艪を握りながら、ズラリと並んで此方を睨んでゐた。若い若い顏が、、、たちの眼の前に、[illegible]のやうに並んだ。

、、、の船は、第一と第二の、、、の間をくゞり拔けて、そのまゝ、沖へ出て行かうとした。その間に、第三の、、、が、舳をまはして、、、の船の行手に立塞つてゐた。、、たちの船は右に折れた。すると、第一の、、、が、前の、、、の横腹に迫つて來た。同時に、第二の、、、が、うしろの、、たちの舳に突きあたらうとした。

漁師たちは、、、の船に飛び移つて、腕力を振ひたがつてゐるのだ。、、、はそれを察した。察した時には、一[illegible]

[illegible]た。

「[illegible]！」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

、、、、、、、、。

[illegible]に、、、、、、[illegible]

[illegible]たちは、[illegible]

た。鮑漁を賣つたおぼえのない事。賣つたとは、漁師でない勝手の奴らの勝手に決めたことであること……等々。そして、彼らは決して、、、、、、、、、。中でも、賢治郎と茂平と長吉とは、殊に力強い、、、、、、、。

「何故、鮑を採つたか」

「採る權利があるから採つた。」

「權利は、捕鮑組合に賣つた筈だ。」

「漁師は賣つたおぼえはない。鮑漁は漁師の物だ。賣か賣らぬかは、漁師が決めるのだ。漁業組合の決議のあつた席には、漁師は一人も居なかつた」と茂平や賢治郎は答へた。

　よく理窟を云ふ奴だ、と云はぬばかりの顔で、、、、、、、、、、、顔をしたが、

「兎も角、もうやつてしまつた事は仕方がない。以後はまア、採らぬやうにするのだな」と懇談的に出た。

「いや、以後も採る」とその手は食はなかつた。

「採るな」

「採る！」

「、、、、、、、と云ふんだ」

「何が何と云はうと、採る―

「採るな！」と大喝した。

「採る！」と更らに大きく蠻聲を張り上げた。、、、、、、、、、、、、。

　もはや彼らは何物をも怖れてゐないと知ると、、、は急に言葉を柔らげて、兎も角、、、よく計らふから、考慮して呉れと云ふ風に出て来た。では考慮すると答へると、、、、、、、、、、、百四十八人を歸村させた。

　この騒動は新聞が出ると、その頃まだ解散されてゐなかつた、、、[illegible]

一、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、。、、に、殿村賢治郎ら百四十八名の互助會員は、、、、、、、、、、、[illegible]

た[illegible]

　この盛り上つて来る力には、、、、、、、、、、、、、、。そして、、、は捕鮑組合と漁民との間に一つの妥協案を提出した。これを漁民に押し付けた。

一、捕鮑組合は三年後に解散すること。

一、非漁業者は、漁業組合より即時脱退すること。

この妥協案で、折角手を拍つたのに、相手は仲々實行しなかつた。つまり、「非漁業者の組合よりの即時脱退」が行はれず、そのまゝ、昭和二年の、漁業組合總會を迎えた。

この總會は、役員改選を行はねばならなかつた。その方法について陸手の一味は、連記投票を主張した。漁師たちは、單記投票を主張した。

連記投票にすれば、多數を擁する彼らは、役員の全部を自分たち一味で占める事が出來るからであつた。

連記と單記とで互ひに讓らないので、總會は流れてしまつた。そこで二度目の總會が持たれた。これも亦、連記單記の爭ひで、流會になつた。

四度目は、七月十日の晝、小學校で開かれた。互助會員、百四十八名は全部出席した。相手は十五名が出席した。然し、資本家側の一人である議長の机には、二百名の非漁業家の委任狀が積んであつた。この二百名の力で、百四十八名の意志を押へ付けるのであつた。

「こゝに委任狀があります。これらは、連記投票に贊成であります。多數と認めて、連記を以つて、投票さする事にします」

議長が宣言した時、「議長横暴！」の聲が、漁夫たちの口々から洩れた。議長は素知らぬ顏で、投票に入らうとした。漁民は總立ちとなつた。

「、、、、、、！」

主張[illegible]主張して四五人え、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、長吉たちを引き留めに走り寄つた時、百四十八人はワッと叫んで立上つた。十五人の陸手の奴らも立上つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、。何をする！　何をする！」、、、、、、、、の聲が一と際大きく響いた。机がたふれた。、、、、、、、。激しい音で、床が鳴りつゞけた。百四十八人の漁師ばかりが立つてゐた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。コップを流れた水が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。机の脚が、、、、、、、。百四十八人は高らかに叫びながら、學校の外に溢れ出た。會場では、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、教壇の上にぐつたり坐つてゐた。議長や十五人の市民たちは、あちこちに、、、、、、、、、、、、、、、、。

百四十八人は、運動場から、青草の土手の上に、四列を組みながら、村の方へ押し寄せて行つた。

「、、、、、、、、！」

土手を三町走つて村に小路を渡ると、すぐ隊伍に從つて、平屋通り

の、、があつた。百四十八人は、、、、、、、、。[illegible]

[illegible]、、、、、、、、、。

[illegible]

、、[illegible]、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、。角の菓子屋で、お裁縫してゐた村の娘たちは椽側に走り出た。キヤツと叫んで又引込んだ。街道は、忽ち村人で一杯になつた。

「、、、、、、!」

「、、、、、、!」

[illegible]

[illegible]、、、[illegible]た。茂平と、長吉と與助がそれに並んだ。吉の顔は怒つた大佛のやうだつた。梅さんの顔は石のやうだつた。春一の顔は汗ばんだ鞠に似た。鶴吉の顔は銅塊に見えた。甚の顔は石のやうだつた。無數の怒れる顔が重なつてゐる!

「、、、、、!」

、、、[illegible]長吉が怒鳴つた。、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、女が出て來た。女は、氣狂ひのやうに、漁師たちの間をくゞり拔けた。髪が亂れた。「、、、、!」と怒鳴つてゐる長吉の脚もとに倒れ、その脚にすがり付いた。

[illegible]

、、、[illegible]!」

[illegible]一瞬間、長吉は少年の日を思ひ出した。[illegible]

[illegible]

「、、、、、、やがつた」

[illegible]

百四十八人は庭さきに集つた。、、、、、、、、、、、、、

、、、、

[illegible]。もはや夕暮れで、沖から入江の中へ、海は夕日を眩しく散いてゐた。いつの間にか、漁師の女房たちも駈けつけて來てゐた。彼女らは行列のあとを歩きながら、ぼろぼろ涙をこぼしてゐた。

[illegible]

「[illegible]」

[illegible]

[illegible]、、、、、、、、、

、、。

[illegible]

「綾里の漁民が、、、」

[illegible]

[illegible]

[illegible]。

その留守の間にも、漁村では、、、、、、、、、、、、。

このや[illegible]した。、、、、、、、、、、、、、、、、、、。[illegible]の漁民の、、、縣

にさらしてゐた。[illegible]した。水産課の技師が、その用件で、山を越え、海を越へてやつて來た。

何かの用件で、技師の瀬川は茂平に會つた。會つた時、

「まア、以前の事は水に流して」と瀬川が云つた。

「いや、今年は旱魃でがつすから、流す水はねえでがつそ」と茂平は大聲で笑つた。

老百姓、[illegible]はどこをどう歩いてゐることやら。

今こそ筆をたづさへて、もう一度綾里村を訪れるが好い。そして、

綾里澄朗夕日睡

とでも何とでも、思ひ切つて拙い字を書き散らすが好い。

一九二九・一・九

編輯だより

◇このごろの支那政府の我國を見くびり方は名狀できない。滿蒙の特殊利權を根こそぎに回收せんとする王正廷等國民政府の增長はどうしたものだ。しかも我國の政治家に支那側と通謀して內閣打倒を策せるものがありといふ。我々はその噂の眞實でないことを祈つてゐる。

◇楊宇霆一派が殺害された。しかしそれは支那の出來事だ。東北三省の司令が國民政府の指令をも俟たず、だまし打的に楊、常の二巨頭を片付けるところ、まだ〲法律も憲法も支那には必要がなく、文明も文化も贅澤品としか思はれぬ。國民政府はその名譽のために事件の顚末を公表すべきだ。

◇とにかく、我國と支那との通商は殆んど中止の姿だ。輸入超過──每年二億──が打ちつゞくところに、こうしたことで我國は經濟的に立つ瀨がない。そして一方にはドシ〲不自然の豫算の膨張がある。國民として考へなくてはならぬことだ。結局、我國はどこに行く？

◇帝都には「說敎强盜」人もなげに至るところに横行し、地方には地方問題を提げて大規模の「直接行動」宮崎と岐阜とに生起す。

◇新聞界の耆宿德富蘇峰氏「國民」を去はる。

◇『改造』の懸賞詩應募者は一月卅一日迄に投淸ありたし。

◇一昨年より發表した「改造文庫」漸く本月より發賣す。單價は十錢。

◇厨川白村全集の豫價版も近く發賣。七册三十數圓のものが全六册六圓で手に入る。啄木全集、堀江歸一全集はたいへんの好成績であつた。まだまだ申込者が殺到する狀勢だ。

◇現代日本文學全集の二月配本は「正宗白鳥集」經濟學全集は「世界經濟史」世界大衆文學全集はゼンダ城の虜及三等水兵マルチンの二册、マルクス、エンゲルス全集は第二卷(ライン新聞、獨佛年誌、バイブル論等)である

◇本社の營業部に從事する若い社員を募集、何れも本年度の高等商業及甲種商業卒業者に限る。委細は本誌九〇頁を一覽あれ。

◇『改造』の實行が激增してくる。何分通俗雜誌群出の折に、高級雜誌の存在は我國には意義深きものだ。安易と惰眠の伴侶としての雜誌の使命以外に、本誌の社會的任務が大衆に了解され、仰望されて居る譯だが、我々は論壇に、創作によりよき努力を果すであらう。そしてより大衆的に展開したいのであるが、それ等の展開は或は本誌以外の雜誌創刊となるかも知れない。本誌は本誌としての特色と使命とが與へられてゐるから。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年一月十九日印刷納本
昭和四年二月一日發行

定價(五十錢)(郵稅三錢)

編輯兼發行人 印刷人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一二三一 一二三二 一二三三 一二三四

現代日本文學全集

正宗白鳥集

二月上旬配本

出世作『塵埃』『玉突屋』より近作『生まざりしならば』に至る十六の長、中、短篇と、日本戯曲界に大きなセンセーションを捲起さしめた四篇の戯曲とを收載した。是等諸作が興趣あり、含蓄深き傑作たることは、氏も人も共に許せるところ、なほ小品、隨筆、評論を加へて、巨匠白鳥の冷嚴にしてしかもさえ〴〵たる特異の思想境を味得すべく遺憾なきものとした。

〔內　容〕

創作　塵埃。玉突屋。何處へ。地獄。微光。徒勞。泥人形。毒。命の綱。入江のほとり。牛部屋の臭ひ。死者生者。心中未遂。毒婦のやうな女。人さまざま。生まざりしならば。

戯曲　人生の幸福。安土の春。歡迎されぬ男。光秀と紹巴。

小品隨筆　東京。クリスマス。追憶記。人生五十。泉のほとり。

評論　わが文學小觀　**その他**

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

室生犀星著（四六判 四八八頁）定價貳圓 送料廿二錢

天馬の脚

最新刊

自分は最近隨筆ばかり書いて暮してゐた。隨筆も小說や詩と同樣に苦しい作品であることを經驗し、文章に自分の心境身邊の雰圍氣を沁み込ませることも、容易な仕事ではなかつた。自分は此隨筆的な愛すべき境致にゐて、靜かに自分を鍛えることに喜びを感じてゐた。自分は自ら好む閑文字と倶に文藝評論や映畫の時評を試み、これまでの隨筆的佶屈を蹶破つて出た明るい感じを經驗してゐた。「天馬の脚」と題したのも、その明るさを表象したものに過ぎない。

原稿は當然破棄すべきものを捨てて、自分の氣に入つたものだけを本集にをさめた。林泉的閑文字の中にも後日の集に讓つたものも尠くない、主として「天馬の脚」には何か自分の纔りかけてゐる、氣持の中に光る鋭いギザギザなものを蒐めたものである。（著者序文）

〔目次〕

一、「**天上の梯子**」二十篇。**二**、「**月光的文献**」一、喫煙と死。二、月と歷史に就て。三、月から分れたる者。四、月光的詩人。五、活動寫眞の月。六、上田秋成。七、古い月。八、月光的感情に就いて。**三**、「**林泉雜稿**」十七篇。四、「**詩に就て**」十四篇。**五**、「**文藝時評**」十九篇。**六**、「**映畫時評**」二十五篇。**七**、「**和歌**」。**八**、「**發句**」。**九**、「**人物と印象**」德田秋聲氏。正宗白鳥氏。高村光太郎氏。白鳥省吾氏。佐藤春夫氏と谷崎潤一郞氏。宮地嘉六氏。加能作次郞氏。岸田劉生氏と佐藤惣之助氏。**十**、「**澄江堂雜記**」四篇。**十一**、「**書籍と批評**」八篇。**十二**、「**喫煙雜筆**」二篇。**十三**、「**日錄**」。**十四**、「**自畫像**」室生犀星。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

マルクス・エンゲルス全集

第六回配本豫告（第二卷＝約五百頁）

『ライン新聞』所載論文（マルクス）

日刊新聞、保護關税、離婚法、地方議會、等に關しての熱烈火の如き彼の意氣横溢す。

ドイツの通俗本（エンゲルス）、カール・ベック（エンゲルス）、時代の逆行的徴候（エンゲルス）、ヨーエル・ヤコービ（エンゲルス）、ドイツ貴族新聞の鎮魂祭（エンゲルス）、一夜（エンゲルス）、聖ヘレナ（エンゲルス）、ジーク・フリードの故郷（エンゲルス）、エルンスト・モーリッツ・アルニト（エンゲルス）、インメルマンの回想錄（エンゲルス）、シェリングのヘーゲル論（エンゲルス）、南北ドイツの自由主義（エンゲルス）、アレクサンダー・ユングと若きドイツ（エンゲルス）、ライン新聞への通信（エンゲルス）、バイブル論（エンゲルス）、大陸に於ける社會改良の進歩（エンゲルス）

『獨佛年誌』所載論文（エンゲルス）

青年氣鋭の彼等兩人が議會哲學新聞經濟政治其他の諸問題に對し如何に縦横に熱火迸るが如き論陣を振るつたか？彼等の慧眼と達識とを本書に見よ！

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

吉田英雄著（最新刊）

日本社會經濟編年史

定價八圓・送料二十七錢

神代より大正に至る社會事象を洩れなく年表體に記述編纂し、各項一々其の出典を明示す。研究者座右必備の良書

吉田英雄君日本社會經濟編年史なるものを編纂せられ、我國の社會經濟史を研究せんとする人々の爲めに二千五百餘年間の事蹟を、一目の下に瞭然たらしめ、冗長煩蕪なる歴史記錄の類を一々檢討捜索するの勞を省くの便を與へられたるは、其の功、洵に偉大なりと云はねばならない。從來この類の年代記にして、相應に世人を裨益しつゝあるものなきにあらざるも、特に專門的に社會經濟上の事實を主眼として、此の書の如く精細明確に史實の要領を擧げたるものは、余の未だ寓目せざる所である。（瀧本法學博士序文の一節）

慶大教授 野村兼太郎著

英國資本主義成立史

定價五圓 送料廿七錢

現代社會の諸機構を正しく理解する上に、近代產業革命の發祥地である英國の資本主義成立過程の解剖が如何なる地位に在るかは敢へて多言を要しないであらう。現に慶大の敎職にあり、英國經濟史に造詣深き著者が多年の蘊蓄を傾倒して成つた本書は、正に斯學の爲に一大指標を

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

忽四十版突破

漱石の思ひ出

定價壹圓
送料十八錢

大文豪の生活、藝術態度を本書によつて了解せよ

偉大なる國民的作家として人格の淸高、作品の超絶兩つながら絶對的尊敬の的である漱石にその傳記のなかつたのは大なる遺憾であつた。今や未亡人はその十三回忌を迎へ追憶の情轉た切なるものありて玆に作家としての態度、夫としての態度、生活者としての態度を赤裸々に吐露す。彼の作品に親む人々は何人も未亡人が誠の心情を披瀝したるこの嚴肅な秘錄を讀んでます〳〵漱石の偉大と氣品と、藝術に對する態度の眞面目を了解して強く何者にか打たるるところがあるであらふ。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

野田大勞働爭議

松岡駒吉著（最新刊）

送料二十錢

昭和二年九月廿六日に勃發し、翌三年四月二十日終結した野田の大勞働爭議は本邦勞働運動史上の一大事件であつた。本書は當時爭議に當つた勞働總同盟の松岡駒吉氏が野田に於ける資本家の實勢力、組合の組織、勞資關係の雙方の戰略に至るまで爭議の經緯を詳細に記述せるもの。此間に於ける資本家の陰謀奸策、警察及司法官吏の態度等に亘り遺憾なく述べて勞働者にも資本家にも有益なる參考書、且つ勞働爭議の必讀の書といふべく、また以て社會問題に關心ある者は必ず一讀すべきであらう。

第二十一篇 上海問題論	定價[illegible]	石濱知行著 白濁帝國主義	定價[illegible]
第十八篇 明治經濟史	定價[illegible]	大川譯 マルクスの民法・勞働法	定價[illegible]
第二十篇 英國賃金銀行論	定價[illegible]	高畠素之譯 經濟本論要綱	定價[illegible]
第二十篇 金貨本位制の崩壞	定價[illegible]	高橋龜吉著 日本資本主義の研究	定價[illegible]

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 [illegible]